

第3節 出土遺物

(1) 土器・土製品

掘立柱建物1出土土器(第158図、PL.107)

3145ピットから48、3147ピットから40・44、3148ピットから36・39・41、3149ピットから37・38・42・43、3151ピットから35が出土した。

35～38は須恵器蓋である。35・36の天井部調整は回転糸切りである。37・38の口縁部端部は屈曲し、内外面ナデにより下方へ短く収める。39～43は須恵器坏である。39・42・43は高台がない坏で、体部は直線的に外傾する。40・41は高台の有無が不明だが、体部の立ち上がり角度が先のものに比べ急である。

須恵器は8世紀末～9世紀前半のものが主体だが、40や41は形態、法量が八頭町山田12号窯出土資料に近く、9世紀後半～10世紀初め頃まで下る可能性をもつ。

44～46は頸部から緩やかに外反する口縁部をもつ土師器甕で、頸部に調整時の指頭圧痕が連続して残る。47・48は焼塩土器で、口縁部を肥厚させる。

雨落ち溝と考えられる3162溝からは須恵器高台付坏49と土師器坏50が出土した。49は底部周縁に断面逆台形の低い高台が付き、外傾して直線的に立ち上がる深い体部をもつ。9世紀前半のものである。外面に溶融した鉄滓の飛沫が付着しており^(註)、同溝から出土した製鍊滓(流出溝滓M17・18)とともに近傍で鉄生産が行われたことを示唆する。

掘立柱建物2出土土器(第159図、PL.108)

3007ピットで57・58・65、3008ピットで55・56・59・60・64、3139ピットで54・62、3140ピットで51、3143ピットで53・61、3144ピットで52・63・66が出土した。須恵器蓋及び坏には9世紀前半から10世紀前半の様相を示すものが含まれる。

51～54は須恵器蓋で、いずれも口縁端部が短く「へ」字に屈曲する。51・52は天井部回転糸切り後周縁部をナデ調整して仕上げる。ナデ調整は51が粗く、52が丁寧である。51はつまみを欠失している。

55～62は須恵器坏である。いずれも内外面回転ナデによって調整されており、56が口縁端部を薄く引き延ばすように仕上げるのに対し、55・57は端部を丸く収める。57は深底のタイプで、高台をもつ可能性がある。59～62は高台をもたないタイプで、62は底部ナデ、それ以外は底部回転糸切りである。59は底部から内湾して立ち上がる体部をもち、60も底部からいったんくびれ内湾しながら立ち上がる。57や60は出土した坏類の中でも新相を示す。

63は壺口縁部、64は甕胴部の破片で、64内面には車輪状の当具痕が認められる。

65は高台の付く土師器皿で外面と体部内面を赤彩する。66は土師器坏である。

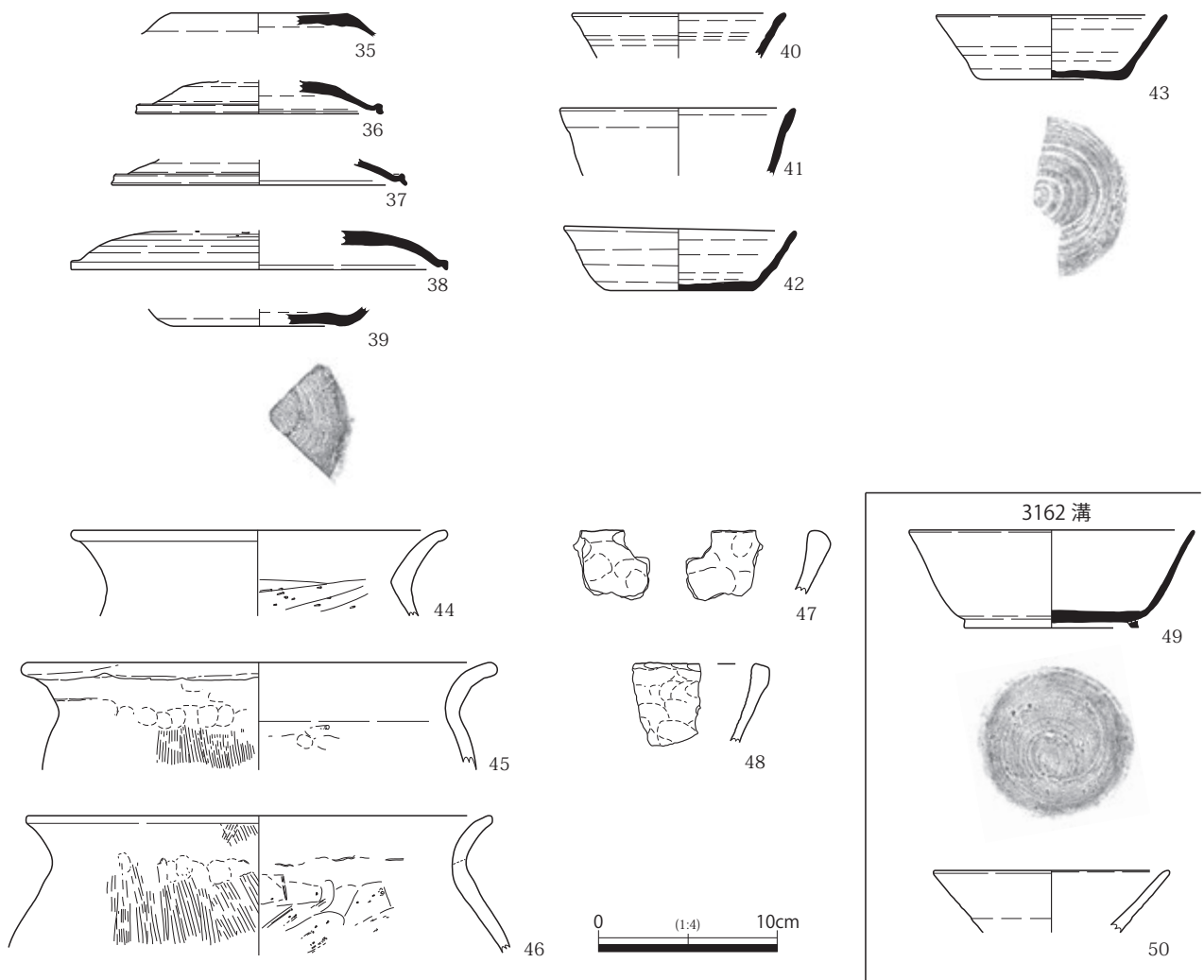
掘立柱建物3出土土器(第160図、PL.108)

3106ピットから68、3113ピットで69、3135ピットで67・70が出土した。

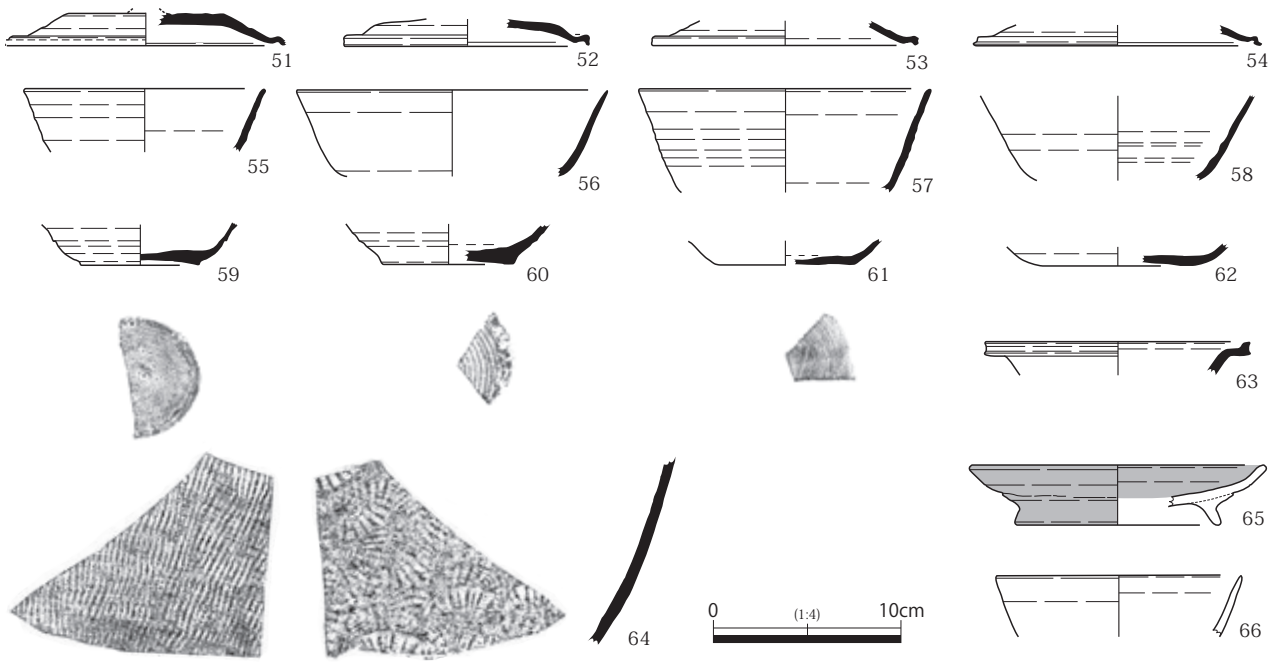
67・68は高台の付かない須恵器坏で、67は底部回転糸切り、68は回転糸切り後ナデを施している。

69・70は土師器坏で、69はナデ、70は回転ナデにより仕上げる。70の底部周縁はナデ調整で糸切り痕が認められない。

須恵器、土師器とも10世紀前半段階の様相を示している。



第158図 掘立柱建物1出土土器



第159図 掘立柱建物2出土土器

掘立柱建物4出土土器 (第160図、PL.108)

3300ピットから74・77、3361ピット及び3362ピットから71・72・73、3365ピットから75・76が出土した。

71・72は須恵器蓋である。71の天井部は回転糸切り後周縁部をナデ調整する。

73～75は須恵器坏である。73は口縁端部で短く外反するが、74は口縁端部を先細りとなるように収める。75は底部回転糸切りで、体部は残っていないが内湾気味に立ち上がるようである。

76は土師器皿、77は土師器坏である。76は口縁端部が残っていないが、端部付近で短く外反する。77は内外面ともナデ調整で、外面に横方向のナデの痕跡が明瞭に残る。

8世紀末～9世紀前半の須恵器を主体とするが、77は10世紀段階のものである。

掘立柱建物5出土土器 (第161図、PL.108)

3202ピットから78、3285ピットから79、3517ピットから80が出土した。

78は土師器坏である。内外面ともナデ調整し、底部は回転糸切りで、10世紀段階のものとする。79は輪高台をもつ緑釉陶器の皿で、灰オリーブ色の釉薬がかかり、露胎部は灰色を呈す。特徴からすれば畿内産で、9世紀後半段階のものであろう。80は古墳時代の土師器高坏で、内外面赤彩し、内面に放射状のミガキが認められる。第5層からの混入である。

掘立柱建物6出土土器 (第161図、PL.108)

3306ピットから須恵器蓋81、土師器甕82が出土した。81は口縁端部が短く屈曲し、内外面からナデで収める。9世紀前半のものである。

掘立柱建物8出土土器 (第161図、PL.108)

3051ピットから83、3054ピットから84が出土した。どちらも須恵器蓋である。83は丸みをもつ体部から続く口縁端部に下方へ湾曲するかえりをもち、つまみを欠失している。84は口縁端部を外面からナデ押し、わずかに面をもって肥厚する。83は7世紀後半、84は7世紀末～8世紀前半のものである。

掘立柱建物9出土土器 (第162図、PL.109)

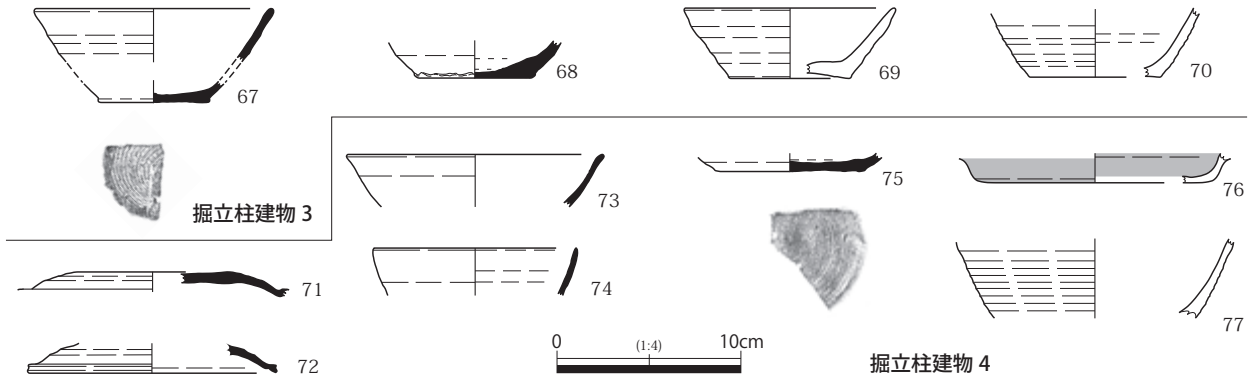
3105ピットから90、3375ピットから86・91、3383ピットから85・87、3450ピットから88・89が出土した。

85・86は須恵器蓋で、85は天井部回転糸切り後ナデ、86は天井部ナデである。87・88は須恵器坏で、どちらも外傾して立ち上がり、口縁端部をわずかに外方へつまみ出す。89は須恵器坏底部で、回転糸切り後周縁部をナデ調整する。90は土師器坏で、体部が大きく外傾し口縁部を外方へつまみ出す。91は焼塩土器である。須恵器、土師器とも9世紀前半のものを主体とするが、88・89は9世紀後半頃の下る可能性がある。

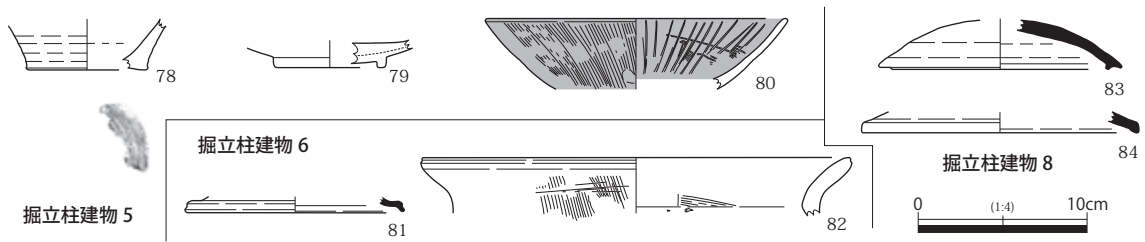
掘立柱建物10出土土器 (第163図、PL.109)

3281ピットから96、3301ピットから95、3303ピットから93・97、3372ピットから92、3420ピットから94がそれぞれ出土した。

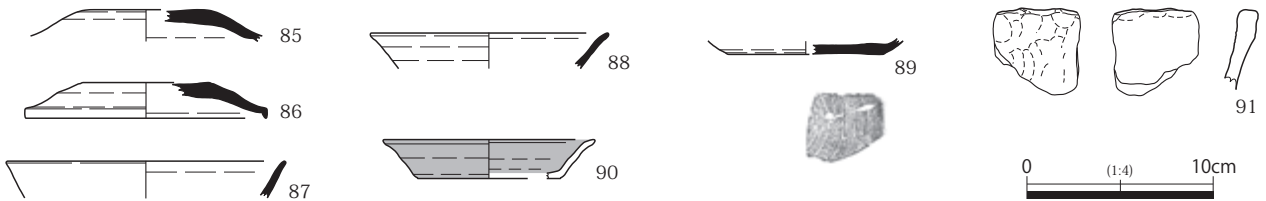
92～96は須恵器坏である。92・93は口縁部をつまむようにナデ調整し、端部がわずかに外反し先細りとなる。それに対し、94は口縁端部を丸く収める。95は高台の付く坏である。底部は回転糸切りで、高台が底部周縁に近い位置に貼り付けられている。96は高台の付かない坏で、底部は回転糸切りである。



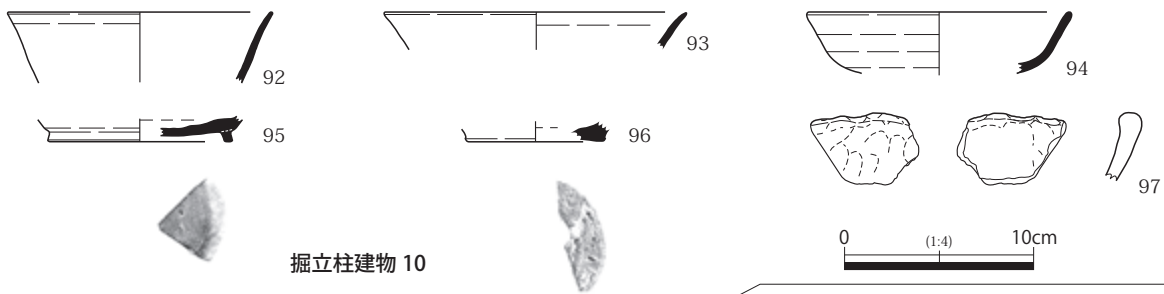
第160図 掘立柱建物3・4出土土器



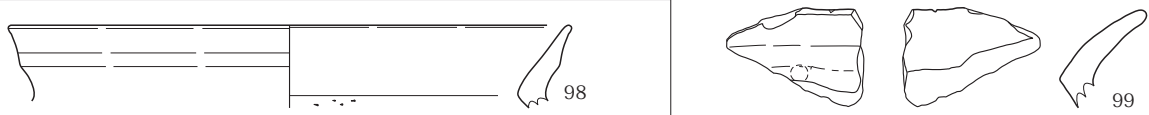
第161図 掘立柱建物5～8出土土器



第162図 掘立柱建物9出土土器



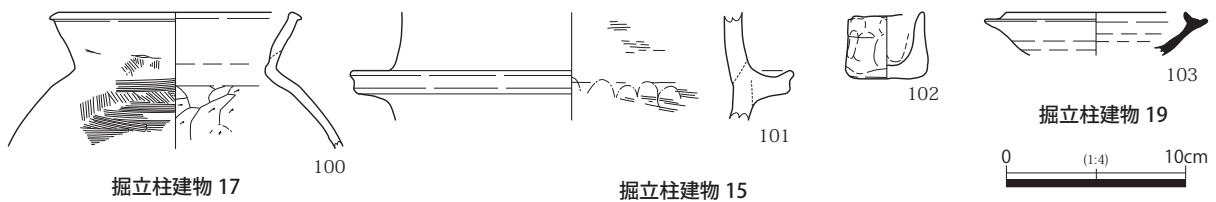
掘立柱建物10



掘立柱建物11

掘立柱建物12

第163図 掘立柱建物10～12出土土器



掘立柱建物17

掘立柱建物15

掘立柱建物19

第164図 掘立柱建物15・17・19出土土器

97は焼塩土器で、内外面とも指頭圧痕が確認できるが、外面は焼塩時と見られる被熱痕跡〔神野2012〕が顕著に認められる。

95は8世紀の特徴を持つが、その他はいずれも8世紀末～9世紀前半のものとする。

掘立柱建物 11・12 出土土器 (第163図、PL.109)

98は掘立柱建物11の3355ピットから、99は掘立柱建物12の3373ピットからそれぞれ出土した。どちらも土師器甕で、98は口縁外面を強くナデて仕上げる。

掘立柱建物 15 出土土器 (第164図、PL.109)

4211ピットから甑101、4212ピットからミニチュア土器102が出土した。いずれも古墳時代のもの、第4層からの混入であろう。

掘立柱建物 17 出土土器 (第164図、PL.109)

4273ピットから土師器甕100が出土した。くの字を呈する口縁端部を外方へつまみ出して肥厚させ、面をもつ。古墳時代中期のものとする。

掘立柱建物 19 出土土器 (第164図、PL.109)

4263ピットから須恵器坏103が出土した。7世紀後葉のものである。

3003 溝出土土器 (第165～171図、PL.110～114)

3003 溝埋土上層 (第165～168図、PL.110～112)

調査時に3003溝検出範囲で「第2-2層」「第2-3層」として取り上げを行った遺物を埋土上層出土遺物として評価し、第165～168図に掲載した。

第165図104～121は「第2-2層」出土須恵器。104～107は蓋で、7世紀末～9世紀前半のものが見られる。104は輪状つまみを有し、口縁端部が屈曲して下方へ折れる。105は天井部をヘラケズリし、口縁端部を下方へ短く折り曲げて収める。106は天井部を回転糸切りした後ナデて仕上げる。107は天井部周縁ナデである。

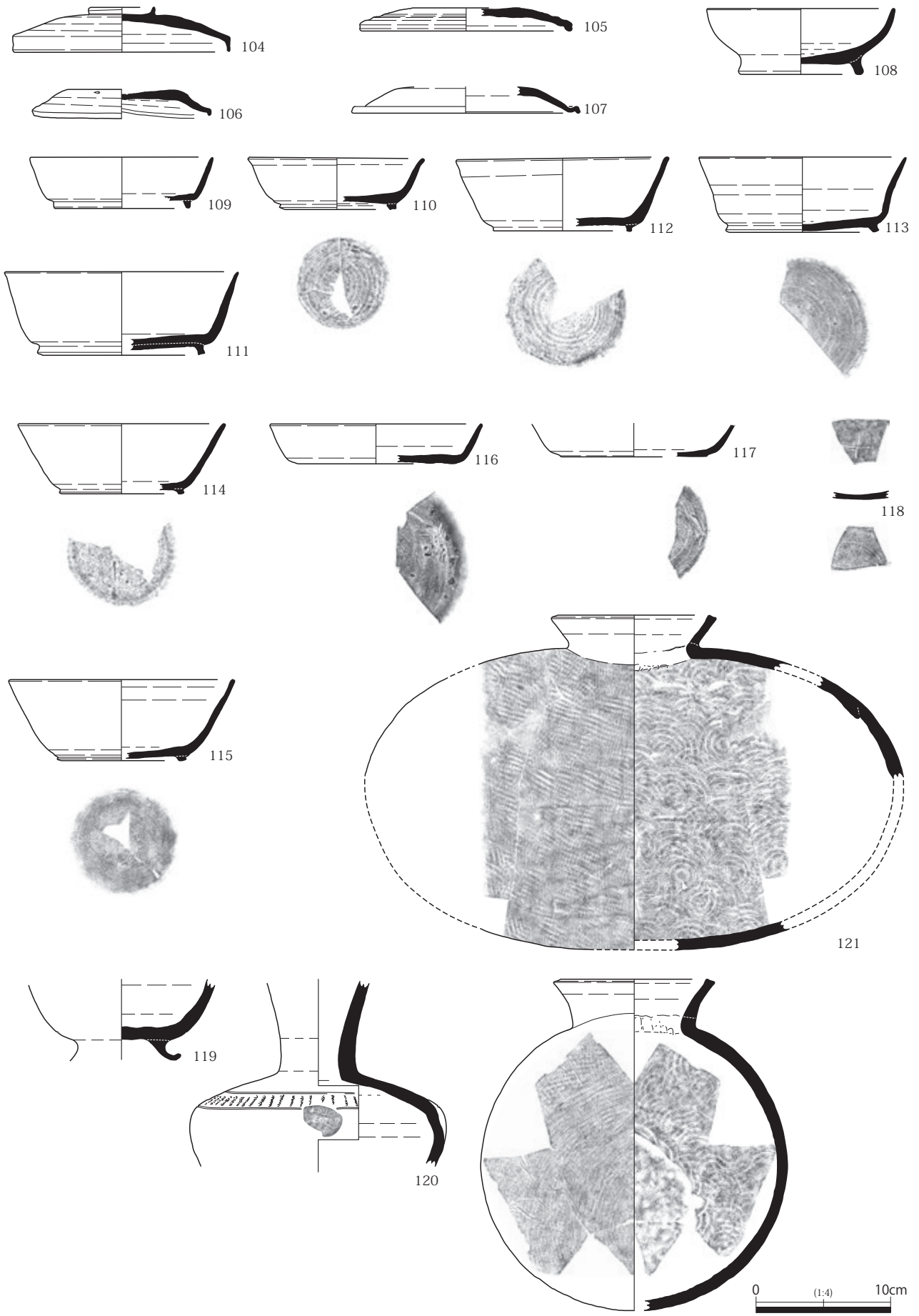
108～115は高台付坏である。109・110は平底から続く体部が外傾しながら直線的に立ち上がるもので、109は底部に回転糸切り後のナデが認められ、110は口縁部をわずかに外反させる。8世紀前半のものである。111はより深い体部をもつもので、口縁部を引き延ばすように仕上げており端部がやや先細りとなる。高台は底部周縁よりわずかに内側へ貼り付けられ、端部を面取りする。8世紀後半のものである。112は底部回転糸切りで、底部周縁よりわずかに内側へ低く直立する高台が付く。113は中心にかけて深くなる底部から外反して立ち上がる体部をもち、端部に面をもつ低い高台がハの字に付く。土師器高台付坏と形態的に類似するタイプである。114・115は底部周縁に短く低い高台が貼り付くもので、111と比しても体部がより外傾している。115は底部から体部への立ち上がりが内湾気味となる。これらは8世紀末～9世紀前半の様相を示している。

116・117は皿で、体部が低く直線的に立ち上がる。116は8世紀前半、薄手でやや内湾しながら立ち上がる。117は8世紀末～9世紀前半のものである。

118は小片だが高台付坏底部片の可能性があり、内面側にヘラ記号「×」が認められる。

119は壺底部で、内面に自然釉の付着が見られる。高台端部は上方へ反るが窯変と考えられる。

120は長頸壺で、肩部に2条の沈線と櫛歯状工具による連続刺突文を施す。また成形時のものか、肩の一部が凹み、布目圧痕が認められる。8世紀前半のものである。121は横瓶で、体部はタタキ後粗いカキ目を施す。



第165図 3003 溝埋土上層出土土器 (1)

第166図122～140は「第2-2層」「第2-3層」出土の土師器及び製塩土器。

122は坏で、底部回転糸切り、体部ナデ調整し10世紀のものである。123は坏、124は鉢で、底部外面はケズリ調整し、一部ナデ、指頭圧痕が認められる。

125～129は皿で、125は底部回転糸切り、126～129は底部ケズリ後ミガキあるいは丁寧なナデにより仕上げる。いずれも8世紀のものである。

130～138は甕である。体部からくの字に外傾して短く立ち上がる口縁をもつ130～133・135、寸胴な体部からくの字に大きく立ち上がる口縁をもつ134、体部から緩やかに外反しながら立ち上がる口縁をもつ136～138が見られる。

139・140は焼塩土器で、どちらも口縁端部を面取りし、内面に布目痕が確認できる。

第167図141～162・第168図163～168は「第2-3層」出土須恵器。

141～146は蓋である。141・142は輪状つまみをもつ蓋で、141は天井部から体部上半を回転ヘラケズリするが、142は天井部ヘラケズリ後ナデ調整し、扁平な形状を呈すなどやや新相を示す。7世紀末～8世紀前半のものである。143～145はつまみを有す蓋で、143はボタン状、144は宝珠状、145は頂部中央の周囲をナデ押さえて突出させる算盤玉状のつまみである。144・146は天井部に回転ヘラケズリが認められ、145は天井部を丁寧にナデ調整して糸切り痕が見られず、143は天井部回転糸切り後周縁部のみナデ調整を施す。146はつまみの有無が不明だが、天井部の調整は回転糸切り後ナデである。これらは8世紀後半～9世紀前半のものとする。

147～156は高台付坏で、概ね8世紀後半に比定されるものである。147は底部に板目痕がわずかに認められるが、丁寧なナデによって消されている。ヘラ記号「○」が見られる。高台は底部周縁からわずかに内側に付くものがほとんどで、端部が丸みをおびるもの(149)、端部をつまむようにナデるもの(150)以外は端面をもち、短くハの字を呈すように貼り付けられている。なお、156には部分的だが底面にヘラ記号が認められる。

157～161は坏である。157は内湾する体部をもち口縁部のみ短く外方へ屈曲する。158も体部の立ち上がりは内湾気味である。これらは7世紀末～8世紀前半のものである。159・161は外傾して直線的に立ち上がる体部をもち、160も体部の大部分を欠失するが立ち上がりの角度は同様に見える。8世紀末～9世紀前半頃に比定される。

162・165は皿である。162は外傾する体部をもつが立ち上がりはやや内湾し、8世紀後半の皿と考える。底部外面周縁には一部ケズリが見られ、その後全体を丁寧にナデ調整している。一方、165は口縁端部をわずかに外反させ、9世紀前半のものであろう。

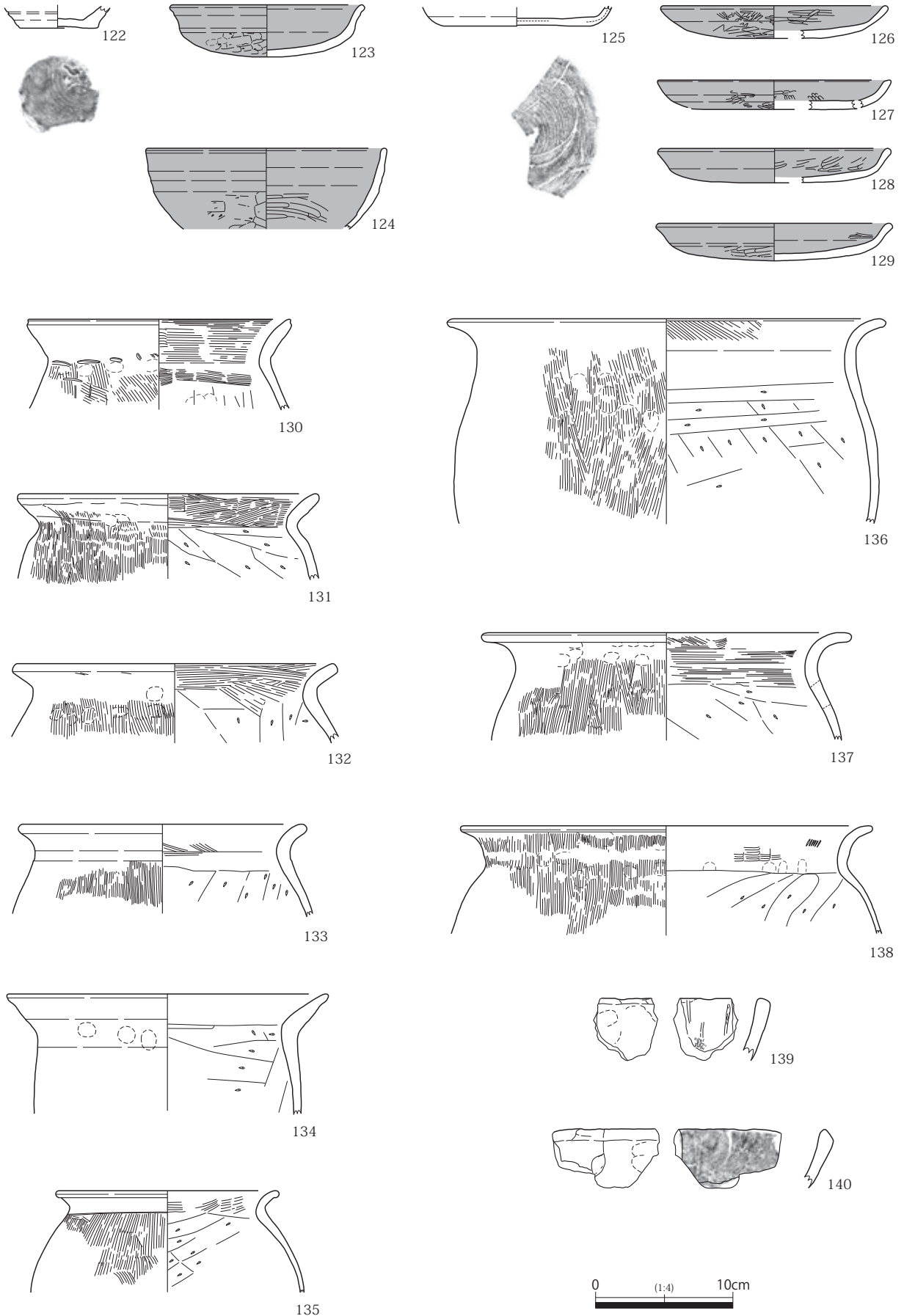
163は長頸壺で、頸部から肩部にかけて自然釉がかかる。8世紀前半のものである。164は薬壺形を呈す壺で、底部に回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。166は壺の頸部と考えられ、口縁部で外反し広口となる。167は甕で、体部下半にケズリの工具痕が連続して残る。7世紀後半頃のものである。168は甕の底部片で、焼台とみられる別の甕体部片が溶着している。

なお、165～168は出土位置から見て3006溝に伴う可能性もある。

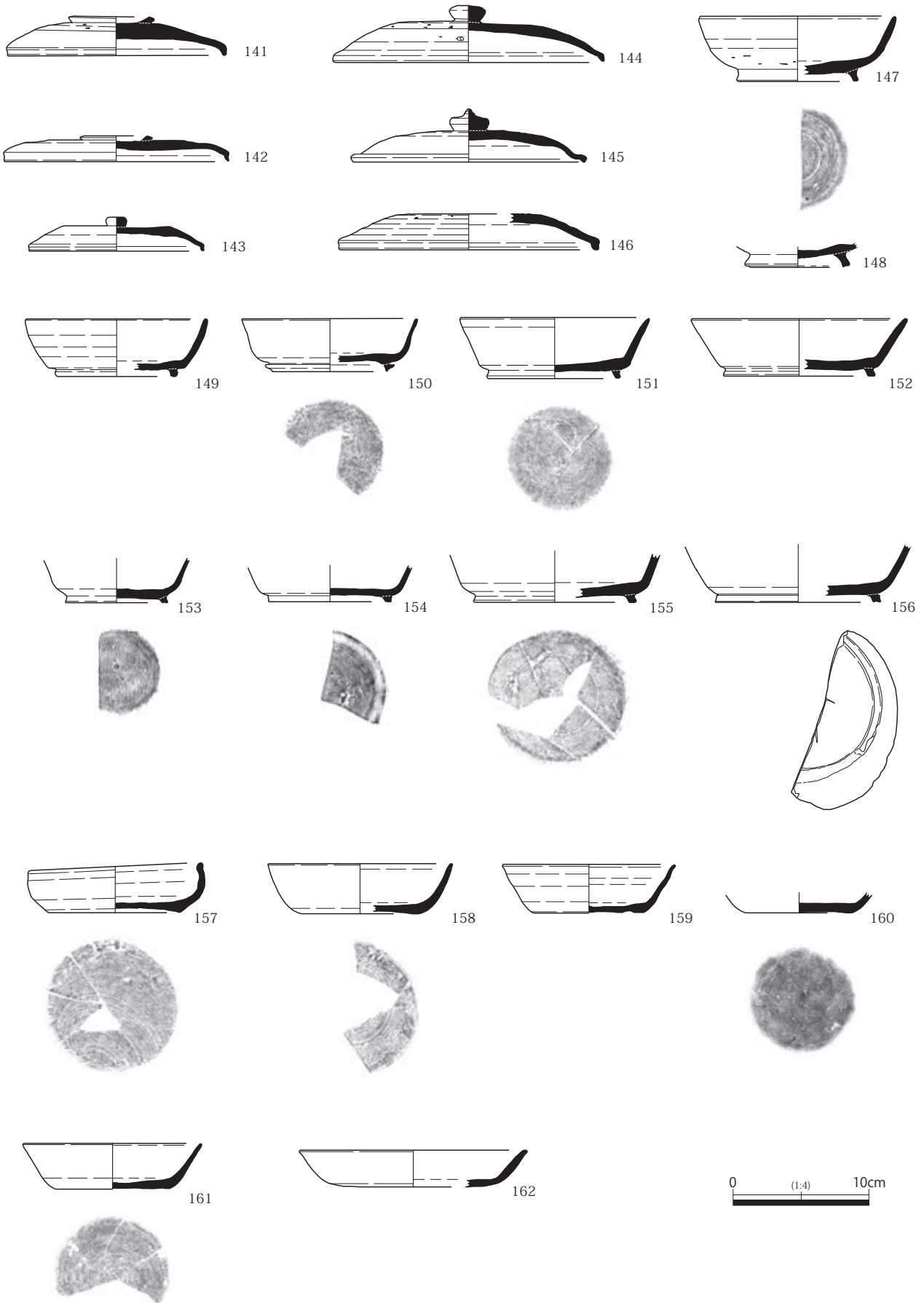
3003 溝埋土下層出土土器 (第169図、PL.113)

169・170は須恵器の高台付坏で、169は底部ヘラ切り、170は底部回転糸切りである。169は8世紀前半、170は8世紀後半のものである。

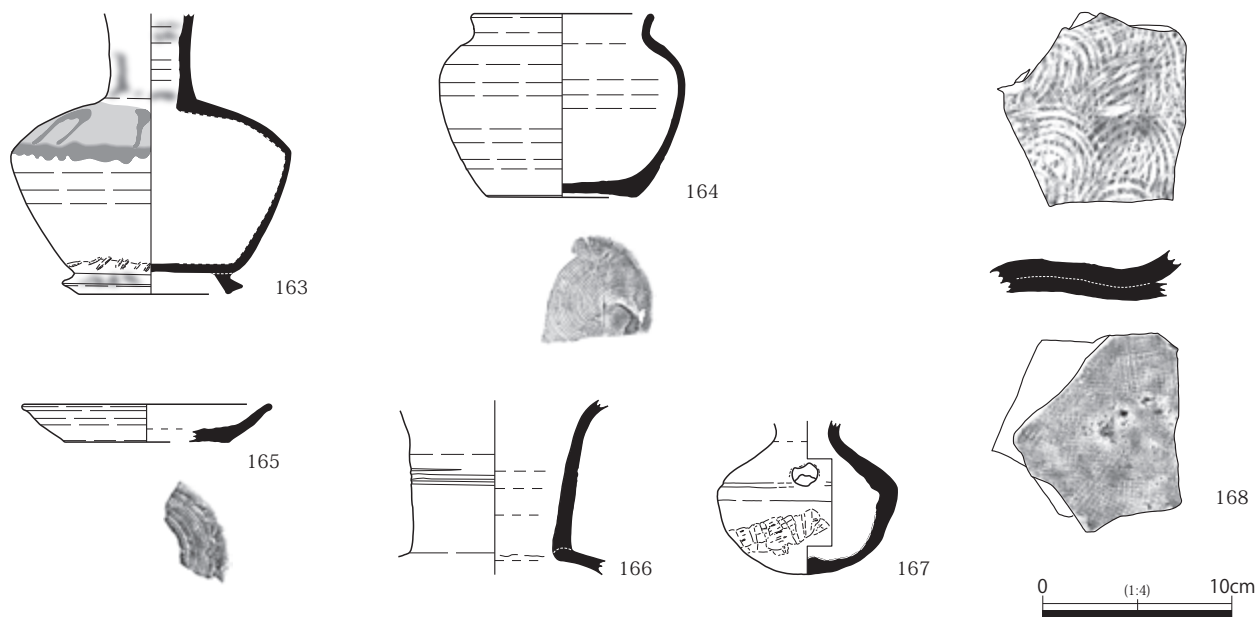
171は須恵器甕で、焼き歪みの影響もあってか肩が大きく張る。



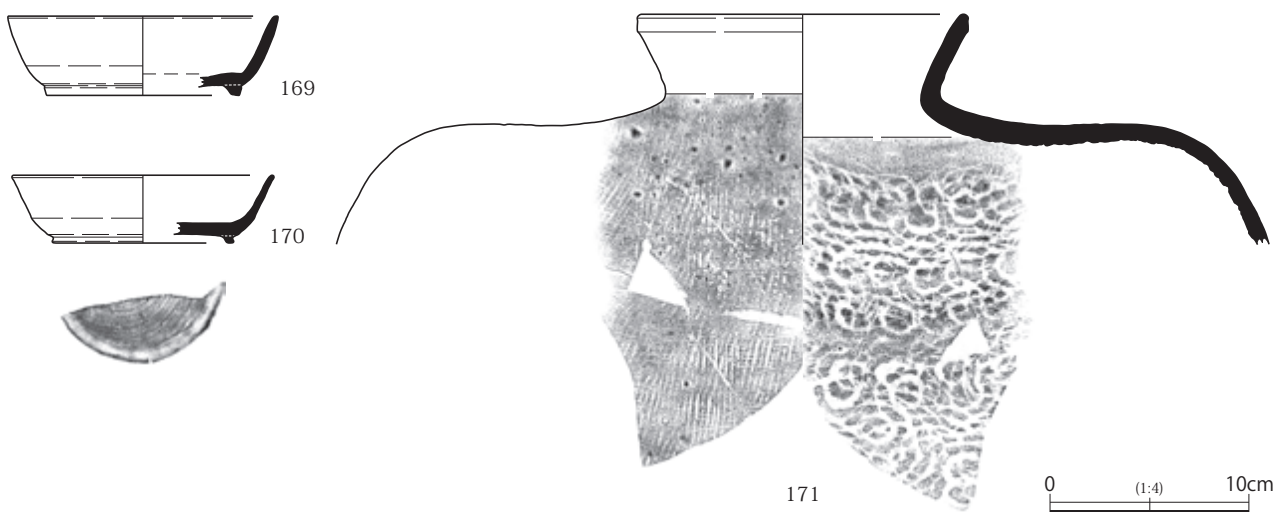
第166図 3003溝埋土上層出土土器(2)



第 167 図 3003 溝埋土上層出土土器 (3)



第168図 3003溝埋土上層出土土器(4)



第169図 3003溝埋土下層出土土器

3003 溝埋土最下層出土土器 (第170・171図、PL.113・114)

埋土最下層では7世紀末～8世紀前半の遺物がまとまって出土している。

172は坏蓋で、天井部はヘラ切り後一部ナデ調整する。陶邑編年 TK209 併行期のものである。173は宝珠状のつまみを有し、口縁部に下方へ湾曲するかえりをもつ蓋で、7世紀後半に比定される。174～176は輪状つまみを有す蓋で、175・176の天井部内面にそれぞれヘラ記号「*」「×」が認められる。7世紀末～8世紀前半のものである。

177～181は高台付坏で、坏部の器形や高台の形態から7世紀後葉～8世紀前半に比定されるものである。高台が高く、ハの字状を呈し、端部を面取りする178、高台がハの字状で内側を強くナデる177、高台が高くハの字状を呈し端部の面が弱い181、高台が高く直立気味で端部を面取りするか、面が弱い179・180が見られる。179・180は底部静止糸切り、181は丁寧なナデ調整で糸切り痕跡を消した後に漆記号「×」を記している。

182・183・184は坏、185は皿である。182・183は内湾して立ち上がる体部をもち、底部は回転糸切り未調整である。184は銅椀を模倣した坏で、底部は静止糸切り後周縁部をヘラケズリする。185は底部ヘラ切り後ナデで、口縁端部がわずかに外方へ屈曲する。いずれも7世紀末～8世紀前半のものである。

186は高坏脚で外面にヘラ記号が認められる。187・188は長頸壺で、大型品の188には内面に粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。8世紀前半のものである。

189は平瓶で、扁球形の体部をもつ。190～192は甕である。191は外面に沈線と波状文を2段に施す大型品の口縁部で、接合部で剥離している。

193は弥生時代後期後葉の甕で、口縁部にハケ状工具による14条以上の平行沈線文を施す。

194は土師器の高台付坏、195は坏、196は皿、197は鉢である。194は外面をナデ調整するが、内面は細かいミガキが入る。195も底部外面に細かいミガキが認められる。196は底部外面ケズリ後丁寧なナデ調整で仕上げ、体部内面下半は上方向、上半は横方向の細かなミガキを施す。197は外傾して立ち上がる体部から口縁部をつまむようにナデ、内傾させる。いずれも伯耆国庁跡編年第1段階、西方官衙地区包含層出土土師器に形態等が近似し、8世紀のものと考えられる。

3006 溝出土土器（第172～175図、PL.115～119）

3006 溝埋土出土土器（第172～174図、PL.115～117）

第172図198～200は埋土下層で出土した。198は壺で、底部は静止糸切りされている。壺Gの底部か。199・200は甕で、199は外反する口縁をもち、200はくの字に立ち上がる口縁の端部をつまむように内傾させる。

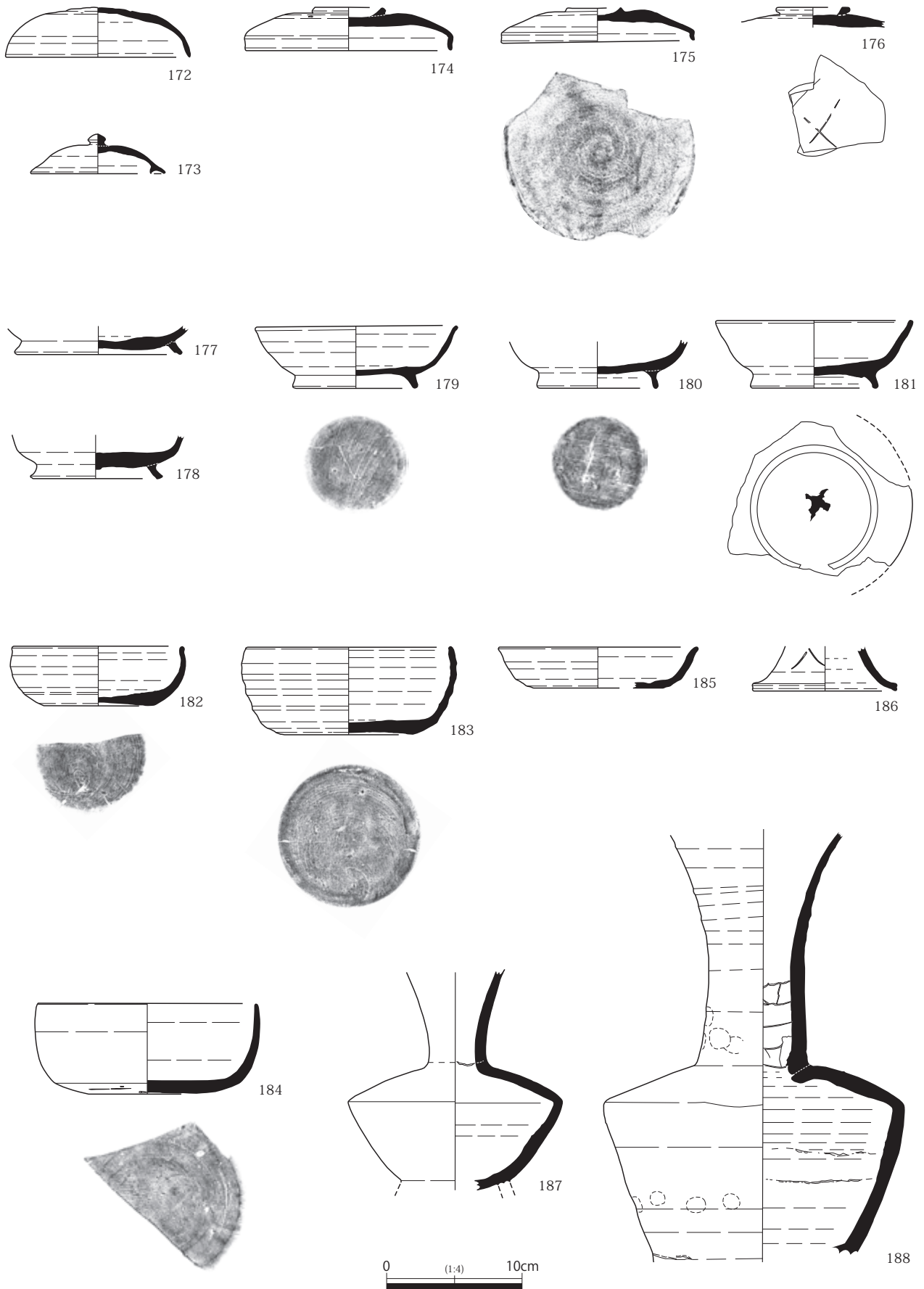
201～206は蓋である。7世紀後葉に比定される坏蓋201、天井部に回転ヘラケズリ痕を残す203を除けば、口縁端部を短く屈曲させるタイプの蓋であり、概ね9世紀前半のものと考えられる。

207～217は高台付坏である。207は底部外面に板目痕が残り、ヘラ記号「○」とその内側に漆記号（種別不明）が認められる。208は丸みをもつ底部から内湾して立ち上がる浅い坏部をもち、高台は焼き歪みにより変形している。209は平底から外傾して直線的に立ち上がる浅い体部をもち、口縁端部はやや先細りとなる。これらは7世紀末～8世紀前半のものである。210～217は底部周縁より内側に短い高台が付くもので、ハの字に開き端部に面をもつ212・216、低く直立気味な210・211・213・215、低く端部が先細る214・217が見られる。214・216・217などは器形等の特徴が新相を示すので、全体としては9世紀後半～10世紀前半のものを含むと考える。

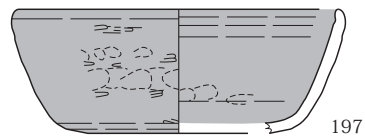
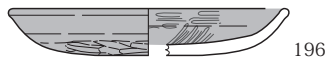
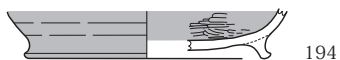
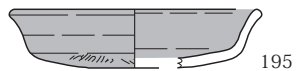
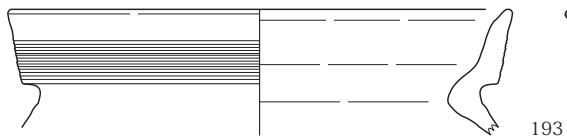
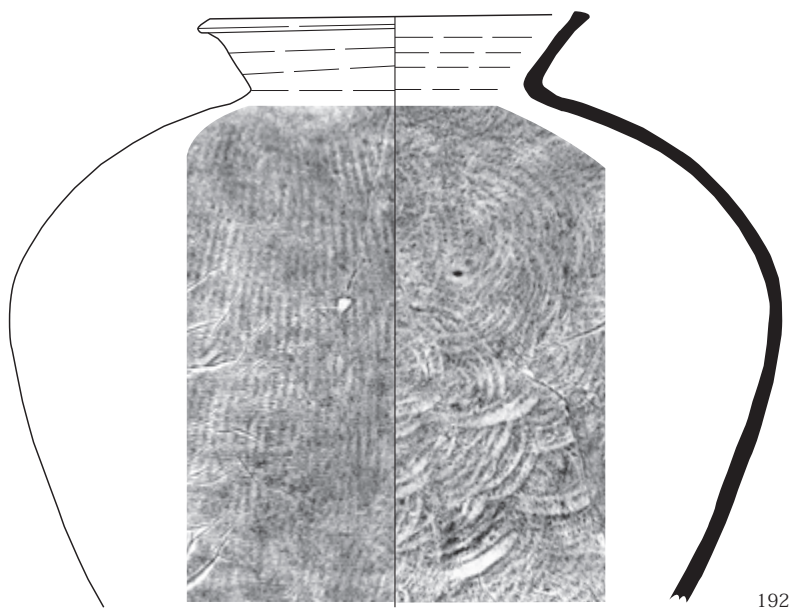
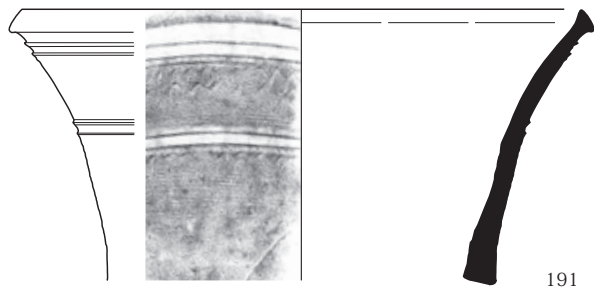
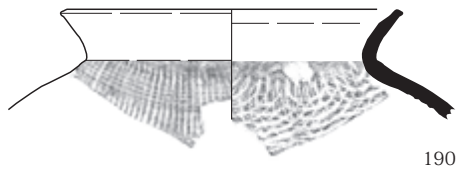
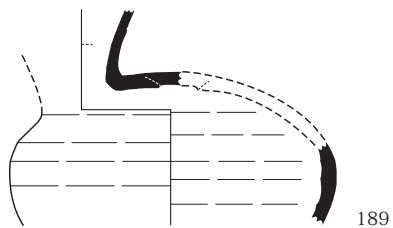
第173図218～227は坏である。218・219は体部の立ち上がりから浅い坏となろうか。219の底部はヘラ切り後ナデ調整で、ヘラ記号「×」が認められる。8世紀のものであろう。220は底部から体部への立ち上がりが緩やかで、体部は大きく外傾する。221・222は底部から体部への立ち上がりは内湾気味で、口縁部がわずかに外反する。これらは9世紀前半頃のものと考えられる。223～226は全体的に薄手なつくりとなっており、底部は回転糸切り後ナデを施す。224・225は口縁端部をつまみ出すようにナデで外反させ、226は口縁部を引き出すようにナデる。227は厚手で径の形態的な特徴からみて9世紀後半～10世紀前半頃のものである。

228・229は皿である。228は底部回転ヘラケズリで8世紀前半のもの、229は底径に対して口径が大きく開き口縁部を外側へ折るもので10世紀前半頃に比定される。

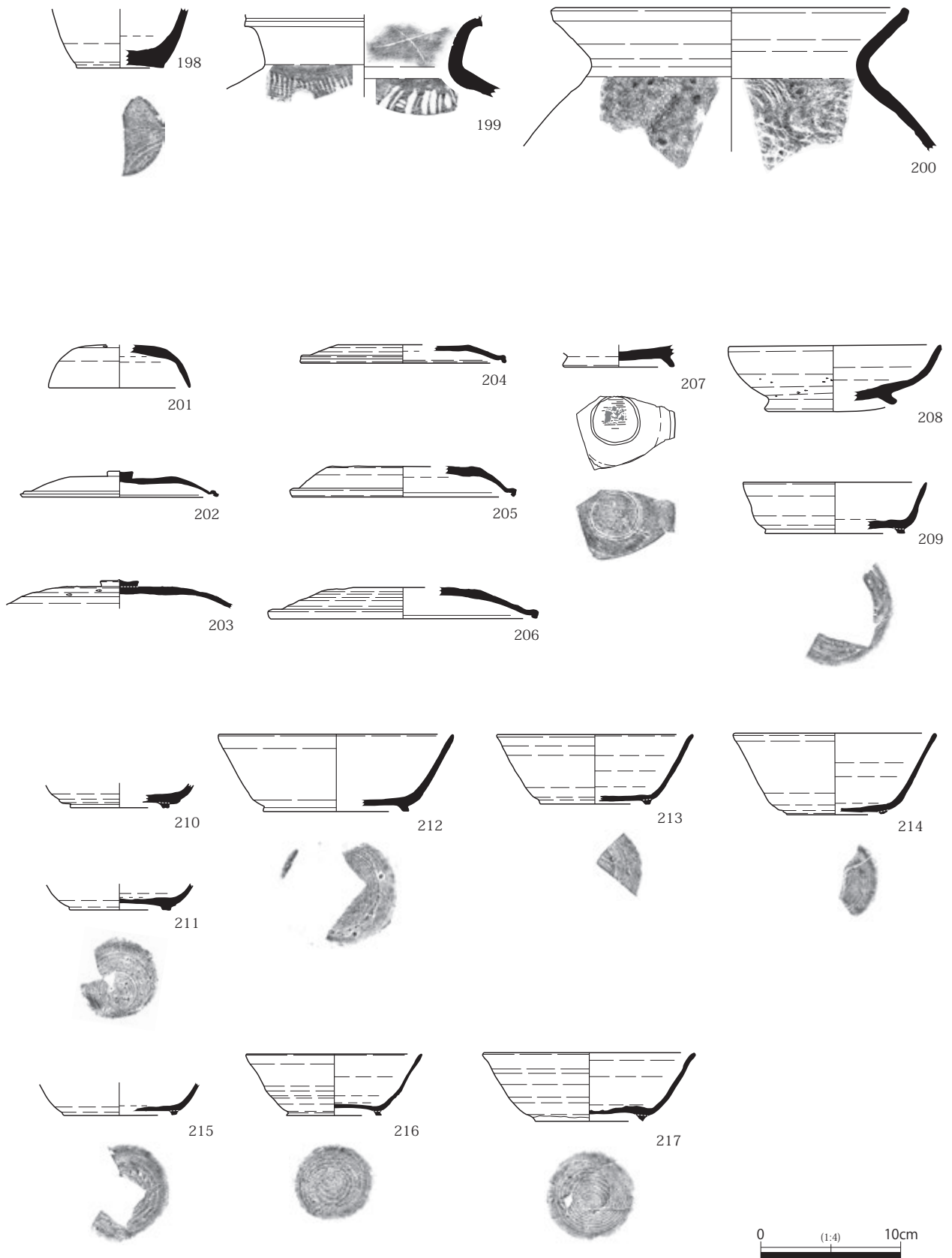
230・231は小型の壺である。230は平底で扁球形の体部をもつ。



第170図 3003 溝埋土最下層出土土器 (1)

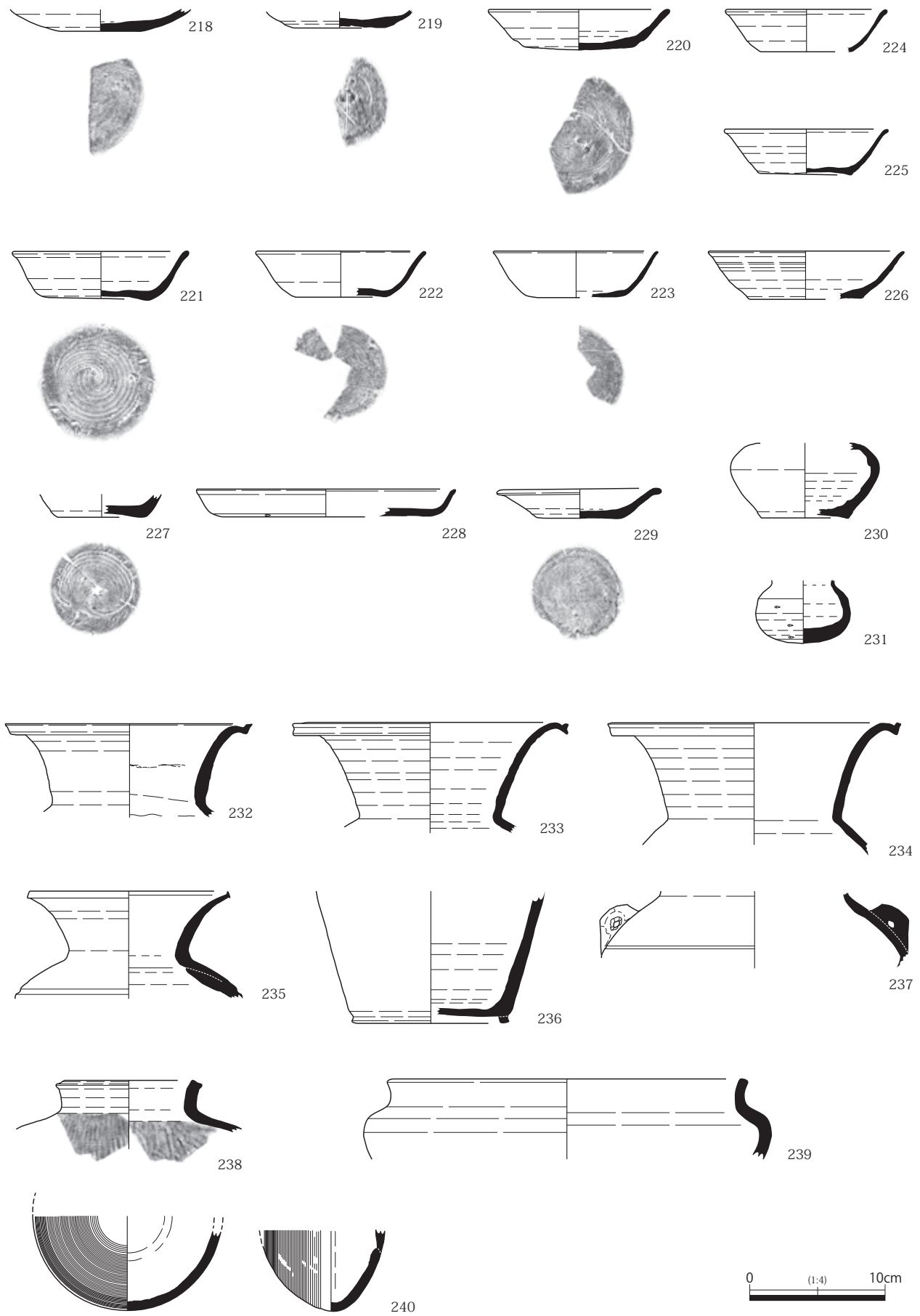


第171図 3003溝埋土最下層出土土器(2)



第 172 図 3006 溝埋土下層・埋土出土土器 (1)

第VI章 3区・4区の調査成果



第173図 3006溝埋土出土土器(2)

232～235は広口壺で、外反する口縁部を上方へ折り曲げ端部をつまむようにナデて面をもたせる。232～234と、口縁端部を外側からナデて面をもたせる235がある。8世紀後半～9世紀のものであろう。236は直立気味に立ち上がる体部に短い高台が付く。237は肩部に耳状のつまみを貼り付けている。9世紀のものか。238は短頸で肩の張る体部をもつ。239は鉢、240は提瓶の体部である。

第174図241は平瓶、242は小型の甕または壺である。243・244は甕口縁部、245・246は体部片である。245の内面には格子目状の当具痕が認められる。鳥取市山ヶ鼻遺跡でも同様の当具痕をもつ甕が出土しており、10世紀代のものか。247は甕底部に焼台と見られる別の体部片が溶着している。焼台となっている体部片の破面は摩耗が顕著である。

248～253は土師器坏である。赤彩しないものが多く、249や250は須恵器と同形のものである。248は9世紀前半、249～252は9世紀後半～10世紀初、253は10世紀前半に比定されると考える。

254～258は甕で、くの字に外反する口縁の端部を面取りする254、体部が張らず直立気味となる257・258が見られる。

3006 溝埋土最下層 (第175図、PL.118・119)

埋土最下層の出土遺物は9世紀のものを主体とし、7世紀末～8世紀前半のものが少量混じる。9世紀の資料の多くは前半段階に比定される。これは、東から続く4038溝下層の堆積を再掘削しながら溝の機能維持を図ったことを示唆していると考ええる。

259・260は蓋で、259は輪状つまみをもち外面に漆記号(「×」か)があり7世紀末～8世紀前半のもの、ボタン状のつまみを有す260は8世紀後半のものである。

261～267は高台付坏である。7世紀末～8世紀前半に比定される261も含まれるが、多くが264～267のように底部周縁から内側に短い高台が付き深い体部をもつ9世紀のものを主体とする。264や266は口縁部で外反し9世紀前半段階に比定され、つぶれたハの字を呈す高台が付く265や深底で体部がわずかに内湾気味に立ち上がる267はやや新相を示す。

268～274は坏で、体部の外傾角度にやや差があるが全体として9世紀のものと考えられる。272は大型品である。

275は甕、276・277は壺である。276は大きく張り稜をもつ肩から外反して立ち上がる口縁部をもつ広口壺で、9世紀に位置付けられる。277は丸みをもつ底部に高台が付き、7世紀末～8世紀前半の長頸壺であろう。

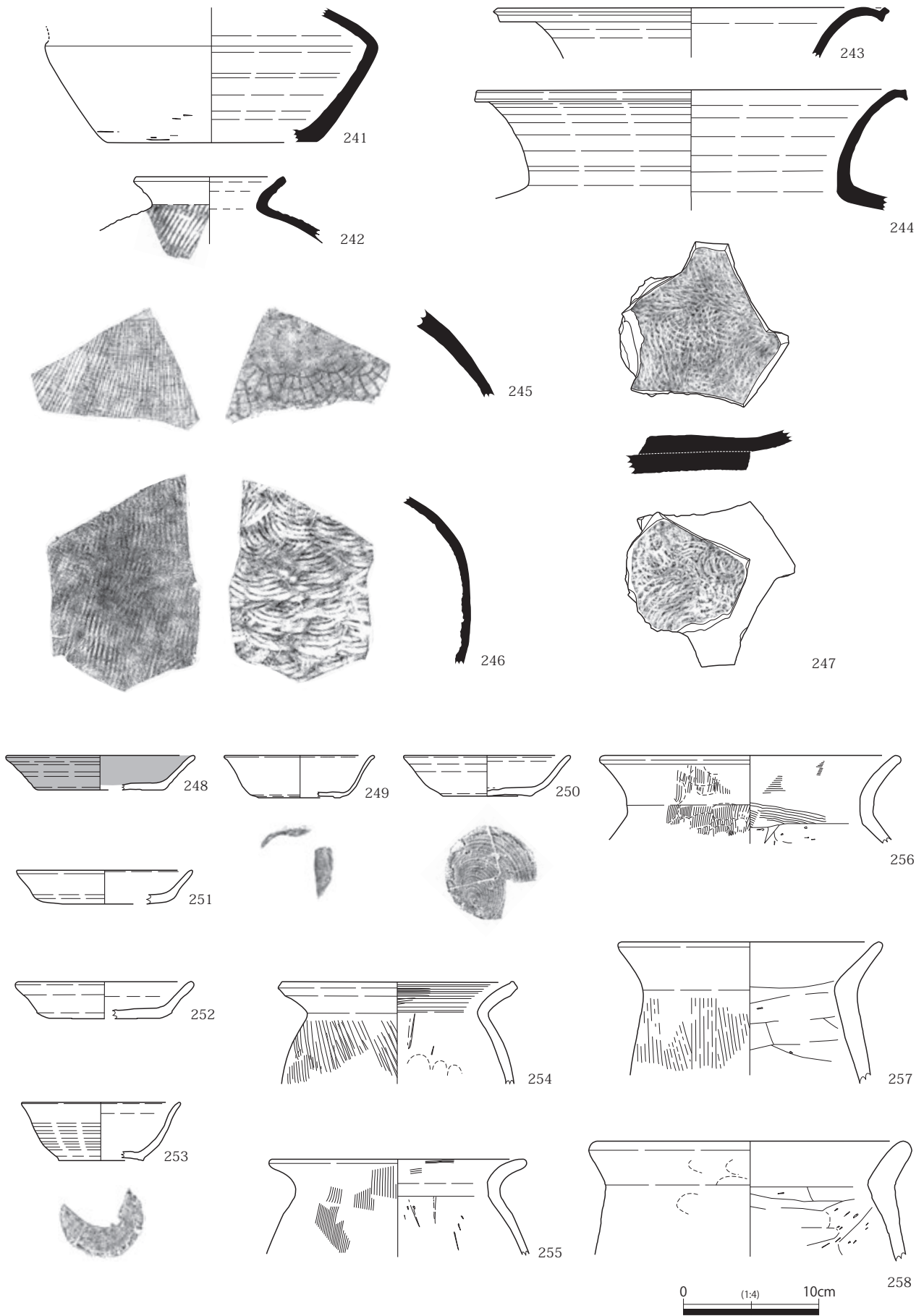
278～281は土師器坏で、外面を黒色塗彩する278は8世紀前半、他は9世紀前半のものと考えられる。278は底部ケズリ後丁寧にナデ調整し、他は底部ヘラ切り後ナデ調整している。

282～284は甕で、283は頸部以下がケズリ等により薄く仕上げられているが外面のハケは総じて粗く雑である。

4038 溝出土土器 (第176～181図、PL.119～124)

4038 溝埋土出土土器 (第176～178図、PL.119～122)

第176図285～295は蓋である。7世紀前半の坏蓋285や286も見られるが、8世紀のものを主体とする。287もつまみ上げ丁寧に成形する宝珠つまみを有し、短いかえりをもち7世紀前半のものである。頂部中央の周囲をナデ押さえする算盤玉状のつまみをもつ288・289、同じくつまみ剥離痕のある290は口縁端部の形態などから8世紀後半に比定される。つまみの有無が不明な291・292もその頃のものと考えられる。輪状つまみをもつ293～295は7世紀末～8世紀前半に比定され、293は外面



第174図 3006溝埋土出土土器(3)

にヘラ記号「×」が認められる。

297～302は高くハの字に開く高台が付く坏で、底部が丸みをもつ297以外は平底となる。299の底部は静止糸切りされている。300は底部ケズリ後ナデ、301・302は底部ヘラ切り未調整で、いずれも漆記号「卍」を描いている。

303～313は短い高台が付く坏である。ハの字に開き端部に面をもつ高台が付き、体部が外傾して直線的に立ち上がる303～308は8世紀のものである。309及び310は椀形を指向する体部下半から底部を回転ヘラケズリあるいは静止糸切りし、底部にヘラ記号「○」が認められる。8世紀前半のものか。311～313は高台、体部形態、そして底部調整が上記のものとは異なり、8世紀末～9世紀前半に比定されよう。

314～317は坏である。形態的特徴や焼成から9世紀後半～10世紀初めのものと見られる317を除けば、7世紀末～8世紀前半に比定される。317は4038溝北側の再掘削が想定される範囲(2D-7aグリッド)で出土しており、その時期を示唆するものである。

第177図318・319は7世紀前半の高坏で、口縁部が内湾する浅い坏部をもつ318、長脚の319とも線状の透かしを入れている。318は未貫通の透かしを5方向、319は貫通する透かしを2段2方向に施す。

320～322は横瓶である。320は扁球形の体部をもつ。321・322は口縁部～頸部の破片だが、体部に取りつく角度がほぼ水平となる。320より俵形の器形が想定される。

323は外傾して直線的に立ち上がる深い体部をもち、鉢か。324～326は壺である。325は大きく張る肩部から頸部が窄まり、そこから口縁に向かって大きく開く広口壺で、頸部にカキ目が見られる。8世紀後半頃のものか。327～329は甕である。

第178図330～333は土師器坏、334～339は皿である。坏330・332は底部をヘラケズリ後ナデ調整する。体部調整はヘラミガキまたはナデである。皿には、口縁部と底部が明瞭に区別でき、口縁端部をつまむようにナデで先細りになる334・335、口縁端部を外方へ折り曲げるまたはつまみ出す336・337・338、内湾気味に外傾する口縁部をもつ339がある。これらはいずれも底部外面をヘラケズリするか、ヘラケズリ後丁寧なナデ調整が施されている。また体部内外面はヘラミガキ、または丁寧なナデによって仕上げられる。こうした形態及び調整手法の特徴は、倉吉市福田寺1号土壙の土師器I群に見られるものであり〔倉吉市教育委員会1998〕、上記資料も8世紀前半に位置づけられる。451は高台が付く深い坏である。高台付坏451は深い体部をもち、口縁は外反する。底部外縁にハの字に開く高台が付く。坏内面はミガキ、ナデにより丁寧に仕上げられる。底部外面はケズリ後ナデである。

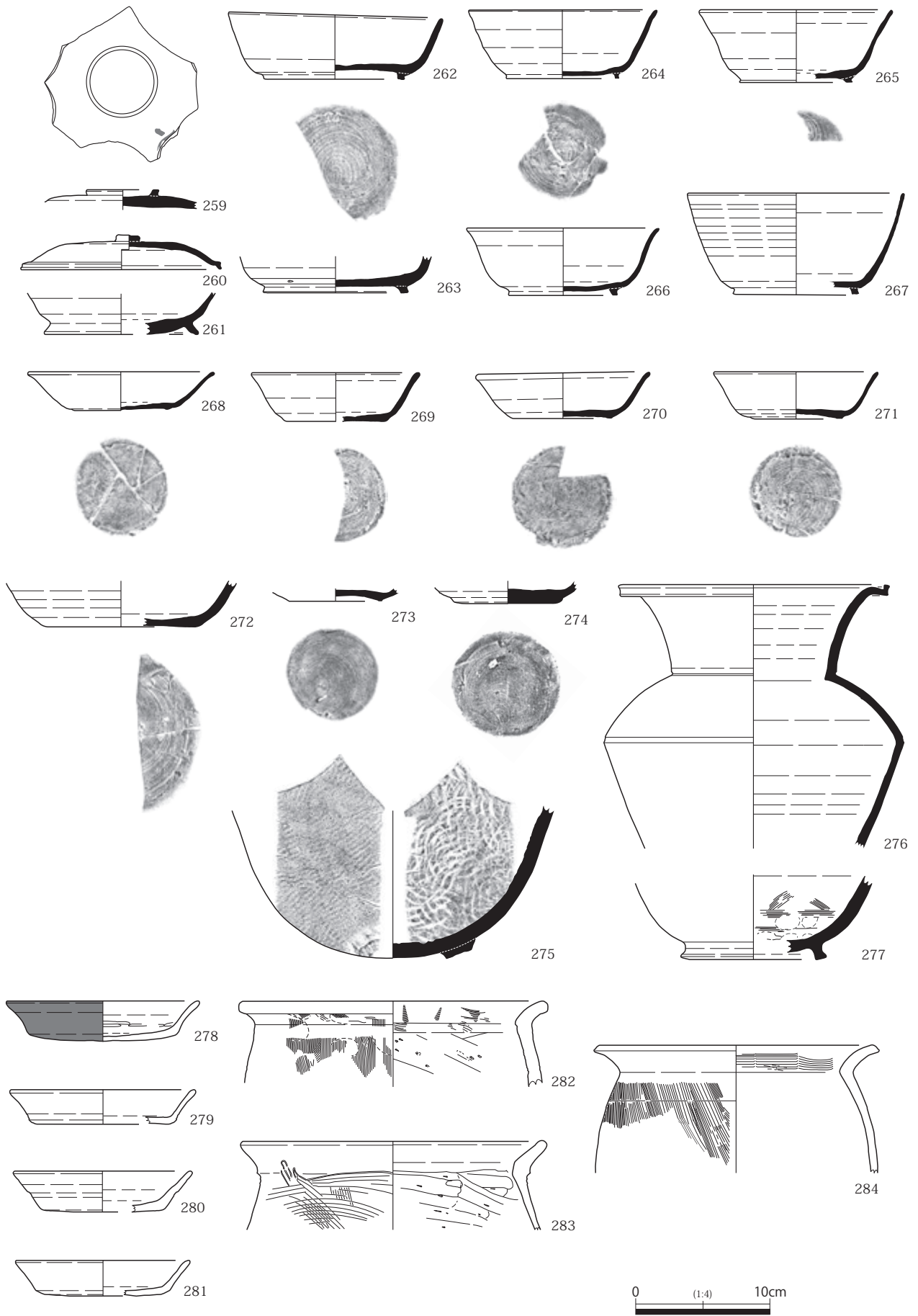
340～346は甕である。口縁部がくの字に屈曲して立ち上がる340・343、口縁部が外反して立ち上がる341・342・344・345、口縁がほとんど屈曲せず直立気味に立ち上がる346がある。体部はほとんど張らない。

347は古墳時代中期後葉の高坏脚部、348は甑底部である。

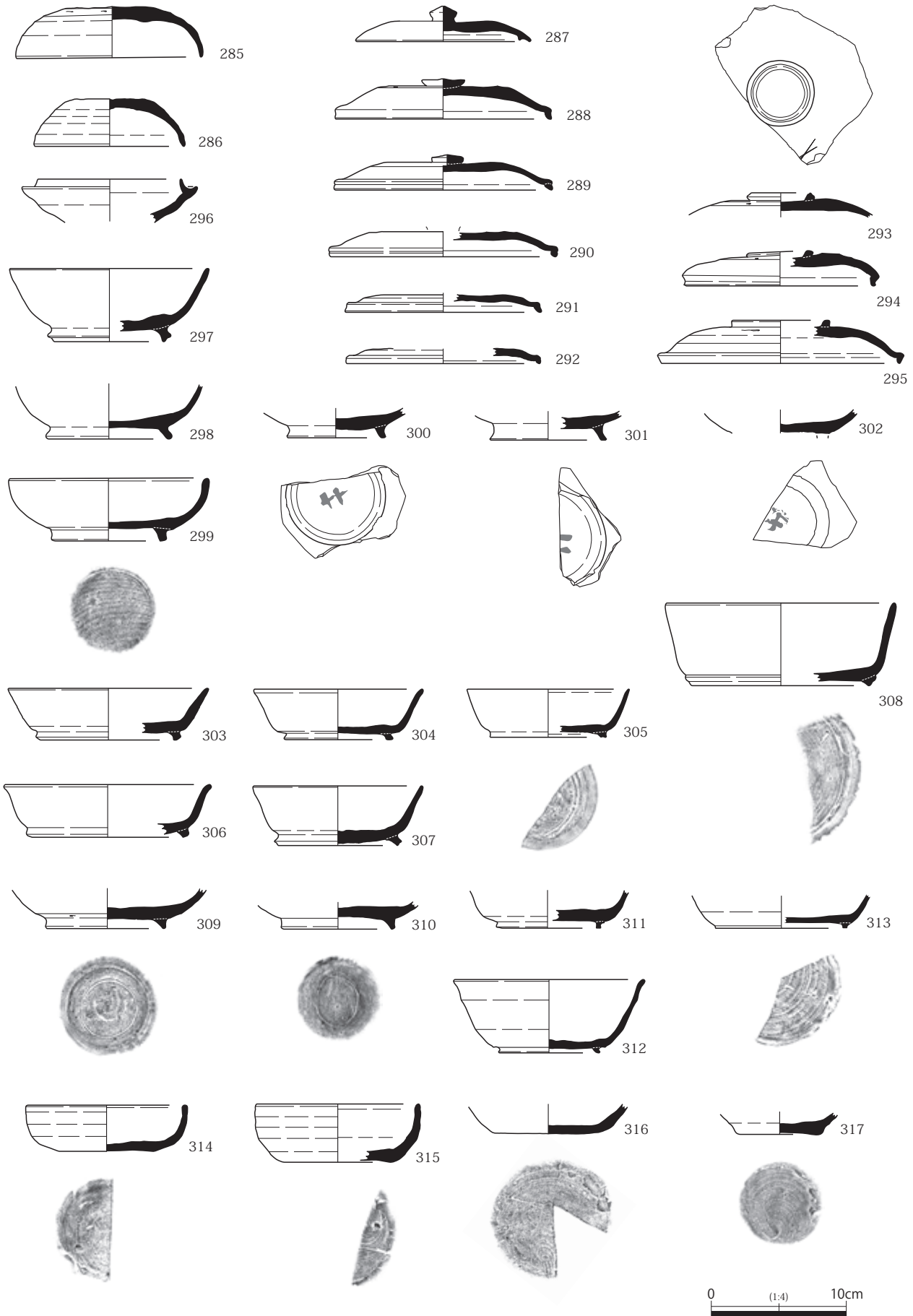
349～352は焼塩土器で、口縁端部が肥厚し面をもつものが多い。351は焼塩時と見られる被熱が顕著で調整不明である。352は内面にわずかに布目痕が確認できる。

4038 溝埋土中層出土土器 (第179図、PL.122)

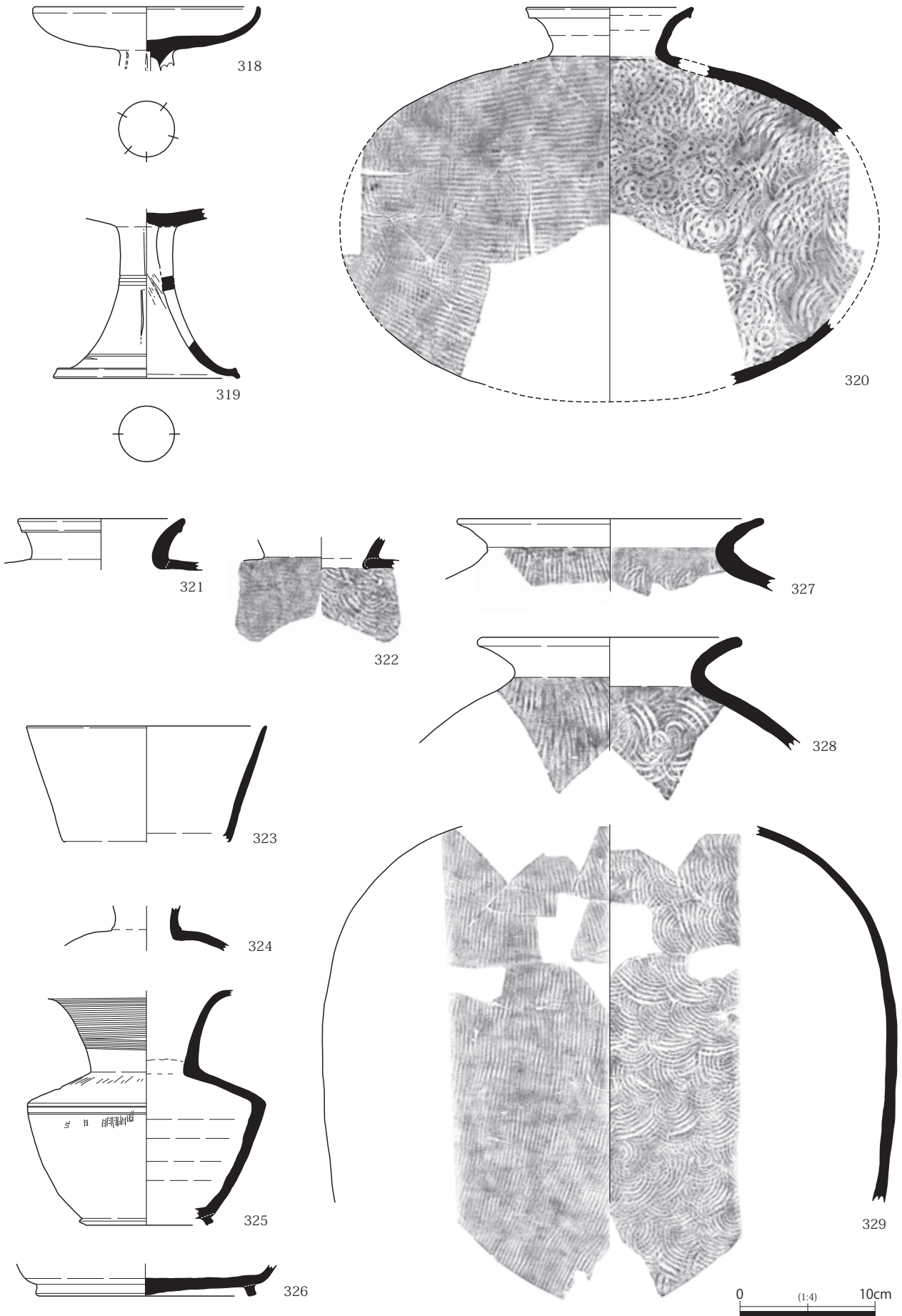
埋土中層で出土した土器のうち、須恵器蓋353・354、坏355・356、長頸壺357、土師器壺358、甕



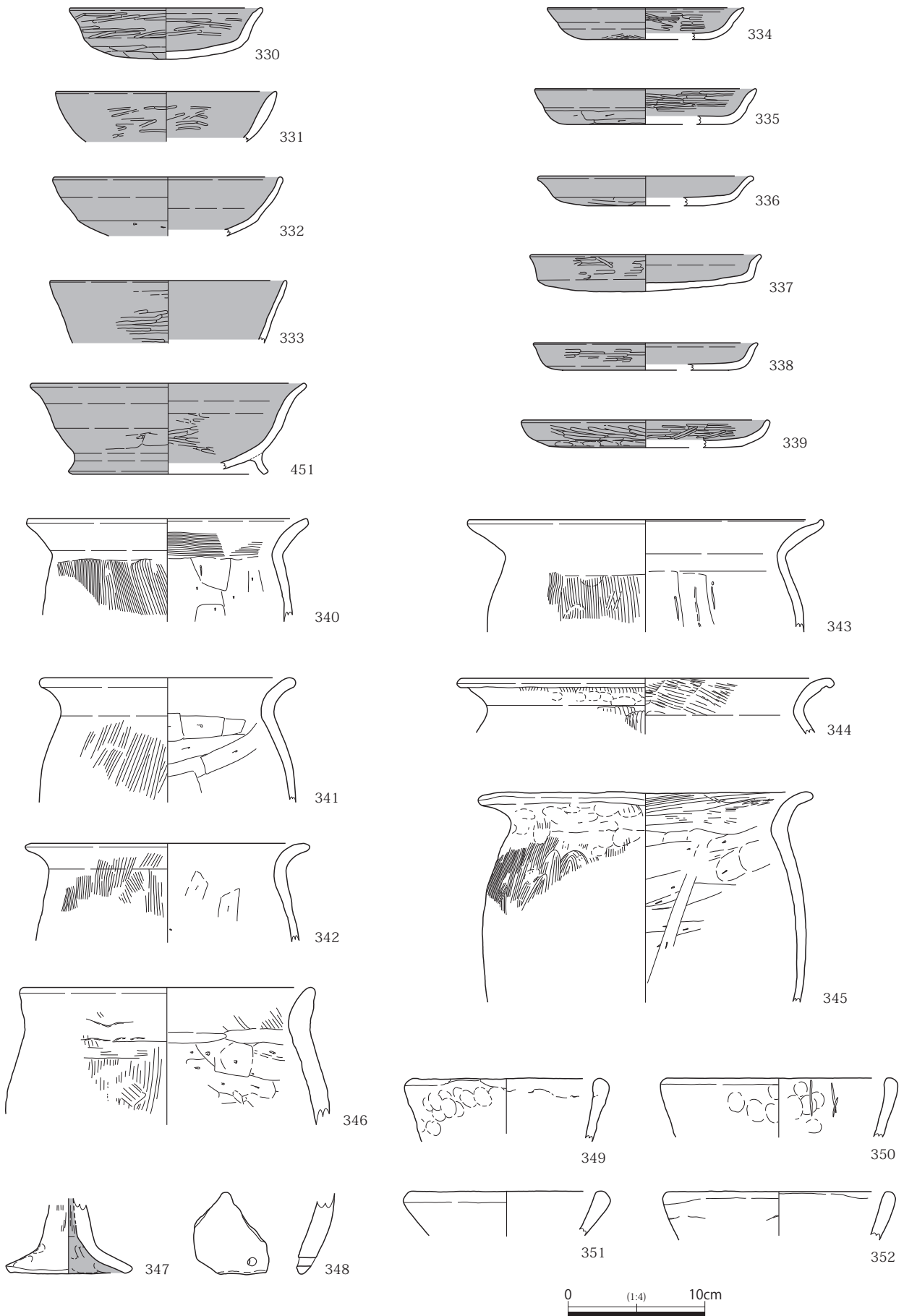
第175図 3006溝埋土最下層出土土器



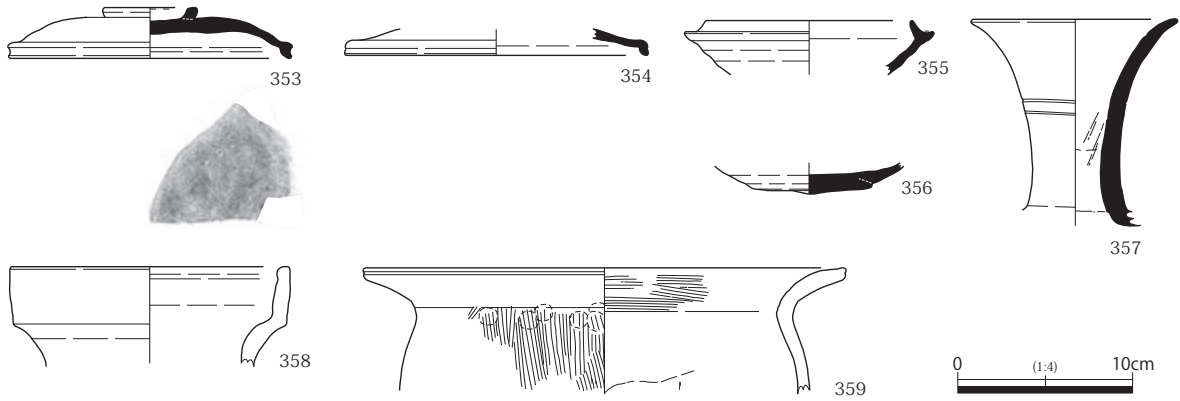
第176図 4038 溝埋土出土土器 (1)



第177図 4038 溝埋土出土土器 (2)



第178図 4038溝埋土出土土器(3)



第179図 4038溝埋土中層出土土器

359を図化、掲載した。358や355のように古いものも混じるが、概ね7世紀末～8世紀前半のものである。353は天井部内面にヘラ記号「×」を記す。

4038溝埋土下層出土土器（第180～181図、PL.123・124）

埋土下層の出土遺物は、ほぼ7世紀末～8世紀前葉に比定されるもので占められる。

360～370は蓋で、7世紀後半の360・361を除けば、輪状つまみを有すもの、口縁端部を下方へ折り曲げるものなど上記時期の特徴をよく表している。363は輪状つまみの内側に漆記号、366はヘラ記号「×」が認められ、364には内外面に漆が二次的に付着している。

371～376は高台付坏、377は坏である。体部が内湾する371～373、体部が直線的に立ち上がる374～377がある。

378は長頸壺の底部、381は長頸壺の肩から体部下半、379・380は高坏脚部、382・第181図383・384は甕である。高坏はどちらも短脚で透かしは入らない。381は算盤玉形の体部となる。

385はやや丸みをもつ平底から外傾して立ち上がる体部をもつ土師器坏で、端部は面をもち、底部はヘラケズリを施す。386は内湾する深い体部をもつ鉢で、口縁端部は内側へわずかに屈曲させる。内外面の調整は丁寧なナデ及び細かなヘラミガキである。

387は甕、388・389は高坏脚、390は直立気味の体部となる甕または甑となろうか。高坏脚は古墳時代後期頃のものである。391はミニチュア土器である。

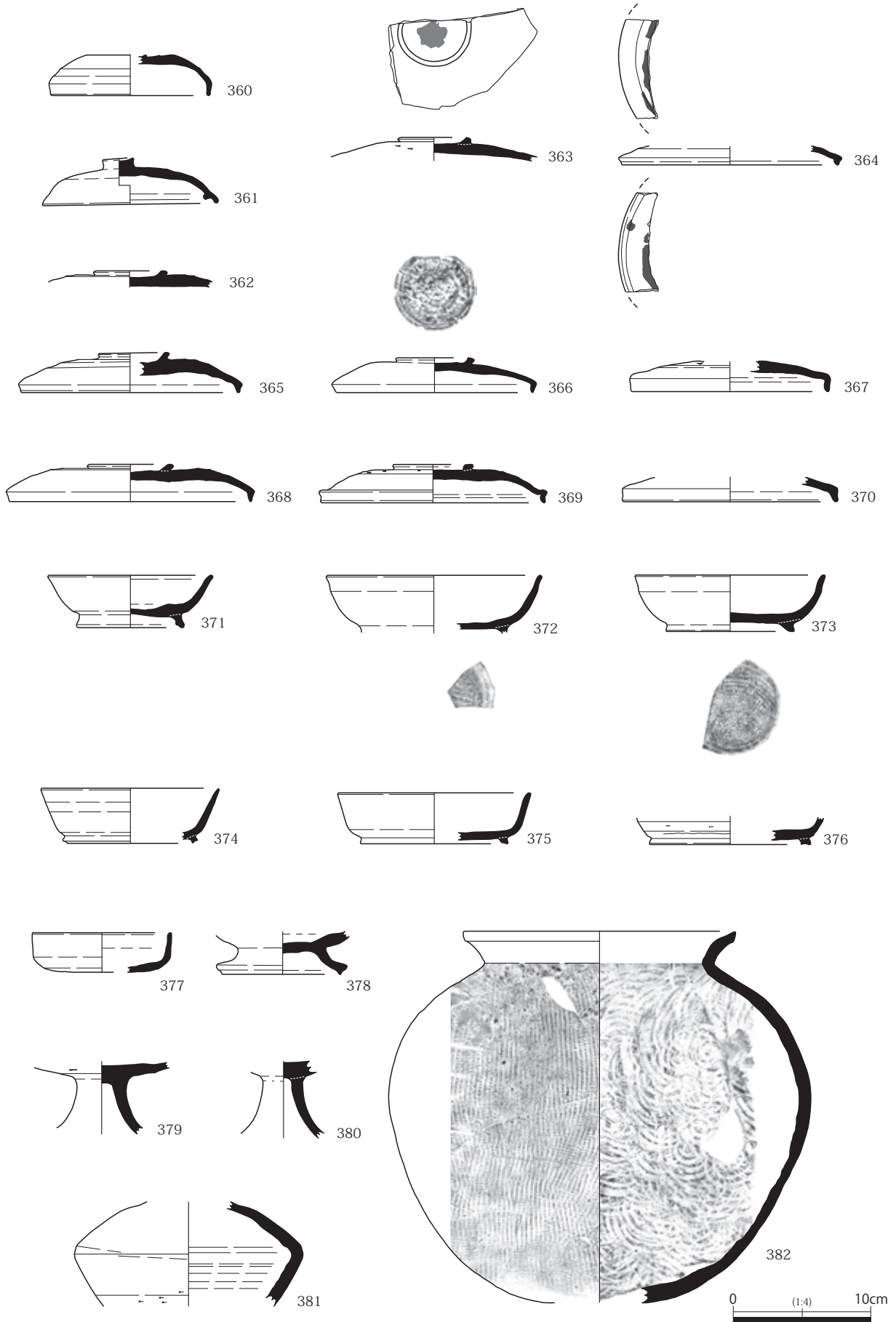
392～397は焼塩土器である。口縁部と肥厚させ端部に面をもつ392・396、厚みが一定で口縁端部が丸みをおびる394・395・397、薄手で内湾する体部をもつ393が見られる。392・395・397には内面に布目痕が認められる。

3006溝南肩及び4038溝南肩（第4層）出土土器（第182～185図、PL.124～127）

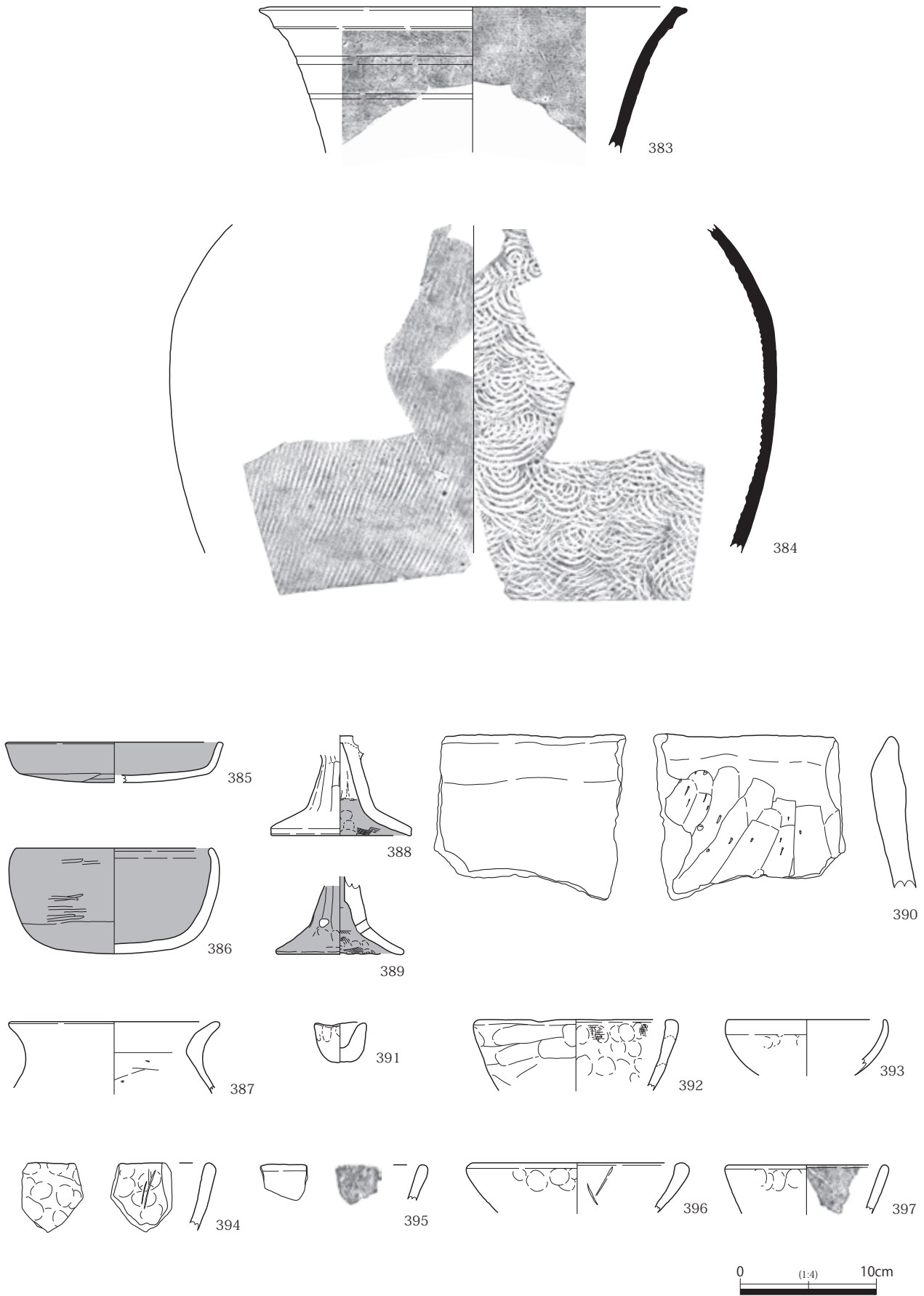
3006溝および4038溝の南肩部分は、旧流路（溝）が砂礫で埋積した後に直線的に走る水路の造成を意図して盛土成形されたもので、盛土（第4層）の中には奈良時代の土器を中心に多量の遺物を含んでいた。

3006溝南肩出土土器（第182図、PL.124・125）

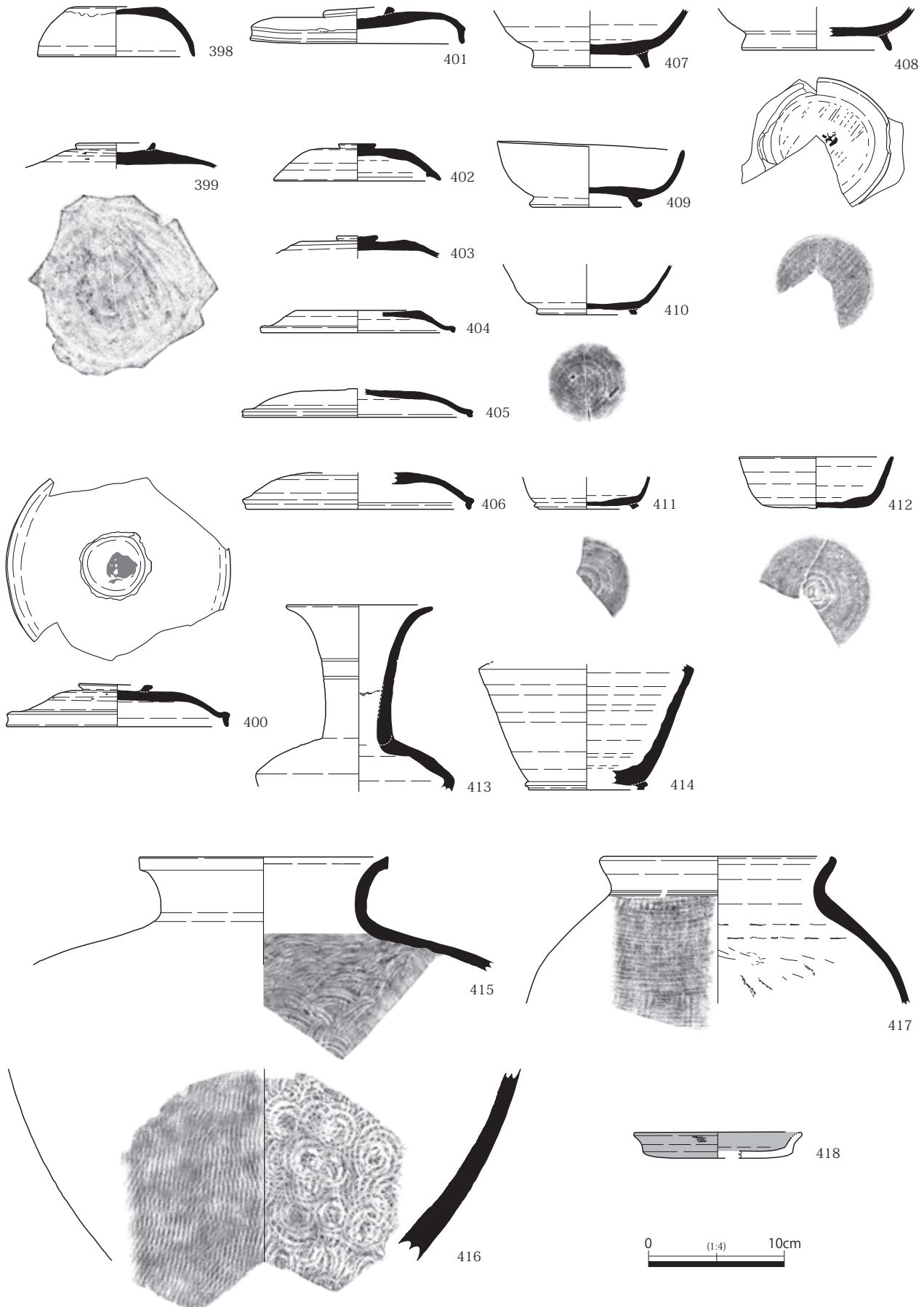
第182図398～406は蓋である。これらには、つまみの有無や口縁部の形状などから見て7世紀後半～9世紀前半のものを含んでいる。399は天井部内面にヘラ記号「×」、400には輪状つまみ内側に漆記号が認められる。



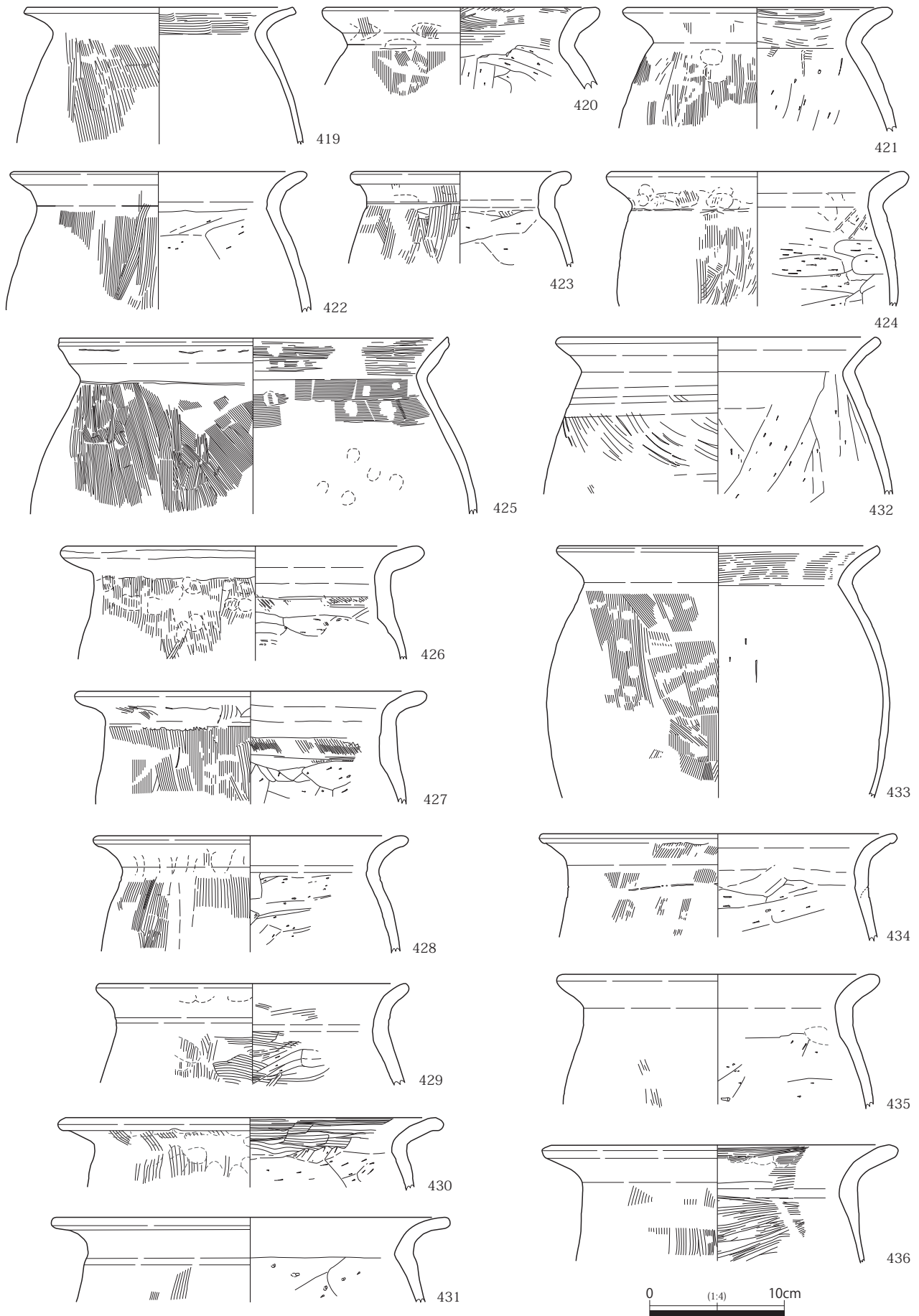
第180図 4038溝埋土下層出土土器(1)



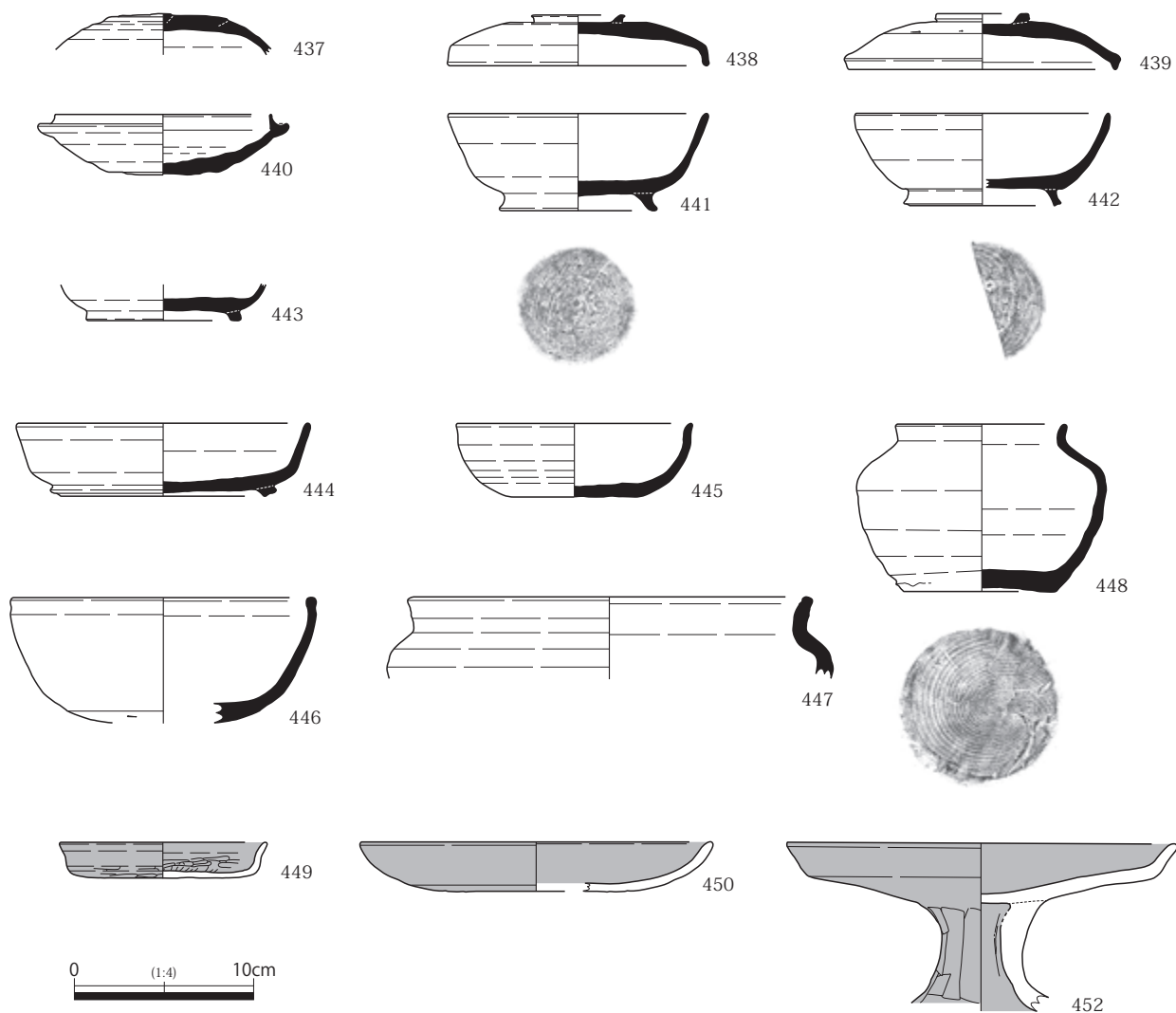
第 181 図 4038 溝埋土下層出土土器 (2)



第182図 3006 溝南肩（第4層）出土土器（1）



第183図 3006 溝南肩（第4層）出土土器（2）



第184図 4038 溝南肩（第4層）出土土器（1）

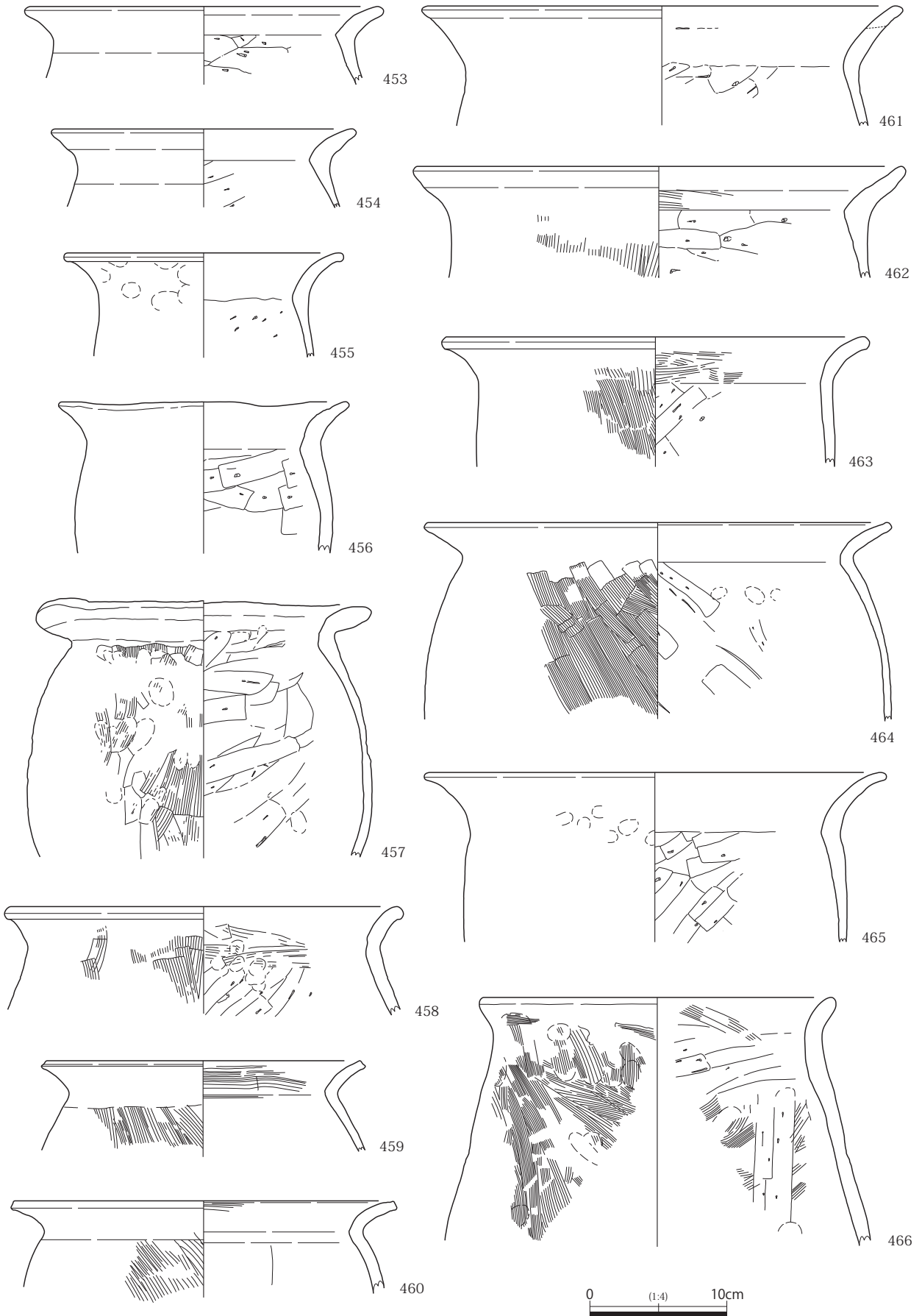
407～411は高台付坏で、体部が内湾しハの字に開く高い高台を有す407～408と、外傾して直線的に立ち上がる体部に低い高台を付す410・411がある。前者及び底部調整がヘラ切りの411は7世紀末～8世紀前半、後者が8世紀末～9世紀前半に比定されよう。412も底部ヘラ切りであり、7世紀末～8世紀前半のものである。

413は長頸壺、414は壺で、いずれも8世紀のものであろう。415～417は甕で、口縁部が外反しながら立ち上がり肩の張る415、くの字に立ち上がる短頸の417がある。

418は土師器皿、419～436は甕である。皿は平底から外反して立ち上がる体部をもち、底部はヘラケズリ後ナデ調整を施す。8世紀前半のものである。甕は多量に出土したが、底部まで復元できたものはない。薄手でくの字に立ち上がる口縁部をもつもの（419・425・432など）、全体的に厚手なもの（420・421など）、口縁～頸部は肥厚するが体部以下はケズリ調整によって薄く仕上げられるもの（426・427など）が見られる。後者には口縁部の立ち上がりで差異があり、くの字に屈曲するもの、外反するものがある。

4038 溝南肩出土土器（第184図、PL.126・127）

437・440は7世紀前半の須恵器蓋、坏である。438・439は蓋、441～444は高台付坏で7世紀後



第185図 4038溝南肩(第4層)出土土器(2)

半～8世紀前半に比定される。441・442は底部外面静止糸切り後ナデ調整する。445は坏で、底部をヘラ切りし、口縁端部を外方へわずかに屈曲させる。446は口縁端部が肥厚しわずかに内湾する鉢、447は上位で肩が張る体部に外反する短頸の口縁がつく鉢、448は短く外傾して立ち上がる口縁をもつ壺である。これらは7世紀末～8世紀前半のものと考えられる。

449・450は土師器皿、452は高坏である。皿はどちらも底部ヘラケズリ後ナデで形態的にも古相を示し、8世紀前半のものであろう。高坏452は面取りされた短い脚に、口縁が外上方へ屈曲して立ち上がる浅い坏部が付く。やや古相を示す須恵器類に対し、土師器類は8世紀後半頃のものとする。

453～466は甕で、3006溝南肩と同様に数多く出土した割には底部まで復元できた個体はない。3006溝南肩部分よりも、体部から口縁部を引き延ばすように大きく屈曲、外反させる寸胴なもの(455・461・462・465など)が目立つ。466は体部中位に最大径をもち、口縁部が短く外方へ屈曲するものである。

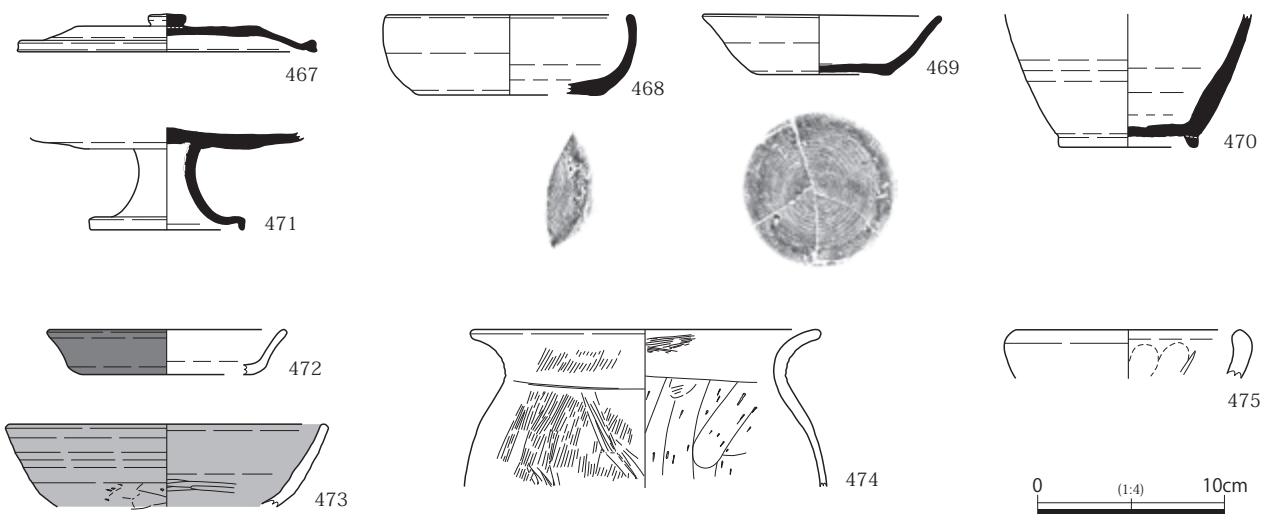
3438 流路出土土器 (第186図、PL.127)

467はボタン状のつまみを有す蓋で、口縁端部が短くへの字に屈曲する。8世紀末～9世紀前半のものである。468は体部が内湾する7世紀末～8世紀前半の坏、469は体部が外傾して大きく開く8世紀末～9世紀前半の坏である。470は高台の付く壺底部、471は裾部で大きく開く短い脚が付く高坏である。

472は外面に黒漆が塗布された坏で、底部調整は風化により不明瞭ながらヘラ切り後ナデと見られる。深い体部をもつ坏473は体部内外面をナデ、ミガキ調整し、底部はケズリ後ナデである。472は9世紀前半、473は8世紀に比定される。474は甕、475は焼塩土器で口縁部が肥厚し内湾する。

3014・3432・3433 溝 (第187～190図、PL.128～130)

3014溝と3432・3433溝は重複する位置で検出している。走行方向や堆積状況を勘案すると、これらは本来的には同一の溝で、埋積過程で上部を再掘削したものが3014溝ではないかと考える。3014溝出土土器と3432・3433溝出土土器には層の上下を問わず接合する資料が多く、ここでは一括して掲載する。出土土器は一部古い資料も混在するが、全体的には9世紀後半から10世紀前半に比定されるもので、特に土師器の坏皿類が量的に目立つ。



第186図 3438 流路出土土器

第187図476～480は須恵器蓋で、算盤玉状あるいはボタン状のつまみを有すものが主体となる。口縁部形態などからみて7世紀後半～9世紀前半のものである。480には天井部外面に赤色塗彩痕が認められる。二次的に付着したものか。

481～488は高台付坏である。短く端面をもつ高台が付き体部が直線的に立ち上がる481・482や大型の486などは8世紀後半のものであろうが、深い体部をもち底部周縁からやや内側に短い高台が付く483や487はそれぞれ9世紀後半、9世紀前半に位置づけられよう。また、低い高台が底部最外周に接合し、強く外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ488は西伯耆～出雲地域でよく見られるタイプで、9世紀後半のものである。

489～500は坏で、体部が直線的に外傾して開くもの(489～492)、底径が小さく外傾して直線的に立ち上がる、または口縁付近で外反する深い体部をもつもの(493～500)に大別される。前者は概ね9世紀前半、後者は八頭町山田12号窯に形態・法量が近似し概ね9世紀末～10世紀前半のものと考えられる。

第188図501～507は皿で、薄く体部が外傾して立ち上がる501、径が小さい平底から体部が外傾して立ち上がり口縁で外反する502～504、全体的に厚手の506・507があり、前者は9世紀前半、後二者は9世紀後半～10世紀前半のものと考えられる。

508・509は鉢、510・511・513～515は壺、512は高坏、516～518は甕である。512は外面にヘラ記号「×」が認められる。513は体部最大径の位置に突帯を有す壺で、9世紀後半頃に位置づけられる。515は肩が大きく張る長頸壺で、8世紀のものであろう。甕体部片は内面に車輪状あるいは格子目状の当具痕が残る。

519は緑釉陶器の皿で、口縁端部内面に沈線が巡る高橋分類のD類にあたり〔高橋1995〕、畿内産で9世紀後半に比定される。

第189図520・521は土師器の高台付坏、522～第190図541は坏である。

520は底部を回転糸切りしており9世紀後半、521は内外面ナデ調整で底部押圧技法は認められず9世紀前半のものであろう。

坏は浅くて体部が外傾する522・539～541も見られるが、主体となるのは深底で体部が直線的あるいは内湾気味に立ち上がる一群である。後者は基本的に体部外面に回転ナデの痕跡を強く残し、体部内面はナデ調整、底部外面は回転糸切り後未調整である。口縁部が直線的に立ち上がるものと外反するものがある。これらは9世紀末～10世紀前半のものとする。

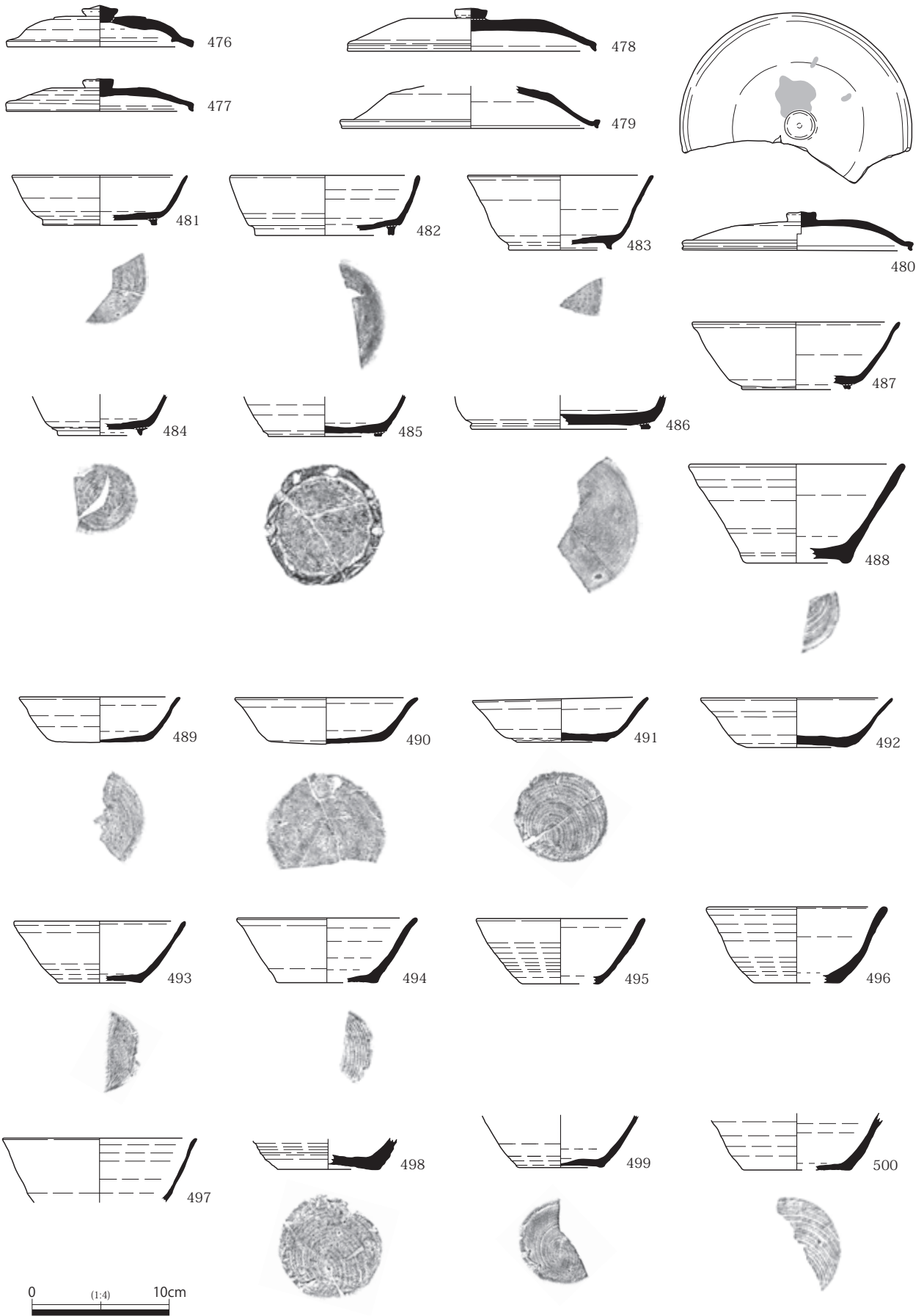
542～549は皿である。内外赤彩しナデ調整で仕上げる542は8世紀末～9世紀前半、径が小さい平底から大きく開く口縁～体部をもち回転台成形によって仕上げられる543～547は9世紀後半～10世紀前半のものである。

550は複合口縁を呈す壺で、古墳時代前期末頃のものか。551～555は甕で全体的に薄いものと厚いものがある。

556～560は焼塩土器である。浅い椀形で口縁端部が面をもつ556・557、口縁端部を丸くおさめる559・560、厚く円筒形を呈す558が見られる。556は型当てによる成形後内面未調整、560は内面に布目が認められる。561は手づくねの土器である。

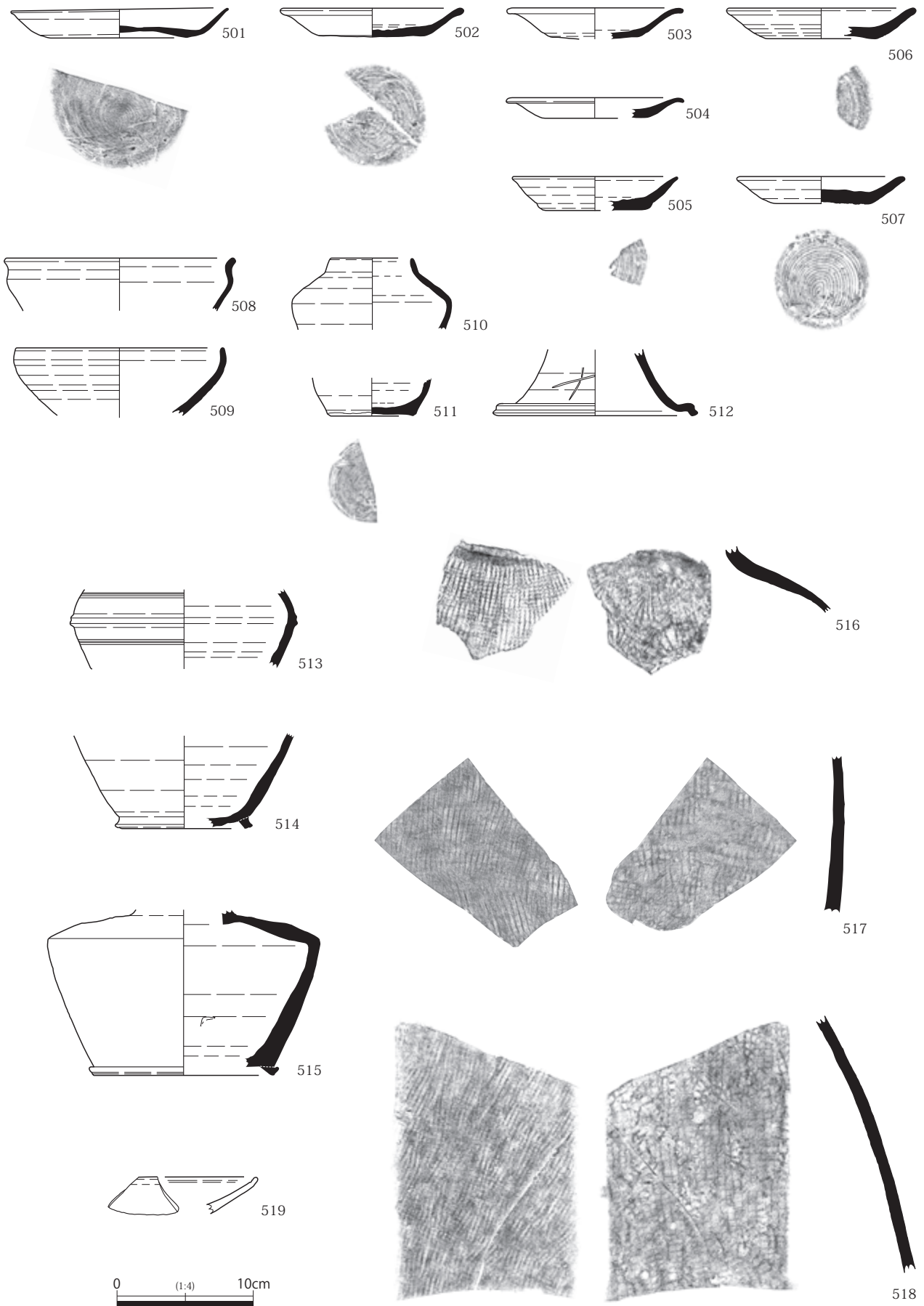
3004 溝出土土器 (第191図、PL.131)

562は須恵器長頸壺、563は円盤状の底部から斜め上に開く体部をもつ鉢である。8世紀のもので



第187図 3014・3432・3433 溝出土土器 (1)

第VI章 3区・4区の調査成果

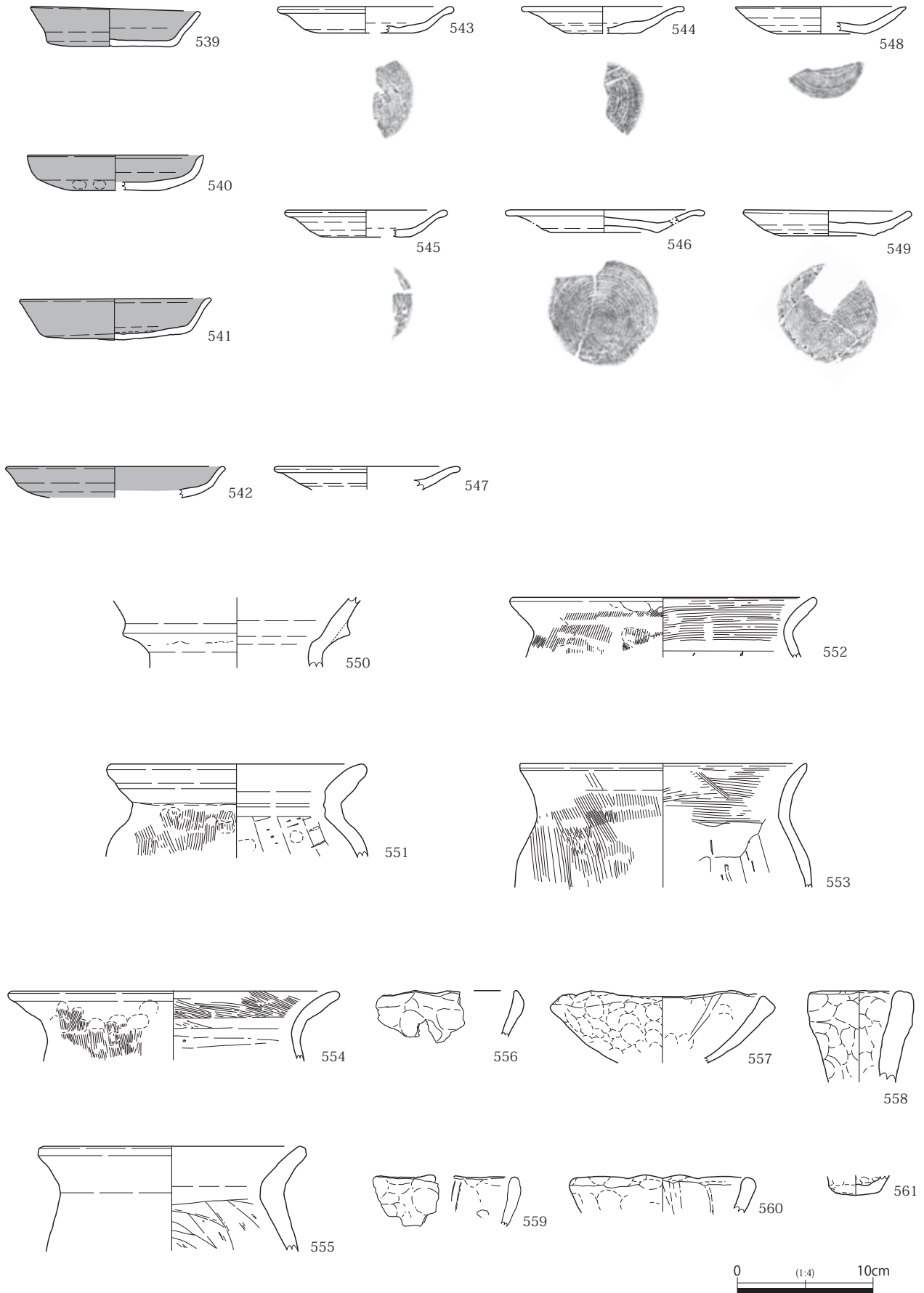


第188図 3014・3432・3433 溝出土土器 (2)



第189図 3014・3432・3433溝出土土器(3)

第VI章 3区・4区の調査成果



第190図 3014・3432・3433 溝出土土器 (4)

あろう。

3086 溝出土土器 (第 191 図)

564 は底部周縁からやや内側にハの字に短い高台が付く須恵器の高台付坏で、8 世紀後半頃のものか。

3090 溝出土土器 (第 191 図、PL.131)

565・566 は口縁部がくの字に外反する土師器甕、567 は高坏である。567 は古墳時代中期のもので、混入品である。

3093 溝出土土器 (第 191 図、PL.131)

568 は内湾する体部の須恵器坏、569 は体部が内湾気味に立ち上がる土師器皿で内面に粗いミガキが暗文状に入る。570 は口縁がくの字に大きく外反する土師器甕である。これらは 8 世紀前半のものとする。

3200 溝出土土器 (第 191 図、PL.131)

571 は須恵器皿、572 は甕である。須恵器皿は 8 世紀末～9 世紀前半のものであろう。

3287 溝出土土器 (第 191 図、PL.131)

573 は須恵器蓋、574～577 は坏、578 は土師器甕である。575 は底部周縁が丸みをもつ。576・577 とともに 9 世紀のものか。

3444 溝出土土器 (第 191 図、PL.131)

579 は古墳時代の土師器の小型壺である。

3474 溝出土土器 (第 191 図、PL.131)

580 は須恵器蓋、581 は長頸壺、582 は甕である。580・581 は 7 世紀末～8 世紀前半に比定される。

3500 溝出土土器 (第 191 図)

583～585 は土師器甕である。585 は底部付近まで遺存しており全体形が把握でき、広口の口縁から続く体部は短く、鍋に近い形状である。

4029 溝出土土器 (第 192 図、PL.131)

586 は須恵器蓋で、口縁部の小片であるが 8 世紀後半のものとする。

4044 土坑出土土器 (第 192 図、PL.131)

587 は高台付坏、588 は体部が大きく開く皿である。587 は口縁付近で外反し始めており、9 世紀前半のものであろう。皿は形態的にみて 9 世紀後半のものか。

4099 溝出土土器 (第 192 図、PL.131)

589 は土師器高台付坏、590 は坏である。589 の高台は端部が丸く短いもので、底部周縁から内側に付く。590 は底部回転糸切りである。9 世紀後半～10 世紀前半のものであろう。

4108 溝出土土器 (第 192 図、PL.131)

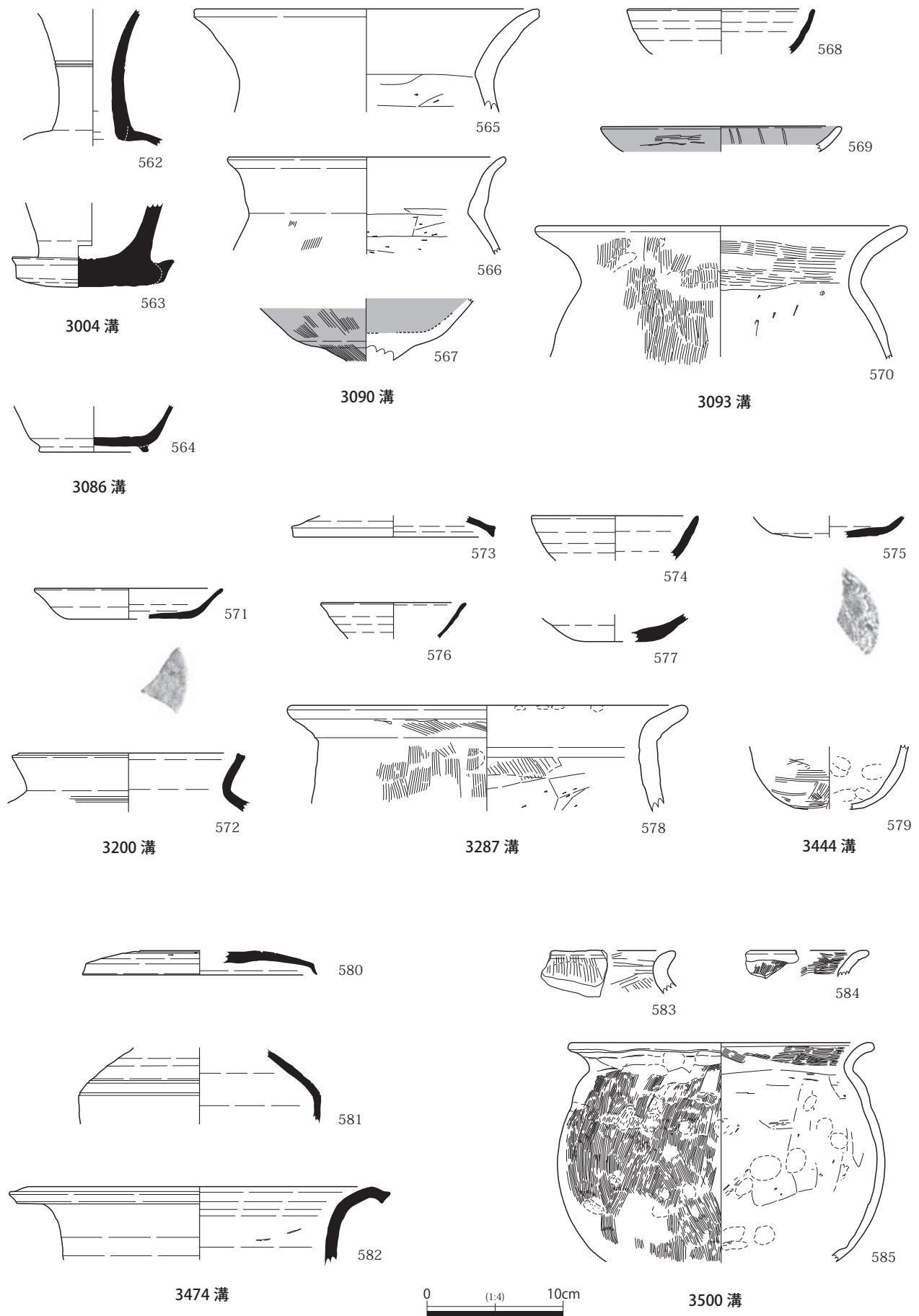
591 は須恵器坏である。底部には回転糸切り痕が残る。形態的に 9 世紀のものか。

4123 溝出土土器 (第 192 図、PL.131)

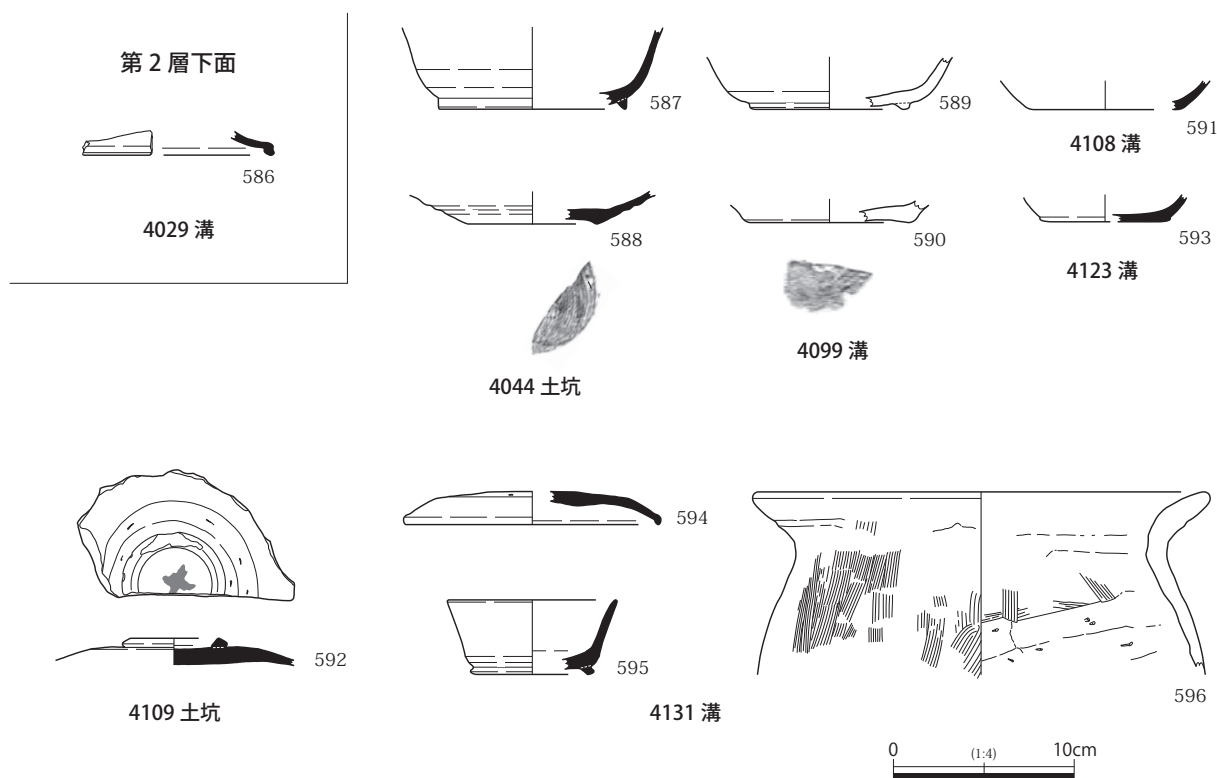
593 は須恵器坏である。底部は回転糸切りで、これも 9 世紀のものか。

4109 土坑出土土器 (第 192 図、PL.131)

592 は 7 世紀末～8 世紀前半の須恵器蓋で、輪状つまみ内側に漆記号「×」が認められる。



第191図 3004・3086・3090・3093・3200・3287・3444・3474・3500 溝出土土器



第192図 4044 土坑・4029 溝・4099 溝・4108 溝・4109 土坑・4123 溝・4131 溝出土土器

4131 溝出土土器 (第192図、PL.131)

594は7世紀末～8世紀前半の須恵器蓋、595は小型の高台付坏で体部及び高台の形態から見て8世紀前半のものとする。

4191 溝出土土器 (第193図、PL.133)

597は須恵器蓋で7世紀前半のものである。598は壺、599は高坏、600は甕で概ね8世紀前半段階までのものであろう。601・602は土師器甕で、602は寸胴形の体部をもつ。

4221 溝出土土器 (第193図、PL.132・133)

603～606は高台付坏で、いずれの高台も高く、体部は内湾して立ち上がるものが多い。7世紀末～8世紀前半に比定できる。603の底部外面には漆記号、605の見込部にヘラ記号「×」、606は底部外面に漆記号「×」が認められる。606は底部静止糸切り後未調整だが、他は回転糸切り後ナデ、またはナデである。607は平底の坏で、粘土紐巻き上げの痕跡が凹凸となって残る。底部調整はナデである。608は長頸壺である。どちらも7世紀末～8世紀前半に比定されよう。609・610は土師器甕で、609は大型品となる。

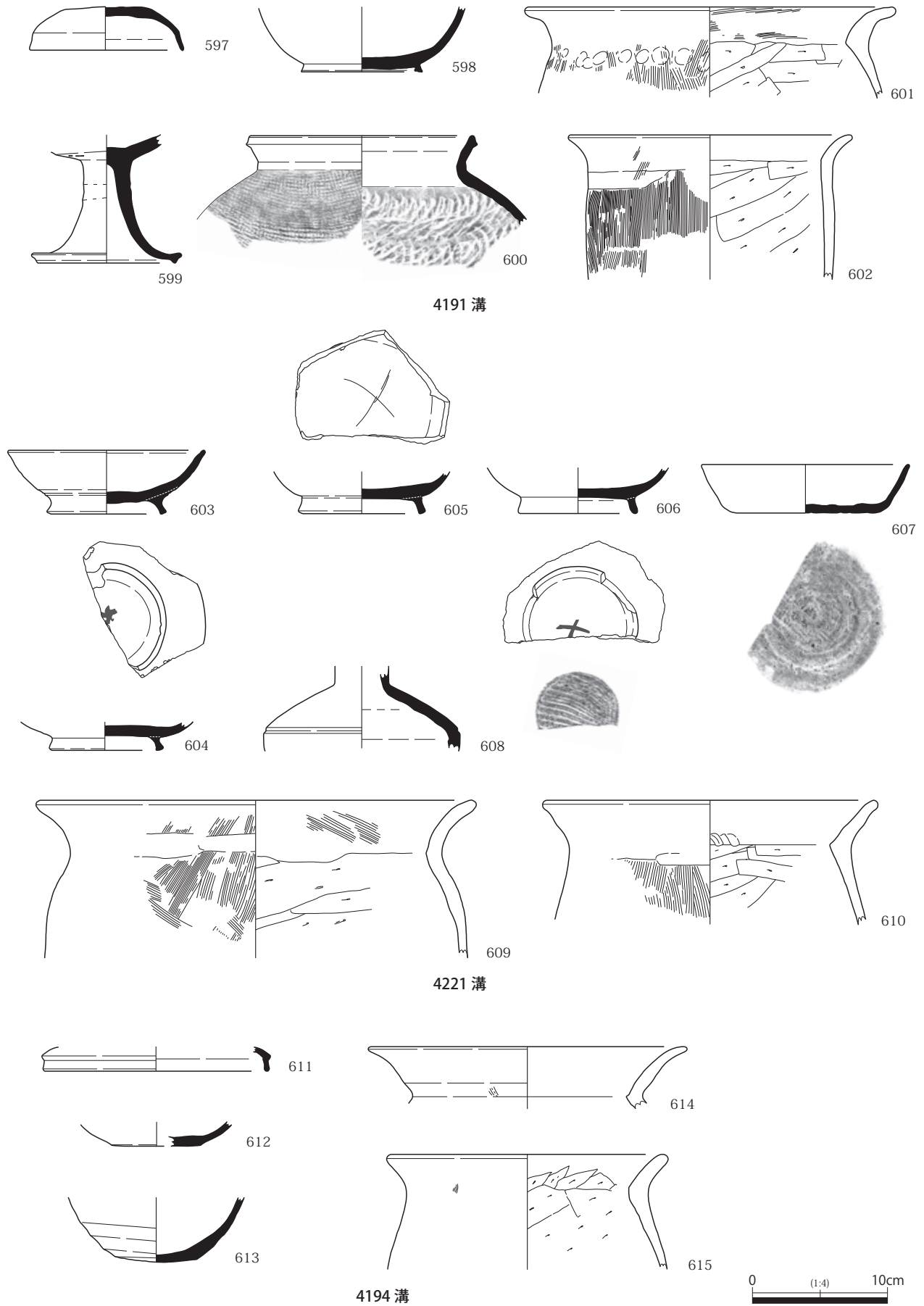
4194 溝出土土器 (第193図、PL.132・133)

611は須恵器蓋、612は坏で、7世紀末～8世紀前半のものである。613は壺であろうか。体部外面を削り調整し、内面には炭素吸着が認められる。614・615は土師器甕である。

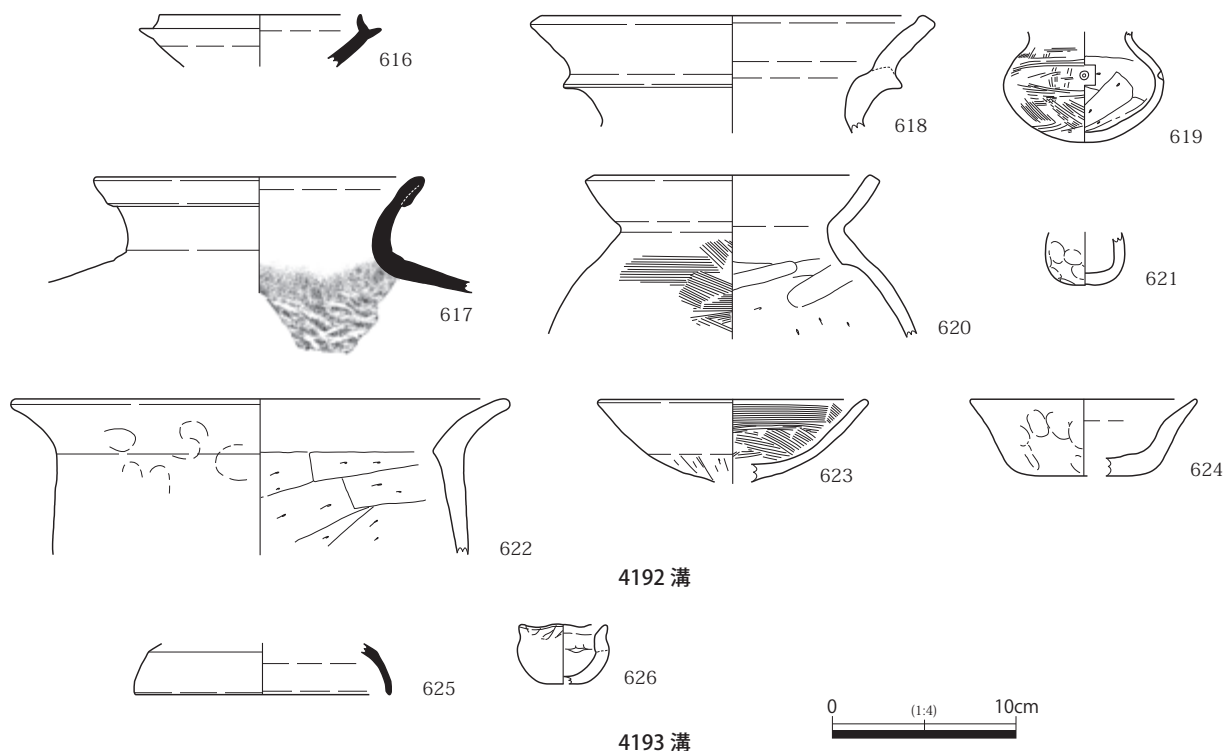
4192 溝出土土器 (第194図、PL.132・133)

616はTK217併行期の須恵器坏で、7世紀前半に比定される。617は横瓶の口縁部と考える。口縁端部は折り返して肥厚させる。

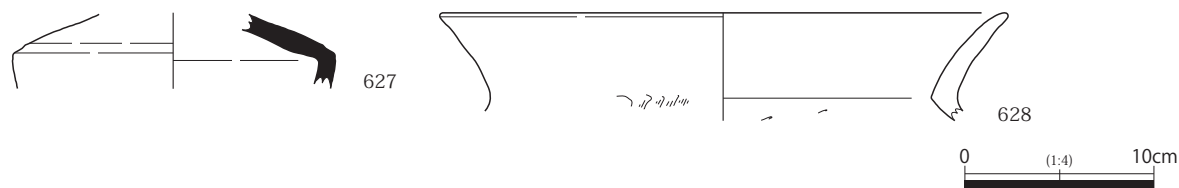
618は土師器壺、619は小型丸底壺、620は甕、621は手づくね土器、623は浅い椀状の高坏で、いずれも古墳時代中期のものとする。622は甕、624は手づくねの鉢であろうか。



第193図 4191 溝・4221 溝・4194 溝出土土器



第194図 4192溝・4193溝出土土器



第195図 4286流路・4290溝出土土器

4193 溝出土土器 (第194図、PL.132)

625はTK43併行期の須恵器蓋で、古墳時代後期のものである。626は手づくねの壺である。

4286 流路・4290 溝出土土器 (第195図)

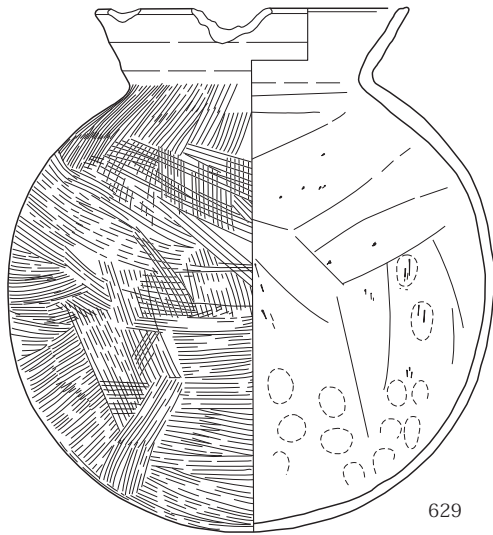
4286流路から出土した627は7世紀末～8世紀前半の長頸壺、4290流路から出土した628は土師器甕で外反して大きく外方へ引き出された口縁をもつ。

3473 流路・3437 流路出土土器 (第196・197図、PL.134)

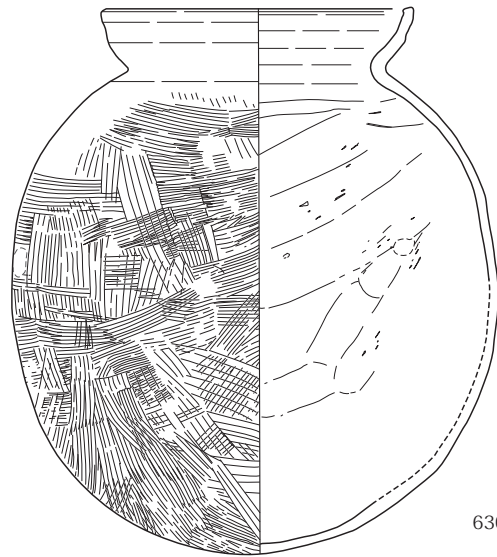
629～643は3473流路出土土器である。

629～633は土師器甕、634～第197図640は高坏、641は小型丸底壺、642は椀である。甕はすべて胴部球形を呈し、外面は粗いハケ調整を施す。口縁部は端部に面をもつ629・633、端部内側にアクセントをもつ630、端部を丸く収める631・632がある。高坏634～636は深い有段高坏で、口縁部がわずかに外方へ屈曲する。638は浅い皿状の坏部をもつ。小型丸底壺は扁球形の体部をもつ。椀642の体部は口縁にかけて内湾する。これらの土器は概ね古墳時代中期後半に比定される特徴を持っている。

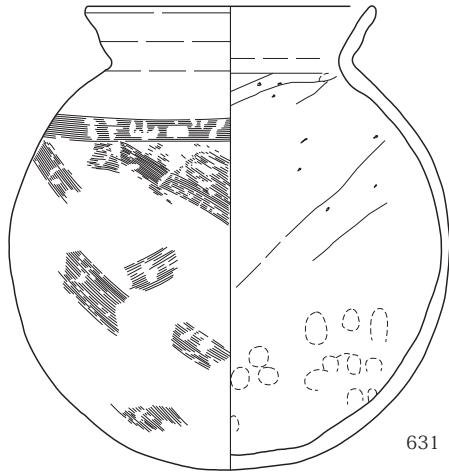
3473流路出土土器は口縁部を内側から打ち欠いたもの(629・641)があり、高坏も坏部が完形でありながら接合可能な脚部がないなど、祭祀行為後に廃棄された可能性が考えられる。



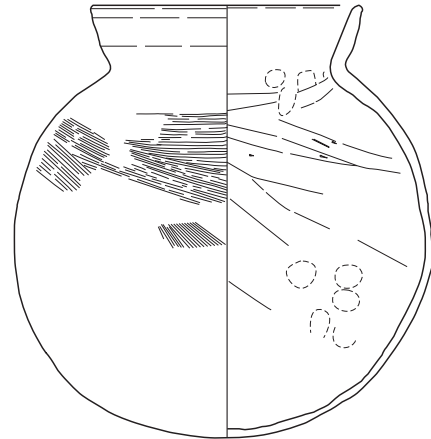
629



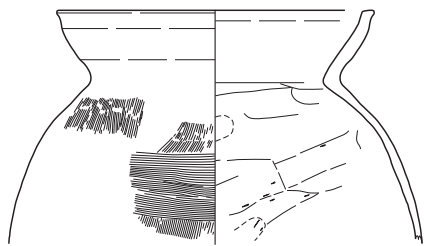
630



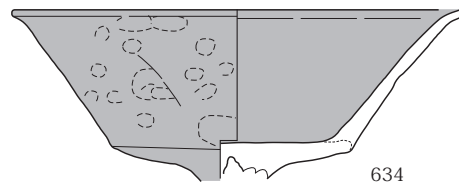
631



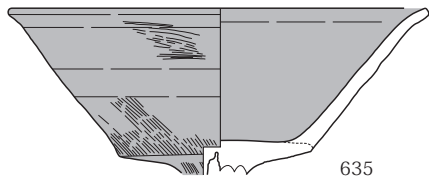
632



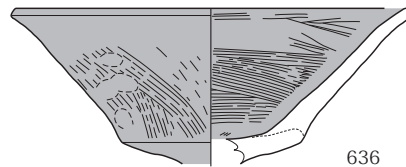
633



634



635



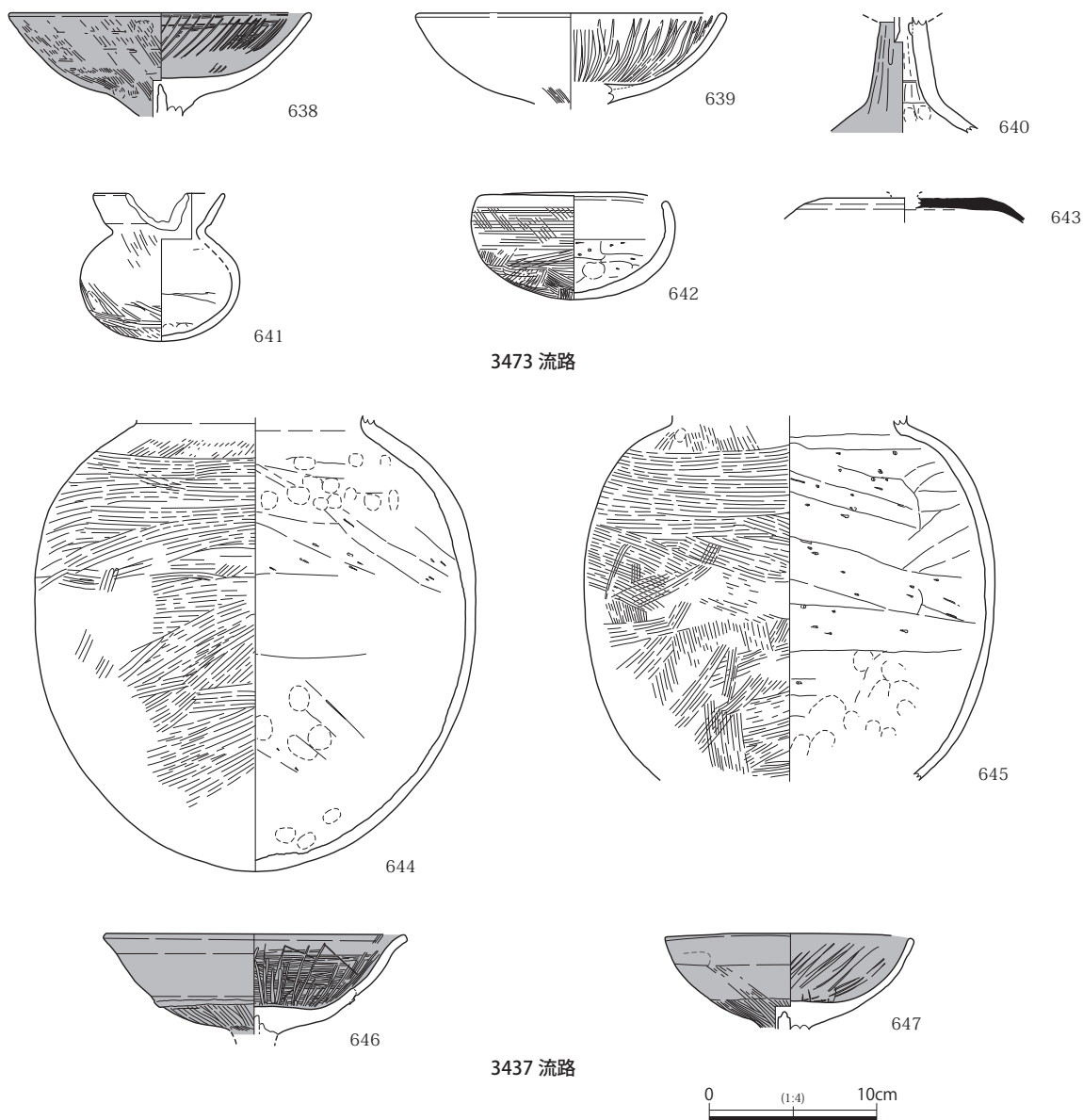
636



637



第196図 3473 流路出土土器



第 197 図 3473 流路・3437 流路出土土器

なお、643 は須恵器蓋で 8 世紀のものと考えられるが、須恵器で出土したのは本資料のみであり、埋土上層の埋め戻し土に掘り込まれた別遺構からの混入品であろう。

644～647 は 3437 流路出土土器である。

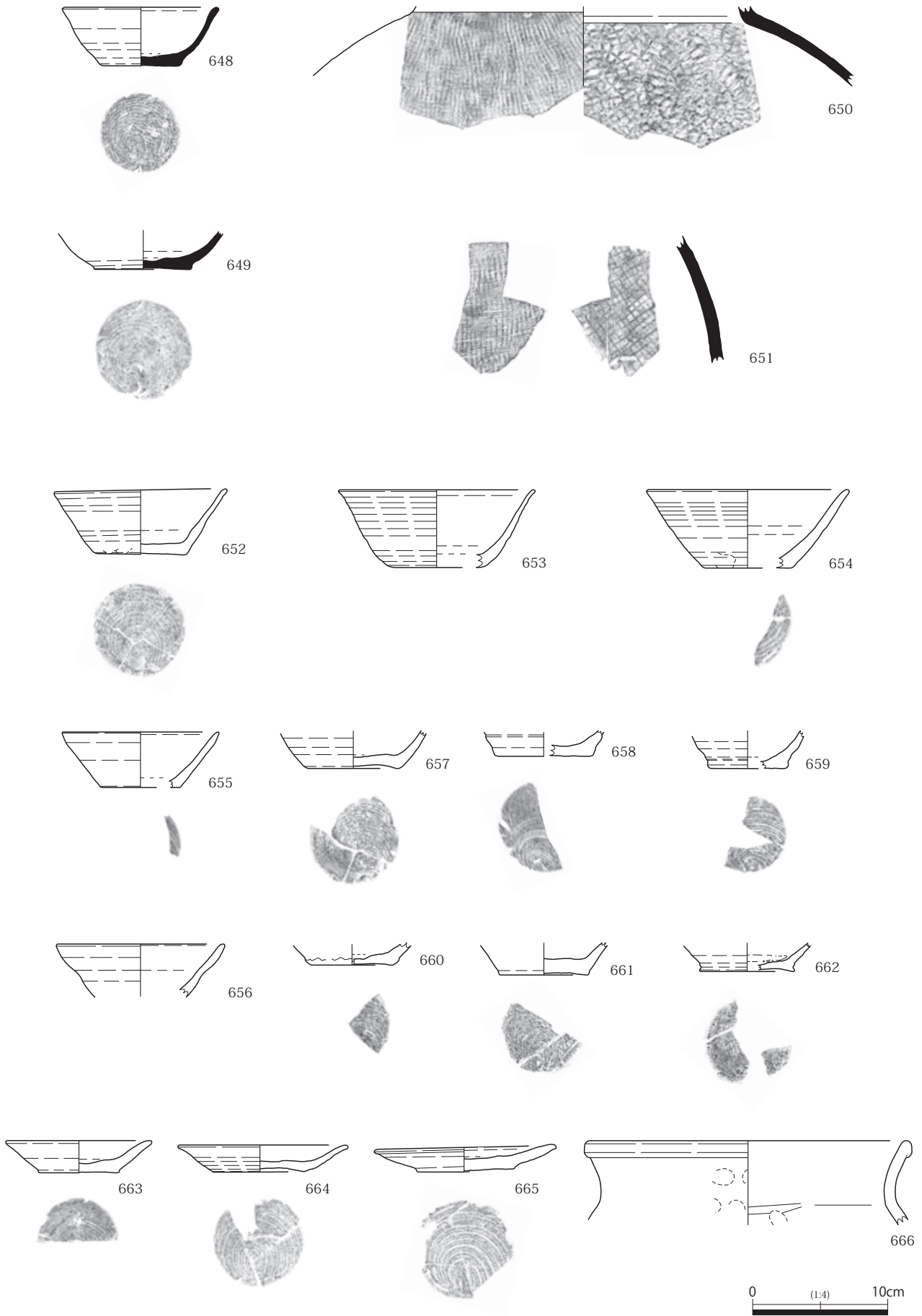
644・645 は甕で、口縁部を欠くがやや長胴を指向する球形の体部で、外面調整は粗い横または斜め方向のハケ、内面調整では肩部に指頭圧痕が見られる。646・647 は高坏で、646 は径の小さな皿状坏部をもつもの、647 は椀状の坏部をもつものである。これらの土器は古墳時代中期後半に比定されよう。

3005 集石・3164 土坑出土土器 (第 198 図、PL.135)

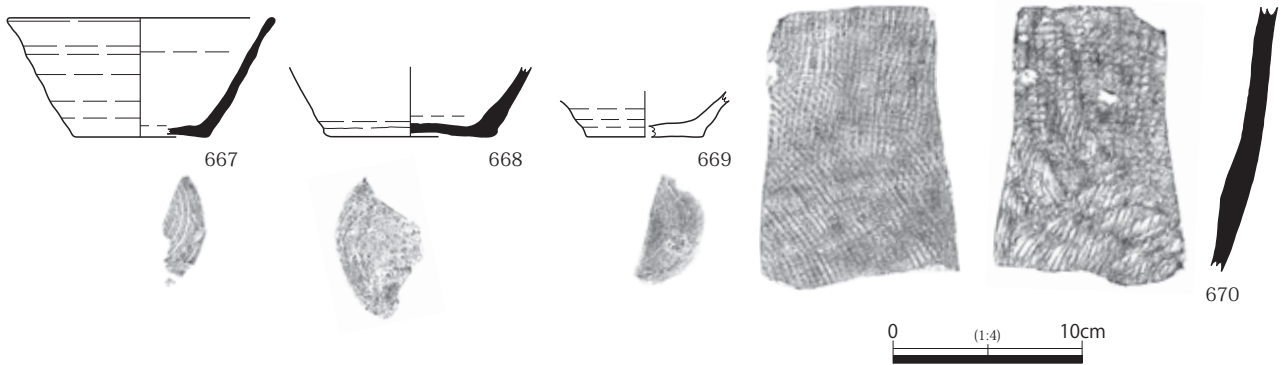
調査過程で集石の隙間及び付近で出土したものを 3005 集石に伴うものとして取り上げたが、その後、下位に 3164 土坑が存在することが明らかとなり、本来的には後者に伴うものとする。

648・649 は須恵器坏で、内湾気味に立ち上がる体部をもつ。10 世紀前半のものとする。650・651 は甕体部片で、内面に格子状の当具痕が認められる。

第VI章 3区・4区の調査成果



第198図 3005集石・3164土坑出土土器



第199図 3009 溝出土土器

652～662は土師器坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデで仕上げられる。底径に対して口径が大きく、口縁に向かい大きく外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ。663～665は皿で、底径と口径の差が小さい小型品663、口縁部が外反する664、口縁に向けて大きく開く665がある。これらの土師器坏・皿類は概ね10世紀前半に比定されると考える。666は甕で、外反する口縁の端部は肥厚して丸く収める。

3009 溝出土土器 (第199図、PL.136)

667・668は須恵器坏で、大きく外傾して直線的に立ち上がる体部をもつ。669は土師器坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデである。これらは10世紀前半に比定される。670は甕体部片で、内面に格子状の当具痕が認められる。

3443 土坑出土土器 (第200図、PL.136)

671は小型丸底壺、672は高坏で古墳時代前期末葉から中期前葉頃のもののか。

3493 土坑出土土器 (第200図、PL.136)

673は長頸壺、674は高坏で、8世紀前半のものであろう。

4316 土坑出土土器 (第201図)

675・676とも土師器甕の口縁部片で、675は口縁端部内面を肥厚させてアクセントをつける。口縁内面にはナデ調整前のハケが見られる。古墳時代中期後半頃のものと考える。

4317 井戸出土土器 (第201図、PL.136)

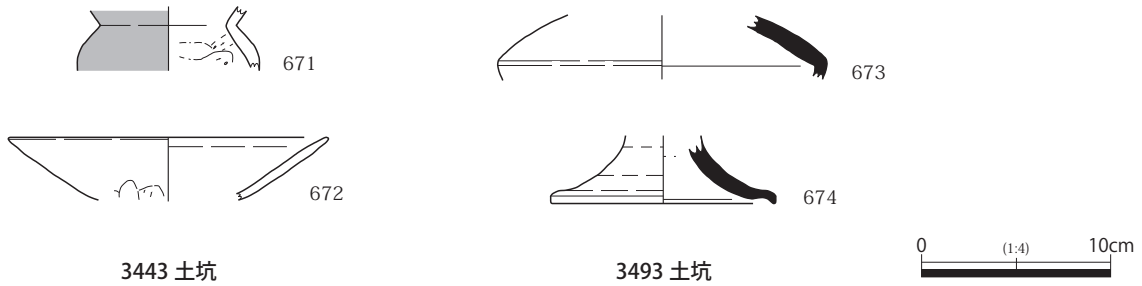
677は埋土下層で出土した完形の土師器甕である。体部は長胴形だが最大径を体部3分の1やや下方にもち球形に近くなっている。くの字を呈す口縁部の端部は内側につまみ出す。古墳時代前期後葉～末頃に比定される。また、677は口縁端部及び体部を1カ所ずつ外側から打ち欠いており、井戸祭祀に伴い投棄されたことが窺える。

678は高坏脚で、裾部で大きく外反する。甕677と同じ頃のものであろう。甕679は4192溝と切り合う埋土上部へ混入したものと考える。

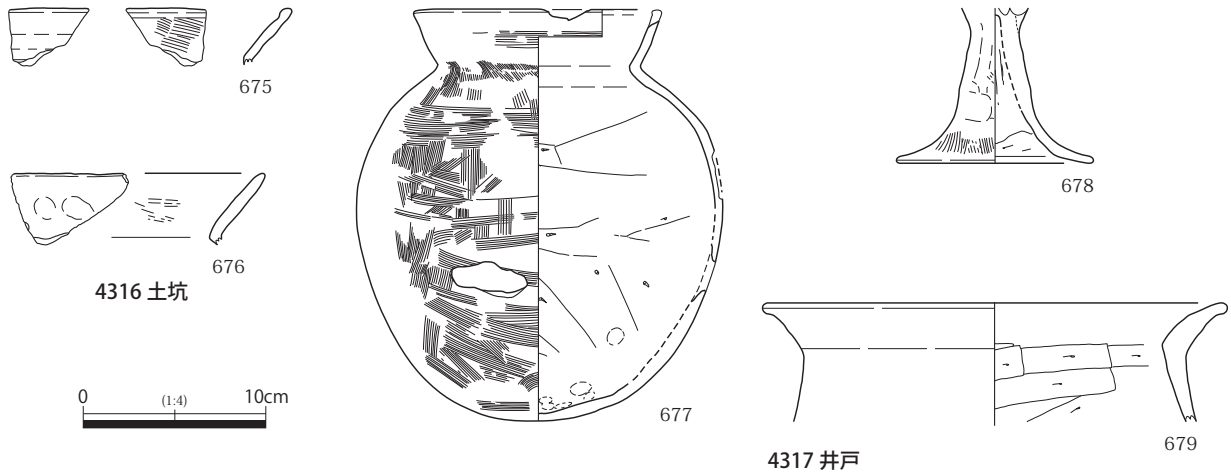
3区ピット出土土器 (第202・203図、PL.137)

3区のピット内から出土した土器のうち、時期が把握できる主なものについて図化、掲載した。

7世紀末～9世紀後半に比定できる資料が多い。3117ピットの686、3232ピットの704といった古墳時代中期の甕は、3437流路及び3473流路埋土からの混入である。焼塩土器は浅い椀状の体部をもつもので、口縁端部に工具ナデによって面をもつ。内面に布目痕を確認できるものが多い。3472ピット



第200図 3443土坑、3493土坑出土土器



第201図 4316土坑・4317井戸出土土器

トから出土した須恵器甕体部片は内面に車輪状の当具痕が認められる。

4区ピット出土土器 (第204図)

4区のパット内から出土した土器のうち、時期が把握できる主なものについて図化、掲載した。すべて第4層下面検出ピットである。

4277ピットの土師器坏716は底部外面ケズリ後ナデ調整で、外面にわずかに赤彩痕が残る。8世紀前半のものである。須恵器坏717も同時期のものであろう。4287ピットの土師器甕718は正位でピット内に埋置されていた。古墳時代中期頃のものか。

3区第4層出土土器 (第205図、PL.138)

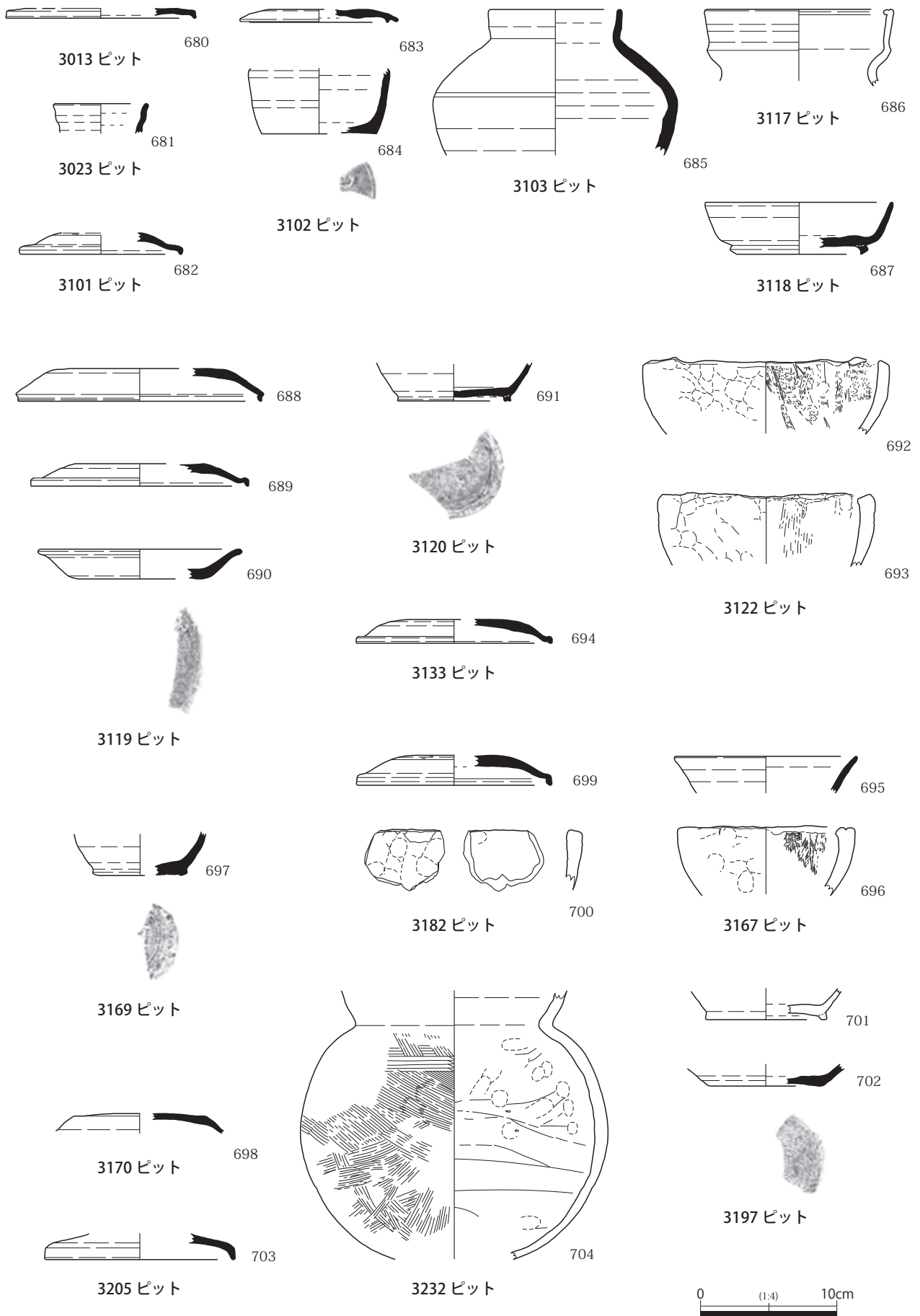
3区で確認した3006溝南肩を除く第4層(整地土)では、7世紀末～10世紀の土器が出土している。第4層を母材とする作土層・第2層との層界は不明瞭で、第2層に帰属する遺物を一部含んでいる可能性はあるが、整地は細かな単位が不明ながら長期間に渡って繰り返し行われたと推測される。

須恵器では坏719・720、高台付坏721、皿722、蓋723、甕724～729がある。7世紀末から10世紀初めまでのものが含まれている。甕体部片の内面には車輪状、格子状の当具痕が認められる。

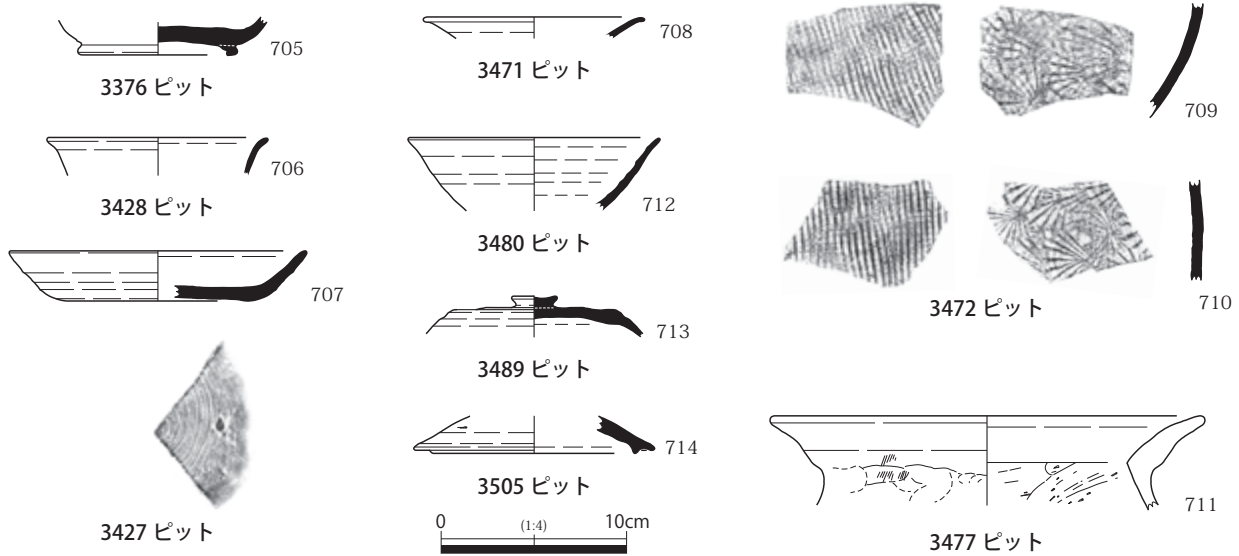
土師器では壺730、高坏731、坏732・733、高台付坏734・735、皿736・737がある。壺と高坏は古墳時代中期頃のものか。坏はどちらも底部に回転糸切りがみられ9世紀のものと考えられるが、733は形態的に10世紀にまで下る可能性がある。高台付坏、皿は10世紀に比定されよう。

738は緑釉陶器の皿で、円盤状高台を有し、軟陶でやや色調の明るい緑色の釉薬がかかる。畿内産で9世紀前半のものとする。

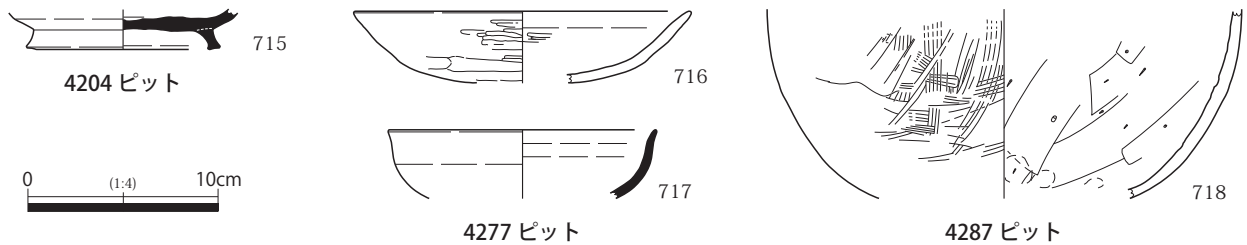
739は焼塩土器で、内面は型押し成形後未調整である。



第202図 3区ピット（個別）出土土器（1）



第203図 3区ピット（個別）出土土器（2）



第204図 4区第4層下面ピット出土土器

3区第5層出土土器（第206図、PL.138）

第5層から出土した土器は少量である。土師器甕は大きく開く退化した複合口縁をもつ740とくの字状口縁の端部を内側につまみ出す741があり、古墳時代中期前半のものと考えられる。

4区第4-3層出土土器（第207図、PL.139）

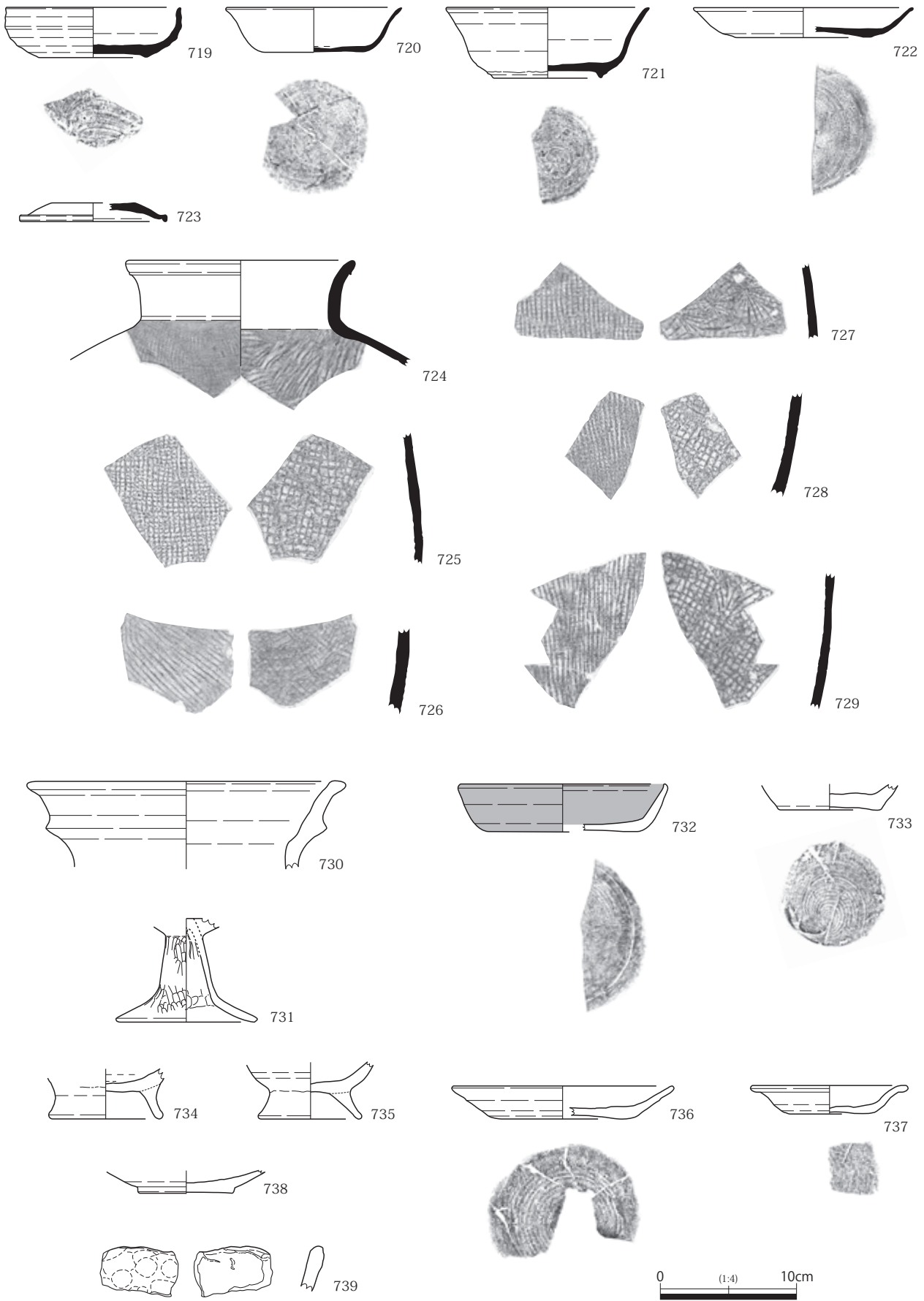
第4-3層には古墳時代前期末～中期前半頃の土師器も多く見られるが、7世紀後半～8世紀の須恵器を含む。須恵器は出雲地域に系譜をもつ内湾体部の坏744のほか、ハの字状で高い高台をもち体部が浅い高台付坏、体部碗形の高台付坏などで構成される。これらは岡田編年出雲Ⅲ期の特徴を有する一群で、出雲Ⅳ期まで下ると考えられるものが含まれていない。よって、第4-3層の下限は8世紀前葉と考える。

土師器では古墳時代前期末～中期前半頃の小型丸底壺751、退化した複合口縁の甕752・753、高坏759～761があり、第4-3層下面で検出した掘立柱建物の時期とも合致する。

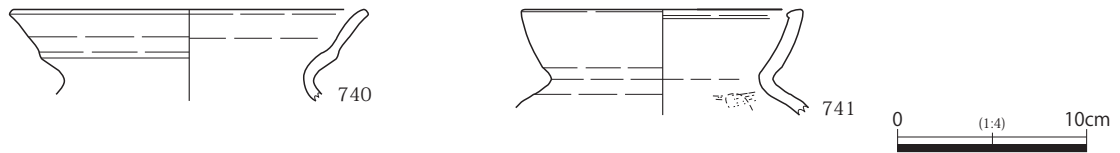
762は甑の把手である。

4区第4-4層出土土器（第208図、PL.139・140）

第4-4層では土師器の出土量が多い。須恵器は少量で、7世紀末～8世紀前葉の蓋763、高台付坏764・765や甕766～768がある。769は弥生時代後期後葉の甕底部で、狭小な平底を呈す。土師器は古墳時代中期頃の甕770～773、くの字に大きく外反して立ち上がる口縁をもつ甕774～779がある。780は壺の頸部破片と考えられ、内面は黒漆と見られる付着物が残る。



第205図 3区第4層出土土器



第 206 図 3 区第 5 層出土土器

4 区第 4-2 層出土土器（第 209 図、PL.140・141）

第 4-2 層で出土した土器は 7 世紀末～8 世紀前半の須恵器、土師器が主体となる。

須恵器蓋 781 は TK217 併行期、7 世紀前半のものである。蓋 782 は輪状つまみ内側に漆記号「×」、高台付坏 784・785 は底部外面にヘラ記号が認められる。高台付坏 786・787 は平底から外傾して直線的に立ち上がる浅い体部をもつ。坏 788 も同様の体部形態である。789 は高坏、790 は椀であろうか。

土師器坏 791～793 はいずれも底部ナデ調整で仕上げる。791 は内面に放射状の暗文、792 は内面見込部に螺旋状の暗文の痕跡が認められる。8 世紀前半に収まるものであろう。

4 区第 4-1 層出土土器（第 210 図、PL.141・142）

第 4-1 層は、第 4-2 層上部が攪拌された作土部分または第 6 層上に堆積した土壤層であるため、出土土器は基本的に 7 世紀後葉～8 世紀前半のものを主体とするが、後世の耕作時に混入したと見られる 9 世紀後半頃の土器も含まれる。

796～800 は須恵器蓋で、796 は体部内面にヘラ記号「×」、798 は天井部外面に漆記号、799 は体部外面に漆記号「×」が認められる。801 は MT15 併行期、6 世紀前半の坏である。802～807 は高台付坏である。803 は体部外面に○印のスタンプ文が施されており、804 には底部に静止糸切り痕とヘラ記号「×」が認められる。808 は小片だが坏の口縁部と考えられ、外面にヘラ記号「×」が入る。810 は鉢、811 は高坏か。813 は壺で、鳥越山 2 号窯出土資料に近似し、8 世紀後半頃のもののか。

814 は土師器坏だが、内外面とも黒色塗彩される。形態的に 9 世紀後半のものか。816 は底部回転糸切り、体部回転ナデで、9 世紀後半以降のものであろう。

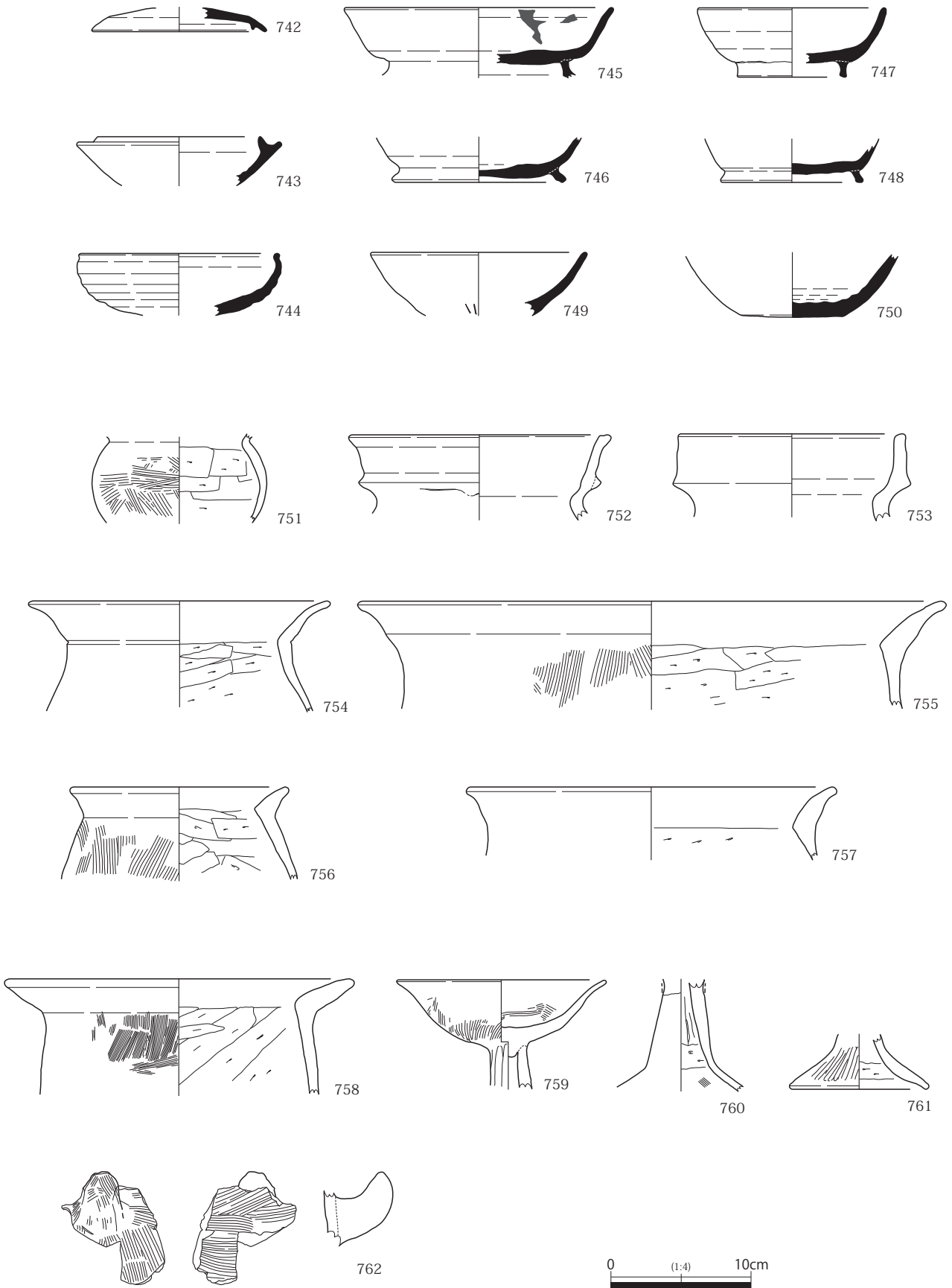
特筆すべきものとして、軒丸瓦 821 がある。当遺跡で出土した軒丸瓦は本資料 1 点のみである。単弁十二弁蓮華文の軒丸瓦で、花卉は肉薄で細長く、中肉の子葉を置く。間弁は三角形もしくは楔形を呈し、中房まで達していない。細い圏線を巡らせた中房には、1 + 6 の蓮子を配す。周縁はやや高い素文の直立縁である。この瓦は鳥取市吉岡大海廃寺出土軒丸瓦、同鹿野町寺内廃寺軒丸瓦 I C 類と同範、同気高町上原遺跡及び上原南遺跡出土軒丸瓦 I A 型式と同系〔石毛 2003、岸本 2003〕と考えられる。同範と考えられる吉岡大海廃寺資料の瓦当裏面調整が格子目叩きであるのに対し、当資料はナデ調整であるため寺内廃寺軒丸瓦 I C 類と共通する。7 世紀末～8 世紀初頭のものである。

4 区第 4 層出土土器（第 211・212 図、PL.142～145）

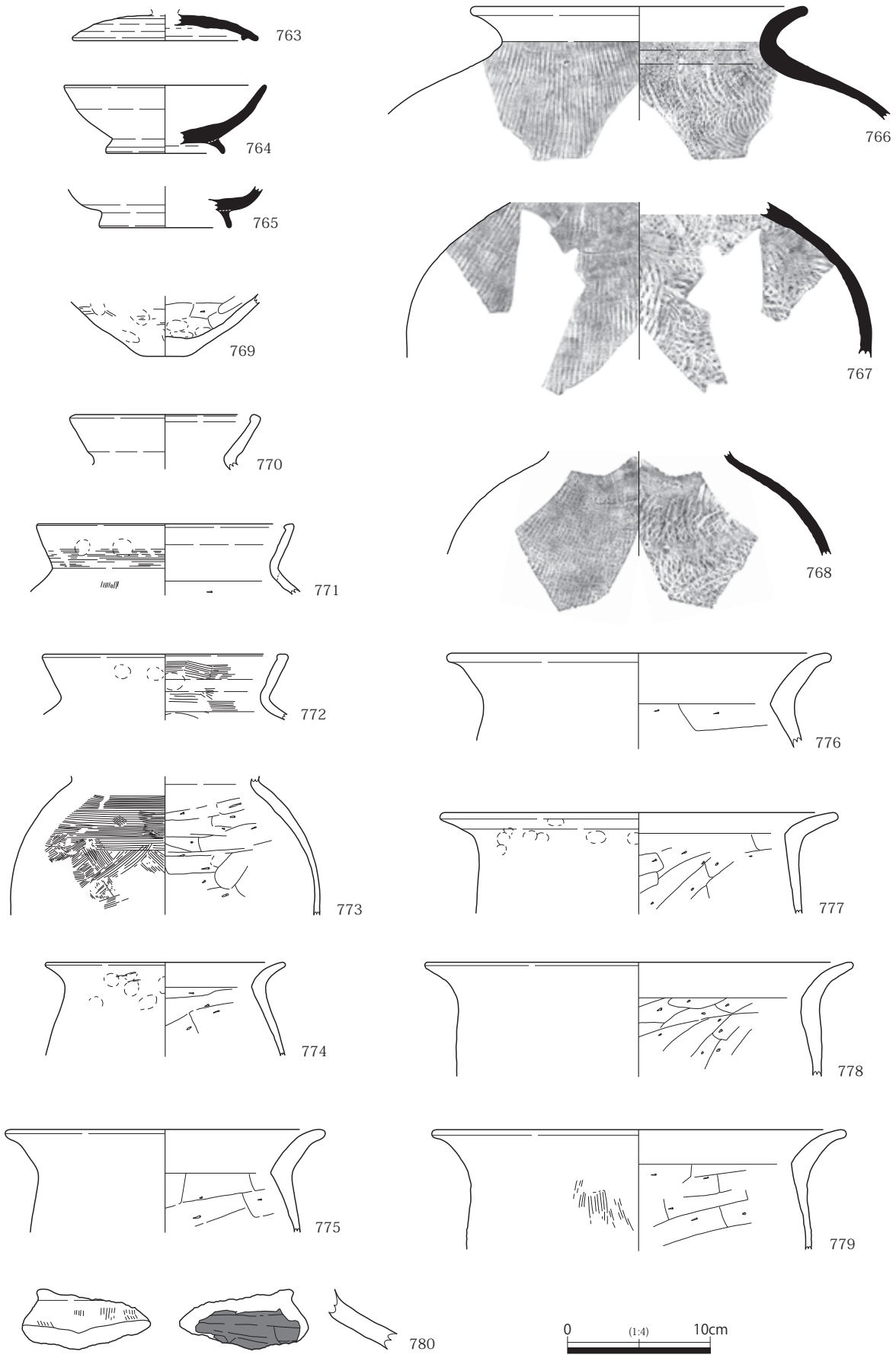
4 区第 4 層は主に Y=-16,290 ライン以東及び 2D-8a グリッドに広がる層で、概ね 7 世紀末～8 世紀前半の土器を含む。

822 は弥生時代後期後葉の甕で、口縁内外面ともヨコナデで仕上げる。

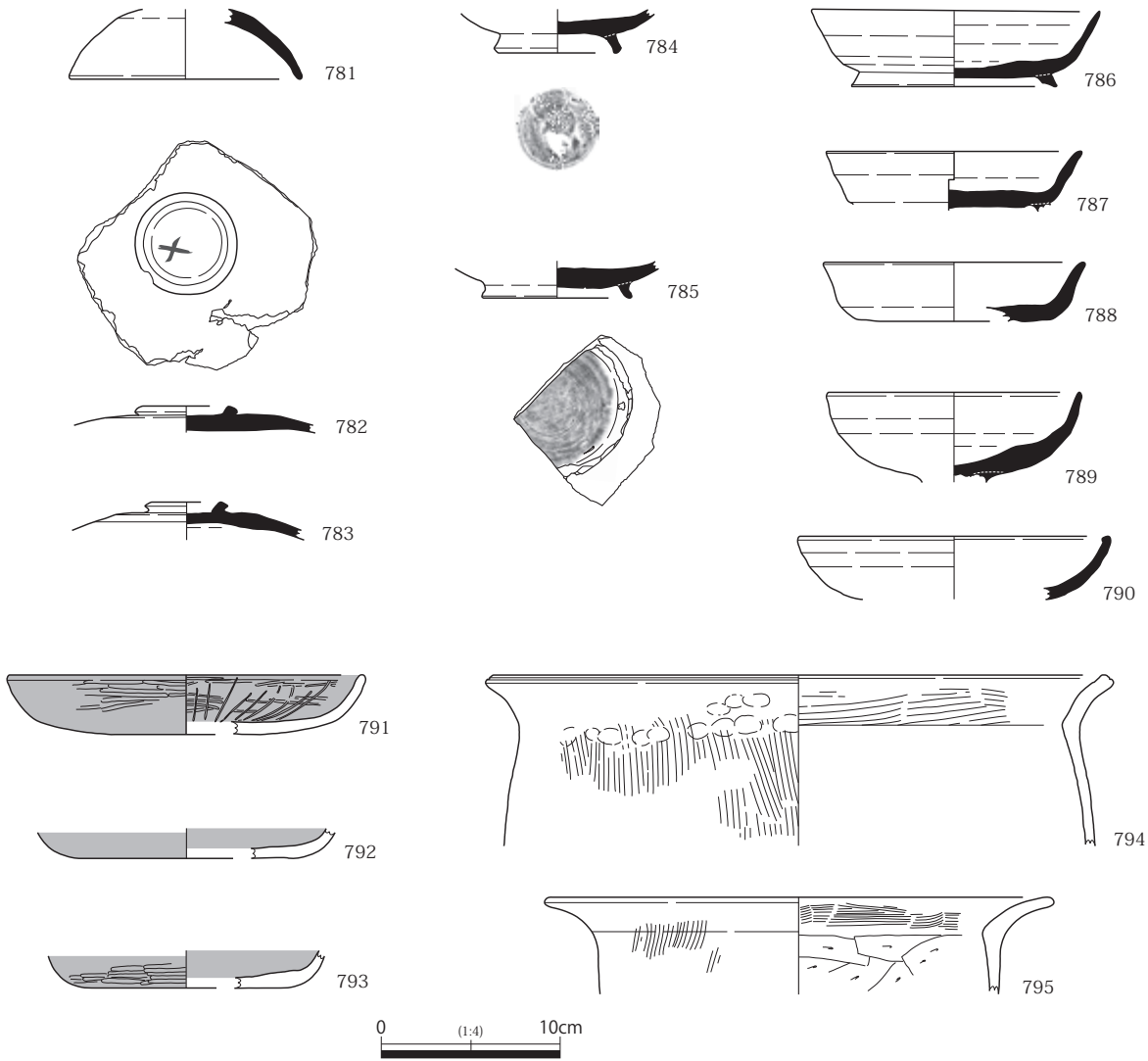
823～828 は須恵器蓋で、7 世紀後半～8 世紀前半のものが見られる。827 は天井部内面にヘラ記号「×」、828 は体部外面にヘラ記号「×」が認められる。829～832 は高台付坏で、829 は底部外面に静止糸切り痕と○印のスタンプ文が認められる。832 も底部外面にヘラ記号と高台に整形痕が認め



第207図 4区第4-3層出土土器



第208図 4区第4-4層出土土器



第209図 4区第4-2層出土土器

られる。坏 833 の底部外面にもヘラ記号「×」がある。

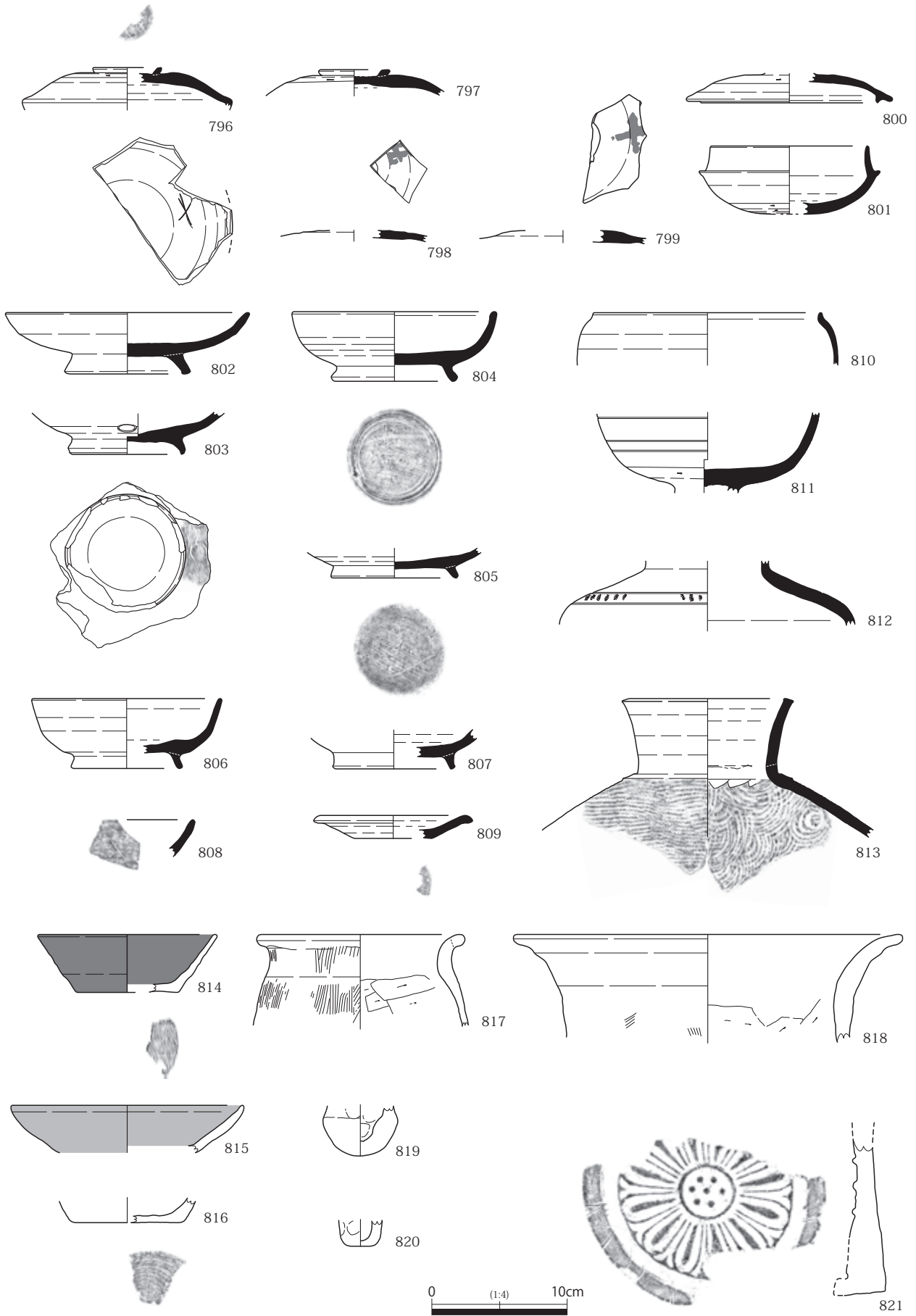
834 は高台が付く寸胴の体部から口縁が外反して立ち上がる器形をしており、壺であろうか。高坏には浅い椀形の坏をもつ835と平底から外傾して直線的に立ち上がる坏をもつ836の2者が見られる。838 は甑である。

839～843 は土師器甕で、くの字状の口縁端部を内側につまみ出す839は古墳時代中期前半のものである。844 は胴部片で、外面にヘラ記号が認められる。846 は甑かと考えられたが、内外面に赤彩痕があり丁寧なナデで仕上げられている。847 は内外面赤彩される坏、848 は皿で、底部ケズリ後にナデ調整されており8世紀前半のものである。849 は口縁端部を外方へわずかにつまみ出しており、9世紀頃のものか。退化してX字形となった鼓形器台850・851は接合しないが法量及び調整、胎土から見て同一個体と考えられ、古墳時代中期前半に比定される。

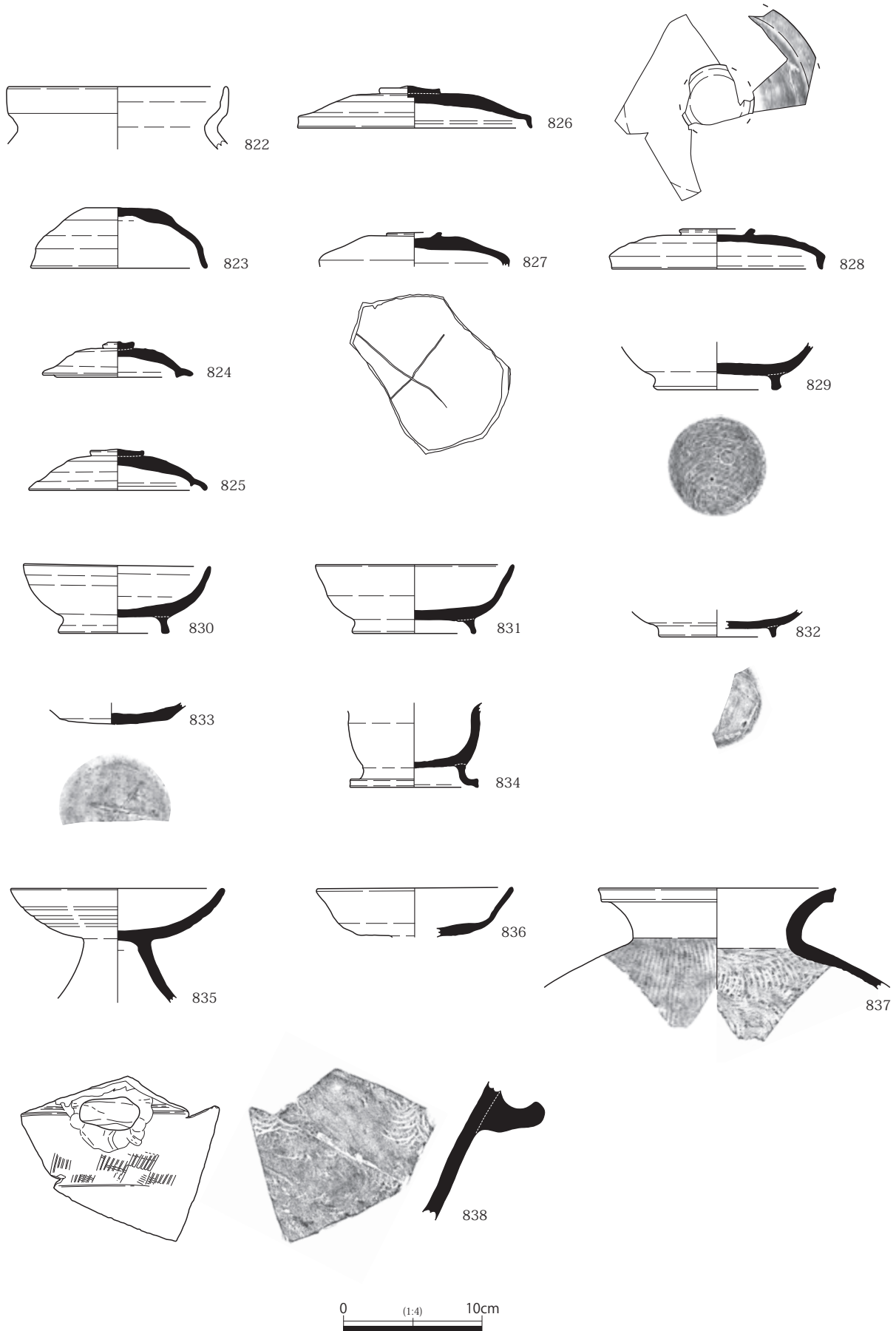
852 は甑、853 は焼塩土器、854・855 は丸瓦である。

3区第3層出土土器 (第213図、PL.145)

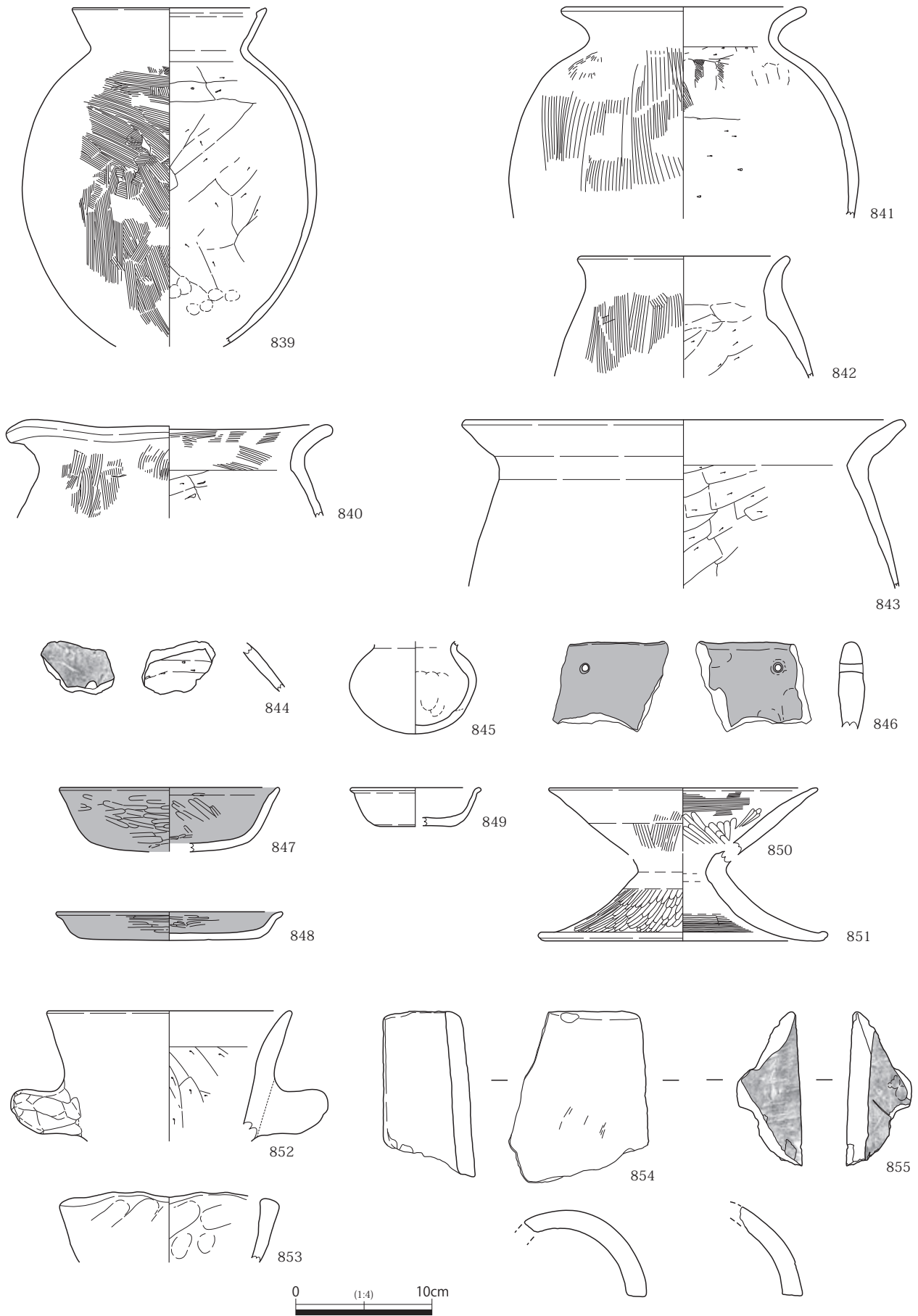
856 は深底の須恵器坏で、10世紀前半のものである。858 は口径4.1 cm、残存高4.7 cmの小型の平瓶で、8世紀後半頃のものか。甕860・861は内面に格子状の当具痕が残る。



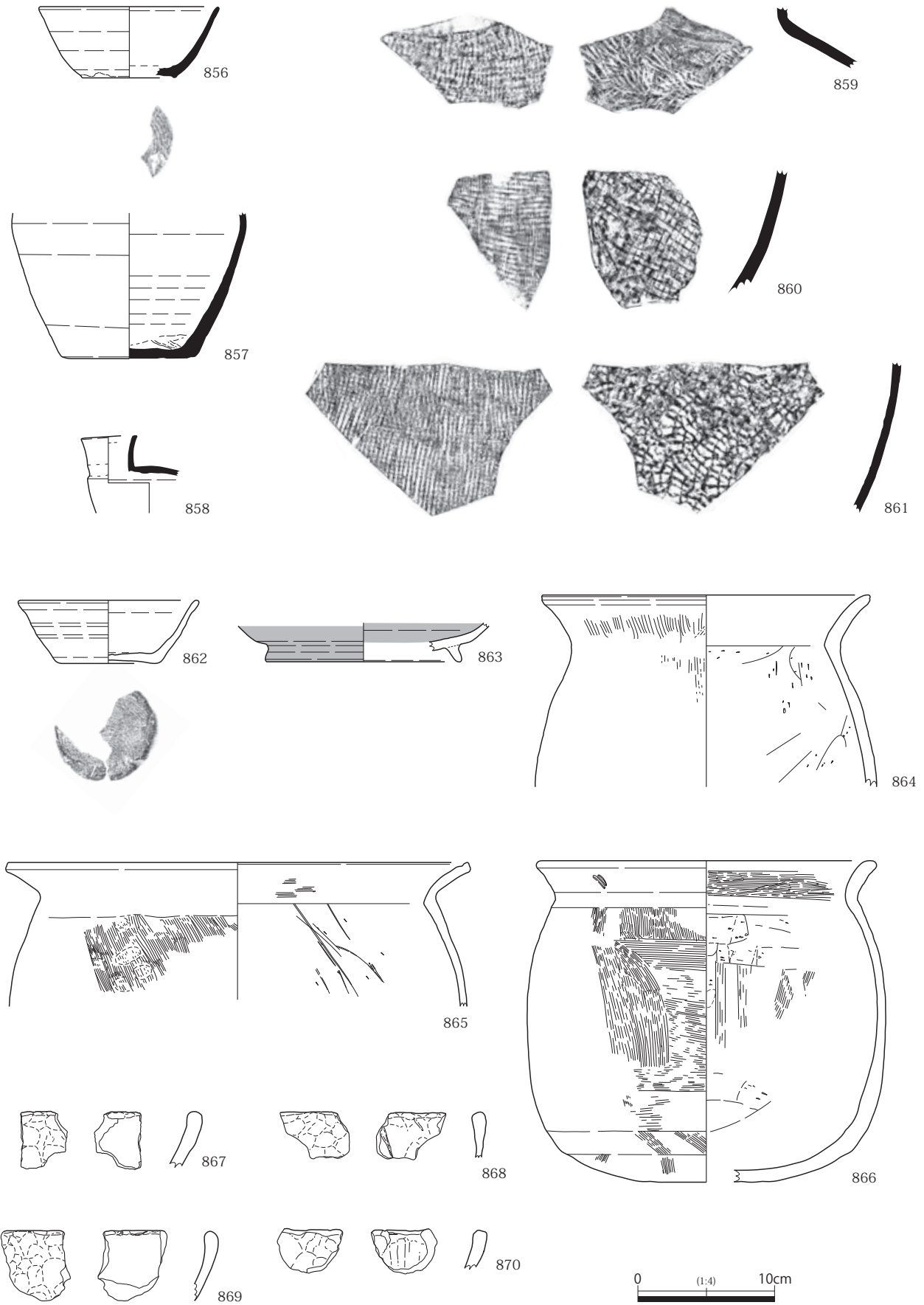
第210図 4区第4-1層出土土器



第211図 4区第4層出土土器(1)



第212図 4区第4層出土土器(2)



第213図 3区第3層出土土器

土師器坏 862 は底部回転糸切り、体部回転ナデで 10 世紀前半、高台の付く皿 863 は 9 世紀のものであろう。甕 866 は寸胴の体部をもち鍋に近い形態となる。平底だが体部との境界は不明瞭で丸みをおびる。

焼塩土器 867～870 は口縁部を肥厚させるもので、内面はナデもしくは型押し未調整である。

4区第3層出土土器（第 214・215 図、PL.146・147）

871 は風化が顕著だが弥生時代終末期の甕である。

872～880 は 7 世紀末～8 世紀前半の須恵器蓋、高台付坏で、ヘラ記号が体部、底部に入るものが目立つ。873・876 には○印のスタンプが認められる。881 は 8 世紀末～9 世紀前半の高台付坏で、体部にヘラ記号とみられる線刻が確認できる。879 は底部に漆記号が見られる。887 は壺の蓋である。

土師器坏は回転台成形によるもの（890・891・892・893）が主体となる。10 世紀に比定されよう。894 は底部ヘラケズリで体部内外面とも細かいヘラミガキで仕上げる。8 世紀前半のものである。皿 895 は底部回転糸切り後ナデ調整して高台を貼り付けている。9 世紀のものと考えられる。898 は甗で、体部下方に穿孔しており、外面上部には煤が付着している。899 は内黒の黒色土器碗で、底部に断面三角形の低い高台を貼り付け、10 世紀に比定される。

900 は玉縁口縁をもつ白磁の碗で、灰黄色の釉がかかる。白磁碗Ⅳ類〔横田・森田 1978〕に該当し、11 世紀後半～12 世紀前半のものである。901 は丸瓦で、凹面の調整はハケか。

焼塩土器は内湾する口縁部を肥厚させる厚手の 902、口縁端部を内側に大きく肥厚させる 903、全体的に薄手で口縁端部に面をもつ 904～907、口縁端部が内湾し先細りとなる 908 などバリエーションが見られる。902 は焼塩時の被熱により器面が荒れている。

3区第2層出土土器（第 216～218 図、PL.147～149・151）

3区第2層では多量の土器が出土している。ただ、第2層が遺存する範囲は第4層が広がる範囲ともほぼ合致し、本章第1節でも述べたとおり第2層耕作時に第4層に帰属する遺物を巻き上げている可能性が高い。そのため、第2層自体は中世の作土層と考えられるが古代の遺物を多量に含む。

第 216・217 図は第 2-2 層で出土した土器である。須恵器蓋 911 の天井部には静止糸切り痕とヘラ記号、912 には天井部内面にヘラ記号が認められる。高台付坏 913 見込部、914 底部外面にもヘラ記号が入れられている。高台付坏は 8 世紀後半、9 世紀後半のものが見られるが、坏は 922～925 など厚手で深底のものが主体で 10 世紀前半に比定される。皿は底部から体部が大きく開き、9 世紀後半～10 世紀前半のものと考えられる。931 は壺肩部の把手、933 は三角形把手が付く壺で土師器に見られるような薬壺形となるものか。932 は外面にカキ目が入り鉢と考えられるが、横断面形は楕円形を呈す。壺 935 は外面に格子状のタタキ痕が見られる。

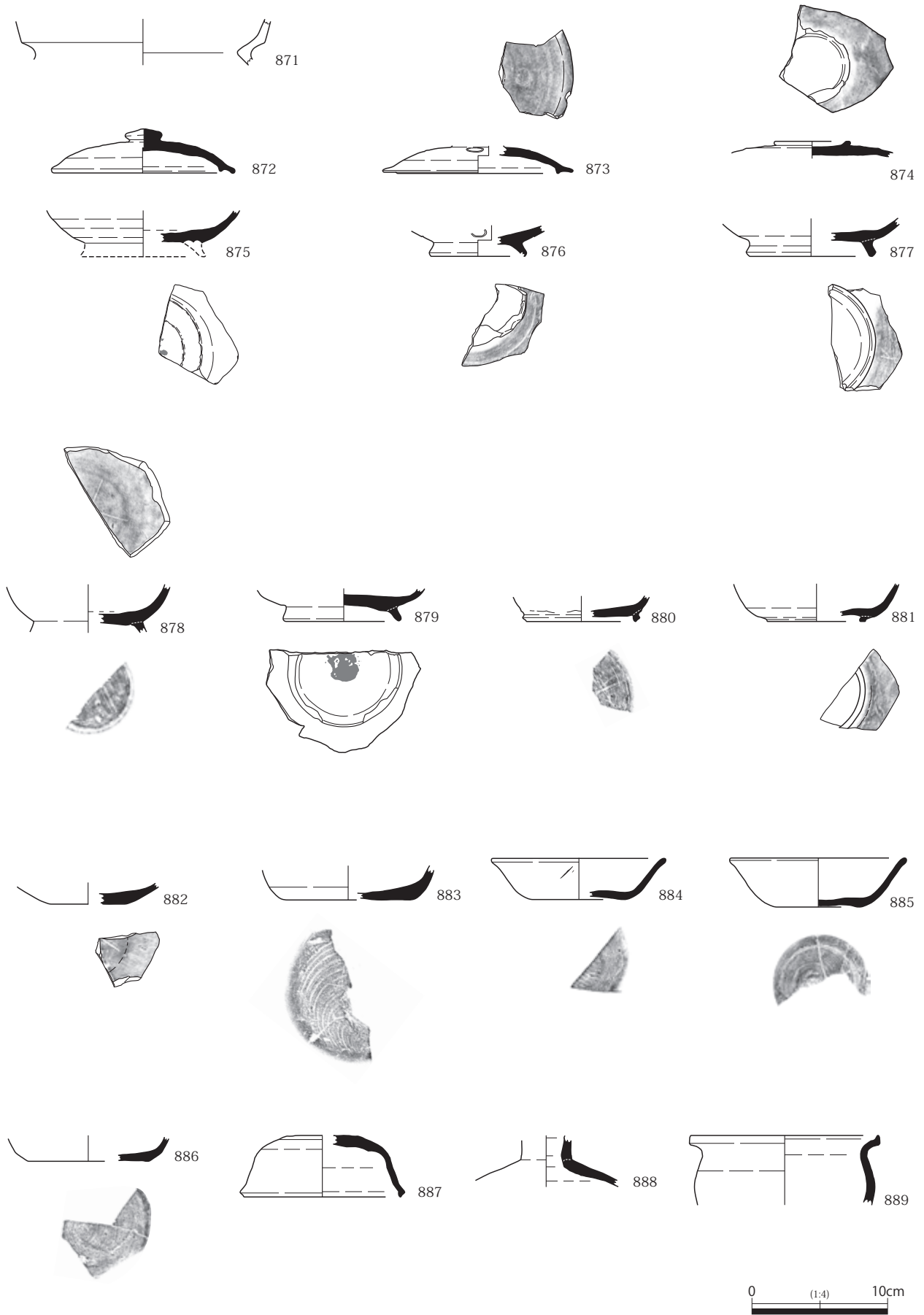
土師器坏・高台付坏・皿は回転台成形されたもので、概ね 10 世紀前半に比定されるだろう。948 は内黒の黒色土器碗である。954 は手づくね土器で鉢となろうか。

958 は灰釉陶器の皿で、内外面とも施釉し、外面には回転ヘラケズリが確認できる。9 世紀頃のものか。959 は緑釉陶器の皿で、輪状高台をもち高台部は露胎となる。畿内産で 9 世紀後半のものである。

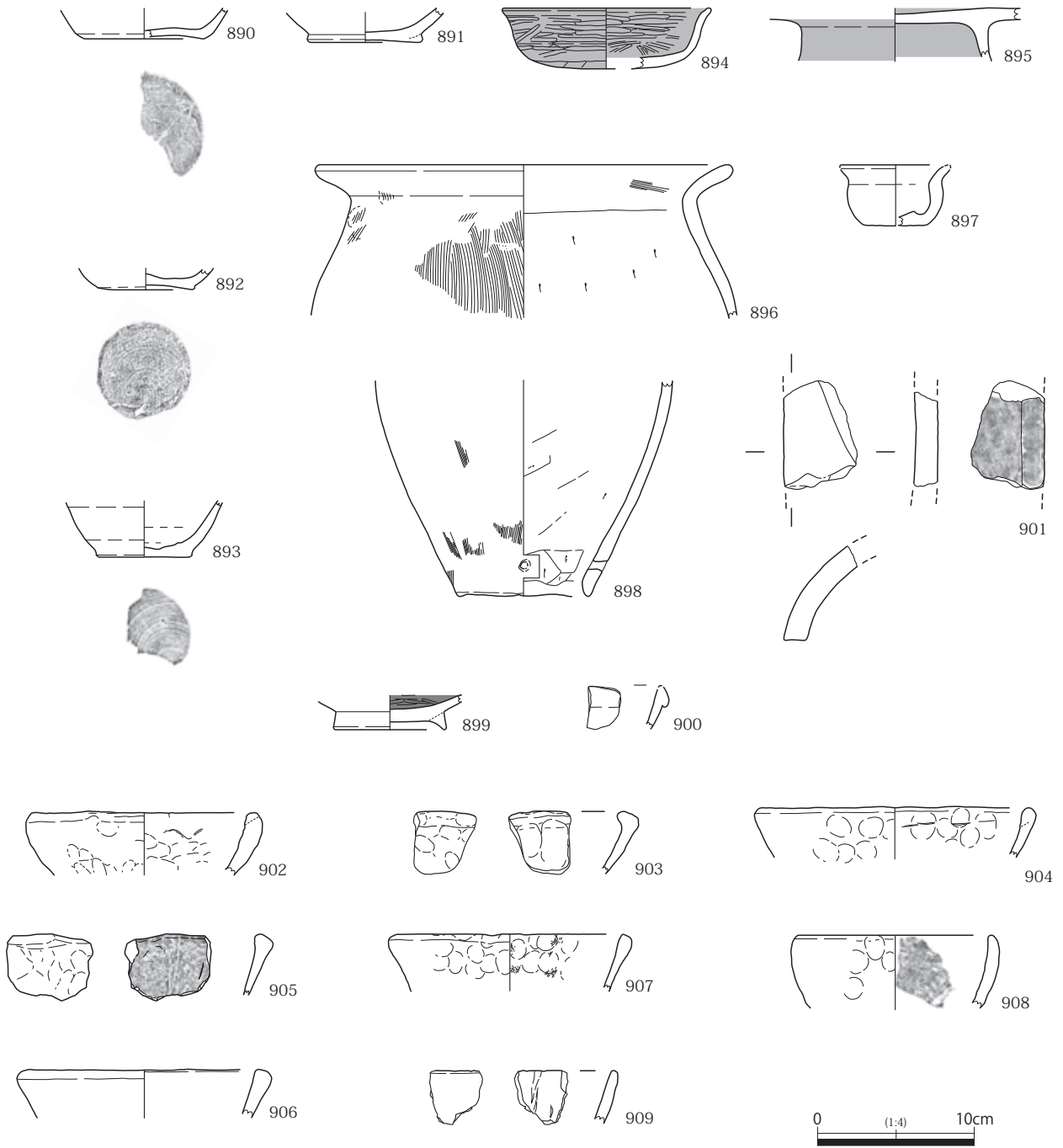
第 218 図は第 2-1 層で出土した土器である。須恵器蓋 960、つまみ出したような細く低い高台をもつ坏 961 はヘラ記号が認められる。土師器坏は回転台成形され 10 世紀前半のものである。

4区第2層・第1層・客土出土土器（第 219 図、PL.148・150）

須恵器高台付坏 964 は底部外面に○印のスタンプ文が施される。966 は焼成から見て瓦質土器の碗



第214図 4区第3層出土土器(1)



第 215 図 4 区第 3 層出土土器 (2)

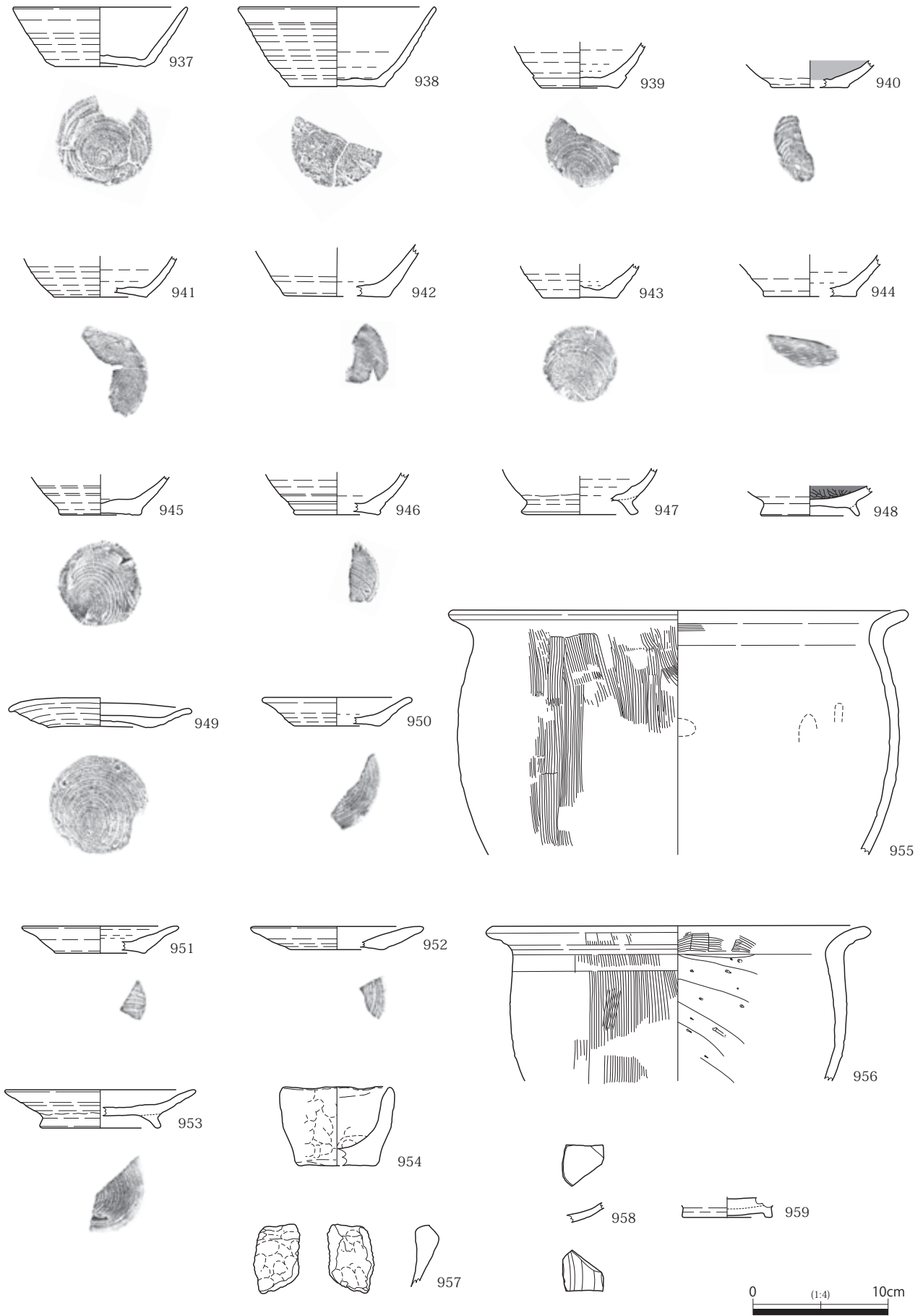
または鉢か。967・970は瓦質土器の釜、968・969は鍋で13～14世紀のものとする〔八峠1998〕。965は土師器の坏で、底部に接合痕が認められる。内外面ともナデ調整である。

971～975は龍泉窯系青磁碗である。971は鎬蓮弁文碗で、口縁に平行線が複数認められるため雷文帯碗の可能性もある。15世紀代のものか。972は細い線描きの蓮弁文碗で、15世紀後葉～16世紀前半のものであろう。973は高台畳付の釉を施釉後搔きとっている。974は小碗の底部で、全面施釉され、施釉部と露胎部の境が橙色に発色している。975は肉厚な底部で全面施釉した後に高台内の釉を搔きとっている。いずれも14世紀代のものとする。976は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で、見込に放射状の櫛目の文様を描く。12世紀後半に比定される。977は古瀬戸の天目茶碗で、15世紀後半頃のも

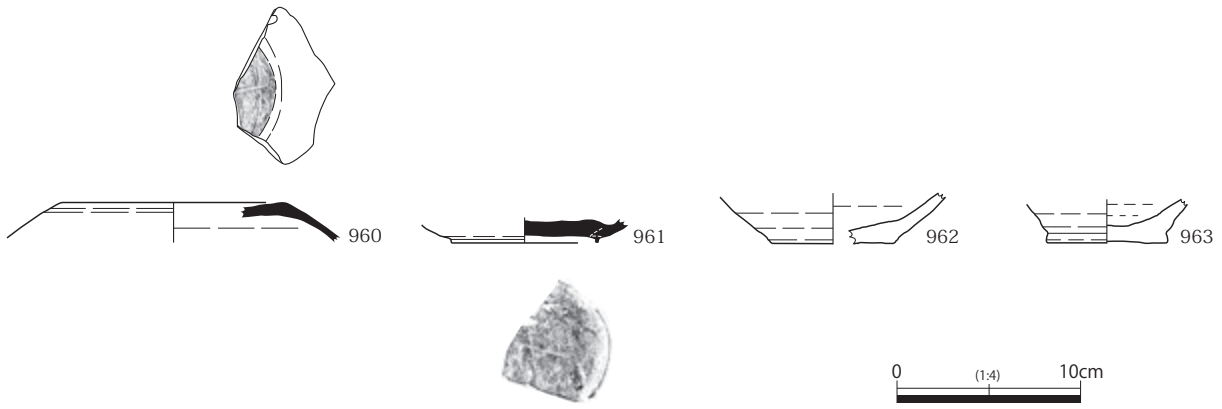


第216図 3区第2層出土土器(1)

第VI章 3区・4区の調査成果



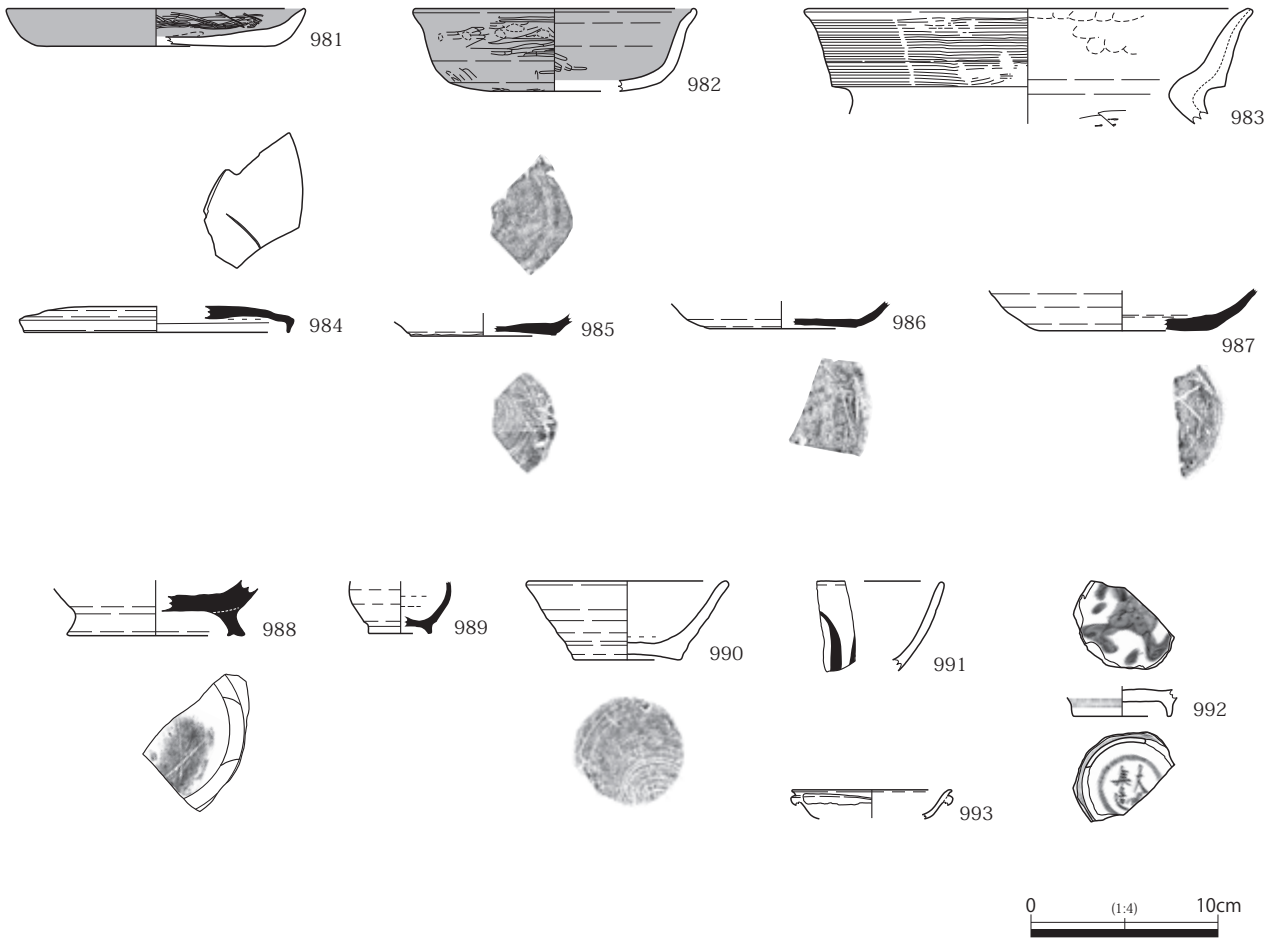
第 217 図 3区第2層出土土器 (2)



第218図 3区第2層出土土器(3)



第219図 4区第2層・第1層・客土出土土器



第220図 3区断割・客土等出土土器

のか。978は染付碗、979は唐津の皿、980は備前の摺鉢である。

3区断割・客土等出土土器（第220図、PL.150）

981は土師器皿、982は坏で、底部調整は不明ながら細かいミガキで丁寧に仕上げられており、8世紀のものとする。983は弥生時代後期後葉の甕で、口縁部に櫛状工具による多条平行沈線文を施す。須恵器の蓋、坏、高台付坏にはヘラ記号を有すものが見られる。

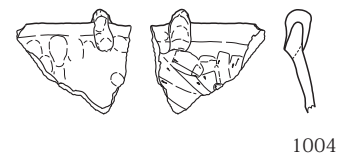
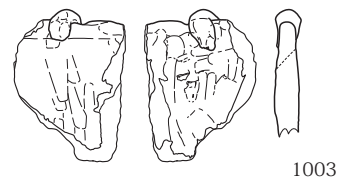
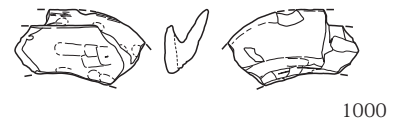
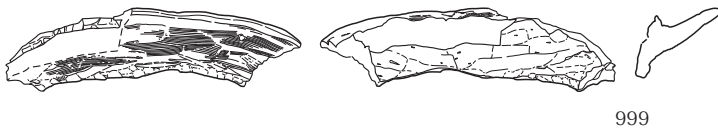
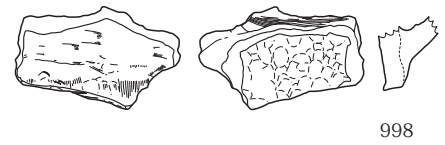
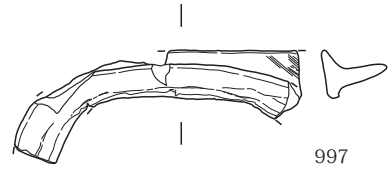
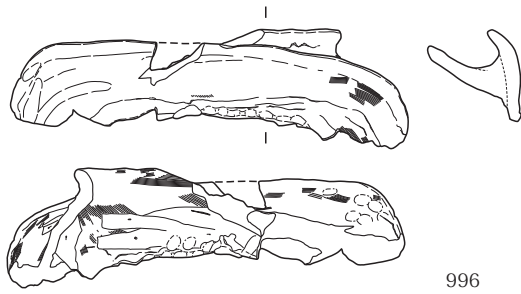
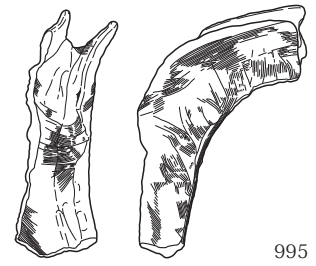
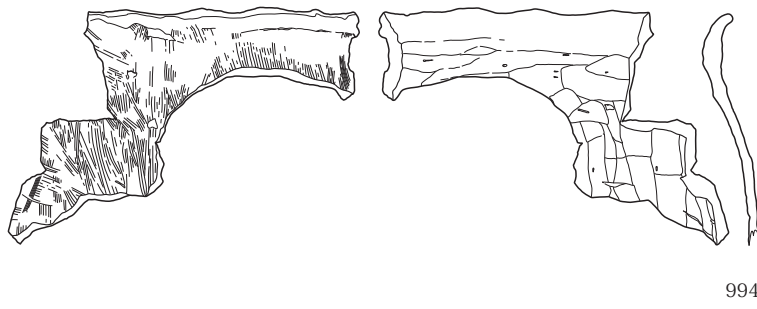
991は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、蓮弁文が施され14世紀後葉～15世紀前葉に比定される。992は染付碗で、見込に花文、高台内に「大明年造」の年款が描かれ16世紀後半のものである。993は雑釉陶器の皿で、重ね焼きによって別個体の口縁部片が溶着している。16世紀後葉のものと考えられる。

移動式竈（第221図、PL.152）

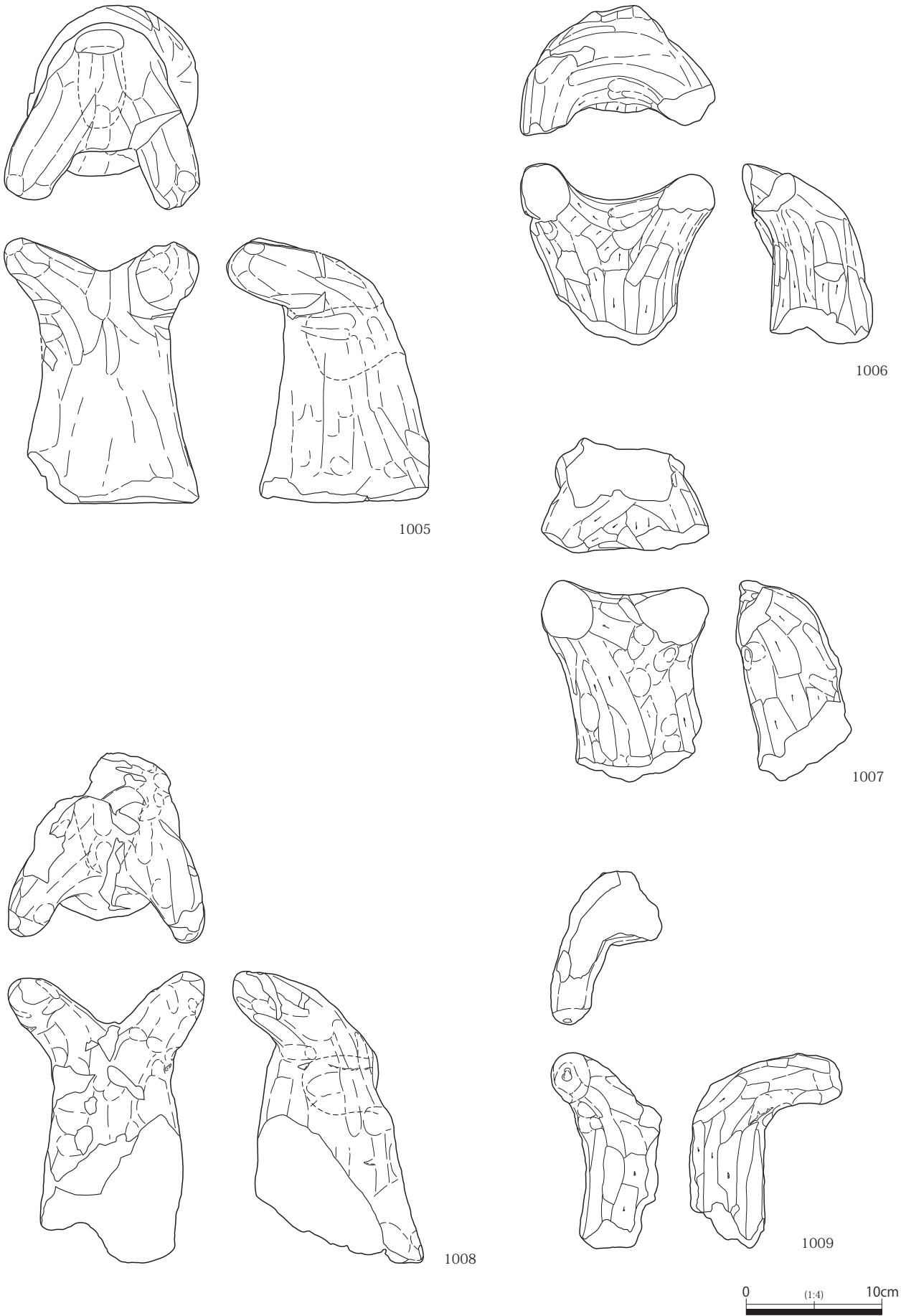
3区・4区では移動式竈と見られる破片が多量に出土したが、大部分が小片になっており、接合及び復元できた個体が少ない。部位が特定できる主要なものを図化、掲載した。

994は外反する掛け口をもち、体部は下方へやや張り出す。995～1000は掛け口～庇部分の破片で、庇の角度が大きく上方へ反る995・1000、斜め上方を向く996・998・999、ほぼ水平方向へ張り出す997がある。1001は焚口左側の庇部分の破片で、断面に観察される粘土紐の幅は2～2.5cmである。1002は体部の破片で、裾は内側へ肥厚する。

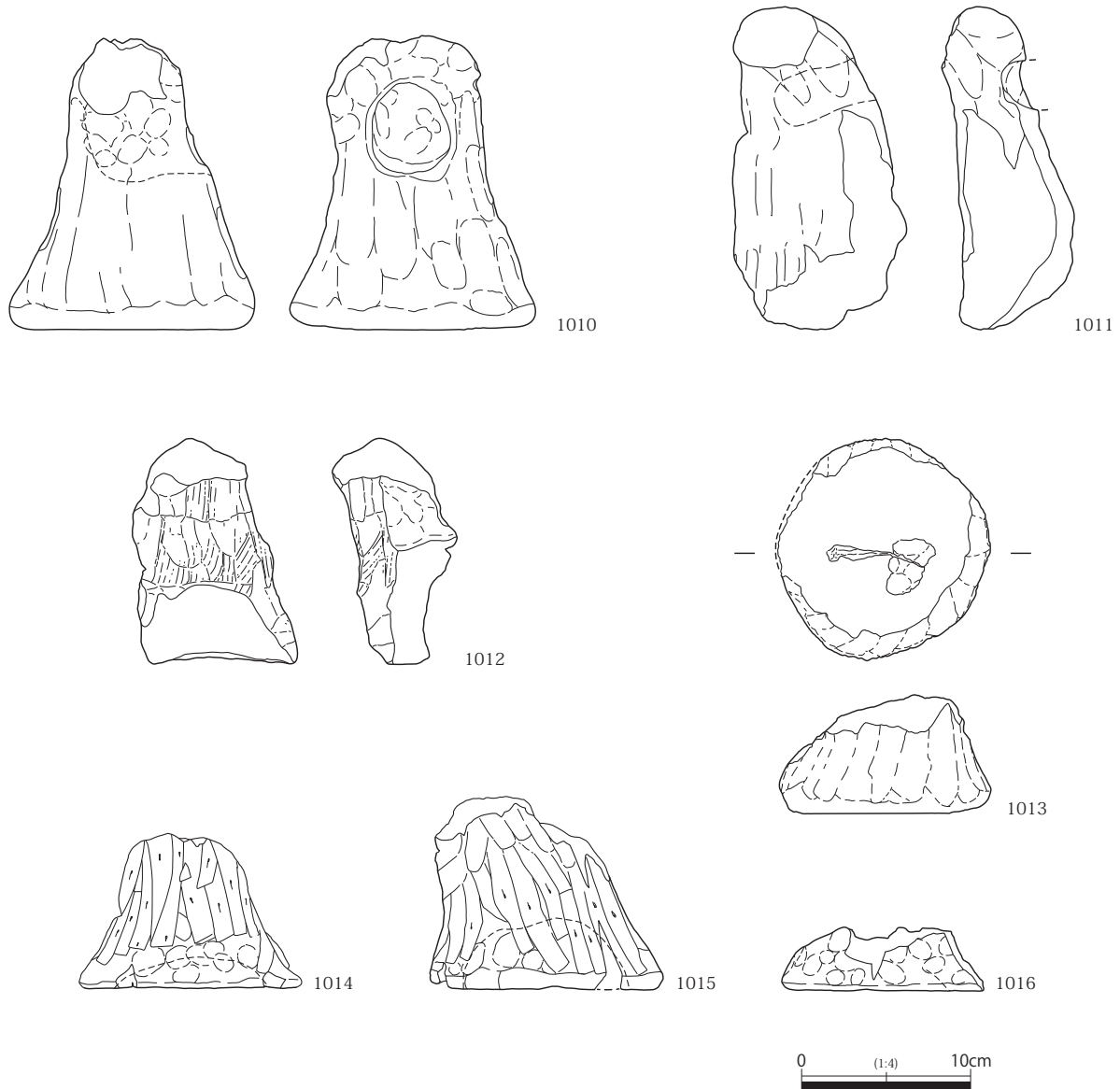
特筆されるのは1003と1004である。これらは鳥取市高住牛輪谷遺跡で出土した付属竈を有するタイプの移動式竈〔野口2014〕の破片で、付属竈の掛け口にあたる。その特徴として、コンロの五徳



第 221 図 移動式竈



第 222 図 土製支脚 (1)



第223図 土製支脚 (2)

を想起させるような粘土紐による爪が貼り付けられている。当遺跡と高住牛輪谷遺跡が位置する良田～高住地域は旧因幡国高草郡に属しており、同郡内で共通するタイプの特異な移動式竈が出土した点で興味深い。

土製支脚 (第222・223図、PL.153～155)

土製支脚も移動式竈と同様に小片となって多数出土しているが、厚みがあるため移動式竈よりも遺存状況は良い。接合、復元できた資料の中から、全体形状が推定できる主要なものを図化、掲載した。

形態が把握できるものはすべて、甕を受ける突起が二股状に延びるタイプである。さらに、胴部が裾に向かって太くなり、背面上部に径3～5cmの非貫通孔を有すもの(1005・1008・1010・1011・1012)と、側面方向にやや扁平な胴部をもち孔が無いもの(1006・1007・1009)の大きく二者に分けることができる。前者の非貫通孔の径は一定でなく、奥側で膨らみをもつ。突起の太さは後者がやや細く長い。また、外面調整も前者がナデ、ユビオサエ(指頭調整)を主とするのに対し、後者はヘラケズリを主体とし、違いが認められる。底部は平底(1005・1010・1013)と上げ底(1012・1014～

1016)がある。なお、1013は円柱形の粘土(塊)を折り曲げて円盤状の基底部を成形しており、その状況が破面から観察できた。

その他の土製品(第224・225図、PL.148・151・156・157)

土玉 計7点(1017～1023)出土し、概ね直径3～4cm、孔径7～8mmのものである。孔は基本的に両面穿孔される。

紡錘車 1024は断面隅丸長方形を呈し、古墳時代のものか。1025は断面形が膨らみをもつ台形を呈し、上面に格子状の文様が線刻されている。1026は断面形が台形を呈する小型品である。

不明土製品 1027は分銅形を呈す須恵質の土製品だが、底面は白色で柔らかな凹凸がある。別の製品の一部が剥落した可能性もある。重量36g。1028は頂部に面をもつ角錐状を呈し、上部に1カ所孔を穿つ。権に似た形状である。重量30g。

土製勾玉 1029は最大長1.8cmの土製勾玉で、全体形はC字形を呈す。重量1g。

土錘 長さ2.4～3.4cm、幅1.4～1.8cmで側面形が隅丸長方形～樽形を呈すもの(1030～1040)、長さ4～5cm、幅1.4～2cmで長い樽形を呈すもの(1041～1044)、長さ3～4cm、幅1cm前後で細いもの(1045～1052)、幅2～2.4cmの円筒形を呈すもの(1053～1056)がある。大型品(1057～1059)も見られるが、1057・1058は法量・形態的に小鍛冶に使用する鞆羽口に似ており、性格は断定できない。

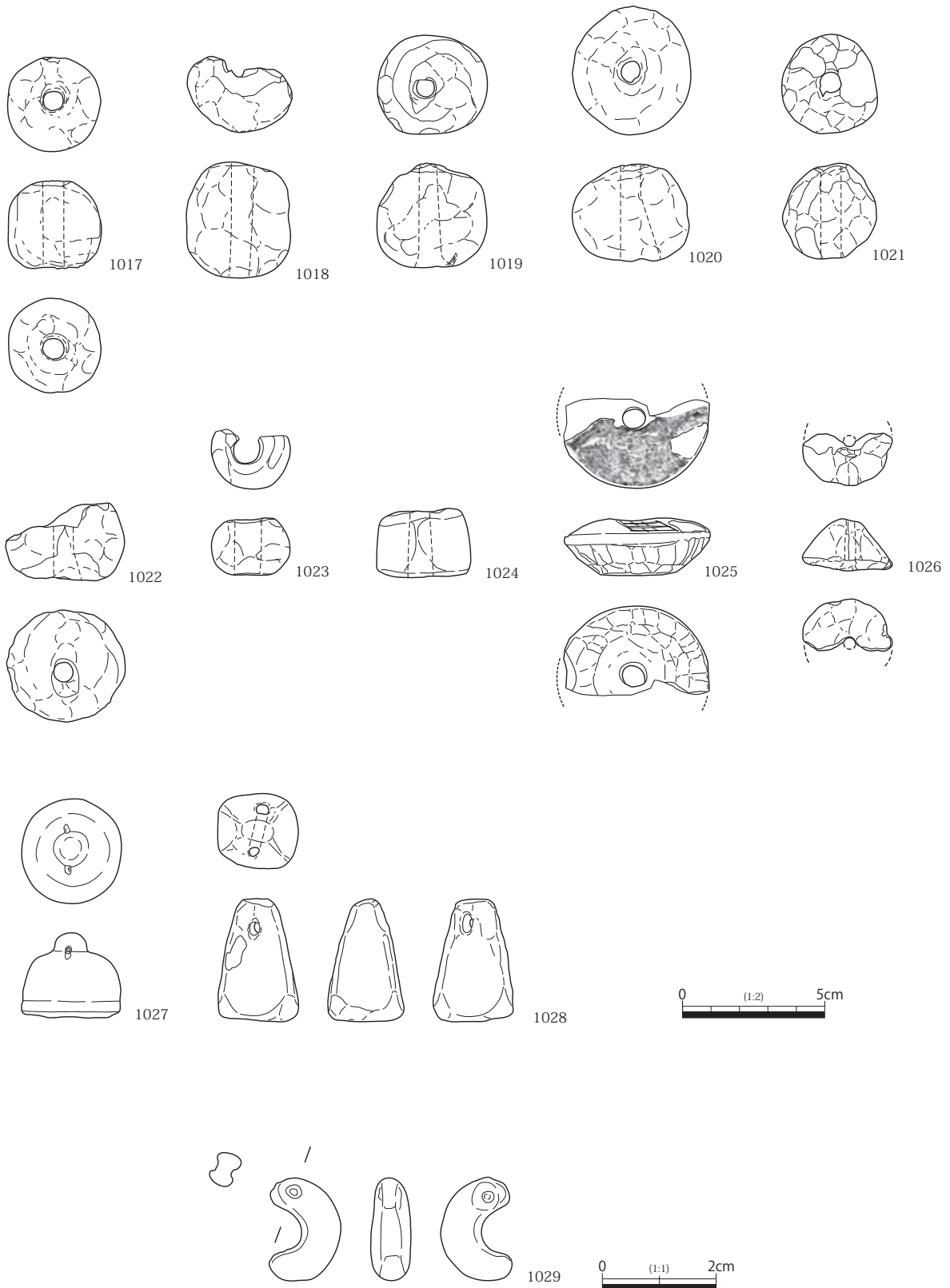
漆パレット・漆容器・漆附着土器(第226図、PL.156・157)

主に4区を中心として、漆が付着した土器が15点出土した。これらの中には漆が二次的に付着したと考えられるもの(1069～1072)も含まれるが、パレットや容器として使用されたものが存在する。漆附着土器の時期は諸特徴から見て概ね7世紀末～8世紀前半の範疇におさまる。

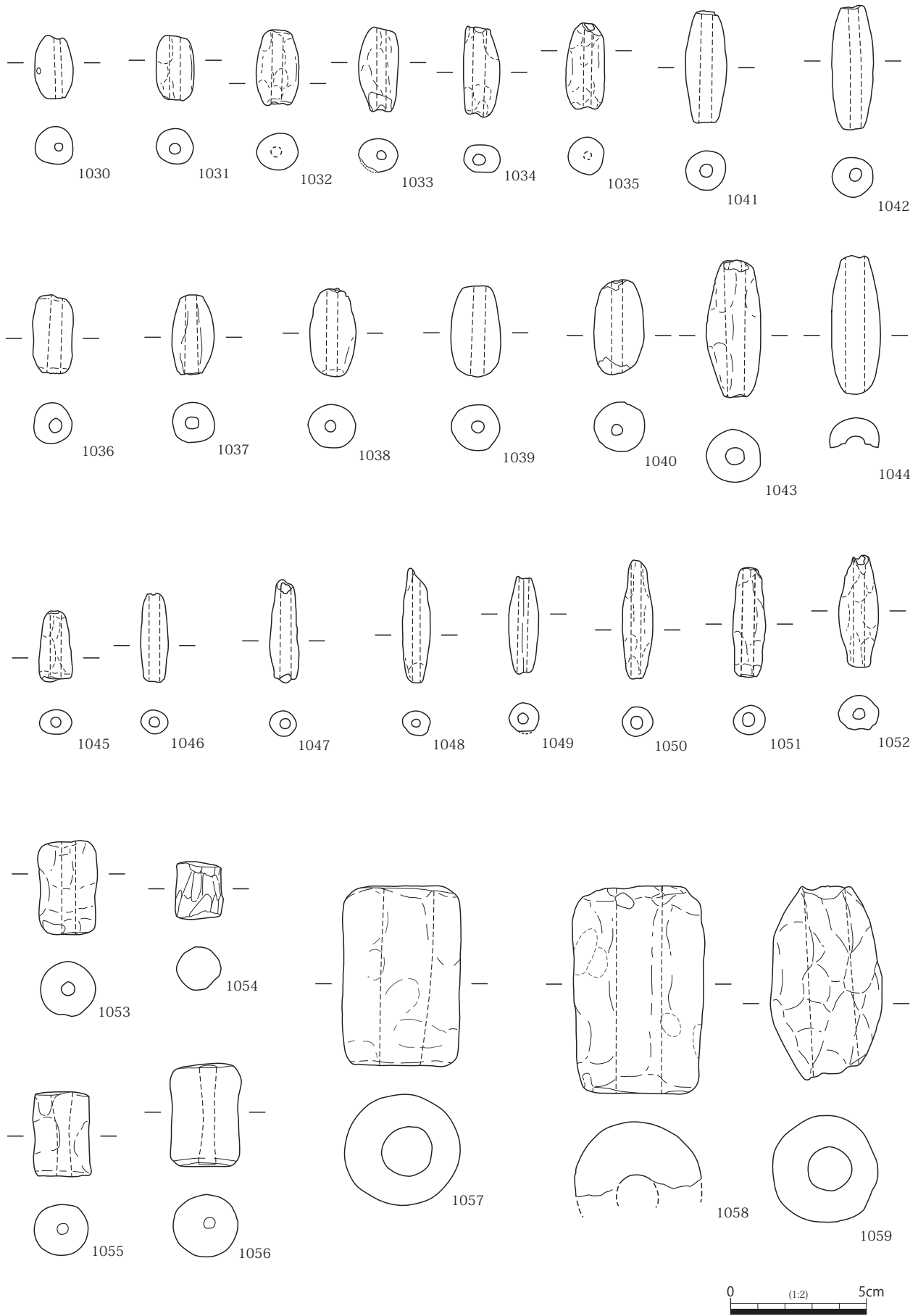
1060～1063は漆パレットと考えられる。1060は蓋内面をパレットとしており、ほぼ全面に漆が付着している。1061も同様だが、漆附着範囲は天井部に集中する。1062は坏内面、1063は高坏坏部内面をパレットとしており、1063は刷毛状の工具で拭き取ったような痕跡が残る。1060・1062・1063は黒漆だが、1061はにぶい黄褐色～褐色を呈すため透漆の可能性もある。1068も少量だが見込に漆が付着しており、パレットであろう。

1064～1067は漆容器と考えられる。1064は小型の壺の体部破片で、内面に残る漆はわずかだが、本来漆が付着していた範囲が変色しており二次的に剥離したと想定する。破面から底部にかけても漆が付着しており、漆溶液を取り出すために容器を破碎して掻き出した際に付着したと考えられる。1065は頸部が窄まらず、そのまま外反して立ち上がる形状をとるため、甕ではなく小型の壺と考える。1065も破面に漆が付着しており、漆容器を破碎して漆溶液を掻き出した際に付着したのであろう。漆は1061と同様の色調で、透漆または生漆の可能性もある。1066は鉢で、底部内面に黒漆が残る。1067は瓶類の頸部～体部片で、肩部、頸部～体部内面に漆が付着している。漆は特に肩部と頸部内面に顕著に残っており、漆溶液を注出入する際に付着したと考えられる。1073も壺瓶類の頸部片で内面全体に漆が付着しているため、同様の状況が想定できる。

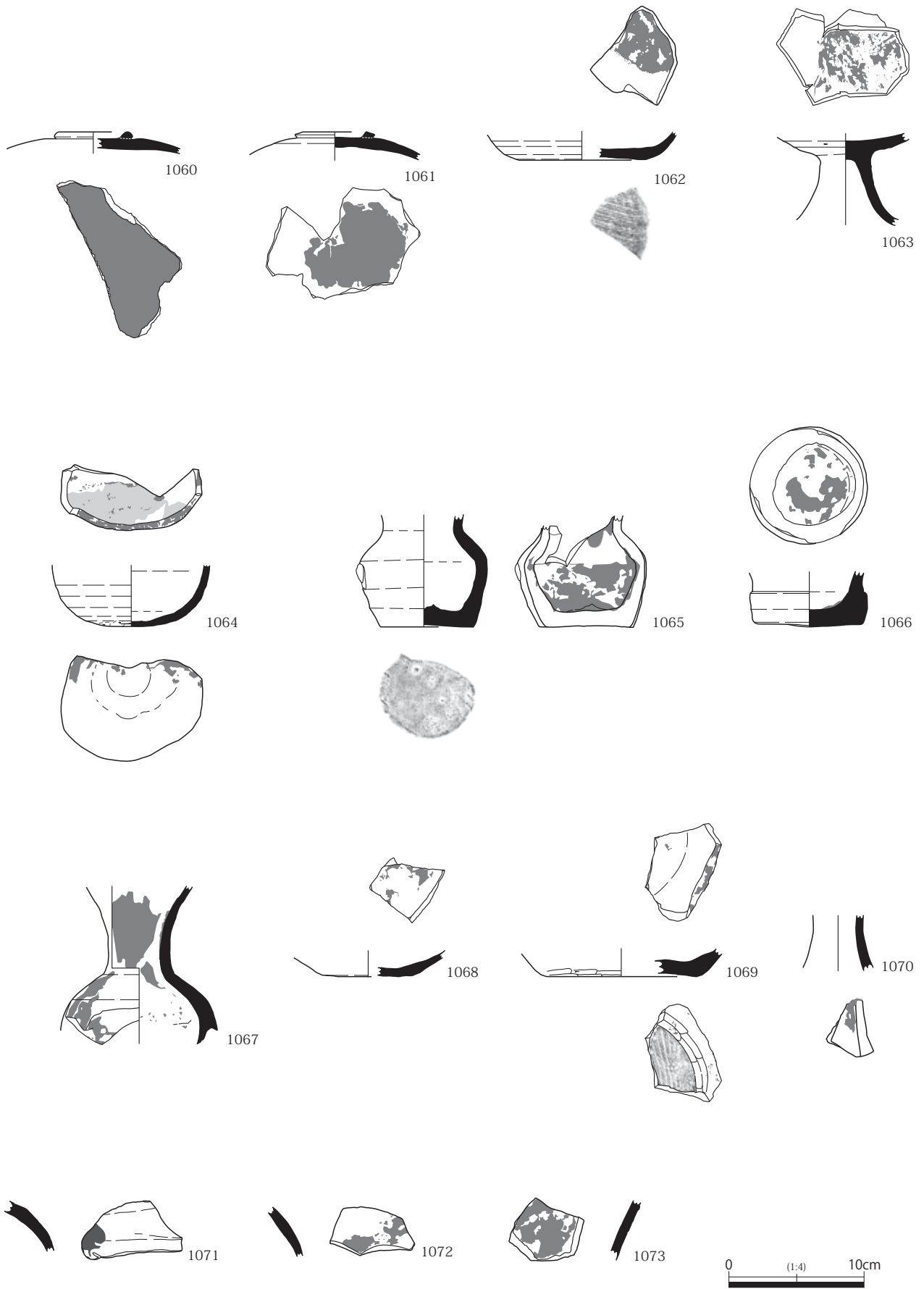
これらの漆容器はいずれも小型の壺・瓶・鉢を主体としており、大型の壺等は見られず、漆採取地から集積地への運搬具である可能性は低い。それよりも漆工工程での貯蔵具もしくは使用時の小分け容器と考える。



第 224 図 土玉・紡錘車・権?・土製勾玉



第 225 図 土錘



第226図 漆パレット・漆容器・漆附着土器

円面硯・転用硯（第227～230図、PL.157～163）

円面硯（1074） 当遺跡で1点のみ出土した。小型の圈足円面硯で、外堤径13.2 cm、硯面径9.2 cm、器高5.2 cmを測り、遺存状況からみて台脚部に12カ所以上の長方形透かし孔をもつ。陸と海の境界は明瞭で、陸の外縁は突状に隆起させる。陸のほぼ全体で磨り面が認められる。内外面とも回転ナデまたはナデ調整で、外側から穿つ透かし孔内面のみ未調整である。

7～10世紀代の多様な遺物が含まれる3006溝埋土上層で最も大きな破片が出土したが、4038溝埋土下層、同埋土中層、4区第4-2層でも同一個体の破片が出土して接合している。3006溝埋土上層出土破片は二次的な混入であろう。平城宮の資料においても奈良時代前半期には硯面径が10 cmに満たない小型の圈足円面硯が存在することが知られており〔神野・川越2003〕、4038溝埋土中～下層等の共伴資料から見ても8世紀のものとする。

転用硯 当遺跡で出土した転用硯は確認できたもので破片数48点を数える。破片数であるため、本来の個体数はこれより少ない可能性がある。

転用硯として使用される器種は蓋が25点（52%）と最も多く、高台付坏14点（29%）、皿5点（11%）、高坏3点（7%）、坏1点（1%）である。蓋と高台付坏で全体の8割を占める。

使用部位は蓋・坏・皿・高坏いずれも内面が中心となるが、高台付坏については高台内側（底部外面）を硯面あるいは墨汁溜めとするもの（1110）もあり、後者は墨痕が顕著でありながら磨り面は弱い。蓋にはつまみを打ち欠いて使用したと考えられるもの（1090・1096）が認められる。墨書土器を転用したものも3点見られる（第287図1129・第291図・1190・第292図1208）。

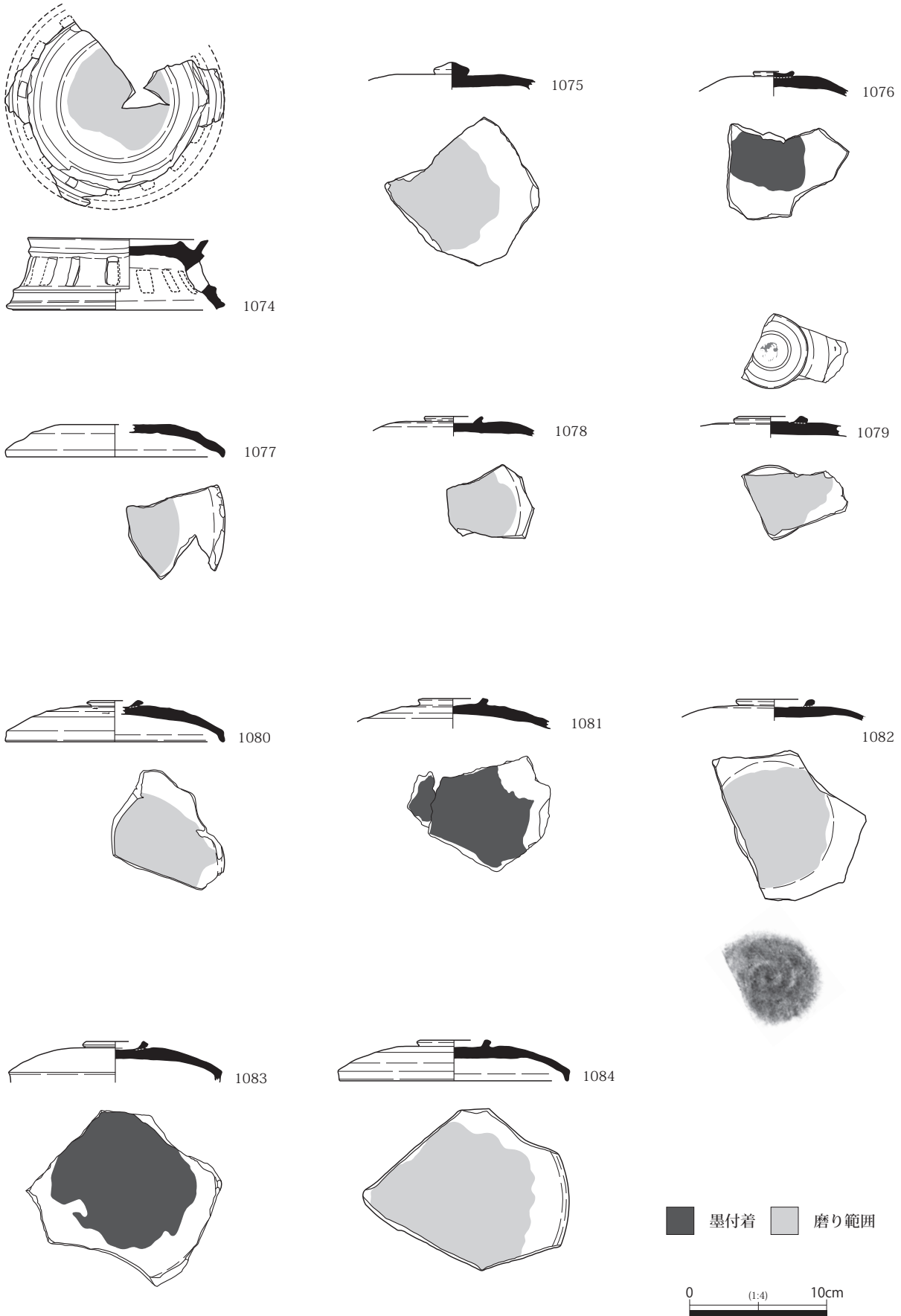
転用硯として使用された土器の時期は7世紀末～9世紀後半で、古くは高坏も使用されているが、時期が下ると坏皿類が増えるという傾向が窺え、各器種の消長とも符合する。

註

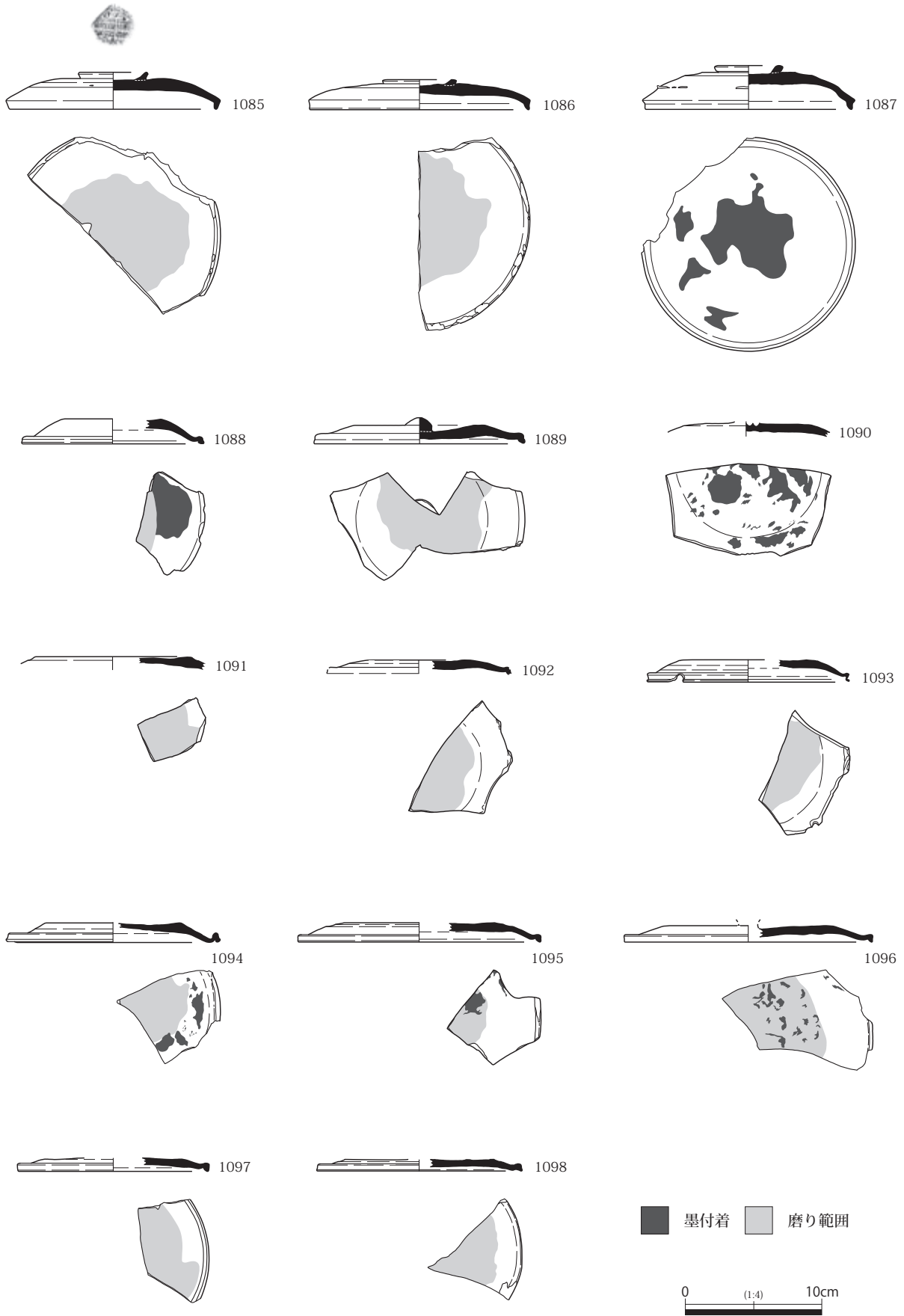
坏表面に付着した飛沫については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、同研究所において蛍光X線分析を行った結果、溶融した鉄滓であることが明らかとなった。記して感謝申し上げます。

<参考文献>

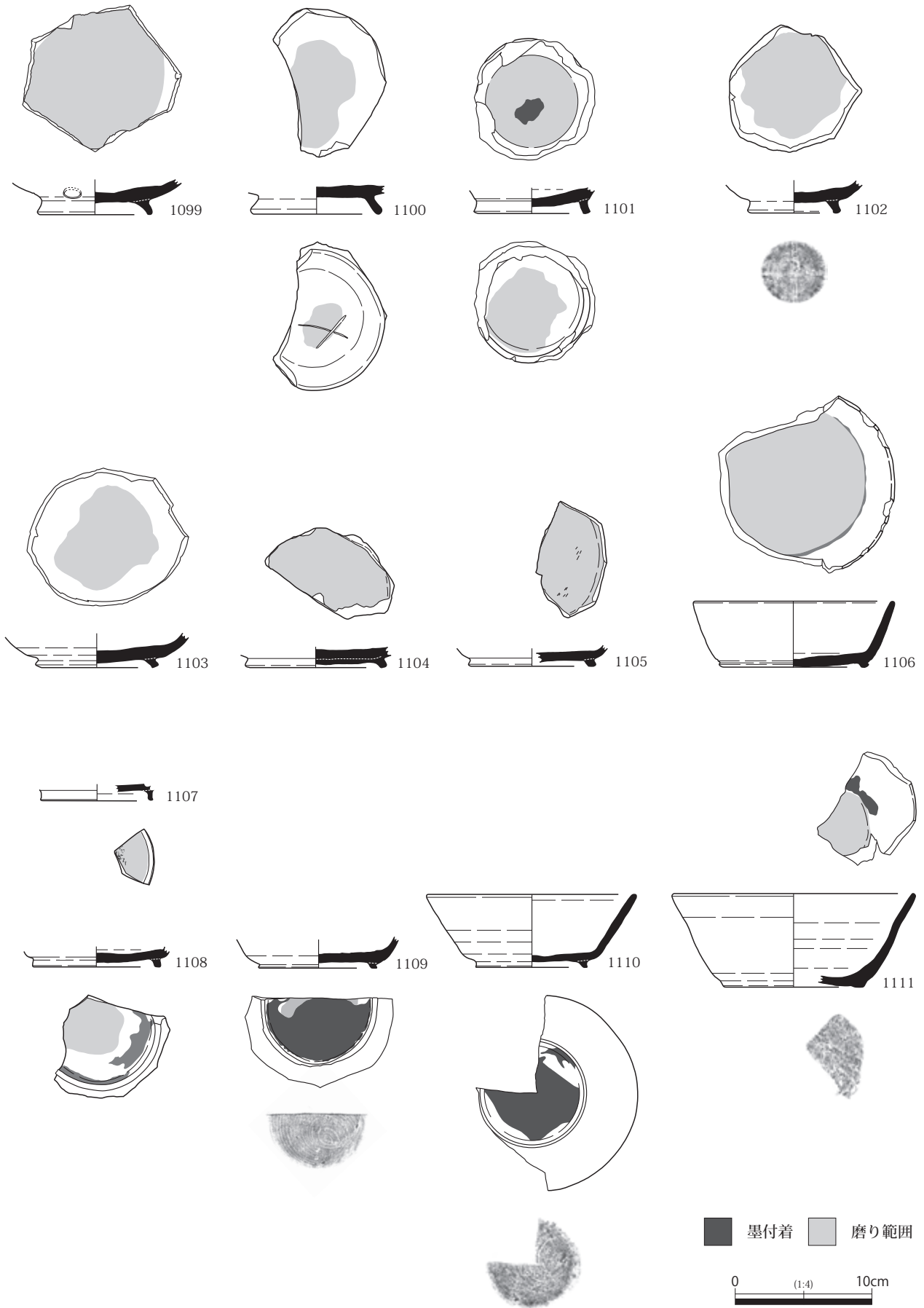
- 石毛彩子・志賀 崇 2003「(3) 瓦類の分析と瓦葺建物の性格」山中敏史編『上原遺跡群発掘調査報告書－古代因幡国気多郡衙推定地－』鳥取県気高町教育委員会・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 岸本浩忠編 2003『鳥取県立博物館所蔵古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館
- 倉吉市教育委員会 1998『福田寺遺跡発掘調査報告書（2次調査）』
- 神野 恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の陶硯をめぐる諸問題－地方における文書行政をめぐる－』
- 神野 恵 2012「都城の製塩土器」『第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官衙・集落 研究報告資料』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 高橋照彦 1995「3. 緑釉陶器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』有限会社真陽社
- 野口良也編 2014『高住牛輪谷遺跡』鳥取県教育委員会
- 八峠 興 1998「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として－」中世土器研究会編『中世土器の基礎研究ⅩⅢ』
- 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4



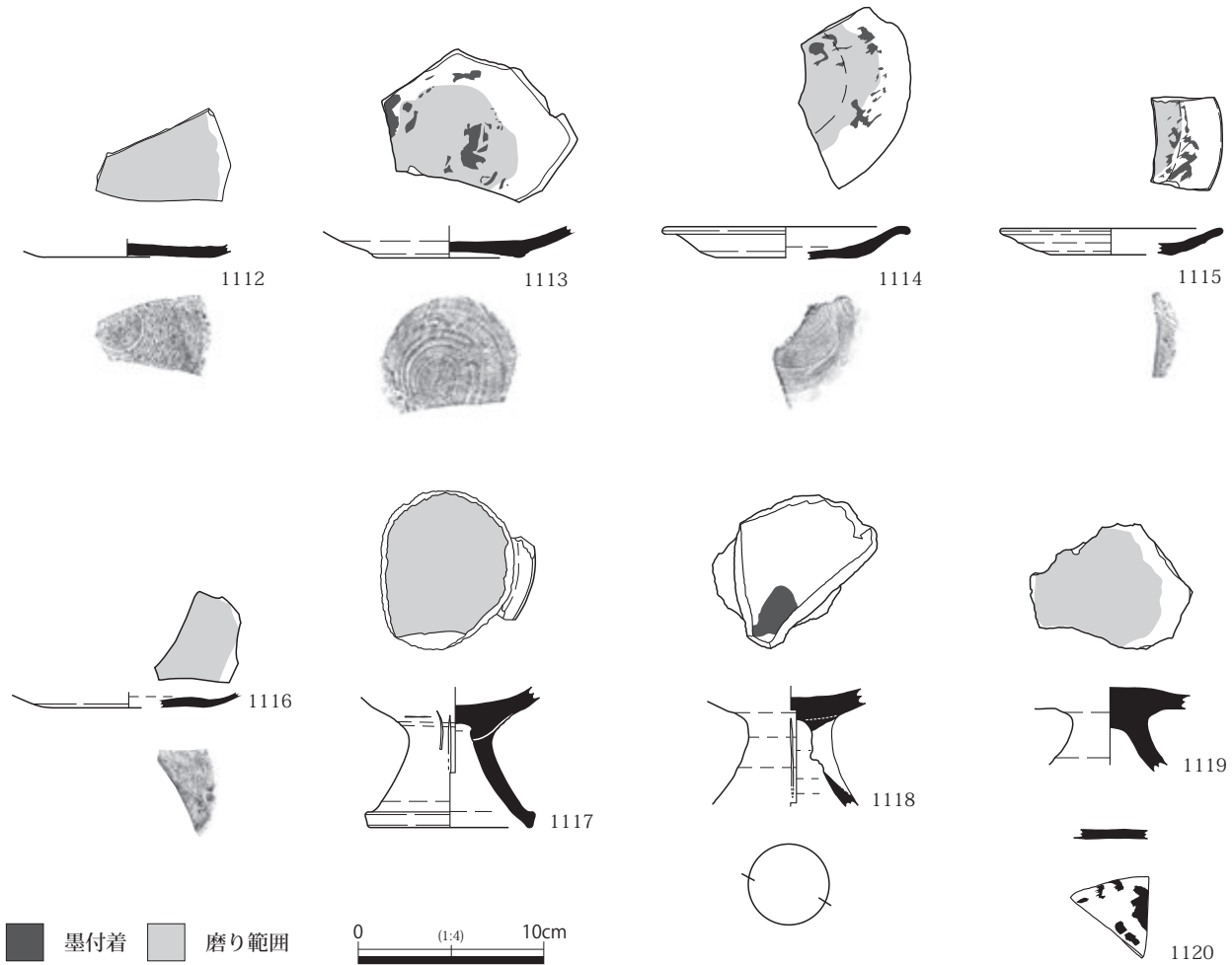
第 227 図 円面硯・転用硯 (1)



第228図 転用硯 (2)



第229図 転用硯 (3)



第230図 転用硯 (4)

(2) 石器

打製石器 (第231図、PL.163)

S3・S4は打製石鏃である。S3は小型品で3085ピットから出土したが混入品であろう。S4は安山岩製と見られ、第4層で出土した。S5～S7は黒曜石の石核または剥片で、それぞれ3003溝、第2-2層、第3層から出土しており風化が顕著である。S8は石鋏で3473流路で出土した。

磨製石器 (第232・233図、PL.164)

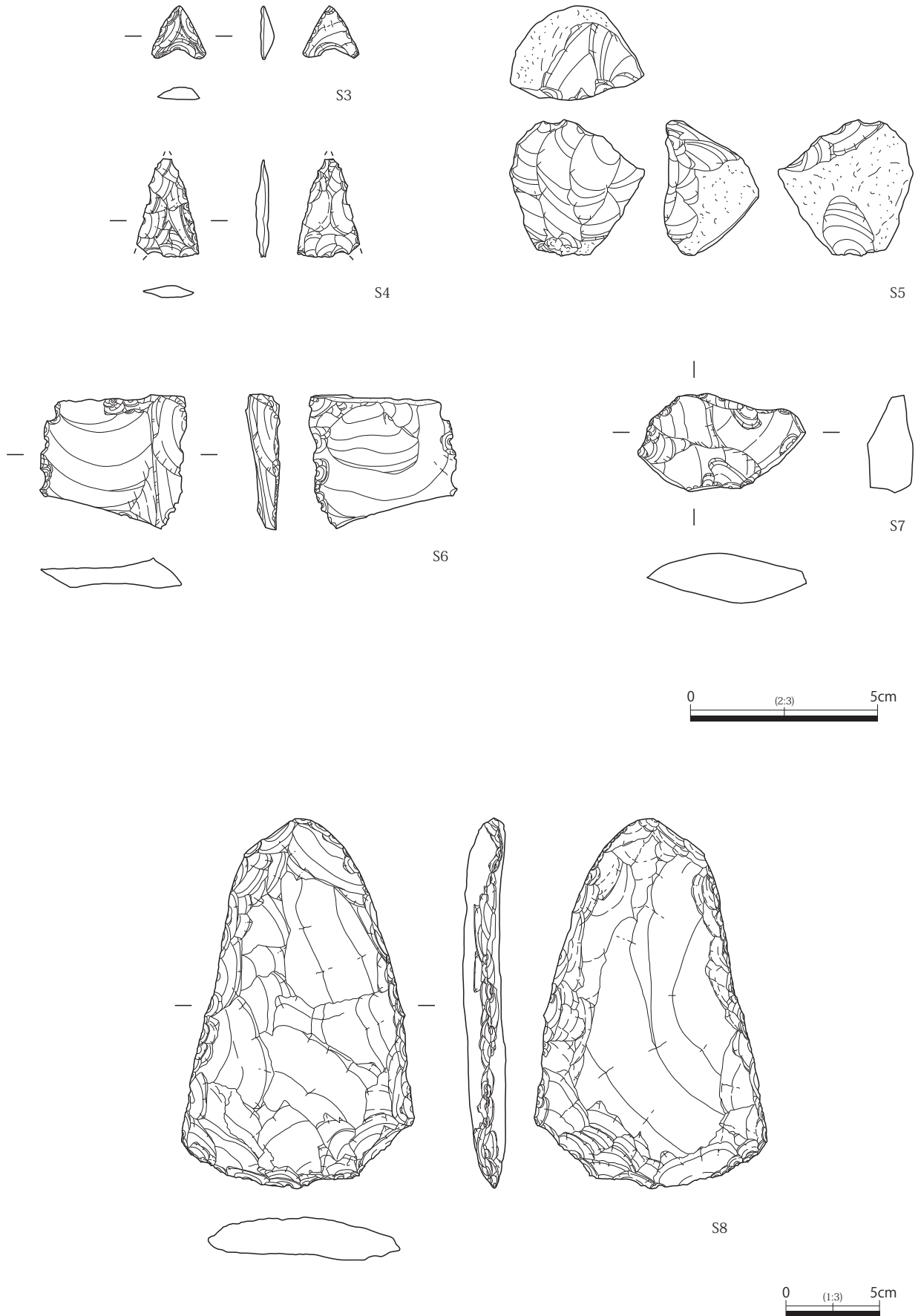
S9～S17は磨製石斧である。S9は刃部が撥形にひらき、後主面に鑄が見られ片刃となる。S10は刃部を欠失するが、横断面が略円形を呈し伐採斧の可能性はある。S11・S12・S15は両刃を呈すが幅狭で厚みがなく、加工斧となろうか。小型のS14も加工斧であろう。S13は身に厚みがあり伐採斧と考えられる。S16は扁平片刃石斧である。後主面に認められる鑄は明瞭で、刃部及び両側縁とも直線的で丁寧仕上げられている。S17は鑿状石斧で両刃を呈す。S9・S16は3006溝埋土最下層、S10は3006溝南肩(第4層)、S11は第1層、S12は第3層、S13・S14は第4-2層、S15は第4-3層、S17は3003溝埋土上層でそれぞれ出土した。

S18は磨石で、破面にも磨り面が認められる。第2-2層で出土した。

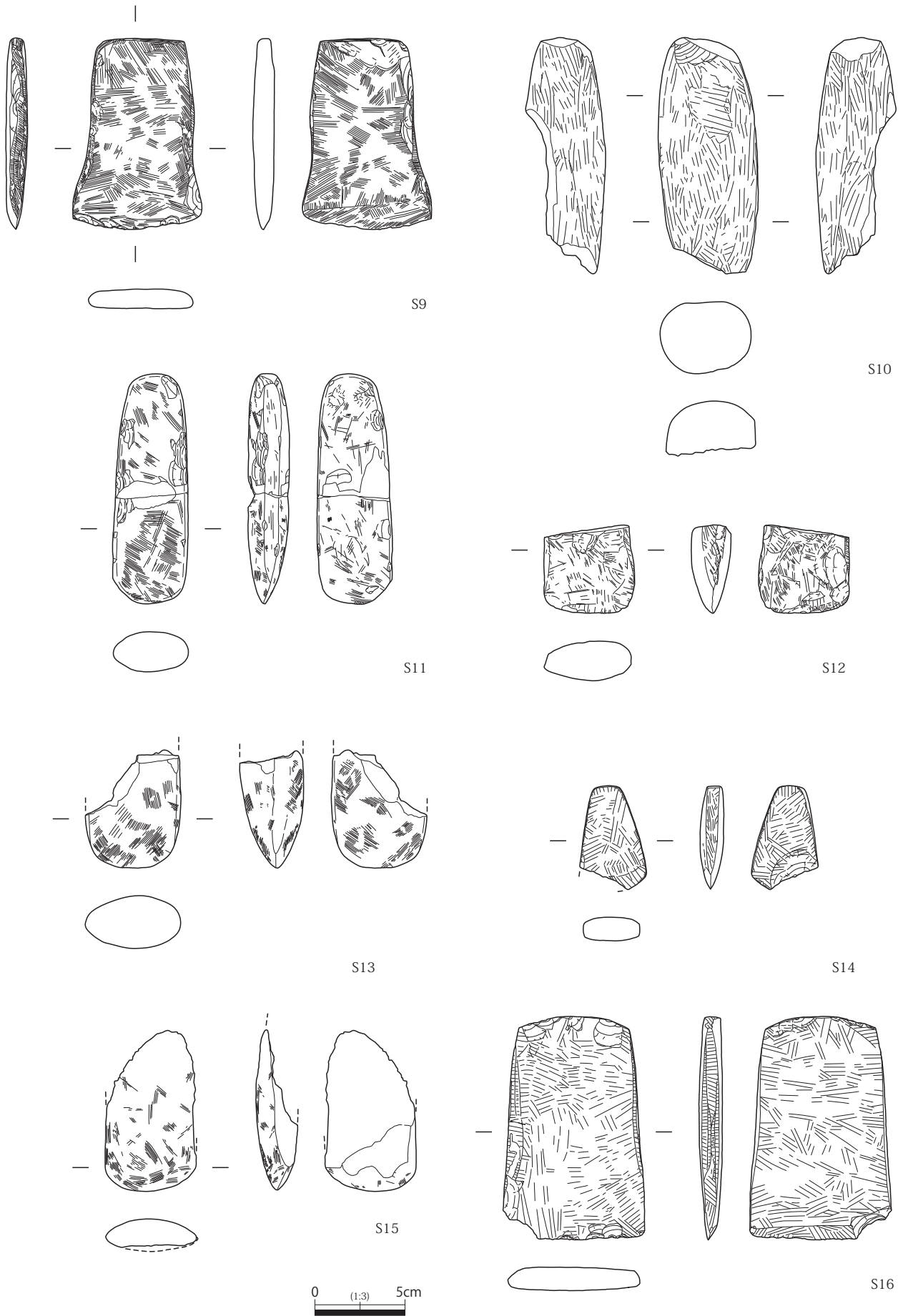
S19は石庖丁、S20は石庖丁未成品である。S19は第4-2層、S20は第2-2層で出土した。

敲石 (第233・234図、PL.164)

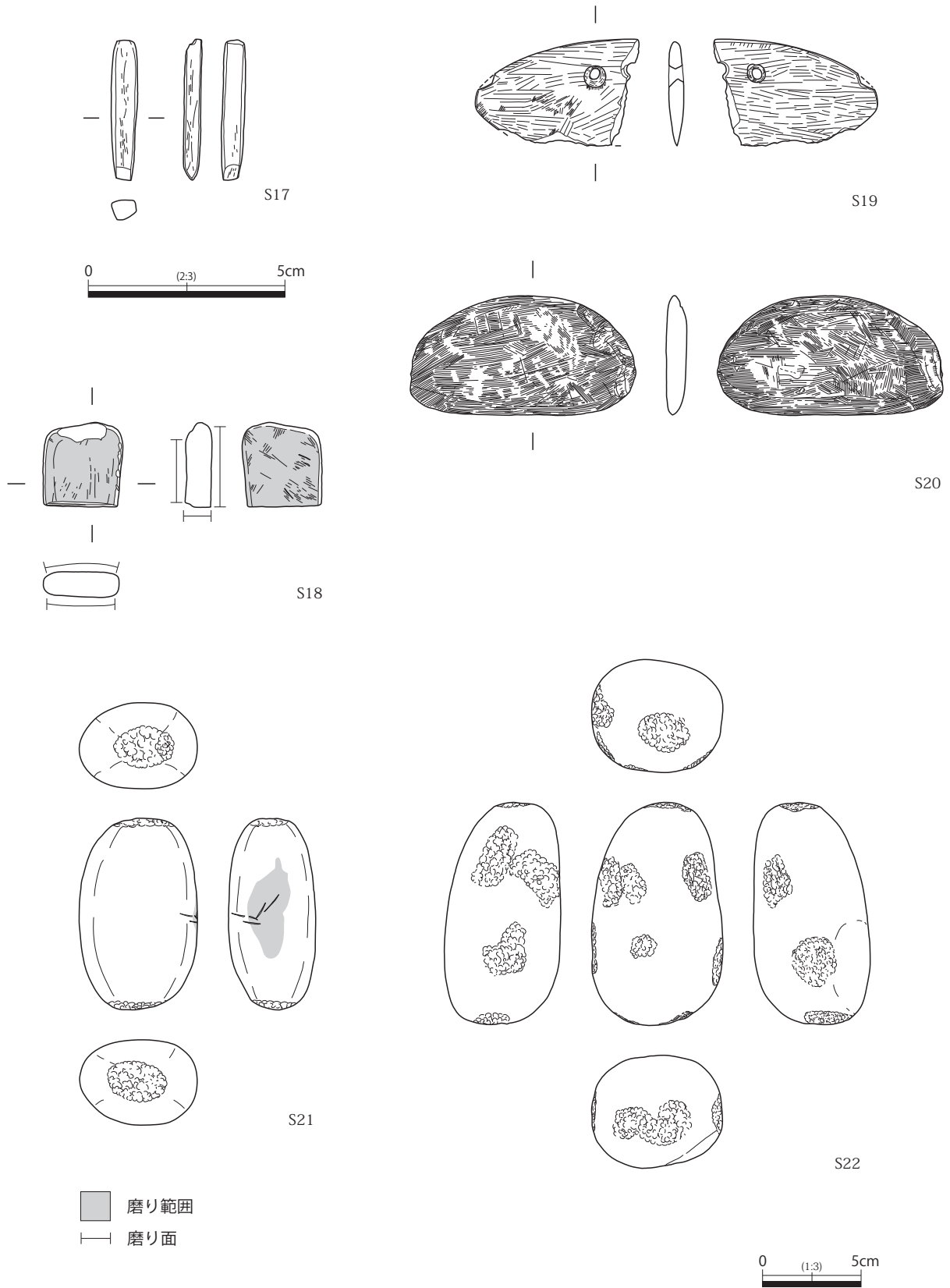
S21～S27は敲石である。S21は側面に磨り面が認められる。S23・S25は円盤状の礫の側縁を連続



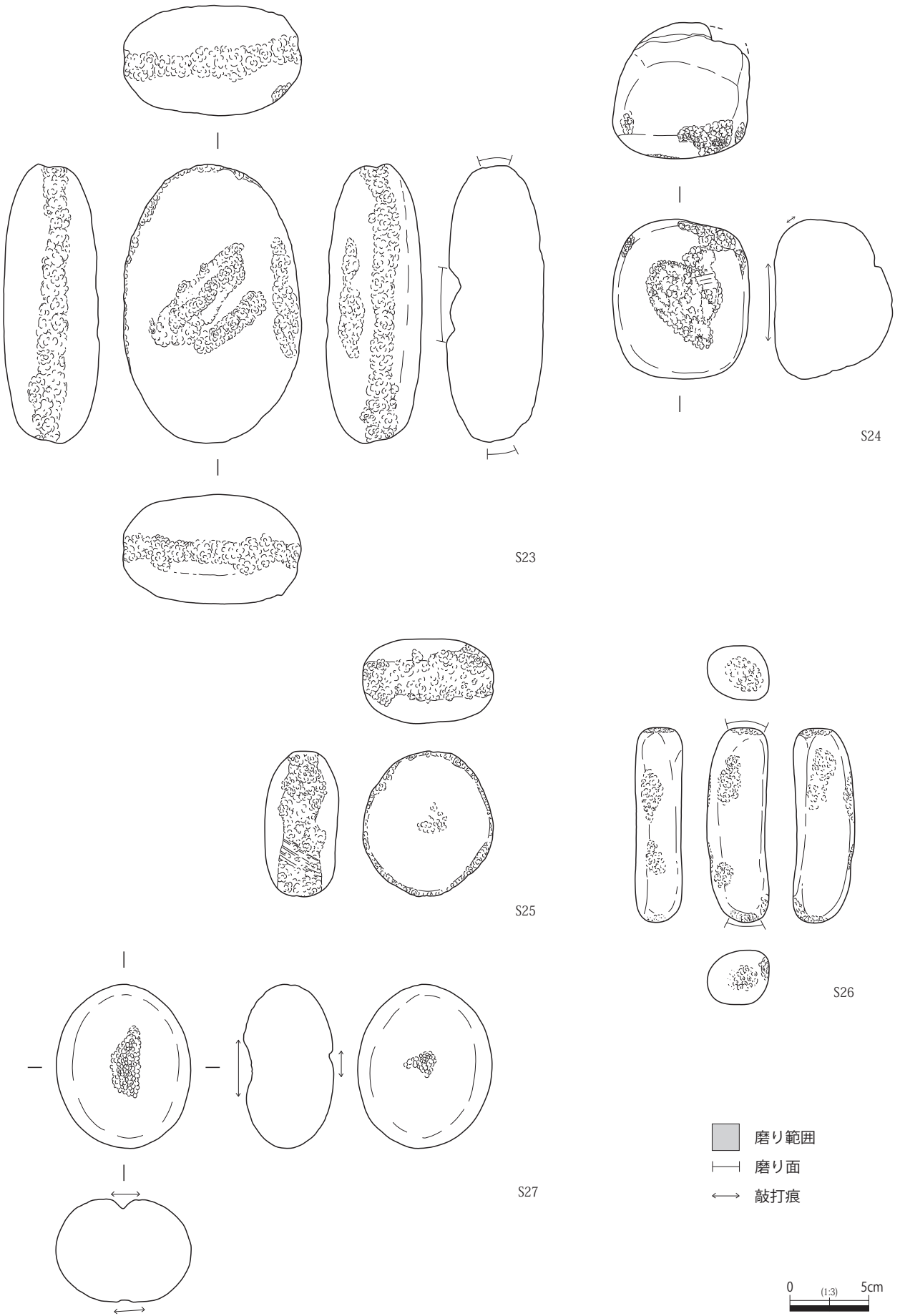
第231図 3・4区出土石器(1)



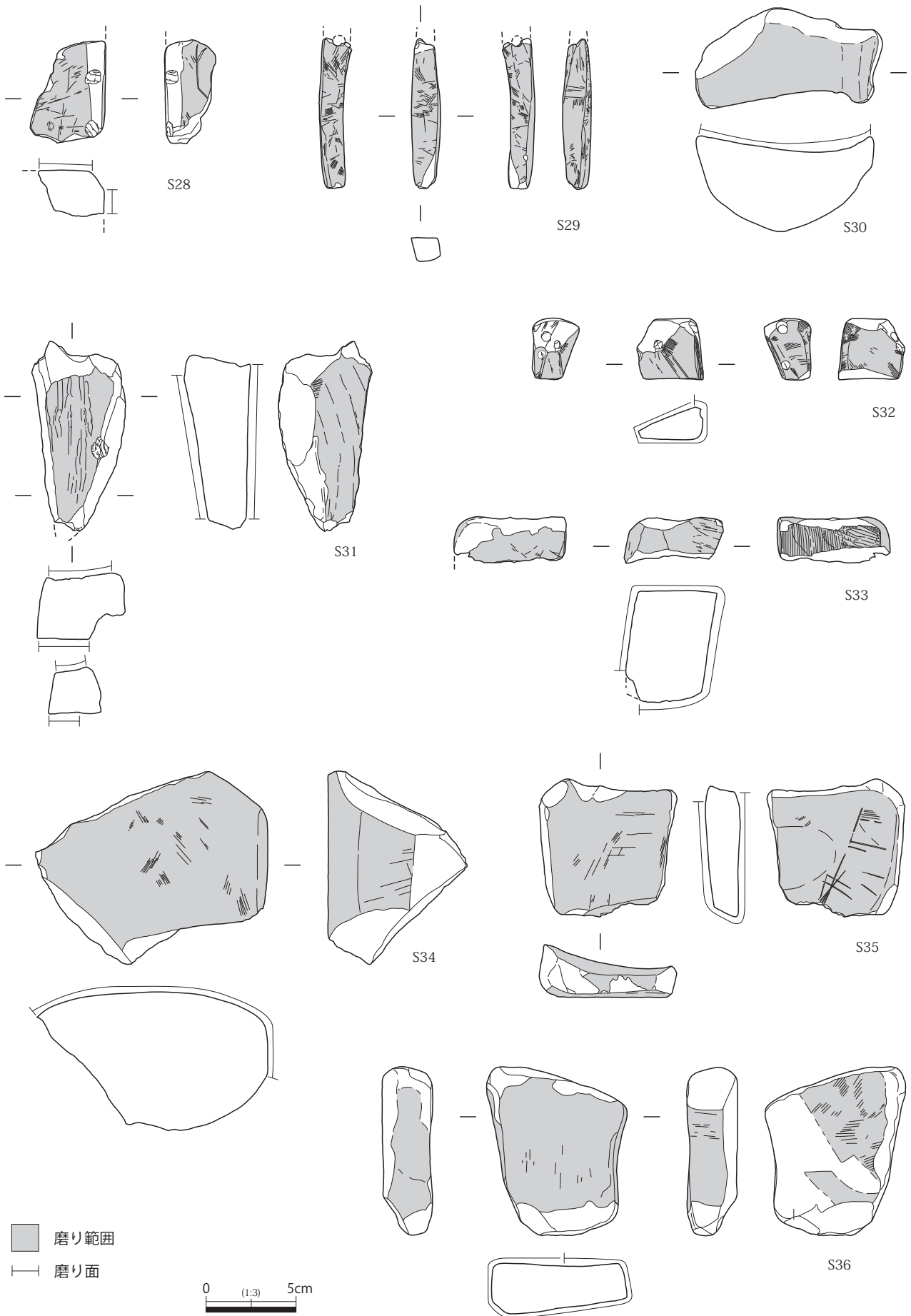
第 232 図 3・4 区出土石器 (2)



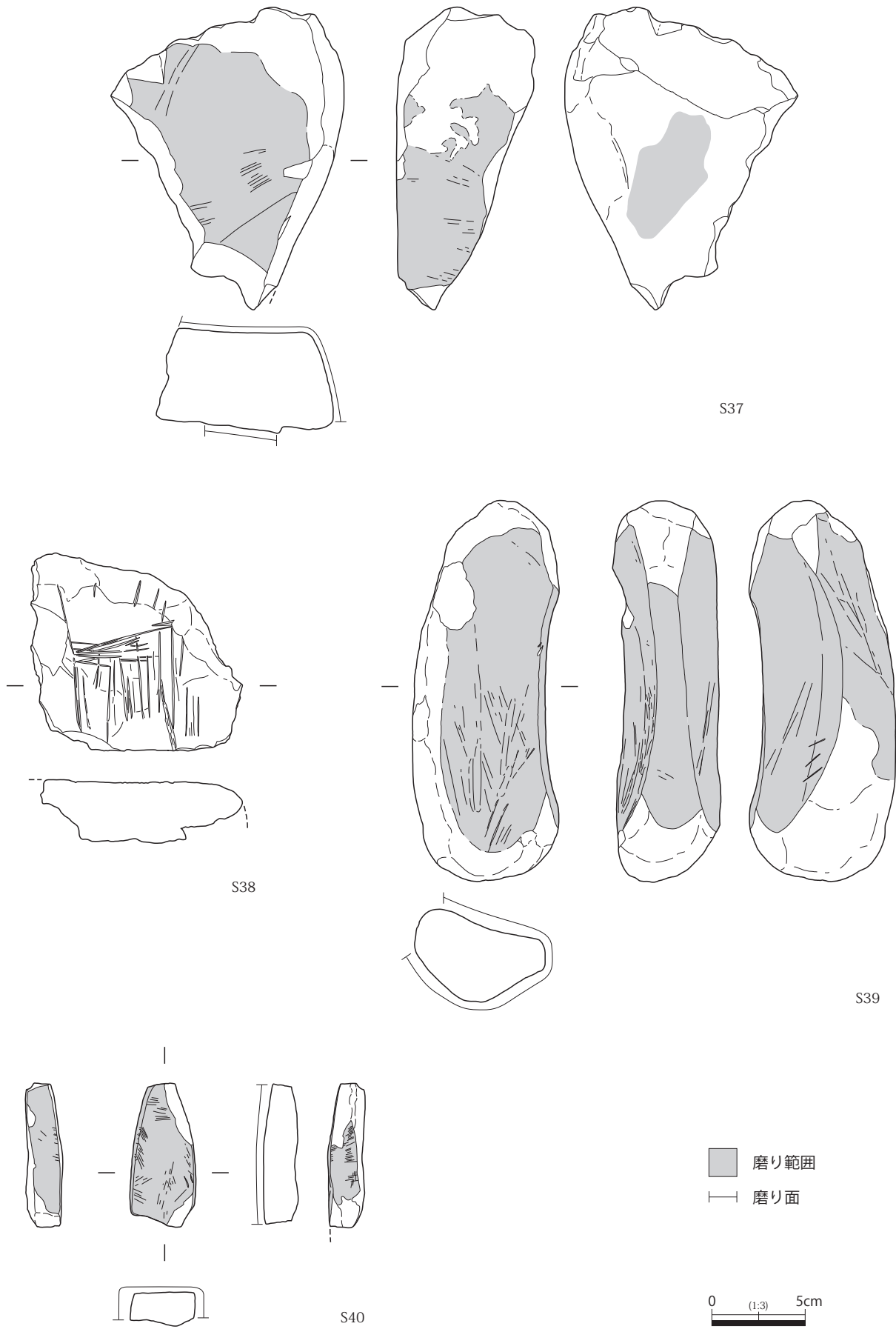
第233図 3・4区出土石器(3)



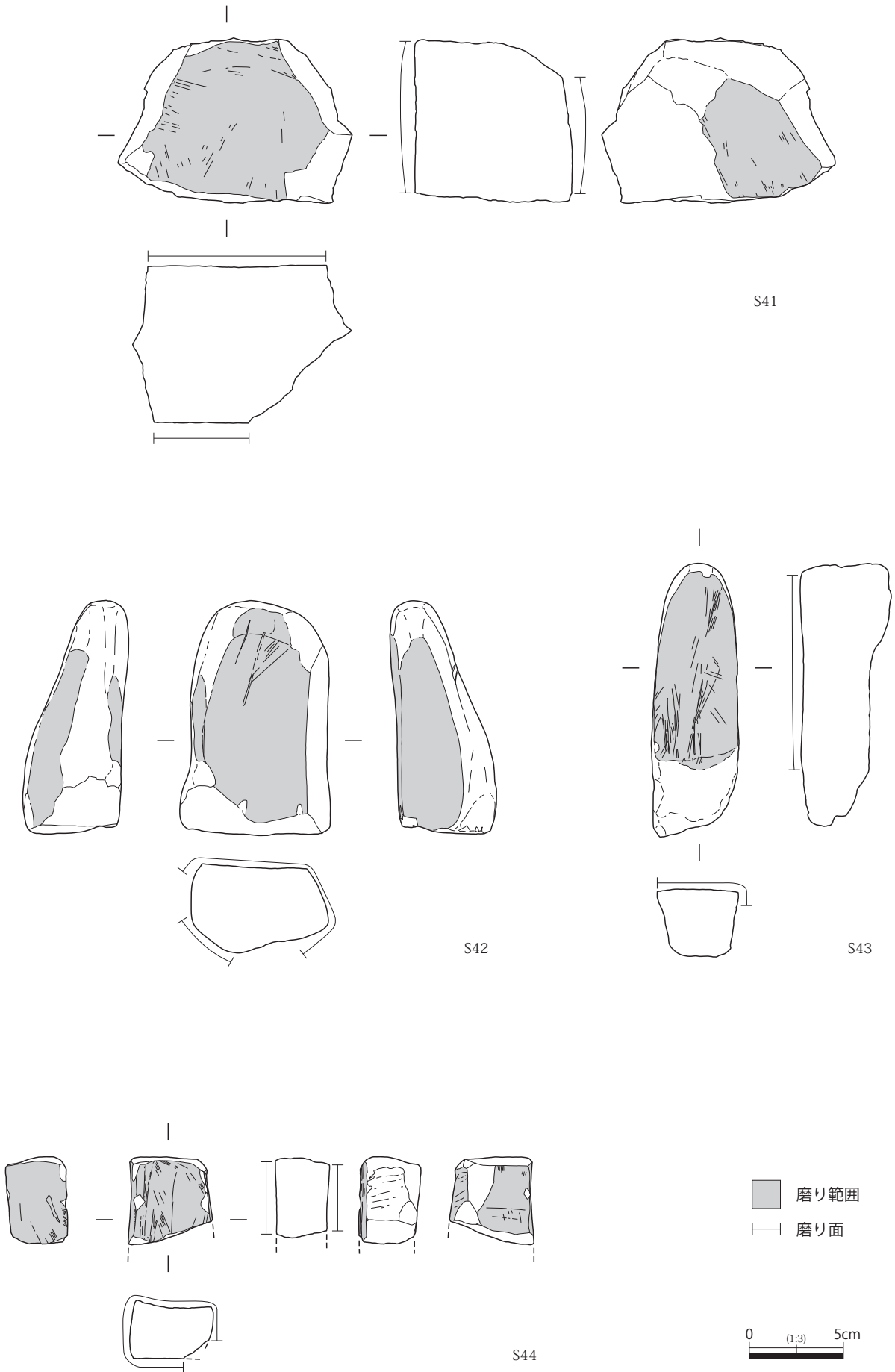
第 234 図 3・4 区出土石器 (4)



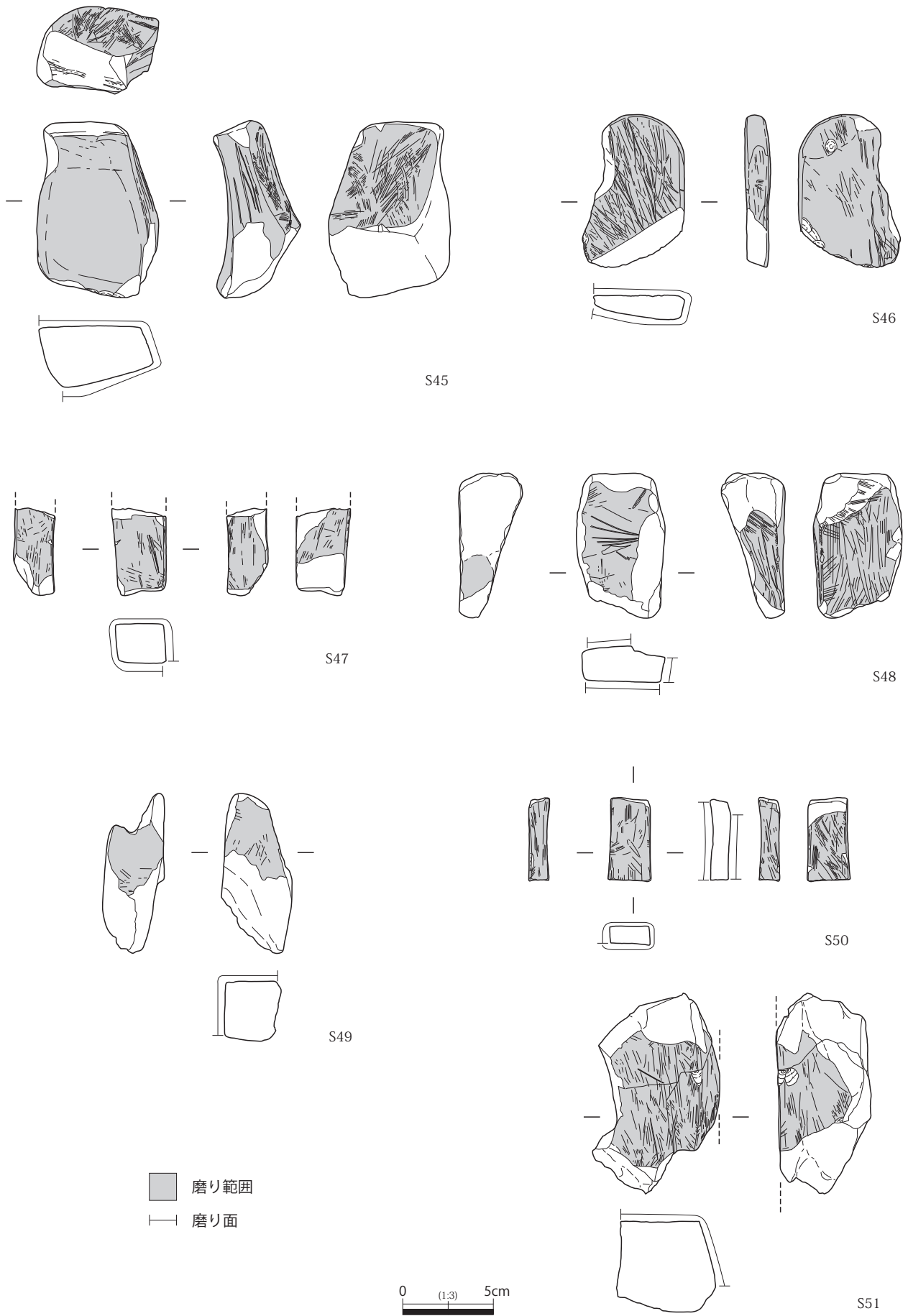
第 235 図 3・4 区出土石器 (5)



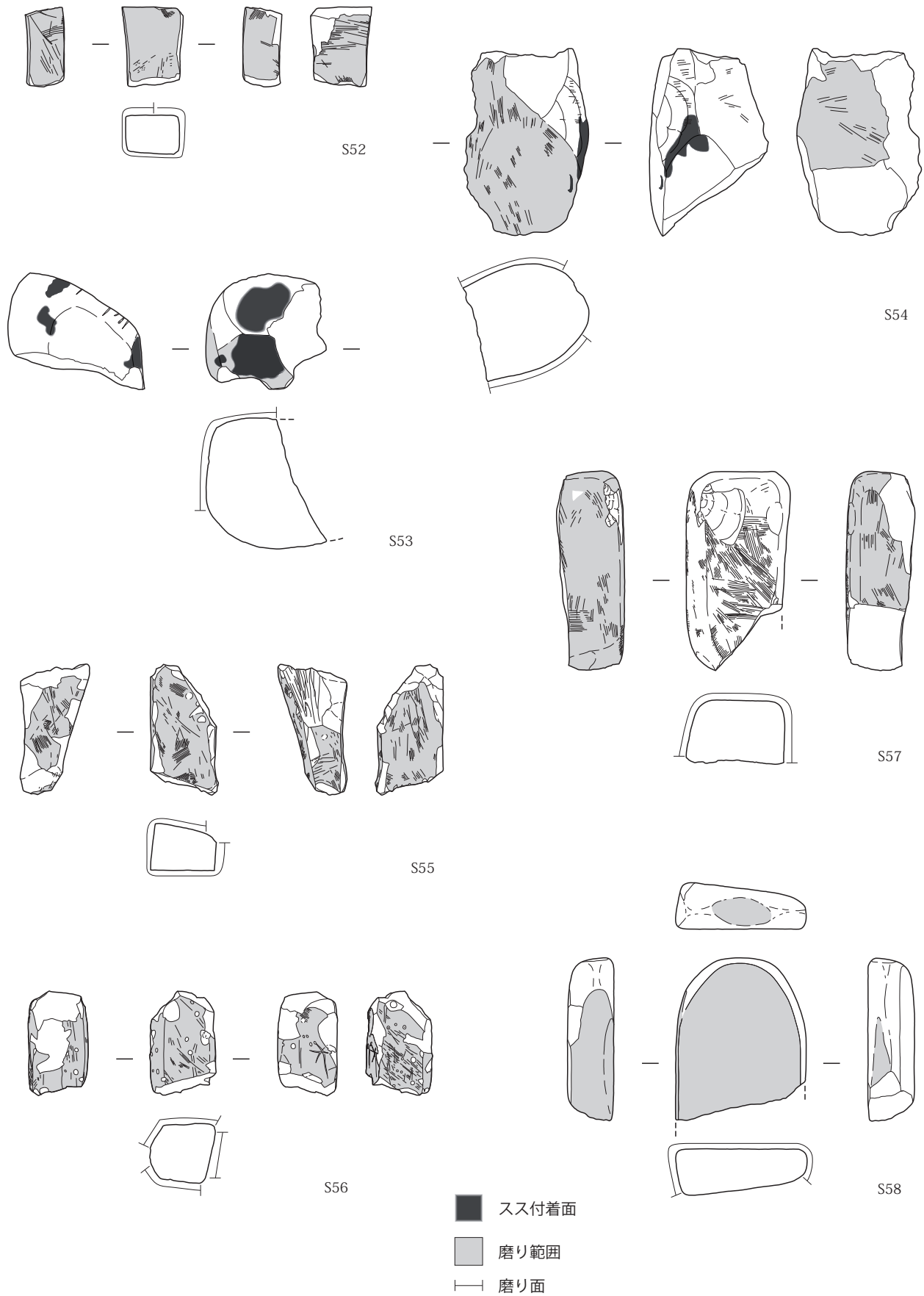
第236図 3・4区出土石器(6)



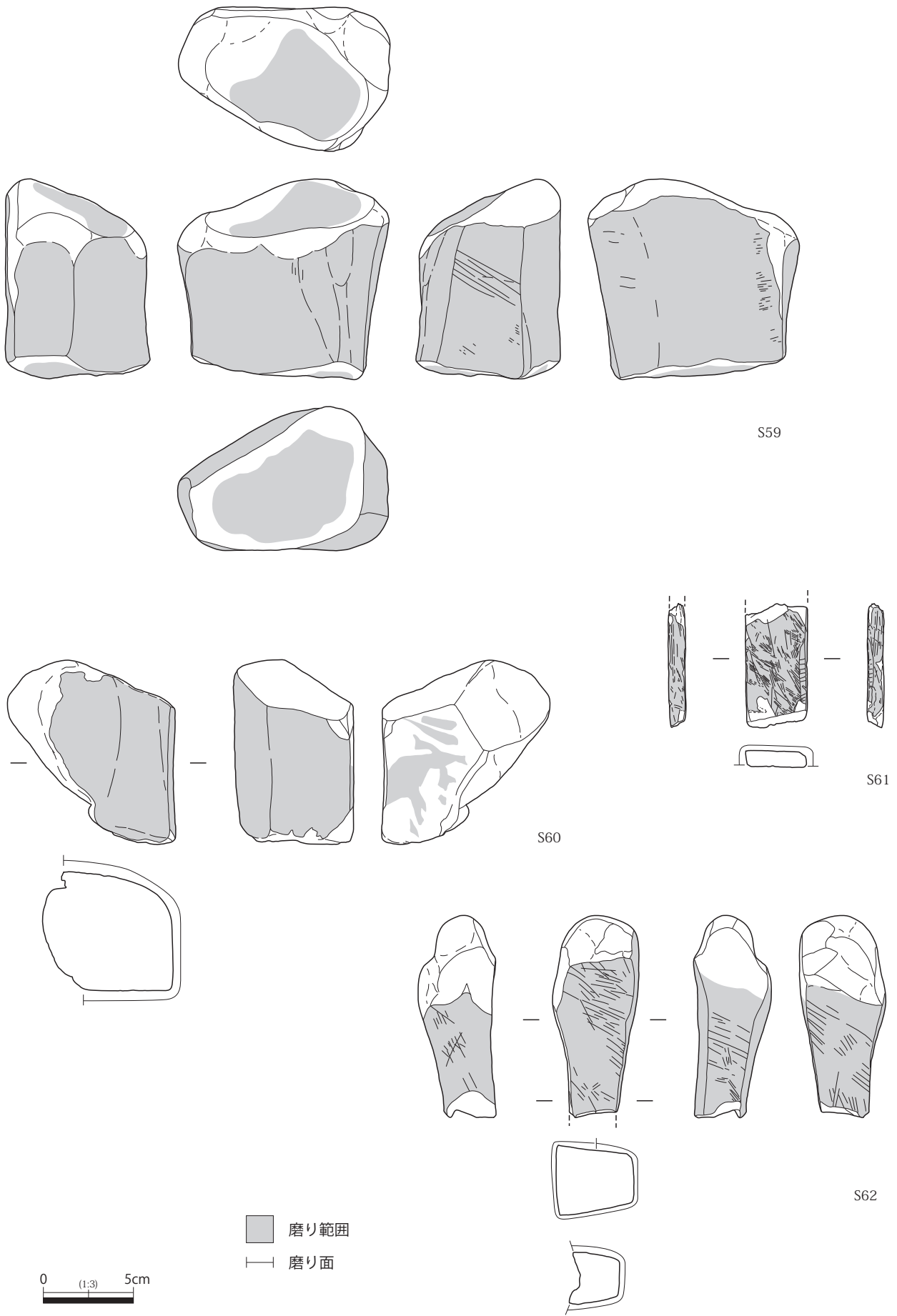
第 237 図 3・4 区出土石器 (7)



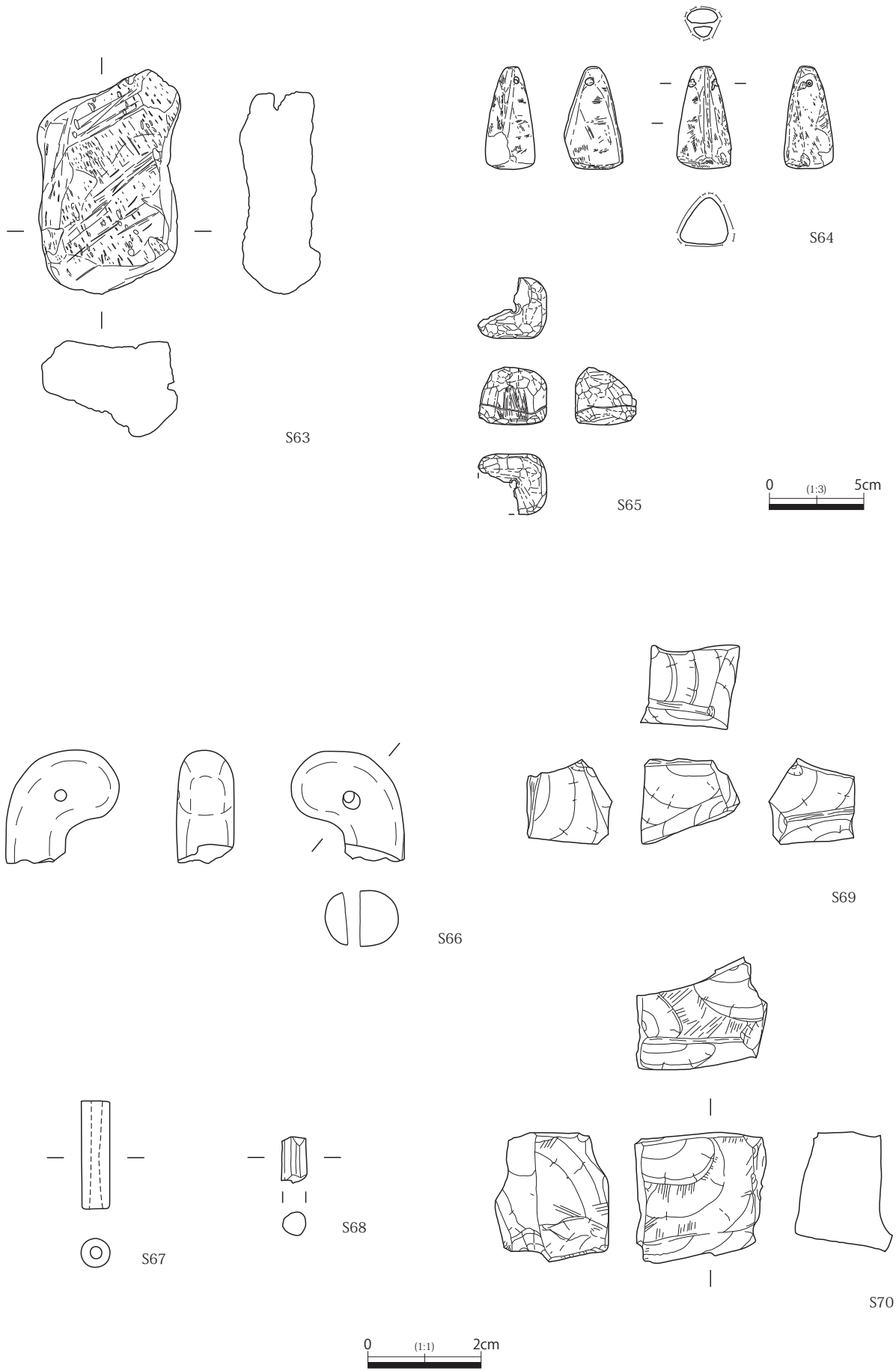
第 238 図 3・4 区出土石器 (8)



第 239 図 3・4 区出土石器 (9)



第240図 3・4区出土石器 (10)



第 241 図 3・4 区出土石器 (11)

的に使用しており、敲打痕が全周で認められる。S21は第4層、S22は3006溝埋土下層、S23は3438流路、S24は4038溝、S25・S26は第3層、S27は第2-2層で出土した。

砥石（第235～240図、PL.165・166）

S28～S62は砥石である。S29は一端に穿孔されており、携帯用の砥石か。S34・S53・S54は被熱し、煤も付着している。いずれも砂岩と見られる同一の石材が用いられている。S35・S38・S39・S45・S46・S48・S51には刃物による線状痕が多数残る。S51は二次的な被熱により表面が赤変、剥離している箇所が認められる。S59は本来大型品で、破面も砥面として使用している。S28・S29は4038溝埋土下層、S30～S37は4038溝埋土、S38は4221溝、S39は第3層～第4層、S40・S41は3003溝埋土上層、S42は3003溝埋土下層、S43は3102ピット、S44は3125ピット、S46～S49は第4層、S50・S51は第4-1層、S52～S58は第3層、S59・S60・S62は第2-2層、S61は第2層でそれぞれ出土した。

その他（第241図、PL.165）

S63は軽石で、刃物による線状痕が多数残る。砥石として使用されたものか。4191溝で出土した。

S64は第2-2層で出土した不明製品で、丸みをもつ三角錐状を呈し、頂部から少し下に1カ所円孔を穿つ。形態的な特徴は権に似る。下端部をわずかに欠失しており、重量は37.4gを測る。

S65は紡錘車である。平面及び断面形は隅丸方形を呈し、前面に細かな加工・調整痕を残す。側面には刃物によってつけられた線状痕が全周する。中央の孔は片面穿孔されているが十分に貫通できておらず、穿孔過程で割れが生じた未成品の可能性はある。一側面に磨り面があり、砥石を転用したものと考えられる。第4-2層で出土した。

勾玉・管玉・玉作関連遺物（第241図、PL.163）

S66は勾玉で、孔は片面穿孔である。碧玉製で、形態的に古墳時代中期のものと考えられる。第3層で出土した。S67は管玉で、孔は両面穿孔である。素材は緑色凝灰岩か。3003溝埋土上層で出土した。S68は第3層で出土した碧玉製の管玉未成品で、横断面形は多角柱状で細かい面をもっており、未研磨の状態である。S69・S70は碧玉の素材剥片で、擦切溝が認められる。

（3）木器

工具（第242・263・264図、PL.166・178・180）

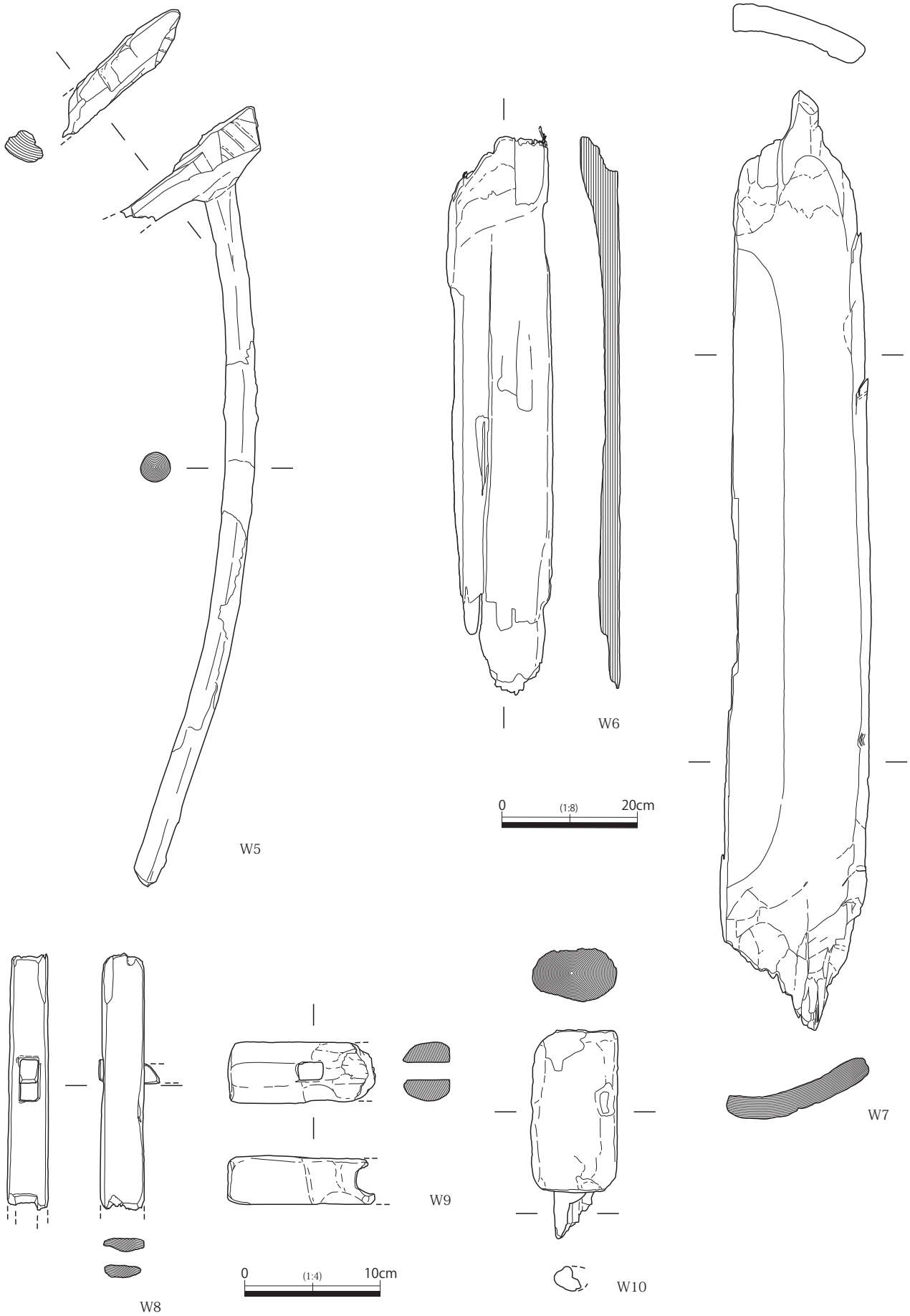
第242図W5は曲柄の斧柄で、法量的に手斧柄であろう。第4層で出土した。W10は横槌で、広葉樹の芯持材を用いる。第3層で出土した。

第263図W190～W195は発火具の火鑽臼である。W190は全体形が分かる資料で、最大長52.7cm、最大幅4.7cm、厚さ2.6cmを測る。いずれも針葉樹が用いられており、柾目材が多い。W193は樹種同定を行った結果、スギであった。W190は4191溝、W191・W193は第4-4層、W192は4192溝、W194は3003溝埋土下層、W195は3003溝埋土上層でそれぞれ出土した。

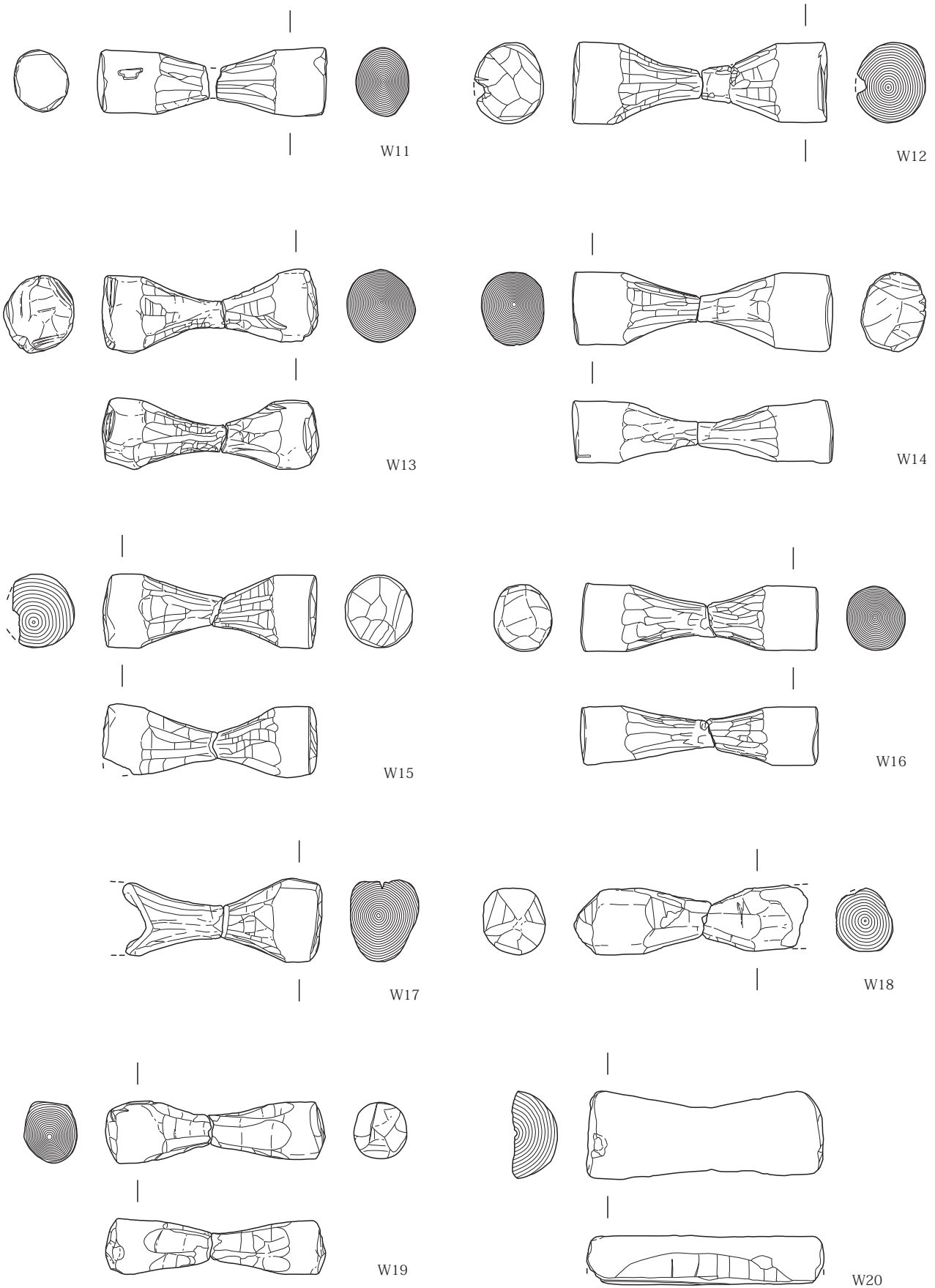
第264図W198は付け木で、粗く加工した枝の一端が焦げている。なお、図化していないが端材や細枝を用いた付け木は3003溝・3006溝・4038溝を中心に大量に出土している。

農耕土木具（第242図、PL.167）

W6・W7は田舟である。どちらも針葉樹で、W7は樹種同定の結果スギであった。W6は3433溝で出土し、W7は3006溝木製構造物に転用されていた。W8は角柵型田下駄の柵及び棧、W9は馬鋤



第242図 木器 工具、農耕土木具



第243図 木器 編み具

の台と考えられる。どちらも第4層で出土した。

編み具・紡織具（第243・244図、PL.167・168）

第243図 W11～W20は木錘である。このうちW11～W17は4109土坑でまとまって出土した。それ以外のW18は4193溝、W19は4221溝、W20は4191溝で出土している。4109土坑で出土したW11～W17と4221溝で出土したW19はいずれも亜鈴形を呈し、円柱状の素材の中央を削り込んで仕上げる方法が想定できる。W18は端部を圭頭状に加工している。いずれも広葉樹の芯持材が用いられているが、W20のみ広葉樹を半截した樹皮の残る芯去材を使用しており、平面形は紐を緊縛する箇所のみ粗く削り出された略X字形、横断面形は半月形を呈す。樹種同定を行った結果、W12・W19・W20にはヤブツバキ、W18にはコナラ節の材が使用されたことが分かった。

第244図 W24は布巻具、W25は舞羽（総かけ）、W26は紡錘車である。いずれも針葉樹が用いられている。W24・W26は3003溝、W25は3006溝で出土した。

運搬具・漁労具（第244図、PL.168）

W21は3437流路で出土した櫂で、表面に鉋による加工痕が認められる。樹種はサカキである。W22・W23はアカトリで、どちらも針葉樹と見られる。W22は3003溝埋土最下層、W23は第4層で出土した。

調理加工具・食事具・楽器（第245図、PL.168）

W27～W29は杓文字で、幅広でやや大型のもの（W27）と小型のもの（W28・W29）がある。W27は第3層、W28は第2-2層、W29は3003溝（3002集石）で出土した。いずれも材は針葉樹と見られ、W27は樹種同定の結果スギであった。

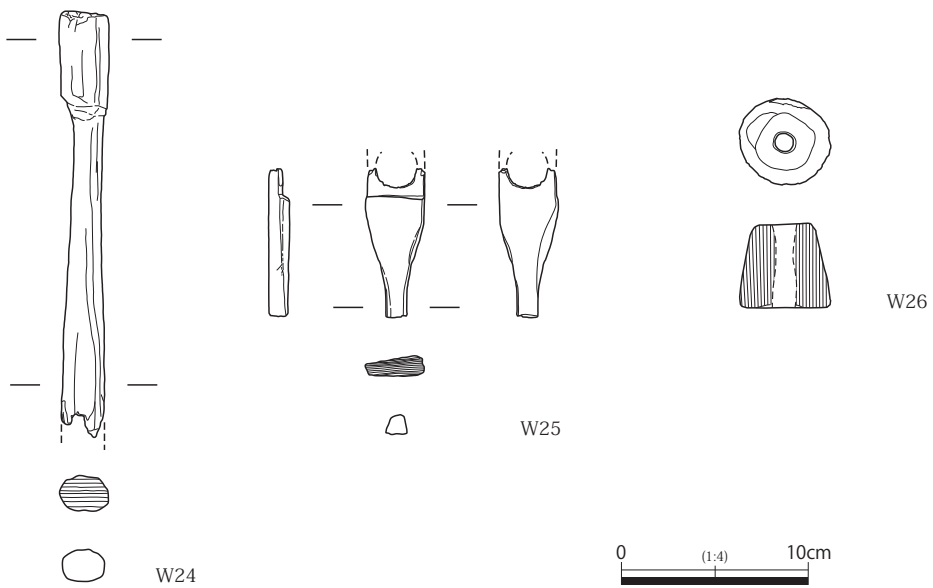
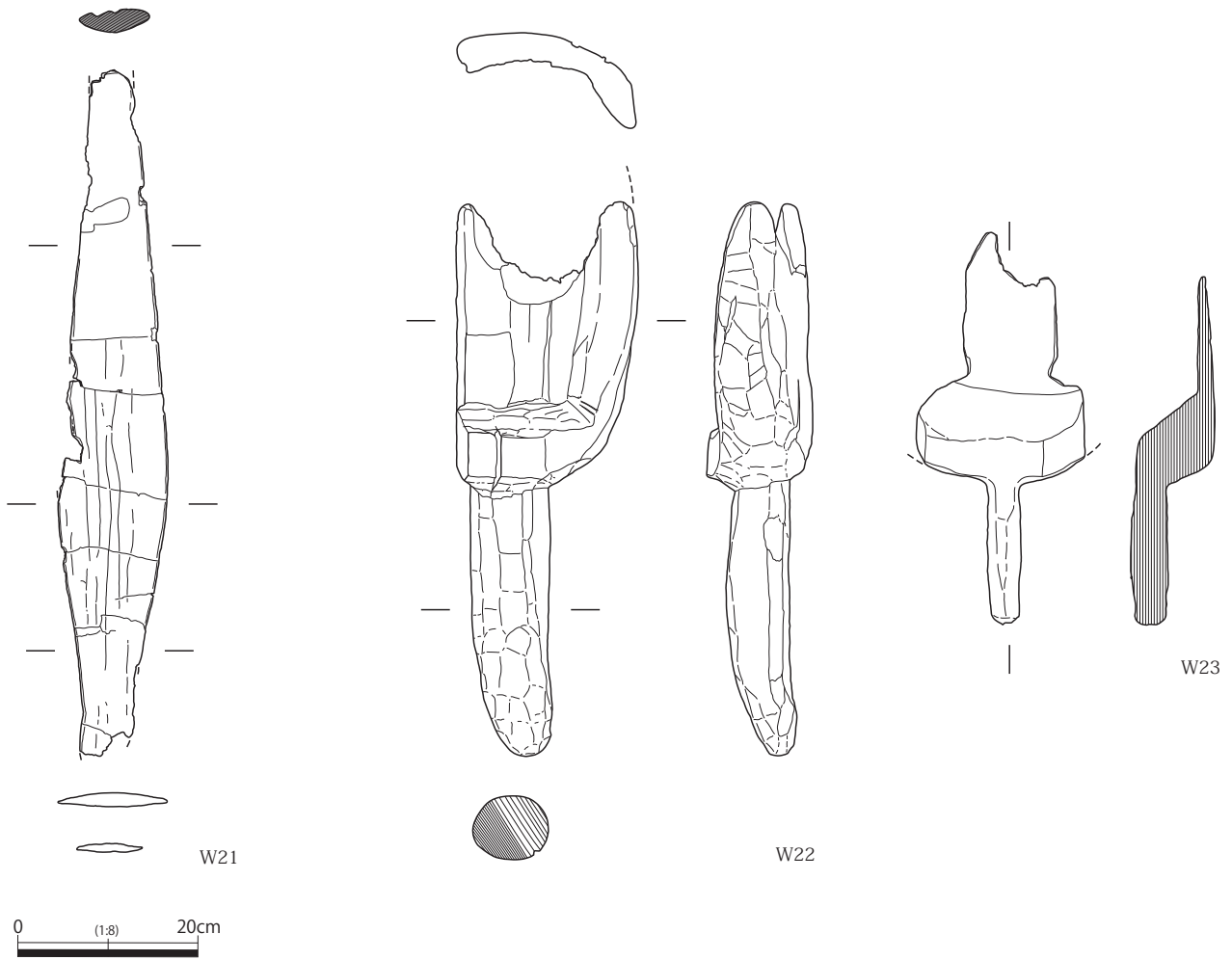
W30～W33は箸で、概ね径7mm前後に仕上げられている。材はどれも針葉樹であろう。W30は4038溝で出土したが、その他は第2-2層及び第2層上面で出土しており中世以降のものである。

W34～W37は琴柱である。等脚台形を基本形にし、上底に弦受けの溝をつけ、下底中央に半円形あるいは三角形の切欠きを入れて双脚としている。W34・W35は両側辺が湾曲しながら下底に至るタイプで、W35がやや雑なつくりであるのに対しW34は精緻に仕上げられている。W34の切込みは小さく半円形を呈す。W36・W37は六角形の両端を断ち落とした形状に近く、特にW37は全体形がM字形となる。W36のみ柾目材で、それ以外は板目材である。樹種同定の結果、材はW34がヒノキ、W35・W36がスギであった。

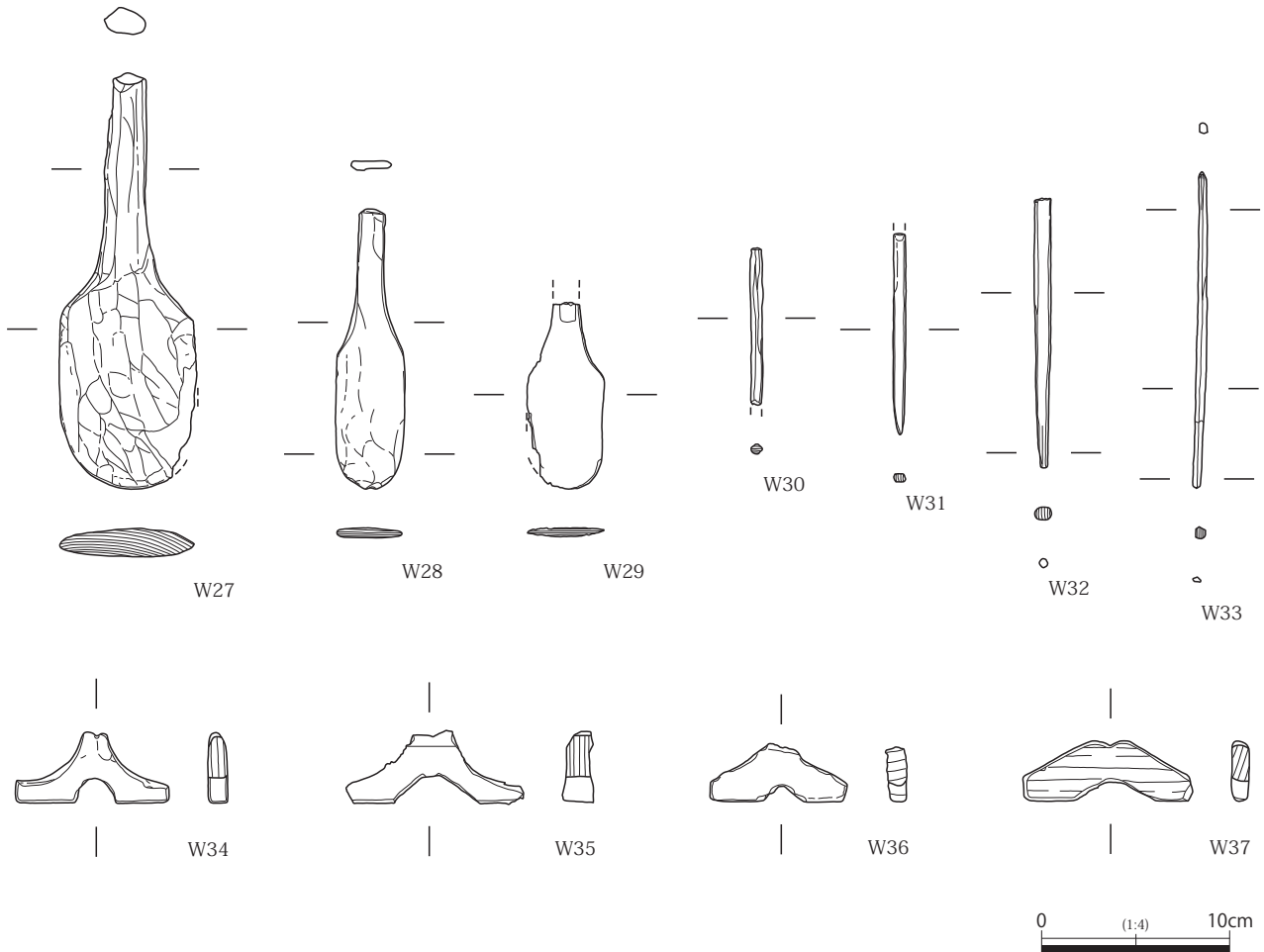
服飾具（第246図、PL.169）

W38・W39は一端を尖らせた断面円形の棒状品で、法量的に見て留め針の可能性はある。W38は4194溝、W39は3014溝で出土した。

W40～W43は連歯下駄である。鼻緒孔の前壺を左右いずれかに片寄せ、後壺を後歯の前にあけており、台と同じ幅で縦断面がほぼ台形を呈す歯をもつ。『木器集成図録 近畿古代篇』〔町田・上原編1984〕（以下、木器集成図録）の分類によればすべてBⅡ類で、平面形が隅丸長方形となるW40・W41はBⅡa型式、前端に対して後端がやや丸みをおびるW42・W43はBⅡa型式もしくはBⅡb型式となろう。W40・W41は消耗によるものか歯がかなり短い。W40は前歯の中心に溝が掘られ、W41は独立する4歯をもつ特異な形状となる。W41は左足裏の磨滅痕が凹みとなって残っており、計測値は約23cmを測る。すべて針葉樹の縦木取りで、W40は樹種同定の結果スギであった。W40は4038溝、W41は4099溝、W42は第4層、W43は3006溝埋土最下層で出土している。



第244図 木器 漁具、紡織具



第245図 木器 調理加工具、食事具、楽器

容器 (第247～253図、PL.170～173)

挽物椀・皿、剝物皿 第247図 W44～W47・W49～W52は挽物の皿または椀で、W44～W47は白木作り、W49～W52は漆器である。W44・W46は円盤状の平高台を削り出す皿である。W45は皿もしくは坏となろうか。W47は皿で、薄く精巧に作られている。W44・W47は3006溝 (W47は最下層)、W45は4038溝、W46は3014溝で出土した。

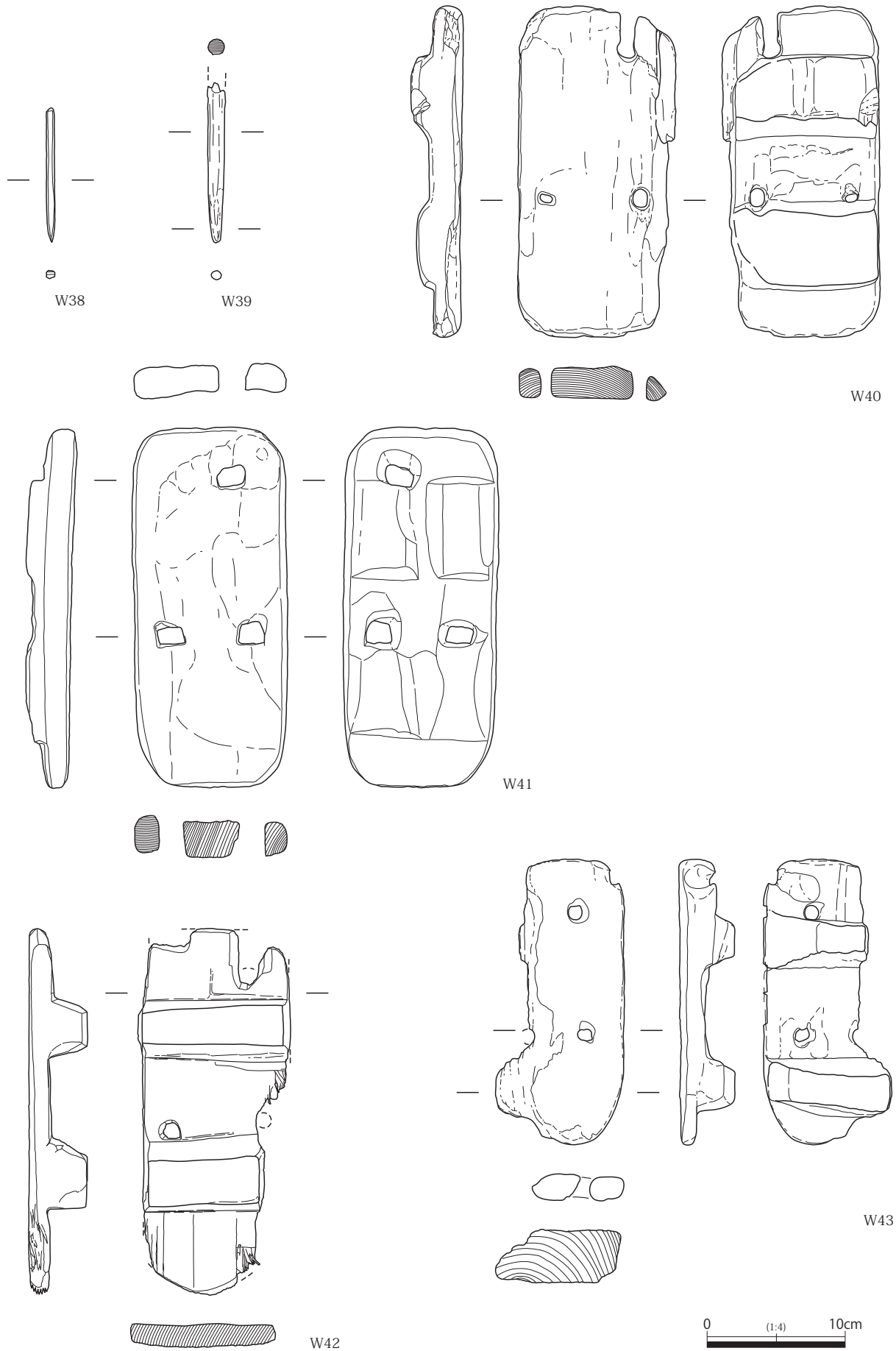
W49～W52は総黒色の漆器椀である。W49～W51は底部に中窪みとなる円盤状の擬高台を作出する。W49は口縁部の相対する2方の内外に朱漆の点描を施す。W50・W51も見込に朱漆で文様を描いている。W52は外反する口縁部をもち、底部に輪高台を作出する。W49は4008溝、W50は第2-1層、W51・W52は第1層で出土しており、すべて中世以降のものである。

W48は剝物の皿で、内面は黒彩されている。漆とは見られず柿渋か。第4層で出土した。

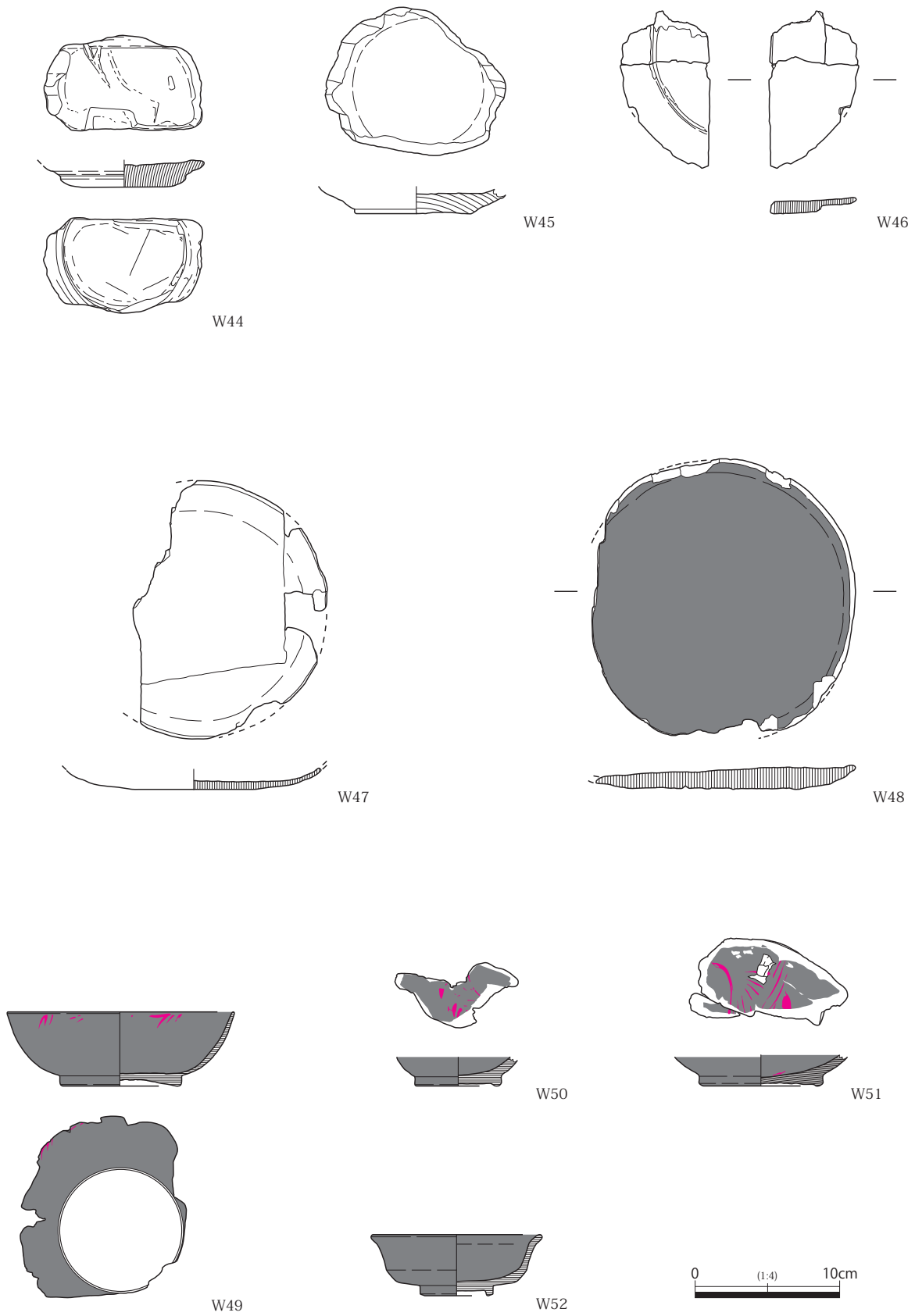
なお、古代に帰属するW44～W48の樹種を同定した結果、すべてケヤキが用いられていた。

その他 W53はケヤキ製の容器脚、W54は容器把手である。W55は桶の側板か。W53・W55は3003溝埋土上層、W54は第4-4層で出土した。

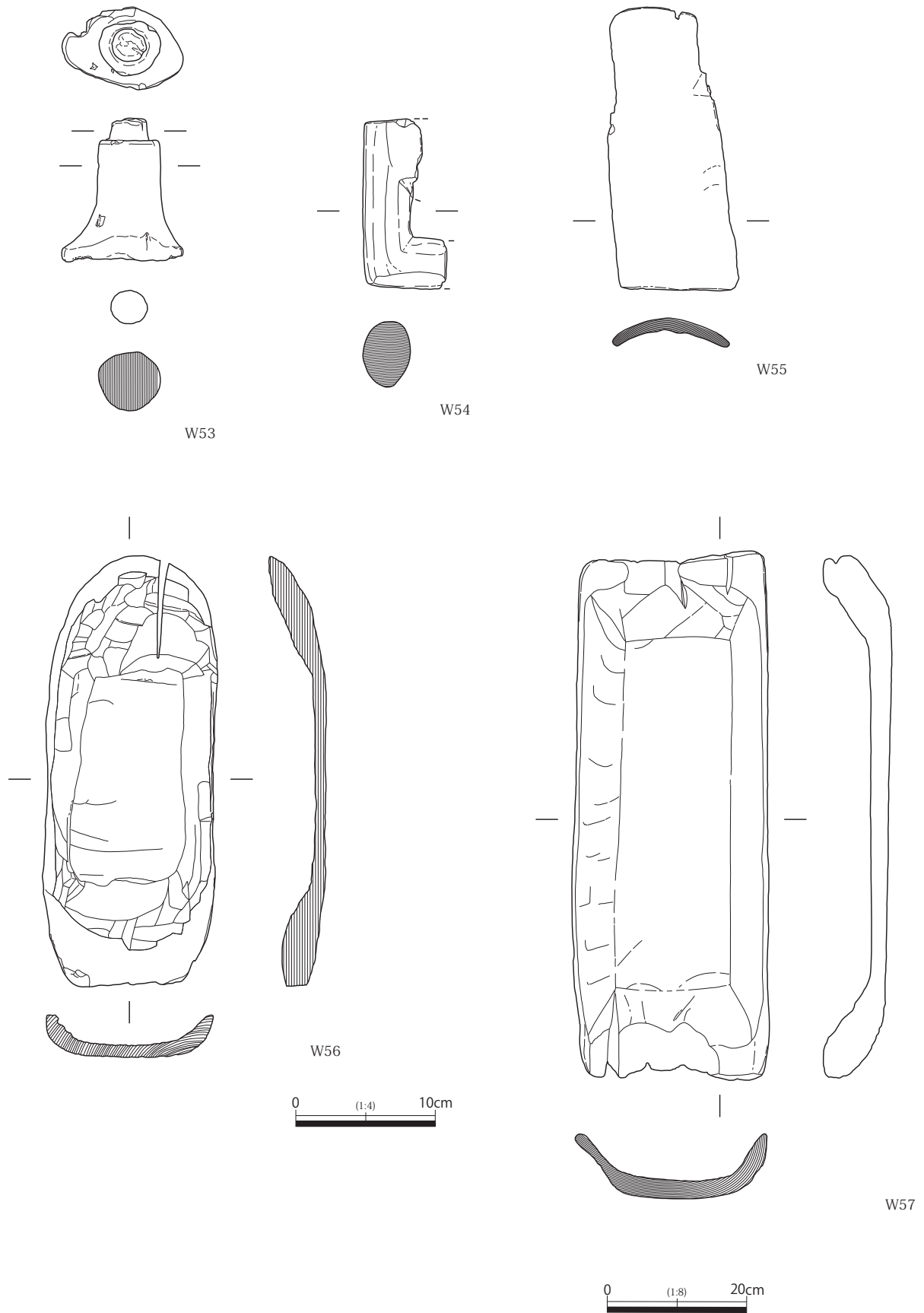
槽 W56・W57は剝物の槽である。W56は全長約30cmで舟形を呈す。粗い加工痕が顕著に認められる。W57は全長約75cmを測り平面長方形を呈す。材はどちらも針葉樹と見られる。W56は4192溝、W57は4038溝底面付近で出土した。



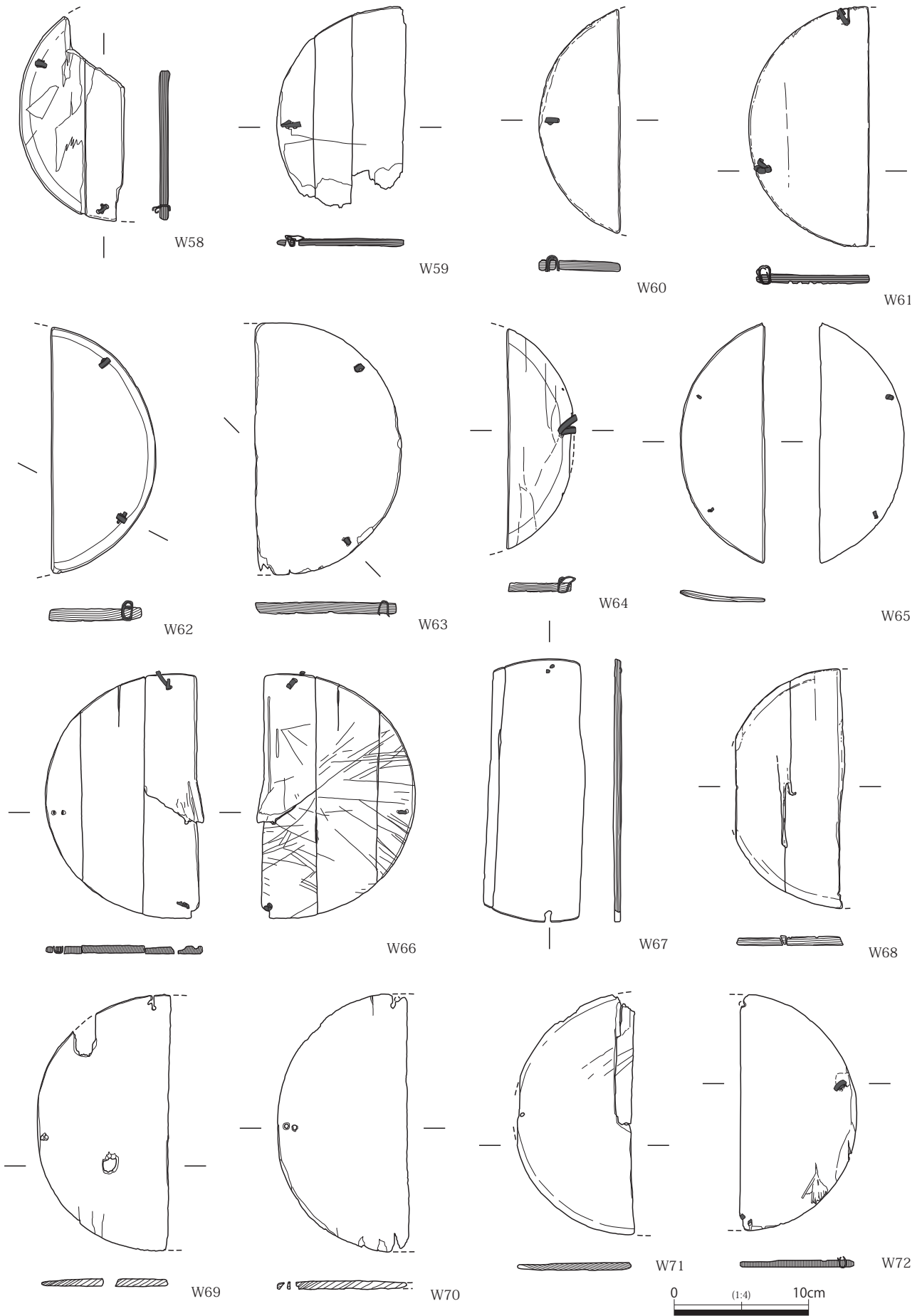
第246図 木器 服飾具



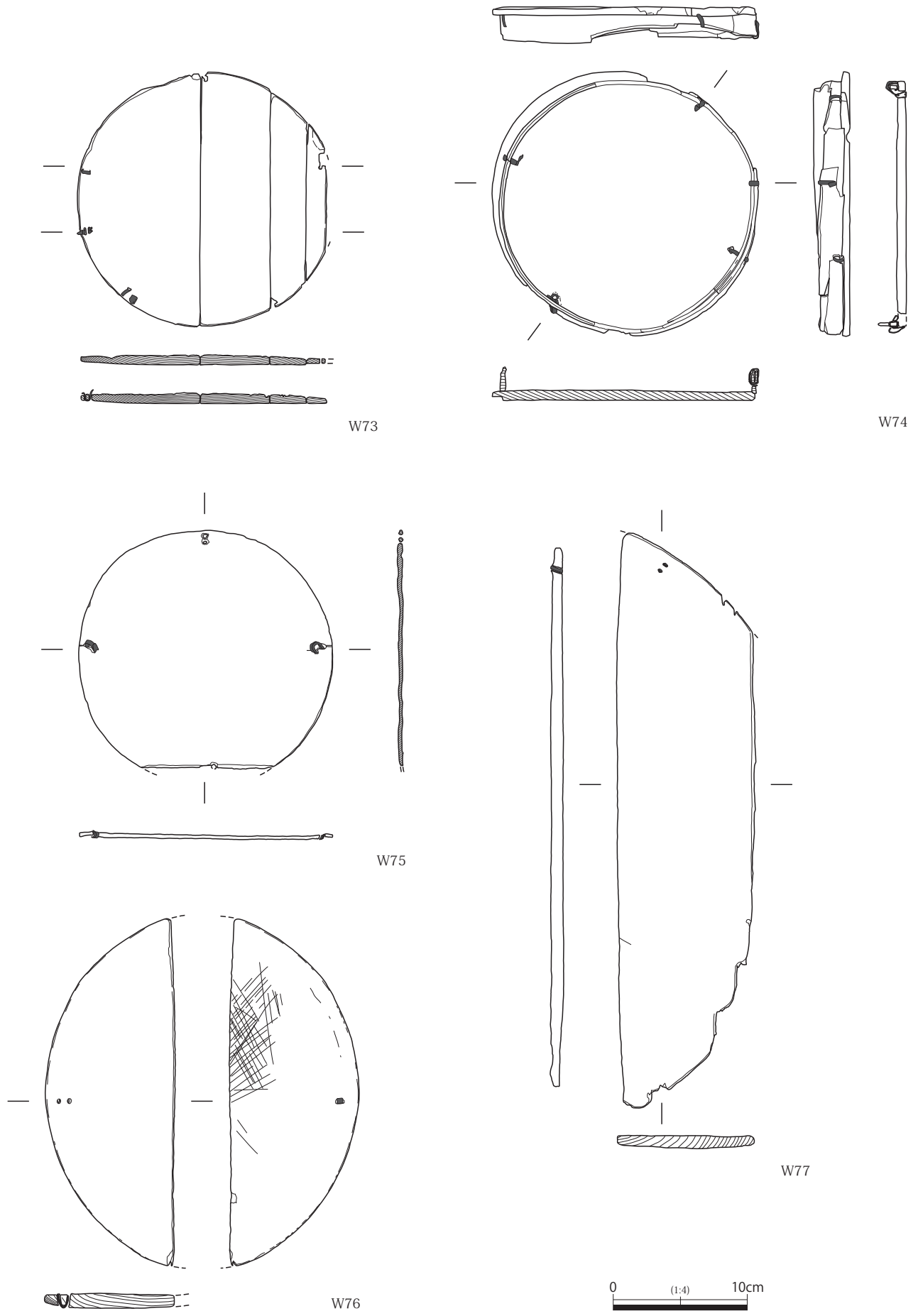
第247図 木器 容器 (挽物・割物) (1)



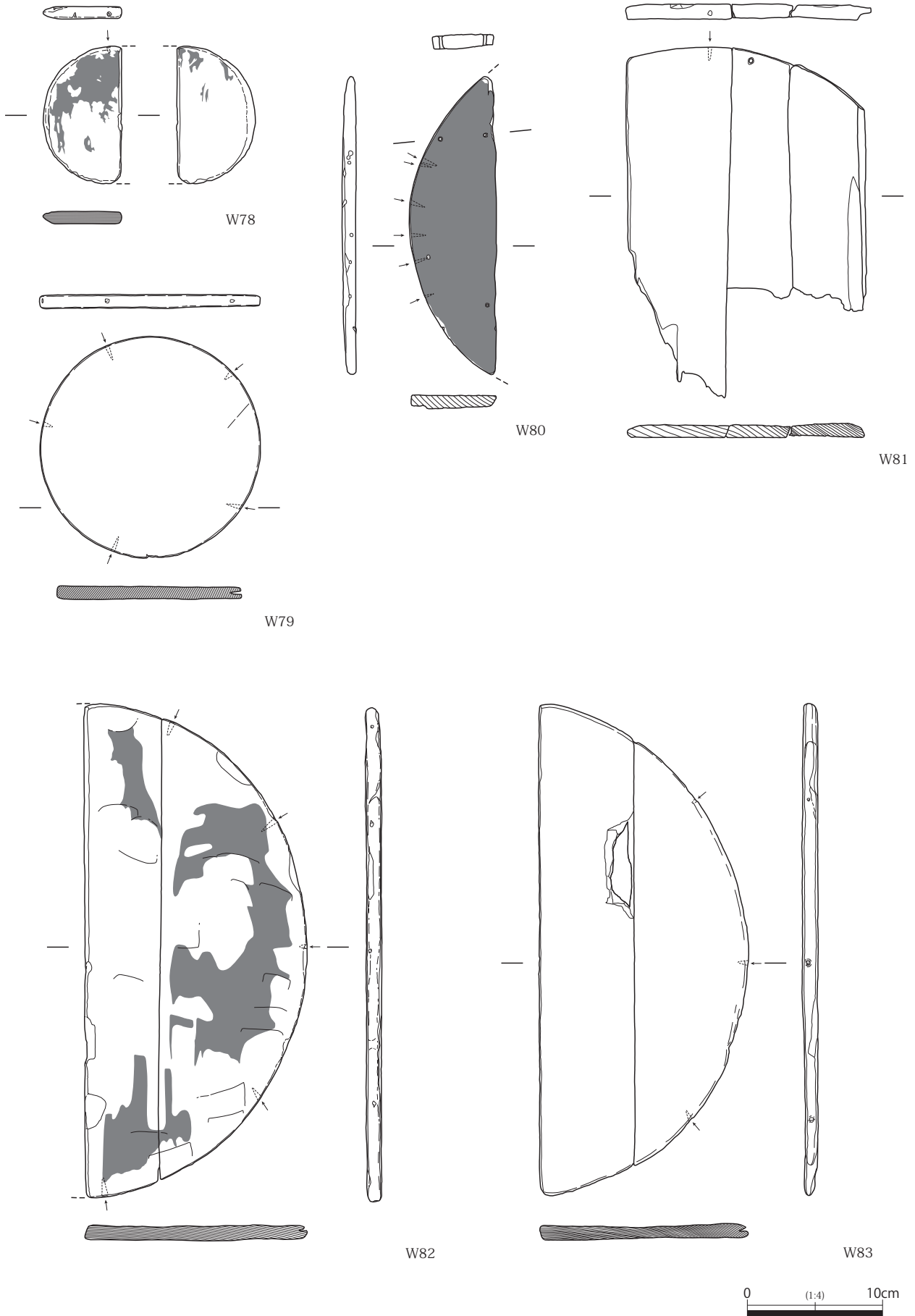
第248図 木器 容器 (挽物・割物) (2)



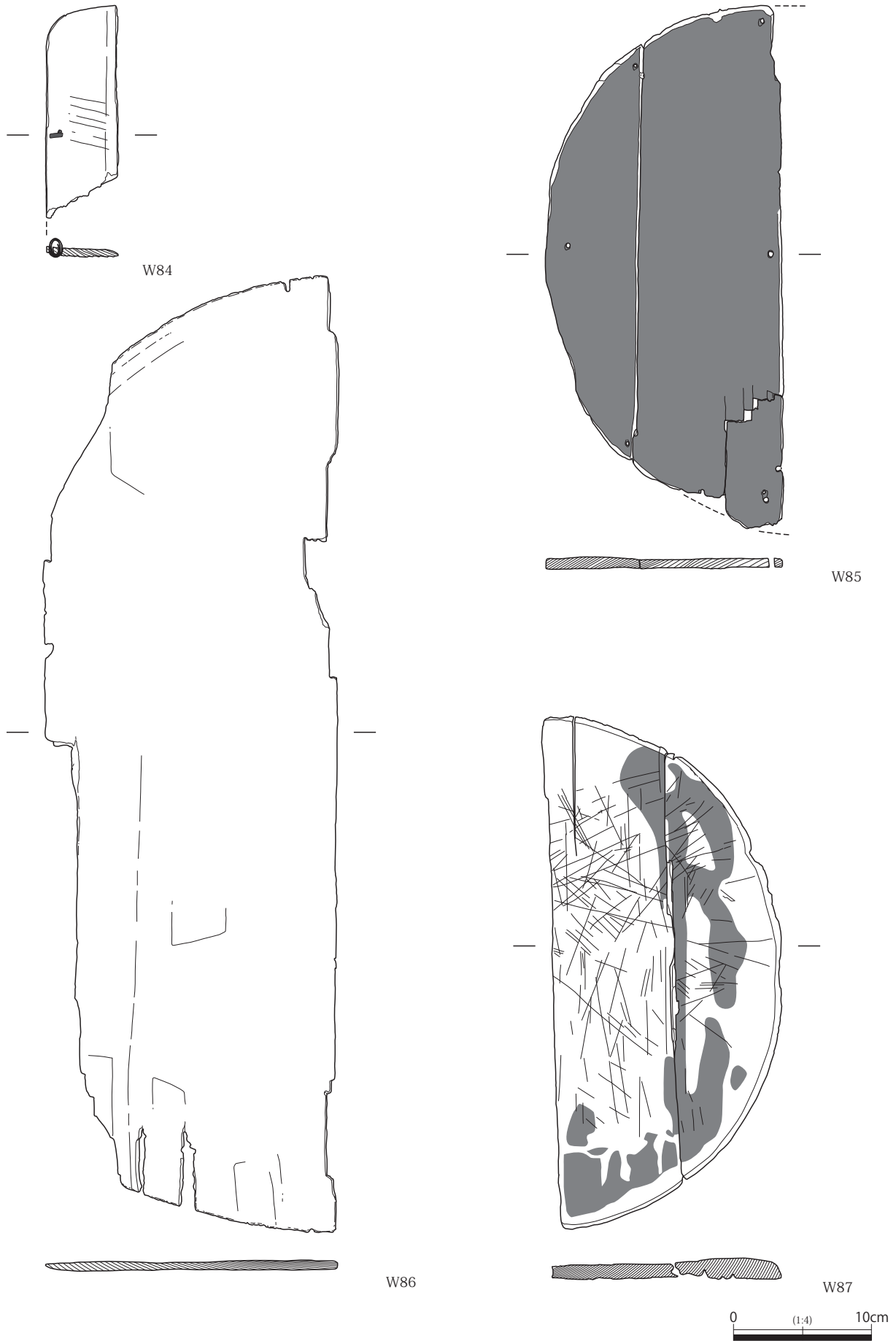
第249図 木器 容器(曲物) (1)



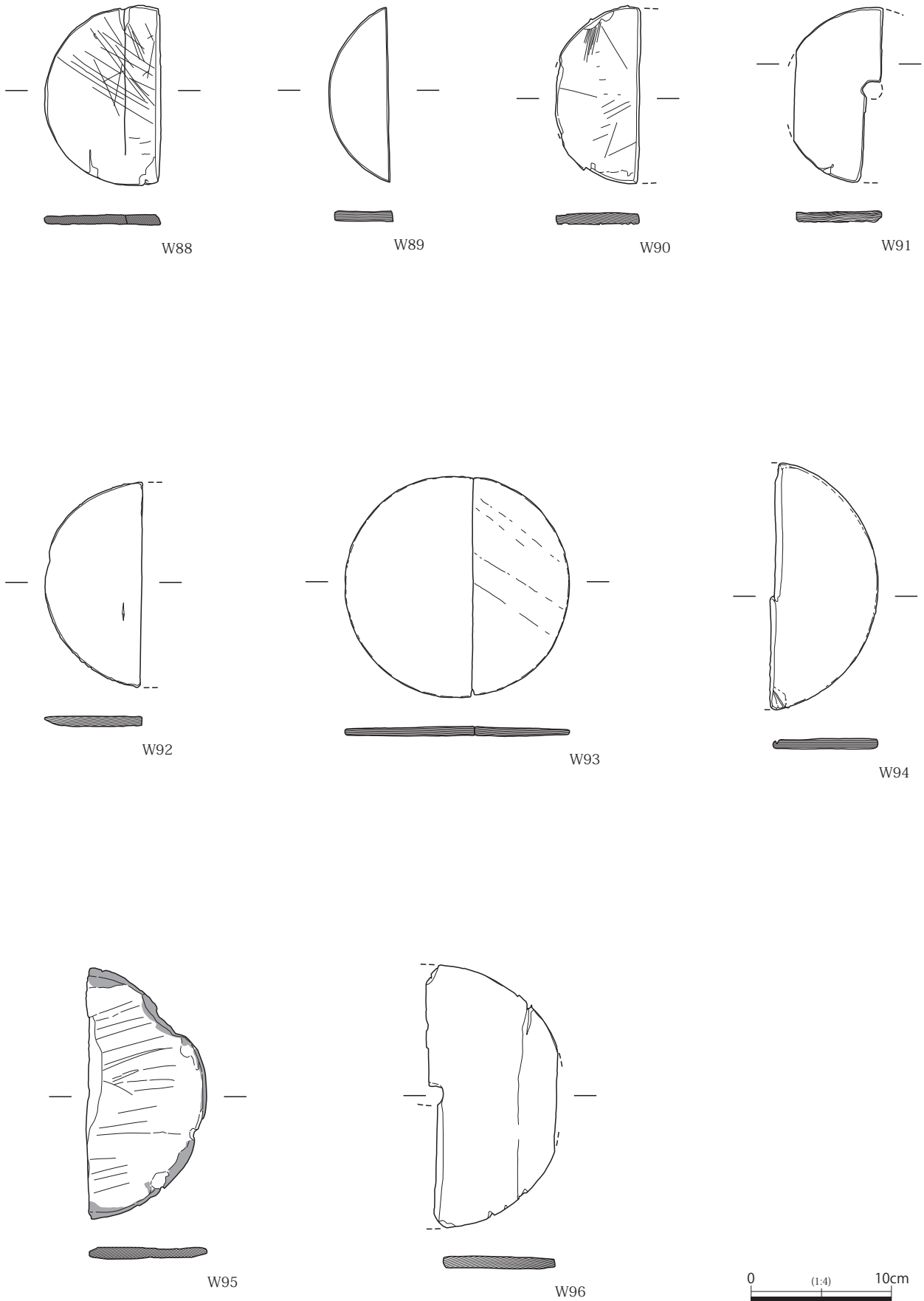
第250図 木器 容器 (曲物) (2)



第251図 木器 容器 (曲物) (3)



第252図 木器 容器（曲物）（4）ほか



第253図 木器 盖板

曲物 当遺跡では多数の曲物が出土しており、遺存状況の良いもの、特徴的なものを選別して図化、掲載した。図化、掲載できたのは W74 を除き蓋板あるいは底板である。側板の破片も一定量出土しているが、ケビキ線に沿って細片化しているため図化、掲載できなかった。

第 249 図 W58 ～ 第 250 図 W77 は円形曲物で、『木器集成図録 近畿古代篇』の分類によれば樺皮結合曲物 B に属する。全体形を窺い知ることのできる資料は W73 ～ W75 程度で少ないが、概ね 2 ～ 4 カ所で側板を樺皮紐によって結合したようである。W58・W62・W64・W68・W72 は内面に側板位置を決める針書き刻線が巡る。また、W66・W76 には多数の刃物痕が認められる。W74 は側板まで残っており全体構造が把握できる。側板は幅約 2 cm、厚さ 3 ～ 4 mm の薄板を針書き刻線に沿って周回させており、結合方法だけでなく側板幅から見ても蓋となる可能性が高い〔奈良文化財研究所 1984〕。側板は重複部分を上方（側板＋側板）、下方（側板＋側板＋蓋板）の 2 カ所で樺皮紐によって綴じ合わせており、さらに側板は樺皮紐により 4 カ所で蓋板と結合させる。径が復元できる資料からすれば W58 ～ W76 のほとんどが径約 17 ～ 20 cm におさまり一つの規格として推定できるが、W77 は径 40 cm 以上となる大型品である。

第 251 図 W78 ～ W83 は円形曲物のうち針結合曲物で、曲物の身（底板）となる可能性が高い。W78 は側面に木釘孔が確認できるため上記に含めたが、内外面とも黒彩されており径も小さいため、曲物底板を蓋として転用したものとも考えられる。W79 は全体が遺存しており、計 5 カ所の木釘孔が認められる。W80 は全体の 1/4 程度しか遺存していないが、側面に 6 カ所の木釘孔があり、補修孔を含む可能性がある。内面と見られる側を黒彩する。W82・W83 は径 36 cm の大型品で、遺存する木釘孔からすれば全体で 2 カ所 4 ～ 5 対の木釘で側板を固定したと推測される。W81 も同規模の製品となろう。

第 252 図 W84 は形状から長方形曲物（折敷）の可能性はある。W85 は周縁部に穿たれた孔が各 1 カ所ずつであるため通有の方法では側板と結合できず、蓋あるいは底板の中央にも孔があり、円形曲物の大型品と断定できない。W86 は楕円形曲物（折敷）の可能性が高いが、針書き刻線は認められるものの樺皮紐の結合孔が見られない。W87 は片面に黒彩されるが樺皮紐結合孔、木釘孔ともに見られないため、曲物もしくは桶底板であろうか。刃物痕が多数認められる。

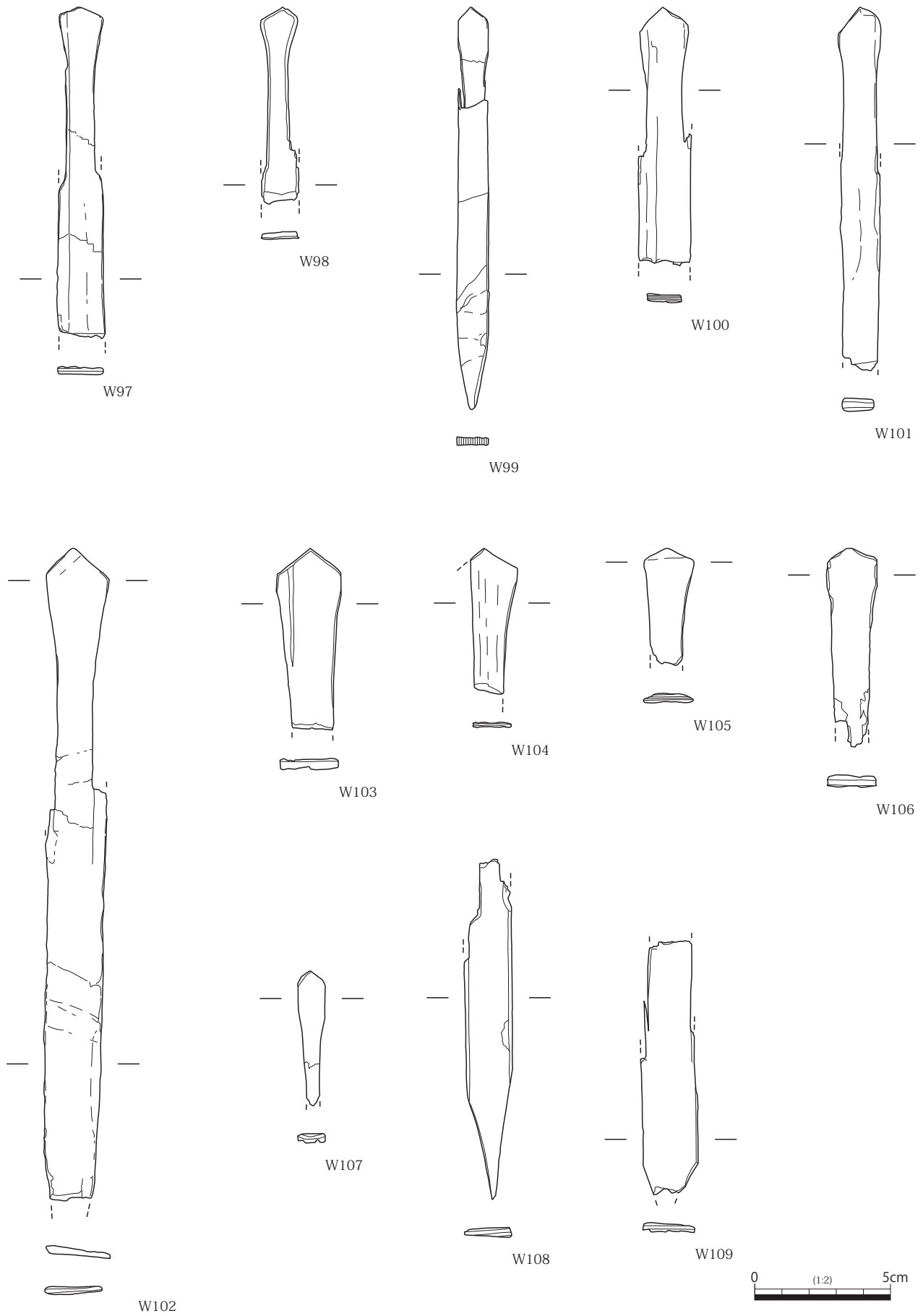
W58・W60 ～ W63・W67・W68・W73・W77・W80・W82・W84・W86 は 4038 溝、W59・W71・W74・W78・W79・W87 は 3003 溝、W66・W69・W76・W83・W85 は 3006 溝、W70 は 3164 土坑、W75 は 3167 ピット、W64・W65・W81 は第 4 層、W72 は第 3 層からそれぞれ出土した。

蓋板 第 253 図 W88 ～ W96 は樺皮紐結合用の孔または木釘孔が見られないため蓋板と判断した。直径が約 13 cm の W88 ～ W91、15 ～ 16 cm の W92・W93、18 ～ 19 cm の W94 ～ W96 という規格が認められる。W91・W96 は蓋板の中央に円孔をもつ。W88 は刃物痕が多数残る。

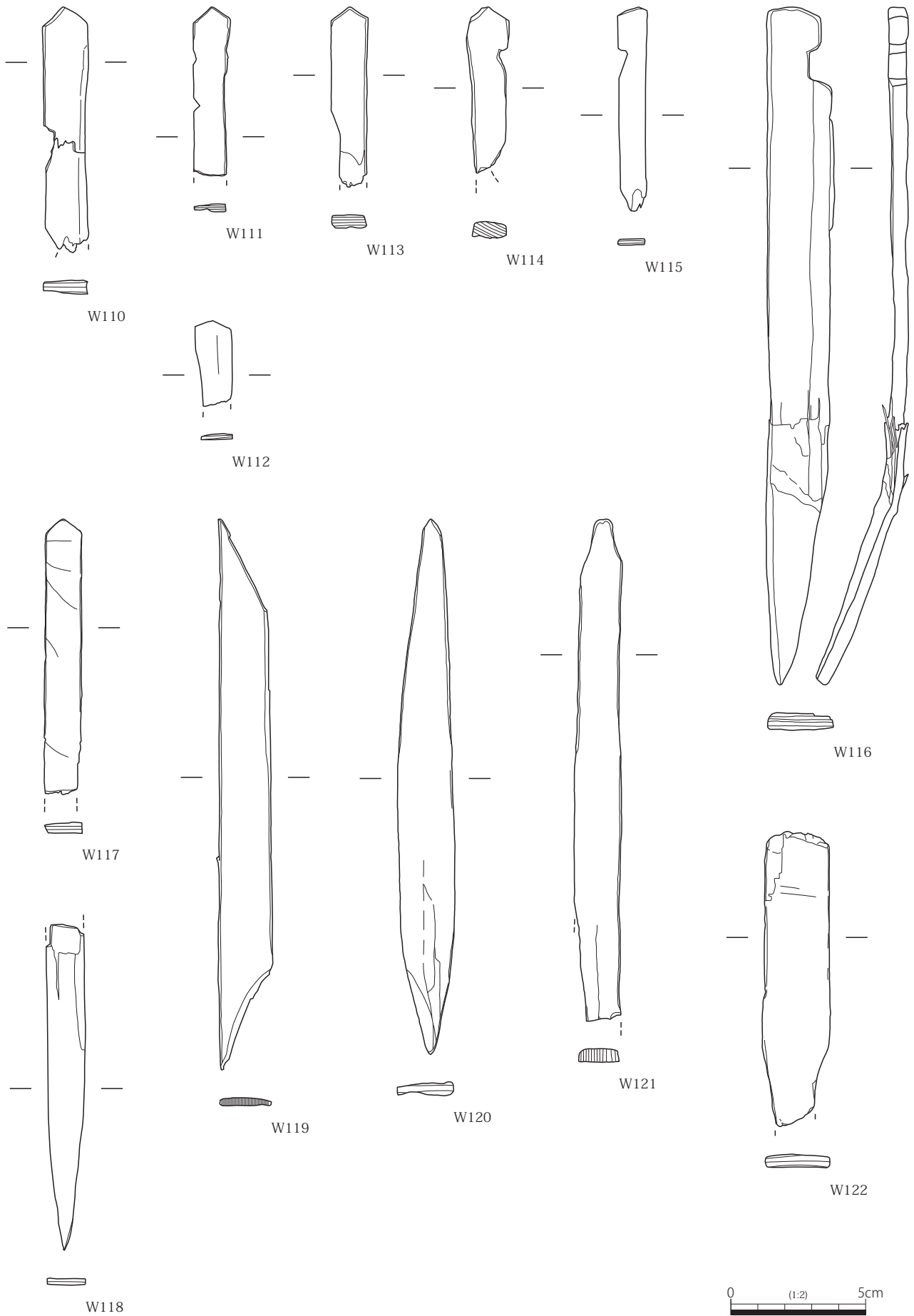
W93・W93・W94 は 4038 溝、W90 は 4194 溝、W91 は 3003 溝、W88・W92 は 3006 溝、W89 は 3014 溝、W95・W96 は 3433 溝から出土した。

祭祀具（第 254 ～ 262 図、PL.174 ～ 177）

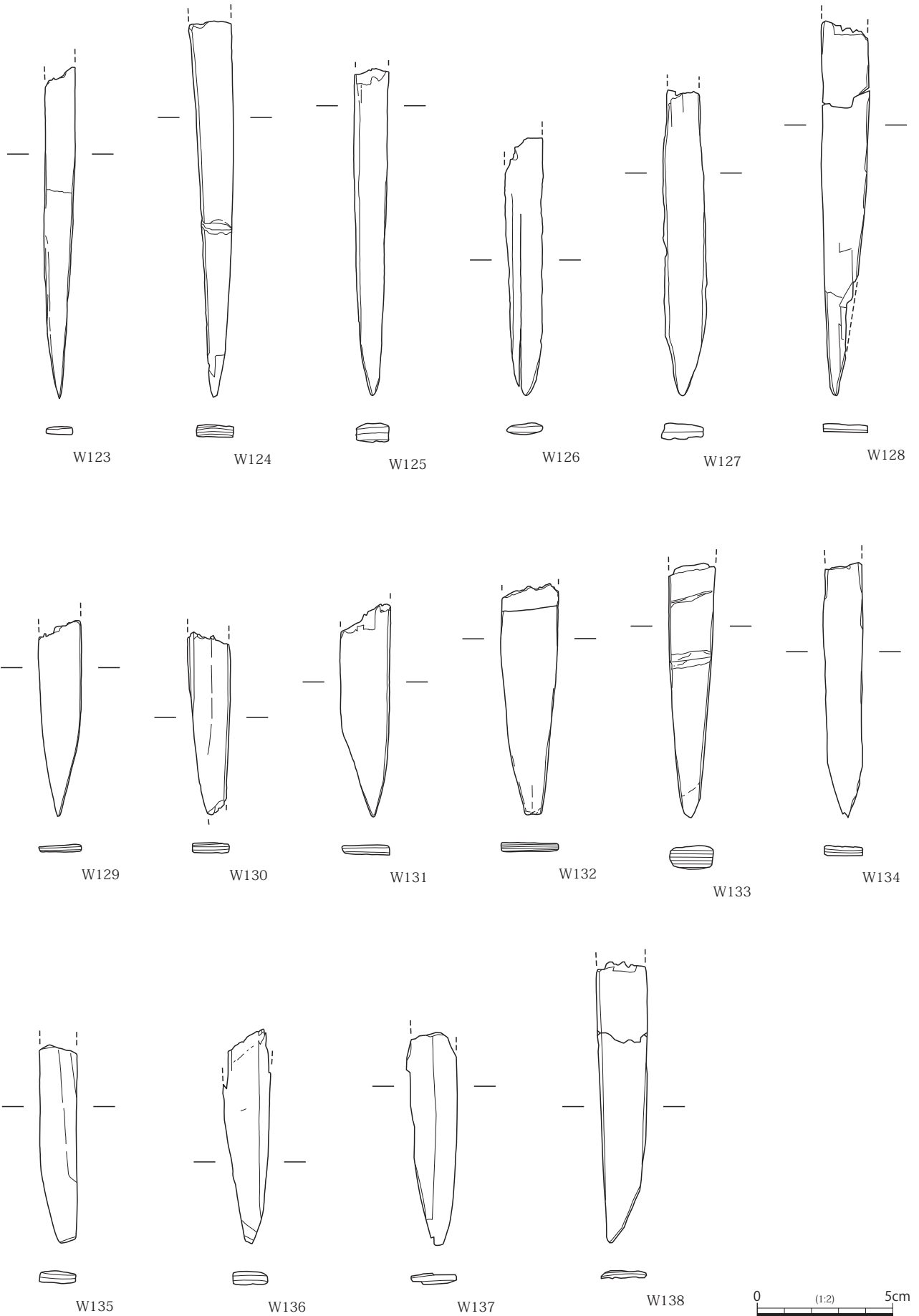
斎串 第 254 図 W97 ～ 第 257 図 W146 は斎串である。W97 ～ W107 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置の左右両側に一对の切込みを行うタイプで、細身で小型品の W97 ～ W101・W105 ～ W107 と幅広で大型品の W102 ～ W104 が見られる。W108・W109 は上半部を欠失しているが、両側に切込みを窺わせる欠損面が認められるため、このタイプと判断した。全体



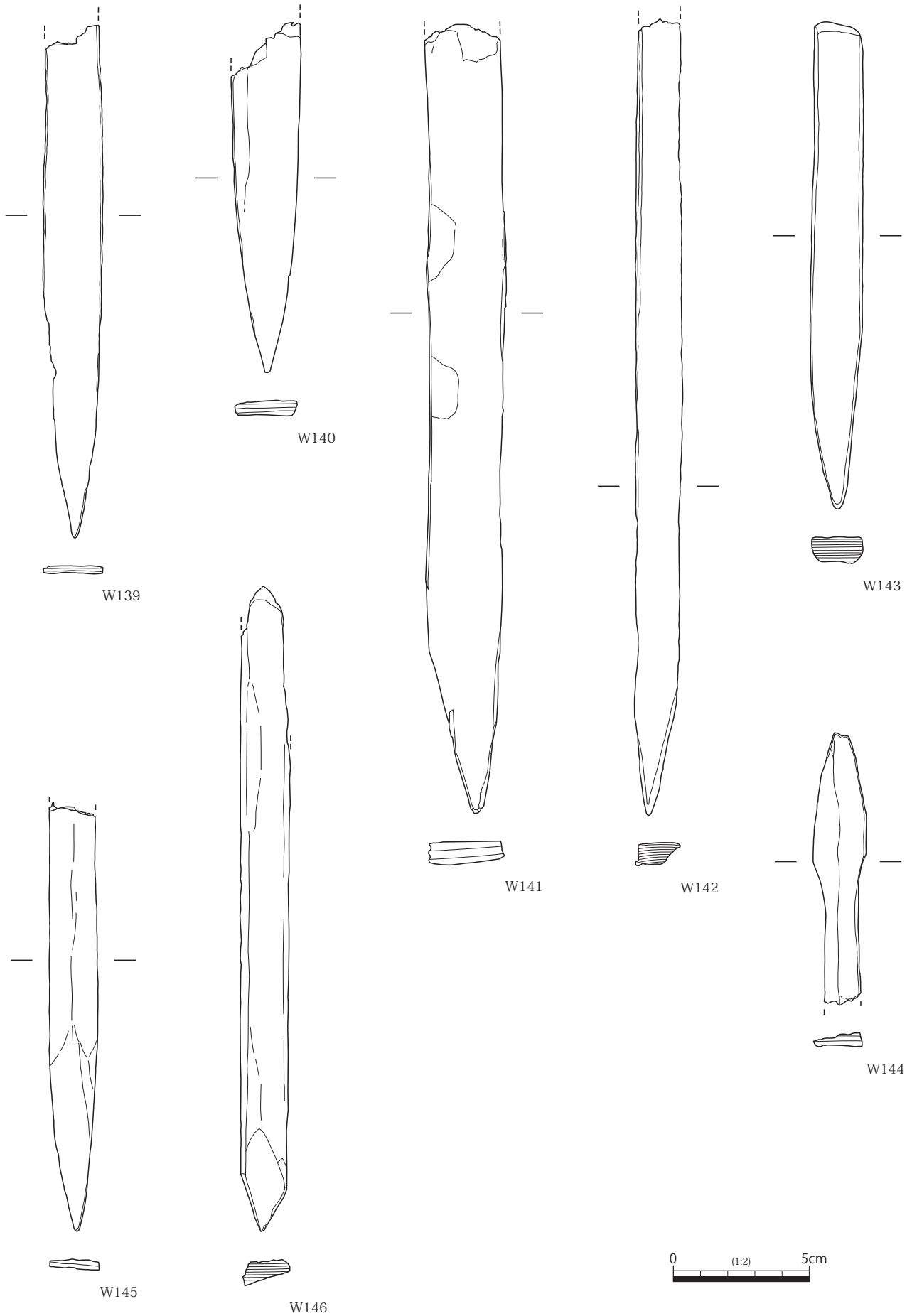
第254図 木器 齋串 (1)



第255図 木器 齋串 (2)



第 256 図 木器 斎串 (3)



第 257 図 木器 斎串 (4)

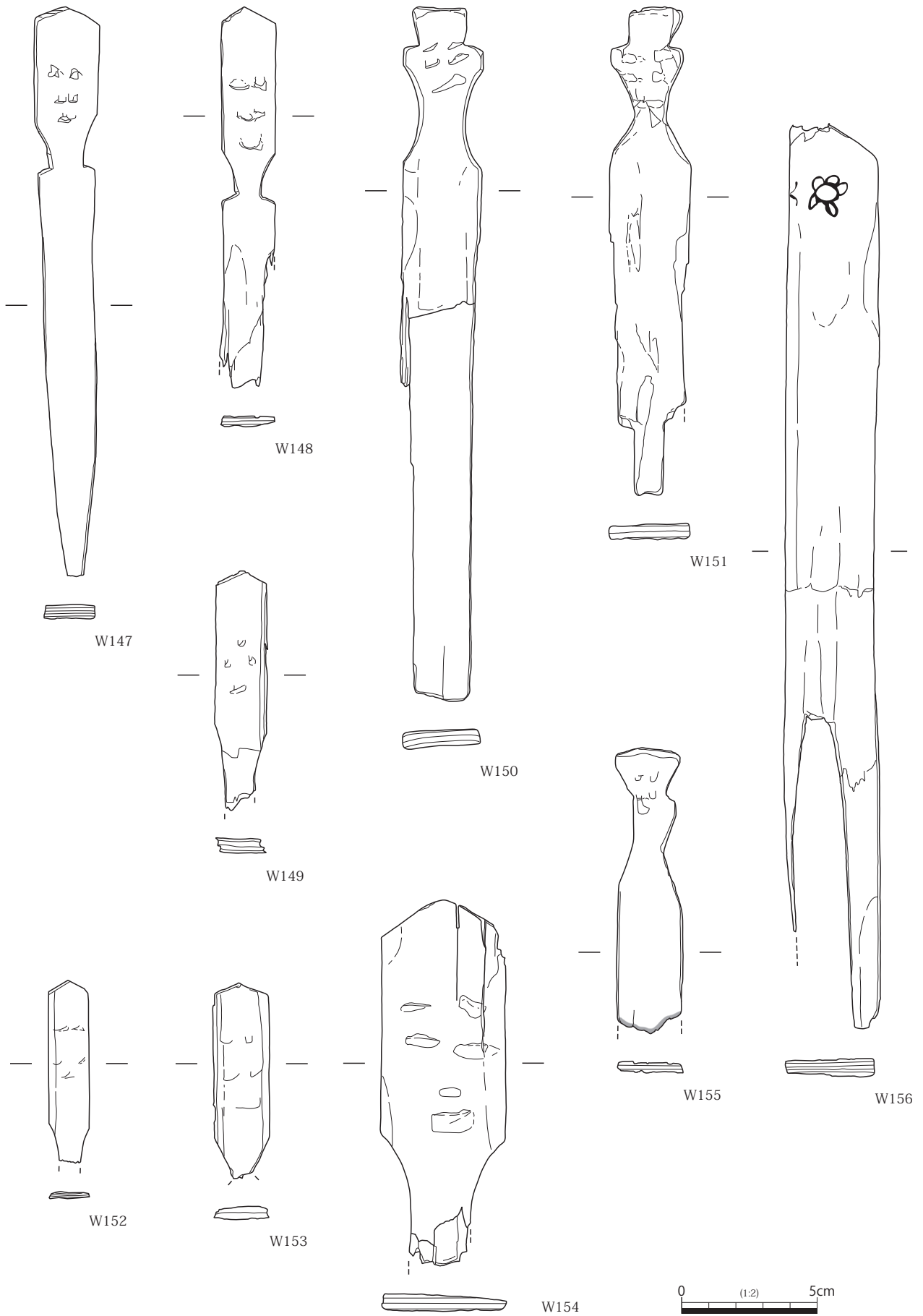
形が窺える W99・W102 は木器集成図録の分類によれば C III 型式にあたる。

第 255 図 W110・W111・W114 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置の片側面に V 字状の切欠きを 2 カ所行うタイプである。切欠きが小さく間隔も狭い W111 と大きく間隔も広いもの W110・W114 が認められる。W112・W113 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置に浅い台形状（皿状）の切欠きを行うタイプである。W115・W116 は上端を圭頭状に作出し、上端から少し下がった位置の片側面にフ字状またはコ字状の切欠きを行うタイプで、薄く小型の W115 と厚手で長さ 25 cm を測る大型の W116 が見られる。W117 は上端を圭頭状に作出し、側面に切欠きを施さないタイプ、W119 は細長い薄板の両端を斜めに切り落として平面形が台形状を呈すタイプで、W117 は木器集成図録分類の C I 型式、W119 は同 A I 型式にあたる。W120 は下端を両側から削って尖らせ、上端に向かって先細りとなるタイプ、W121 は上端を両側面から窄まるように削り出すタイプである。W118 は W117 と同じ遺構・層位から出土しており、幅や木取りが同じであるため、接合しないが同一個体の可能性がある。W122 は幅広の薄板の両側面が浅い切欠き状となっており、齋串と判断した。

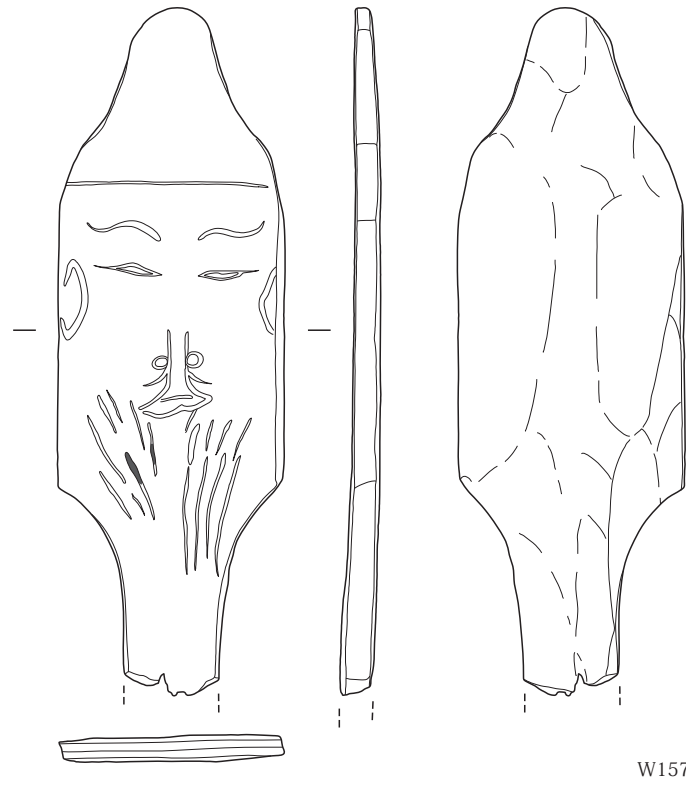
第 256 図 W123 ～第 257 図 W141・W145・W146 は上端を欠失しているが下端を両側あるいは片側から削り込んで尖らせており、形態的に齋串であろう。薄板状のもの（W123～W132・W134・W139・W145）以外に、厚みがあるものや大型のもの（W133・W140～W143・W146）がある。W144 は細長い薄板の上半が鋺形を呈しており、齋串または形代と考えられる。

W98・W99・W101・W103・W110・W111・W113・W123～W125・W132 は 4038 溝、W119 は 4192 溝、W133 は 4193 溝、W143 は 4221 溝、W102・W118・W121・W126・W136・W139・W141 は 3003 溝、W115 は 3003 溝内 3413 杭群、W104・W106・W107・W109・W112・W134・W135・W137・W138・W142 は 3006 溝、W100 は第 4-4 層、W116・W131 は第 4 層相当層、W122 は第 4-2 層、W140・W144 は第 4-1 層、W127～W130・W146 は第 4 層、W97・W108・W114・W145 は第 3 層、W105・W120 は第 2-2 層でそれぞれ出土した。

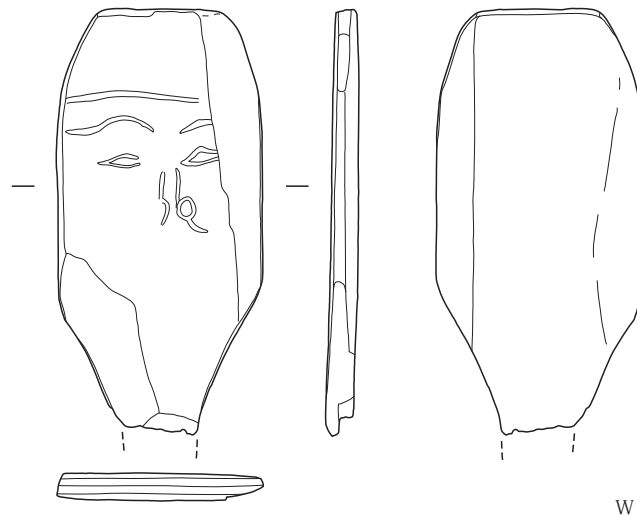
人形 第 258 図 W147～第 259 図 W158 は人形である。W147～W149・W152・W153 は細長い薄板の上端を圭頭状に作出し、頭部と肩部を画する V 字形を呈す切欠きを両側面から入れるタイプで、頭部中央に浅く切込みを入れて眉・目・鼻・口を表現する。両側面からの切欠きは肩よりも顎～頸のラインが長くなるように入れられており、上半身が残る W147・W148 からすればやや怒り肩になる。W154 はこのタイプの大型品で、人面は切込みを入れるのではなく浅く彫り窪めて表現している。W150・W151 は細長い薄板の上端及び両側面から切欠きを入れて被り物と頭部～肩部を作出するタイプである。頭部～肩部を作出するための切欠きは半月形または V 字形を呈す。頭部は顎の表現がなく顎と一体化しており、正面観はかなり扁平となる。人面の表現は浅く切り込むものと、彫り窪めるものの両者が認められる。W150 は正面左側に手の表現と見られる切込みがある。W155 は被り物が表現されていないが、これらと同タイプと考えられる。下半は欠失しており、破面が焦げている。W156 は頭部と左半身を欠く人形で、胸に太陽形の墨線を入れている。墨痕からすれば左半身にも同様の文様が入っている可能性が高い。W157・W158 は被り物、頭部、頸を明確に作出し、墨線で人面を表現するタイプである。頭巾と顔面の境界、眉、切れ長の目、鼻に加え、W157 は耳、口髭、顎鬚が墨線で表現されており、墨はほとんど残っていないが墨痕が隆起した状態で確認できる。W157 と W158 は頭巾の形状が異なっており、模倣の対象となった人物の違いを表現したものか。



第258図 木器 人形 (1)



W157



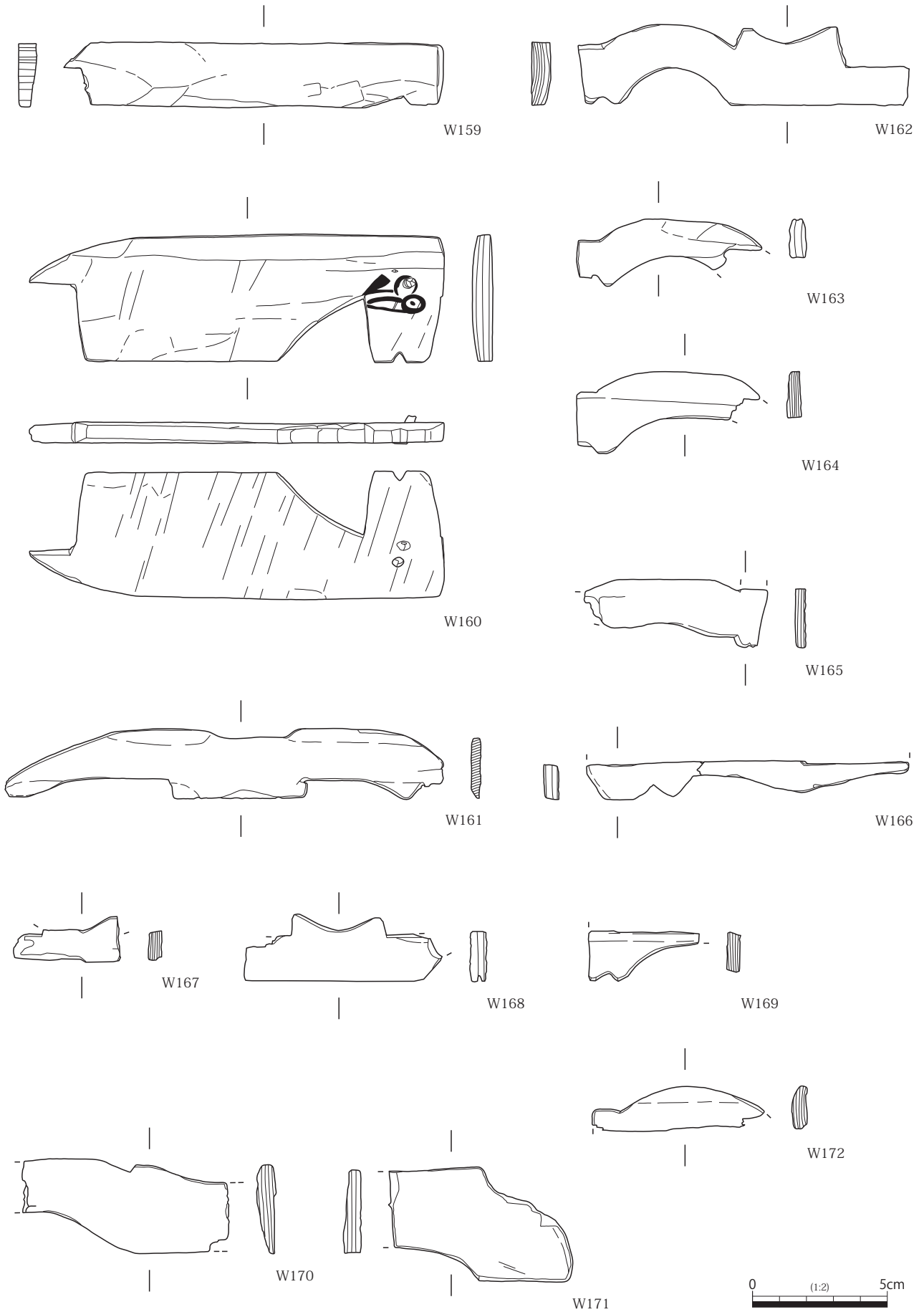
W158



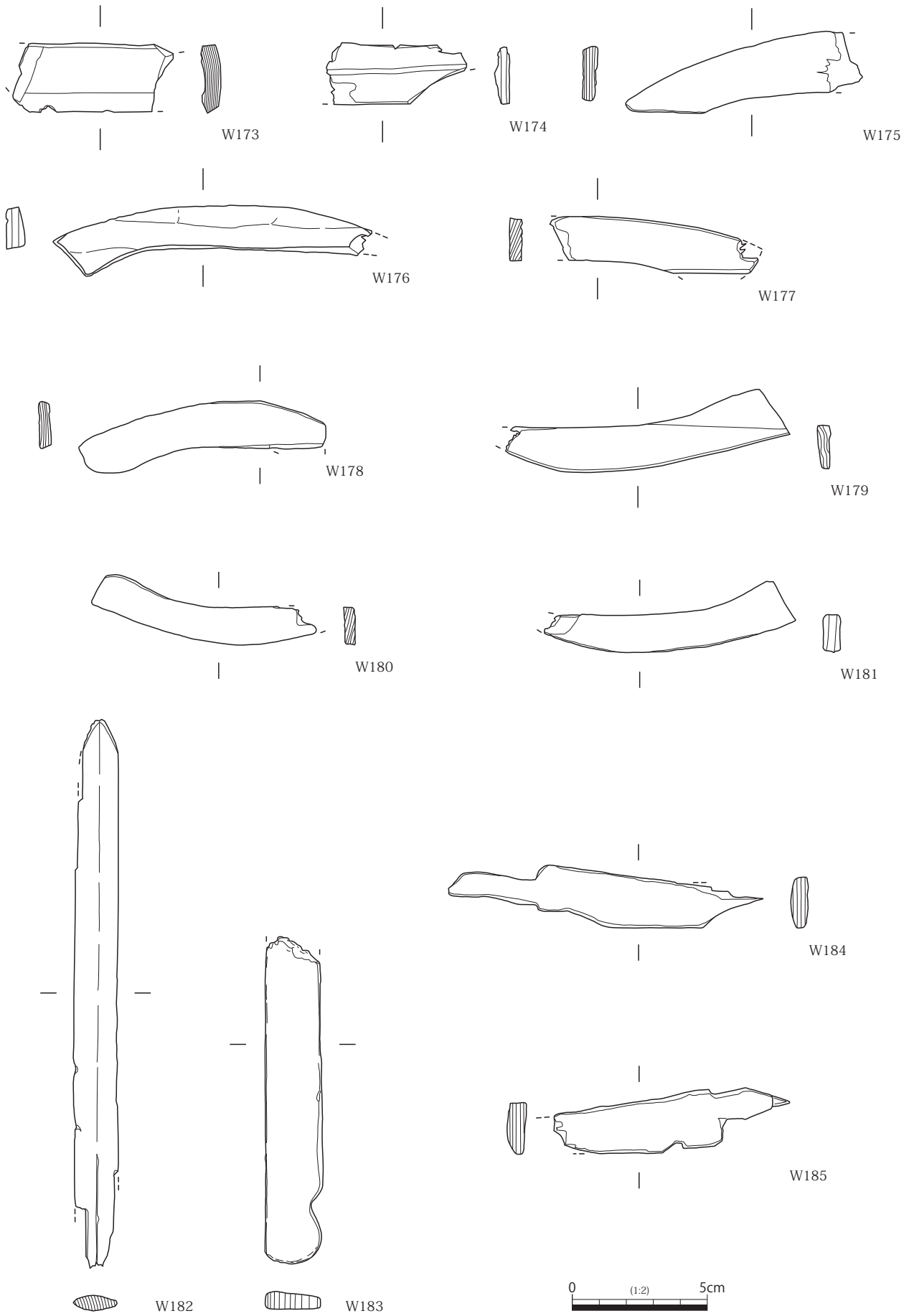
第259図 木器 人形(2)

W147・W148・W154・W155は4038溝、W156は3003溝、W152・W153・W157・W158は3006溝（W152・W153は埋土下層の馬形集中地点）、W150は第4層、W151は第4層以下、W149は第3層で出土した。なお、W147・W157・W158は樹種同定を行い、すべてスギであった。

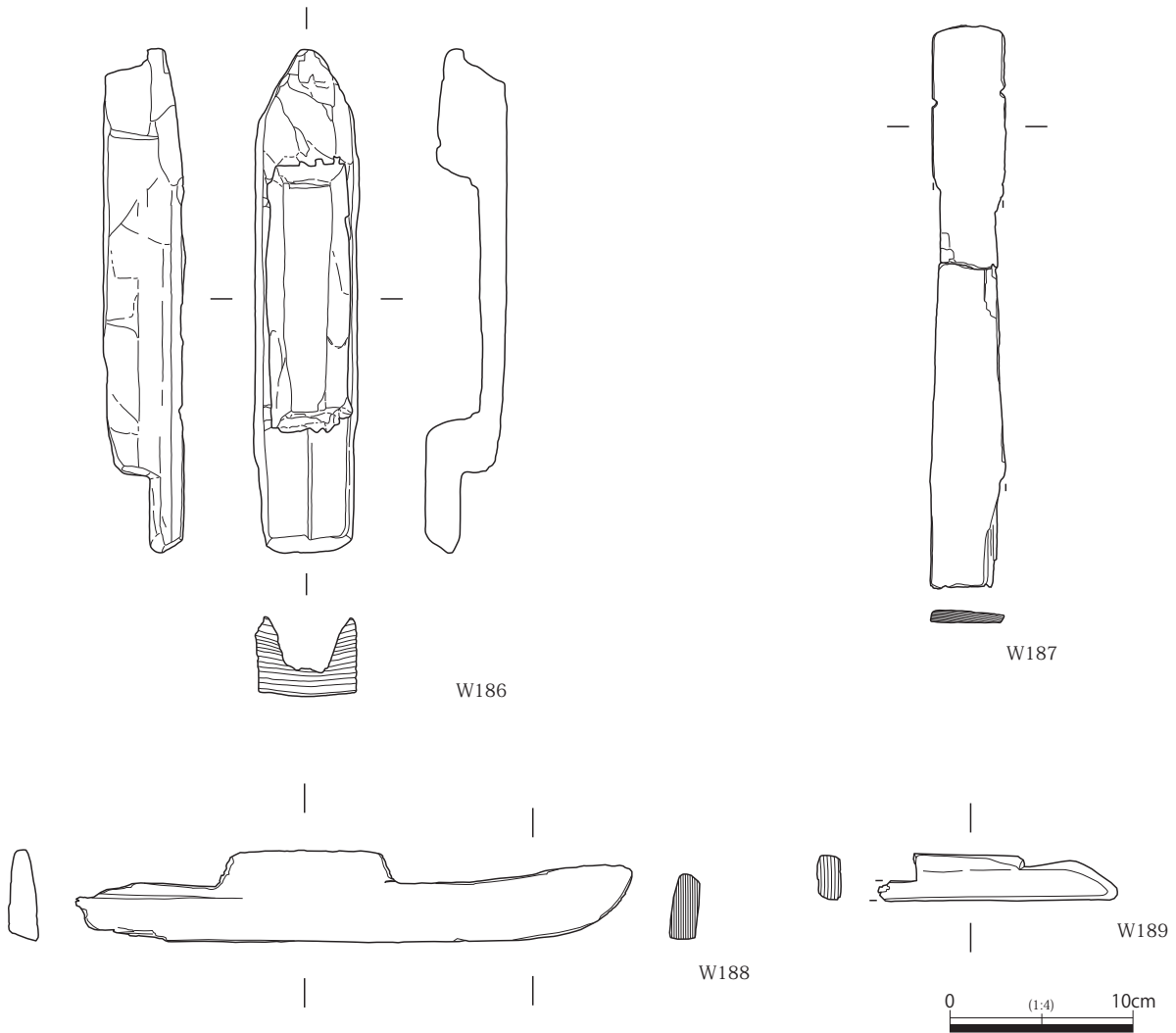
馬形 第260図W159～W172は馬形である。鞍を作り出した「飾り馬」（W162・W167・W168・W170）と鞍のない「裸馬」（W159～W161）が見られるだけでなく、頭、頸、胴、尾の形状にバリエーションがある。W159は細長い板の長辺を切り欠いて頭と頸を、片側の短辺を切り欠いて尾を作出する簡略化した形状をとる。W160も同様の形状をとる幅広な大型品で、頭・頸を作出するための切欠きは大きくフ字状を呈し、さらに口を小さな切欠きで表現する点で差異がある。また、頭部に短い木



第260図 木器 馬形 (1)



第 261 図 木器 馬形 (2)、武器形、鳥形

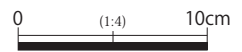
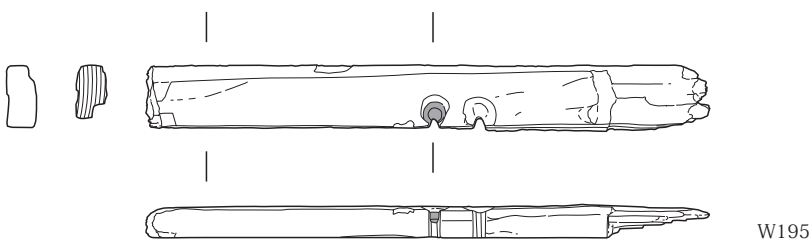
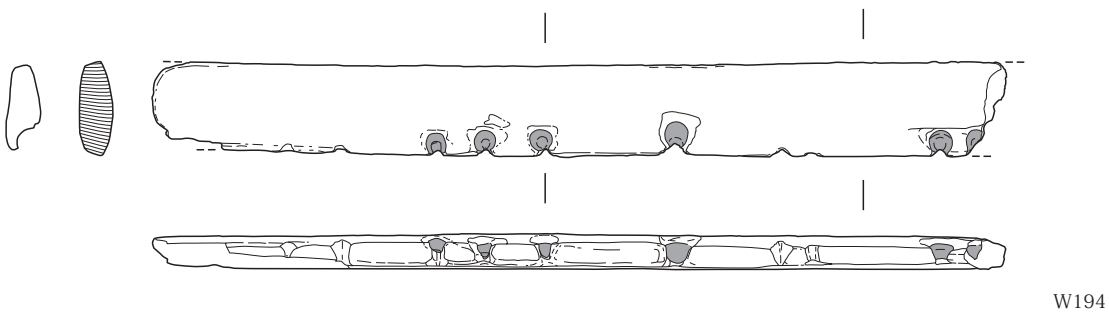
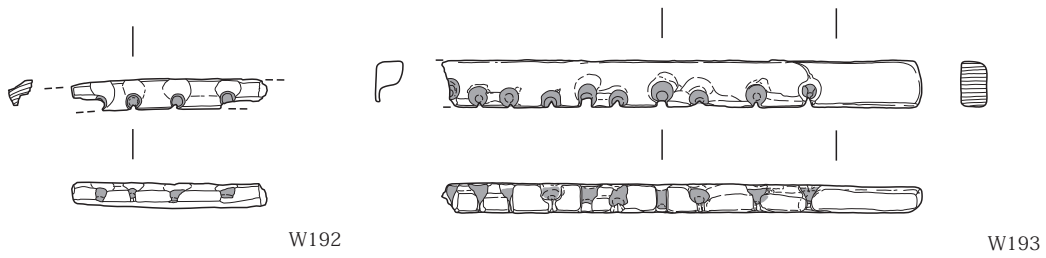
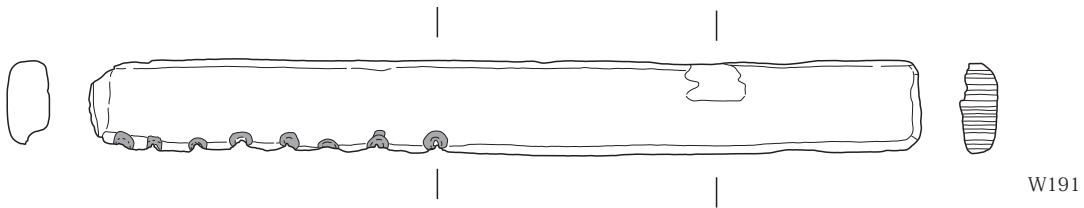
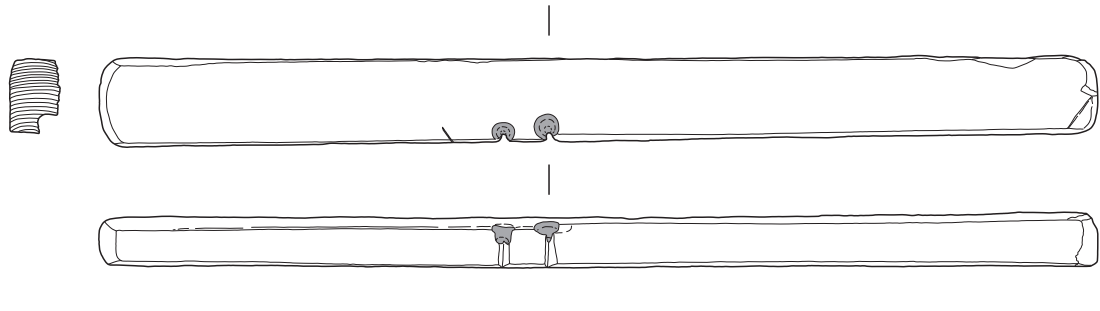


第 262 図 木器 舟形ほか

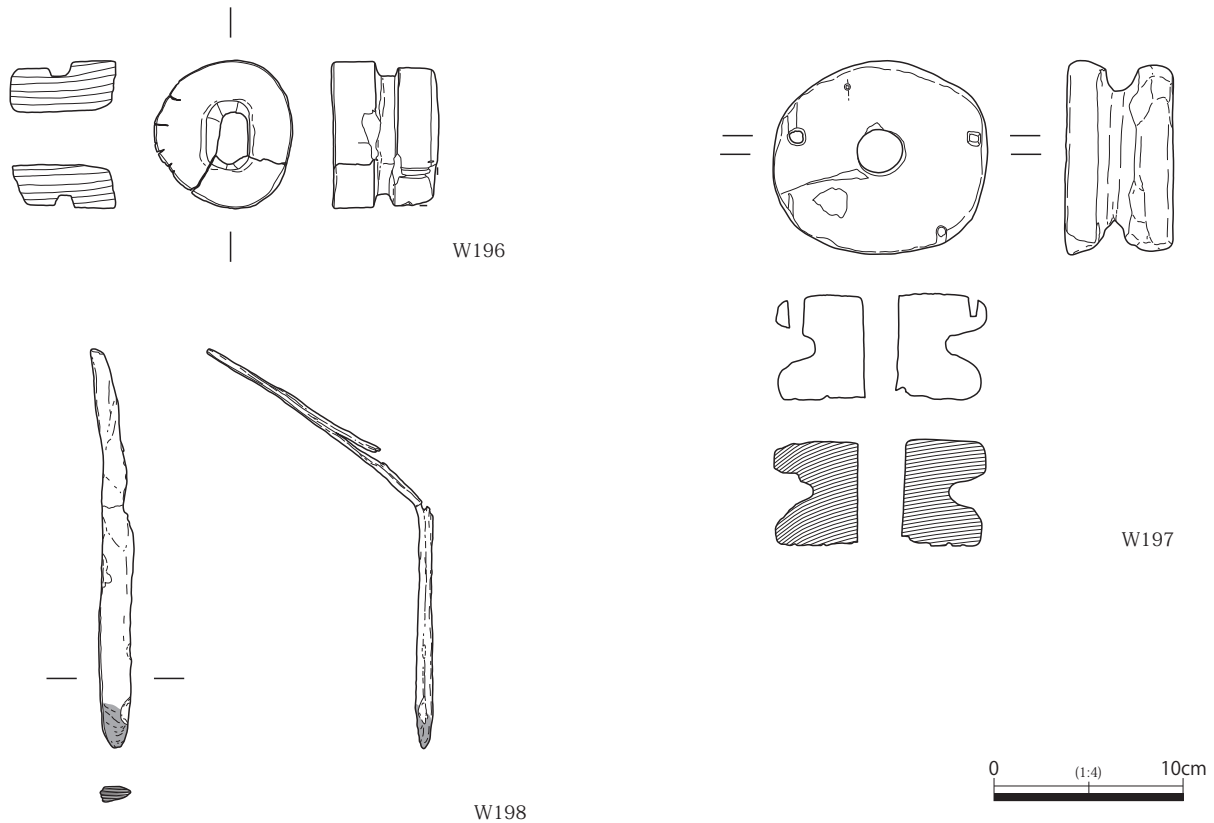
釘が1カ所貫通しており、目を表現したものか。その周辺から頸にかけて墨線が複数入れられているが、手綱としては位置が不自然で意図は不明である。裏面に非貫通の孔が1カ所認められる。W161は中央の胴部から両側へ延びる頭と頸、尻と尾を一体的に作出しており、全体形が潰れたような略M字形を呈す。W162は胴から半円を描くように大きく湾曲して延びる頸をもつもので、その端に短く頭を作出し、切欠きで口を表現している。一方、鞍を境として逆側の表現はかなり簡略化しており尾も作出されない。W163・W164は小片となっているが、W162と同じタイプと考えられる。W165は頭と口を切欠きで表現しており、残存部から推察される形状はW161に近い。W166は上半部を欠失している。W167・W168は鞍及び胴部の破片、W169は頭部の破片、W170は胴（鞍）～頸の破片、W171は胴～尻の破片、W172は頸～頭部上半の破片である。

W159は4038溝、W166は4194溝、W171は4192溝、W160・W170は3003溝、W162～W164・W167～W169・W172は3006溝埋土下層の馬形集中地点、W165は第4層でそれぞれ出土した。W163・W164は樹種同定の結果スギが使われていた。

その他の形代 第261図W173・W174・W178～W181は3006溝埋土下層の馬形集中地点で人形、馬形とともに出土したもので、形代もしくは形代の一部と考えられる。W173・W174そして4221溝で出土したW175は馬形の破片であろうか。W178～W181はそれ自体で完結する形状の可能性もあ



第 263 図 木器 工具・発火具



第 264 図 木器 施設材・器具材、発火具

り、4221 溝で出土した W176、4038 溝で出土した W177 も同様の製品と考える。

W182 は 4194 溝で出土した剣形、W183 は 4038 溝で出土した刀形である。W184・W185 は側面形を表現した鳥形で、W184 は 4038 溝、W185 は第 3 層で出土した。

第 262 図 W186 は舟形で、角柱材を削り貫いて船槽を、両端を削り船首、船尾を作出する。樹種はスギである。W187 は第 2 層で出土したもので、人形の可能性がある。3003 溝で出土した W188、3006 溝埋土下層の馬形集中地点で出土した W189 は側面形を表した舟形と考えられる。

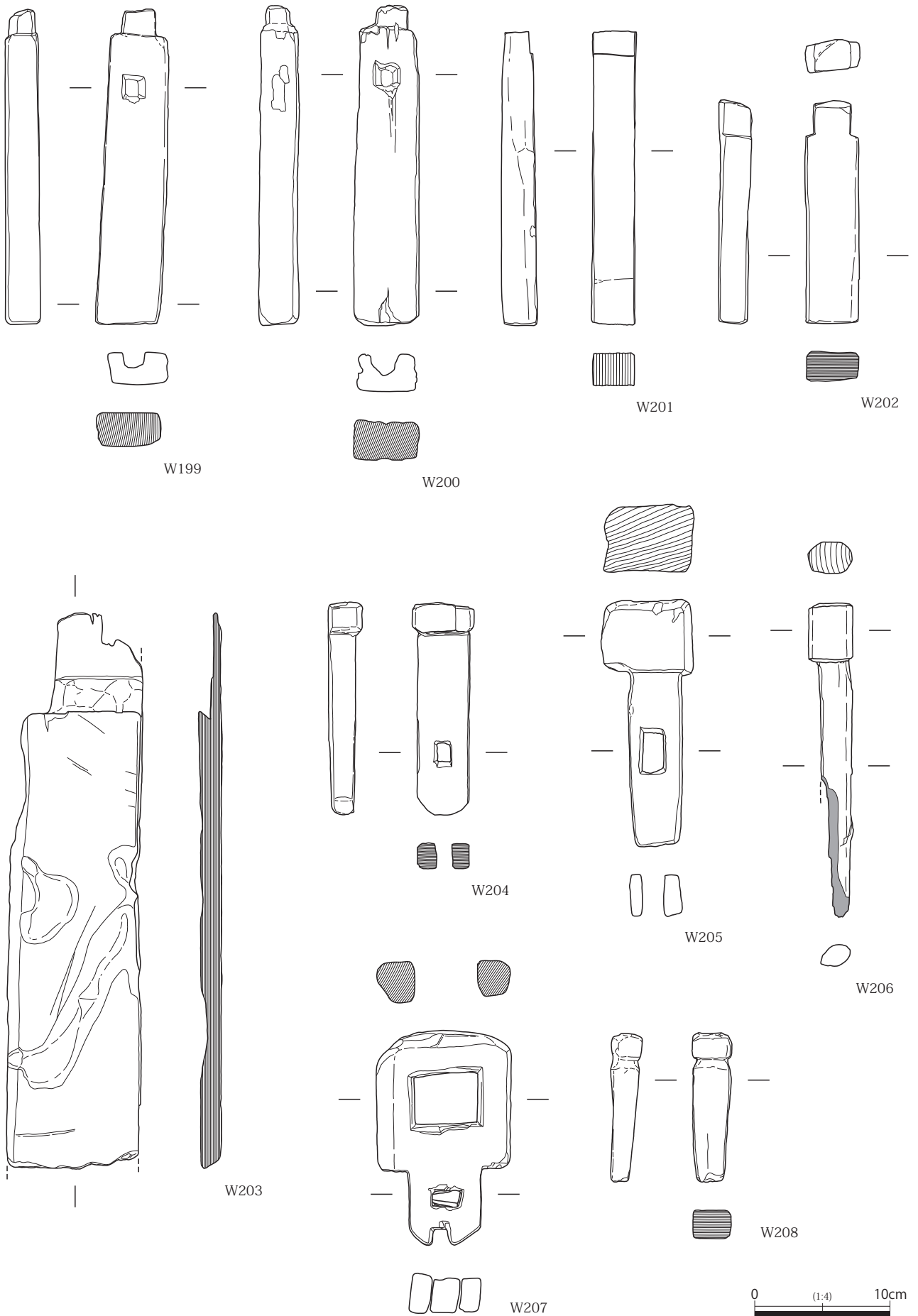
施設材・器具材（第 264 図、PL.180）

第 264 図 W196・W197 は滑車である。W196 は長軸約 8 cm、W197 は長軸約 13 cm と異なるが、紐をかける軸部分の径は約 6～7 cm で大差はない。W196 は第 4・4 層、W197 は 3003 溝で出土した。W197 の樹種はスギである。

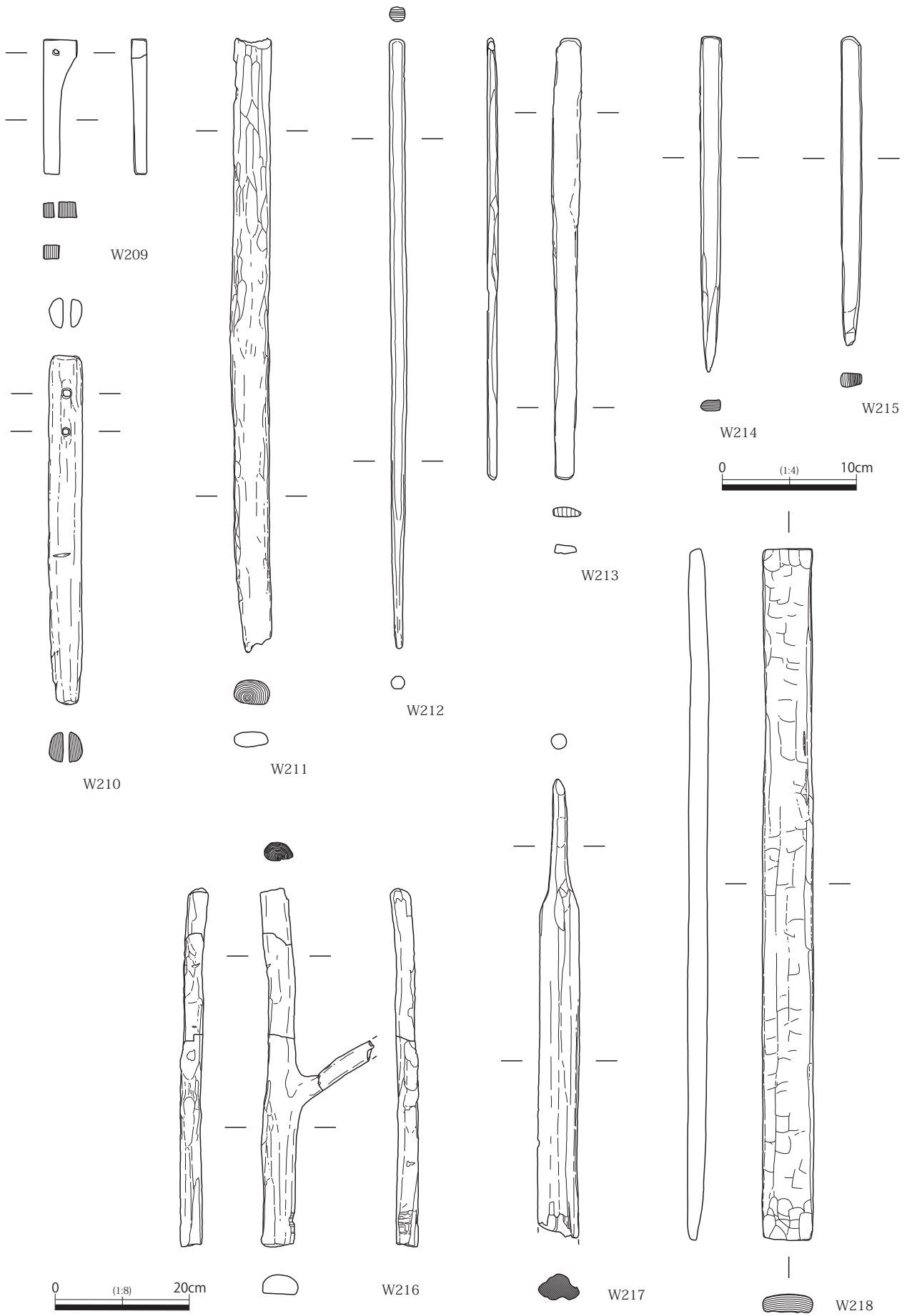
部材（第 265 図、PL.179・180）

第 265 図 W199～W202 は調度である机や案の脚と考えられる。W199～W202 は角材の一木口に出柄を作り、W199 と W200 は柄の下に貫通しない方形の柄穴を 1 カ所あける。W199 の樹種はスギである。いずれも第 2・2 層で出土した。4192 溝から出土した W203 は短辺方向に平行する断面逆台形の蟻溝をもち、遺存状況が悪いが案の天板破片の可能性がある。

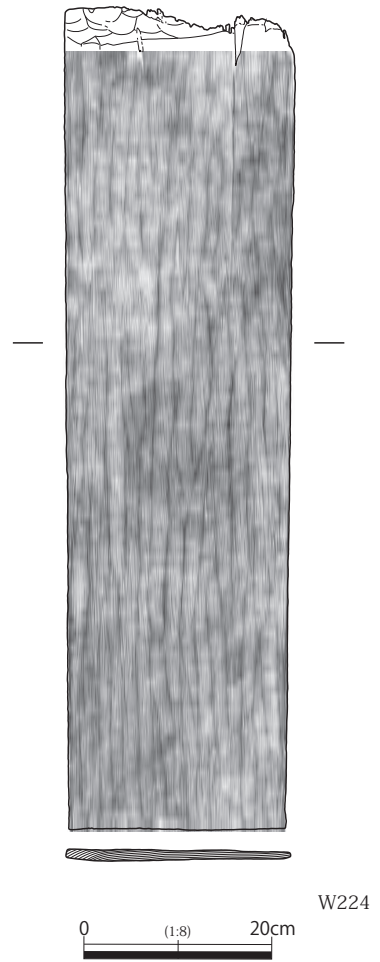
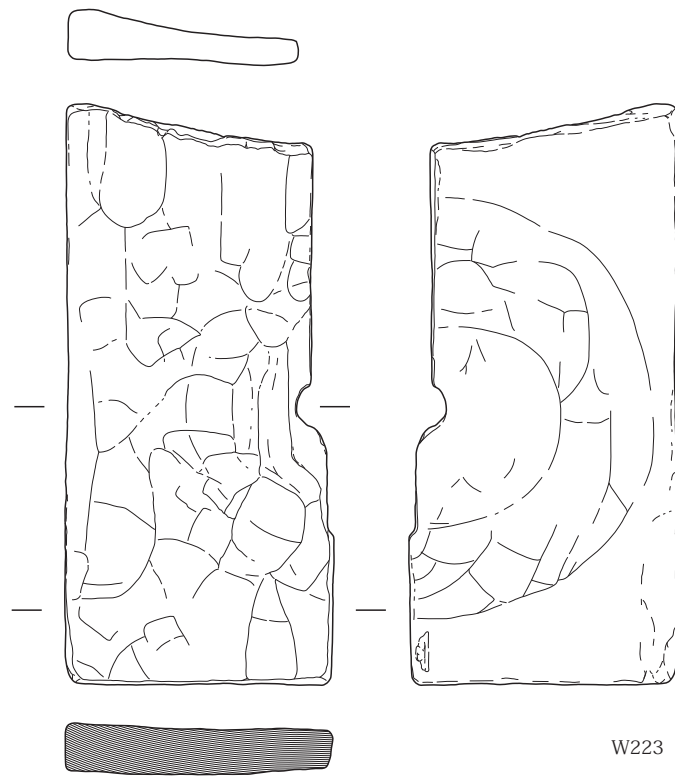
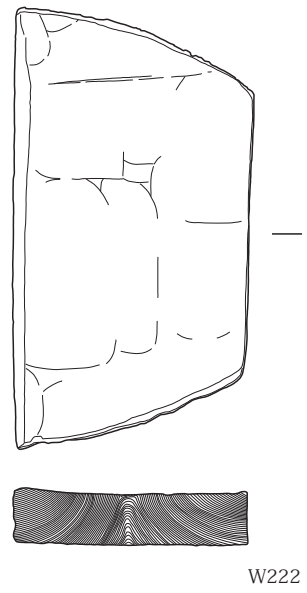
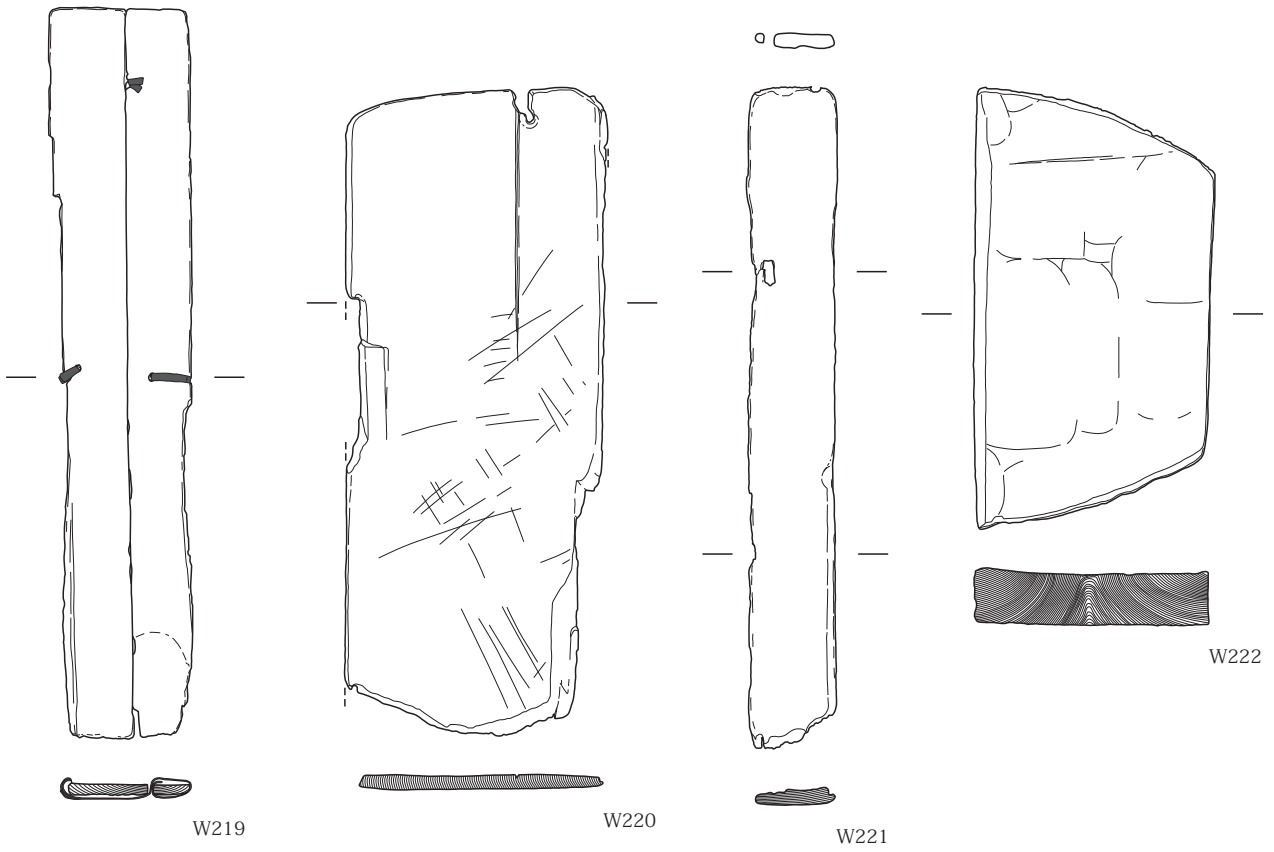
W204～W206 は栓である。W204・W205 は横断面が方形または長方形を呈し、頭部からやや下がった位置に柄穴をあける。W206 は横断面形が不整楕円形を呈し、先端が焦げている。W205 はスギ製である。W207 は把手である。板材の上半部中央を方形に削り貫き、下半を両端から削り出して出柄状にし、その中央に柄穴をあけて別部材を通してある。W208 も栓と考えられるが、小型で留め用の



第 265 図 木器 部材 (1)



第266図 木器 部材 (2)



第 267 図 木器 部材 (3)

楔のようなものか。W204は第3層、W205は第4層、W206は3433溝、W207は4038溝、W208は3003溝からそれぞれ出土した。

第266図 W209～第267図 W223は部材の可能性のあるものの、用途は不明である。

W209は丁寧な加工で、円孔を1カ所あけている。調度品につくものか。W210は断面略円形の棒状製品で、一端からほぼ等間隔で円孔を2カ所穿つ。W211は横断面楕円形で丁寧に仕上げられている。W212は細身の丸棒状製品で、火鑽杵の可能性もあろうか。W213は扁平な板状、W214・W215は角棒状を呈す。W216は広葉樹の二又に枝分かれした部分を用い、樹皮を剥いて表面を滑らかに加工している。端部に近い位置に欠き込みをもつ。W217は一方を断面円形に細く削り出しており、その先端を尖らせる。W218は最大長103cmを測る細長い板材で、両端付近が薄くなるように削り込んでいる。表面に手斧による加工痕が残る。建築材の可能性もある。W219は割れた薄板を樺皮で緊縛し補修している。W221も補修孔とみられる孔がある。W220は加工が粗く、全体が細長い長方形を呈することから曲物（折敷）の可能性は低い。W222は分厚い板材だが表面は平滑に仕上げられており、礎盤ではないと考えられる。W223は分厚い板材の一面を皿状に削り込むとともに、その裏面は相対するように半円形に削り出している。削り込まれた側の長辺中央に半円形の切欠きが認められる。W211・W216・W221は3003溝、W209・W213は3006溝、W217は3473溝、W214・W220・W223は4038溝、W210・W222は4191溝、W218は4192溝、W215は4194溝、W212は第4層、W219は第2-2層からそれぞれ出土した。

建築部材（第267～272図、PL.180～183）

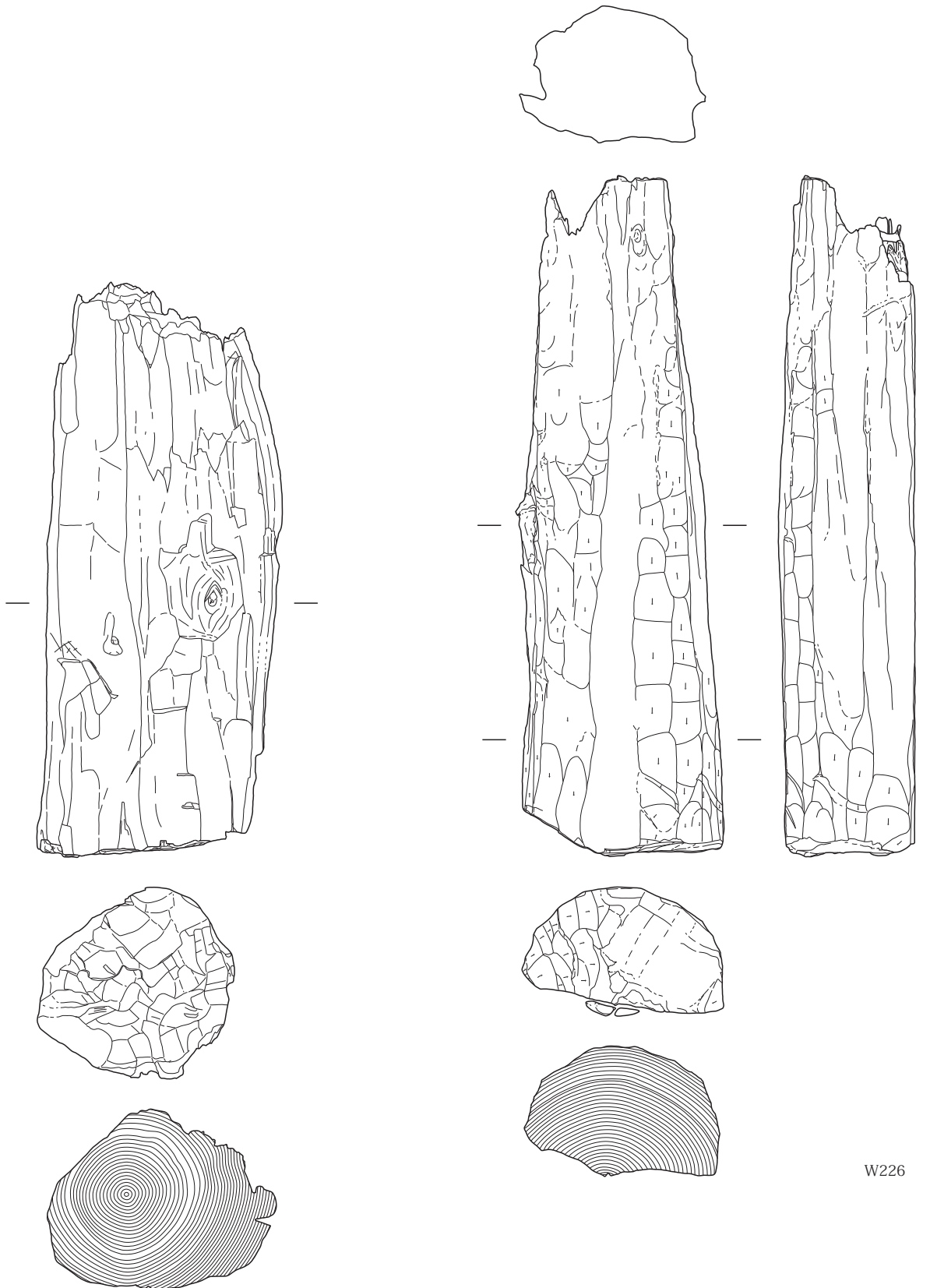
第267図 W224は長方形の板材で、表面は鉋によって平滑に仕上げられており、その切削痕が明瞭に残る。床板であろう。3437流路で出土しており、古墳時代中期のものである。

第268図 W225～第270図 W231は柱で、W225～W228が掘立柱建物1、W229が掘立柱建物10に属する。W226・W231のみ芯去材だが、他はすべて芯持材である。樹種同定したW225・W227～W229はすべてスギであり、他も針葉樹である。4206ピットで出土したW230は底部から約6cm、3327ピットで出土したW231は底部から約20cm上にそれぞれ2カ所ずつ柄穴がつけられている。

W232は第4層から出土した最大長79.6cm、最大幅45.3cmを測る板材で、一短辺は湾曲するような形状となる。その端部から約10cm内側に2カ所の柄穴を左右均等に付けている。壁板であろうか。3439ピットで出土したW233は礎板であるが、作業台のようなものを再加工して転用している。

第271図 W234は蹴放しまたは楣である。短辺の片側のみ突出させるように切り出し、片面に方立板を嵌め込むための長方形の溝と扉の回転軸を入れる軸釣孔をもつ。軸釣孔は一つしか見られないため、片扉式である。W235は蹴放しの一端を切り落として再加工したものである。W234は第2-2層、W235は第4層で出土した。

W236～第272図 W241は掘立柱建物の水平構造材（梁、桁など）と考えられる。W237は一面に多数の鑿痕が認められる。W238は遺存する端部が出柄状にされており、方形の貫穴を等間隔で配すが、中央の一カ所は欠き込みとなっている。横断面形は不整な台形を呈す。W239・W240は端部の仕口は輪羅込か。W241は大型の縦長板材で長方形の貫穴を複数あけ、両側面の対称位置に柄穴をもつものである。W236・W240は4038溝、W237は3003溝、W238は3438流路、W239は第3層、W241は第4層でそれぞれ出土した。

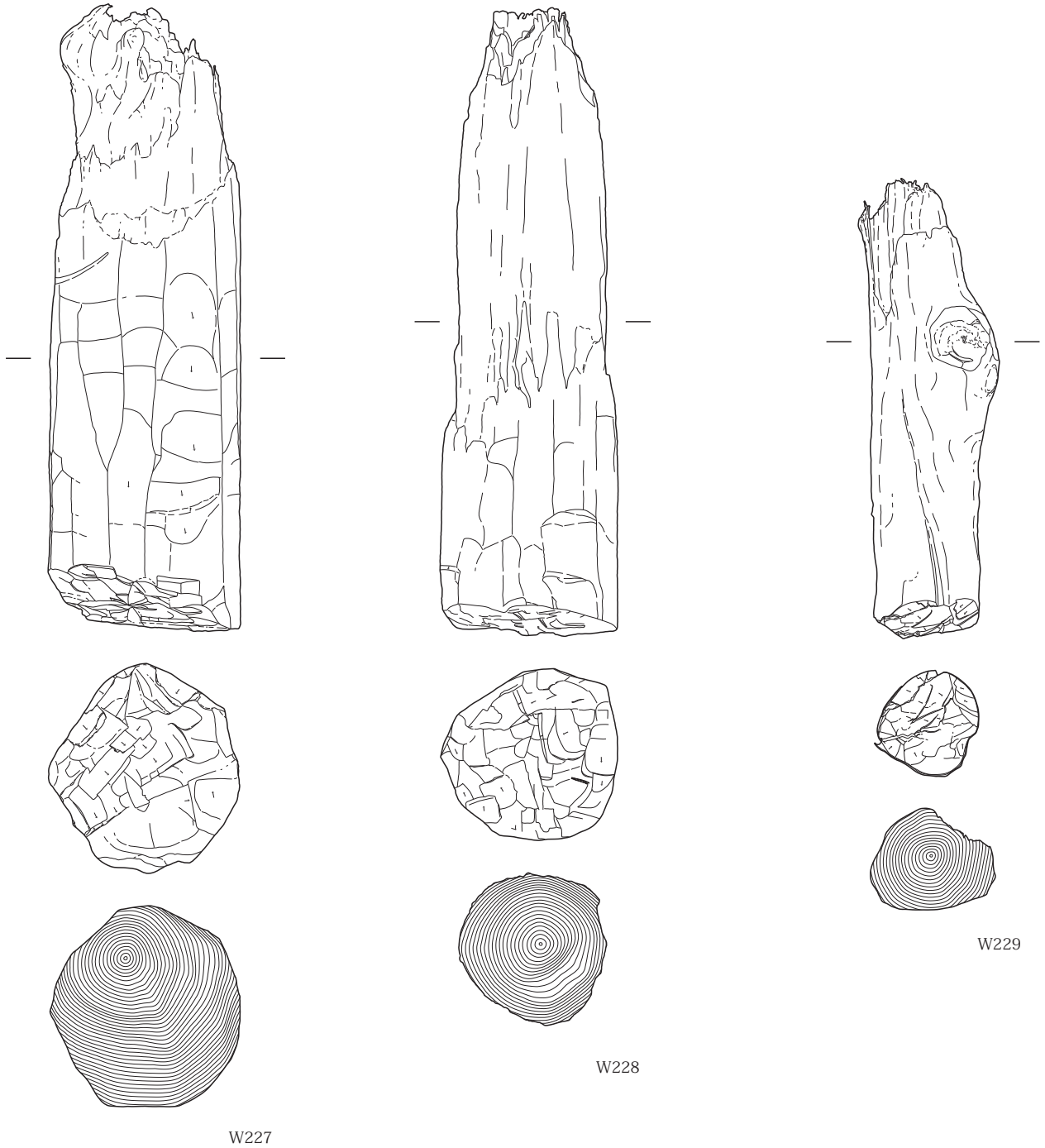


W225

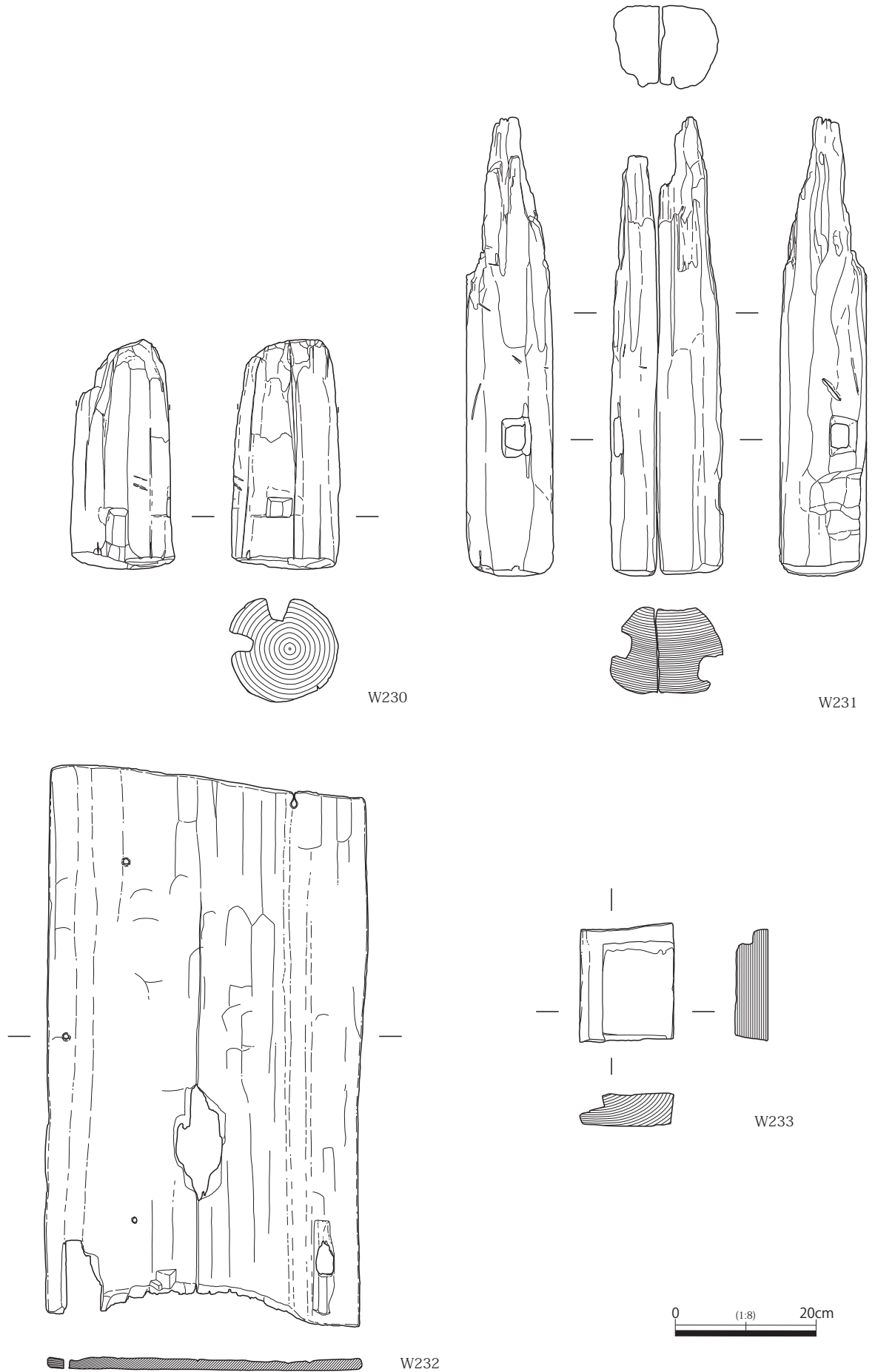
W226



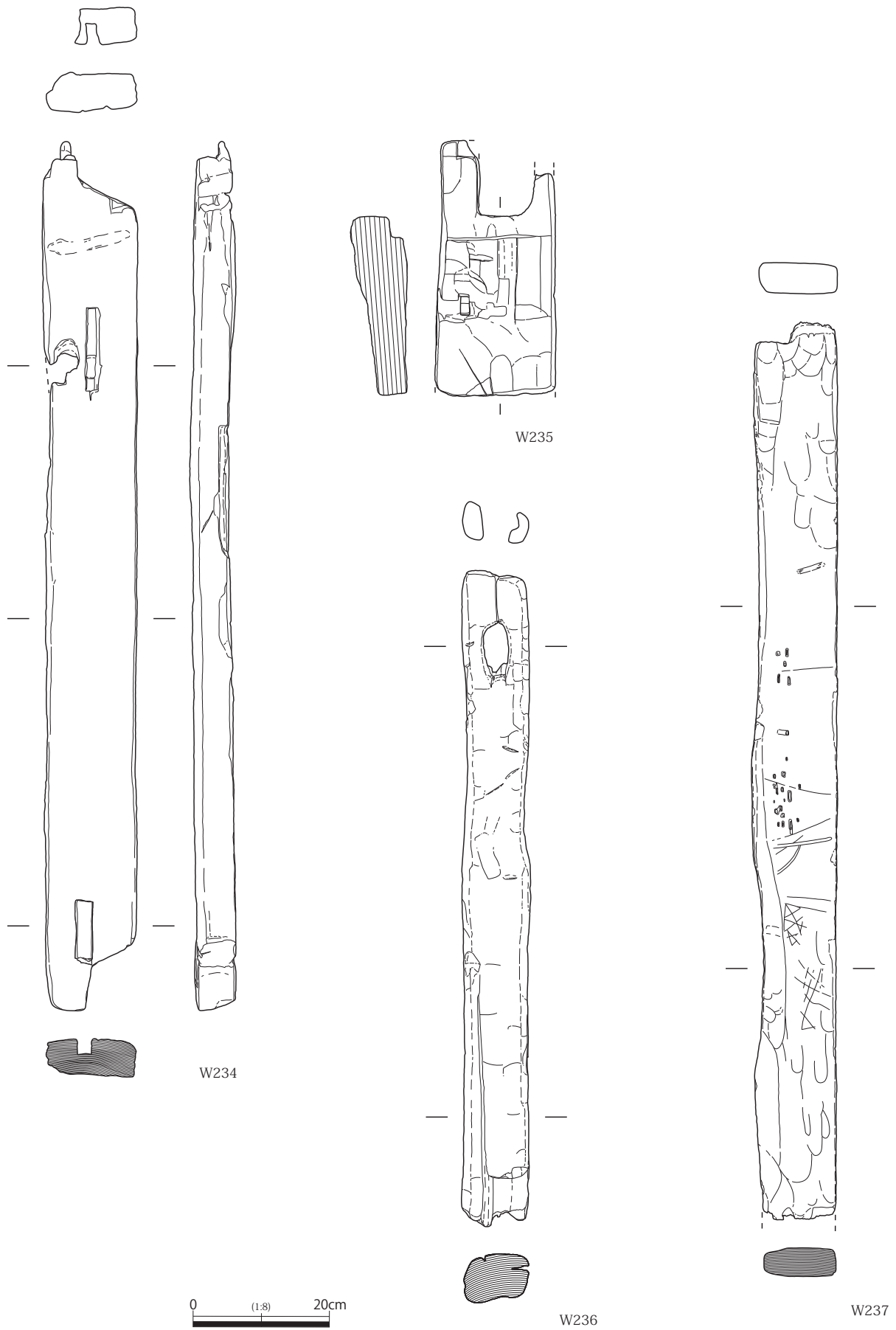
第268図 木器 建築材 (1)



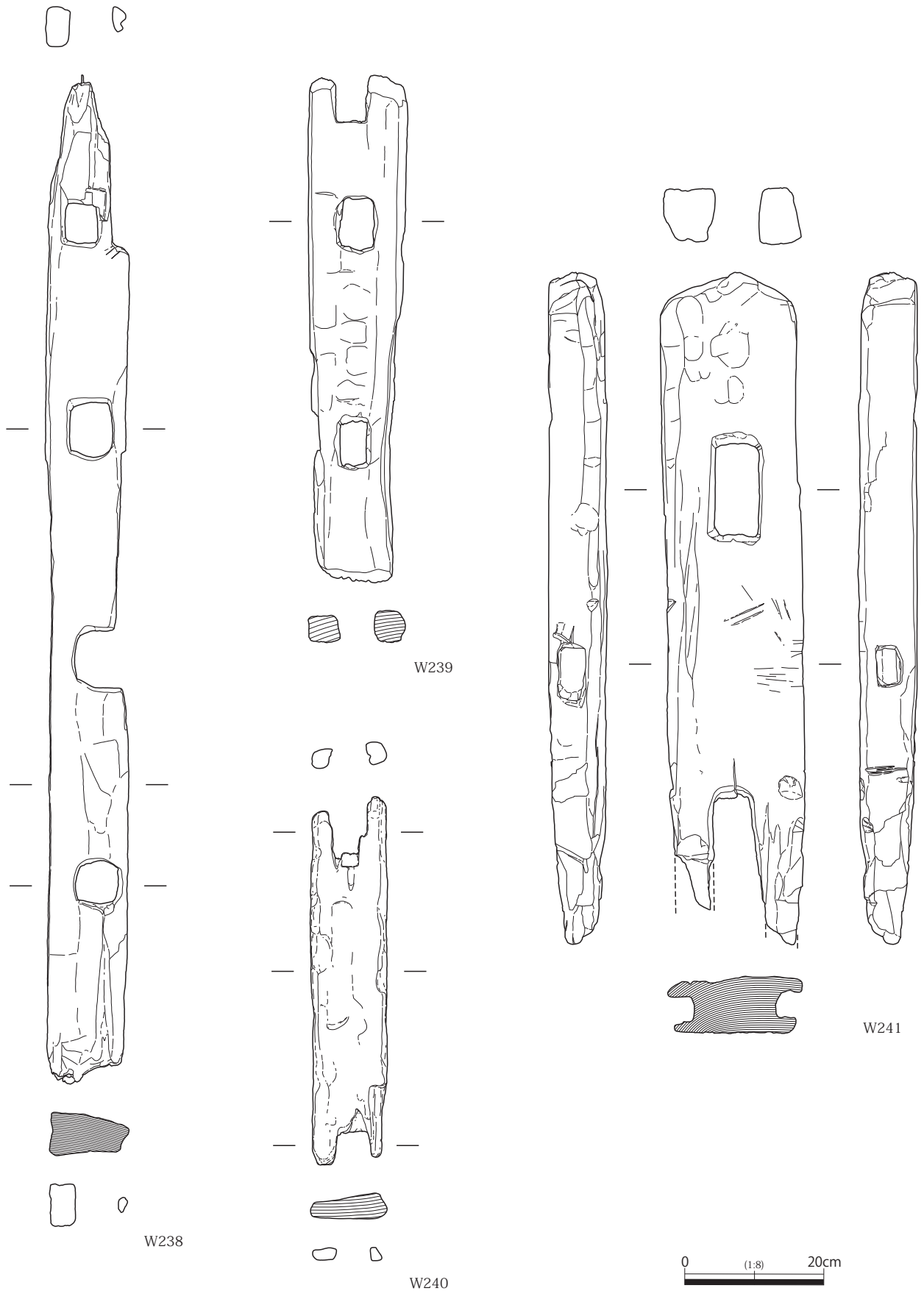
第 269 図 木器 建築材 (2)



第270図 木器 建築材 (3)



第271図 木器 建築材(4)



第272図 木器 建築材 (5)

用途不明品（第 273～277 図、PL.178・184）

第 273 図 W242～第 276 図 W287 は用途不明品である。

第 273 図 W242 は細い角棒状製品の両端付近を左右からわずかに挟り込み、布巻具のような形態である。W243・W244 は針状、W245 は網針状の製品である。W246 は薄く細長い板状製品の一端を圭頭状に作出し、円孔をあけている。W247 は垂鈴状の平面形をもち、両側に小円孔をあけている。別製品と組み合わせる部材か。W248 は札状の製品で一端を突出させる。W249 は一側縁に切欠きをもつ。W250 は檜扇状の製品であるが、厚さが 3 mm あるため異なる性格のものか。W251 は有頭棒で、全長 5.3 cm の小型品である。W252 は円筒状に加工した製品の内側に細枝を軸として入れている。W253 は両端から円孔を削りソケット状にしている。矢の中柄とも考えられる。W254～W259 は棒状品で、W255 や W259 のように先端を尖らせるものもある。W260 は円柱状製品の一方を削り込んで有頭状にしており、木錘の一種であろうか。

第 274 図 W261 は丸棒の一端をさらに細く削り出した錐または鑿状の製品とも考えられるが、先端が焦げて欠失している。W262 は円柱の一端をやや細く削り出し、先端から V 字状の溝を 2 条入れている。W263 は横断面円形で何かの柄のように見えるが、欠失している部分に長方形の柄穴が確認できるため、別製品と組み合わせるものであろう。樹種はマツ属である。W266 は芯去材を用い、先端からやや下がった位置に両側から欠き込みを入れている。W267 は円錐形を呈す身の上部を削り出して紐掛けと考えられる頭部を作っており、錘のようなものか。W270 は表面が丁寧に仕上げられており、柄穴をもつため、別製品と組み合わせて使用するものである。W271～W274 は形代もしくは何らかの製品の一部か。第 275 図 W275・W276 は針葉樹を削り込んで加工しているが、遺存する形状から見て槽ではないと判断した。W279 は容器の把手の可能性がある。W281～W283 は自在か。

第 276 図 W284 は円筒状製品の身に柄穴が 3 カ所見られ、一端は細く削り出している。加工はやや粗雑である。W285・W286 は接合しないが形態及び木取りからすれば同一の製品だった可能性がある。W287 は側面に欠き込みをもつ端材である。

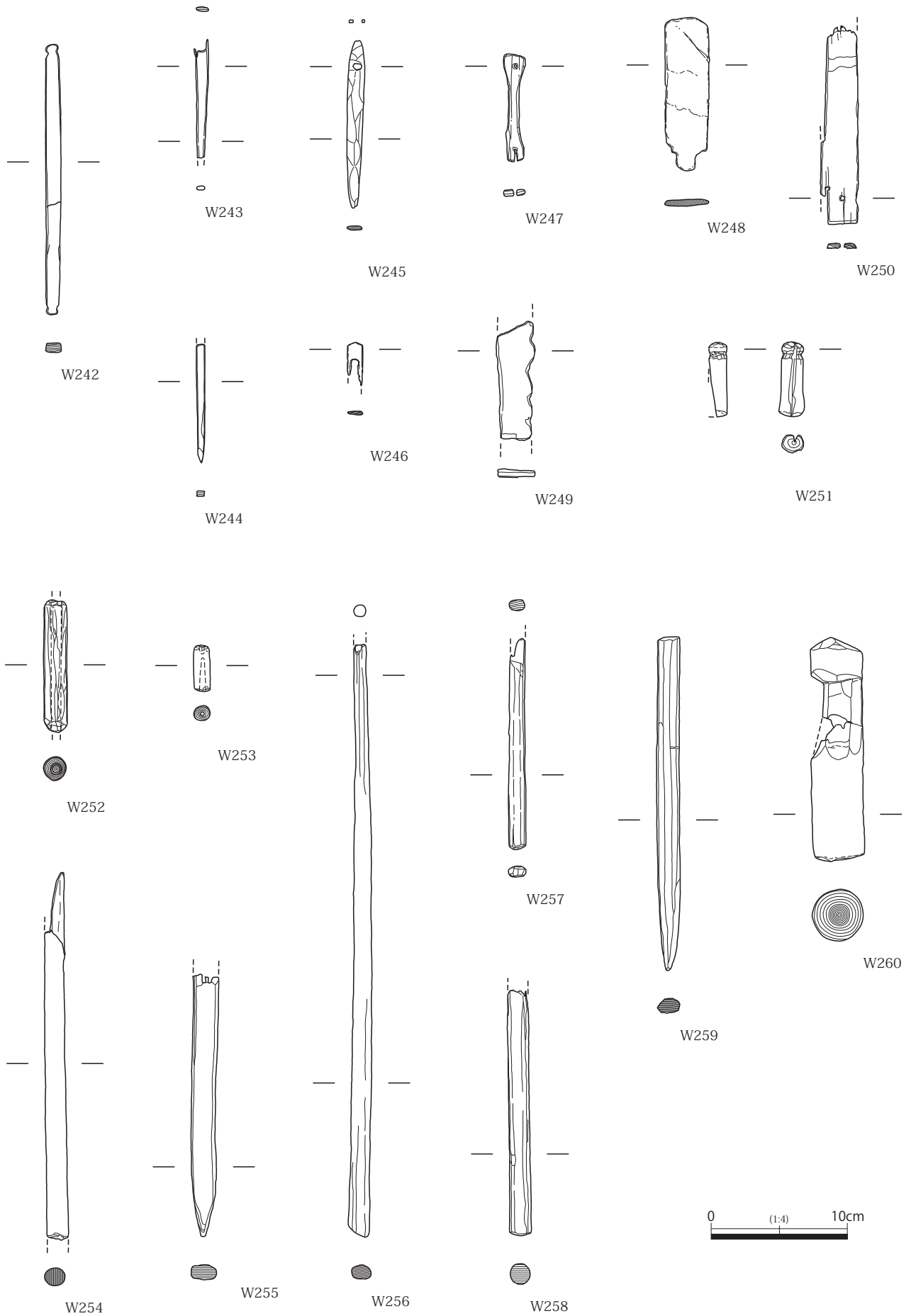
W244・W268・W271・W273・W281 は 3006 溝、W250・W254～W257・W259・W264・W272・W275・W277・W278 は 3003 溝、W269 は 3002 集石、W258 は 3014 溝、W276 は 3005 集石、W267・W274 は 4038 溝、W247・W287 は 4221 溝、W279 は 4191 溝、W261 は 4192 溝、W282 は 4044 土坑、W251 は 4040 ピット、W248・W249・W253・W263・W283 は 第 4 層、W252 は 第 4-3 層、W245・W262 は 第 4-4 層、W246 は 第 4-1 層、W243・W260・W265・W266・W280・W284～W286 は 第 3 層、W242 は 第 2-2 層でそれぞれ出土した。

また、第 277 図 W288～W291 は墨痕が確認できないが木筒状を呈す木製品である。W288・W289 は表裏面とも平滑で、上端及び左右両辺削り、下端は切り折りされている。W289 には表面に刃物痕が多数残る。W290 は表面が削り調整によって平滑になっている。裏面は未調整で、上端を圭頭状に加工しており、左右両辺は削り、下端は割れである。W291 は長方形の材の左右を切欠き荷札木筒状を呈す。上端及び左辺削り、右辺及び下端割れである。

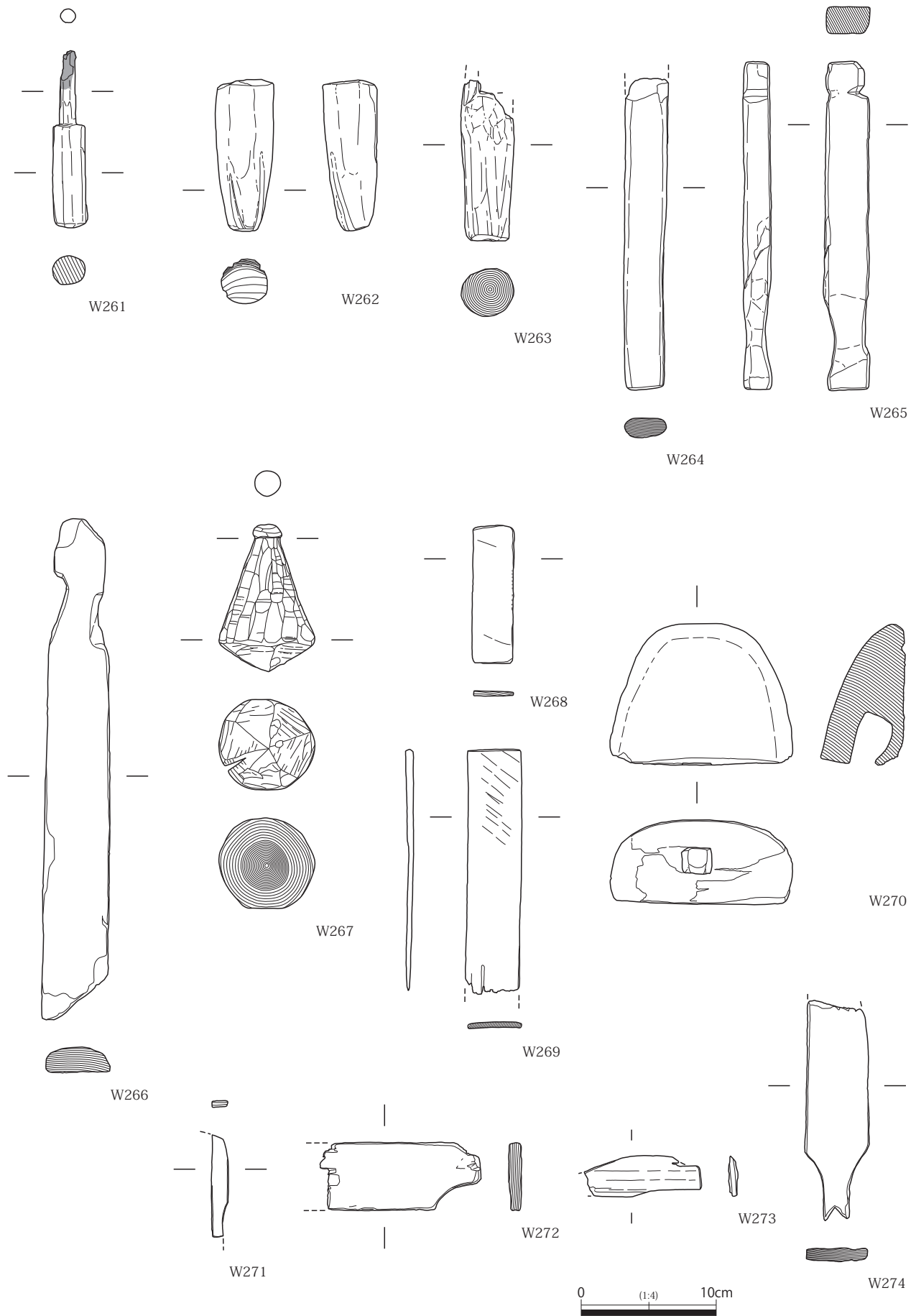
W288～W290 は 4038 溝、W291 は 第 2-2 層から出土した。

かご（第 278 図、PL.39）

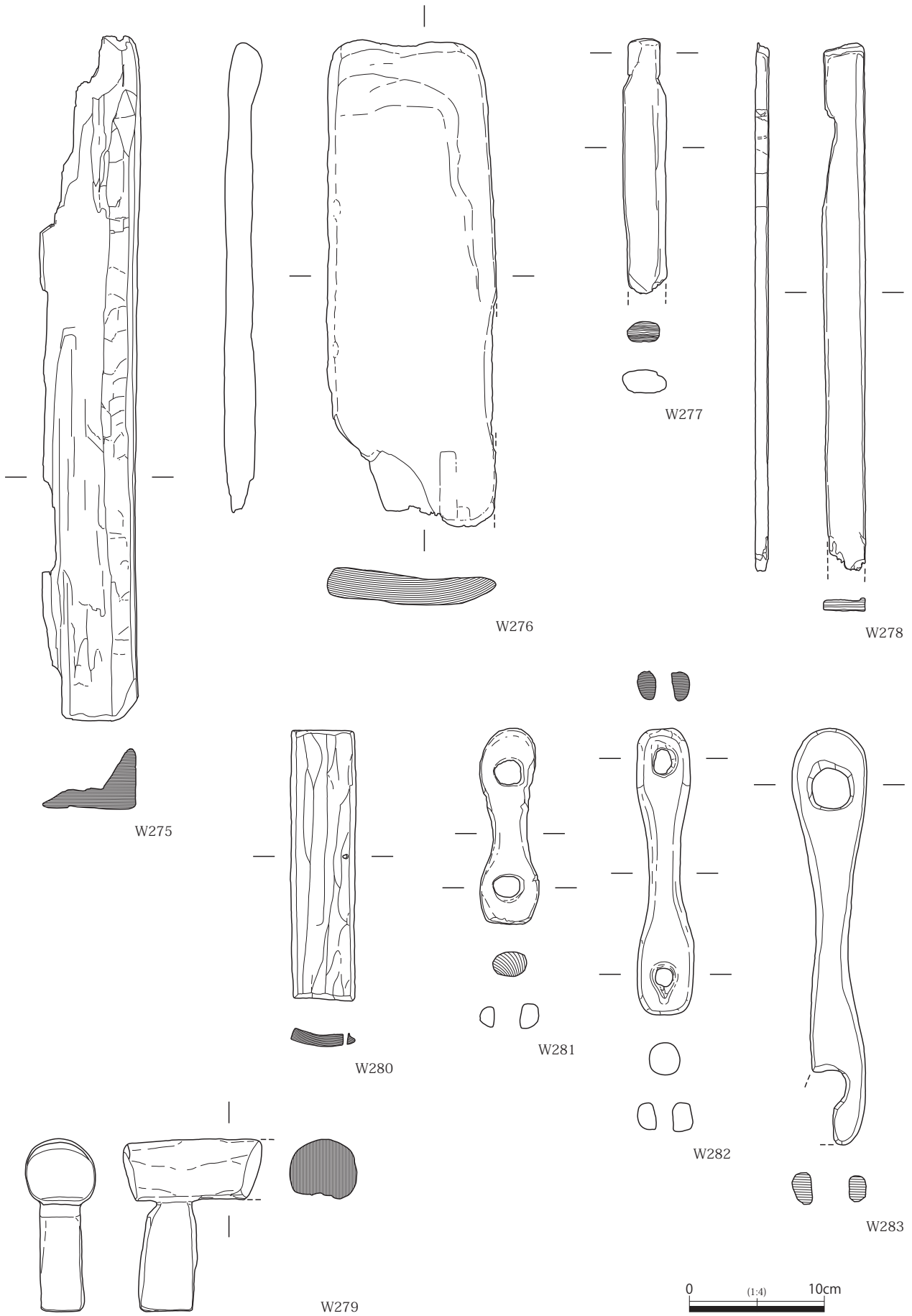
3006 溝底面で出土した。底部は方形の網代底で、2 本 1 単位の 2 本飛び網代、体部は 1 本 1 単位の 2 本飛び網代で編まれる。素材はマタタビ属であった（第 VII 章第 6 節参照）。



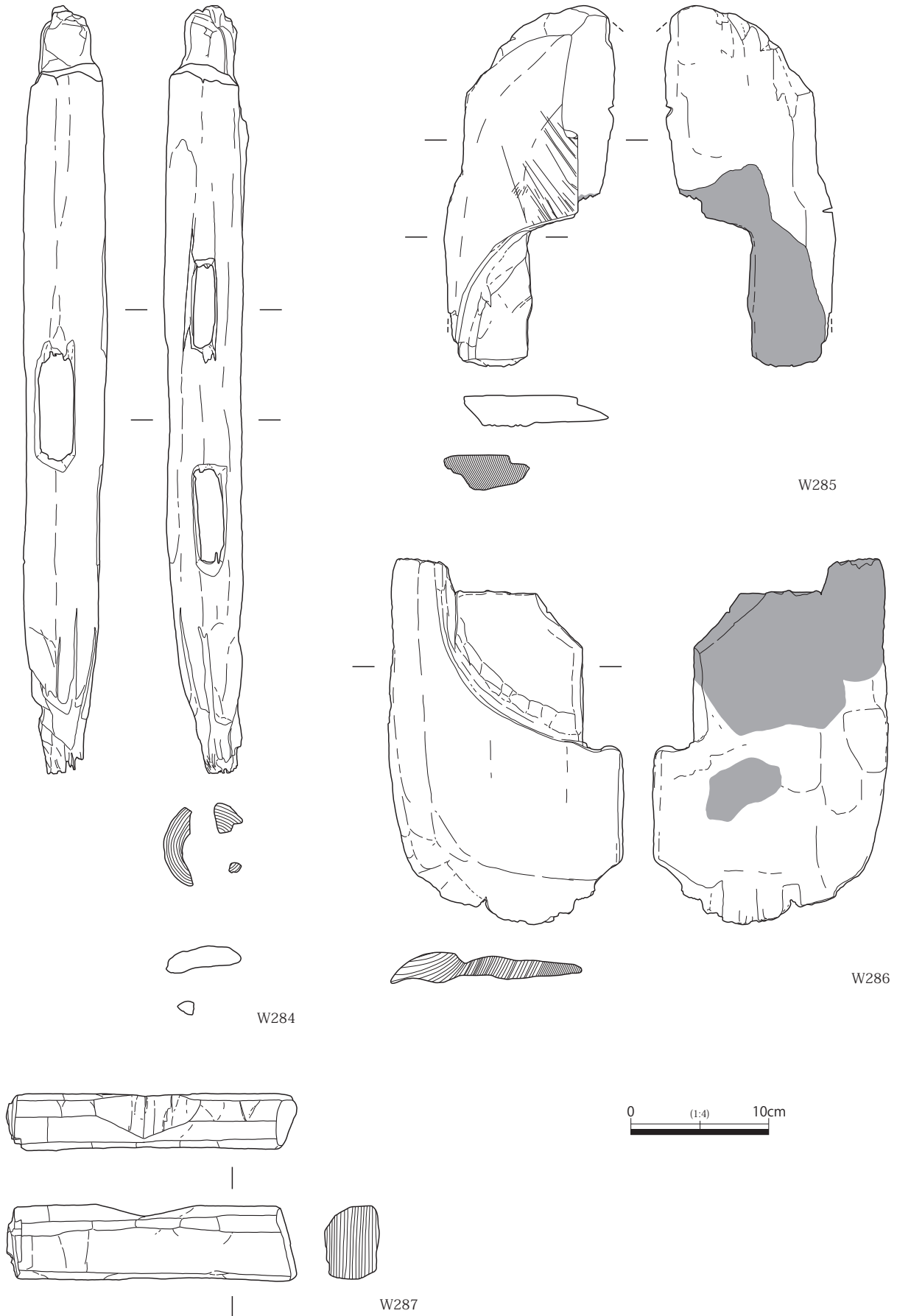
第 273 図 木器 不明 (1)



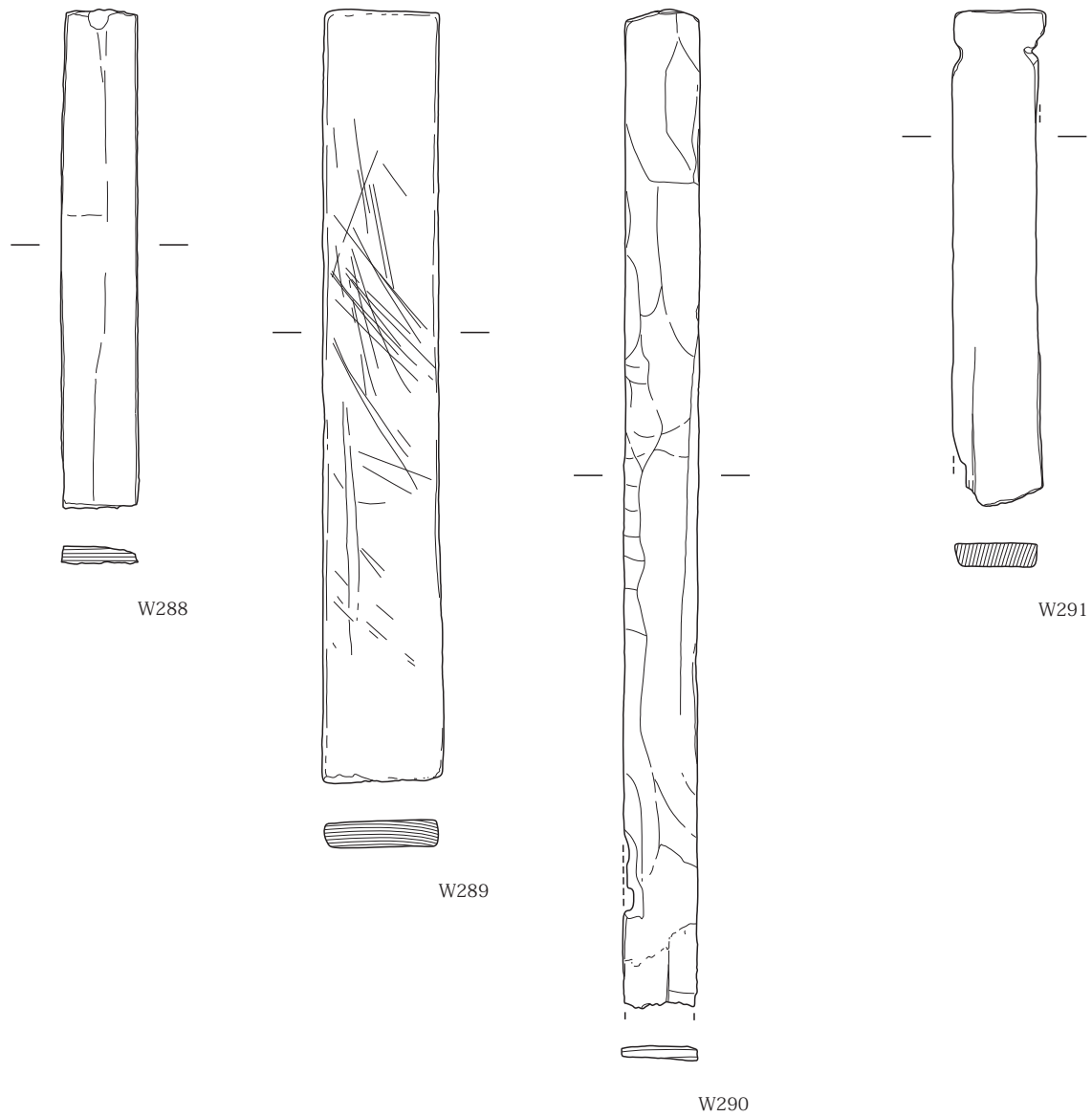
第274図 木器 不明 (2)



第275図 木器 不明 (3)



第276図 木器 不明(4)



第 277 図 木器 不明 (5) 木筒状木製品

<参考文献>

町田章・上原真人編 1984『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所



第278図 木器 かご

(4) 金属器、鉄関連遺物

銅製品 (第279図、PL.185)

M3は耳環で、腐食の進行により銅地が露出している。4038溝埋土下層から出土した。M4は環状銅製品で、刀子の柄頭または鉤の可能性ある。4038溝埋土最上部で出土した。

M5～M8は銅製腰帯具で、M5・M6は巡方、M7は丸柄、M8は鉞尾である。M5は1.9×2.1cmと小型品で、大孔、脚鉞式〔田中2003、銅製腰帯具の分類は以下同じ〕に分類される。表裏金具が残り、脚鉞が2カ所認められる。それに対してM6は横長で孔も細長く、「長方形」に分類されるものである。表裏金具とも残り、表面及び側面に黒漆が遺存する。M7は表金具のみで、細長孔、脚鉞式である。M8は裏金具で外鉞が4カ所見られ、銅製鉞尾Ⅱ類、外鉞式にあたる。M5は3003溝、M6は第41層、M7・M8は3006溝で出土した。

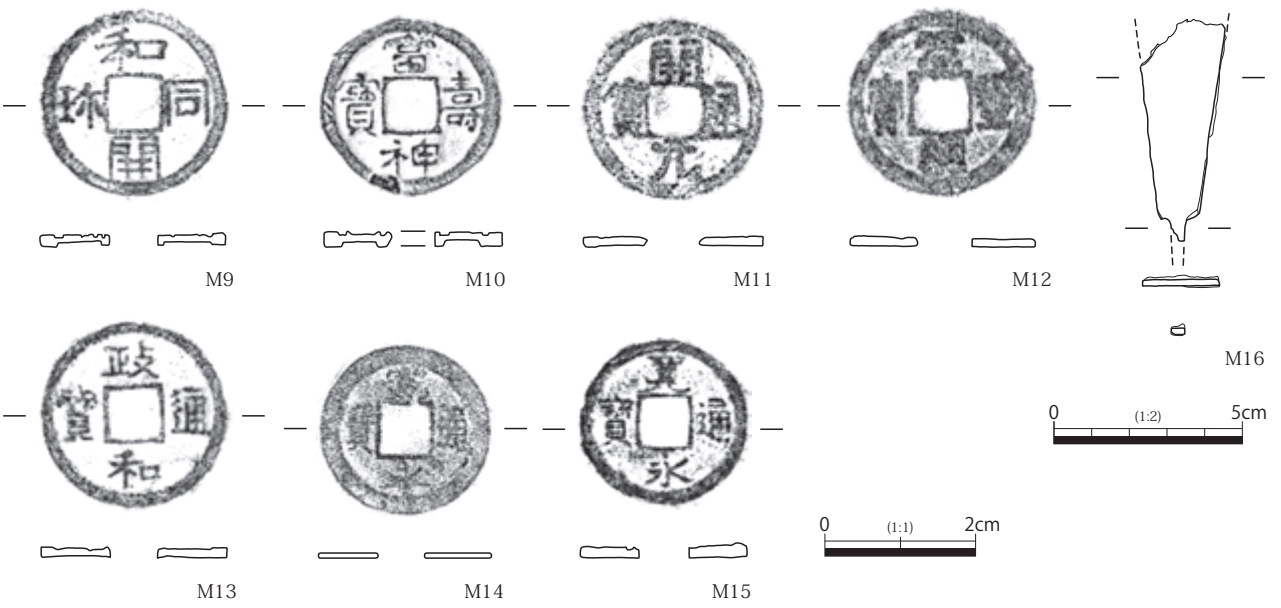
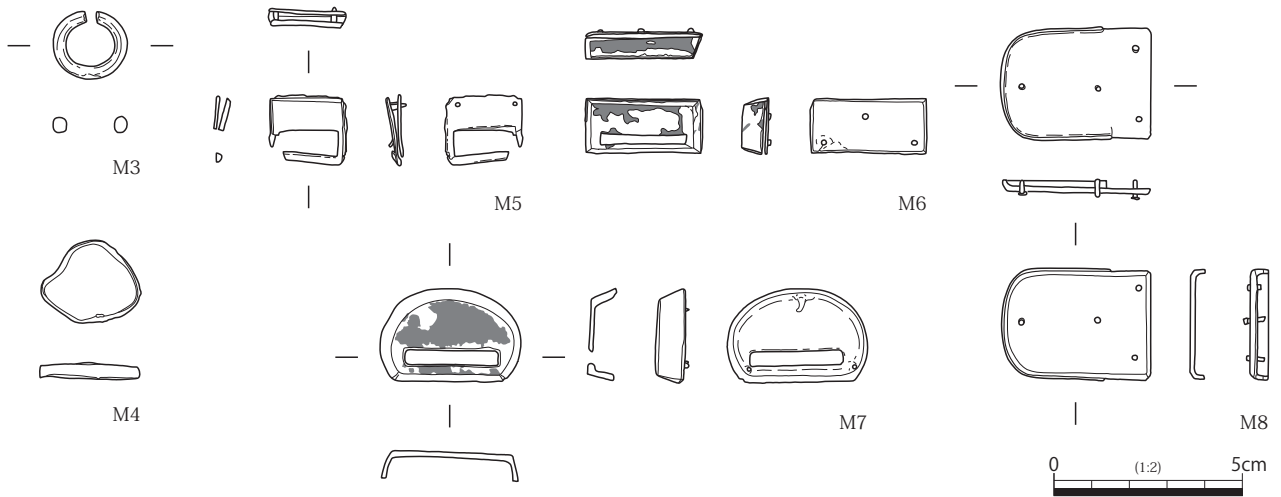
M9～M15は銭貨である。M9は和同開珎で、和同開珎A、「開」の門構えの上端が開く「新和銅」に属する〔奈良国立文化財研究所1974〕。4038溝埋土最上部で出土した。M10は富壽神寶で、富の冠が「宀」となり、第4画が加わることから富壽神寶Bと考えられる〔前掲文献〕。3006溝で出土した。M11は開元通寶で、背面上方に仰月の鑄印があり、唐銭・非紀地銭(会昌開元)と考えられる〔永井2002〕。M12は元豊通寶、M13は政和通寶、M14・M15は寛永通寶である。M11・M12は第1層、M13は第2-2層、M14・M15は客土及び表土から出土した。

鉄製品 (第279図、PL.185)

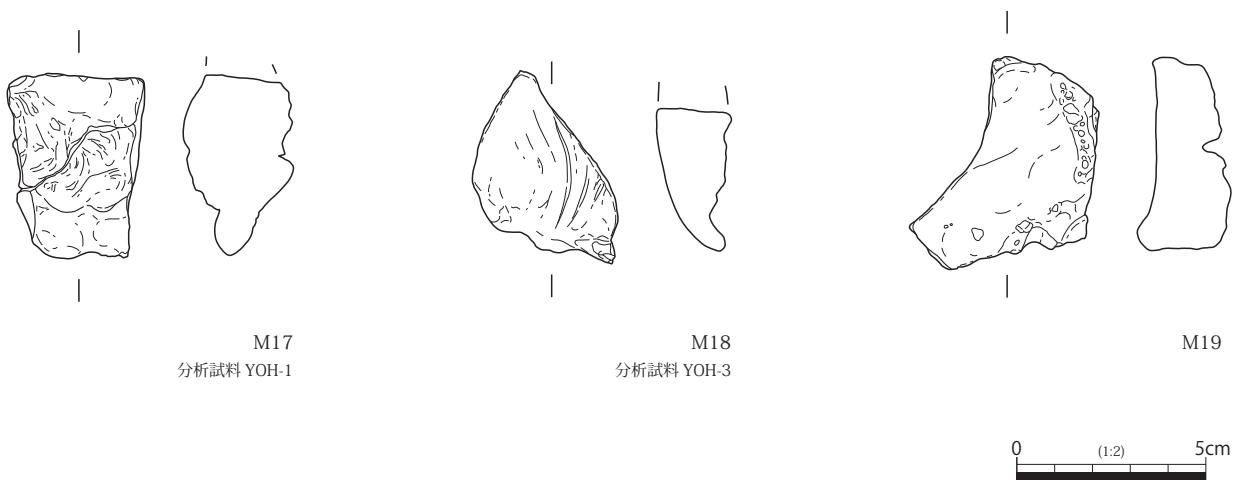
第279図M16は鉄鍬で、鍬身上部を欠失しており、鑿頭式または方頭斧箭式と考えられる。第42層で出土した。

鉄関連遺物 (第280・281図、PL.186・187)

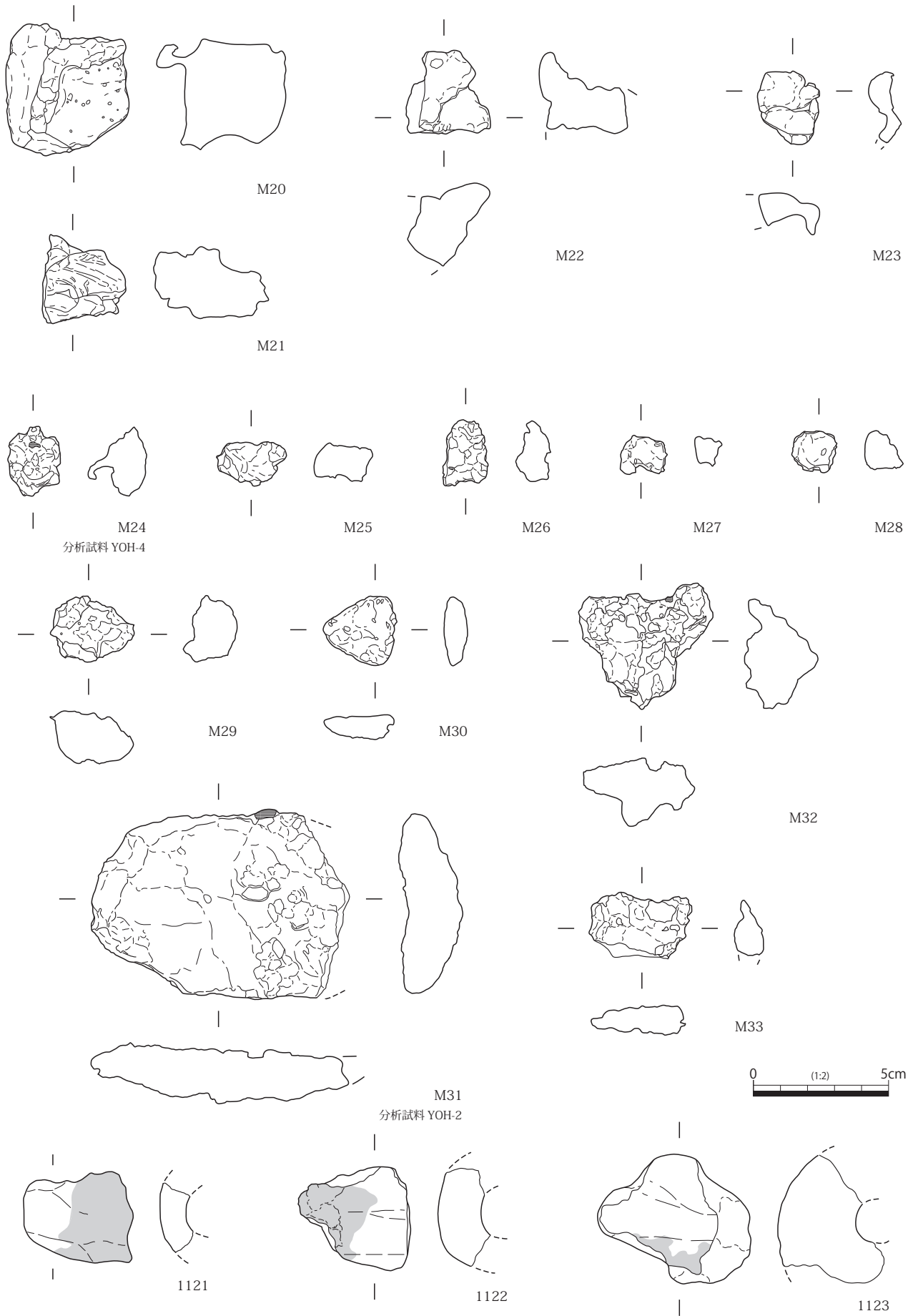
第280図M17～第281図M22は流出溝滓またはその可能性をもつ鉄滓である。M17・M18は上面に細かな流れ皺が確認できる。M17は2片に割れており、割れ口を見ると上面表皮直下の気孔が肥



第279図 金属器



第280図 鉄関連遺物 (1)



第 281 図 鉄関連遺物 (2)

大している。下面は舟底状だが、上手側で不規則な凹凸がある。M18は下面は平坦だが土砂を噛み込んで凹凸が目立つ。M17・M18は分析調査を行っており、砂鉄を始発原料とする製錬滓と推定された（分析結果に関してはすべて第Ⅶ章第5節参照）。M17～M19は3162溝、M20は第2層以下、M21は第3層、M22は第4層からそれぞれ出土した。M23は流動滓で、第4層で出土した。

M24～M28は長さ及び幅が2cm前後で同様の外観をしており、当初鍛冶滓と考えたが、M24を分析調査した結果、炉内滓と推定された。

M29・M30は鍛冶滓、M31～M33は椀形鍛冶滓である。M31は平面不整楕円形を呈し、右側部が破面となる。上手側部、下面を中心に木炭を噛む。下面には中小の気泡が目立つ。分析調査の結果、砂鉄を始発原料とする鍛錬鍛冶滓と考えられる。M24～M28は第4-2層、M29は3433溝、M30は第2-2層、M31・M32は3006溝、M33は3120ピットからそれぞれ出土した。

1121～1123は鞆の羽口である。1121は外面が被熱、溶融して白色のガラス質滓が付着している。1122・1123にも変色した被熱部が認められ、1123は厚手で他の2点より大型だが、内径は約2cmと細い。

<参考文献>

- 田中広明 2003『地方の豪族と古代の官人』KASHIWA 学術ライブラリー 01、柏書房
町田 章 編 1974『平城宮発掘調査報告Ⅵ 平城京左京一条三坊の調査』奈良国立文化財研究所

第4節 出土遺物－文字資料－

(1) 木簡

3区・4区では、計19点の木簡が出土した(第282～286図、表7、PL.188～196)。中世以降に比定される17号～19号木簡(W309～W311)を除き、他はすべて古代の木簡である。出土遺構別に見ると、3006溝が7点と最も多く、3003溝が4点、4038溝が3点となり、大半が建物群の西側、南側を区画する溝から出土している。

なお、木簡の釈読及び評価は、独立行政法人国立文化財機構奈良国立文化財研究所(史料研究室)による受託調査研究の成果に基づいている。木簡の釈文記載様式や型式番号等は『木簡研究』(木簡学会編)の記載様式、分類に準じる。釈文の漢字は現行常用字体に改めたが、「廣」「應」は正字体を使用し、異体字は「マ」(部の異体字)のみ使用した。

遺物図版において、木簡に続くアラビア数字は木簡の長さ(文字の方向)、幅、厚さを示し(単位はmm)、欠損している場合の法量は括弧付きで示した。法量に続く3桁の数字が木簡の型式番号である。

1号木簡及び12号木簡については解剖学的観点からの樹種同定を行っており、それ以外の木簡は表面に表れた材の特徴を実体顕微鏡で観察する方法により樹種を判定している。

1号木簡(W293)

〔謹〕

- ・「恐々奉御前□白寵命
- ・「使孔王部直万呂午時

4228ピットで出土しており、出土層位は上半部が埋土上層、下半部は底面付近である。文書木簡。上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ・柾目。

「某(御)前(謹)白」(某の〈御〉前に〈謹みて〉白す)の書式で書き出す、いわゆる前白木簡である。この書式は、大宝令の施行により解・辞・牒などの様式が整えられる前の、7世紀末を中心とした時代に多用されたもので、口頭伝達と密接にかかわるものとされる。

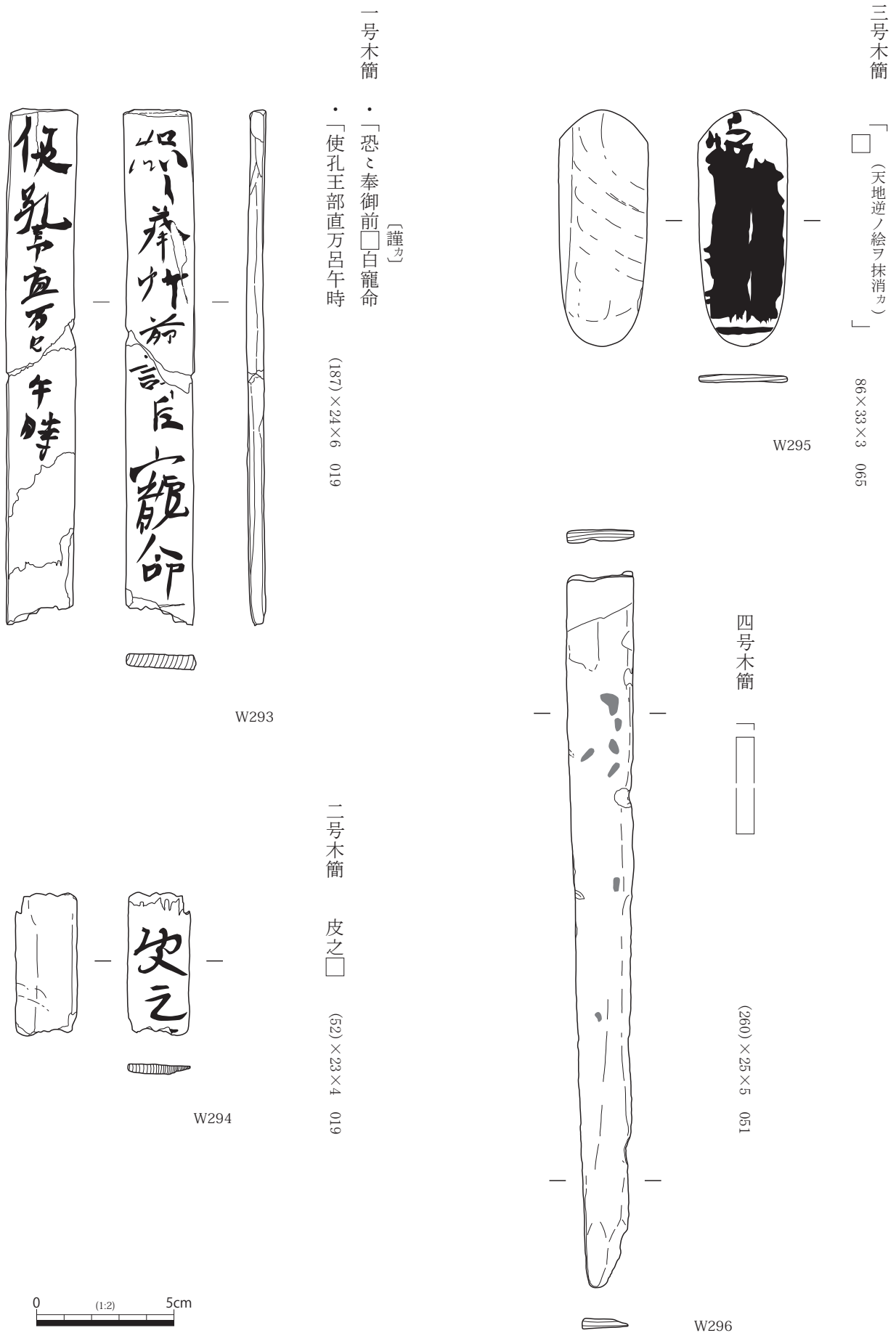
「恐々奉」は、藤原宮木簡第11号木簡にみえる「恐々受賜申大夫前」の事例を参照すると、「奉」は「受賜」に対応し「うけたまわりて」と読むことが理解できる。「寵命」は前白木簡によく見える語で、「寵命坐」として「上級者の命令をお伺いして」程度の意味で用いられ、要件・品目などが続く場合もある。類例は、奈良県藤原宮跡出土木簡〈8号〉、奈良県飛鳥京跡苑池出土木簡〈4号〉、埼玉県小敷田遺跡出土木簡〈1号〉、滋賀県西河原森ノ内遺跡出土木簡〈11号〉に知られるほか、平城宮跡出土木簡〈11367号〉に「寵大命」とする削屑がある。

裏面の「直」は孔王部氏の姓(かばね)とも見られるが、これまでに知られている孔王部氏の姓は連・造・首及び無姓のみで「孔王部直」の事例は知られておらず、「直」は名の一部で「直万呂」(じき〈なお〉まろ)の可能性もある。使者名に続く「午時」は類例から見て発信時刻と考えられる。午時は昼の十二時を中心とした前後2時間をいうが、あるいは「お昼頃」程度の使われ方かもしれない。「午時」の下数文字分は表面が調査時の傷によって剥離して失われている。

2号木簡(W294)

皮之□

4038溝で出土した。木簡の種別は不明。上下両端折れ、左右両辺削り。スギ・柾目。



三号木簡

「(天地逆ノ絵ヲ抹消カ)」

86×33×3 065

W295

四号木簡

「

(260)×25×5 051

W296

一号木簡

〔謹カ〕

・「恐と奉御前□白寵命
・「使孔王部直万呂午時

(187)×24×6 019

W293

二号木簡

皮之□

(52)×23×4 019

W294

0 (1:2) 5cm

第282図 木簡(1)

「皮」の字体は、7世紀木簡のそれに類似するもので、例えば奈良県石神遺跡出土木簡の「奈尔皮」（奈良国立文化財研究所編 2003『飛鳥・藤原宮跡発掘調査出土木簡概報』17所収）の「皮」によく似る。万葉仮名を表したものであろう。

なお、この木簡は1号木簡とは直接は接合せず厚みもやや異なるが、法量、材質、木目、字体から見て同一木簡の断片の可能性はある。

3号木簡 (W295)

「 (天地逆ノ絵ヲ抹消_ヲ)
」

4038 溝で出土した。木簡の種別は不明。四周削り。スギまたはヒノキ科・板目。

天地逆の絵を抹消しているか。1文字目は「収」あるいは「後」の可能性はある。

4号木簡 (W296)

「 」

4038 溝で出土した。木簡の種別は不明。上端切断の後粗い削り、下端二次的整形、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。わずかに墨痕が残る。

5号木簡 (W297)

(追筆)

「『孔王部浄主廿四 継廿八 八 浄成 十四』

『大大』因幡国高草郡刑マ郷戸主刑マ縄孔王部廣公十六」

(追筆)

掘立柱建物9の3450ピットで出土した。記録木簡。上下両端切断、左辺割れ、右辺削り。スギ・板目。

「因幡国高草郡刑部郷」という国・郡・郷名や、人物の姓名、数字が記されている。は、「礼」「私」「和」の可能性はある。郷名に続く人名（孔王部縄）は同郷在住の戸主、それに続く人名（孔王部廣公ほか4名）はその戸口と考えられ、数字は年齢であろう。

当遺跡が所在する良田地域は、『和名類聚抄』によると因幡国高草郡に組み込まれている。ただ、刑部郷については、良田地域より西側の鳥取市松原・吉岡地域に比定されており、遺跡が位置する良田地域の帰属は明らかでない。

本木簡は記録木簡（歴名）でありながら国名から書き出されている点がやや異質で、2箇所認められる追筆がどの段階のものであるかも不明である。

6号木簡 (W298)

・白益

・

3006 溝で出土した。記録木簡か。上下両端折れ、左辺割れ、右辺二次的削り。スギ・板目。

表面3文字目は土偏の文字、6文字目は合点であろうか。白益はそれぞれ傍のつく文字となる可能性もある。

7号木簡 (W299)

・公足百冊

・日子

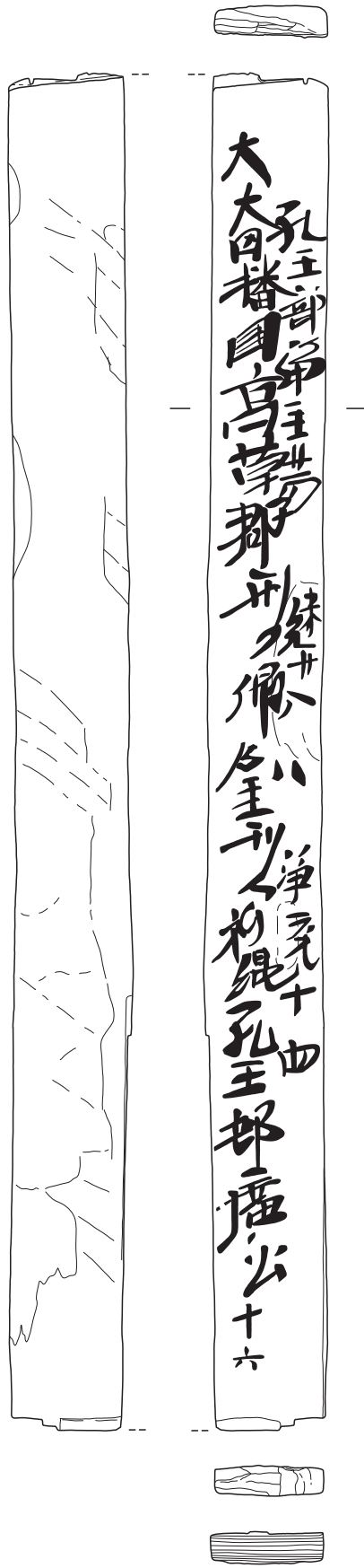
五号木簡

(追筆)

「『孔王部浄主廿四 繼廿八 八 浄成 十四』

『大大』因幡国高草郡刑マ郷戸主刑マ□繩孔王部廣公十六」

399 × (34) × 9 081



W297



第 283 図 木簡 (2)

3006 溝で出土した。記録木簡か。上端二次的切断、下端折れまたは切断、左右両辺削り。針葉樹・
柾目。

表面6文字目は数字または「束」などの単位であろう。

8号木簡 (W300)

・□九升四合 □

・□ □

3006 溝で出土した。帳簿木簡。上端折れ、下端切断、左右両辺削り。スギ・柾目。

表面6文字目は「米」「末」「未」などの可能性がある。なお、8号木簡と9号木簡は寸法や木取りのみならず木目の入り方についても共通性が認められたため、一資料につき3カ所で年輪幅を計測し、おのおの平均化して得た数値データに基づいて年輪幅の推移を見たところ、その変動もよく一致していた。よって両者はもとは一連のものであったか、同じ原材から製作された可能性が高い。

9号木簡 (W301)

〔斗_カ〕

・□□三升一合 □

・□□□ □

3006 溝で出土した。帳簿木簡。上端折れ、下端切断か、左右両辺削り。スギ・柾目。

表面1文字目は数字であろう。

10号木簡 (W302)

・「訟申事追□」

〔延_カ〕

・「□不□得符

□日 □」

〔廿_カ〕

3003 溝埋土下層で出土した。文書木簡。上端切断、下端二次的削り、左右両辺削り。ヒノキ科・
板目。

裏面1文字目は「仍」「承」の可能性があり、「延ぶるをえざれ」と読むか。

11号木簡 (W303)

〔今_カ〕

・「□□□

〔急進_カ〕

・「□□□

3006 溝で出土した。文書木簡か。上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。

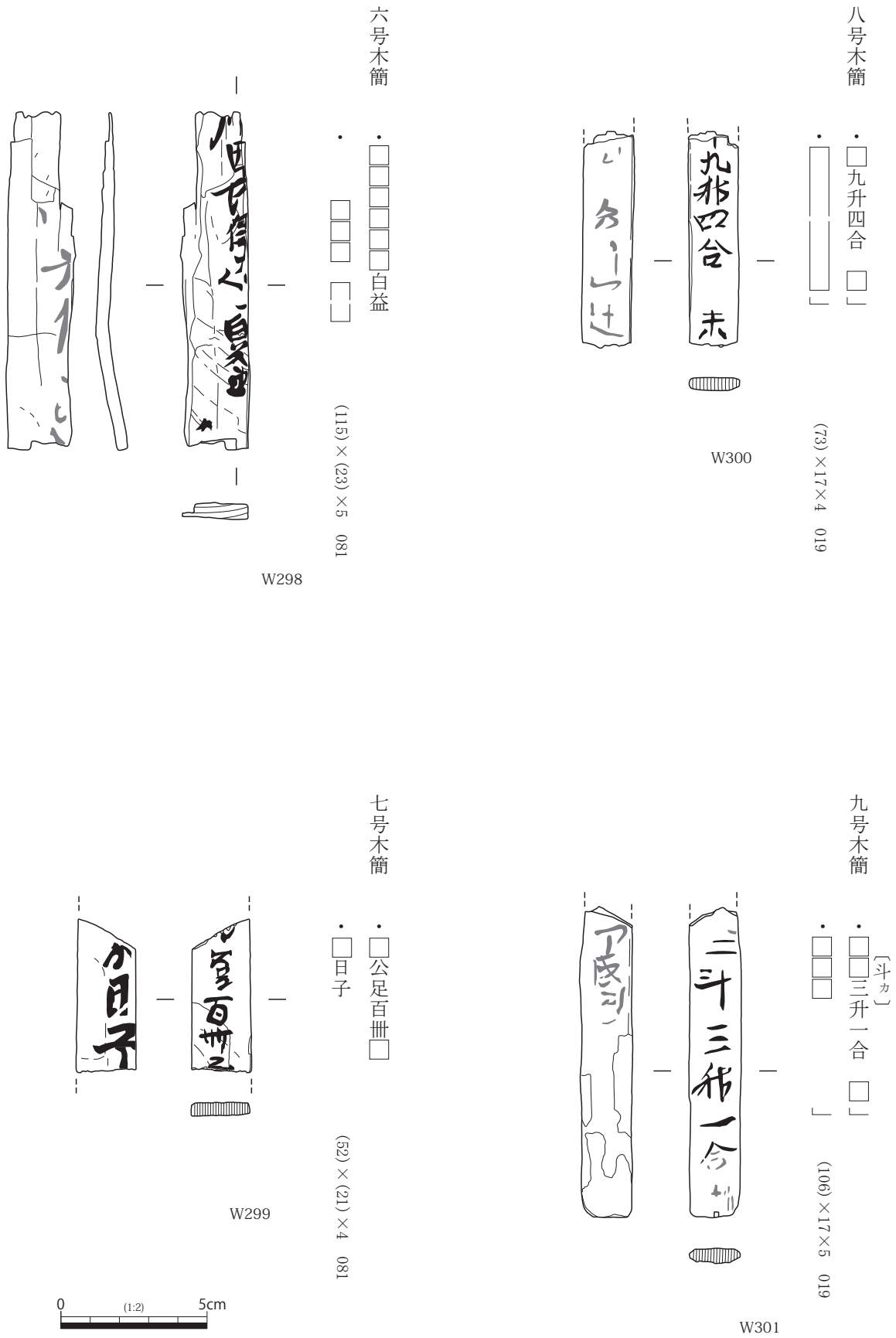
12号木簡 (W304)

・磨磨国播国

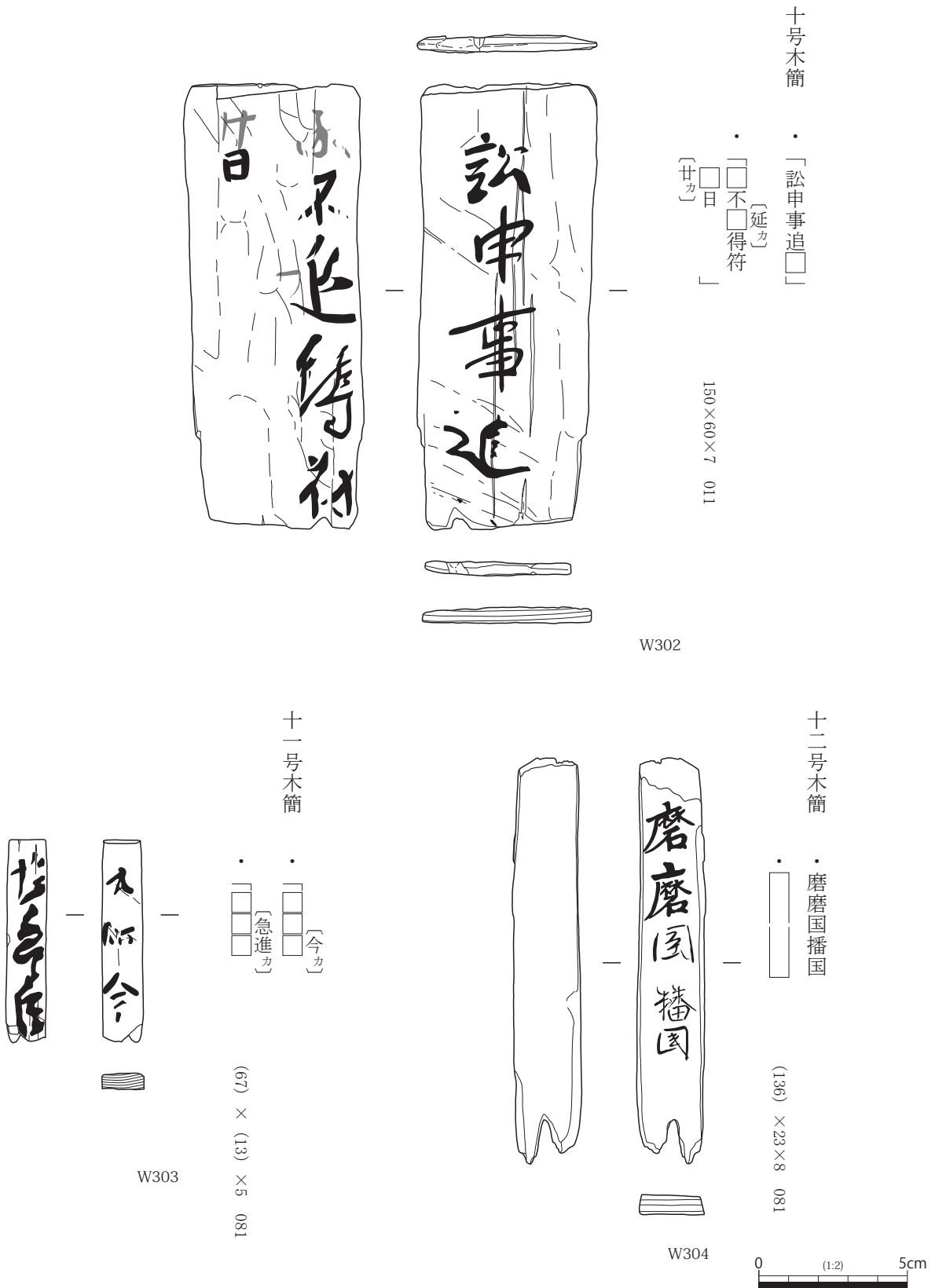
・□ □

3003 溝で出土した。習書木簡。上端割れ、下端切断、左右両辺削り。ヒノキ・板目。

「磨」の筆跡はやや太くしっかりとしているが、それに対し「国」「播」は細く小さい。裏面は二次的
的な削りによって文字が消されており、わずかに墨痕が残る。



第 284 図 木簡 (3)



第285図 木簡(4)

13号木簡 (W305)

「□マ吉在」

3006溝で出土した。付札木簡か。上端・左辺削り、下端切断、右辺削りか。スギ・板目。

左右両辺の下部は斜めに削り。下端は二次的削りの可能性がある。1文字目は「同」か。

14号木簡 (W306)

・□□□□□

・□□□

3003溝で出土した。木簡の種別は不明である。上端折れ、下端切断、左右両辺割れ。スギ・板目。

墨痕は明瞭ながら割れによって大部分を欠失しており、判読できない。

15号木簡 (W307)

・□□□□

・□

3006溝で出土した。木簡の種別は不明である。上端折れ、下端・左辺削り。右辺割れ。針葉樹・板目。

下端は二次的削りか。天地逆の可能性がある。

16号木簡 (W308)

□

3003溝で出土した。木簡の種別は不明である。上下両端折れ、左右両辺割れ。スギ・柾目。

わずかに1カ所墨痕が確認できる。

17号木簡 (W309)

「元應元年

4区第2-2層で出土した。木簡の種別は不明である。上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ?・板目。

当遺跡で出土した木簡のうち年紀のあるものは17号木簡のみで、元應元年は1319年である。

18号木簡 (W310)

「□ □

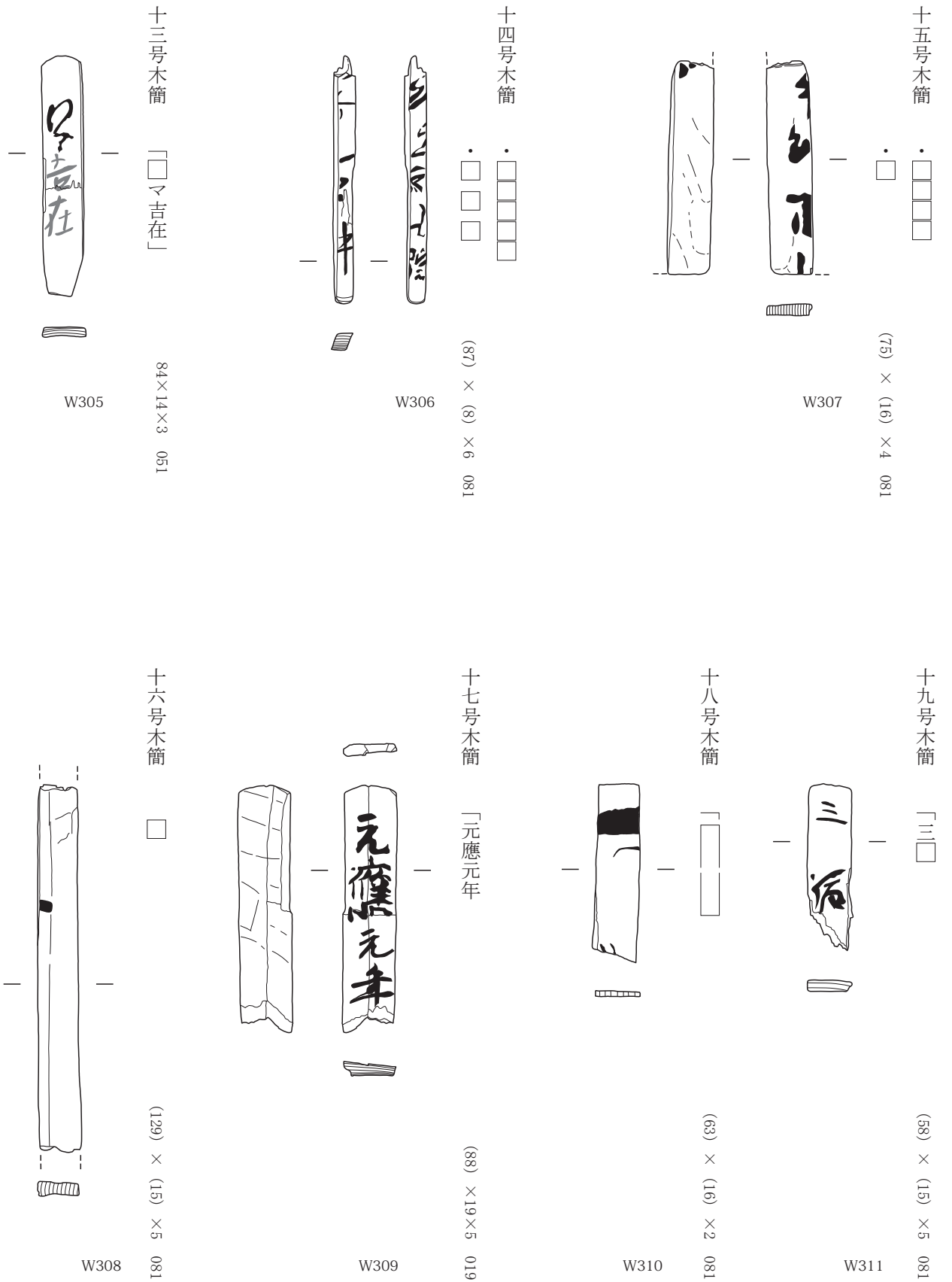
4区第2-2層で出土した。木簡の種別は不明である。上端削り、下端折れ、左右両辺二次的割れ。スギ・板目。

太さの異なる墨線が横方向に走っており、文字ではなく墨画の可能性がある。

19号木簡 (W311)

「三□

4区第2-1層で出土した。木簡の種別は不明である。上端切断、下端折れ、左右両辺削り。スギ・板目。



第 286 図 木簡 (5)

表7 木簡一覧表

遺物番号	種別	地区 出土遺構・層位	法量 (mm) () は残存値			木簡 型式	樹種	木取り	調整	釈文
			長さ	幅	厚さ					
1号 W293	文書木簡	4区 2D-6b 4228 ビット	(187)	24	6	019	※スギ	柁目	上端・左右両辺削り、 下端折れ	〔謹々〕 ・「恐々奉御前□白寵命 ・「使孔王部直万呂午時
2号 W294	不明	4区 2C-7h 4038 溝	(52)	23	4	019	スギ	柁目	上下端折れ、左右両辺 削り	皮之□
3号 W295	不明	4区 2C-7i 4038 溝	86	33	3	065	針葉樹 (スギまたは ヒノキ科)	板目	四周成形	「 (天地逆ノ絵ヲ抹消々) □ 」
4号 W296	不明	4区 2C-7h 4038 溝	(260)	25	5	051	ヒノキ科	板目	上端折れ、下端削り、 左右両辺削り	「[]」
5号 W297	記録木簡	3区 2D-7c 掘立柱建物 9 (3450 ビット)	399	(34)	9	081	スギ	板目	上下端切断、左辺割れ、 右辺二次の削り	(追筆) 「『孔王部浄主廿四 継廿八 八 浄成 十四』 『大』因幡国高草郡刑マ郷戸主 (追筆) 刑マ□繩孔王部廣公十六」
6号 W298	記録木簡?	3区 2D-8e 3006 溝	(115)	(23)	5	081	スギ	板目	上下端折れ、左辺割れ、 右辺二次の削り	・□□□□□白益 ・ □□□ []
7号 W299	記録木簡?	3区 2D-8e 3006 溝	(52)	(21)	4	081	針葉樹	柁目	上端二次の切断、下端 折れまたは切断、左右 両辺削り	・□公足百卅□ ・□日子
8号 W300	帳簿木簡	3区 2D-8e 3006 溝	(73)	17	4	019	スギ	柁目	上端折れ、下端切断、 左右両辺削り	・□九升四合 □ ・[]
9号 W301	帳簿木簡	3区 2D-8e 3006 溝	(106)	17	5	019	スギ	柁目	上端折れ、下端切断か、 左右両辺削り	〔斗々〕 ・□□三升一合 □ ・□□□ 」
10号 W302	文書木簡	3区 2D-7e 3003 溝	150	60	7	011	ヒノキ科	板目	上端切断、下端二次の 削り、左右両辺削り	・「訟申事追□ 〔延々〕 ・「□不□得符 □日 」 〔廿々〕
11号 W303	文書木簡?	3区 2D-8e 3006 溝	(67)	(13)	5	081	ヒノキ科	板目	上端削り、下端折れ、 左右両辺割れ	〔今々〕 ・「□□□ 〔急進々〕 ・「□□□
12号 W304	習書木簡	3区 2D-6e 3003 溝	(136)	23	8	081	※ヒノキ	板目	上下端折れ、下端切断、 左右両辺削り	・磨磨国播国 ・[] (文字数等不明)
13号 W305	付札木簡?	3区 2D-8e 3006 溝	84	14	3	051	スギ	板目	上端・左辺削り、下端 切断、右辺削りか	「□マ吉在」
14号 W306	不明	3区 2D-5e 3003 溝	(87)	(8)	6	081	スギ	板目	上端折れ、下端切断、 左右両辺割れ	・□□□□□ ・□ □ □
15号 W307	不明	3区 2D-8e 3006 溝	(75)	(16)	4	081	針葉樹	柁目	上端折れ、下端・左辺 削り (下端二次の削り か)、右辺割れ	・□□□□ ・□
16号 W308	不明	3区 2D-5e 3003 溝	(129)	(15)	5	081	スギ	柁目	上下端折れ、左右両辺 割れ	□
17号 W309	不明	4区 2D-7a 第 2.2 層	(88)	19	5	019	スギ?	板目	上端削り、下端折れ、 左右両辺削り	「元應元年
18号 W310	不明	4区 2C-8i 第 2.2 層	(63)	(16)	2	081	スギ	柁目	上端削り、下端折れ、 左右両辺割れ	「[]」
19号 W311	不明	4区 2C-7g 第 2.1 層	(58)	(15)	5	081	スギ	板目	上端切断、下端折れ、 左右両辺削り	「三 □

※は切片採取による同定。それ以外は実体顕微鏡による観察。

(2) 墨書土器

概要 墨書土器は総数で169点出土した(第287～296図、PL.197～209)。この数字は、本来同一個体であった資料でも接合関係になれば1点として計上したものである。

調査区ごとの内訳を見ると、3区152点、4区17点と圧倒的な差が生じている。これは土地の利用状況と墨書土器の帰属時期に相関しており、谷奥側の4区は墨書土器の使用が顕著となる8世紀後半以降の建物等が希薄で主として耕作地となることが影響している。

出土遺構・層位別に見ると、4038溝で5点、3003溝で29点、3006溝で33点、3014溝で3点、3432溝・3433溝で22点、掘立柱建物2(3141ピット、3143ピット)で2点、第4層で7点、第3～4層で3点、第3層で4点、第2層で36点、客土・攪乱で16点、掘立柱建物9(3383ピット)・掘立柱建物10(3359ピット)・掘立柱建物13(3445ピット)・3009溝・3438流路・第5層・第4-2層・第1層でそれぞれ1点という内訳になっている。3003溝、3006溝、3432・3433溝といった建物群周囲の溝に廃棄されたものが多いという傾向が窺える。また3区第2層(主体は第2-2層)で出土した資料の多くは、耕作に伴う後世の攪拌で遺構及び第4層(整地土)包含遺物を巻き上げたものと考えられる。

字形別に見ると、「門」一字及び「門+○」(門上、門東、門西など)の形をとるものが45点(可能性があるものを含む、以下同様)と最も多く、墨書土器全体の27%を占める。次いで多いのが「家」「宅」「井」の7点(4%)、「荒田(大内)」の6点(3%)と続く。「大内」(3点)や「下内」(2点)は「内」を基軸とした表記と考えられ、「荒田大内」も同様の内容を表す文字もしくは「大内」が「荒田大内」を省略した表記なのであれば、全体の中では主体的な位置を占める。その他に注意される墨書として、「馬津」や「船」といった水運を表すもの、地名に係る表記と考えられるもの(「越」「高郡」「□見庄」など)、人名の可能性のあるもの(「今主」「田子」)が挙げられる。

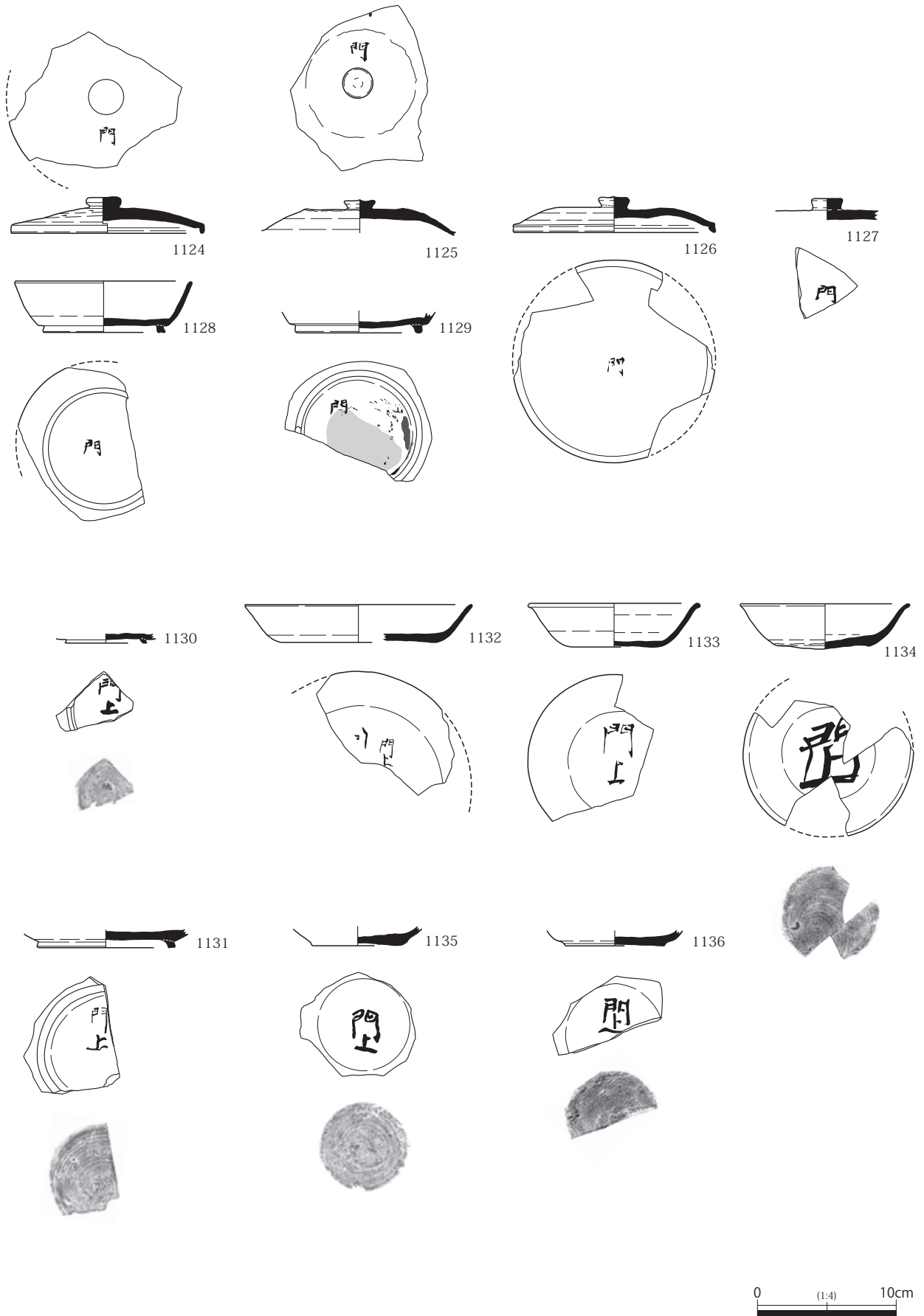
個々の積文や出土遺構・層位等は表8～13に列記しており、本節では字形ごとに概観していく。

「門」「門+○」 第287図1124～第289図1168は「門」あるいは「門+○」と表記されたものである。

1124～1127は「門」一字のみ表記されており、筆跡は細く丁寧で、文字の大きさも1.2～1.5cm角と小さい。扁平・ボタン状のつまみを有す蓋1124～1127、外傾して直線的に立ち上がる浅い体部をもつ高台付坏1128・1129が見られ、8世紀前半に比定される。1129は墨書のある底部外面を転用硯として使用している。

1130～1136は墨書「門上」の一群である。文字は線の太さ、大きさ、跳ね・止めなど個々でばらつきが認められる。1130と1131のみ高台付坏で、他は坏である。1135は「上」の上部が、1134・1136は「上」のほぼ全体が門構えの中に収まるように表記されている点特徴的である。高台付坏1130・1131、坏1133～1136、皿1132などがあり、1132は8世紀後半、その他は概ね8世紀末から9世紀前半に比定されよう。1137～1140は墨書に積読できない文字を含むが、「門上」と表記されている可能性をもつ。土器の時期は8世紀末から9世紀前半であろう。

1141～1143・1146は「門宅」と表記されたもの、またはその可能性が高いもので、坏と高台付坏がある。1141・1142は門構えの左側下端部に跳ねが認められることが特徴的で、2文字目が不明ながら1144や1145の「門」も同じ特徴を持つ。ただし、1145は跳ねの方向が逆である。1141・1142は9世紀前半、1143～1145は9世紀後半～10世紀初頭に比定されよう。



第 287 図 墨書土器 (1) 「門」 ①

1147～1154は「門東」と表記された高台付坏、坏で、その可能性があるものを含む。1147の「一」は追筆と考えられる。1149は「門」の上に「一」があり、三文字目が不明ながら「東」の上端とも見れる墨痕が認められる。1150は「門東」と「家二」の文字が通っておらず、底面範囲に文字を収めるためか下半の「家二」が右方向に流れている。1151は重複する場所に古い別文字の可能性のある墨痕が薄く認められる。1154の3文字目も同様の性格で、「門東」は新たに書き直されたものであろう。また、1147・1150・1153は門構え右側が簡略化されて一筆で書かれており、「リ（りっとう）」状となっていることが特徴的である。1154は8世紀後半、それ以外は8世紀末～9世紀前半頃のものとする。

1155・1156は「門西」で、1155は筆跡が太く丁寧で、1156は門構えの左下端に跳ねがあり右側上部も潰れていて線もやや細い。さらに「西」下部に不要な横画が1本入っている。どちらも8世紀後半のものとする。

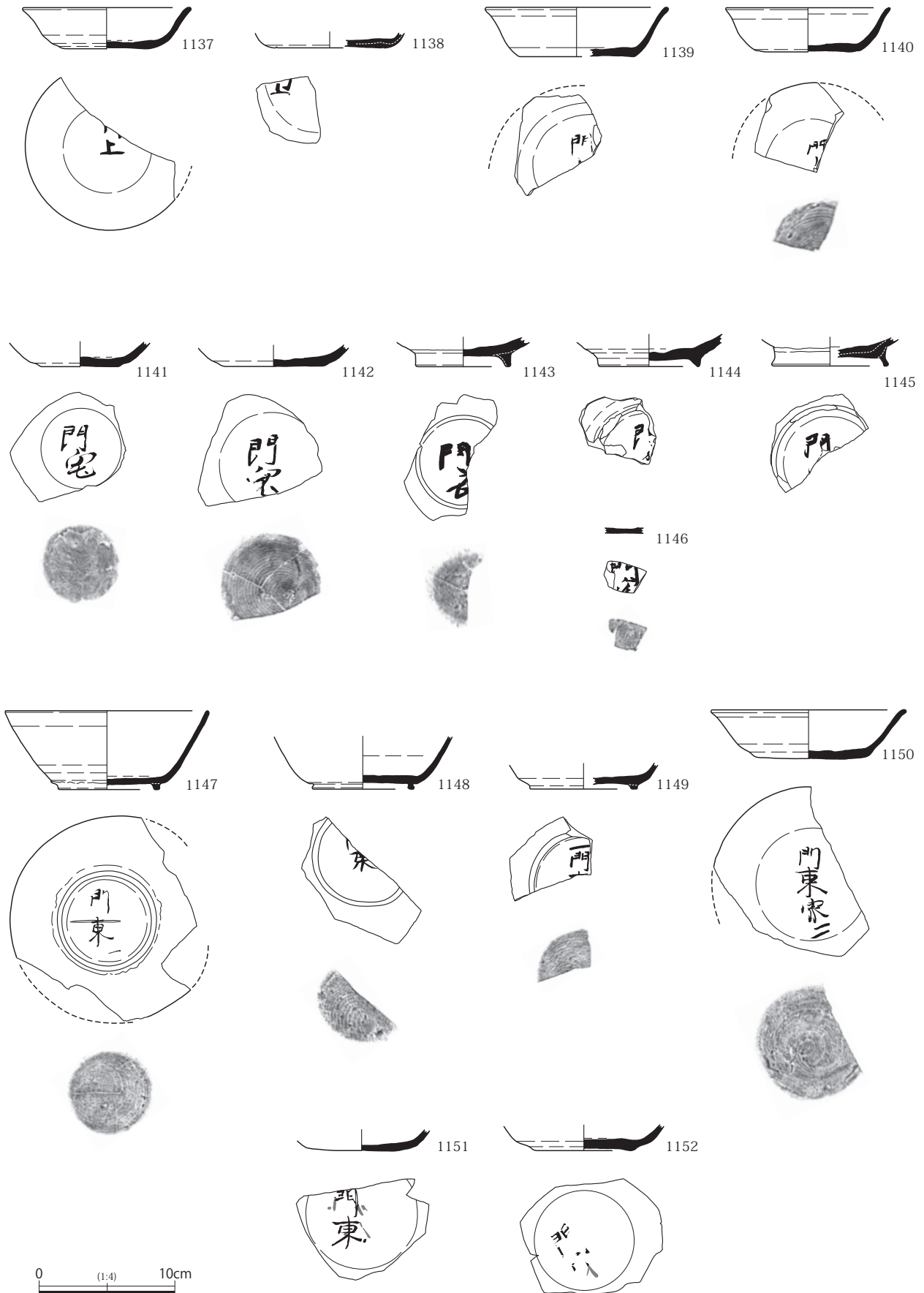
1157～1168は「門」及びその可能性がある文字（群）の全体形が不明確なものである。1157は蓋天井部中央に大きく門構えが見えるため、「門」一字の可能性はあるだろう。それに対して1158は「門」が底面中央よりやや上に位置しており、さらに文字が続く可能性をもつ。1166は土師器坏底面に墨書されており、1文字目は門構え左側、2文字目は払いの可能性もある。1157・1159・1160・1166は9世紀後半、1158は8世紀後半と考えられる。

「家」「宅」 第290図1169は「東大家」と表記されている。2文字目部分は遺存状況が悪いこともあり割れ、剥落が顕著だが、出土時に「大」の右側払い部分が確認できている。1170～1173は「宅」あるいは「宅」と考えられるもので、「門宅」のように別の文字を組み合わせて表記していた可能性があるだろう。1174・1175は「家」か。1169は8世紀末～9世紀前半、1174・1175は8世紀後半に比定され、1170～1172は9世紀、1173は9世紀末～10世紀前半か。

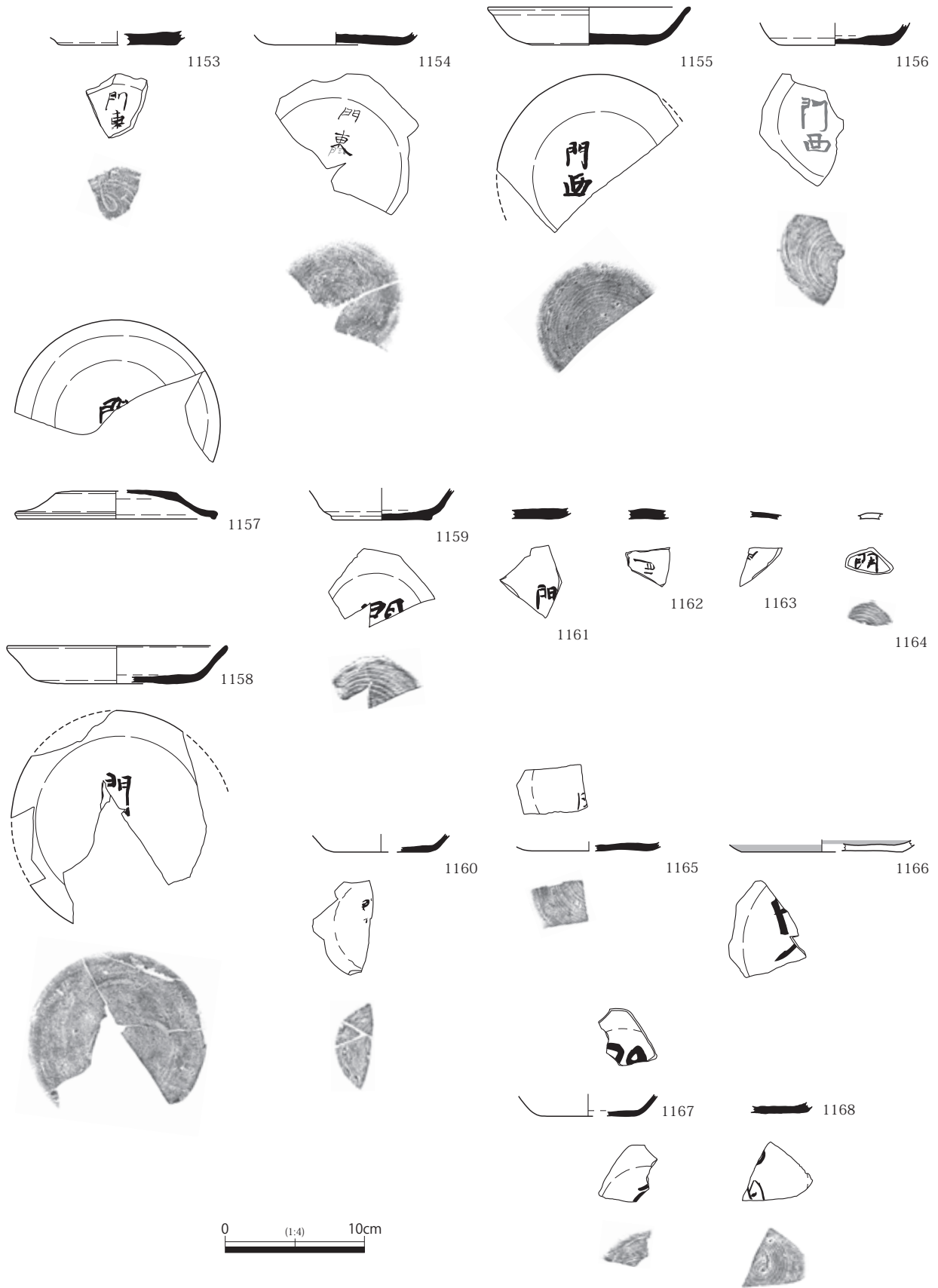
「井」 1176～1182は「井」と表記された一群である。全体形が窺えるのが1179のみで詳細は不明だが、文字は大きいものが多く、1179のように「井」一字で使用されている可能性もあろう。後述するように「石井」という墨書もあるため、当然、複数文字表記の一部ということも考えられる。1176・1180は8世紀、1177・1181・1182は8世紀末～9世紀前半のものか。

「荒田（大内）」 第291図1183～1189は「荒田」及びその可能性が考えられるものである。「荒田」は良田地域の旧地名（旧荒田村、明治4年改称）であり、その点からも特筆すべき文字といえる。1183・1184は「荒田大内」となっており、「荒田」に続く文字が読み取れない1186～1188についても同様に表記されていた可能性があるだろう。須恵器蓋、高台付坏、坏そして土師器坏が見られ、1183・1184・1189は8世紀後半、1185・1187・1188は8世紀末～9世紀前半に比定される。

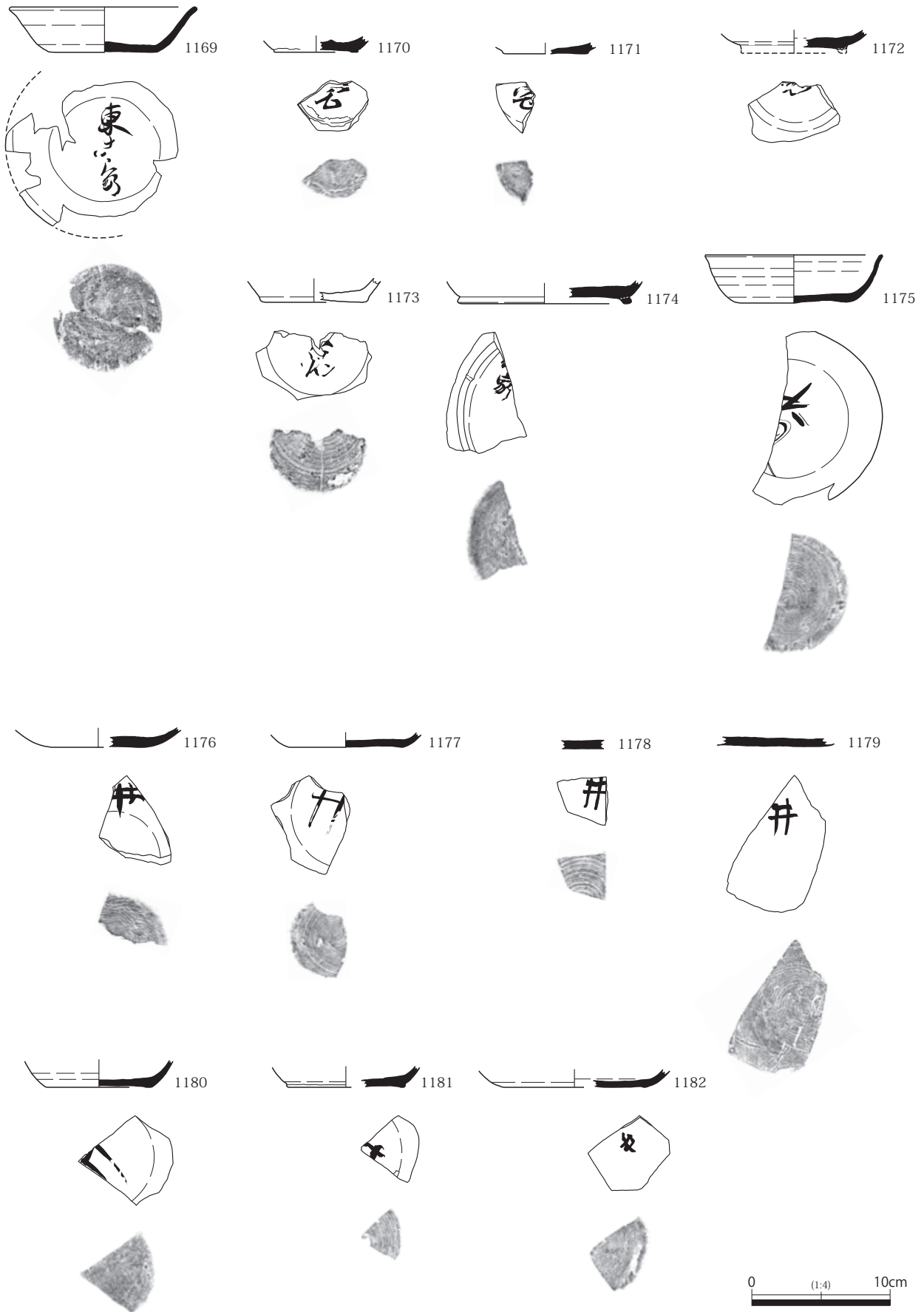
「大内」「下内」 1190～1197は「大内」「下内」またはその可能性が考えられるものである。1190・1191は「大内」で、いずれも高台内側の全面を使って墨書されている。1191は「内」の「人」部分の書き方に特徴があり、一画目を真っ直ぐに下ろし、それに直角気味に、を付ける。「大」の払いは1190・1191とも左右に大きく広がる。1192の「大内」は文字が小さく、筆跡は「荒田大内」のそれに近似する。1193・1194は「下内」で、文字は1cm角に満たず小さい。1195～1197は「内」が確認でき、「大内」「下内」を構成する一文字であった可能性がある。1195・1196の筆跡は、「荒田大内」「下内」に近い。1190・1191・1193・1194は8世紀前半、1192・1196・1197は8世紀末～9世紀前半に比定されると考える。



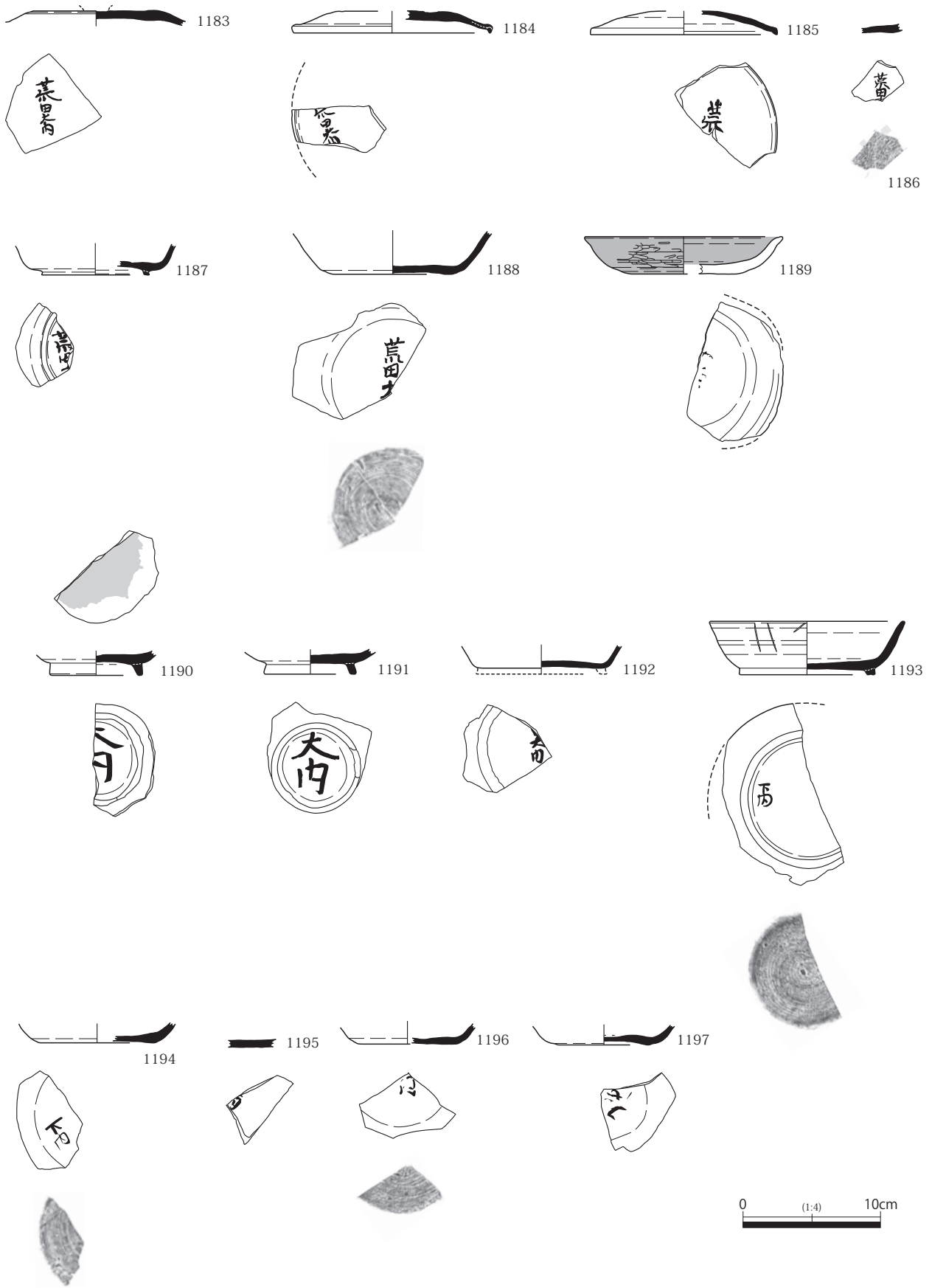
第288図 墨書土器(2)「門」②



第289図 墨書土器(3)「門」③



第290図 墨書土器 (4) 「家」「宅」「井」



第 291 図 墨書土器 (5) 「荒田大内」「大内」「下内」ほか

その他 第292図1198は8世紀後半の高台付坏で、文字の右端が不明だが「上」か。1199・1200は文字の全体形が不明ながら「東」の可能性が高い。1201・1202はどちらも8世紀末～9世紀前半の坏底面に「東」の文字が確認でき、その上部を欠くが当遺跡での出土例を勘案すれば「門東」を構成する一部であったとも考えられる。1203は9世紀末～10世紀前半の須恵器皿の底面に3文字が確認でき、2文字目は「東」、1文字目は門構えの一部と見られる。

1204は8世紀の須恵器蓋で、天井部内面に「越」と墨書されている。1205は8世紀後半の須恵器蓋の天井部内面に細い線で「高郡」と墨書されており、「高郡」は高草郡を省略した表記と考えられる。1206・1207は8世紀後半の高台付坏で、「石井」、「清水」の文字が明瞭に残る。1208は8世紀末～9世紀前半の須恵器蓋天井部に「□見庄」が見え、内面を転用硯としている。1209は9世紀後半と見られる蓋で、天井部に2行にわたって墨書されている。右側の2文字目は偏が土、旁が屋となっており、釈読できていない。左側は2文字確認でき、深縁の可能性もある。当遺跡と丘陵を隔てた東側に位置する高住平田遺跡でも「深縁曹□〔司_カ〕」と表記された墨書土器が出土している。1210は9世紀末～10世紀前半の坏の見込に墨書されており、文字は「栞谷」であろうか。1211・1212は文字の一部を欠いており読み切れていないが、それぞれ「績」、「畠」の可能性もある。どちらも8世紀後半に比定されよう。1213は壺の底面に「新」と見られる文字が表記されている。1214は「新□」でさらに文字が続く。1215は小片だが坏と考えられ、「□壚」の文字が確認できる。

第293図1216は「馬津」、1218は「□津」、1219は「船」の文字が見え、いずれも水運に係る表記である。1217は「馬」の一字が確認でき、1216と同様の表記か。1216・1217は8世紀末～9世紀前半、1218は8世紀後半、1219は9世紀後半のものと考えられる。

1220は「今主」、1221は「田子」で、人名の可能性もある。1220は8世紀末～9世紀前半の高台付坏、1221は8世紀後半の蓋である。1222は赤彩された土師器坏の底面に「仲」と見られる表記があり、8世紀後半のものである。1223は土師器坏底部に小さく「日_カ」が見える。10世紀頃のものか。1224は8世紀後半の蓋の体部左右に文字または記号と考えられる墨書がある。

1228～第296図1292は、墨書（墨痕）が確認できるものの文字を釈読（判別）できるほど遺存していない資料である。1232は跳ねのような部位が見えるが、天地等不明である。1248は「東」の可能性もある。1249・1251は2文字分の墨痕が見える。1265は土師器甕頸部に墨痕が認められ、文字ではなく絵の可能性もある。1276は1185と同一個体と考えられるが、接点はない。「内」または「田」であろうか。1288の墨痕は「門」の可能性もある。

なお、鳥取市教育委員会が実施した試掘調査においても第1トレンチSD-02で墨書土器が1点出土している〔鳥取市教育委員会2010〕。9世紀前半の須恵器坏底面に「□〔門_カ〕東」と表記されており^(註) (PL.202参照)、本調査の結果SD-02は3006溝であることが明らかとなった。

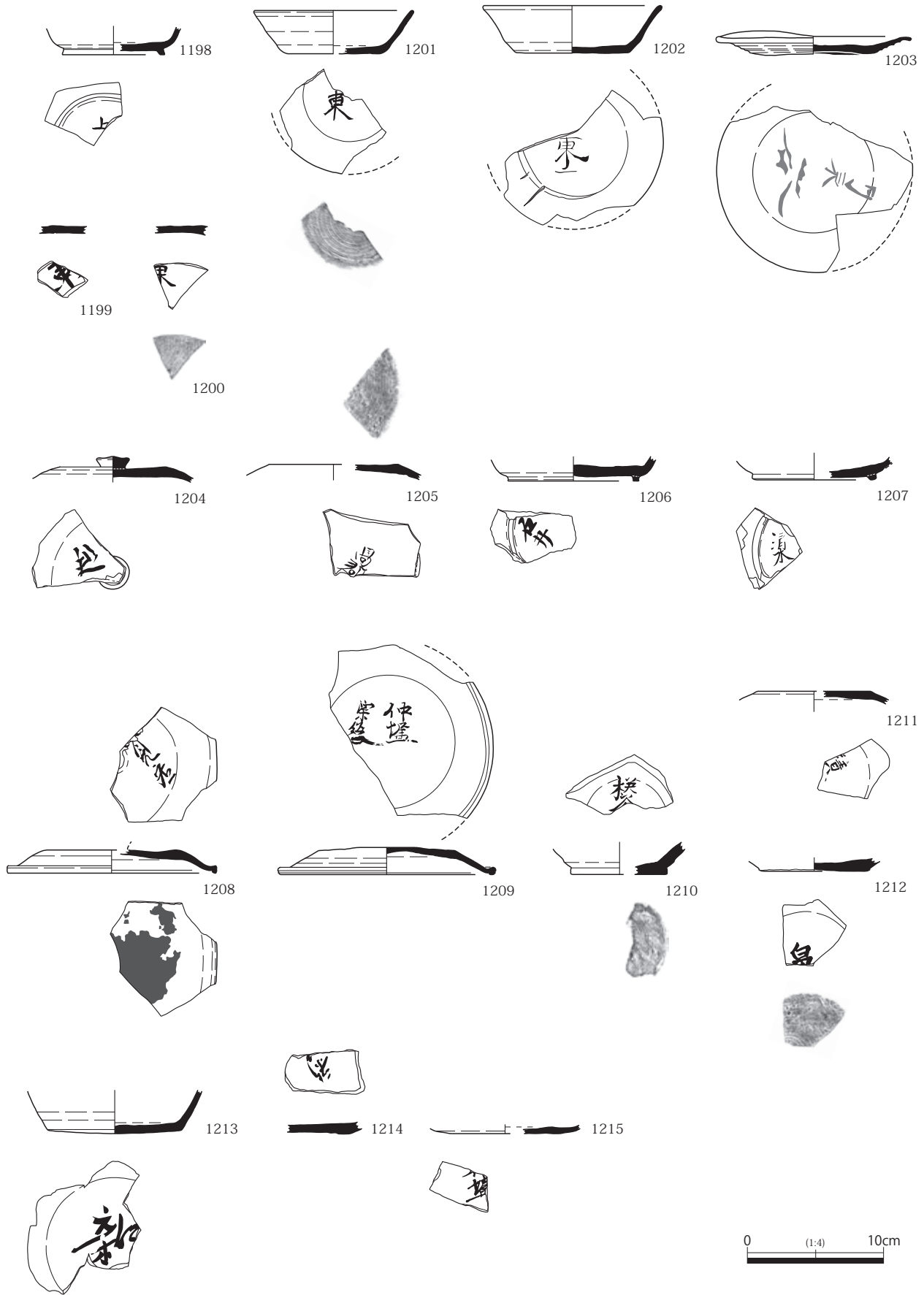
註

墨書については赤外線写真をもとに再釈読しており、試掘調査時の釈文から修正している。赤外線写真の撮影は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏、墨書の再釈読は同研究所の山本崇氏にお世話になった。記して感謝申し上げます。

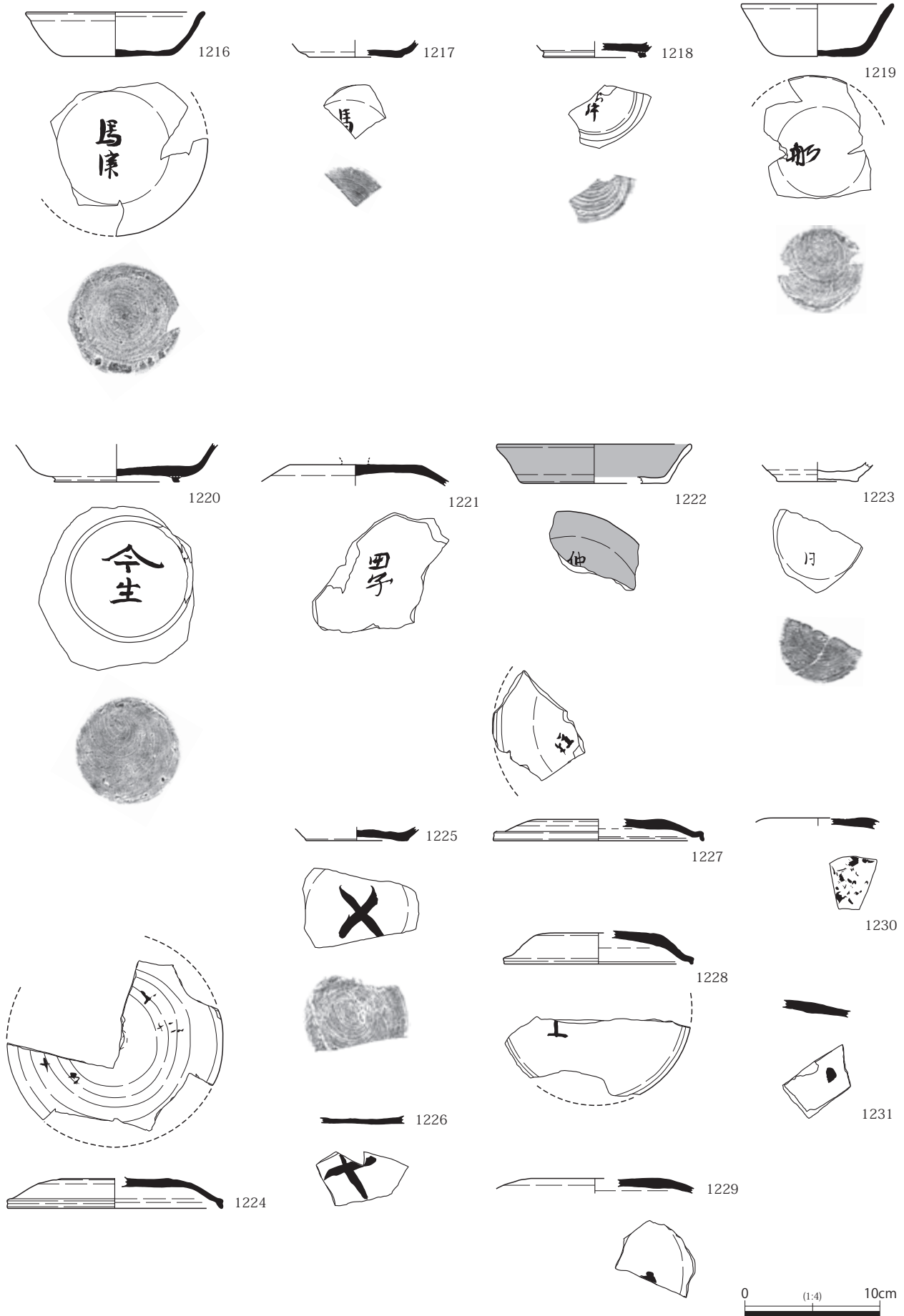
<参考文献>

鳥取市教育委員会 2010『平成21(2009)年度 鳥取市内遺跡発掘調査報告書』

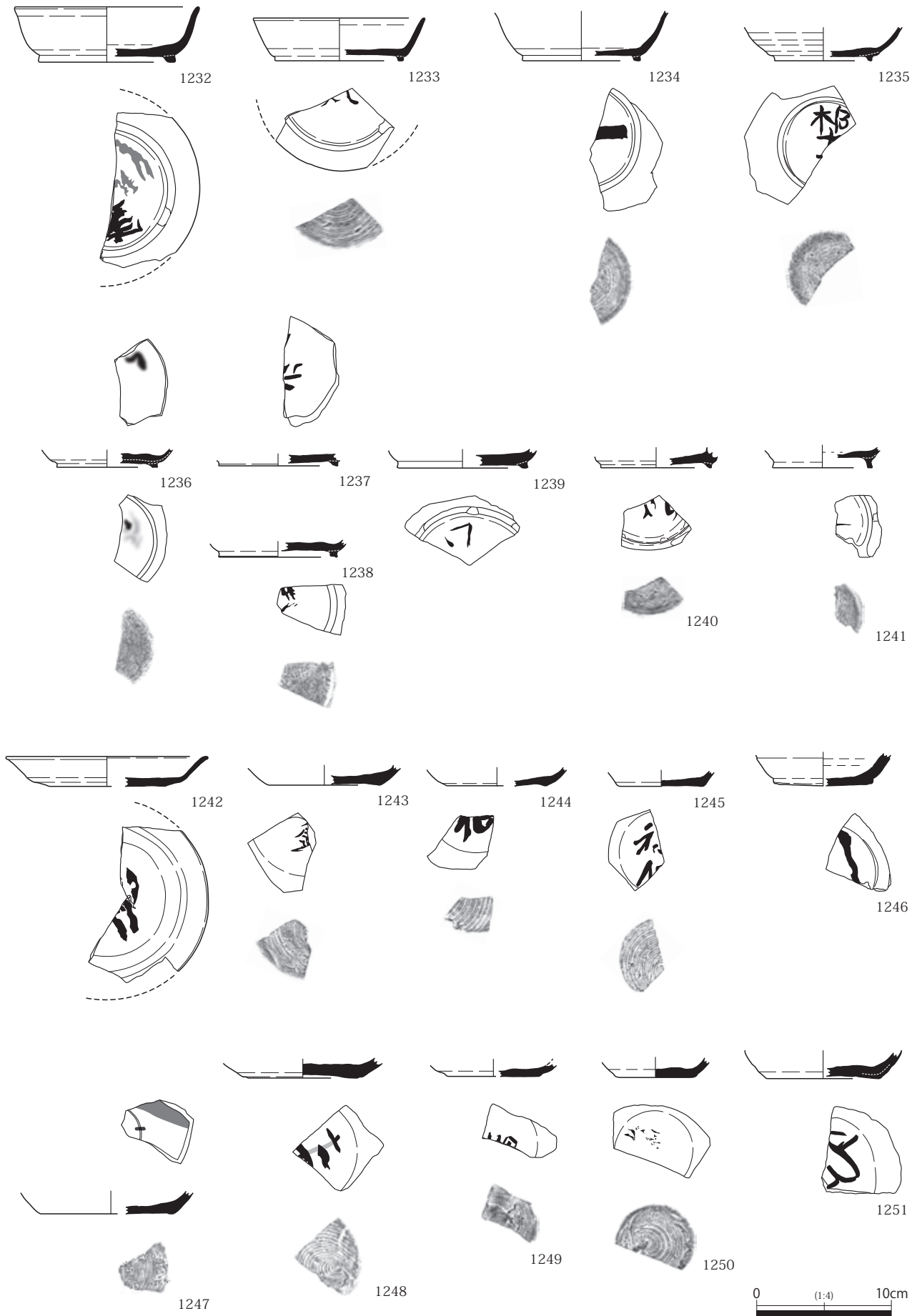
第VI章 3区・4区の調査成果



第 292 図 墨書土器 (6) 「東」「高郡」「石井」ほか



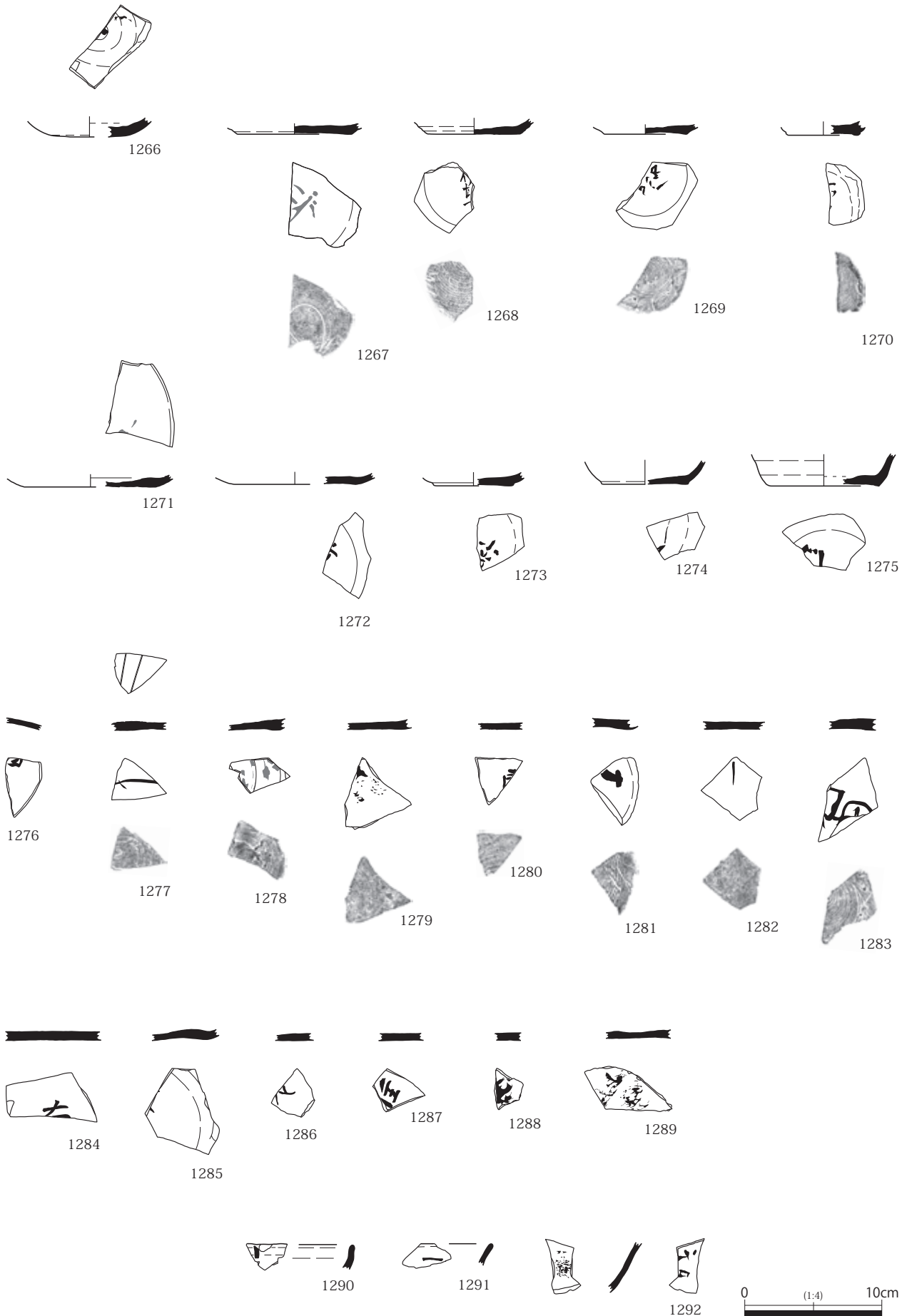
第 293 図 墨書土器 (7) 「馬津」「津」「船」ほか



第 294 図 墨書土器 (8) その他①



第295図 墨書土器 (9) その他②



第296図 墨書土器(10) その他③

表8 墨書土器一覧表(1)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	积文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1124	3区 2D-7e	3003溝 埋土下層	須恵器 蓋	「門」	天井部	下	小	
1125	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	□/「門」	外面	上	小	
1126	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	「門」	天井部内面	中心	小	
1127	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	「門」	内面	中心	小	
1128	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	「門」	底部外面	中心	小	
1129	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 高台付坏	「門」	底部外面	左上	小	転用砚
1130	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	門上	底部外面	中心	中	
1131	3区 2D-7e	3003溝 埋土	須恵器 高台付坏	門□ 〔上 _カ 〕	底部外面	上	中	
1132	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	「門上」□	底部外面	中心・右	小	
1133	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	「門上」	底部外面	中心	中	
1134	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	「門上」	底部外面	中心	大	
1135	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	「門上」	底部外面	中心	中	
1136	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 坏	「門上」	底部外面	中心上	中	
1137	3区 2D-7b	第4層	須恵器 坏	□上 〔門 _カ 〕	底部外面	中心	中	
1138	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	□□ 〔門上 _カ 〕	底部外面	左	-	
1139	3区 2D-7b	3438流路 埋土	須恵器 坏	「門□	底部外面	中心	中	
1140	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	「門□ 〔上 _カ 〕	底部外面	中心	小	
1141	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 坏	「門宅」	底部外面	中心	大	
1142	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	「門宅	底部外面	中心左	大	攪乱
1143	3区 2D-7b	第3層	須恵器 高台付坏	「門□」 〔宅 _カ 〕	底部外面	中心	中	1223
1144	4区 2D-7a	第1層	須恵器 高台付坏	「門□	底部外面	中心上	中	
1145	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	「門□	底部外面	中心	中	
1146	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏?	□□ 〔門宅 _カ 〕	底部外面	中心	中	高台付坏か
1147	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	「門東「一」	底部外面	全体	中	
1148	3区 2D-5e	第2-1層	須恵器 高台付坏	□東 〔門 _カ 〕	底部外面	中心	中	
1149	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	「一門□	底部外面	中心	小	
1150	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	「門東家二」	底部外面	中心	中	
1151	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	門東」	底部外面	中心左	中	
1152	3区 2D-7c	第2-2層 ～第4層	須恵器 坏	「門□」	底部外面	中心左	中	

※文字サイズ 小：1.5 cm 未満、中 1.5 cm 以上 2.0 cm 未満、大：2.0 cm 以上

表9 墨書土器一覧表(2)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	积文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1153	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 坏	門東	底部外面	上	小	
1154	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	「門東□」	底部外面	中心・上	小	書き直し?
1155	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	「門西」	底部外面	中心左	中	
1156	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	「門西」	底部外面	左	大	
1157	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	「門」	天井部	中心	大	
1158	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 皿	「門」	底部外面	中心	大	
1159	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 坏	「門」	底部外面	中心	大	
1160	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	「□□ 〔門 _ナ 〕」	底部外面	上	中	
1161	3区 2D-6d	第5層	須恵器 坏	「門」	底部外面	-	中	
1162	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	「門□」	底部外面	-	小	
1163	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋?	「門」	天井部内面	-	小	
1164	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 坏	門	底部外面	中心	中	
1165	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	□ 〔門 _ナ 〕	見込部	中心	-	
1166	3区 2D-7c	3433溝 埋土	土師器 坏	□□ 〔門 _ナ 〕	底部外面	中心	大	
1167	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	(外面) □ (内面) □ 〔門 _ナ 〕	底部外面 見込部	中心上 -	大 -	
1168	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	□ 〔門 _ナ 〕	底部外面	中心	中	
1169	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	「東大家」	底部外面	中心	大	
1170	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	□宅」	底部外面	下	中	
1171	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 坏	宅」	底部外面	下	中	
1172	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	□ 〔宅 _ナ 〕	底部外面	中心	中	
1173	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 坏	宅」	底部外面	中心・下	中	
1174	3区 2D-5d	第2-2層	須恵器 高台付坏	□□」	底部外面	左	中	二文字目は家の可能性
1175	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	□ 〔家 _ナ 〕	底部外面	中心	大	
1176	3区 2D-7d	第2-2層	須恵器 坏	井」	坏部外面	側面	中	
1177	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	井」	底部外面	左	大	
1178	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3143ピット 埋土	須恵器 坏	井	底部外面	上	中	
1179	3区 2D-6e	客土	須恵器 坏	「井」	底部外面	中心	中	
1180	3区 2D-6d	客土	須恵器 坏	□ 〔井 _ナ 〕	底部外面	中心	大	

表10 墨書土器一覧表(3)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	釈文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1181	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	□ 〔井 _カ 〕	底部外面	中心	中	
1182	3区 2D-6c	掘立柱建物13 3445ピット 埋土	須恵器 坏	「□」 〔井 _カ 〕	底部外面	左上	小	筆使は1282の2文字目と 同じ
1183	3区 2D-6c	第4層	須恵器 蓋	「荒田大内」	内面	左	小	
1184	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	荒田大内	内面	左	小	
1185	3区 2D-6c	3433溝 埋土	須恵器 蓋	「荒	内面	中心	中	1276と同一個体、接点な し
1186	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	「荒田□」 〔大 _カ 〕	底部外面	左	小	
1187	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高台付坏	「荒田□」	底部外面	左	中	
1188	3区 2D-6c	第4層	須恵器 坏	「荒田大	底部外面	中心	中	
1189	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	土師器 皿	□ 〔荒 _カ 〕	底部外面	中心	-	
1190	3区 2D-6b	第2-1層	須恵器 高台付坏	「大内」	底部外面	中心	大	
1191	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 高台付坏	「大内」	底部外面	中心	大	
1192	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	□大内」	底部外面	中心	小	
1193	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	「下内」	底部外面	左	小	
1194	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	「下内」	底部外面	左	小	
1195	3区 2D-7c	第4層	須恵器 坏	□□ 〔内 _カ 〕	体部内面	-	小	
1196	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	内」	底部外面	中心	小	
1197	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 坏	□□ 〔大 _カ 〕	底部外面	中心	中	
1198	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 高台付坏	「□」 〔上 _カ 〕	底部外面	上	小	
1199	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	東	底部外面	中心	中	
1200	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 坏	□ 〔東 _カ 〕	底部外面	右	中	
1201	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	東」	底部外面	中心	中	
1202	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	東一」	底部外面	中心	中	
1203	3区 2D-6b 2D-6c	第4層	須恵器 皿	「□□□」 〔東 _カ 〕	底部外面	中心	大	
1204	4区 2C-6j	第4-2層	須恵器 蓋	「越	天井部内面	上	中	
1205	3区 2D-7d	客土	須恵器 蓋	「高部	天井部内面	中心	中	
1206	4区 2D-7a	4038溝 埋土中層	須恵器 高台付坏	「石井」	底部外面	左上	中	見込に墨付着、転用硯？
1207	4区 2C-7i	第3層	須恵器 高台付坏	「清水」	底部外面	左	小	
1208	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3141ピット 埋土	須恵器 蓋	□見庄」	天井部	右下	中	内面転用硯

表 11 墨書土器一覧表 (4)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	积文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1209	3区 2D-7b	3006 溝 埋土最下層	須恵器 蓋	「中□/□□」 〔深縁カ〕 (右側2文字目土偏ニ屋)	天井部 外面	中心 上	中 -	
1210	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 坏	「栞谷カ	見込部	中心上	中	
1211	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	「□ 〔續カ〕	天井部内面	中心	中	
1212	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	「□ 〔畠カ〕	底部外面	中心	中	
1213	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 壺	「□ 〔新カ〕	底部外面	中心	大	3003 溝出土破片と接合
1214	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	「新□	見込	左	中	蓋の可能性も
1215	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	須恵器 坏	□壚	底部外面	左	中	蓋の可能性あり 「壚」は炉の意味
1216	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 坏	「馬津」	底部外面	中心	中	
1217	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 坏	「馬	底部外面	上	中	
1218	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 高台付坏	□□ (馬津ノ可能性)	底部外面	中心	小	
1219	3区 2D-7b	3006 溝 埋土	須恵器 坏	「船」	底部外面	左	大	
1220	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 高台付坏	「今主」	底部外面	中心	大	人名
1221	3区 2D-7e	客土	須恵器 蓋	「田子」	内面	中心	中	
1222	3区 2D-7c	3014 溝 埋土最下層	土師器 坏	「仲	底部外面	上	小	
1223	3区 2D-7c	第2-2層	土師器 坏	「日カ	底部外面	上	小	
1224	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 蓋	「□□」/「×」	天井部周縁	左右	小 -	一文字目は山か小
1225	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	「十」	底部外面	中心	大	
1226	3区 2D-8e	3006 溝 埋土	須恵器 坏	□ 〔十カ〕	底部外面	-	大	
1227	4区 2D-6a	第2-2層	須恵器 蓋	「□	天井部外面	左	中	
1228	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3383 ピット 埋土	須恵器 蓋	□」	内面	左	中	
1229	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	□	天井部内面	-	-	
1230	3区 2D-8c	攪乱	須恵器 蓋	□	天井部内面	-	-	
1231	4区 2C-6j	第3層～第4層	須恵器 蓋	□	天井部内面	-	-	
1232	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	「□□」	底部外面	-	大	方向不詳
1233	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 高台付坏	□」	底部外面	中心	中	
1234	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 高台付坏	□	底部外面	-	大	
1235	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 高台付坏	「□□ (埜)	底部外面	中心	大	
1236	3区 2D-7d	客土	須恵器 高台付坏	□ □	見込部 底部外面	上 上	中	

表12 墨書土器一覧表(5)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	釈文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1237	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 高台付坏	[]	見込部	中心	大	
1238	3区 2D-6d	客土	須恵器 高台付坏	□	底部外面	中心	-	
1239	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3359 ビット 埋土	須恵器 高台付坏	□	底部外面	上	中	
1240	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 高台付坏	[]	底部外面	-	大	
1241	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 高台付坏	□	底部外面	-	-	
1242	4区 2C-8j	第3層	須恵器 坏	□	底部外面	中心	大	友、麦など
1243	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 坏	□□	底部外面	中心	-	
1244	3区 2D-7b	3006 溝 埋土最下層	須恵器 坏	[]	底部外面	-	大	
1245	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 坏	□□	底部外面	中心	大	
1246	4区 2C-6j	第3層	須恵器 坏	□	底部外面	-	大	
1247	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 坏	□	見込部	-	大	
1248	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 坏	□(東ノ可能性)	底部外面	中心	大	
1249	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	[]	底部外面	中心	中	2文字分
1250	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 坏	[]	底部外面	下	中	
1251	3区 2D-6c	3432 溝 埋土	須恵器 坏	[]	底部外面	-	大	2文字分
1252	3区 2D-7c	掘立柱建物9 3450 ビット 埋土	須恵器 坏	[]	底部外面	-	大	
1253	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	□	底部外面	中心	-	
1254	3区 2D-5e	客土	須恵器 坏	□	底部外面	中心	-	
1255	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 皿	□	底部外面	中心上	大	
1256	3区 2D-6e	第2-1層	須恵器 坏	□	見込部	-	-	
1257	3区 2D-7b	客土	須恵器 坏	□	見込部	-	-	
1258	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 皿	□□	体部外面	-	-	
1259	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	土師器 坏	[]	底部外面	中心	大	
1260	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 坏	□	底部外面	中心	大	
1261	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	土師器 坏	□	底部外面	-	-	
1262	3区 2D-6d	第2-2層	土師器 坏	□	見込部	-	大	
1263	3区 2D-6b	3009 溝 埋土	土師器 坏	□	坏部外面	下部	-	
1264	4区 2C-6j	第3層～第4層	土師器 皿	「□	底部外面	中心	大	

表 13 墨書土器一覧表 (6)

遺物 番号	地区 グリッド	出土遺構 層位	種別 器種	积文	墨書記載部位		文字 サイズ	備考
1265	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	土師器 甕		頸部外面	-	-	絵(人面)の可能性があ る
1266	4区 2C-6j	第2-2層	須恵器 坏	□□	見込内面	-	-	
1267	3区 2D-7d	客土	須恵器 坏	[]	底部外面	中心	中	
1268	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	□□□□	底部外面	中心	中	
1269	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 坏	[]	底部外面	中心	中	皿の可能性も
1270	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 坏	[]	底部外面	-	-	
1271	3区 2D-7b	客土	須恵器 坏	□	見込部	-	-	蓋の可能性も
1272	3区 2D-7d	客土	須恵器 坏	□	底部外面	-	-	
1273	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	□	底部外面	-	-	
1274	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	□	体部外面	-	-	
1275	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 坏	□	底部外面	左	中	
1276	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	須恵器 蓋	□(田または内 _ナ)	内面	中心	中	1185と同一個体、接点な し
1277	3区 2D-7d	3006 溝 埋土	須恵器 坏	□(内面ニ刻線アリ)	底部外面	-	-	高台付坏か
1278	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	□	底部外面	-	-	
1279	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 坏	[]	底部外面	-	-	
1280	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	須恵器 坏	□	底部外面	-	中	
1281	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 坏	□	底部外面	下	-	
1282	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	□	底部外面	中心	-	
1283	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 坏	[]	底部外面	中心	大	高台付坏か
1284	3区 2D-7d	第2-2層	須恵器 坏	□	底部外面	中心	中	
1285	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 坏	□	底部外面	-	-	蓋の可能性も
1286	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	須恵器 坏	□	底部外面	-	-	
1287	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	□	底部外面	-	中	
1288	4区 2C-7j	第3層下面	須恵器 坏	□	底部外面	-	-	墨痕、門の可能性
1289	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	□	底部外面	-	-	墨痕
1290	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	□	口縁部外面	-	-	
1291	3区 2D-7b	3006 溝 埋土	須恵器 坏	□	体部外面	-	-	
1292	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	□/□	坏部内外面	-	-	
-	3区 2D-8e	3006 溝 埋土	須恵器 坏	□東 [門 _ナ]	底部外面	下	中	鳥取市教育委員会試掘調 査出土資料(PL.202)

表 14 土器観察表 (1)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	18	1区 2E-10j	第1層	土師器 甕	※16.2 △4.3	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	内外面ともふい橙色	
2	18	1区 2E-9j	第1層	瓦質土器 鍋	※19.7 △2.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
3	18	1区 2E-10j	第2層	須恵器 坏	- △1.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
4	18	1区 2E-10i	第3層	須恵器 高台付坏	- △2.5	外面：回転ナデ、高台部ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	高台部打ち欠き 見込部に網状の圧痕あり
5	18	1区 2E-10j・ 9i	第3層	須恵器 高台付坏	- △2.4	外面：回転ナデ 内面：底部ナデ、高台部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部にヘラ記号「×」
6	18	1区 2E-10i	1009 ビット 埋土第1層	土師器 高坏	- △4.6	外面：風化のため不明 内面：筒部上半シボリ目、下半ケズリ	密	やや軟	内外面とも橙色	
7	18	1区 2E-10i	1012 溝 埋土第1層	須恵器 壺	- △1.6	外面：高台部ナデ、底部ケズリ 内面：底部強いナデ	密	良好	内外面とも灰色	
9	22	2区 3D-2f	客土	染付 皿	※12.8 2.7	外面：施釉、高台部露胎 内面：施釉	密	良好	施釉部 / 灰白色 露胎部 / 淡黄色	
10	22	2区 3D-2h	攪乱	陶器 皿	※9.1 2.1	外面：施釉 内面：施釉、見込部に砂目跡	密	良好	外面 / 灰白色-にふい赤褐色 内面 / 灰白色	
11	23	2区 2D-10h	(第2層直上)	青磁 碗	- △1.5	外面：施釉、高台部ケズリ 内面：施釉	密	良好	施釉部 / オリーブ色 露胎部 / 灰色	見込部に圏線1条
12	26	2区 2D-10f	第2.1層	青磁 碗	※13.4 △3.8	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	内外面とも灰オリーブ色	破断面3方に漆継ぎの痕跡あり
13	26	2区 2D-10f	第2.1層	弥生土器 甕	- △4.6	外面：口縁部9条の平行沈線文 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面ともふい橙色	
15	26	2区 2D-10g	第2.2層	土師器 皿	※7.1 △1.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともふい橙色	
16	26	2区 2D-10h	第2.2層	土師器 皿	※13.6 △2.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
17	26	2区 3D-1j	第2.2層	土師器 坏	- △1.7	外面：ヨコナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも橙色	
18	26	2区 2D-7i	第2.2層	土師器 甕	※15.0 △4.0	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケナデ 内面：口縁部ハケメ、頸部以下ケズリ	密	良好	内外面ともふい橙色	外面煤付着
19	26	2区 3D-2f	第2.2層	須恵器 高台付坏	- △1.7	外面：体部～高台部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
20	26	2区 2D-10g	第2.2層	瓦質土器 鍋	※20.0 △3.7	外面：ナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	外 / 黒褐色 内 / 灰黄褐色	外面煤付着
21	26	2区 2D-7h	第2.2層	瓦質土器 鍋	※23.5 △4.2	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	密	やや良	外 / 淡黄色 内 / 灰黄色	内面煤付着
22	26	2区 2D-7h	第2.2層	瓦質土器 鍋	※23.8 △5.7	外面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、胴部ハケメ 内面：ナデ	密	やや良	内外面とも灰色	外面煤付着
23	26	2区 2D-10g	第2.2層	白磁 碗	※14.4 △4.5	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	施釉部 / 白色 露胎部 / 灰色	
24	30	2区 3D-2f	第3層	土師器 坏	- △1.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともふい橙色	
25	30	2区 2D-10g	第3層	須恵器 坏身	※11.3 △3.9	外面：回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
26	30	2区 2D-7i	第3.2層	弥生土器 甕	※16.4 △2.5	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外 / 灰黄褐色 内 / 橙色	外面煤付着
27	30	2区 3D-1i	(第2面下 砂層)	弥生土器 甕	- △3.4	外面：肩部3条以上の平行沈線、6条の波状文、以下ハケメ 内面：ナデ	密	良好	外 / 黒色 内 / にふい黄褐色	
28	30	2区 3D-1i	第3層	弥生土器 甕	- △8.6	外面：胴部ハケ後ナデ、底部ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	密	良好	外 / 橙色 内 / 灰黄褐色	
29	36	2区 3D-2i	2008 溝 埋土	弥生土器 壺	※10.2 △5.2	外面：ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも橙色	
30	36	2区 3D-1h	2008 溝 埋土	弥生土器 甕	- △4.8	外面：摩耗により不明、胴部に刺突文 内面：摩耗により不明	密	やや良	内外面ともふい黄褐色	
31	36	2区 3D-1h	2008 溝 埋土	弥生土器 高坏	※脚裾部 13.9 △1.7	外面：ナデ 内面：ハケメ	密	良好	内外面ともふい橙色	
32	36	2区 2D-8f	2011 土坑 埋土	須恵器 高台付坏	- △1.5	外面：ナデ、高台部回転ナデ 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
33	36	2区 2D-8f	2011 土坑 埋土	須恵器 皿	- △1.1	外面：回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	やや良	内外面とも灰色	
34	36	2区 2D-9f	2011 土坑 埋土	焼塩土器	※8.9 △4.3	外面：口縁部未調整、胴部指頭圧痕 内面：ナデ	密	やや良	内外面とも明褐色	
35	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3151 ビット 埋土	須恵器 蓋	- △1.4	外面：天井部回転糸切り、天井部周縁ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～明黄褐色	
36	158	3区 2D-6c	掘立柱建物1 3148 ビット 埋土	須恵器 蓋	※13.4 △1.9	外面：天井部回転糸切り、以下回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
37	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150 ビット 埋土	須恵器 蓋	※16.3 △1.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色～黒灰色 内 / 灰色	
38	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150 ビット 埋土	須恵器 蓋	※20.8 △2.1	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	外 / 褐灰色 内 / 褐灰色～灰黄褐色	
39	158	3区 2D-6d	掘立柱建物1 3148 ビット 埋土第1層	須恵器 坏	- △1.0	外面：底部周縁ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：ナデ	密	軟	内外面とも灰白色～明黄褐色	
40	158	3区 2D-6c	掘立柱建物1 3147 ビット 埋土	須恵器 坏	※12.0 △2.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
41	158	3区 2D-6d	掘立柱建物1 3148 ビット 埋土第1層	須恵器 坏	※13.0 △3.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 黄灰色 内 / 明赤褐色	
42	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150 ビット 埋土	須恵器 坏	12.9 3.6	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	

表 15 土器観察表 (2)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
43	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150ピット 埋土	須恵器 坏	※12.9 3.6	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～黒褐色 内/灰黄褐色	
44	158	3区 2D-6c	掘立柱建物1 3147ピット 埋土	土師器 甕	※20.9 △4.8	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面とも淡橙色	
45	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150ピット 埋土	土師器 甕	※26.0 △6.0	外面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、体部ハケ 内面：口縁部～頸部ナデ、頸部以下ケズリ後ナデ	密	良好	外/にぶい褐色～黒褐色 内/にぶい橙色	煤付着
46	158	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150ピット 埋土	土師器 甕	※26.0 △7.3	外面：口縁部ハケ後ナデ、頸部指頭圧痕、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	内外面ともにぶい橙色	
47	158	3区 2D-6c	掘立柱建物1 3148ピット 埋土	焼塩土器	— △3.5	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	密	良好	内外面とも橙色	
48	158	3区 2D-5d	掘立柱建物1 3145ピット 埋土第1層	焼塩土器	— △4.5	外面：ナデ、指頭圧痕、口縁部指頭圧痕 内面：ナデ？(調整不明瞭)	密	やや軟	外/明黄褐色 内/明黄褐色～黒色	
49	158	3区 2D-5c	3162溝 埋土第1層	須恵器 高台付坏	※15.8 5.5	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰オリーブ色 内/灰色	外面二次的被熱・変色、鉄滓付着
50	158	3区 2D-6c	3162溝 埋土	土師器 坏	※13.0 △3.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも橙色	
51	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3140ピット 埋土	須恵器 蓋	※14.6 △1.7	外面：天井部回転系切り、天井部周縁ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ、口縁部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色～暗灰色	
52	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3144ピット 埋土第1層	須恵器 蓋	※13.0 △1.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～黒灰色	
53	159	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3143ピット 埋土	須恵器 蓋	※14.0 △1.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/褐灰色～黒色 内/灰黄褐色～黒色	
54	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3139ピット 埋土	須恵器 蓋	※15.0 △1.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黒色 内/灰白色	
55	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3008ピット 埋土	須恵器 坏	※12.6 △3.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
56	159	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3008ピット 埋土	須恵器 坏	※16.4 △4.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
57	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3007ピット 埋土	須恵器 坏	※15.4 △5.5	外面：回転ナデ、体部下回転ナデ後ナデ 内面：口縁部回転ナデ、体部回転ナデ後ナデ	密	良好	外/黒色 内/黒褐色	
58	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3007ピット 掘方	須恵器 坏	△4.4	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ 内面：回転ナデ、体部下端ナデ	密	良好	外/灰白色～黒色 内/黒褐色	
59	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3008ピット 掘方	須恵器 坏	— △2.7	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～明褐色 内/灰白色～黄褐色	
60	159	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3008ピット 埋土	須恵器 坏	— △2.3	外面：回転ナデ後ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ後ナデ	やや粗	良好	内外面とも灰色	内外面とも煤付着
61	159	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3143ピット 埋土	須恵器 坏	— △1.3	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
62	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3139ピット 埋土	須恵器 坏	— △1.0	外面：回転ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色 内/にぶい黄褐色	
63	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3144ピット 埋土	須恵器 壺	※14.0 △1.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
64	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3008ピット 埋土	須恵器 甕	— △10.0	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密	良好	外/灰色～暗灰色 内/灰白色	内面放射状当て具痕
65	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3007ピット 掘方	土師器 高台付皿	※15.7 3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい褐色	内外面とも赤色塗彩
66	159	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3144ピット 埋土	土師器 坏	※13.0 △3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい橙色 内/にぶい黄褐色	
67	160	3区 2D-6c	掘立柱建物3 3135ピット 掘方	須恵器 坏	※12.8 ※5.1	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰色 内/白色	
68	160	3区 2D-6c	掘立柱建物3 3106ピット 掘方	須恵器 坏	— △1.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
69	160	3区 2D-6c	掘立柱建物3 3113ピット 埋土	土師器 坏	※11.4 3.8	外面：ヨコナデ、底部風化顯著で不明 内面：ヨコナデ、底部ナデ	密	やや軟	内外面とも淡橙色～にぶい 橙色	
70	160	3区 2D-6c	掘立柱建物3 3135ピット 掘方	土師器 坏	— △3.8	外面：ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい橙色	
71	160	3区 2D-6d	掘立柱建物4 3361ピット・ 3362ピット 埋土	須恵器 蓋	— △1.0	外面：天井部回転系切り、天井部周縁ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
72	160	3区 2D-6d	掘立柱建物4 3361ピット 埋土	須恵器 蓋	※13.6 △1.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	

表 16 土器観察表 (3)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
73	160	3区 2D-6d	掘立柱建物4 3361ピット・ 3362ピット 埋土	須恵器 坏	※13.8 △2.9	外面：風化のため調整不明（回転ナデか） 内面：風化のため調整不明（回転ナデか）	密	やや軟	内外面とも灰白色	
74	160	3区 2D-6e	掘立柱建物4 3300ピット 埋土	須恵器 坏	※11.0 △2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黒色 内/灰色	
75	160	3区 2D-6d	掘立柱建物4 3365ピット 埋土	須恵器 坏	- △1.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	やや粗	やや軟	外/灰白色～灰色 内/灰白色	
76	160	3区 2D-6d	掘立柱建物4 3365ピット 埋土	土師器 皿	- △1.6	外面：ナデ 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面ともいぶい橙色	内外面とも赤色塗彩
77	160	3区 2D-6e	掘立柱建物4 3300ピット 埋土	土師器 坏	- △4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面ともいぶい黄橙色	外面煤付着
78	161	3区 2D-6d	掘立柱建物5 3202ピット 埋土	土師器 坏	- △3.0	外面：ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	良好	外/いぶい黄橙色 内/褐灰色	
79	161	3区 2D-6d	掘立柱建物5 3285ピット 埋土	緑軸陶器 皿	- △1.6	内外面施軸	密	良好	外/施軸部灰オリーブ、露 胎部灰色 内/施軸部灰黄色、露胎部 灰色	
80	161	3区 2D-6d	掘立柱建物5 3517ピット 埋土	土師器 高坏	※17.6 △4.2	外面：受部ハケメ 内面：ミガキ後暗文	密	良好	内外面とも灰黄褐色	内外面赤色塗彩
81	161	3区 2D-7d	掘立柱建物6 3306ピット 埋土	須恵器 蓋	※12.8 △0.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～黒色 内/黒色	
82	161	3区 2D-7d	掘立柱建物6 3306ピット 埋土	土師器 甕	※25.2 △3.5	外面：口縁ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ 内面：口縁ヨコナデ、頸部以下ハケ、ヘラケズリ	密	良好	外/いぶい黄橙色 内/明褐灰色	
83	161	3区 2D-8c	掘立柱建物8 3051ピット 埋土	須恵器 蓋	※12.8 △2.9	外面：天井部～体部上半ナデ、体部下半回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	内外面とも灰色	
84	161	3区 2D-8c	掘立柱建物8 3054ピット 埋土	須恵器 蓋	※16.4 △1.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
85	162	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3383ピット 埋土	須恵器 蓋	- △2.7	外面：天井部回転糸切り後ナデ、体部上半ナデ、体部下半回 転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	やや粗	やや軟	外/灰色 内/灰黄褐色	
86	162	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3375ピット 埋土	須恵器 蓋	※12.8 △1.9	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
87	162	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3383ピット 埋土	須恵器 坏	※14.8 △2.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰色	
88	162	3区 2D-7c	掘立柱建物9 3450ピット 埋土	須恵器 坏	※12.8 △1.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄色	
89	162	3区 2D-7c	掘立柱建物9 3450ピット 埋土	須恵器 坏	- △0.9	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄色	
90	162	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3105ピット 埋土	土師器 坏	※11.2 △2.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面とも橙色～いぶい黄 橙色	内外面赤色塗彩
91	162	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3375ピット 埋土	焼塩土器	- △4.4	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：調整不明	密	良好	外/灰褐色 内/褐色	
92	163	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3272ピット 埋土	須恵器 坏	※13.8 △3.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
93	163	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3303ピット 埋土	須恵器 坏	※15.8 △2.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	やや密	やや良	外/灰色 内/灰白色～灰褐色	
94	163	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3420ピット 埋土	須恵器 高台付坏	※13.8 △3.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
95	163	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3301ピット 埋土	須恵器 高台付坏	- △1.4	外面：体部下半～高台部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
96	163	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3281ピット 埋土	須恵器 坏	- △1.1	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	粗	軟	内外面とも灰色	
97	163	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3303ピット 埋土	焼塩土器	- △3.6	外面：指頭圧痕（二次焼成により不明瞭） 内面：ナデ（一部指頭圧痕残る）	粗	軟	外/いぶい橙色～いぶい赤 褐色 内/橙色	
98	163	3区 2D-7d	掘立柱建物11 3355ピット 埋土第1層	土師器 甕	※29.4 △4.4	外面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	内外面ともいぶい黄橙色	
99	163	3区 2D-6c	掘立柱建物12 3373ピット 埋土	土師器 甕	- △5.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい橙色	
100	164	4区 2D-6a	掘立柱建物17 4273ピット 埋土	土師器 甕	※13.0 △7.6	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/黒色 内/オリーブ黄色～オリー ブ黒色	外面煤付着
101	164	4区 2D-6a	掘立柱建物15 4211ピット 埋土	甕	- △6.0	外面：ナデ 内面：ハケメ後ナデ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも黄灰色	
102	164	4区 2D-6a	掘立柱建物15 4212ピット 埋土	ミニチュア 土器	※4.0 3.7	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	

表17 土器観察表(4)

掲載番号	挿回番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
103	164	4区 2D-7b	掘立柱建物19 4263 ビット 埋土	須恵器 坏	※12.4 △2.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
104	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	16.0 3.4	外面：輪状つまみ部ナデ、体部上半回転ヘラケズリ後粗いナデ、 下半回転ナデ 内面：天井部から体部上半ナデ、体部下半回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
105	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	※15.4 △1.7	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	軟	外/灰白色～褐灰色 内/灰白色～灰黄褐色	
106	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	13.2 △2.2	外面：天井部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	つまみ剥離痕あり
107	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	※16.8 △1.9	外面：天井部回転ナデ後ナデ？、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/褐灰色 内/灰色～褐色	
108	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※13.8 4.9	外面：底部～体部下半ナデ、体部上半回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
109	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※13.4 3.8	外面：底部回転系切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～青灰色 内/灰色	
110	165	3区 2D-6c	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※12.9 3.8	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	内外面煤付着
111	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※17.2 6.2	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
112	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※15.6 5.5	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/灰黄褐色	
113	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※15.4 5.6	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外/暗灰色～灰白色 内/灰色	
114	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※15.1 5.2	外面：底部回転系切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄褐色	
115	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※16.4 6.0	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ体部回転ナデ	密	やや良	外/灰白色 内/黄褐色	
116	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 皿	※15.6 2.9	外面：底部回転系切り後一部ナデ、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外/灰色 内/黒色	
117	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	— △2.4	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/黄褐色	
118	165	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 坏	— △0.5	外面：底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	内面にヘラ記号「×」
119	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 壺	— △6.0	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	底部内面に自然袖付着
120	165	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 長頸壺	— △13.8	外面：頸部上半回転ナデ、下半ナデ、体部回転ナデ後ナデ？、 肩部沈線2条・刺突文 内面：頸部上半回転ナデ、下半ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色～灰色	
121	165	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 横瓶	※10.8 △24.9	外面：口縁部回転ナデ、体部タタキ後粗いカキ目 内面：口縁部回転ナデ、体部当て具痕、閉塞部には布目痕、 指頭圧痕	密	良好	外/青灰色～灰色 内/青灰色	
122	166	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	土師器 坏	— △1.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ？	密	やや軟	内外面ともにぶい橙色	内外面赤色塗彩
123	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 坏	※13.8 3.8	外面：口縁部～体部上半ヨココナデ、体部下半ケズリ後ナデ、 指頭圧痕 内面：ナデか（風化のため不明）	密	やや良	内外面とも明赤褐色	内外面赤色塗彩
124	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 鉢	※17.2 △5.9	外面：口縁部ハケメ、体部ケズリ後ナデ 内面：口縁部ハケメ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	内外面赤色塗彩
125	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 皿	— △1.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/黒褐色	体部内面に煤付着
126	166	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層 埋土最下層	土師器 皿	※16.2 2.4	外面：口縁部ナデ、体部上半ナデ後ミガキ、体部下半ケズリ 後ナデ 内面：ミガキ	密	やや良	内外面とも明赤褐色	内外面赤色塗彩
127	166	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	土師器 皿	※16.8 △2.1	外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	内外面赤色塗彩
128	166	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	土師器 皿	※16.4 △2.5	外面：口縁部ナデ、体部～底部ケズリ後ナデ 内面：口縁部～体部ミガキ、底部ミガキ	密	良好	内外面ともにぶい橙色	内外面赤色塗彩
129	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 皿	※16.4 2.7	外面：底部ケズリ後ミガキ、体部ナデ 内面：ナデ後ミガキ	密	良好	内外面とも橙色	内外面赤色塗彩
130	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※19.0 △6.6	外面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ハケメ後ケズリ、指頭圧痕	密	良好	外/灰黄褐色 内/にぶい褐色	外面煤付着
131	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※21.6 △6.3	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	外/灰黄褐色～褐色 内/灰黄褐色	内外面に煤付着
132	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※23.0 △5.8	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ？、体部ハケメ、 指頭圧痕 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも灰黄色	
133	166	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※20.6 △6.8	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ（一部にハケメ痕）、体部ケズリ	密	良好	内外面とも灰白色	
134	166	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※23.0 △8.7	外面：口縁部・体部ナデ、頸部指頭圧痕のみ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも灰白色	
135	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※15.8 △7.4	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ケズリ	密	良好	外/黒色 内/褐灰色～灰黄褐色	外面煤付着
136	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※30.0 △15.0	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ、指頭圧痕 内面：口唇部ナデ、口縁部ハケメ、頸部ナデ、体部ケズリ	密	良好	外/黒褐色～褐色 内/灰黄褐色	
137	166	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※25.2 △7.8	外面：口縁部ナデ、指頭圧痕、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、口縁部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	外/灰黄褐色 内/灰色～黒色	内面煤付着
138	166	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土師器 甕	※29.8 △7.9	外面：口縁部ナデ、頸部～体部ハケメ、ナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、体部ケズリ、ハケメ	密	やや良	外/褐色～褐灰色 内/褐色～灰黄褐色	
139	166	3区 2D-6c	3003 溝 埋土上層	焼塩土器	— △4.3	外面：指頭圧痕 内面：布目、指頭圧痕	密	やや良	外/褐色～黒褐色 内/灰黄色	
140	166	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	焼塩土器	— △3.9	外面：布目？（風化のため調整不明瞭）、指頭圧痕 内面：布目、指頭圧痕	密	良好	内外面とも褐色	
141	167	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	※15.9 2.9	外面：輪状つまみ内外ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回 転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
142	167	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	※16.5 1.9	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
143	167	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	須恵器 蓋	※12.8 2.5	外面：つまみ部ナデ、天井部回転系切り、体部回転ナデ、口 縁部に1条の沈線 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/黄褐色～黒褐色 内/暗灰黄色～黒褐色	

表 18 土器観察表 (5)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
144	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	19.7 4.2	外面：天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼付に伴うナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外/灰白色～灰色 内/灰白色～暗灰色	
145	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	※17.0 3.9	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄灰色	
146	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	※18.8 △2.7	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰色	
147	167	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※14.4 4.8	外面：底部ナデ、体部上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ後弱いナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部板目痕、ヘラ記号「○」
148	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	- △1.8	外面：ナデ 内面：底部回転ナデ、中央付近ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
149	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※13.2 4.2	外面：底部回転ヘラ切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部に墨付着
150	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※12.8 3.9	外面：底部回転糸切り後弱いナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/青灰色 内/青灰色～黒褐色	
151	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※13.8 4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/灰白色～黄灰色 内/灰白色～黒褐色	
152	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※15.8 4.2	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後粗いナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
153	167	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	- △3.3	外面：回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/暗灰黄色～黒色 内/灰色	底部ヘラ記号?
154	167	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	- △2.7	外面：底部回転糸切り後ナデ?、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～暗灰色 内/灰色	底部に墨付着
155	167	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	- △3.6	外面：底部回転糸切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/黄灰色 内/灰黄褐色	
156	167	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	- △4.3	外面：底部粘土切り離し後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/褐色	底部ヘラ記号
157	167	3区 2D-5e	3003溝 埋土最下層	須恵器 坏	12.7 3.7	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面ともオリーブ灰色	
158	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	※13.4 3.7	外面：底部回転糸切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ、下端回転ナデ後ナデ	密	やや良	内外面とも灰白色～黒色	
159	167	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	※12.6 △3.6	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～暗灰黄色	
160	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △1.5	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/黄灰色 内/暗灰黄色	底部外面にヘラ記号
161	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	※12.9 3.4	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/黒色～灰色 内/灰黄色～暗灰黄色	
162	167	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 皿	※16.6 △2.7	外面：底部ケズリ後丁寧なナデ?、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
163	168	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 長頸壺	- △14.9	外面：底部ナデ、頸部及び体部下半回転ナデ、体部上半調整不明、体部下端に板目痕? 内面：頸部回転ナデ、体部以下調整不明	密	良好	内外面とも灰色	頸部～肩部に自然袖付着
164	168	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 壺	※9.4 9.7	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/褐色～暗赤色 内/褐色	
165	168	3区 2D-8e	3003溝 埋土上層	須恵器 皿	※12.8 △2.0	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	やや密	良好	外/灰色 内/黄灰色	
166	168	3区 2D-8e	3003溝 埋土上層	須恵器 壺	- △9.3	内外面とも口頸部回転ナデ、体部～頸部ナデ、口頸部外面に螺旋状の沈線	密	良好	内外面とも灰白色～灰色	
167	168	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 甌	- △8.1	外面：頸部～体部ナデ後一部ケズリ、沈線1条 内面：ナデ	密	やや良	内外面とも灰色	
168	168	3区 2D-8e	3003溝 埋土上層	須恵器 底部片	- △1.6	外面：平行タタキ 内面：当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	窯台とした体部片と溶着
169	169	3区 2D-7e	3003溝 3413杭群 埋土下層	須恵器 高台付坏	※13.4 4.0	外面：底部回転ヘラ切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄色	
170	169	3区 2D-8e	3003溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	※13.0 3.4	外面：底部回転糸切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/暗灰黄色	
171	169	3区 2D-8e	3003溝 埋土下層	須恵器 甕	※16.2 △11.6	外面：口頸部ナデ、体部ナデ後格子状タタキ 内面：口頸部ナデ、体部同心円状当て具痕、一部にナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
172	170	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	須恵器 蓋	※13.5 3.7	外面：天井部回転ヘラ切り、体部回転ナデ後一部ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
173	170	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	須恵器 蓋	※10.0 2.9	外面：回転ナデ? (灰付着により不明) 内面：回転ナデ	密	良好	外/オリーブ黒色 内/灰色	
174	170	3区 2D-8e	3003溝 埋土最下層	須恵器 蓋	※15.0 3.2	外面：輪状つまみ内回転糸切り後ナデ、天井部回転ケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
175	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 蓋	※14.3 2.6	外面：天井部ナデ、天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰色	天井部内面にヘラ記号
176	170	3区 2D-8e	3003溝 埋土最下層	須恵器 蓋	- △1.5	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面にヘラ記号「×」
177	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 長頸壺	- △2.1	外面：ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～青灰色 内/灰白色	底部内面に種子圧痕 高台貼付部2条の刻線
178	170	3区 2D-8e	3003溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	- △3.2	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/明オリーブ灰色 内/褐色	
179	170	3区 2D-5e	3003溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	※14.8 4.6	外面：底部静止糸切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
180	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	- △3.4	外面：体部下半ナデ、高台部ナデ、底部板目痕 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
181	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	※14.4 5.0	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部に漆記号
182	170	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	須恵器 坏	※12.4 4.4	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄灰色	
183	170	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	須恵器 坏	※15.0 6.5	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
184	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 坏	※16.2 6.7	外面：底部静止糸切り、体部上半回転ナデ、下半回転ヘラ切り 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/暗灰色	

表19 土器観察表(6)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
185	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 皿	※14.6 3.0	外面：回転ナデ、体部下半ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰黄色 内/黄灰色	
186	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 高杯	— △3.3	内外面回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰黄色	脚部外面にヘラ記号
187	170	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	須恵器 長頸壺	— △16.3	外面：口縁部回転ナデ、頸部ナデ、体部上半回転ナデ、下半 回転ナデ後ナデ、 内面：口縁部・体部回転ナデ、頸部ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰白色	高台部欠損
188	170	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 長頸壺	— △31.5	外面：頸部上半回転ナデ、頸部下半ナデ・指頭圧痕、体部上 半調整不明、体部上半回転ナデ後ナデ、体部下半回転 ナデ・指頭圧痕 内面：頸部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
189	171	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 平瓶	— △11.7	外面：口縁部回転ナデ、体部回転ナデ後ナデ、口縁部に1条 の凹線 内面：口縁部ナデ、体部回転ナデ、ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
190	171	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 甕	※17.8 △5.9	外面：口縁部回転ナデ、体部タタキ後ハケメ 内面：口縁部回転ナデ、体部当て具痕	密	やや良	内外面とも灰白色	
191	171	3区 2D-7e	3003溝 埋土最下層	須恵器 甕	※30.2 △14.7	外面：ヨコ方向ハケメ後ナデ、頸部に沈線文・波状文 内面：ヨコ方向ハケメ後粗いナデ	密	良好	内外面とも灰色	
192	171	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	須恵器 甕	※20.0 △32.0	外面：口縁部回転ナデ、体部平行タタキ後ナデ、一部カキ目 内面：口縁部回転ナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰色～黒色 内/灰色	
193	171	3区 2D-8e	3003溝 埋土最下層	弥生土器 甕	※27.0 △6.8	外面：口縁部14条以上の平行沈線、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ？ (内外面とも調整不明瞭)	密	良好	内外面とも黄褐色	
194	171	3区 2D-6e	3003溝 埋土最下層	土師器 高台付環	— △2.6	外面：ナデ 内面：ナデ（ミガキの可能性あり）	密	良好	外/明赤褐色 内/暗赤褐色	内外面赤色塗彩
195	171	3区 2D-5e	3003溝 埋土最下層	土師器 環	※13.1 △3.1	外面：口縁部～体部ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも暗赤褐色	内外面赤色塗彩
196	171	3区 2D-5e	3003溝 埋土最下層	土師器 皿	※14.6 △2.5	外面：口縁部ハケメ、体部ヘラズリ後ナデ 内面：口縁部ヨコ方向のミガキ、体部放射状のミガキ	密	良好	外/灰白色 内/灰黄色	内外面赤色塗彩
197	171	3区 2D-5e	3003溝 埋土最下層	土師器 鉢	※17.2 △6.6	外面：ミガキ、指頭圧痕 内面：体部ナデ、底部調整不明	密	良好	外/赤褐色 内/明赤褐色	内外面赤色塗彩
198	172	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	須恵器 壺	— △4.3	外面：底部静止系切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/褐灰白色 内/灰色	
199	172	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	須恵器 甕	— △5.9	外面：口頭部ナデ、体部タタキ後ハケメ、後粗いナデ 内面：口頭部回転ナデ、体部当て具痕、一部粗くナデ消す	密	良好	内外面とも灰色	口縁部内面にヘラ記号
200	172	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	須恵器 甕	※24.8 △10.3	外面：口縁部回転ナデ、ハケメ 内面：口縁部回転ナデ、頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	
201	172	3区 2D-8c	3006溝 埋土	須恵器 蓋	※10.0 △3.1	外面：天井部回転ヘラズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰黄色 内/灰黄褐色	
202	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 蓋	※14.0 1.9	外面：天井部回転系切り、つまみ貼り付けに伴うナデ、体部 回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	
203	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 蓋	— △2.1	外面：つまみ部ナデ、天井部から体部回転ヘラズリ、体部 回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
204	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 蓋	※14.6 △1.3	外面：天井部回転系切り、天井部周辺ナデ、体部～口縁部回 転ナデ 内面：天井部ナデ、体部～口縁部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰白色～灰オリーブ色	
205	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 蓋	※15.8 △2.2	外面：天井部回転系切り後丁寧なナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	
206	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 蓋	※19.2 △2.2	外面：天井部回転系切り後粗いナデ、体部回転ナデ 内面：天井部から体部上半ナデ、体部下半回転ナデ	やや密	やや良	内外面とも黄灰色	
207	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	— △1.6	外面：ナデ、底部板目痕ナデ消し 内面：ナデ	密	良好	内外面とも青灰色	底面にヘラ記号「○」と漆記号「●」
208	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※15.2 △4.7	外面：底部ナデ、口縁～体部上半回転ナデ、下半回転ヘラケ ズリ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	ひずみ激しい
209	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※13.0 3.7	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黒色 内/暗灰黄色	
210	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	— △1.7	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/黒褐色 内/灰黄褐色	
211	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	— △1.9	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/暗灰色～灰色 内/暗灰色	
212	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※16.6 5.5	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	外/黄灰色～緑黒色 内/灰白色～オリーブ黒色	
213	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※14.0 5.0	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	
214	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付環	※14.2 △5.8	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	軟	外/灰白色～黒褐色 内/灰白色～褐灰色	
215	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	— △2.3	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	外/灰色～オリーブ黒色 内/灰白色～灰オリーブ色	
216	172	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※12.4 4.4	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色～いぶい黄褐色 内/灰色	
217	172	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※15.0 4.9	外面：回転ナデ、高台部ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/淡黄色～オリーブ黒色	
218	173	3区 2D-8e	3006溝 埋土	須恵器 環	— △1.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄色 内/灰白色～黒色	
219	173	3区 2D-8d	3006溝 埋土	須恵器 環	— △1.4	外面：ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面にヘラ記号
220	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 環	※13.3 △3.0	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外/灰白色～灰色 内/灰白色～灰黄褐色	
221	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 環	※12.8 △3.6	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	
222	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 環	※12.4 3.4	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	外/灰白色～灰色 内/灰白色	
223	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 環	※12.0 3.4	外面：回転ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	外/黒色～灰黄色 内/黄褐色～黄灰色	
224	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 環	※11.6 △3.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	外/灰白色～灰色 内/灰白色～黄褐色	

表 20 土器観察表 (7)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
225	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	120 3.4	外面：底部回転糸切り後粗いナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/オリープ黒色 内/暗灰黄色	
226	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	※14.4 △3.5	外面：底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	外/灰白色～黒色 内/灰白色～黒褐色	
227	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △1.7	外面：底部回転糸切り、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～黒褐色 内/灰白色	
228	173	3区 2D-7d	3006溝 埋土	須恵器 皿	※19.0 △2.0	外面：底部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～暗灰色 内/灰白色～明赤褐色	
229	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 皿	11.6 2.2	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ後一部にナデ 内面：回転ナデ後一部にナデ	密	良好	内外面とも灰色～灰褐色	
230	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	- △5.5	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
231	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	- △4.7	外面：底部ヘラ切り後ナデ?、体部回転ヘラケズリ、肩部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄褐色	小型
232	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 壺	※18.2 △6.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～暗灰色 内/灰白色～黒色	内外面煤付着、小型
233	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	※20.2 △8.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黒褐色 内/明褐色	
234	173	3区 2D-8d	3006溝 埋土	須恵器 壺	※21.0 △9.8	外面：回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黄灰色～灰色 内/灰色	
235	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	※14.6 △7.9	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
236	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 壺	- △9.7	外面：底部ナデ、体部ケズリ後ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～暗紫灰色 内/暗灰色～明褐色	
237	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 把手付壺	- △5.8	外面：ナデ、把手の下に1条の沈線 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
238	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	※9.4 △3.8	外面：口縁部ナデ、体部タタキ 内面：口縁部ナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰色～黒灰色 内/灰色	
239	173	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 鉢	※26.0 △6.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ? (調整不明瞭)	密	軟	内外面とも白色	
240	173	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 提瓶	- △7.0	外面：カキ目 内面：底部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
241	174	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 平瓶	- △9.9	外面：体部上半ナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰オリープ色～明黄褐色 内/灰色	体部上半自然釉付着
242	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 甕	※10.4 △4.9	外面：口縁部ナデ、体部タタキ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
243	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 甕	※28.5 △3.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも暗灰色	瓦質状
244	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	※31.6 △8.9	外面：口縁部ナデ、体部タタキ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
245	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 甕	- △4.5	外面：タタキ 内面：下半当て具痕、上半は当て具痕をナデ消す	密	良好	内外面とも灰色	
246	174	3区 2D-8d	3006溝 埋土	須恵器 横瓶	- △12.4	外面：タタキ後カキ目、後「十」字方向のハケメ 内面：当て具痕	密	良好	外/赤灰色～灰白色 内/灰色	
247	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 甕・焼台	- △3.3	外面：タタキ後ナデ 内面：当て具痕	密	良好	外/灰色～黒色 内/灰色	窯道具(焼台) 溶着
248	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	土師器 坏	※13.8 △2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも橙褐色	内外面赤色塗彩
249	174	3区 2D-7b	3006溝 埋土	土師器 坏	※10.6 △3.1	外面：底部回転糸切り、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	やや良	外/灰白色 内/灰色	
250	174	3区 2D-7b	3006溝 埋土	土師器 坏	※12.1 3.0	外面：底部回転糸切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶき黄褐色	
251	174	3区 2D-7b	3006溝 埋土	土師器 坏	※13.0 2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/褐灰色	
252	174	3区 2D-7b	3006溝 埋土	土師器 坏	※12.8 △2.7	外面：ナデ 内面：ナデ	やや粗	良好	外/にぶき橙褐色 内/にぶき黄褐色	
253	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	土師器 坏	※11.6 4.3	外面：底部回転糸切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや良	内外面とも灰色	
254	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	土師器 甕	※17.0 △7.5	外面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部粗いハケメ、体部ナデ、指頭圧痕	密	良好	外/灰黄色 内/にぶき黄色	
255	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	土師器 甕	※18.6 △7.1	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ケズリ	密	良好	外/にぶき黄褐色 内/にぶき黄褐色～灰黄褐色	
256	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	土師器 甕	※21.4 △6.5	外面：口縁部ナデ、口縁部～体部ハケメ、頸部はハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ	やや粗	やや軟	内外面ともいぶき黄褐色	
257	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土	土師器 甕	※19.0 △10.4	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	やや密	やや軟	内外面とも灰白色	
258	174	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	土師器 甕	※22.6 △9.8	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	外/にぶき橙褐色 内/浅黄褐色	
259	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	- △1.4	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	体部外面に漆記号「×」
260	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	14.8 2.6	外面：天井部回転糸切り、つまみ貼り付けに伴うナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
261	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	- △3.1	外面：底部回転糸切り?、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
262	175	3区 2D-7d	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	15.9 5.0	外面：底部回転糸切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黒褐色～灰黄褐色 内/灰黒褐色	
263	175	3区 2D-7d	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	- △2.7	外面：底部ヘラケズリ後ナデ?、高台部ナデ、体部回転ナデ、 下端回転ヘラケズリ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/黒褐色 内/灰褐色	
264	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	14.0 5.1	外面：回転ナデ、高台部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～黒褐色	
265	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	※14.4 5.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色～黒褐色 内/灰白色～明黄褐色	
266	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	※14.2 △5.0	外面：底部回転糸切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	

第VI章 3区・4区の調査成果

表21 土器観察表(8)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
267	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付環	※16.0 △7.5	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部上半ハケメ、下半 回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
268	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	※13.7 △2.9	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	内外面とも暗灰黄色～黒色	
269	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	※12.4 3.6	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～黒灰色	底部外面にヘラ記号
270	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	12.8 3.5	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ、 内面：底部ナデ、体部回転ナデ、口縁部ナデ	密	やや軟	外/灰白色～黒色 内/灰白色～黒褐色	
271	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	※12.2 3.5	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～オリーブ黒色 内/灰白色～明黄褐色	
272	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	— △3.4	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
273	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	— △0.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/褐色	
274	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	— △1.7	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰色～黒色	
275	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	須恵器 壺	— △11.4	外面タタキ 内面：当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	
276	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 壺	※19.6 △19.7	外面：口縁部から体部上半回転ナデ、体部下半回転ナデ後弱 いナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
277	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 壺	— △6.3	外面：底部回転ナデ、高台部ナデ、体部タタキ後ナデ 内面：ナデ後粗いハケメ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも灰色	
278	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	土師器 環	※14.2 △2.9	外面：底部ケズリ後丁寧なナデ、体部ナデ 内面：底部～体部ミガキ、口縁部ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～黒色 内/黒色～黒褐色	外面黒色塗彩
279	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	土師器 環	※13.6 △2.5	外面：底部ヘラ切り後ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/暗灰黄色 内/浅黄色	
280	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	土師器 環	※13.1 △3.0	外面：底部ヘラ切り後ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色	
281	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	土師器 環	※12.8 △2.6	外面：底部ヘラ切り後ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	
282	175	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	土師器 壺	※23.4 △6.4	外面：口縁部ナデ、頭部ハケメ後ナデ、体部ハケメ、指頭圧 痕 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ケズリ	やや粗	やや軟	外/灰黄褐色 内/いぶい黄褐色	
283	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	土師器 壺	※22.2 △6.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/黄褐色 内/いぶい黄色	
284	175	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	土師器 壺	※20.4 △9.5	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ナデ	密	良好	外/いぶい黄色 内/灰黄色	内外面裸付着
285	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 環蓋	13.6 3.9	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
286	176	4区 2C-7j	4038溝 埋土	須恵器 環蓋	※11.0 3.5	外面：天井部ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
287	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※12.8 2.6	外面：つまみ部ナデ、天井部自然袖付着のため調整不明、口 縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰色	内面自然袖付着
288	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※15.9 3.0	外面：つまみ部ナデ、天井部系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	
289	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※16.0 2.6	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナ デ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～暗灰黄色 内/灰色	
290	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※16.8 △1.9	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	軟	内外面とも灰白色	
291	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※14.5 △1.4	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
292	176	4区 2C-7j	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※14.2 △1.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～灰色	
293	176	4区 2C-7j	4038溝 埋土	須恵器 蓋	— △1.8	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回転 ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
294	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※13.8 2.6	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
295	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※17.6 3.2	外面：つまみ部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ、口縁部回転 ナデ 内面：天井部ナデ、体部～口縁部回転ナデ	密	やや軟	外/灰色～黄灰色 内/暗灰黄色	
296	176	4区 2D-7a	4038溝 埋土	須恵器 環	※5.2 △3.2	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内外面自然袖付着
297	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※14.8 5.4	外面：回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	外/灰色 内/灰白色	
298	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	— △4.1	外面：体部～高台回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
299	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※14.7 4.6	外面：体部回転ナデ、底部静止系切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
300	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	— △2.2	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部漆記号「卍」
301	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	— △2.2	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部漆記号
302	176	4区 2C-7h	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	— △1.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部漆記号「卍」
303	176	4区 2D-7a	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※14.8 3.8	外面：回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
304	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※12.4 3.7	外面：回転ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ	密	軟	外/灰白色～灰色 内/灰色	
305	176	4区 2D-7a	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※11.9 3.6	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	
306	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※15.2 3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	外/いぶい黄褐色～灰色 内/灰白色	
307	176	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 高台付環	※12.2 4.4	外面：口縁部～高台回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	

表 22 土器観察表 (9)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
308	176	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	※ 16.8 6.1	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密	軟	外 / 灰白色～灰色 内 / 灰白色	
309	176	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △ 3.0	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部ヘラ記号「〇」
310	176	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △ 2.0	外面：回転ナデ、底部静止系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部ヘラ記号
311	176	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △ 2.8	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
312	176	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	※ 14.0 △ 5.4	外面：口縁部～高台回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁部～底部回転ナデ、底部中央ナデ	密	やや良	外 / 灰色 内 / 灰白色	
313	176	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △ 2.6	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外 / 灰色～灰白色 内 / 灰色	
314	176	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 坏	※ 11.8 3.4	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも青灰色	
315	176	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	須恵器 坏	※ 12.0 △ 4.3	外面：口縁部～体部回転ナデ、体部下半ナデ、底部回転系切り 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ	密	軟	外 / 灰色～にぶい黄橙色 内 / にぶい黄橙色～褐灰色	
316	176	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 坏	- △ 2.2	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
317	176	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 坏	- △ 1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密	軟	内外面とも灰白色～灰黄色	
318	177	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 高坏	※ 16.6 △ 4.7	外面：坏部回転ナデ、脚部ナデ 内面：口縁部回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	内面に自然袖付着
319	177	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 高坏	- △ 12.6	外面：ナデ、上位に2条、下位に1条の沈線文、2段2方向 の切り込みによる透かし 内面：シボリ・ナデ	密	良好	外 / 灰色～黒褐色 内 / 灰色～褐灰色	
320	177	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 横瓶	※ 28.0 △ 10.2	外面：口縁～頸部回転ナデ、体部タタキ後カキ目 内面：口縁～頸部回転ナデ、体部当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	外面自然袖付着
321	177	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 横瓶	12.0 △ 3.8	外面：口縁部回転ナデ、肩部タタキ 内面：口縁部回転ナデ、肩部当て具痕	密	良好	外 / 青灰色 内 / 緑灰色	
322	177	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	須恵器 横瓶	- △ 2.4	外面：頸部ナデ、体部タタキ 内面：頸部ナデ、体部当て部痕	密	良好	外 / 灰色～灰白色 内 / 灰色	内外面自然袖付着
323	177	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 鉢?	※ 17.6 △ 8.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
324	177	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	須恵器 壺	- △ 3.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色～灰白色 内 / 灰白色	外面自然袖付着
325	177	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 壺	- △ 17.3	外面：頸部カキ目・ナデ、肩部～高台回転ナデ 内面：頸部回転ナデ後ナデ、肩部～底部回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色～灰色 内 / 灰白色	
326	177	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 壺	- △ 2.3	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
327	177	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	須恵器 甕	※ 21.6 △ 5.3	外面：口縁部ナデ、肩部タタキ 内面：口縁部ナデ、肩部当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	
328	177	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	須恵器 甕	※ 18.8 △ 8.4	外面：口縁部ナデ、体部タタキ後カキ目 内面：口縁部ナデ、体部当て具痕	密	良好	内外面とも淡灰色	
329	177	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	須恵器 甕	- △ 27.9	外面：タタキ後カキ目 内面：当て具痕	密	良好	外 / オリーブ灰色～灰色 内 / 灰色	
330	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 坏	※ 14.0 3.8	外面：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、底部ナデ	密	良好	外 / 灰黄色～明赤褐色 内 / 灰黄色～にぶい赤褐色	内外面赤色塗彩
331	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 坏	※ 16.0 △ 3.6	外面：口縁部ナデ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラミガキ	密	やや軟	内外面とも灰白色～暗赤褐色	内外面赤色塗彩
332	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 坏	※ 16.4 △ 4.3	外面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	密	やや良	外 / 黒褐色～暗褐色 内 / 黒褐色	内外面赤色塗彩
333	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 坏	※ 17.0 △ 4.6	外面：ヨコナデ後ヘラミガキ 内面：ナデ	密	やや良	外 / 灰黄褐色 内 / 灰黄褐色～黒褐色	内外面赤色塗彩
334	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 皿	※ 14.3 2.3	外面：口縁部ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：ヘラミガキ後ナデ	密	良好	内外面ともにぶい褐色	内外面赤色塗彩
335	178	4区 2C-7h	4325 流路 埋土	土師器 皿	※ 16.0 △ 2.6	外面：口縁部ナデ、底部ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	やや密	良好	外 / にぶい赤褐色 内 / 赤褐色	内外面赤色塗彩
336	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 皿	※ 15.4 2.2	外面：口縁部ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	やや良	外 / 暗赤褐色～黒褐色 内 / にぶい黄橙色～暗赤褐色	内外面赤色塗彩
337	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 皿	16.6 2.7	外面：ヘラミガキ、ナデ 内面：体部下～見込部ナデ	密	やや良	外 / 灰黄褐色 内 / 灰黄褐色～灰褐色	内外面赤色塗彩
338	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 皿	※ 16.2 2.0	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	やや良	内外面ともにぶい褐色	内外面赤色塗彩
339	178	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	土師器 皿	※ 17.7 2.1	外面：体部ヘラミガキ、ナデ、指頭圧痕、底部ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	密	良好	内外面とも灰黄褐色～にぶい褐色	内外面赤色塗彩
340	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 甕	※ 20.2 △ 7.5	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	外 / にぶい黄褐色 内 / 褐灰色	外面煤付着
341	178	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	土師器 甕	※ 18.2 △ 9.1	外面：口縁部ナデ、指頭圧痕、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	やや密	良好	内外面とも黄灰色～橙色	
342	178	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	土師器 甕	※ 20.0 △ 7.2	外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケメ・ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ後ナデ	やや密	良好	内外面とも灰黄褐色	
343	178	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	土師器 甕	※ 25.6 △ 8.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外 / にぶい黄褐色～明赤褐色 内 / にぶい黄褐色	内外面煤痕
344	178	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	土師器 甕	※ 26.6 △ 4.1	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ヘラケズリ	密	良好	外 / 灰黄褐色～黒色 内 / 灰黄褐色	外面煤付着
345	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	土師器 甕	23.5 △ 15.7	外面：口縁～頸部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ケズリ後ナデ	やや粗	やや良	内外面とも暗灰黄色	
346	178	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	土師器 甕	※ 21.0 △ 10.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	外 / 灰黄色 内 / にぶい黄褐色	
347	178	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	土師器 高坏	- △ 5.5	外面：ハケメ後ナデ、指頭圧痕 内面：シボリ、ナデ、指頭圧痕	やや粗	やや軟	内外面ともにぶい褐色	内面赤色塗彩
348	178	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	土師器 瓶	- △ 5.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / 灰黄褐色 内 / 暗灰黄色	下部に穿孔
349	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	焼塩土器	※ 13.8 △ 4.6	外面：指頭圧痕 内面：指頭圧痕	密	良好	外 / にぶい褐色～灰褐色 内 / にぶい褐色	
350	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	焼塩土器	※ 16.4 △ 4.3	外面：指頭圧痕・風化のため調整不明 内面：風化のため調整不明	密	良好	内外面ともにぶい褐色	

表 23 土器観察表 (10)

掲載番号	挿回番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
351	178	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	焼塩土器	※13.8 △3.2	二次的な被熱により器面が荒れて調整不明	密	良好	内外面ともにぶい橙色	
352	178	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	焼塩土器	※16.4 △3.6	外面：ナデ 内面：布目、口縁部指頭圧痕	密	良好	外/明赤褐色～灰黄色 内/灰黄色～黒褐色	
353	179	4区 2D-7a	4038 溝 埋土中～下層	須恵器 蓋	※16.0 2.9	外面：つまみ部ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	天井部内面ヘラ記号「×」
354	179	4区 2D-7a	4038 溝 埋土中～下層	須恵器 蓋	※17.2 △1.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	内外面とも灰黄色	外面煤付着
355	179	4区 2C-7j	4038 溝 埋土中～下層	須恵器 坏身	※11.8 △3.1	外面：体部回転ナデ、口縁部ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	内外面とも灰白色	外面自然袖付着
356	179	4区 2D-7a	4038 溝 埋土中層	須恵器 坏	— △1.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰黄色	
357	179	4区 2D-7a	4038 溝 埋土中層	須恵器 長頸壺	※11.7 △11.8	外面：回転ナデ、頸部中央2条の沈線文 内面：回転ナデ、シボリ	密	良好	内外面とも灰色	
358	179	4区 2C-7i	4038 溝 埋土中層	土師器 甕	※13.8 △5.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	
359	179	4区 2C-7j	4038 溝 埋土中層	土師器 甕	※27.4 △7.2	外面：口縁部ハケメ、口縁部ナデ、指頭圧痕、頸部 以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ、頸部以下ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～黒褐色 内/灰黄褐色～明黄褐色	
360	180	4区 2C-7i	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※11.4 3.0	外面：天井部ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
361	180	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	12.6 3.5	外面：つまみ部ナデ、天井部ヘラ切り後ナデ、口縁部回転ナ デ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色～浅黄色	内面自然袖付着
362	180	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	— △1.2	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
363	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	— △1.7	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ、 体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	つまみ内に漆記号「●」
364	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※15.7 △1.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～黄灰色	内外面墨付着
365	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	15.9 2.9	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部 回転ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、口縁部回転ナデ	密	やや良	外/灰色 内/灰白色	
366	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※14.2 2.5	外面：つまみ部ナデ、天井部～口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	つまみ内ヘラ記号
367	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※14.2 △2.2	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
368	180	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※17.5 2.7	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部～口 縁部回転ナデ 内面：天井部～口縁部回転ナデ	密	良好	外/赤褐色 内/褐灰色	
369	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※16.2 2.8	外面：つまみ部～天井部回転ヘラケズリ、ナデ、口縁部回転 ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
370	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 蓋	※15.4 △1.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
371	180	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	※11.6 3.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰色	
372	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	※15.6 △4.3	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
373	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	※13.6 4.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
374	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	※12.8 4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
375	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	※13.8 3.7	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	軟	内外面ともにぶい黄褐色	
376	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 高台付坏	— △2.0	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	軟	外/灰黄色 内/ぶい黄褐色	
377	180	4区 2C-7i	4038 溝 埋土下層	須恵器 坏	※10.0 2.9	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	内外面とも灰色～褐灰色	
378	180	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 壺	— △3.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
379	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 高坏	— △5.2	外面：体部回転ヘラケズリ、脚部ナデ 内面：見込部回転ナデ、脚部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
380	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 高坏	— △5.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
381	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 壺	— △7.6	外面：肩部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ後ナデ、体部下 半 回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外とも灰色	
382	180	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	須恵器 壺	※19.7 △26.9	外面：口縁部ナデ、体部タタキ 内面：口縁部ナデ、体部当て具痕	密	やや良	外/灰白色～灰色 内/灰色	内外面自然袖付着、 外面に須恵器片着
383	181	4区 2C-7i	4038 溝 埋土下層	須恵器 壺	※29.9 △10.7	外面：口縁部回転ナデ、頸部波状文・カキ目・ナデ 内面：カキ目、ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
384	181	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	須恵器 甕	— △24.6	外面：タタキ後カキ目 内面：当て具痕	密	良好	外/明オリーフ灰色～オ リーフ灰色 内/灰色	外面自然袖付着
385	181	4区 2D-7b	4038 溝 埋土下層	土師器 坏	※15.6 3.0	外面：口縁部ナデ、底部ヘラケズリ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色～ ぶい赤褐色	内外面赤色塗彩
386	181	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	土師器 鉢	※14.4 7.8	外面：口縁部～体部ナデ・ミガキ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/ぶい赤褐色～明褐灰 色 内/ぶい橙色～ぶい赤 褐色	内外面赤色塗彩
387	181	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	土師器 甕	※15.0 △5.3	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/黄灰色～黒色 内/黄灰色～黒褐色	
388	181	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	土師器 高坏	— △7.3	外面：ナデ 内面：シボリ、ハケメ	密	やや良	外/ぶい黄褐色 内/灰黄褐色	内外面脚裾部赤色塗彩
389	181	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	土師器 高坏	— △5.8	外面：ナデ 内面：ヨコナデ、ハケメ後ナデ	密	やや良	外/灰白色～ぶい黄褐色 内/ぶい黄褐色～ぶい 橙色	内外面赤色塗彩、脚部に穿孔
390	181	4区 2C-7h	4038 溝 埋土下層	土師器 不明	— △11.1	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	密	良好	外/浅黄色 内/灰白色～橙色	

表 24 土器観察表 (11)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考	
391	181	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	ミニチュア 土器	※ 3.5 △ 2.9	手づくね成形		密	良好	内外面とも黄灰色	
392	181	4区 2C-7b	4038溝 埋土下層	焼塩土器	※ 14.0 △ 5.2	外面：ナデ 内面：布目、指頭圧痕		密	良好	内外面ともいぶい橙色	
393	181	4区 2C-7i	4038溝 埋土下層	焼塩土器	※ 11.4 △ 4.1	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ		密	良好	内外面とも明赤褐色	
394	181	4区 2C-7b	4038溝 埋土下層	焼塩土器	- △ 5.0	外面：指頭圧痕、調整不明 内面：布目か、調整不明		密	良好	外/いぶい橙色～褐灰色 内/いぶい橙色	
395	181	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	焼塩土器	- △ 2.6	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：布目、指頭圧痕		密	良好	外/橙色～灰褐色 内/いぶい橙色～橙色	
396	181	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	焼塩土器	※ 15.5 △ 3.6	風化のため調整不明		密	良好	内外面ともいぶい橙色	
397	181	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	焼塩土器	※ 11.5 △ 3.6	外面：指頭圧痕 内面：布目		密	良好	内外面ともいぶい橙色	
398	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 11.4 3.7	外面：天井部ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ後ナデ	やや密	良好	内外面とも灰色		
399	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	- △ 1.9	外面：天井部回転ナデ、体部上半回転ヘラズリ後ナデ、下 半回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	天井部内面にヘラ記号 輪状つまみ	
400	182	3区 2D-7c	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	16.4 3.1	外面：天井部ナデ、体部上半回転ヘラズリ後ナデ、体部下 半以下回転ナデ 内面：体部上半ナデ、体部下半回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部に漆記号「○」?	
401	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	15.4 2.7	外面：回転ナデ(天井部灰が付着し不明) 内面：天井部丁寧なナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰白色	天井部自然釉付着	
402	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 12.2 2.8	外面：天井部調整不明、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～オリブ黒色 内/灰色	ひずみ激しい	
403	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	- △ 1.6	外面：天井部回転糸切り後つまみ貼付け、天井部から体部に かけて回転ヘラズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰色		
404	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 14.2 △ 1.6	外面：天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄灰色		
405	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 17.0 △ 2.1	外面：天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外/黒褐色 内/灰黄色		
406	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 16.3 △ 2.7	外面：天井部回転ヘラズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色		
407	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 高台付杯	- △ 4.3	外面：底部～高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色		
408	182	3区 2D-7c	3006溝南肩 第4層	須恵器 高台付杯	- △ 3.1	外面：底部板目痕、一部にナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部に漆記号?	
409	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 高台付杯	13.7 4.8	外面：回転ナデ、高台部ナデ、底部ケズリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色～褐灰色 内/灰白色～褐灰色		
410	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 高台付杯	- △ 3.7	外面：底部回転糸切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外/灰白色～暗灰色 内/灰色		
411	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 高台付杯	- △ 2.4	外面：底部回転ヘラ切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰色～灰白色		
412	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 杯	※ 11.3 3.8	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色		
413	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 長頸壺	10.6 △ 13.6	外面：口頸部ナデ、体部上半(肩部)焼成時の灰付着のため 調整不明、体部下半回転ナデ 内面：口頸部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰色		
414	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 壺	- △ 9.2	外面：体部回転ナデ、高台部ヨコナデ、底面回転糸切り後ナ デ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色～黒色		
415	182	3区 2D-7c	3006溝南肩 第4層	須恵器 甕	※ 18.0 △ 8.5	外面：口縁～頸部ナデ、体部タタキ 内面：口縁～頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰白色 内/灰色	外面自然釉付着	
416	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 甕?	- △ 14.1	外面：タタキ後一部にハケメ 内面：当て具痕	密	やや軟	内外面とも灰白色		
417	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	須恵器 甕	※ 17.0 △ 10.9	外面：口縁部回転ナデ、体部タタキ後カキ目 内面：口頸部回転ナデ、体部当て具痕をナデ消す	密	良好	外/灰色～白色 内/灰色		
418	182	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 皿	※ 12.2 △ 1.9	外面：底部ケズリ後ナデ、体部ミガキ 内面：ナデ?	密	良好	内外面とも褐色	内外面赤色塗彩	
419	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 19.6 △ 10.1	外面：口頸部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	外面煤付着	
420	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 20.2 △ 6.1	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、指頭圧痕、体部 ハケメ 内面：口縁部強いナデ、口縁部ハケメ、体部ケズリ	やや密	良好	内外面とも灰黄色		
421	183	3区 2D-7c	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 19.4 △ 9.2	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、頸部ナデ、体部 ハケメ・指頭圧痕 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ケズリ、上端ハケメ後ケズ リ	やや密	良好	外/いぶい黄褐色～いぶい 橙色 内/灰黄色		
422	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 21.4 △ 10.5	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	外/黄灰色～黒色 内/黄灰色		
423	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 15.8 △ 7.1	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ、ナデ一部ハケメ	密	良好	内外面とも灰黄褐色		
424	183	3区 2D-7c	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 21.6 △ 10.0	外面：ハケ、指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、頸部以下指頭圧痕・ケズリ	やや粗	やや軟	内外面ともいぶい黄褐色	内外面煤付着	
425	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 28.8 △ 13.2	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口頸部ハケメ、体部ナデ	密	良好	内外面ともいぶい橙色	外面一部煤付着	
426	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 26.0 △ 8.4	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ、指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、頸部一部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも橙色	外面一部煤付着	
427	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 25.4 △ 8.2	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ、上端ハケメ	密	良好	外/灰黄褐色 内/いぶい黄褐色		
428	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 22.8 △ 8.5	外面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外/灰黄褐色～黒色 内/いぶい黄褐色～灰黄褐 色		
429	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 22.7 △ 7.6	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ、頸部が凹線状にくぼむ 内面：口縁部ナデ、頸部～体部ハケメ、一部にナデ	やや密	良好	外/灰黄褐色 内/いぶい黄褐色	外面煤付着	
430	183	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 27.4 △ 5.4	外面：口縁部ナデ、口縁部～体部ハケメ、頸部ハケメ後ナデ、 指頭圧痕 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ	やや粗	良好	内外面とも灰黄褐色	外面煤付着	

表 25 土器観察表 (12)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
431	183	3区 2D-7b	3006 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 29.0 △ 6.3	外面：口頸部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも橙褐色	外面煤付着
432	183	3区 2D-7b	3006 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 23.2 △ 11.6	外面：口頸部ナデ、体部粗いハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	内外面ともいぶい橙褐色	外面煤付着
433	183	3区 2D-7b	3006 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 23.6 △ 18.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ後ナデ	やや密	良好	外/灰黄色 内/灰白色	
434	183	3区 2D-7b	3006 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 26.0 △ 8.0	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、 体部強いナデ、 体部ケズリ	やや密	良好	内外面とも灰黄色	
435	183	3区 2D-7b	3006 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 23.0 △ 10.0	外面：ナデ、一部にハケメ（風化のため調整不明瞭） 内面：口頸部ナデ、体部ケズリ後弱いナデ	粗	軟	外/いぶい橙褐色 内/いぶい黄褐色	
436	183	3区 2D-7b	3006 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 25.0 △ 8.8	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、指頭圧痕、体部ケズリ後ハケメ	やや密	良好	内外面ともいぶい黄褐色	外面煤付着
437	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 坏蓋	— △ 2.3	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
438	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 14.4 2.8	外面：つまみ部ナデ、体部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
439	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 蓋	※ 14.8 3.1	外面：つまみ部・口縁部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/オリーブ灰色	
440	184	4区 2C-7j	4038 溝南肩 第4層	須恵器 坏身	※ 11.8 3.3	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	口縁部外面自然釉付着
441	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 高台付環	※ 14.4 5.4	外面：回転ナデ、底部静止糸切り後ナデ 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色 内/いぶい黄褐色	
442	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 高台付環	※ 14.0 5.1	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
443	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 高台付環	— △ 2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色～黒色 内/灰白色～灰色	糸切り痕不明瞭（拓本なし）
444	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 高台付環	※ 16.1 4.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰黄色 内/灰色	
445	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 坏	※ 13.0 4.1	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
446	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 碗	※ 16.8 7.0	外面：口縁部～体部回転ナデ、ナデ、底部ヘラケズリ 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ	密	軟	内外面とも灰白色	
447	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 短頸壺	※ 21.8 △ 4.5	外面：回転ナデ 内面：風化により不明（回転ナデか）	密	軟	外/灰白色～灰色 内/白色～灰白色	
448	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	須恵器 短頸壺	※ 9.4 9.3	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも淡灰色	
449	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 皿	※ 11.4 2.0	外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ミガキ 内面：口縁部ナデ、底部ヘラミガキ	やや密	やや良	外/赤褐色 内/明赤褐色	内外面赤色塗彩
450	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 皿	※ 19.6 2.8	外面：風化のため調整不明、底部ケズリ 内面：風化のため調整不明	密	良好	内外面とも灰白色～いぶい 黄褐色	内外面赤色塗彩
451	178	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	土師器 高台付環	※ 19.8 6.6	外面：ナデ、底部ケズリ後ナデ 内面：ナデ・ミガキ	密	良好	外/いぶい赤褐色～いぶい 黄色 内/褐色	内外面赤色塗彩
452	184	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 高坏	※ 21.6 △ 9.4	外面：受部風化のため調整不明、脚部ケズリ・ナデ 内面：受部風化のため調整不明、脚部シボリ・ナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色	内外面赤色塗彩
453	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 25.4 △ 5.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/いぶい黄褐色～灰黄褐 色 内/灰黄褐色	
454	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	21.8 △ 5.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/いぶい黄褐色 内/褐灰色～いぶい黄褐色	
455	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 19.6 △ 7.6	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	やや粗	やや軟	内外面とも灰白色	内外面一部煤付着
456	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 20.7 △ 11.0	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	やや良	外/いぶい黄褐色 内/灰黄色	
457	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 23.4 △ 18.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外/褐灰色～黒褐色 内/明褐灰色～橙褐色	外面煤付着
458	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 28.2 △ 7.8	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ・指頭圧痕、体部ヘラケズ リ	密	良好	内外面とも灰白色～黄灰色	
459	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 22.8 △ 6.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ナデ	密	良好	外/いぶい黄褐色 内/灰黄褐色	
460	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 27.6 △ 6.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ、口縁下部ヨコナデ、体部 ナデ	密	良好	外/灰白色～淡黄色 内/灰白色～黒褐色	
461	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 34.0 △ 8.7	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	粗	やや良	外/浅黄褐色～黒褐色 内/いぶい橙褐色～橙褐色	
462	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 35.6 △ 8.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、口縁下部ハケメ後ナデ、体部ヘラ ケズリ	密	良好	外/灰黄褐色～黒色 内/いぶい黄褐色	外面煤付着
463	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 30.6 △ 9.5	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、口縁下部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズ リ	密	良好	外/褐灰色～灰黄褐色 内/褐灰色～いぶい黄褐色	
464	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 33.6 △ 14.4	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ後ナデ	密	やや軟	外/灰白色～黒色 内/浅黄褐色～灰黄褐色	外面煤付着
465	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 32.7 △ 12.4	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	やや良	内外面ともいぶい黄褐色	
466	185	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	土師器 甕	※ 25.2 △ 18.2	外面：ハケメ後ナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部以下ハケメ後ヘラケズリ	やや密	やや良	内外面とも灰白色	外面一部煤付着、軟か
467	186	3区 2D-7b	3438 流路 埋土	須恵器 蓋	※ 16.0 2.0	外面：つまみ部ナデ、天井部回転糸切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黄褐色～黒色 内/青黒色～灰白色	体部に指紋付着
468	186	3区 2D-7c	3438 流路 埋土	須恵器 坏	※ 12.8 4.3	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/暗灰色～明オリーブ灰 色 内/灰色～暗青灰色	
469	186	3区 2D-7b	3438 流路 埋土	須恵器 坏	※ 12.6 3.2	外面：底部回転糸切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも黒色～浅黄色	
470	186	3区 2D-7c	3438 流路 埋土	須恵器 壺	— △ 7.1	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰色	
471	186	3区 2D-7c	3438 流路 埋土	須恵器 高坏	— △ 5.4	外面：脚部回転ナデ、坏部ナデ？ 内面：脚部下半回転ナデ、上半回転ナデ後しほり目、坏部中 央部ナデ、端部回転ナデ？	密	良好	内外面ともいぶい暗灰色～ オリーブ黒	

表 26 土器観察表 (13)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
472	186	3区 2D-7b	3438 流路 埋土	土師器 皿	※ 12.6 2.4	外面：底部調整不明（ヘラ切り後ナデ?）、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / 黒色 内 / 黄褐色～暗オリーブ褐色	外面黒漆塗布
473	186	3区 2D-7c	3438 流路 埋土	土師器 杯	※ 17.0 △ 4.4	外面：体部上半ナデ、下半ケズリ 内面：ナデ後ミガキ?	密	良好	外 / 黒色～黄褐色 内 / 黄褐色～灰白色	内外面赤色塗彩
474	186	3区 2D-7c	3438 流路 埋土	土師器 甕	※ 18.4 △ 8.6	外面：口縁端部ナデ、口縁部ハケメ、頸部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、一部にハケメ、体部ケズリ、一部にハケメ	密	良好	内外面とも灰褐色	表面の一部が剥離
475	186	3区 2D-7b	3438 流路 埋土	焼塩土器	※ 11.9 △ 2.6	外面：口縁端部調整不明、体部布目 内面：口縁端部調整不明、体部布目・指頭圧痕 (内外面とも調整不明瞭)	密	やや軟	内外面とも橙色	
476	187	3区 2D-7b	3433 溝 3432 溝 埋土	須恵器 蓋	※ 13.4 3.0	外面：回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色～オリーブ 黒色	
477	187	3区 2D-7c	3433 溝 3438 流路 埋土	須恵器 蓋	※ 13.6 2.4	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰黄色 内 / 灰白色	
478	187	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	須恵器 蓋	※ 17.9 3.1	外面：天井部回転系切り、つまみ貼り付けに伴うナデ、体部 回転ナデ、上端ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 黄灰色 内 / 黒褐色～灰色	
479	187	3区 2D-7c	3014 溝 (西) 3433 溝 埋土	須恵器 蓋	※ 18.5 △ 3.1	外面：天井部回転系切り後雑なナデ、体部上半回転ナデ後ナデ、 下半回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	
480	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 蓋	※ 16.6 2.8	外面：つまみ部ナデ、天井部回転系切り後粗いナデ、体部回 転ナデ後ナデ 内面：天井部から体部上半ナデ、体部下半回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色 内 / 灰黄褐色	天井部外面に赤色塗彩痕
481	187	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	※ 12.7 3.6	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面ともオリーブ黒色	
482	187	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	※ 13.6 4.3	外面：底部丁寧なナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 黒色 内 / 灰白色	底部ヘラ記号
483	187	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	須恵器 高台付杯	※ 13.5 5.4	外面：底部回転系切り後ナデ?、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	
484	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	- △ 3.0	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ、下端回 転ナデ後ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色 内 / 灰白色～灰色	
485	187	3区 2D-7c	3014 溝 3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	- △ 3.1	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外 / 灰色 内 / 灰白色	高台に焼成前の圧痕
486	187	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	- △ 2.5	外面：底部回転系切り後ナデ?、高台部～体部ナデ 内面：ナデ? (内外面とも調整不明瞭)	密	良好	内外面ともふい黄褐色	底部ヘラ記号?
487	187	3区 2D-7c	3014 溝 3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	※ 15.0 4.9	外面：高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも褐色	
488	187	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 高台付杯	※ 15.4 7.2	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部回転ナデ?、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰黄色	
489	187	3区 2D-7c	3432 溝 埋土	須恵器 杯	※ 11.6 3.3	外面：底部回転系切り後粗いナデ、体部回転ナデ、下端回転 回転ナデ後粗いナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰黄褐色 内 / 灰褐色	
490	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 杯	※ 13.2 3.4	外面：底部回転系切り後粗く弱いナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色 内 / 灰黄色	
491	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 杯	※ 12.8 3.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 黄灰色 内 / 褐色	
492	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 杯	※ 13.9 3.6	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 黒色～灰白色 内 / ぶい黄色	
493	187	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	須恵器 杯	※ 12.4 4.5	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色 内 / 灰黄色	
494	187	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 杯	※ 12.9 4.7	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、一部にナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも暗灰色	内面に墨痕
495	187	3区 2D-7c	3014 溝 3432 溝 3433 溝 埋土	須恵器 杯	※ 12.0 4.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも青黒色～褐色	
496	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 杯	※ 13.0 5.5	外面：回転ナデ、底部風化のため不明 内面：回転ナデ	密	やや軟	外 / 灰白色～灰黄褐色 内 / 灰白色	
497	187	3区 2D-7c	3014 溝 3432 溝 3433 溝 埋土	須恵器 杯?	※ 14.0 △ 4.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 褐色	
498	187	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 杯	- △ 2.3	外面：底部回転系切り、体部（工具による）回転ナデ 内面：底部中央回転ナデ後ナデ、底部端～体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰色～暗灰色 内 / 灰白色	
499	187	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	須恵器 杯	- △ 3.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	外 / 灰白色 内 / 灰黄褐色	
500	187	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	須恵器 杯	- △ 4.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～黄灰色	
501	188	3区 2D-6c	3014 溝 埋土	須恵器 皿	※ 15.8 2.2	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端回転ナデ後ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	
502	188	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 皿	※ 12.8 2.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、一部にナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰色～黒褐色	
503	188	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	須恵器 皿	※ 12.3 △ 2.3	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半回転ナデ後 ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外 / 灰白色 内 / 灰白色～暗灰色	
504	188	3区 2D-7c	3014 溝 埋土最下層	須恵器 皿	※ 12.0 △ 1.5	外面：底部～体部下半調整不明、体部上半回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	外 / 灰白色 内 / 灰白色～黒褐色	内面墨付着
505	188	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	須恵器 皿	※ 12.0 △ 2.5	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半回転ナデ後 ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
506	188	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	須恵器 皿	※ 13.4 △ 2.2	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	内外面とも黒色～灰白色	

表 27 土器観察表 (14)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
507	188	3区 2D-7b	3433 溝埋土	須恵器 皿	※12.0 2.0	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	外/黒褐色～灰黄色 内/灰色～灰白色	
508	188	3区 2D-7b	3433 溝埋土	須恵器 鉢	※16.8 △3.9	外面：回転ナデ、口縁部に弱い面を持つ 内面：口縁部ハケメ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面ともにぶい黄褐色	
509	188	3区 2D-7b	3433 溝埋土	須恵器 鉢	※15.0 △5.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/にぶい褐色	
510	188	3区 2D-7c	3014 溝埋土最下層	須恵器 短頸壺	※5.9 △5.2	外面：回転ナデ? (焼成時に灰が付着しているため調整不明瞭) 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
511	188	3区 2D-7c	3432 溝埋土	須恵器 底部	— △2.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ後粗いナデ、下端ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰色～黄灰色	内面に焼き膨れ
512	188	3区 2D-7c	3433 溝埋土	須恵器 高坏	— △4.9	外面：回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/淡黄色～黄灰色 内/黄灰色～暗オリーブ褐色	
513	188	3区 2D-6c	3014 溝埋土	須恵器 壺	— △5.9	外面：回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄灰色	
514	188	3区 2D-7c	3432 溝埋土	須恵器 高台付壺?	— △7.0	外面：高台部内外ナデ、体部回転ナデ後ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰色～暗灰黄色 内/灰色	
515	188	3区 2D-6c	3433 溝埋土	須恵器 壺	— △12.1	外面：底部ナデ、胴部回転ナデ、肩部回転ナデ? (自然釉に覆われているため調整不明瞭) 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
516	188	3区 2D-6c	3432 溝埋土	須恵器 胴部	— △4.8	外面：頸部ナデ、体部タタキ、上端タタキ後ナデ 内面：頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰黄色～灰色 内/灰色	
517	188	3区 2D-7c	3014 溝埋土	須恵器 甕	— △11.5	外面：タタキ 内面：当て具痕、一部にナデ	密	良好	外/灰色～青灰色 内/灰色	
518	188	3区 2D-7b	3433 溝埋土	須恵器 甕	— △18.8	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	内外面とも灰色～灰黄色	
519	188	3区 2D-7c	3014 溝埋土	緑釉陶器 皿	— △2.7	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	内外面とも灰オリーブ色	
520	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 高台付坏	— △2.6	外面：底部回転系切り、高台部～体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/黒色～ぶい黄褐色 内/暗灰黄色	
521	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 高台付坏	— △2.9	外面：底部ナデ?、高台部～体部ナデ 内面：底部ナデ?、体部ナデ	密	良好	内外面とも浅黄色～ぶい 橙色	内外面赤色塗彩
522	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	※11.6 3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黒色～ぶい黄褐色 内/ぶい黄褐色	
523	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 坏	— △2.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黄灰色 内/暗灰黄色	
524	189	3区 2D-7b	3433 溝埋土	土師器 坏	— △2.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端回転系切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黒色～オリーブ黒色 内/灰黄褐色	
525	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	※11.2 △4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/ぶい黄褐色 内/ぶい褐色	
526	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 坏	※12.4 4.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	軟	内外面とも黒色	
527	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 坏	— △2.3	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：風化のため調整不明	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	
528	189	3区 2D-7b	3433 溝埋土	土師器 坏	※12.6 5.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～灰黄褐色	
529	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	— 5.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	
530	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	※14.4 △5.7	外面：工具によるナデ 内面：ナデ	密	良好	外/ぶい黄褐色 内/灰黄褐色	外面煤付着
531	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	— 6.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黒色～灰黄褐色 内/灰白色～暗灰黄色	外面に炭素吸着
532	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土最下層	土師器 坏	— △2.6	外面：底部回転系切り後弱いナデ、体部工具によるナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい橙色	内面に炭化物付着
533	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	※12.2 5.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/ぶい黄褐色～明赤褐色 内/浅黄褐色～褐灰色	
534	189	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 坏	— △5.0	外面：底部回転系切り、体部工具によるナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～黒褐色 内/灰黄褐色～浅黄褐色	
535	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 坏	— △4.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰色～暗褐色 内/暗灰黄色	
536	189	3区 2D-7b	3433 溝埋土	土師器 坏	※16.0 △4.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/褐色 内/灰黄褐色	外面に黒漆塗布?
537	189	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 坏	※16.0 5.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
538	189	3区 2D-7b	3432 溝埋土	土師器 坏	※17.0 △7.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	
539	190	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 皿	12.3 3.0	外面：底部ナデ・指頭圧痕、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/浅黄褐色 内/灰白色～浅黄褐色	内外面赤色塗彩
540	190	3区 2D-6c	3433 溝埋土	土師器 皿	※12.8 △2.6	外面：口縁部ナデ、底部ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	内外面赤色塗彩
541	190	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 皿	※13.9 3.1	外面：底部ヘラ切り後ナデ・指頭圧痕、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	内外面赤色塗彩
542	190	3区 2D-6c	3433 溝埋土	土師器 皿	※15.8 △2.3	外面：口縁部ナデ、底部ナデ 内面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ?、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	内外面赤色塗彩
543	190	3区 2D-7b	3433 溝埋土	土師器 皿	※12.5 1.9	外面：底部回転系切り、ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黒褐色～明黄褐色 内/暗灰黄色～黒色	
544	190	3区 2D-7c	3433 溝埋土	土師器 皿	※11.4 2.0	外面：ナデ、回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰白色～灰黄色 内/淡黄色～黒褐色	
545	190	3区 2D-7b	3433 溝埋土	土師器 皿	※11.4 2.0	外面：底部回転系切り?、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～ぶい橙色 内/ぶい黄褐色～黒褐色	
546	190	3区 2D-7c	3432 溝埋土	土師器 皿	※13.8 △1.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	
547	190	3区 2D-7c	3014 溝埋土	土師器 皿	※13.2 △1.7	外面：ナデ? (調整不明瞭) 内面：ナデ? (調整不明瞭)	やや密	やや良	内外面ともにぶい黄褐色	
548	190	3区 2D-6c	3014 溝埋土	土師器 皿	※12.4 1.9	外面：底部回転系切り後ナデ、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰白色 内/灰白色～黒色	内面炭付着?

表 28 土器観察表 (15)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
549	190	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	土師器 皿	120 1.9	外面：底部回転条切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも浅黄色～オリーブ褐色	
550	190	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	土師器 壺	— △ 5.1	外面：ナデ 内面：ナデか？（風化のため調整不明瞭）	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
551	190	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	土師器 甕	※ 18.4 △ 6.9	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ・指頭圧痕	密	良好	内外面とも橙色	外面煤付着
552	190	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	土師器 甕	※ 22.2 △ 4.4	外面：口縁部ナデ、口縁部～体部ハケメ後一部ナデ 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ、上端ナデ	密	良好	内外面とも褐灰色	
553	190	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	土師器 甕	※ 21.1 △ 9.1	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	外 / 灰黄色 内 / 黄灰色	
554	190	3区 2D-7c	3432 溝 埋土	土師器 甕	※ 23.8 △ 5.2	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ・指頭圧痕、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、下端ハケメ後ナデ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも灰褐色	
555	190	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	土師器 甕	※ 18.8 △ 7.8	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも橙色	
556	190	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	焼塩土器	— △ 3.4	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：型当て未調整	密	良好	外 / にぶい褐色 内 / にぶい黄褐色	
557	190	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	焼塩土器	※ 14.8 △ 5.3	外面：指頭圧痕 内面：指頭圧痕	密	やや良	外 / 橙色～灰色 内 / 橙色	布目は細かい
558	190	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	焼塩土器	— △ 6.6	外面：指頭圧痕、ナデ 内面：指頭圧痕	やや密	やや良	外 / 灰黄褐色 内 / にぶい黄色	
559	190	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	焼塩土器	— △ 3.6	外面：ナデ？（風化のため調整不明瞭） 内面：ナデ？（風化のため調整不明瞭）	密	やや良	外 / にぶい赤褐色 内 / 灰黄褐色	
560	190	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	焼塩土器	※ 12.6 △ 2.6	外面：指頭圧痕 内面：指頭圧痕	やや粗	良好	外 / 褐色 内 / 明黄褐色	
561	190	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	手づくね 土器	— △ 1.5	外面：ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも にぶい黄褐色	
562	191	3区 2D-8d	3004 溝 埋土	須恵器 長頸壺	— △ 10.0	外面：口縁部回転ナデ、頸部～体部ナデ、口縁部に2条の凹線 内面：口縁部回転ナデ、頸部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色～灰色 内 / 灰白色	
563	191	3区 2D-8d	3004 溝 埋土	須恵器 鉢	— △ 6.2	外面：体部回転ナデ、底面擦痕、端部ヘラ切り？ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色～灰白色 内 / 灰色	
564	191	3区 2D-8c	3086 溝 埋土	須恵器 高台付坏	— △ 3.5	内外面とも調整不明	密	軟	内外面とも灰白色	
565	191	3区 2D-8c	3090 溝 埋土1層	土師器 甕	※ 25.0 △ 7.6	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも にぶい黄褐色	外面煤付着
566	191	3区 2D-8b	3090 溝 埋土	土師器 甕	※ 20.2 △ 7.1	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ、頸部に布目痕？	密	良好	外 / 褐色 内 / 灰黄色	外面煤付着
567	191	3区 2D-8b	3090 溝 埋土	土師器 高坏	— △ 4.6	外面：受部ハケメ、一部にナデ 内面：ナデ？（調整不明瞭）	やや密	やや軟	内外面とも 灰黄色～黄灰色	内外面赤色塗彩
568	191	3区 2D-8b	3093 溝 埋土	須恵器 坏	※ 13.6 △ 3.4	外面：口縁部回転ナデ、体部回転ナデ後ナデ 内面：口縁部回転ナデ、体部回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも 灰黄色	
569	191	3区 2D-8b	3093 溝 埋土	土師器 皿	※ 17.6 △ 1.9	外面：ミガキ後ナデ 内面：ナデ後粗いミガキ	密	良好	内外面とも 褐色	内外面赤色塗彩
570	191	3区 2D-8b	3093 溝 埋土	土師器 甕	※ 26.8 △ 9.8	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、頸部指頭圧痕、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	内外面とも にぶい褐色	
571	191	3区 2D-6d	3200 溝 埋土	須恵器 皿	※ 13.6 2.3	外面：底部回転条切り、体部上半回転ナデ、下半回転ナデ後ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも 灰白色	
572	191	3区 2D-6d	3200 溝 埋土	須恵器 甕	※ 16.0 △ 4.3	外面：口縁部回転ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部回転ナデ、体部当て具痕をナデ消す	密	良好	内外面とも 灰色	
573	191	3区 2D-8c	3287 溝 埋土	須恵器 蓋	※ 14.6 △ 1.6	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、体部ナデ	密	良好	内外面とも 灰色	
574	191	3区 2D-8c	3287 溝 埋土	須恵器 坏	※ 12.0 △ 3.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも 灰色	
575	191	3区 2D-8c	3287 溝 埋土	須恵器 坏	— △ 1.5	外面：底部回転条切り、体部ナデ？ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外 / 灰色 内 / 灰白色	
576	191	3区 2D-8c	3287 溝 埋土	須恵器 坏？	※ 10.6 △ 2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも 灰色	
577	191	3区 2D-8c	3287 溝 埋土	須恵器 坏	— △ 2.0	外面：底部ナデ？、体部ナデ 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面とも 灰白色	
578	191	3区 2D-8c	3287 溝 埋土最下層	土師器 甕	※ 29.6 △ 7.0	外面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ、一部にハケメ	密	良好	内外面とも 褐色	外面煤付着
579	191	3区 2D-6b	3444 溝 埋土	土師器 壺	— △ 4.7	外面：ハケメ 内面：ナデ・指頭圧痕	密	良好	外 / 灰黄褐色～黒褐色 内 / 灰黄褐色	
580	191	3区 2D-6b	3474 溝 埋土	須恵器 蓋	※ 17.1 △ 1.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも 灰白色	
581	191	3区 2D-6b	3474 溝 埋土	須恵器 長頸壺	— △ 5.6	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも 灰色	
582	191	3区 2D-6b	3474 溝 埋土	須恵器 甕	※ 27.8 △ 5.8	外面：回転ナデ、指紋付着 内面：回転ナデ後一部にナデ	密	良好	内外面とも 灰色	
583	191	3区 2D-6b	3500 溝 埋土	土師器 甕	— △ 3.1	外面：口縁部ナデ、口縁部～体部ハケメ 内面：ハケメ	密	良好	外 / 黒褐色 内 / 褐灰色	
584	191	3区 2D-6b	3500 溝 埋土	土師器 甕	— △ 2.0	外面：口縁部ナデ、ハケメ 内面：口縁部ナデ、ハケメ	密	良好	内外面とも にぶい黄褐色	
585	191	3区 2D-6c	3500 溝 埋土	土師器 甕	※ 22.0 △ 16.1	外面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ハケメ、指頭圧痕 内面：口縁部ハケメ、頸部以下ケズリ後ナデ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも 褐色	
586	192	4区 2C-7i	4029 溝 埋土	須恵器 蓋	— △ 1.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	外面自然釉付着
587	192	4区 2D-8a	4044 土坑 第3層	須恵器 高台付坏	— △ 4.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	外 / 灰色 内 / 灰白色	外面炭素吸着
588	192	4区 2D-8a	4044 土坑 埋土	須恵器 坏	— △ 1.8	外面：回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも 灰色	底部外面にヘラ記号
589	192	4区 2D-8a	4099 溝 埋土	土師器 高台付坏	— △ 2.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	軟	外 / 灰白色～黒褐色 内 / 暗黄褐色	
590	192	4区 2D-8a	4099 溝 埋土	土師器 坏	— △ 1.2	外面：ナデ、底部回転条切り 内面：ナデ	密	良好	外 / 浅黄色 内 / にぶい黄色	
591	192	4区 2D-8a	4108 溝 埋土	須恵器 坏	— △ 1.6	外面：回転ナデ、底部条切り 内面：回転ナデ	密	軟	外 / 灰黄色 内 / 灰白色	

表 29 土器観察表 (16)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
592	192	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	須恵器 蓋	— △1.5	外面：つまみ部ナデ、体部回転ヘラケズリ・回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰色	つまみに漆塗り「×」
593	192	4区 2D-8a	4123 溝 埋土	須恵器 坏	— △1.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	
594	192	4区 2C-6i	4131 溝 埋土	須恵器 蓋	※14.0 △1.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
595	192	4区 2C-7i	4131 溝 埋土	須恵器 高台付坏	※9.2 4.1	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ケズリ後ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
596	192	4区 2C-7i	4131 溝 埋土	土師器 甕	※24.8 △10.1	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、体部ヘラケズリ・ハケメ	密	良好	外/にぶい黄橙色～灰黄褐色 内/灰白色～褐灰色	
597	193	4区 2C-6j	4191 溝 埋土	須恵器 坏蓋	11.3 3.4	外面：体部回転ナデ、天井部回転ヘラ切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
598	193	4区 2C-6j	4191 溝 埋土	須恵器 壺	— △4.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
599	193	4区 2C-7j	4191 溝 埋土	須恵器 高坏	— △9.5	外面：回転ナデ 内面：受部ナデ、脚部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰白色	
600	193	4区 2C-6j	4191 溝 埋土	須恵器 甕	※16.4 △6.6	外面：口縁部ナデ、体部タタキ 内面：口縁部ナデ、体部当て具痕	密	やや良	外/灰色～灰オリーブ色 内/灰色～灰黄色	
601	193	4区 2C-6j	4191 溝 埋土	土師器 甕	※26.8 △6.8	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ・指頭圧痕 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズリ	密	やや軟	外/灰白色～黒褐色 内/灰白色	
602	193	4区 2C-7j	4191 溝 埋土	土師器 甕	※20.4 △10.7	外面：口縁部～頸部ハケメ後ナデ、体部ハケメ・ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面とも灰白色～黄褐色	
603	193	4区 2C-7j	4221 溝 埋土	須恵器 高台付坏	※14.4 4.7	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色	底部に墨書「×」
604	193	4区 2D-7b	4221 溝 埋土	須恵器 高台付坏	— △2.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
605	193	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	須恵器 高台付坏	— △3.1	外面：体部回転ナデ、底部糸切り後回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
606	193	4区 2D-6b	4221 溝 埋土	須恵器 高台付坏	— △3.4	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部に墨書「×」
607	193	4区 2D-6b	4221 溝 埋土	須恵器 坏	※15.2 3.6	外面：口縁部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面自然釉付着
608	193	4区 2D-6b	4221 溝 埋土	須恵器 壺	— △6.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色	内外面自然釉付着
609	193	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	土師器 甕	※32.0 △11.6	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面とも黄灰色	
610	193	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	土師器 甕	※24.2 △9.2	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	やや軟	外/灰黄色～橙色 内/灰黄色	
611	193	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	須恵器 蓋	※16.4 △1.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色	
612	193	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	須恵器 坏	— △1.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/オリーブ灰色～灰色 内/灰色	
613	193	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	須恵器 壺?	— △4.8	外面：体部ナデ・ヘラケズリ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	やや密	軟	外/灰白色 内/黄灰色	内面炭素吸着
614	193	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	土師器 甕	※23.0 △4.6	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	密	良好	外/暗灰黄色 内/黄褐色～黄灰色	
615	193	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	土師器 甕	※20.0 △8.5	外面：ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外/暗灰黄色 内/灰黄色～暗灰黄色	外面煤付着
616	194	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	須恵器 坏身	※13.2 △2.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
617	194	4区 2C-6j	4192 溝 埋土	須恵器 横瓶?	※17.8 △6.3	外面：口縁～頸部回転ナデ、体部タタキ 内面：口縁～頸部回転ナデ、体部ナデ後当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	外面自然釉付着
618	194	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	土師器 壺	※20.6 △6.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも黒色	
619	194	4区 2C-6j	4192 溝 埋土	土師器 壺	— △6.0	外面：ハケメ 内面：頸部ナデ、体部～底部ヘラケズリ	密	良好	外/灰白色 内/暗灰黄色	小型、体部穿孔
620	194	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	土師器 甕	※15.0 △8.8	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/黒色 内/にぶい黄褐色	外面煤付着
621	194	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	手づくね 土器	— △2.9	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/にぶい黄褐色～にぶい 橙色 内/にぶい橙色～黄灰色	
622	194	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	土師器 甕	※26.2 △8.5	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	やや粗	良好	外/黄褐色 内/にぶい黄色	外面煤付着
623	194	4区 2C-6j	4192 溝 埋土	土師器 高坏	※14.3 △4.6	外面：坏部上半ナデ、下半ヘラケズリ後ナデ 内面：ハケメ	密	やや軟	内外面とも灰白色～暗灰黄色	
624	194	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	手づくね 土器	※12.2 4.2	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	やや粗	やや軟	外/暗灰黄色 内/黄褐色	
625	194	4区 2C-6i	4193 溝 埋土	須恵器 坏蓋	※13.8 △2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
626	194	4区 2C-6i	4193 溝 埋土	手づくね 土器	※4.6 3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	粗	軟	内外面とも灰黄色	
627	195	4区 2D-7b	4286 流路 埋土	須恵器 壺	— △4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	外面自然釉付着
628	195	4区 2C-6i	4290 溝 埋土	土師器 甕	※29.6 △5.7	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	やや粗	やや軟	外/黒褐色 内/灰黄色	
629	196	3区 2D-6c	3473 流路 埋土	土師器 甕	16.7 28.1	外面：口縁部～頸部ナデ、体部～底部ハケメ 内面：口縁部～頸部ナデ、体部ケズリ後ナデ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも橙色～黒褐色	外面煤付着
630	196	3区 2D-6c	3473 流路 埋土	土師器 甕	16.4 29.3	外面：口縁部～頸部ナデ、体部～底部ハケメ 内面：口縁部～頸部ナデ、体部ケズリ後ナデ、指頭圧痕	密	良好	外/橙色～灰黄褐色 内/灰褐色	外面煤付着
631	196	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 甕	※15.3 △24.9	外面：口縁部～肩部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部上半ケズリ、下半ナデ・指頭圧痕	密	良好	内外面とも黒褐色～灰黄色	外面煤付着
632	196	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 甕	※14.3 △23.2	外面：口縁部～肩部ナデ、体部上半ハケメ、下半ハケメ後ナ 内面：口縁部～頸部ナデ・指頭圧痕、体部上半ケズリ、下半ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/黒褐色～明赤褐色 内/明赤褐色～にぶい赤褐色	外面煤付着
633	196	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 甕	※16.8 △12.5	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ後ナデ	密	良好	内外面とも橙色	外面煤付着
634	196	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 高坏	※24.2 △9.3	外面：受部ナデ・指頭圧痕 内面：受部ナデ	密	良好	内外面とも橙色	内外面赤色塗彩 内面が被熱し黒く変色

表 30 土器観察表 (17)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構遺位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
635	196	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 高坏	※ 22.3 △ 9.0	外面：受部の体部ハケメ後ナデ、底部ナデ、受部と脚部の接 合部ハケメ 内面：受部の口縁端部ハケメ後ナデ、体部ナデ、底部ナデ？	密	良好	内外面とも橙色	内外面赤色塗彩 外面に黒斑
636	196	3区 2D-6c	3473 流路 埋土	土師器 高坏	※ 21.0 △ 8.4	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ・指頭圧痕、底部ナデ、 内面：体部ハケメ、底部ハケメ後ナデ	密	良好	内外面とも橙色	内外面赤色塗彩
637	196	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 高坏	- △ 3.9	外面：受部上半ハケメ後ミガキ？、下半ナデ後ミガキ？ 内面：坏部の底部ナデ、体部ハケメ	密	良好	内外面とも橙色	
638	197	3区 2D-6d	3473 流路 埋土	土師器 高坏	※ 17.6 △ 6.1	外面：受部ハケメ後ナデ、下端に指頭圧痕 内面：受部上半横方向のミガキ後暗文、下半調整不明瞭（ナ デ？）	密	やや良	外 / 黄灰色～黒褐色 内 / 灰黄色～黒色	内外面赤色塗彩 外面に黒斑
639	197	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 高坏	※ 18.0 △ 5.4	外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ後暗文	密	良好	外 / にぶい赤褐色 内 / 赤褐色～褐灰色	
640	197	3区 2D-6c	3473 流路 埋土	土師器 高坏	- △ 6.9	外面：ナデ 内面：ナデ・指頭圧痕、しほり目	密	やや良	内外面ともいぶい橙色	筒部に面取り（19面） 内外面赤色塗彩
641	197	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 壺	※ 7.7 △ 8.8	外面：口縁部～体部上半ハケメ後ナデ、体部下半ハケメ 内面：ナデ・指頭圧痕	密	良好	外 / 灰黄褐色～黒色 内 / 灰黄褐色	小型、外面煤付着・黒斑
642	197	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	土師器 椀	11.2 6.4	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ、底部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ、底部ケズリ後ナデ	密	良好	内外面とも橙色	
643	197	3区 2D-6c	3473 流路 埋土	須恵器 蓋	- △ 1.5	外面：天井部回転系切り後ナデ、ナデ、体部下半回転ナデ、 上半回転ナデ後ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰黄褐色 内 / 灰色	内面墨付着 つまみ欠損
644	197	3区 2D-5d	3473 流路 3437 流路 埋土	土師器 甕	- △ 27.2	外面：体部ハケメ、肩部ハケメ後ナデ 内面：ナデ及びケズリ、一部に指頭圧痕	密	良好	外 / 灰黄褐色～橙色 内 / 灰黄褐色	外面煤付着
645	197	3区 2D-5e	3437 流路 埋土	土師器 甕	- △ 21.7	外面：体部ハケメ、肩部ハケメ後ナデ 内面：体部ケズリ・指頭圧痕、上端ナデ	密	良好	外 / にぶい橙色～黒色 内 / にぶい橙色～褐色	外面煤付着
646	197	3区 2D-6d	3437 流路 埋土	土師器 高坏	17.7 △ 6.0	外面：受部上半ナデ、下半ハケメ、中位粘土貼付により突帯 状とする 内面：口縁端部ナデ、受部密な横方向のミガキ後粗くタテ方 向のミガキ	密	良好	外 / 橙色～黒色 内 / 橙色～暗赤褐色	内外面赤色塗彩 外面に黒斑
647	197	3区 2D-6d	3437 流路 埋土	土師器 高坏	※ 14.7 △ 5.8	外面：受部ナデ、ハケメ 内面：口縁部ナデ後一部ミガキ、受部横方向のミガキ後放射 状のミガキ	密	やや良	内外面とも橙色	内外面赤色塗彩
648	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	須恵器 坏	※ 11.2 4.3	外面：底部回転系切り、口縁部回転ナデ、体部回転ナデ後ナ デ 内面：回転ナデ	やや粗	良好	外 / 灰色 内 / 黄灰色	
649	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	須恵器 坏	- △ 2.8	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色 内 / 灰黄褐色	
650	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	須恵器 壺	- △ 5.9	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	内外面とも灰色	
651	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	須恵器 体部片	- △ 9.4	外面：タタキ 内面：当て具痕（格子状）	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	
652	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 坏	※ 12.6 △ 4.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端に指頭圧痕 内面：ナデ	密	やや軟	外 / 灰白色 内 / 浅黄色	外面煤付着
653	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 坏	※ 14.2 △ 5.7	外面：底部調整不明、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面ともいぶい黄褐色	外面煤付着
654	198	3区 2D-6b	3005 集石 3164 土坑 埋土	土師器 坏	※ 14.8 △ 5.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / にぶい黄褐色 内 / にぶい黄褐色	外面煤付着？
655	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 坏	※ 11.5 △ 4.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外 / にぶい黄褐色 内 / にぶい黄褐色～褐灰色	口縁部内外面煤付着？
656	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 鉢？	※ 12.3 △ 3.9	内外面とも調整不明	密	軟	内外面とも灰白色～オリー ブ灰色	焼成が非常に悪い須恵器の可能性 もある
657	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 坏	- △ 2.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / 黒色～黄灰色 内 / 灰黄褐色	
658	198	3区 2D-6b	3005 集石	土師器 坏	- △ 1.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色	
659	198	3区 2D-6b	3005 集石	土師器 坏	- △ 2.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色	
660	198	3区 2D-6b	3005 集石	土師器 坏	- △ 1.5	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも褐灰色～黒色	
661	198	3区 2D-6b	3005 集石	土師器 坏	- △ 2.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～いぶい 黄褐色	
662	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 坏	- △ 1.9	外面：ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	密	軟	内外面ともいぶい黄褐色	
663	198	3区 2D-6b	3005 集石	土師器 皿	※ 10.4 △ 2.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / にぶい黄褐色 内 / 灰黄褐色～いぶい黄褐 色	
664	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 皿	※ 12.3 △ 2.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ？（調整不明瞭）	密	軟	内外面とも黒色	
665	198	3区 2D-6b	3005 集石 3164 土坑 埋土	土師器 皿	※ 13.0 △ 2.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部調整不明、体部ナデ	密	やや良	内外面ともいぶい黄褐色	
666	198	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土師器 壺	※ 23.5 △ 6.2	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ナデ	密	良好	外 / 黄灰色 内 / 黒褐色	
667	199	3区 2D-6b	3009 溝 埋土	須恵器 坏	※ 14.0 △ 6.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：部回転ナデ後一部にナデ	密	やや良	内外面とも灰白色～いぶい 黄褐色	
668	199	3区 2D-6b	3009 溝 埋土	須恵器 坏	- △ 3.7	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面煤付着
669	199	3区 2D-6b	3009 溝 埋土	土師器 坏	- △ 2.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面ともいぶい黄褐色	
670	199	3区 2D-7b	3009 溝 埋土	須恵器 胴部	- △ 14.0	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	
671	200	3区 2D-6b	3443 土坑 埋土	土師器 壺	- △ 3.4	外面：ナデ 内面：口縁部～胴部上半ナデ、胴部下半ケズリ	密	やや軟	内外面とも灰黄褐色	外面赤色塗彩
672	200	3区 2D-6b	3443 土坑 埋土	土師器 高坏	※ 16.6 △ 3.3	外面：口縁部～受部上半ナデ、受部下半ケズリ 内面：ナデ	密	やや軟	外 / にぶい褐色 内 / 灰黄褐色	口縁部外面赤色塗彩
673	200	3区 2D-6d	3493 土坑 埋土	須恵器 壺肩部	- △ 2.2	外面：灰付着のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	
674	200	3区 2D-6d	3493 土坑 埋土	須恵器 高坏	- △ 3.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	

表 31 土器観察表 (18)

掲載 番号	挿入 番号	調査区	遺構 層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
675	201	4区 2D-6b	4316 土坑 埋土	土師器 甕	— △ 3.1	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ	密	良好	外 / 灰黄色 内 / 暗灰黄色	
676	201	4区 2D-6b	4316 土坑 埋土	土師器 甕	— △ 3.9	外面：ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部ヘラケズリ	密	良好	外 / にぶい黄色 内 / 暗灰黄色	外面煤付着
677	201	4区 2C-6i	4317 井戸 埋土下層	土師器 甕	13.5 22.5	外面：口縁部ココナデ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ココナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、底部 ヘラケズリ・指頭圧痕	密	良好	外 / 灰白色～灰オリーブ色 内 / 灰白色	口縁部・体部に外側からの打ち欠き
678	201	4区 2C-6i	4317 井戸 埋土	土師器 高杯	— △ 8.5	外面：ハケメ後ナデ 内面：シボリ・ヘラケズリ、端部ナデ	密	やや良	内外面とも灰白色～黒色	煤痕あり
679	201	4区 2C-6i	4317 井戸 埋土	土師器 甕	※ 25.4 △ 6.7	外面：ナデ 内面：口縁部ココナデ、体部ヘラケズリ	密	やや軟	外 / 灰黄色 内 / 灰黄色～暗灰黄色	
680	202	3区 2D-6b	3013 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 14.0 △ 0.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色～灰色 内 / 灰白色～浅黄色	
681	202	3区 2D-8b	3023 ビット 埋土	須恵器 (長頸) 壺?	※ 6.6 △ 2.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	
682	202	3区 2D-6c	3101 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 11.7 △ 1.6	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ後一部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
683	202	3区 2D-6c	3102 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 10.0 △ 0.9	外面：灰が付着しており調整不明(回転ナデか) 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 褐灰色～灰色 内 / 灰色	つまみ欠損
684	202	3区 2D-6c	3102 ビット 埋土	須恵器 壺?	— △ 4.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
685	202	3区 2D-6c	3103 ビット 掘方	須恵器 短頸壺	※ 9.5 △ 10.7	外面：回転ナデ、体部に1条の沈線 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
686	202	3区 2D-6c	3117 ビット 埋土	土師器 甕	※ 13.4 △ 5.2	外面：ココナデ 内面：ココナデ	密	良好	外 / 浅黄色 内 / 灰黄色～黒色	
687	202	3区 2D-6c	3118 ビット 埋土	須恵器 高台付杯	※ 13.6 △ 3.8	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ?、高台部ナデ、体部回転ナ デ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 黄灰色 内 / 灰白色	
688	202	3区 2D-6c	3119 ビット 柱痕	須恵器 蓋	※ 17.8 △ 2.4	外面：天井部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 暗灰色 内 / 灰白色～灰色	
689	202	3区 2D-6c	3119 ビット 埋土第2層	須恵器 蓋	※ 15.8 △ 1.6	外面：天井部回転系切り、天井部周縁ナデ、体部回転ナデ 内面：体部上半ナデ、体部下回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～暗灰色	
690	202	3区 2D-6c	3119 ビット 埋土	須恵器 皿	※ 14.5 △ 2.2	外面：底部回転系切り後一部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
691	202	3区 2D-6c	3120 ビット 埋土	須恵器 高台付杯	— △ 2.8	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部中央ナデ、底部～体部回転ナデ	密	やや軟	外 / 灰白色～灰色 内 / 灰白色	
692	202	3区 2D-6c	3122 ビット 柱痕	焼塩土器	※ 16.9 △ 5.6	外面：指頭圧痕 内面：布目、指頭圧痕	密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	外面煤付着
693	202	3区 2D-6c	3122 ビット 柱痕	焼塩土器	※ 15.3 △ 5.2	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケメ	密	良好	内外面とも橙色～黒褐色	外面二次的な被熱による剥落あり
694	202	3区 2D-6e	3133 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 14.2 △ 1.7	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：体部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	外 / 灰色～暗灰色 内 / 灰色～灰白色	
695	202	3区 2D-5d	3167 ビット 埋土	須恵器 杯	※ 13.2 △ 2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも暗灰色	
696	202	3区 2D-5d	3167 ビット 埋土	焼塩土器	※ 13.0 △ 5.0	外面：指頭圧痕(調整不明瞭) 内面：布目	密	良好	内外面とも橙色	外面二次的な被熱により荒れる
697	202	3区 2D-6d	3169 ビット 埋土	須恵器 杯	— △ 3.0	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色～灰黄褐色 内 / 灰黄褐色～黄褐色	
698	202	3区 2D-6d	3170 ビット 埋土	須恵器 蓋	— △ 1.4	外面：天井部回転系切り後弱いナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ後一部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
699	202	3区 2D-6d	3182 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 14.2 △ 2.2	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	内面墨付着
700	202	3区 2D-6c	3182 ビット 埋土第1層	焼塩土器	— △ 4.4	外面：ナデ、指頭圧痕(調整不明瞭) 内面：ナデ	密	やや軟	外 / 橙色 内 / にぶい黄褐色	外面に黒斑
701	202	3区 2D-6d	3197 ビット 埋土	土師器 高台付杯	— △ 2.3	外面：調整不明(摩滅顕著) 内面：調整不明(摩滅顕著)	密	軟	内外面とも浅黄褐色	
702	202	3区 2D-6d	3197 ビット 埋土	須恵器 杯	— △ 1.6	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部～体部回転ナデ、底部中央付近ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
703	202	3区 2D-6d	3205 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 13.8 △ 1.9	外面：口縁部回転ナデ、体部自然袖付着のため不明 内面：ナデ、回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
704	202	3区 2D-6d	3232 ビット 埋土	土師器 甕	— △ 19.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ、下端ナデ? 内面：口縁部ナデ、体部上半ナデ、下半ケズリ、一部に指頭 圧痕	密	良好	外 / 灰黄褐色 内 / にぶい黄褐色	外面煤付着
705	203	3区 2D-6c	3376 ビット 埋土	須恵器 長頸壺	— △ 1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	やや密	良好	内外面とも灰色	
706	203	3区 2D-6c	3428 ビット 埋土	須恵器 杯	※ 11.8 △ 2.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 黒色	口縁部内面墨?付着
707	203	3区 2D-6c	3427 ビット 埋土	須恵器 皿	※ 15.8 △ 2.7	外面：体部回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転系切り 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	やや密	良好	外 / 黒色～灰黄色 内 / 浅黄色～灰白色	
708	203	3区 2D-7b	3471 ビット 埋土	須恵器 皿	※ 11.8 △ 1.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色～灰黄褐色 内 / 灰黄色	
709	203	3区 2D-6b	3472 ビット 埋土	須恵器 甕?	— △ 6.7	外面：タタキ 内面：当て具痕(放射状)	やや密	良好	内外面とも灰色	710と同一個体か
710	203	3区 2D-6b	3472 ビット 埋土	須恵器 甕?	— △ 5.4	外面：タタキ 内面：当て具痕(放射状)	やや密	良好	内外面とも灰色	709と同一個体か
711	203	3区 2D-6b	3477 ビット 埋土	土師器 甕	※ 23.0 △ 4.8	外面：ナデ、頸部指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	内外面ともににぶい橙色	外面煤付着
712	203	3区 2D-7h	3480 ビット 埋土	須恵器 杯	※ 13.4 △ 4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 暗灰色 内 / 灰色	
713	203	3区 2D-6c	3489 ビット 埋土	須恵器 蓋	— △ 2.0	外面：つまみ部ナデ、天井部回転系切り後ナデ、体部回転ナ デ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外 / 灰白色 内 / 灰白色～オリーブ灰色	
714	203	3区 2D-6c	3505 ビット 埋土	須恵器 蓋	※ 13.0 △ 2.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
715	204	4区 2D-6a	4204 ビット 埋土	須恵器 高台付杯	— △ 2.1	外面：体部回転ナデ・回転ヘラケズリ、高台回転ナデ、底部 回転ヘラケズリ 内面：体部回転ヘラケズリ、底部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
716	204	4区 2D-7a	4277 ビット 埋土	土師器 皿	※ 17.5 △ 3.8	外面：口縁部ココナデ・ハラミガキ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：口縁部ココナデ、体部ハラミガキ後ナデ	密	やや良	外 / にぶい黄褐色 内 / にぶい黄褐色～明褐色	外面に一部赤色顔料付着

表 32 土器観察表 (19)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
717	204	4区 2D-7a	4277 ビット 埋土	須恵器 坏	※ 14.0 △ 3.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	外 / 灰色 内 / 灰白色	
718	204	4区 2D-7a	4287 ビット 埋土	土師器 甕	- △ 9.9	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ・指頭圧痕	密	良好	外 / 灰黄褐色～黒色 内 / にぶい黄褐色～黒褐色	外面煤付着
719	205	3区 2D-6c	第4層	須恵器 坏	※ 12.8 3.7	外面：回転ナデ、体部下半ナデ、底部静止糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外 / 青灰色 内 / 灰色	
720	205	3区 2D-7c	第4層	須恵器 坏	※ 12.8 3.3	外面：回転ナデ、体部下半ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
721	205	3区 2D-7c	第4層	須恵器 高台付坏	※ 14.8 5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
722	205	3区 2D-6c	第4層	須恵器 皿	※ 16.0 2.2	外面：回転ナデ、体部下半ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外 / 褐色～黒色 内 / 灰色	
723	205	3区 2D-6c	第4層	須恵器 蓋	※ 10.8 △ 1.4	外面：天井部回転糸切り？、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰色～褐色	
724	205	3区 2D-6b	第4層	須恵器 甕	※ 16.2 △ 7.8	外面：口縁～頸部ナデ、体部タタキ 内面：口縁～頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	外 / 灰色 内 / 灰白色	
725	205	3区 2D-6c	第4層	須恵器 甕	- △ 9.7	外面：タタキ 内面：当て具痕	やや密	良好	内外面とも灰色	
726	205	3区 2D-6b	第4層	須恵器 甕	- △ 6.3	外面：タタキ 内面：当て具痕 (格子目)・ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
727	205	3区 2D-6c	第4層	須恵器 甕	- △ 5.6	外面：タタキ 内面：当て具痕 (放射状)	やや密	良好	内外面とも灰色	
728	205	3区 2D-6b	第4層	須恵器 甕	- △ 7.7	外面：タタキ 内面：当て具痕 (格子目)	やや密	良好	内外面とも暗灰色	
729	205	3区 2D-6c	第4層	須恵器 甕	- △ 10.0	外面：タタキ 内面：当て具痕 (格子目、一部放射状)	やや密	良好	内外面とも灰色	
730	205	3区 2D-6b	第4層	土師器 壺	※ 21.6 △ 6.5	外面：ナデ 内面：ナデ	やや密	良好	外 / にぶい黄褐色 内 / 灰黄褐色	
731	205	3区 2D-6b	第4層	土師器 高坏	- △ 7.6	外面：受部～脚部ミガキ、脚裾部ナデ 内面：脚部絞り目・ケズリ、脚裾部ナデ	やや粗	やや軟	外 / 浅黄褐色 内 / 灰白色	
732	205	3区 2D-7b	第4層	土師器 坏	※ 15.0 3.5	外面：体部ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：ナデ、見込部風化により調整不明	密	良好	内外面とも にぶい黄褐色	内外面とも赤色塗彩
733	205	3区 2D-7c	第4層	土師器 坏	- △ 1.9	外面：底部回転糸切り、体部ナデ？ 内面：底部中央調整不明、底部～体部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰黄色	
734	205	3区 2D-7c	第4層	土師器 高台付坏	- △ 3.6	外面：ナデ 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面とも灰白色	
735	205	3区 2D-6c	第4層	土師器 高台付坏	- △ 4.2	外面：ナデ 内面：ナデ	粗	やや軟	外 / 灰白色～浅黄褐色 内 / にぶい橙色	
736	205	3区 2D-7c	第4層	土師器 皿	※ 16.0 2.4	外面：ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも黒褐色～黄灰色	
737	205	3区 2D-7c	第4層	土師器 皿	※ 11.0 2.1	外面：ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	やや密	やや軟	外 / 浅黄色 内 / 浅黄色～暗灰黄色	
738	205	3区 2D-7c	第4層	緑釉陶器 皿	- △ 1.7	外面：ナデ、施釉 内面：ナデ、施釉	密	良好	内外面ともオリーブ灰色～ 灰白色	内外面とも風化磨滅顕著
739	205	3区 2D-7c	第4層	焼塩土器	- △ 3.3	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：未調整	粗	良好	外 / 褐色 内 / にぶい褐色	
740	206	3区 2D-5d	第5層	土師器 甕	※ 18.4 △ 4.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / 黒色～橙色 内 / 橙色	
741	206	3区 2D-6c	第5層	土師器 甕	※ 14.6 △ 5.7	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ハケ後ナデ	やや粗	やや軟	外 / 褐色～黒色 内 / 褐色	
742	207	4区 2D-6a	第4層	須恵器 蓋	※ 12.5 △ 1.7	外面：自然袖付着のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面自然袖付着
743	207	4区 2D-6a	第4層	須恵器 坏	※ 11.5 △ 3.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
744	207	4区 2D-6a	第4層	須恵器 坏	※ 13.9 △ 4.4	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
745	207	4区 2D-7a	第4層	須恵器 高台付坏	※ 19.0 △ 5.0	外面：口縁部～高台回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
746	207	4区 2D-7b	第4層	須恵器 高台付坏	- △ 3.3	外面：体部～高台回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
747	207	4区 2D-7a	第4層	須恵器 高台付坏	※ 13.2 5.0	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
748	207	4区 2C-7j	第4層	須恵器 高台付坏	- △ 3.1	外面：体部～高台回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
749	207	4区 2D-7a	第4層	須恵器 高坏	※ 15.0 △ 4.5	外面：回転ナデ・透かしの切り込み 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	透かし有り
750	207	4区 2D-7a	第4層	須恵器 底部	- △ 4.5	外面：体部回転ナデ、底部ナデ・植物の圧痕 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
751	207	4区 2D-6b	第4層	土師器 小型壺	- △ 6.4	外面：肩部ナデ、体部上半ハケメ後ナデ、体部下半ハケメ 内面：頸部ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外 / 灰白色～黒色 内 / 灰白色	外面煤付着
752	207	4区 2D-6a	第4層	土師器 甕	※ 18.1 △ 6.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも にぶい黄褐色	
753	207	4区 2D-6a	第4層	土師器 甕	※ 16.0 △ 6.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外 / 灰褐色～橙色 内 / にぶい黄褐色～灰黄褐色	
754	207	4区 2D-7a	第4層	土師器 甕	※ 21.0 △ 7.8	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外 / 黒褐色 内 / にぶい黄褐色～黒褐色	
755	207	4区 2D-7a	第4層	土師器 甕	※ 41.2 △ 7.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外 / にぶい黄褐色～黒色 内 / にぶい黄褐色	外面煤付着
756	207	4区 2D-6a	第4層	土師器 甕	※ 15.6 △ 6.7	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面とも 灰黄褐色～黒色	内外面煤付着
757	207	4区 2D-7a	第4層	土師器 甕	※ 25.8 △ 5.3	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面とも 灰白色～灰黄褐色	外面煤付着
758	207	4区 2C-6j	第4層	土師器 甕	※ 24.2 △ 8.2	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	密	良好	外 / 暗灰黄色～黒色 内 / 灰黄色～黒色	内外面煤付着
759	207	4区 2D-6b	第4層	土師器 高坏	※ 14.8 △ 7.7	外面：受部ハケメ後ナデ・ナデ、脚部ヘラミガキ 内面：受部上半ハケメ後ナデ、受部下半ナデ	密	良好	外 / 浅黄褐色～褐色 内 / にぶい黄褐色	
760	207	4区 2D-6b	第4層	土師器 高坏	- △ 8.0	外面：ナデ 内面：シボリ・ヘラケズリ・ナデ	密	良好	外 / にぶい黄褐色 内 / 灰黄褐色	

表33 土器観察表 (20)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
761	207	4区 2C-6j	第4-3層	土師器 高坏	— △4.0	外面：ヘラミガキ、端部ナデ 内面：ヘラケズリ・ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色～にぶい 黄褐色 内/灰黄褐色	
762	207	4区 2D-6b	第4-3層	甗か	— △8.6	外面：ハケメ後ナデ・指頭圧痕 内面：ハケメ	密	良好	外/黒色 内/灰黄褐色	把手
763	208	4区 2C-6i	第4-4層	須恵器 蓋	※12.8 △1.9	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ナデ・回転 ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも淡灰色	
764	208	4区 2C-6i	第4-4層	須恵器 高台付坏	※14.1 △4.8	外面：口縁部～高台回転ナデ、底部ヘラ切り後押圧 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
765	208	4区 2C-6i	第4-4層	須恵器 高台付坏	— △2.9	外面：体部回転ナデ・回転ヘラケズリ後ナデ、高台回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
766	208	4区 2C-6i	第4-4層	須恵器 甗	※23.0 △8.0	外面：口縁部ココナデ、体部タタキ 内面：口縁部ココナデ、頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰色～褐灰色 内/灰色	
767	208	4区 2C-6i	第4-4層	須恵器 甗	— △10.9	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	外/オリープ灰色 内/黄灰色	外面自然袖付着
768	208	4区 2C-6i	第4-4層	須恵器 甗	— △10.3	外面：肩部回転ナデ、体部タタキ 内面：肩部ココナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰色	
769	208	4区 2C-6i	第4-4層	弥生土器 甗	— △4.2	外面：ナデ・指頭圧痕、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/暗黄褐色 内/黒褐色～暗黄褐色	
770	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※12.3 △3.9	外面：ココナデ 内面：ココナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
771	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※17.8 △4.9	外面：口縁部ココナデ・指頭圧痕、肩部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、頸部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	外面煤付着
772	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※17.0 △4.6	外面：ココナデ 内面：口縁部ココナデ、口縁部ハケメ後ナデ、頸部ヘラケズリ 後ナデ	密	良好	外/にぶい橙色～黒色 内/にぶい橙色	外面煤付着
773	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	— △9.8	外面：ハケメ 内面：肩部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外/黒褐色～にぶい黄褐色 内/灰黄褐色～にぶい黄褐 色	外面煤付着
774	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※16.6 △6.6	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ココナデ、頸部以下ヘラケズリ後ナデ	密	良好	内外面とも褐灰色	内外面煤付着
775	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※21.6 △7.2	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・ハケメ 内面：口縁部ココナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい橙色 内/灰褐色～にぶい橙色	外面煤付着
776	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※26.5 △6.6	外面：ココナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部ヘラケズリ	密	良好	外/灰褐色～にぶい褐色 内/灰白色～灰褐色	外面煤付着
777	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※27.4 △7.1	外面：口縁部ココナデ、頸部指頭圧痕、体部ナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外/褐灰色～黒色 内/灰色～オリープ灰色	外面煤付着
778	208	4区 2C-6i	第4-4層	土師器 甗	※29.8 △8.0	外面：口縁部ココナデ、体部風化のため調整不明 内面：口縁部ココナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面ともにぶい褐色～黒 色	
779	208	4区 2C-6j	第4-4層	土師器 甗	※28.6 △8.4	外面：口縁部ココナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/灰褐色	
780	208	4区 2C-6j	第4-4層	土師器 甗	— △4.3	外面：ハケメ後ナデ 内面：ナデ	やや密	良好	外/にぶい黄色 内/黒褐色	内面黒漆付着
781	209	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 坏蓋	※12.8 △3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	内外面とも灰白色	
782	209	4区 2D-6b	第4-2層	須恵器 蓋	— △1.6	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回転 ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	つまみ内漆記号「×」
783	209	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 蓋	— △2.1	外面：つまみ部回転ナデ・回転ヘラケズリ、天井部回転ヘラ ケズリ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
784	209	4区 2D-6b	第4-2層	須恵器 高台付坏	— △2.4	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/青灰色 内/灰色	底部ヘラ記号
785	209	4区 2D-6b	第4-2層下面	須恵器 高台付坏	— △2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後回転ナデ・静止 糸切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部ヘラ記号「○」
786	209	4区 2D-7a	第4-2層下面	須恵器 高台付坏	16.1 △4.3	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも青灰色	内面に焼成時の灰付着 4221 溝出土破片と接合
787	209	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 高台付坏	※14.2 3.1	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも褐灰色	
788	209	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 高坏	※14.4 3.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色～灰色	内外面炭素吸着
789	209	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 高坏	※14.0 △5.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
790	209	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 甗	※17.2 △3.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
791	209	4区 2D-6a	第4-2層	土師器 皿	※19.8 3.3	外面：口縁部ヘラミガキ、底部ナデ 内面：ヘラミガキ後暗文	密	良好	内外面とも浅黄褐色～淡橙 色	内外面赤色塗彩
792	209	4区 2D-6a	第4-2層	土師器 皿	— △1.7	外面：ナデ 内面：ナデ、見込に螺旋状暗文の痕跡	密	良好	内外面ともにぶい橙色	内外面赤色塗彩
793	209	4区 2D-6a	第4-2層	土師器 皿	— △1.8	外面：ヘラミガキ、底部ケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい褐色 内/にぶい褐色	内外面赤色塗彩
794	209	4区 2D-7a	第4-2層	土師器 甗	※34.2 △9.5	外面：口縁部1条の沈線文、頸部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、頸部以下ヘラケズリ後ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色～ 黒褐色	内外面煤付着
795	209	4区 2D-7a	第4-2層	土師器 甗	※27.4 △5.4	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外/灰白色～灰黄褐色 内/にぶい黄褐色	
796	210	4区 2C-6j	第4-1層	須恵器 蓋	— △3.1	外面：つまみ内部静止糸切り、つまみ部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面ヘラ記号
797	210	4区 2C-7j	第4-1層	須恵器 蓋	— △2.0	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
798	210	4区 2C-6i	第4-1層	須恵器 蓋	— △0.8	外面：回転ヘラケズリ後ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/青灰色	外面漆付記号「井」か
799	210	4区 2C-6i	第4-1層	須恵器 蓋	— △0.9	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面漆記号「×」
800	210	4区 2C-6j	第4-1層	須恵器 蓋	※15.0 △2.1	外面：天井部ナデ、体部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、回転ナデ	密	良好	外/灰白色～淡灰色 内/淡灰色	
801	210	4区 2C-7j	第4-1層	須恵器 坏	※11.5 5.1	外面：口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、底部回転ヘ ラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	

表 34 土器観察表 (21)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
802	210	4区 2D-7a	第4層	須恵器 高台付坏	※17.9 4.5	外面：口縁部～高台回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
803	210	4区 2C-7j	第4層	須恵器 高台付坏	- △3.1	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	体部外面にスタンプ文
804	210	4区 2D-6b	第4層	須恵器 高台付坏	※15.0 5.1	外面：口縁部回転ナデ、体部上半回転ヘラケズリ、体部下半～高台回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色	底部ヘラ記号「×」
805	210	4区 2C-6j	第4層	須恵器 高台付坏	- △2.2	外面：体部～高台回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
806	210	4区 2D-6a	第4層	須恵器 高台付坏	※13.9 5.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色	
807	210	4区 2C-6j	第4層	須恵器 高台付坏	- △2.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
808	210	4区 2D-6a	第4層	須恵器 坏	- △2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも淡灰色	体部外面ヘラ記号「×」
809	210	4区 2D-6b	第4層	須恵器 皿	※10.9 △1.7	外面：回転ナデ 内面：底部回転糸切り、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
810	210	4区 2C-6j	第4層	須恵器 鉢	※16.8 △3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
811	210	4区 2C-6j	第4層	須恵器 高坏	- △6.0	外面：受部上半回転ナデ、受部下半回転ヘラケズリ、3条の沈線文、脚部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄色	
812	210	4区 2D-7a	第4層	須恵器 壺	- △4.8	外面：肩部回転ナデ、体部ヘラ状工具によるナデ、2条の沈線文の間に脚状工具による刺突文 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	
813	210	4区 2D-7a	第4層	須恵器 壺	※11.3 △10.3	外面：口縁部回転ナデ、体部タタキ 内面：口縁部回転ナデ、頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	内外面とも淡灰色	
814	210	4区 2D-6a	第4層	土師器 坏	※13.2 4.3	外面：ヨコナデ、底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面ともいぶい褐色～黒褐色	内外面黒色塗彩
815	210	4区 2D-6b	第4層	土師器 坏	※17.1 △3.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色～橙色	内外面赤色塗彩
816	210	4区 2D-6b	第4層	土師器 坏	- △1.9	外面：ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～黄灰色	
817	210	4区 2C-6j	第4層	土師器 甕	※14.8 △6.8	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面ともいぶい黄褐色～褐色	
818	210	4区 2D-6a	第4層	土師器 甕	※28.5 △8.0	外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密	良好	外/灰黄褐色～濃灰色 内/黄灰色	
819	210	4区 2C-6j	第4層	手づくね 土器	- △3.8	外面：ナデ 内面：ナデ・指頭圧痕	密	良好	内外面とも灰黄色	
820	210	4区 2C-6j	第4層	手づくね 土器	- △1.9	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
821	210	4区 2D-7a	第4層	軒丸瓦	最大長：11.6 最大幅：16.8 最大厚：3.3	瓦当裏面ナデ	密	軟	灰白色	単弁十二弁蓮華文
822	211	4区 2C-7i	第4層	弥生土器 甕	※15.8 △4.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～灰黄褐色	
823	211	4区 2C-7i	第4層	須恵器 坏蓋	※13.0 △4.3	外面：天井部ナデ、体部上部回転ヘラケズリ、体部下部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
824	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	10.8 2.6	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
825	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	12.7 3.0	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
826	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	※16.8 △3.0	外面：つまみ部回転ナデ、天井部ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	ボタン状つまみ
827	211	4区 2C-7i	第4層	須恵器 蓋	- △2.5	外面：不明 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～暗オリーブ色 内/灰色	天井部内面ヘラ記号
828	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	※15.0 △2.9	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/褐灰色～灰色 内/赤灰色～灰褐色	体部外面ヘラ記号
829	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高台付坏	- △3.4	外面：底部回転糸切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/青灰色 内/灰色	底部スタンプ文
830	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高台付坏	13.4 5.0	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
831	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高台付坏	※14.2 5.0	外面：底部糸切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
832	211	4区 2C-7i	第4層	須恵器 高台付坏	- △2.0	外面：回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部ヘラ記号
833	211	4区 2D-6a	第4層以下	須恵器 坏	- △1.5	外面：底部ヘラ切り後ケズリ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色～灰色	底部外面ヘラ記号
834	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高台付坏	- △6.1	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～灰色	
835	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高坏	※15.3 △8.2	外面：受部回転ナデ、脚部回転ナデ 内面：受部体部回転ナデ、底部ナデ、脚部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
836	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 高坏	※14.0 △3.4	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	内外面とも灰色	
837	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 甕	※17.0 △7.3	外面：口縁～頸部ナデ、体部タタキ後カキメ 内面：口縁～頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	外/灰オリーブ色 内/灰色	外面、内面口縁部自然軸付着
838	211	4区 2C-6i	第4層	須恵器 瓶	- △6.9	外面：把手ナデ、体部ハケメ後タタキ 内面：当て具痕	密	やや軟	内外面とも灰白色	大井聖坂 S101 に類似 (奈良前期?)
839	212	4区 2D-8a	第4層	土師器 甕	※14.1 △24.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、下部指頭圧痕	密	良好	外/灰黄褐色～黒色 内/いぶい黄褐色～褐灰色	外面煤付着
840	212	4区 2C-7i	第4層	土師器 甕	※23.0 △7.2	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外/浅黄褐色～いぶい黄褐色 内/いぶい黄褐色	
841	212	4区 2C-6i	第4層	土師器 甕	※16.4 △15.5	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部上半ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕・ハケメ、下半ヘラケズリ	密	良好	外/褐灰色～黒色 内/いぶい黄褐色～灰褐色	

表 35 土器観察表 (22)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
842	212	4区 2C-6i	第4層	土師器 壺	※15.0 △8.9	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密	やや良	内外面とも黄灰色	
843	212	4区 2C-6i	第4層	土師器 甕	※32.0 △12.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	やや密	良好	外/にぶい橙色～黄灰褐色 内/にぶい黄色	
844	212	4区 2C-6i	第4層	土師器 胴部	— △3.7	外面：ナデ 内面：ケズリ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	外面ヘラ記号
845	212	4区 2D-8a	第4層	土師器 小型丸底壺	— △6.8	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ・指頭圧痕	やや密	やや良	外/にぶい黄褐色～灰黄褐色 内/にぶい黄褐色	
846	212	4区 2C-7i	第4層	土師器 鉢か	△6.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも橙色～灰赤色	体部上部に穿孔、内外面赤色塗彩
847	212	4区 2C-6i	第4層	土師器 環	※15.9 △4.7	外面：体部ナデ後ミガキ、底部ケズリ後ナデ 内面：ナデ後ミガキ	密	良好	外/にぶい褐色～浅黄褐色 内/にぶい褐色～黄褐色	内外面赤色塗彩、外面に黒斑有
848	212	4区 2C-7i	第4層	土師器 皿	※16.4 △2.1	外面：体部ミガキ、底部ナデ 内面：体部ミガキ、底部ナデ	密	やや良	外/灰白色～橙色 内/灰白色～黒褐色	内外面赤色塗彩
849	212	4区 2C-7i	第4層	土師器 環	※9.3 △2.9	外面：体部ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	やや良	内外面とも灰白色～黒色	
850	212	4区 2D-8a	第4層	土師器 器台	※19.4 △4.9	外面：ハケメ後ナデ 内面：ハケメ・ミガキ後ナデ	密	良好	内外面とも褐灰色	鼓形器台(X形)、851と同一個体
851	212	4区 2D-8a	第4層	土師器 器台	— △6.5	外面：頸部ナデ、脚部ヘラミガキ、端部ナデ 内面：頸部～脚部上半ナデ、脚部下半ハケメ	密	良好	内外面とも褐灰色	鼓形器台(X形)、850と同一個体
852	212	4区 2C-6i	第4層	土師器 甕	※17.7 △9.6	外面：体部風化により不明瞭、把手ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面とも灰黄褐色	
853	212	4区 2C-6i	第4層	焼塩土器	※12.0 △4.7	外面：ナデ 内面：ナデ・指頭圧痕	密	やや軟	外/浅黄褐色 内/にぶい橙色	
854	212	4区 2D-6a	第4層	丸瓦	最大長：△ 12.5 端面厚：1.5	外面：風化のため調整不明瞭 内面：風化のため調整不明瞭	密	やや軟	内外面とも灰白色	
855	212	4区 2D-6b	第4層	丸瓦	最大長：△ 11.1 端面厚：1.6	外面：ケズリ後ナデ 内面：布目 端面：ナデ、工具痕	密	良好	内外面とも灰白色	
856	213	3区 2D-7c	第3層	須恵器 環	※13.0 5.2	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	
857	213	3区 2D-7c	第3層	須恵器 壺?	— △10.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも黒色	
858	213	3区 2D-7c	第3層	須恵器 平瓶	※4.1 △4.7	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	小型、水滴か
859	213	3区 2D-7c	第3層	須恵器 甕	— △4.4	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	内外面とも灰白色	
860	213	3区 2D-7c	第3層	須恵器 甕	— △9.0	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	外/灰白色 内/オリーブ黒色	
861	213	3区 2D-7b	第3層	須恵器 甕	— △11.0	外面：タタキ 内面：当て具痕	密	良好	外/オリーブ黒色 内/灰色	
862	213	3区 2D-7b	第3層	土師器 環	※13.0 4.6	外面：ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	やや軟	外/黒色～灰黄色 内/にぶい黄褐色～黒色	
863	213	3区 2D-7c	第3層	土師器 高台付皿	— △2.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	内外面とも赤色塗彩
864	213	3区 2D-7b	第3層相当層	土師器 甕	※23.8 △13.7	外面：口縁部ハケメ後ナデ、体部風化により調整不明(一部ハケメ) 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ後ナデ	やや粗	やや軟	内外面灰黄褐色	外面煤付着
865	213	3区 2D-7b	第3層相当層	土師器 甕	※33.6 △10.5	外面：口縁～頸部ナデ、体部ハケメ、指頭圧痕 内面：口縁～頸部ハケメ後ナデ、頸部以下ケズリ後ナデ	密	良好	内外面ともにぶい橙色	外面煤付着
866	213	3区 2D-7c	第3層	土師器 甕	※23.8 △23.4	外面：口縁～頸部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ、体部ケズリ	密	良好	外/灰褐色 内/灰黄褐色	外面煤付着
867	213	3区 2D-7c	第3層	焼塩土器	— △4.0	外面：指頭圧痕、ナデ 内面：型当て成形(未調整)	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/灰黄褐色	
868	213	3区 2D-7c	第3層	焼塩土器	— △3.3	外面：指頭圧痕 内面：指頭圧痕・ナデ	密	良好	外/にぶい橙色 内/橙色	
869	213	3区 2D-7c	第3層	焼塩土器	— △5.1	外面：指頭圧痕・ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/暗褐色 内/にぶい黄褐色	
870	213	3区 2D-7c	第3層	焼塩土器	— △3.2	外面：指頭圧痕、ナデ 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面とも灰白色	
871	214	4区 2C-7g	第3層	弥生土器 甕	— △3.4	外面：口縁部風化のため調整不明、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラケズリか	やや粗	良好	外/黄褐色 内/暗灰黄色	
872	214	4区 2C-6i	第3層	須恵器 蓋	14.2 4.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～黄褐色 内/灰色	外面自然釉付着
873	214	4区 2D-6a	第3層	須恵器 蓋	※14.0 △2.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/褐灰色～灰黄褐色 内/灰色	体部外面にスタンプ文
874	214	4区 2C-7i	第3層	須恵器 蓋	— △1.1	外面：つまみ部ナデ、天井部～体部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰褐色	体部外面ヘラ記号
875	214	4区 2C-6j	第3層	須恵器 高台付環	— △2.4	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	底部に漆記号
876	214	4区 2C-6j	第3層	須恵器 高台付環	— △2.3	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/明オリーブ灰色～灰色 内/灰色	体部外面にスタンプ文
877	214	4区 2C-6j	第3層	須恵器 高台付環	— △2.8	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰白色	体部外面ヘラ記号
878	214	4区 2D-6a	第3層下面	須恵器 高台付環	— △3.5	外面：回転ナデ、底部ナデ(板目痕) 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	見込部ヘラ記号
879	214	4区 2D-8a	第3層	須恵器 高台付環	— △2.4	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り度回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	やや良	内外面とも灰褐色	底部漆付着
880	214	4区 2C-7i	第3層下面	須恵器 高台付環	— △1.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰褐色	底部ヘラ記号
881	214	4区 2D-8a	第3層	須恵器 高台付環	— △2.8	外面：体部上半回転ナデ、下半ナデ、底部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰黄色 内/灰白色～灰黄色	外面下部に爪痕
882	214	4区 2C-8j	第3層	須恵器 環	— △1.5	外面：ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/暗灰黄色 内/灰黄色～灰白色	底部外面ヘラ記号
883	214	4区 2C-7j	第3層	須恵器 環	— △2.6	外面：体部上半回転ナデ、下半ヘラケズリ後ナデ、底部糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰褐色	底部外面ヘラ記号「×」

表 36 土器観察表 (23)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
884	214	4区 2C-8j	第3層	須恵器 坏	※12.7 3.1	外面：体部ヨコナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：体部ヨコナデ、底部ナデ	密	軟	内外面とも灰白色～暗灰黄色	外面口縁部煤付着
885	214	4区 2C-8j	第3層	須恵器 坏	※12.7 3.6	外面：体部ヨコナデ、底部回転系切り 内面：体部ヨコナデ、底部ナデ	密	やや軟	外/灰黄色～黒褐色 内/黄灰色～暗灰黄色	
886	214	4区 2C-6j	第3層	須恵器 坏	- △1.8	外面：体部ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	軟	外/灰白色 内/灰白色～黒色	内面煤付着、系切り痕不明瞭
887	214	4区 2C-6j	第3層	須恵器 蓋	※11.5 △4.5	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰オリーブ色 内/灰白色～灰黄	
888	214	4区 2C-7i	第3層	須恵器 壺	- △3.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰白色	外面自然釉付着
889	214	4区 2C-6j	第3層	須恵器 甕	※13.8 △5.1	外面：ヨコナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黒色 内/灰色	外面煤付着
890	215	4区 2C-8j	第3層	土師器 坏	- △2.0	外面：体部ヨコナデ、底部系切り後ナデ 内面：体部ヨコナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰オリーブ色～オリーブ黒色 内/オリーブ黄色～オリーブ黒色	
891	215	4区 2D-6a	第3層	土師器 坏	- △1.9	外面：体部ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい黄橙色～灰黄褐色	
892	215	4区 2D-7a	第3層	土師器 坏	- △1.4	外面：体部ナデ、底部系切り 内面：ナデ	密	良好	外/いぶい黄褐色～黒色 内/黄褐色	
893	215	4区 2D-7a	第3層	土師器 坏	- △3.6	外面：体部ナデ、底部系切り 内面：ナデ	密		外/褐灰色 内/いぶい黄褐色	
894	215	4区 2C-7h	第3層	土師器 坏	※14.2 4.9	外面：体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	密	軟	外/褐色 内/暗褐色	内外面赤色塗彩
895	215	4区 2D-6a	第3層	土師器 高台付皿	- △3.5	外面：ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面とも橙色～灰白色	内外面赤色塗彩
896	215	4区 2C-7h	第3層	土師器 甕	※26.0 △9.8	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ、体部ヘラケズリ後一部ナデ	やや粗	やや軟	内外面とも灰黄色	
897	215	4区 2C-7i	第3層	手づくね 土器	※6.8 3.9	手づくね成形	密	良好	外/灰黄色～黄灰色 内/灰黄色	
898	215	4区 2C-6j	第3層以下	土師器 瓶	- △13.8	外面：ハケメ後ナデ 内面：体部ケズリ後ナデ、体部下部ヘラケズリ、下端部ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～黒褐色 内/いぶい黄褐色～灰黄褐色	外面上半煤付着、体部下部に穿孔
899	215	4区 2D-6a	第3層下面	土師器 高台付坏	- △2.2	外面：ナデ 内面：ナデ・ヘラミガキ	やや粗	やや軟	外/浅黄橙色 内/黒色	黒色土器(内黒)
900	215	4区 2C-8i	第3層	白磁 碗	- △2.7	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	施釉部/灰黄色 露胎部/灰白色	
901	215	4区 2C-8i	第3層	丸瓦	端面長：△5.6 端面厚：1.5	外面：ナデ 内面：ハケか 端面：ナデ	やや密	良好	外/灰黄色 内/灰色	
902	215	4区 2C-8j	第3層	焼塩土器	※14.0 △4.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/明黄褐色 内/橙色	外面二次的な被熱により荒れている
903	215	4区 2C-7j	第3層	焼塩土器	- △4.0	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ・指頭圧痕	密	良好	外/褐灰色～黄褐色 内/灰白色～褐灰色	
904	215	4区 2C-7i	第3層下面	焼塩土器	※17.3 △3.2	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：布目・指頭圧痕	密	良好	内外面とも橙色	
905	215	4区 2D-8a	第3層	焼塩土器	- △3.9	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：布目	密	良好	内外面とも橙色	
906	215	4区 2C-7j	第3層	焼塩土器	※14.4 △3.1	外面：ナデか 内面：ナデか	やや密	良好	外/いぶい黄褐色～橙色 内/浅黄褐色	内外面とも風化により調整不明瞭
907	215	4区 2C-6i	第3層	焼塩土器	※14.4 △3.7	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：布目・指頭圧痕	密	良好	内外面とも橙色	
908	215	4区 2D-6a	第3層下面	焼塩土器	※12.2 △4.6	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：布目・指頭圧痕	密	良好	内外面とも橙色	
909	215	4区 2C-7h	第3層下面	焼塩土器	- △2.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともいぶい橙色	
910	216	3区 2D-8c	第2層	須恵器 蓋	13.0 3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～褐色	口縁部意図的な打ち欠き後廃棄か
911	216	3区 2D-5d	第2層	須恵器 蓋	- △1.3	外面：天井部ナデ、天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	輪状つまみ内にヘラ記号
912	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 蓋	- △1.9	外面：つまみ部分ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内面にヘラ記号「×」
913	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	- △2.0	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ?、高台部～体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部内面にヘラ記号
914	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	- △2.1	外面：底部ナデ(底部板目痕をナデ消す)、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部にヘラ記号
915	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	※12.9 3.1	外面：回転ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも暗灰色	
916	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	※14.2 △3.8	外面：回転ナデ、高台部ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/暗灰色 内/灰色	
917	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	※13.2 △3.5	外面：底部回転系切り後ナデ?、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部～体部下半ナデ、体部上半回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
918	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	※18.2 7.6	外面：口縁～体部上半回転ナデ、体部下半～底部ナデ 内面：回転ナデ		良好	内外面とも灰白色	
919	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	- △1.1	外面：ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：ナデ		良好	外/灰色～オリーブ灰色 内/灰白色	底部ヘラ記号
920	216	3区 2D-6d	第2層	須恵器 坏	※10.2 2.9	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後粗いナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
921	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	※11.0 △3.8	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
922	216	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	※12.8 △4.8	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰褐色～黒色 内/灰褐色	体部外面墨(煤?)付着
923	216	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	- △2.7	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	
924	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	※12.0 △4.9	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	風化顕著で調整不明瞭
925	216	3区 2D-6b	第2層	須恵器 坏	※14.2 5.7	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～黒褐色	

表 37 土器観察表 (24)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
926	216	3区 2D-6b	第2層	須恵器 皿	※11.0 △1.9	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ後一部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	
927	216	3区 2D-7c	第2層	須恵器 皿	※12.0 △1.7	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	
928	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 皿	※13.2 1.7	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
929	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 長頸壺	※7.4 △13.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
930	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高坏	— △3.8	外面：回転ナデ 内面：ナデ、筒部内面にシボリ目	密	良好	内外面とも灰色	
931	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 把手	— △3.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色～黒灰色 内/灰色	壺把手か
932	216	3区 2D-5d	第2層	須恵器 不明	※13.8 △10.3	外面：カキ目 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	
933	216	3区 2D-6c	第2層	須恵器 壺	— △4.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	薬壺形
934	216	3区 2D-6d	第2層	須恵器 甕	— △6.6	外面：頸部ナデ、肩部タタキ後ナデ 内面：頸部ナデ、肩部当て具痕後ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	
935	216	3区 2D-7b	第2層	須恵器 壺	— △15.9	外面：頸部ナデ、体部タタキ 内面：頸部ナデ、体部当て具痕	密	良好	内外面とも灰白色～灰色	外面格子目タタキ
936	216	3区 2D-7c	第2層	土師器 坏	※13.6 △5.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい橙色～灰色 内/にぶい橙色	外面に糊圧痕
937	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 坏	※12.7 △4.4	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面ともなぶい黄褐色～ 灰白色	
938	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 坏	※14.4 △5.9	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも黒褐色～灰白色	
939	217	3区 2D-6b	第2層	土師器 坏	— △3.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/橙色 内/にぶい橙色	
940	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 坏	— △2.0	外面：体部下半ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	外/黒色～にぶい黄褐色 内/明褐色～にぶい黄褐色	内面赤色塗彩
941	217	3区 2D-7c	第2層	土師器 坏	— △3.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/黒褐色～灰黄色 内/黒褐色	底面ひずむ
942	217	3区 2D-6b	第2層	土師器 坏	— △3.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：調整不明	密	やや軟	内外面とも橙色	
943	217	3区 2D-6d	第2層	土師器 坏	— △2.5	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	軟	外/浅黄褐色～褐灰色 内/にぶい黄褐色	
944	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 坏	— △3.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ？ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともなぶい橙色	
945	217	3区 2D-7d	第2層	土師器 坏	— △2.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも橙色	
946	217	3区 2D-7c	第2層	土師器 坏	— △3.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端に糸切り時にはみ出 た粘土 内面：ナデ	密	やや良	内外面ともなぶい橙色	
947	217	3区 2D-7c	第2層	土師器 高台付坏	— △3.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰黄色	
948	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 高台付坏	— △1.8	外面：ナデ 内面：ミガキ	密	良好	外/黄灰色 内/黒色	黒色土器（内黒）
949	217	3区 2D-7c	第2層	土師器 皿	※13.6 △1.4	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	軟	外/黒色～明黄褐色 内/暗灰色～明黄褐色	
950	217	3区 2D-7c	第2層	土師器 皿	※10.7 △2.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ？	密	良好	外/灰黄褐色 内/にぶい橙色	
951	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 皿	※11.2 △2.0	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	外/褐灰色～浅黄色 内/暗灰黄色	外面一部二次的に披熟
952	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 皿	※12.4 1.7	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面ともなぶい黄褐色	
953	217	3区 2D-7c	第2層	土師器 高台付皿	※14.0 2.8	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色～黄褐色	
954	217	3区 2D-6c	第2層	手づくね 土器	※7.8 5.9	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	密	良好	外/灰白色～褐灰色 内/灰白色～明褐色	
955	217	3区 2D-6c	第2層	土師器 甕	※33.4 △18.1	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：ナデ、指頭圧痕	密	軟	外/灰白色～なぶい黄褐色 内/灰白色～浅黄色	
956	217	3区 2D-6d	第2層	土師器 甕	※27.4 △11.4	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	やや粗	やや軟	外/灰黄褐色～明赤褐色 内/灰黄褐色	
957	217	3区 2D-6c	第2層	焼塩土器	— △4.6	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	密	良好	内外面とも灰白色～なぶい 赤褐色	
958	217	3区 2D-5d	第2層	灰釉陶器 皿	△0.6	外面：回転ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰オリーブ色	内外面施釉
959	217	3区 2D-6c	第2層	緑釉陶器 皿	— △1.2	外面：施釉、高台部露胎 内面：施釉	密	やや軟	外/灰白色～オリーブ灰色 内/灰白色～灰色	
960	218	3区 2D-6c	第2層	須恵器 蓋	△2.2	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部ヘラ記号
961	218	3区 2D-6e	第2層	須恵器 壺	— △1.3	外面：底部回転系切り、他はナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部にヘラ記号
962	218	3区 2D-6c	第2層	土師器 坏	— △2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/にぶい黄褐色	
963	218	3区 2D-6c	第2層	土師器 坏	— △2.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色 内/にぶい黄褐色	
964	219	4区 2C-6h	第2層	須恵器 高台付坏	— ※2.6	外面：体部回転ナデ、底部糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部スタンプ文
965	219	4区 2C-7h	第2層	土師器 坏	— △2.2	外面：体部ナデ、底部回転系切り痕跡あり 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色～黒褐 色	
966	219	4区 2C-6i	第2層以下	瓦質土器 碗	※16.5 6.9	外面：体部回転ナデ・1条の沈線文、底部ナデ・指頭圧痕 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰色～暗灰色	
967	219	4区 2D-8a	第2層	瓦質土器 釜	— △6.2	外面：口縁部ナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色～黒褐色 内/にぶい黄褐色～灰色	外面炭素吸着
968	219	4区 2C-7h	第2層	瓦質土器 鍋	※23.5 △8.1	外面：ヨコナデ・指頭圧痕 内面：ヨコナデ・指頭圧痕	密	良好	外/灰黄色～黒褐色 内/灰白色～黒褐色	内外面炭素吸着、外面煤付着
969	219	4区 2C-7h	第2層	瓦質土器 鍋	※27.0 △5.0	外面：ヨコナデ・指頭圧痕 内面：ヨコナデ	密	良好	外/黒色 内/褐灰色	外面煤付着・内外面炭素吸着

表 38 土器観察表 (25)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
970	219	4区 2C-8f	第2層直上	瓦質土器 釜	※ 20.2 △ 2.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面とも灰色	内外面炭素吸着
971	219	4区 2C-7j	第1層	青磁 碗	- △ 4.8	外面：施軸・鎗蓮弁文 内面：施軸	密	良好	内外面とも暗オリーブ色	龍泉窯
972	219	4区 2D-6a	表土	青磁 碗	※ 13.0 △ 3.3	外面：施軸・鎗蓮弁文 内面：施軸	密	良好	内外面ともオリーブ灰色	
973	219	4区 2C-7g	第2-1層下	青磁 碗	- △ 2.0	外面：体部施軸 内面：施軸	密	良好	施軸部/灰オリーブ色 露胎部/灰色	龍泉窯系青磁碗I類
974	219	4区 2C-8h	第2-2層	青磁 碗	- △ 1.8	外面：体部～高台部施軸 内面：施軸	密	良好	施軸部/オリーブ灰色 露胎部/橙色	
975	219	4区 2C-8h	第2-2層	青磁 碗	- △ 2.9	外面：施軸 内面：施軸	密	良好	施軸部/オリーブ灰色 露胎部/灰黄褐色	
976	219	4区 2C-7h	第2-2層	青磁 皿	- △ 1.1	外面：体部施軸、底部ヘラケズリ 内面：施軸	密	良好	施軸部/灰白色 露胎部/灰色	龍泉窯系皿I類
977	219	4区 2C-7h	第2-1層	陶器 天目茶碗	※ 13.1 △ 2.8	外面：施軸 内面：施軸	密	良好	施軸部/褐色 露胎部/明褐色	瀬戸
978	219	4区 2C-6j	第2層直上	染付 碗?	- △ 2.7	外面：体部～高台施軸・染付 内面：施軸・染付	密	良好	施軸部/灰白色 露胎部/灰白色	
979	219	4区 2C-7h	第1層	陶器 皿	- △ 2.2	外面：体部施軸 内面：施軸・砂目跡	密	良好	施軸部/灰オリーブ色～褐色 露胎部/にぶい褐色～にぶい赤褐色	唐津?
980	219	4区 2C-8g	第2-1層	陶器 搦鉢	※ 26.1 △ 5.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～褐色 内/褐色	備前
981	220	3区 2D-5e	断割内一括	土師器 皿	※ 15.8 20	外面：体部ナデ、底部風化により調整不明 内面：体部ナデ後ミガキ、見込部ナデ・指頭圧痕	密	やや軟	内外面ともにぶい黄褐色	内外面赤色塗彩
982	220	3区 2D-5e	断割内一括	土師器 坏	※ 14.8 4.4	外面：ミガキ、一部指頭圧痕 内面：体部上半ナデ、体部下半ミガキ	やや密	やや良	外/赤褐色 内/にぶい褐色	内外面赤色塗彩
983	220	3区 2D-5e	断割内一括	弥生土器 甕	※ 23.4 △ 6.1	外面：口縁部櫛状工具による多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ・指頭圧痕、頸部ケズリ	やや粗	やや軟	内外面とも暗灰黄色	
984	220	3区 2D-7c	客土	須恵器 蓋	※ 14.1 △ 1.4	外面：回転ナデ 内面：体部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部外面にヘラ記号
985	220	3区 2D-5d	攪乱	須恵器 坏	- △ 1.2	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	底部内面にヘラ記号
986	220	3区 2D-7c	客土	須恵器 底部	- △ 1.5	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外/灰白色～灰色 内/灰白色	底部外面にヘラ記号
987	220	3区 2D-6c	攪乱	須恵器 坏	- △ 2.3	外面：底部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面にヘラ記号
988	220	3区 2D-8e	客土	須恵器 高台付坏	- △ 2.9	外面：底部～高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面にヘラ記号
989	220	3区 2D-7c	客土	須恵器 小型壺	- △ 2.8	外面：回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	
990	220	3区 2D-6c	攪乱	土師器 坏	※ 10.5 4.2	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい橙色 内/淡橙色～明赤褐色	
991	220	3区 2D-7c	客土	青磁 碗	- △ 4.8	外面：施軸、蓮弁文 内面：施軸	密	良好	施軸部/オリーブ灰色 露胎部/灰色	龍泉窯系碗B2類
992	220	3区 2D-8b	耕作土	染付 碗	- △ 1.5	外面：施軸 内面：施軸	密	良好	施軸部/明青灰色 露胎部/灰白色	見込花文、底部「大明年造」年款
993	220	3区 2D-7e	客土	陶磁器 雑軸陶器 皿	※ 8.5 △ 1.6	外面：施軸 内面：施軸	密	良好	施軸部/灰オリーブ色 露胎部/灰色	外面に重ね焼きの口縁部片付着
1060	226	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 蓋	- △ 1.5	外面：つまみ部回転ナデ、天井部ヘラケズリ後回転ナデ、体部回転ナデ 内面：調整不明	密		内外面とも灰白色	天井部内面、黒漆付着、漆パレット
1061	226	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	- △ 2.1	外面：輪状つまみ内回転系切り?、天井部～体部上半系切り後ナデ、体部下半回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/黄灰色～黒褐色	天井部内面に漆付着
1062	226	3区 2D-5d	第4層	須恵器 坏	- △ 2.1	外面：体部下半ナデ、底部静止系切り 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい褐色 内/明褐色	内面に黒漆付着、漆パレット
1063	226	4区 2C-7h	第3層以下	須恵器 高坏	- △ 6.9	外面：坏部回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ 内面：坏部ナデ、脚部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	坏部内面黒漆付着、漆パレット
1064	226	3区 2D-7c	第3層	須恵器 壺	- △ 4.9	外面：体部上半ナデ、体部下半回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	漆容器
1065	226	4区 2D-6a	第4-2層	須恵器 小壺	- △ 8.2	外面：体部回転ナデ、底部静止系切り 内面：体部回転ナデ、底部ヨコナデ	密	良好	外/灰色～灰オリーブ色 内/灰色～黒色	内外面自然釉付着、内面漆付着、外面に須恵器片着
1066	226	4区 2C-7j	4038溝 埋土	須恵器 鉢	- △ 4.1	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部内面に漆付着
1067	226	4区 2C-6i	第4層	須恵器 瓶類	- △ 11.7	外面：頸部～肩部回転ナデ、体部ハケメ状工具による回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～オリーブ黒色 内/灰色	内外面漆付着、漆容器か
1068	226	4区 2C-7i	4193溝 4194溝 埋土	須恵器 坏	※ 11.4 △ 1.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内面漆付着
1069	226	4区 2C-6i	第3層	須恵器 壺	- △ 2.1	外面：体部上部ケズリ後ナデ、下部ヘラケズリ、底部板目 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/緑灰色～灰色	外面および破面漆付着
1070	226	4区 2C-6i	第4層	須恵器 壺	- △ 4.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰オリーブ色 内/灰色～暗オリーブ色～黒色	内面漆および自然釉付着
1071	226	4区 2C-6j	第4層相当	須恵器 蓋	- △ 3.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面漆付着
1072	226	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	- △ 3.6	外面：ヘラケズリ・回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面漆付着
1073	226	4区 2D-6a	第4層	須恵器 頸部	- △ 4.5	外面：回転ナデ、沈線文 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内面に漆付着
1074	227	3区 2D-7d	3006溝 埋土	須恵器 円面硯	13.1 5.3	外面：回転ナデ・ナデ、長方形透孔12ヶ所遺存 内面：回転ナデ・ナデ(透孔部は未調整)	密	良好	外/灰オリーブ色 内/灰色	
1075	227	4区 2C-7j	第3層	須恵器 蓋	- △ 1.8	外面：天井部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯(天井部内面、墨付着)
1076	227	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	須恵器 蓋	- △ 1.8	外面：回転ナデ 内面：ナデ	密	やや良	外/灰白色～灰色 内/灰色	転用硯(天井部内面、墨付着)

第VI章 3区・4区の調査成果

表 39 土器観察表 (26)

掲載番号	挿入番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1077	227	4区 2D-8a	4044土坑 第3層	須恵器 蓋	— △2.4	外面：体部ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	やや密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1078	227	3区 2D-6c	第2層	須恵器 蓋	— △1.5	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面）
1079	227	4区 2C-7j	第4層	須恵器 蓋	— △1.5	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも淡灰色	つまみ内に漆記号、 転用硯（天井部内面）
1080	227	4区 2C-8i	第3層	須恵器 蓋	※15.8 △3.0	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部回転ナデ後ナデ、口縁部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも暗灰黄色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1081	227	4区 2C-7j	4038溝 埋土下層	須恵器 蓋	— △2.2	外面：つまみ部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黄灰色 内/灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1082	227	3区 2D-7c	3006溝南肩 第4層	須恵器 蓋	— △1.5	外面：天井部回転ヘラ切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	ヘラ記号、転用硯
1083	227	4区 2C-7i	第4層	須恵器 蓋	— △3.0	外面：つまみ部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	外/灰色～暗灰色 内/灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1084	227	4区 2D-6a	第4層	須恵器 蓋	※16.6 △3.0	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1085	228	4区 2C-6j	第4層以下	須恵器 蓋	※15.2 2.7	外面：つまみ部内部静止系切り、つまみ部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色～黒褐色 内/灰オリーブ色	転用硯（天井部内面）
1086	228	4区 2D-6a	4221溝 埋土	須恵器 蓋	※16.0 △2.2	外面：つまみ部回転ヘラケズリ・回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面）
1087	228	4区 2D-6a	第4層	須恵器 蓋	※14.6 3.2	外面：つまみ部ナデ、天井部ケズリ後回転ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面重ね焼き痕・自然釉付着、転用硯（天井部内面、墨付着）
1088	228	3区 2D-6d	第2層	須恵器 蓋	※13.3 △1.8	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色～黒灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1089	228	3区 2D-6c	第2層	須恵器 蓋	※13.8 △1.8	外面：天井部回転ヘラ切り？（灰付着のため調整不明瞭）、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄色 内/灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1090	228	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150ピット 埋土	須恵器 蓋	— △0.9	外面：天井部回転系切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯？（天井部内面）
1091	228	3区 2D-7c	第2層	須恵器 蓋	— △0.9	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面）
1092	228	3区 2D-6e	客土	須恵器 蓋	— △1.1	外面：天井部回転系切り、天井部周縁ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～灰色	転用硯（天井部内面）
1093	228	3区 2D-7c	第3層	須恵器 蓋	※14.8 △1.6	外面：天井部回転系切り後粗いナデ、天井部周縁回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：口縁部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面）
1094	228	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 蓋	※15.2 △1.4	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	蓋内面に墨付着、転用硯
1095	228	3区 2D-6c	掘立柱建物1 3148ピット 埋土	須恵器 蓋	※17.8 △1.8	外面：天井部回転系切り後回転ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1096	228	3区 2D-6d	攪乱	須恵器 蓋	※17.8 △1.1	外面：回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面、墨付着）
1097	228	3区 2D-5e	客土	須恵器 蓋	※14.0 △1.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（天井部内面）
1098	228	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3150ピット 埋土	須恵器 蓋	※15.1 △0.9	外面：天井部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ？、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも黒灰色	転用硯（天井部内面、墨痕あり）
1099	229	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	須恵器 高台付環	— △3.7	外面：ケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（見込部）
1100	229	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付環	— △2.1	外面：底部静止系切り？後ナデ、高台部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黒灰黄色 内/灰色	転用硯（底部内面、墨付着） 底部にヘラ記号
1101	229	4区 2C-6j	第4層	須恵器 高台付環	— △1.9	外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	転用硯（見込部、墨付着）
1102	229	4区 2C-7j	第4層以下	須恵器 高台付環	— △2.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	内外面とも灰白色	転用硯（見込部、墨付着）、底部ヘラ記号
1103	229	4区 2D-6a	4231ピット 埋土	須恵器 高台付環	— △2.5	外面：体部回転ヘラケズリ後ナデ、高台ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（見込部）
1104	229	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付環	— △1.5	外面：底部調整不明、高台部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰白色 内/灰色	転用硯（見込部）
1105	229	3区 2D-7e	3003溝 埋土下層	須恵器 高台付環	— △1.6	外面：底部回転ヘラ切り？、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部調整不明、体部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（高台内部）
1106	229	3区 2D-7e	3003溝 埋土下層	須恵器 高台付環	※14.4 4.8	外面：底部回転ヘラ切り後ナデ？、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：体部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外/灰黄色 内/灰白色	転用硯（見込部）
1107	229	3区 2D-5e	第2層	須恵器 高台付環	— △1.2	外面：底部回転系切り、高台部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（高台内部、墨付着）
1108	229	3区 2D-7e	3003溝 埋土下層	須恵器 高台付環	— △1.5	外面：高台部ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色～暗灰色 内/灰色	転用硯（高台内部、墨付着）
1109	229	3区 2D-6e	掘立柱建物4 3276ピット 埋土	須恵器 高台付環	— △2.1	外面：体部下半回転ナデ、高台部付近ナデ、底部回転系切り 内面：体部下半回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰色	転用硯（高台内部、墨付着）
1110	229	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付環	※15.3 △5.3	外面：底部回転系切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰オリーブ色 内/灰褐色	転用硯（底部墨痕）
1111	229	3区 2D-6b	3164土坑 埋土	須恵器 環	※17.4 △6.8	外面：底部回転系切り？、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	転用硯（体部内面に墨痕？）
1112	230	3区 2D-8c	客土	須恵器 皿	— △0.7	外面：底部回転系切り後ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用硯（見込部）
1113	230	3区 2D-7c	3014溝 埋土	須恵器 皿	— △1.7	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	転用硯（底部内面、墨付着）
1114	230	3区 2D-7c	第2層	須恵器 皿	※13.0 △1.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	転用硯（底部内面、墨付着）

表 40 土器観察表 (27)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構部位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1115	230	3区 2D-6c	第2層	須恵器 皿	※11.8 △1.4	外面：回転ナデ、底部周縁ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～灰色	転用視？（見込部、墨付着）
1116	230	3区 2D-6d	暗渠一括	須恵器 皿	- △0.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：体部～底部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	外面にヘラ記号？ 転用視（底部内面に墨痕）
1117	230	4区 2C-8j	4023溝 埋土	須恵器 高坏	- △7.5	外面：受部回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰白色	転用視（受部内面）
1118	230	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高坏	- △6.3	外面：受部回転ナデ、脚部ナデ、2方向に切れ込みによる透かし 内面：受部ナデ、脚部上半ナデ、下半回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	転用視（受部内面、墨付着）
1119	230	4区 2C-7g	第2層	須恵器 高坏	- △4.2	外面：回転ナデ 内面：見込部ナデ、脚部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	転用視（見込部）
1120	230	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △0.5	外面：ヘラ切り後弱いナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄褐色	底部外面に墨付着
1124	287	3区 2D-7e	3003溝 埋土下層	須恵器 蓋	※13.9 2.6	外面：つまみ部ナデ、天井部回転回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ？、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰白色～褐灰色	天井部外面に墨書「門」
1125	287	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	- △2.6	外面：つまみ部ナデ、天井部回転系切り後粗いナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	襷をわずかに含む 内外面とも灰色	底部外面に墨書「□/門」
1126	287	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	14.7 2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面に墨書「門」
1127	287	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	- △1.5	外面：つまみ部ナデ、天井部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面に墨書「門」
1128	287	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※12.8 3.7	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰白色	底部に墨書「門」
1129	287	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	- △1.6	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰褐色	底部に墨書「門」
1130	287	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △0.7	外面：底部回転系切り、高台部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部に墨書「門上」
1131	287	3区 2D-7e	3003溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △1.4	外面：底部回転系切り、高台部～体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/黒褐色～灰色	底部に墨書「門□」 〔上 _g 〕
1132	287	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	※16.3 2.7	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	やや軟	内外面とも灰色～青灰色	底部外面に墨書「門上/□」
1133	287	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	※12.3 3.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄色～灰色 内/灰白色	底部外面に墨書「門上」
1134	287	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	12.1 3.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄色	底部外面に墨書「門上」
1135	287	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	- △1.4	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/黄褐色	底部外面に墨書「門上」
1136	287	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	- △1.1	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部回転ナデ後一部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/にぶい黄褐色	底部外面に墨書「門上」
1137	288	3区 2D-7b	第4層	須恵器 坏	12.2 3.0	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや良	外/灰色～黒褐色 内/灰白色～明黄褐色	底部外面に墨書「□上」 〔門 _g 〕
1138	288	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △1.1	外面：体部下ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄色 内/灰白色	底部外面に墨書「□□」 〔門上 _g 〕
1139	288	3区 2D-7b	3438流路 埋土	須恵器 坏	※13.2 △3.6	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～オリーブ黒色 内/浅黄色	墨書土器「門□」
1140	288	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	※12.0 3.2	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～黒色	底部外面に墨書「門□」 〔上 _g 〕
1141	288	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 坏	- △1.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/黄灰色 内/にぶい黄褐色	底部外面に墨書「門宅」
1142	288	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △1.6	外面：回転系切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「門宅」
1143	288	3区 2D-7b	第3層	須恵器 高台付坏	- △2.2	外面：ナデ、底部回転系切り後ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外/灰白色 内/灰白色～灰黄色	底部に墨書「門□」 〔宅 _g 〕
1144	288	4区 2D-7a	第1層	須恵器 高台付坏	- △1.7	外面：体部ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	やや密	良好	内外面灰白色	底部に墨書「門□」
1145	288	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	- △2.1	外面：底部回転系切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	底部に墨書「門□」
1146	288	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏？	- △0.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「□□」 〔門宅 _g 〕
1147	288	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 高台付坏	14.8 5.8	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄色～淡黄色 内/灰白色～浅黄色	底部に墨書「門東「一」」とヘラ記号
1148	288	3区 2D-5e	第2層	須恵器 高台付坏	- △3.9	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部に墨書「□東」 〔門〕
1149	288	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △2.0	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/褐灰色～灰白色	底部に墨書「一門□」
1150	288	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	※14.2 3.6	外面：底部回転系切り後ナデ、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～黒色 内/灰黄色～灰色	底部外面に墨書「門東家二」
1151	288	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △1.5	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰褐色	底部外面に墨書「門東」
1152	288	3区 2D-7c	第2層 ～第4層	須恵器 坏	- △2.0	外面：底部ヘラ切り後ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰白色 内/灰褐色	底部外面に墨書「門□」
1153	289	3区 2D-6d	第2層	須恵器 坏	- △1.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色 内/にぶい褐色	底部外面に墨書「門東」
1154	289	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △0.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「門東□」
1155	289	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	※14.5 2.7	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/黒褐色～黄灰色	底部外面に墨書「門西」
1156	289	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △1.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部回転ナデ後ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/灰黄色	底部外面に墨書「門西」
1157	289	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	※14.2 2.1	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰白色～黒色 内/灰白色～灰色～黒色	天井部外面に墨書「門」
1158	289	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 皿	※15.8 △2.7	外面：底部回転系切り、端部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～灰黄褐色	底部外面に墨書「門」
1159	289	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	- △2.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「門」
1160	289	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	- △1.3	外面：底部回転系切り、底部～体部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨痕「□□」 〔門 _g 〕

表 41 土器観察表 (28)

掲載番号	挿回番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1161	289	3区 2D-6d	第5層	須恵器 環	— △ 0.8	外面：回転系切り、端部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「門」
1162	289	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 環	— △ 0.7	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「門□」
1163	289	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋?	— △ 0.4	外面：回転ナデ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面に墨書「門」
1164	289	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 環	— △ 0.4	外面：底部回転系切り 内面：調整不明	密	軟	外/褐灰色 内/灰色	底部外面に墨書「門」
1165	289	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 環	— △ 0.6	外面：底部回転系切り?、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/灰褐色	底部内面に墨書「□」 〔門 ₉ 〕
1166	289	3区 2D-7c	3433溝 埋土	土師器 環	— △ 0.9	外面：調整不明 内面：調整不明	密	軟	内外面とも灰褐色	底部外面に墨書「□□」 〔門 ₉ 〕 内外面とも赤色塗彩
1167	289	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 環	— △ 1.6	外面：底部系切り、底部から体部にかけてナデ、体部回転ナ デ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部内外面に墨書 外面：□□、内面：□□ 〔門 ₉ 〕
1168	289	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	— △ 0.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄色 内/灰黄褐色	底部外面に墨書「□」 〔門 ₉ 〕
1169	290	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	※ 13.4 3.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：回転ナデ	密	軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「東大家」
1170	290	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 環	— △ 1.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ、底部中央付近回転ナデ後指押さえ	密	良好	内外面とも浅黄褐色	底部外面に墨書「□宅」
1171	290	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 環	— △ 0.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも淡黄色	底部外面に墨書「宅」
1172	290	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付環	— △ 1.4	外面：底部回転系切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部回転ナデ後ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰黄褐色	底部に墨書「□」 〔宅 ₉ 〕
1173	290	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 環	— △ 1.7	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも浅黄褐色	底部外面に墨書「宅」
1174	290	3区 2D-5d	第2-2層	須恵器 高台付環	— △ 1.6	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色~灰色 内/灰色	底部に墨書「□□」
1175	290	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 環	※ 12.8 3.5	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、体部下端ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」とヘラ記号? 〔家 ₉ 〕
1176	290	3区 2D-7d	第2-2層	須恵器 環	— △ 1.4	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	体部外面に墨書「井」
1177	290	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 環	— △ 1.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端部に回転系切り 時の粘土付着 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「井」
1178	290	3区 2D-7c	掘立柱建物2 3143ピット 埋土	須恵器 環	— △ 0.6	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色~黒褐色 内/にぶい黄褐色	底部外面に墨書「井」
1179	290	3区 2D-6e	客土	須恵器 環	— △ 0.6	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/灰黄褐色	底部外面に墨書「井」
1180	290	3区 2D-6d	客土	須恵器 環	— △ 1.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色~灰白色 内/にぶい黄褐色	底部外面に墨書「□」 〔井 ₉ 〕
1181	290	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 環	— △ 1.6	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰黄色	底部外面に墨書「□」 〔井 ₉ 〕
1182	290	3区 2D-6c	掘立柱建物13 3445ピット 埋土	須恵器 環	— △ 1.2	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰黄褐色	底部外面に墨書「□」 〔井 ₉ 〕
1183	291	3区 2D-6c	第4層	須恵器 蓋	— △ 1.1	外面：天井部回転系切り?、天井部から体部にかけて回転ナ デ後ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面に墨書「荒田大内」
1184	291	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	※ 14.3 △ 1.6	外面：天井部回転系切り?、天井部~体部ケズリ、体部回転 ナデ 内面：回転ナデ、口縁端部ナデ、	密	良好	内外面とも灰色	体部内面に墨書「荒田大内」
1185	291	3区 2D-6c	3433溝 埋土	須恵器 蓋	※ 13.6 △ 1.7	外面：天井部から体部上半回転ヘラケズリ後ナデ、体部下 回転ナデ 内面：天井部から体部上半ナデ、体部下回転ナデ	密	良好	外/褐灰色~灰白色 内/灰白色	天井部内面に墨書「荒」
1186	291	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 環	— △ 0.6	外面：底部回転系切り、端部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰黄褐色 内/にぶい黄褐色	底部外面に墨書「荒田□」 〔大 ₉ 〕
1187	291	4区 2C-Gi	第4層	須恵器 高台付環	— △ 2.1	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部に墨書「荒田□」
1188	291	3区 2D-6c	第4層	須恵器 環	— △ 3.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下半は不明瞭 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色~灰色	底部外面に墨書「荒田大」
1189	291	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	土師器 皿	※ 14.2 △ 2.7	外面：口縁部ナデ、体部ミガキ 内面：ナデ?、口縁端部が不明瞭な面を持ちやや凹む	密	やや軟	内外面とも灰黄色	底部外面に墨書「□」 〔荒 ₉ 〕 内外面赤色塗彩
1190	291	3区 2D-6b	第2-1層	須恵器 高台付環	— △ 1.8	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰色~オリーブ黒色	底部に墨書「大内」 転用説?
1191	291	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 高台付環	— △ 1.8	内外面ナデ	密	良好	外/灰黄色~灰色 内/黒褐色	底部に墨書「大内」
1192	291	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付環	— △ 1.7	外面：底部回転系切り、端部に高台剥離痕、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、底部端から体部にかけて回転ナデ	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/灰白色	底部に墨書「□大内」
1193	291	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付環	※ 14.0 3.9	外面：底部回転系切り後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色~灰色 内/灰黄色	底部外面に墨書「下内」 体部外面にヘラ記号?
1194	291	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 環	— △ 1.5	外面：底部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色~黒褐色 内/灰黄褐色~黒褐色	底部外面に墨書「下内」
1195	291	3区 2D-7c	第4層	須恵器 環	— △ 0.5	外面：回転系切り後ナデ? 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄褐色	底部内面に墨書「□□」 〔内 ₉ 〕
1196	291	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 環	— △ 1.5	外面：底部回転系切り、端部回転系切り後ナデ、体部回転ナ デ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	底部外面に墨書「内」
1197	291	3区 2D-6d	第2-2層	須恵器 環	— △ 1.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部~体部下調整不明、体部上半ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「□□」 〔大 ₉ 〕
1198	292	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 高台付環	— △ 2.0	外面：底部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ?	密	良好	外/褐灰色 内/黄灰色	底部に墨書「□」 〔上 ₉ 〕
1199	292	3区 2D-6c	第2-2層	須恵器 環	— △ 0.5	外面：底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「東」
1200	292	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 環	— △ 0.6	外面：底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」 〔東 ₉ 〕

表 42 土器観察表 (29)

掲載番号	挿入番号	調査区	遺構部位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1201	292	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	※11.8 3.2	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部～体部下半ナデ、体部上半回転ナデ	密	良好	外/灰白色～黒褐色 内/灰黄褐色～黒褐色	底部外面に墨書「東」
1202	292	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	※13.0 3.5	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや良	外/灰白色～灰色 内/灰黄色～灰色	底部外面に墨書「東一」 体部外面にヘラ記号?
1203	292	3区 2D-6b 2D-6c	第4層	須恵器 皿	14.4 1.8	外面：回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/暗灰色～灰黄色 内/暗灰色～灰白色	底面墨書「□□□」 (東 ₉)
1204	292	4区 2C-6j	第4-2層	須恵器 蓋	- △1.9	外面：天井部～体部上半回転ナデ、以下ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/淡黄色 内/灰白色	天井部内面に墨書「越」
1205	292	3区 2D-7d	客土	須恵器 蓋	- △1.2	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部内面に墨書「高郡」
1206	292	4区 2D-7a	4038溝 埋土中層	須恵器 高台付坏	- △1.5	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部に墨書「石井」
1207	292	4区 2C-7i	第3層	須恵器 高台付坏	- △1.7	外面：体部回転ナデ、高台部ナデ、底部回転系切り 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	外/灰色～灰白色 内/灰白色	底部外面に墨書「清水」
1208	292	3区 2D-6c	掘立柱建物2 3141ピット 埋土	須恵器 蓋	※15.2 △1.7	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部外面に墨書「□見庄」、内面に墨付着、転用痕
1209	292	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 蓋	※15.5 2.0	外面：天井部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰黄褐色	天井部外面に墨書「中□/□□」 (深緑 ₉)
1210	292	3区 2D-7c	第2-2層	須恵器 坏	- △2.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ後一部ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部内面に墨書「栞」もしくは□(合字風 ₉)
1211	292	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	須恵器 蓋	- △0.9	外面：天井部回転系切り後粗いナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	天井部内面に墨書「□」 (織 ₉)
1212	292	3区 2D-6e	3003溝 第2層	須恵器 坏	- △0.9	外面：底部回転系切り、端部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」 (畠 ₉)
1213	292	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 壺	- △3.2	外面：底部ケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/褐灰色 内/灰色	底部外面に墨書「□」 (新 ₉) 3003溝出土破片と接合
1214	292	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △0.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	外/灰白色 内/黒灰色～灰白色	底部内面に墨書「新□」
1215	292	4区 2C-7j	4038溝 埋土	須恵器 坏	- △0.4	外面：体部ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰白色～灰色	底部外面に墨書「□壘」
1216	293	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 坏	※13.2 3.3	外面：底部回転系切り、底部から体部にかけてナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「馬津」
1217	293	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △1.3	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	底部外面に墨書「馬」
1218	293	3区 2D-7c	3006溝 埋土 高台付坏?	須恵器 高台付坏?	- △1.1	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰黄色～灰色 内/灰色	底部に墨書「□□」
1219	293	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	※11.2 3.9	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ、下端ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰褐色	底部外面に墨書「般」
1220	293	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △2.8	外面：底部回転系切り、高台部から体部下半ナデ、体部上半回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色～暗灰色 内/にぶい黄褐色	底部に墨書「今主」 ※人名
1221	293	3区 2D-7e	客土	須恵器 蓋	- △1.5	外面：天井部～体部回転ヘラケズリ後ナデ、体部回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄褐色～灰色	天井部内面に墨書「田子」
1222	293	3区 2D-7c	3014溝 埋土最下層	土師器 坏	※14.2 2.9	外面：底部ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともにぶい黄褐色	底部外面に墨書「伸」 内外面赤色塗彩
1223	293	3区 2D-7c	第2層	土師器 坏	- △1.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ(調整不明瞭)	密	良好	外/にぶい黄褐色 内/黒色～灰黄褐色	底部外面に墨書「日 ₉ 」
1224	293	4区 2C-7b	4038溝 埋土	須恵器 蓋	※15.8 △2.3	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部～体部ナデ	密	良好	内外面とも灰色	天井部に墨書「□□/×」
1225	293	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	- △0.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	軟	外/灰白色～灰色 内/灰黄褐色	底部外面に墨書「十」
1226	293	3区 2D-8e	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △0.6	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色～灰褐色 内/黒色	底部外面に墨書「□」 (十 ₉)
1227	293	4区 2D-6a	第2層	須恵器 蓋	※15.4 △1.6	外面：回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良好	外/黒色～灰白色 内/黄灰色～淡黄色	天井部に墨書「□」
1228	293	3区 2D-6c	掘立柱建物9 3383ピット 埋土	須恵器 蓋	※14.0 △2.5	外面：天井部回転系切り、体部上半ナデ、下半回転ナデ 内面：天井部ナデ、体部上半回転ナデ、下半ナデ	密	良好	外/黒褐色～灰色 内/灰色～灰白色	天井部内面に墨書「□」
1229	293	4区 2C-6i	第4層	須恵器 蓋	- △1.1	外面：天井部ナデ、体部回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	密	良好	外面：灰色 内面：灰白色	内面に墨書「□」
1230	293	3区 2D-8c	攪乱	須恵器 蓋	- △0.8	外面：天井部回転系切り、天井部から体部にかけて回転系切り後ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	天井部内面に墨痕「□」
1231	293	4区 2C-6j	第3層～第4層	須恵器 蓋	- △1.3	内外面とも灰色	密	良好	内外面とも灰色	天井部内面に墨書「□」
1232	294	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 高台付坏	※13.6 4.1	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも黒色～灰色	底部に墨書「□□」
1233	294	3区 2D-6c	第2層	須恵器 高台付坏	※12.6 3.2	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色～暗灰色	底部外面に墨書「□」
1234	294	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △3.7	外面：底部回転系切り、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色～暗灰色 内/灰褐色	底部に墨書「□」
1235	294	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △2.5	外面：底部回転系切り後粗いナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄褐色～黒褐色 内/灰黄褐色	底部に墨書「□□(壘)」
1236	294	3区 2D-7d	客土	須恵器 高台付坏	- △1.3	外面：底部回転系切り、高台部から体部にかけてナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	見込に墨書「□」 底面に墨書「□」
1237	294	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △0.8	外面：底部回転系切り後ナデ?、高台部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部内面に墨書「[]」
1238	294	3区 2D-6d	客土	須恵器 高台付坏	- △1.3	外面：底部回転ヘラケズリ後ナデ、高台部ナデ、体部回転ナデ 内面：体部から底部にかけて回転ナデ、底部ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄褐色	底部に墨痕「□」
1239	294	3区 2D-6d	掘立柱建物10 3359ピット 埋土	須恵器 高台付坏	- △1.4	外面：ナデ? 内面：ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部に墨痕「□」

表 43 土器観察表 (30)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1240	294	3区 2D-6d	第2層	須恵器 高台付坏	— △1.5	外面：底部回転系切り、高台部回転系切り後ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部に墨書「[]」
1241	294	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 高台付坏	— △1.5	外面：底部回転系切り、高台部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰褐色	底部に墨書「□」
1242	294	4区 2C-8j	第3層	須恵器 坏	※14.7 △2.2	外面：回転ナデ～ナデ、底部回転系切り 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密	良好	内外面とも灰色～灰白色	底部外面に墨書「□」
1243	294	3区 2D-6d	第2層	須恵器 坏	— △1.5	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□□」
1244	294	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	須恵器 坏	— △1.4	外面：底部静止系切り?、底部～体部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色～灰色 内/にぶい黄褐色	底部外面に墨書「[]」
1245	294	3区 2D-6d	第2層	須恵器 坏	— △1.1	外面：底部回転系切り、体部下半ナデ、上半回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□□」
1246	294	4区 2C-6j	第3層	須恵器 坏	— △2.5	外面：体部回転ナデ後ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「□」
1247	294	3区 2D-6d	第2層	須恵器 坏	— △1.6	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部内面に墨書「□」
1248	294	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	— △1.5	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも黄灰色	底部外面に墨書「□」
1249	294	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	— △0.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「[]」
1250	294	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 坏	— △1.5	外面：底部回転系切り、端部ナデ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「[]」
1251	294	3区 2D-6c	3432溝 埋土	須恵器 坏	— △2.1	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/灰色	底部外面に墨書「[]」
1252	295	3区 2D-7c	掘立柱建物9 3450ピット 埋土	須恵器 坏	— △1.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰色	底部外面に墨痕「[]」
1253	295	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	— △0.9	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「□」
1254	295	3区 2D-5e	客土	須恵器 坏	— △1.8	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰黄色～灰色 内/灰黄色	底部外面に墨書「□」
1255	295	3区 2D-7c	第2層	須恵器 皿	※13.9 2.3	外面：底部回転系切り、体部上半回転ナデ、下半回転ナデ後一部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外/灰白色～褐灰色 内/褐灰色	底部外面に墨書「□」 体部外面にヘラ記号?
1256	295	3区 2D-6e	第2層	須恵器 坏	— △0.8	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：回転ナデ後一部にナデ	密	良好	内外面とも淡黄色	底部内面に墨書「□」
1257	295	3区 2D-7b	客土	須恵器 坏	— △0.6	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部内面に墨書「□」
1258	295	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 皿	※12.0 △2.5	内外面ともナデ	密	良好	外/黒灰色～にぶい橙色 内/灰白色	体部外面に墨書「□□」
1259	295	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 坏	※12.6 4.2	外面：底部回転系切り、体部ナデ、下端ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	底部外面に墨書「[]」
1260	295	3区 2D-7b	3433溝 埋土	土師器 坏	— △3.4	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/黒褐色～にぶい黄褐色 内/灰白色～にぶい黄褐色	底部外面に墨書「□」
1261	295	3区 2D-7c	3014溝 埋土	土師器 坏	— △1.3	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともににぶい橙色	底部外面に墨書「□」
1262	295	3区 2D-6d	第2層	土師器 坏	— △1.5	外面：底部回転系切り、体部調整不明 内面：ナデ	密	やや軟	外/にぶい黄褐色 内/灰白色	底部外面に墨書「□」
1263	295	3区 2D-6b	3009溝 埋土	土師器 坏	— △2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面ともににぶい橙色	体部外面に墨書「□」
1264	295	4区 2C-6j	第3層 ～第4層	土師器 皿	— △1.1	外面：体部ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	やや粗	やや軟	内外面とも灰黄色	底部外面に墨書「□」
1265	295	4区 2C-7i	4038溝 埋土	土師器 甕	— △9.3	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	やや粗	良好	外/にぶい黄褐色 内/にぶい黄褐色	頸部外面の墨痕は絵(人面)の可能性
1266	296	4区 2C-6j	第2層	須恵器 坏	— △1.2	外面：体部ナデ、底部ヘラ切り後未調整 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	見込部に墨書「□□」
1267	296	3区 2D-7d	客土	須恵器 坏	— △0.7	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「[]」
1268	296	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	— △1.1	外面：底部回転系切り、端部に板目痕、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰黄色	底部外面に墨書「□□□□」
1269	296	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	— △0.7	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰褐色 内/灰黄褐色～灰白色	底部外面に墨書「[]」
1270	296	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 坏	— △1.0	外面：底部回転系切り、底部～体部ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「[]」
1271	296	3区 2D-7b	客土	須恵器 坏	— △0.9	外面：底部ヘラ切り後粗いナデ、体部ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	底部内面に墨痕「□」
1272	296	3区 2D-7d	客土	須恵器 坏	— △0.8	外面：底部回転ヘラ切り、体部回転ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」
1273	296	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	— △1.0	外面：底部回転系切り、体部ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」
1274	296	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	— △1.7	外面：底部回転系切り、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/灰白色 内/明褐色～浅黄褐色	底部外面に墨書「□」
1275	296	3区 2D-7c	第2層	須恵器 坏	— △2.3	外面：底部回転系切り、底部～体部ナデ、体部回転ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	やや軟	外/灰白色～灰色 内/灰黄褐色	底部外面に墨書「□」
1276	296	3区 2D-6c	3433溝 埋土	須恵器 蓋	— △0.8	外面：天井部から体部上半回転ヘラケズリ後ナデ、体部下 回転ナデ 内面：天井部から体部上半ナデ、体部下回転ナデ	密	良好	外/褐灰色～灰白 内/灰白色	内面に墨書「□(田または内 _o)」 1185と同一個体
1277	296	3区 2D-7d	3006溝 埋土	須恵器 坏	— △0.6	外面：回転系切り後ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□(内面ニ刻線アリ)」
1278	296	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	— △0.8	外面：底部回転系切り、端部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」
1279	296	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	— △0.7	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	底部外面に墨書「[]」
1280	296	3区 2D-7c	3014溝 埋土	須恵器 坏	— △0.5	外面：回転系切り、指紋付着 内面：ナデ及び回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	底部外面に墨書「□」
1281	296	3区 2D-7b	3433溝 埋土	須恵器 坏	— △0.7	外面：底部回転系切り、端部回転系切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	底部外面に墨書「□」、内面に墨付着?
1282	296	3区 2D-7c	攪乱	須恵器 坏	— △0.5	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰黄褐色	底部外面に墨書「□」

表44 土器観察表(31)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	口径(cm) 器高(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1283	296	3区 2D-6c	第2層	須恵器 坏	- △0.8	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外/灰白色 内/褐灰色	底部外面に墨書「[]」
1284	296	3区 2D-7d	第2層	須恵器 坏	- △0.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰褐色	底部外面に墨書「□」
1285	296	3区 2D-7c	3433溝 埋土	須恵器 坏	- △0.8	外面：ナデ 内面：底部ナデ、体部回転ナデ	密	良好	外/にふい黄橙色 内/褐灰色	底部外面に墨書「□」
1286	296	3区 2D-7c	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △0.5	内外面ともナデ	密	良好	内外面ともいふい黄橙色	底部外面に墨書「□」
1287	296	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △0.5	外面：回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも黄灰褐色	底部外面に墨書「□」
1288	296	4区 2C-7j	第3層下面	須恵器 坏	- △0.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/灰色 内/灰白色	外面に墨書「□」
1289	296	4区 2C-7i	4038溝 埋土	須恵器 高台付坏	- △0.6	外面：底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	内外面とも灰白色	底部に墨書「□」
1290	296	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △1.8	内外面とも回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	体部外面に墨書「□」
1291	296	3区 2D-7b	3006溝 埋土	須恵器 坏	- △1.6	内外面ナデ	密	やや軟	内外面とも灰白色	体部外面に墨書「□」
1292	296	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	須恵器 坏	- △4.0	内外面回転ナデ	密	良好	内外面とも灰色	内外面に墨痕「□/□」、文字?

第VI章 3区・4区の調査成果

表 45 土製品観察表 (1)

掲載番号	挿回番号	調査区	遺構層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
8	18	1区 2E-10j	第2層	土鍾	最大長:3.6 最大幅:0.9	手づくね成形	密	やや軟	内外面とも灰赤色	重量 21 g
14	26	2区 3D-1f	第2-1層	土鍾	最大長:3.5 最大幅:0.9	手づくね成形	密	良好	にぶい橙色	重量 25 g
994	221	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	移動式竈	口径:- 器高:△25.9	外面:掛口部ナデ、体部ハケメ 内面:掛口部ナデ、体部ケズリ	密	やや軟	外/にぶい黄褐色 内/灰白色~橙色	掛口部~体部
995	221	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	移動式竈	口径:- 器高:△26.7	外面:ハケメ後ケズリ 内面:ハケメ後ナデ	密	やや良	にぶい黄褐色~黒色	底部~掛口部
996	221	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	移動式竈	器高:△9.7 幅:△9.9	外面:ハケメ・ナデ 内面:ハケメ・ケズリ; 指頭圧痕	密	良好	外/灰褐色~にぶい橙色 内/にぶい橙色	底部~掛口部
997	221	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	移動式竈	口径:- 器高:△12.1	外面:ハケメ・ナデ 内面:ハケメ・ナデ	密	良好	外/灰白色~にぶい黄褐色 内/黄褐色~にぶい黄褐色	底部~掛口部
998	221	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	移動式竈	口径:- 器高:△10.8	外面:ハケメ・指頭圧痕 内面:指頭圧痕・ナデ	やや粗	良好	外/灰褐色 内/褐灰色	底部~焚口部
999	221	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	移動式竈	口径:- 器高:△8.7	外面:ハケメ・ナデ・指頭圧痕 内面:ケズリ・指頭圧痕	密	良好	外/灰褐色~にぶい橙色 内/にぶい橙色	底部
1000	221	4区 2C-6i	第4-1層	移動式竈	口径:- 器高:△6.7	外面:ナデ・底端部ハケメ 内面:ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	底部~掛口部
1001	221	3区 2D-6c	第2-2層	移動式竈	最大長:19.6 最大幅:12.6	外面:ハケメ・ナデ 内面:ケズリ	やや密	良好	外/橙色~暗灰黄色 内/にぶい黄褐色~橙色	
1002	221	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	移動式竈	口径:- 器高:△9.5	外面:体部ハケメ、底部ナデ 内面:ケズリ	密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	
1003	221	4区 2D-6a	第4層	移動式竈	口径:- 器高:△16.1	外面:指頭圧痕・ナデ 内面:指頭圧痕・ナデ	密	良好	外/灰白~褐灰色 内/褐灰色	
1004	221	4区 2D-6a	第4-2層	移動式竈	口径:※14.1 器高:△10.9	外面:ナデ・指頭圧痕 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ後ナデ	密	やや良	内外面とも浅黄褐色	
1005	222	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	支脚	最大長:19.5 最大幅:14.3	手づくね成形後ナデ・指頭圧痕	密	良好	灰黄褐色	背面に孔有り
1006	222	4区 2C-6i	第4層	支脚	最大長:△13.3 最大幅:△14.3	手づくね成形後ナデ・ヘラケズリ後ナデ・ケズリ	やや粗	やや軟	灰黄色	
1007	222	4区 2C-6i	第4層	支脚	最大長:△14.8 最大幅:△12.3	手づくね成形後ケズリ、一部ナデ	密	良好	にぶい黄褐色~灰黄褐色	
1008	222	3区 2D-7b	3006 溝 第4層	支脚	最大長:21.5 最大幅:14.5 最大厚:14	手づくね成形後ナデ	密	良好	にぶい黄褐色~灰黄褐色	背面に孔有り
1009	222	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	支脚	最大長:△14.4 最大幅:△11.2	ナデ・ケズリ後ナデ	密	やや良	灰白色~褐灰色	突出部
1010	223	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	支脚	最大長:17.2 最大幅:14.5	手づくね成形後ナデ・指頭圧痕	やや粗	やや良	暗赤褐色~にぶい橙色	背面に孔有り
1011	223	4区 2D-7a	4044 土坑 埋土	支脚	最大長:△19.1 最大幅:△10.2	ナデ	密	やや軟	灰黄色~黒色	背面に孔有り
1012	223	3区 2D-7d	掘立柱建物 11 3355 ビット 埋土第2層	支脚	- △13.3	粗いハケ後ナデ、穿孔部ナデ	密	良好	内外面とも灰黄色	突起部欠損
1013	223	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	支脚	- △7.0	工具によるナデ、底面ナデ、穿孔部指頭圧痕	密	良好	灰白色~にぶい黄褐色	意図不明
1014	223	4区 2C-6i	第3層	支脚	最大長:9.1 最大幅:13.1	ケズリ・ナデ	密	良好	灰黄色~にぶい褐色	
1015	223	4区 2C-7i	第3層	支脚	最大長:11.4 最大幅:13.8	手づくね成形後ケズリ後ナデ・指頭圧痕	やや粗	軟	浅黄色~褐色	
1016	223	4区 2D-6a	4228 ビット 埋土	支脚	最大長:△3.9 最大幅:△11.9	ナデ・指頭圧痕	密	やや良	灰黄色	
1017	224	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	土玉	最大長:3.1 最大幅:3.3	手づくね成形	密	良好	灰黄褐色	重量 33.5 g
1018	224	4区 2D-7a	4038 溝 埋土中~下層	土玉	最大長:4.1 最大幅:3.6	手づくね成形	密	良好	灰黄褐色~黒褐色	重量 30 g
1019	224	3区 2D-7b	第2-2層	土玉	最大長△3.6 最大厚△3.9	ナデ・指頭圧痕	密	良好	灰黄褐色~黒褐色	重量 47 g
1020	224	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	土玉	最大長:4.6 最大幅:4.1	手づくね成形	密	良好	灰黄褐色~黒褐色	重量 54 g
1021	224	3区 2D-6d	客土	土玉	最大長:3.5 最大幅:3.3 最大厚:3.3	手づくね成形	密	良好	黒褐色~灰黄色	重量 32.8 g
1022	224	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	土玉	最大長:△4.1 最大幅:4.1	手づくね成形	密	良好	灰黄褐色	重量 36.3 g
1023	224	4区 2D-7a	第4-1層	土玉	最大長:1.9 最大幅:2.8 最大厚:2.0	手づくね成形	密	良好	にぶい黄色	重量 8.7 g
1024	224	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	紡錘車?	最大長:2.4 最大幅:3.3 最大厚:3.1	手づくね成形	密	やや良	暗灰黄色	重量 26 g
1025	224	3区 2D-7d	3006 溝 埋土	紡錘車	最大長:5.1 最大幅:3.2 最大厚:2.0	ヘラ状工具によるナデ 上面に格子状の線刻	密	良好	灰白色	重量 27.6 g 拓本
1026	224	3区 2D-6d	第2-2層	紡錘車	最大長:2.8 最大幅:4.7 最大厚:2.8	工具によるナデか	密	良好	にぶい黄褐色	重量 21 g
1027	224	4区 2C-6j	第4-1層	不明	最大長:3.0 最大幅:3.5	ナデ	密	良好	灰色~灰白色	分銅形・須恵質、当該部分のみ 剥離か、重量:36 g
1028	224	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	不明	最大長:4.3 最大幅:2.8 最大厚:2.7	手づくね成形	密	良好	灰黄褐色	重量 29.8 g 楯形
1029	224	4区 2D-6a	4221 溝 埋土	土製勾玉	最大長:1.8 最大幅:1.3 最大厚:0.7	手づくね成形	密	やや良	にぶい黄色	重量 1 g
1030	225	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	土鍾	最大長 2.3 最大厚 1.4	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 4 g
1031	225	3区 2D-7d	第2-2層	土鍾	最大長:2.4 最大幅:1.4 最大厚:1.3	手づくね成形	密	良好	灰黄色	重量 4 g

表 46 土製品観察表 (2)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構 層位	種別	法量(cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	胎土	焼成	色調	備考
1032	225	3区 2D-5c	掘立柱建物1 3151 ヒット 埋土	土錘	最大長 2.8cm 最大幅 1.6cm	手づくね成形	密	良好	内外面とも灰白色	重量 6g
1033	225	3区 2D-7c	第4層	土錘	最大長: 3.1 最大幅: 1.5 最大厚: 1.2	手づくね成形	密	良好	灰黄色	重量 5g
1034	225	3区 2D-6e	第2.1層	土錘	最大長: 3.3 最大幅: 1.3 最大厚: 1.0	手づくね成形	密	良好	黒色	重量 5g
1035	225	3区 2D-6c	掘立柱建物3 3113 ヒット 埋土	土錘	最大長 3.1 最大幅 1.4	手づくね成形	密	良好	内外面とも淡黄色	重量 5g
1036	225	3区 2D-6c	第2.1層	土錘	最大長: 2.9 最大幅: 1.5 最大厚: 1.5	手づくね成形	密	良好	淡黄色	重量 6g
1037	225	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	土錘	最大長 2.9 最大厚 1.6	手づくね成形	密	やや良	にぶい黄橙色	重量 6g
1038	225	3区 2D-6d	第2.2層	土錘	最大長: 3.2 最大幅: 1.7 最大厚: 1.6	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 9g
1039	225	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	土錘	最大長 3.3 最大厚 1.8	手づくね成形	密	良好	灰黄色	重量 10g
1040	225	3区 2D-6c	第5層	土錘	最大長: 3.4 最大幅: 1.8 最大厚: 1.8	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 10g
1041	225	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	土錘	最大長 4.1 最大厚 1.5	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 8g
1042	225	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	土錘	最大長: 4.5 最大幅: 1.5 最大厚: 1.5	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 10g
1043	225	3区 2D-7c	3014 溝 埋土最下層	土錘	最大長 5.0 最大厚 2.0	丁寧なナデ	密	良好	灰白色	重量 16g
1044	225	3区 2D-6c	第4層	土錘	最大長: 5.1 最大幅: 1.8 最大厚: 1.1	手づくね成形	密	良好	灰黄色~黄灰色	重量 10g
1045	225	3区 2D-6c	第2.2層	土錘	最大長: 2.6 最大幅: 1.2 最大厚: 0.9	手づくね成形	密	良好	灰黄色~黄灰色	重量 3g
1046	225	3区 2D-6c	第2.2層	土錘	最大長: 3.2 最大幅: 0.9 最大厚: 0.9	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 2g
1047	225	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	土錘	最大長△ 3.8 最大厚△ 1.1	ナデ、手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 3g 須忠質
1048	225	3区 2D-6c	第2.2層 (黒色土)	土錘	最大長: 4.2 最大幅: 1.0 最大厚: 0.9	手づくね成形	密	良好	灰黄色	重量 4g
1049	225	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	土錘	最大長 3.6 最大厚 1.1	風化のため調整不明	密	やや良	にぶい黄橙色	重量 3g
1050	225	3区 2D-7d	第2.2層	土錘	最大長: 4.4 最大幅: 1.1 最大厚: 1.1	手づくね成形	密	良好	灰黄色	重量 4g
1051	225	3区 2D-8e	3006 溝 第2.2層	土錘	最大長 4.0 最大厚 1.2	ナデ、手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 5g
1052	225	3区 2D-6d	第2.2層	土錘	最大長: 4.1 最大幅: 1.5 最大厚: 1.3	手づくね成形	密	良好	黒色	重量 7g
1053	225	3区 2D-6c	第5層	土錘	最大長: 3.5 最大幅: 2.2 最大厚: 2.0	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 18g
1054	225	4区 2C-6i	第3層	不明	最大長: 2.1 最大幅: 1.8 最大厚: 1.6	ミガキ	密	良好	灰色	重量 7.5g 須忠質
1055	225	4区 2C-6i	第4層以下	土錘	最大長: 3.1 最大幅: 2.1 最大厚: 1.9	手づくね成形	密	良好	褐灰色	重量 15.1g
1056	225	4区 2C-6i	第3層	土錘	最大長: 3.8 最大幅: 2.6 最大厚: 2.4	手づくね成形後ナデ	密	良好	にぶい黄橙色~にぶい褐色	重量 26.8g
1057	225	3区 2D-7e	3003 溝 埋土最下層	土錘?	最大長 6.6 最大厚 4.2	手づくね成形、指頭圧痕	密	良好	灰色~灰白色	重量 135g 輪羽口の可能性も
1058	225	3区 2D-7e	3003 溝 埋土最下層	土錘?	最大長 7.6 最大厚 4.6	手づくね成形、指頭圧痕	密	良好	灰黄色	重量 114g 輪羽口の可能性も
1059	225	3区 2D-6c	第2.1層	土錘?	最大長: 7.1 最大幅: 4.0 最大厚: 3.9	手づくね成形	密	良好	灰白色	重量 100g
1121	281	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	輪羽口	最大長: 4.0 最大幅: 3.4 最大厚: 1.5	手づくね成形、外面は被熱・溶融して白色のガラス質滓付着	粗	やや良	黄灰色、被熱・溶融部は灰白~灰黄色	鉄関連遺物として掲載・報告
1122	281	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	輪羽口	最大長: 4.1 最大幅: 3.8 最大厚: 1.6	ナデ	密	良好	外/灰白色~にぶい黄橙色 内/灰白色	鉄関連遺物として掲載・報告 溶融部あり
1123	281	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	輪羽口	最大長: 5.7 最大厚: 4.8 最大厚: 2.9	ナデ	密	良好	外/灰白色 内/にぶい橙色	鉄関連遺物として掲載・報告

表 47 石器観察表 (1)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△: 残存)	重量 (g)	特徴 (調整等)	備考
S1	30	2区 3D-2g	第3層	磨製石斧	最大長: 7.0 最大幅: 2.2 最大厚: 0.8	25.52	各面とも整形の研磨が粗雑で、自然面の凹凸が残る	結晶片岩?
S2	36	2区 3D-2i	客土	大型蛤刃石斧	最大長: 12.0 最大幅: 5.2 最大厚: 4.0	490	基部に敲打痕が認められ、敲石として再利用か	結晶片岩?
S3	231	3区 2D-8c	3085ピット 埋土	打製石鏃	最大長: 1.46 最大幅: 1.43 最大厚: 0.32	0.48		小型
S4	231	4区 2C-6i	第4層	打製石鏃	最大長: 2.65 最大幅: 1.65 最大厚: 0.35	1.28		安山岩系?
S5	231	3区 2D-7d	3003溝 埋土上層	石核	最大長: 3.65 最大幅: 3.6 最大厚: 2.5	29.7		黒曜石 (風化顕著)
S6	231	3区 2D-6c	第2層	剥片	最大長: 3.6 最大幅: 3.9 最大厚: 0.9	11.46		黒曜石
S7	231	4区 2D-8a	第3層	剥片	最大長: 2.6 最大幅: 4.5 最大厚: 1.3	15.87		黒曜石 (風化顕著)
S8	231	3区 2D-6c	3473流路 埋土	石鏃	最大長: 19.8 最大幅: 12.5 最大厚: 2.3	716		
S9	232	3区 2D-7d	3006溝 埋土最下層	磨製石斧	最大長: 10.6 最大幅: 7.2 最大厚: 1.2	161		
S10	232	3区 2D-7b	3006溝南肩 第4層	磨製石斧	最大長: 13.1 最大幅: 5.5 最大厚: 4.5	450	刃部欠損	
S11	232	4区 2C-7i	第1層	磨製石斧	最大長: 12.8 最大幅: 4.2 最大厚: 2.3	196		
S12	232	4区 2C-7j	第3層	磨製石斧	最大長: 4.9 最大幅: 5.1 最大厚: 2.2	71	両刃、背面の研磨(調整)は粗い	
S13	232	4区 2D-6a	第4層	磨製石斧	最大長: 6.5 最大幅: 5.3 最大厚: 3.5	127	両刃、小型伐採斧	
S14	232	4区 2C-6j	第4層	磨製石斧	最大長: 5.8 最大幅: 3.7 最大厚: 1.3	36.46	全体形は撥形を呈す小型品で、片面に鋸が認められるが不明瞭で両刃	
S15	232	4区 2C-6j	第4層	磨製石斧	最大長: 8.9 最大幅: 5.0 最大厚: 2.2	98	両刃、小型伐採斧	
S16	232	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	扁平片刃石斧	最大長: 12.4 最大幅: 7.9 最大厚: 1.3	253		
S17	233	3区 2D-7e	3003溝 埋土上層	鑿状石斧	最大長: 3.6 最大幅: 0.7 最大厚: 0.5	3		
S18	233	3区 2D-6e	第2層	磨石?	最大長: 4.4 最大幅: 4.1 最大厚: 1.4	47		
S19	233	4区 2D-6b	第4層	石庖丁	最大長: 5.5 最大幅: 8.3 最大厚: 0.8	47		
S20	233	4区 2C-7h	第2層	石庖丁未成品	最大長: 11.4 最大幅: 6.2 最大厚: 1.1	123	成形後未穿孔	
S21	233	4区 2D-6a	第4層以下	敲石	最大長: 9.9 最大幅: 6.0 最大厚: 4.4	411	一部に磨り面、刃物痕	
S22	233	3区 2D-8d	3006溝 埋土下層	敲石	最大長: 11.5 最大幅: 6.7 最大厚: 5.9	703	5面に敲打痕が認められる	
S23	234	3区 2D-7c	3438流路 埋土	敲石?	最大長: 15.5 最大幅: 11.3 最大厚: 6.1	1443		
S24	234	4区 2D-7a	4038溝 埋土	敲石	最大長: 8.9 最大幅: 8.7 最大厚: 7.5	813		
S25	234	4区 2D-6a	第3層	敲石	最大長: 8.1 最大幅: 8.3 最大厚: 4.7	441		
S26	234	4区 2C-7h	第3層	敲石	最大長: 10.8 最大幅: 3.9 最大厚: 3.0	215		
S27	234	3区 2D-6c	第2層	敲石	最大長: 9.1 最大幅: 8.6 最大厚: 5.7	553		
S28	235	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	砥石	最大長: 5.7 最大幅: 4.2 最大厚: 2.8	51		
S29	235	4区 2C-7i	4038溝 埋土下層	砥石	最大長: 8.3 最大幅: 1.7 最大厚: 1.6	29	上部に穿孔(欠損)	
S30	235	4区 2C-7j	4038溝 埋土	砥石	最大長: 5.6 最大幅: 10.4 最大厚: 5.3	232		

表 48 石器観察表 (2)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△: 残存)	重量 (g)	特徴 (調整等)	備考
S31	235	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 10.6 最大幅: 5.2 最大厚: 3.7	222		
S32	235	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 3.4 最大幅: 3.7 最大厚: 2.6	31		
S33	235	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 2.6 最大幅: 5.5 最大厚: 6.2	96.95		
S34	235	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 10.7 最大幅: 12.9 最大厚: 7.7	961	被熱	S53・54 と同一の石材か
S35	235	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 7.7 最大幅: 7.7 最大厚: 2.9	163		
S36	235	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 9.6 最大幅: 7.8 最大厚: 2.8	224		
S37	236	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	砥石	最大長: 16.2 最大幅: 12.5 最大厚: 7.4	1145		
S38	236	4区 2D-6a	4221 溝 埋土	砥石	最大長: 10.6 最大幅: 11.4 最大厚: 3.3	434	刃物による線条痕が多数残る	
S39	236	3区 2D-7c	X=56170 ライ ン断割 第3～4層	砥石	最大長: 20.4 最大幅: 7.8 最大厚: 5.5	1111		
S40	236	3区 2D-7e	3003 溝 第2～3層	砥石	最大長: 7.7 最大幅: 3.5 最大厚: 1.9	68		
S41	237	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	砥石	最大長: 8.8 最大幅: 12.5 最大厚: 8.4	1392		
S42	237	3区 2D-7e	3003 溝 埋土下層	砥石	最大長: 12.4 最大幅: 8.0 最大厚: 5.2	688		
S43	237	3区 2D-6c	3102 ビット 埋土上層	砥石	最大長: 14.5 最大幅: 4.9 最大厚: 4.9	356		
S44	237	3区 2D-6c	3125 ビット 埋土	砥石	最大長: 4.7 最大幅: 4.4 最大厚: 3.2	91		
S45	238	3区 2D-5d	第4層 (整地土層)	砥石	最大長: 9.7 最大幅: 6.6 最大厚: 4.8	284	3面の砥面が認められ、刃物痕を残す	
S46	238	3区 2D-5d	整地土層	砥石	最大長: 8.4 最大幅: 5.3 最大厚: 1.4	81.1		
S47	238	4区 2D-6a	第4層以下	砥石	最大長: 4.9 最大幅: 3.0 最大厚: 2.2	45		
S48	238	4区 2C-7i	第4層	砥石	最大長: 8.0 最大幅: 4.9 最大厚: 3.5	150		
S49	238	4区 2D-7a	4038 溝南肩 第4層	砥石	最大長: 8.8 最大幅: 3.9 最大厚: 3.4	96.78		
S50	238	4区 2C-6j	第4-1層	砥石	最大長: 4.7 最大幅: 2.4 最大厚: 1.1	22		
S51	238	4区 2C-6j	第4-1層	砥石	最大長: 11.0 最大幅: 7.1 最大厚: 5.1	369	二次的な被熱により、表面が赤変・剥離	
S52	239	4区 2D-6a	第3層	砥石	最大長: 4.3 最大幅: 3.3 最大厚: 2.1	43.88		
S53	239	4区 2C-6i	第3層	砥石?	最大長: 6.2 最大幅: 7.4 最大厚: 7.1	246	被熱・煤付着	S34・54 と同一石材か
S54	239	4区 2C-7h	第3層以下	砥石?	最大長: 10.1 最大幅: 6.8 最大厚: 6.4	429	被熱	S34・53 と同一の石材か
S55	239	4区 2D-6a	第3層	砥石	最大長: 7.1 最大幅: 3.7 最大厚: 3.8	87.3		
S56	239	4区 2C-6i	第3層	砥石	最大長: 5.6 最大幅: 3.5 最大厚: 3.2	80.52		
S57	239	4区 2C-7j	第3層	砥石	最大長: 10.8 最大幅: 5.5 最大厚: 3.7	276		
S58	239	4区 2C-7j	第3層	砥石	最大長: 8.8 最大幅: 7.1 最大厚: 2.5	232		
S59	240	3区 2D-6c	第2-2層	砥石	最大長: 11.1 最大幅: 11.7 最大厚: 8.0	1384		
S60	240	3区 2D-6c	第2-2層	砥石	最大長: 10.2 最大幅: 9.3 最大厚: 6.6	658		

表 49 石器観察表 (3)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△: 残存)	重量 (g)	特徴 (調整等)	備考
S61	240	4区 2C-7h	第2層	砥石	最大長: 6.9 最大幅: 3.5 最大厚: 0.9	39.77		
S62	240	4区 2C-7j	第2.2層	砥石	最大長: 11.3 最大幅: 4.8 最大厚: 4.3	277		
S63	241	4区 2C-6j	4191 溝 埋土	不明	最大長: 11.8 最大幅: 7.6 最大厚: 5.0	79.84	軽石、刃物痕あり、砥石として使用か	
S64	241	3区 2D-7b	第2.2層	権?	最大長: 5.4 最大幅: 2.9 最大厚: 2.5	37.4	砥石の可能性あり	
S65	241	4区 2D-6a	第4.2層	紡錘車	最大長: 3.0 最大幅: 3.6 最大厚: 3.2	30.53	片面穿孔の途中で割れが生じた未成品か、一側面に擦面(擦痕)があり砥石を転用したものか	
S66	241	4区 2C-7h	第3層	勾玉	最大長: 2.0 最大幅: 2.0 最大厚: 1.0	5.45	古墳時代中期頃の形態	碧玉
S67	241	3区 2D-6e	第2.2層	管玉	最大長: 1.9 最大幅: 0.51	0.73		緑色凝灰岩?
S68	241	4区 2C-6i	第3層	管玉未成品	最大長: 0.8 最大幅: 0.5 最大厚: 0.5	0.23	断面形は多角柱状で細かい面をもっており、未研磨	碧玉
S69	241	4区 2C-6j	第2.2層以下	素材剥片 (管玉製作関係)	最大長: 1.5 最大幅: 1.75 最大厚: 1.5	4.63	角柱状、擦切溝有	碧玉
S70	241	4区 2C-8j	第3層	素材剥片 (管玉製作関係)	最大長: 2.3 最大幅: 2.3 最大厚: 2.0	13.38	角柱状、擦切溝有	碧玉

表 50 木器観察表 (1)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△: 残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W1	30	2区 2D-7h	第3.2層	円形曲物 底板?	最大長: △ 10.9 最大幅: △ 3.0 最大厚: 0.9	内面に焼け焦げた痕跡がある、復元径 14.8 cm	(針葉樹)	板目材	
W2	30	2区 2D-7h	第3.2層	板材	最大長: 11.7 最大幅: 7.1 最大厚: 1.0	一短辺折損	(針葉樹)	板目材	
W3	30	2区 2D-7h	第3.2層	杵型田下駄	最大長: 56.5 最大幅: 3.9 最大厚: 1.5	杵型田下駄(大足)の横棧	スギ	縦木取り	
W4	36	2区 2D-8h	2012 溝 埋土	木喰丁	最大長: 16.4 最大幅: 5.0 最大厚: 1.0	紐孔2箇所、未貫通紐孔1箇所 刃部使い減りにより内湾	ケヤキ	板目材	
W5	242	4区 2C-7i	第4層	斧柄	最大長: 58.6 最大幅: 2.6 最大厚: 2.4	横斧(手斧)の柄	(広葉樹)	芯持材	
W6	242	3区 2D-7b	3433 溝 埋土	田舟	最大長: 82.4 最大幅: 15.6 最大厚: 5.3		(針葉樹)	縦木取り	
W7	242	3区 2D-8e	3006 溝 木製構造物	田舟	最大長: 138.5 最大幅: 21.6 最大厚: 4.0		スギ	縦木取り	
W8	242	4区 2C-6i	第4層	角杵型田下駄?	最大長: △ 18.9 最大幅: 3.2 最大厚: 3.0	縦杵か	(針葉樹)	縦木取り	
W9	242	3区 2D-7c	第4層	馬楸?	最大長: △ 10.9 最大幅: 4.5 最大厚: 3.6		(針葉樹)	縦木取り	
W10	242	4区 2C-7g	第3層	横槌	最大長: △ 15.3 最大幅: 6.4 最大厚: 3.8		(広葉樹)	芯持材	
W11	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: △ 16.0 最大幅: 4.9 最大厚: 3.9		(広葉樹)	芯持材	
W12	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: 18.3 最大幅: 5.9 最大厚: 4.9		ヤブツバキ	芯持材	
W13	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: 15.6 最大幅: 5.6 最大厚: 5.0		(広葉樹)	芯持材	
W14	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: 18.8 最大幅: 5.5 最大厚: 4.5		(広葉樹)	芯持材	
W15	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: 15.5 最大幅: 5.2 最大厚: 5.1		(広葉樹)	芯持材	
W16	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: 17.2 最大幅: 5.0 最大厚: 4.2		(広葉樹)	芯持材	
W17	243	4区 2C-9j	4109 土坑 埋土	木錘	最大長: △ 14.3 最大幅: 6.0 最大厚: 4.9		(広葉樹)	芯持材	

表 51 木器観察表 (2)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W18	243	4区 2C-7i	4193 溝 埋土	木錘	最大長:△16.8 最大幅:4.7 最大厚:4.4		コナラ節	芯持材	
W19	243	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	木錘	最大長:15.9 最大幅:4.4 最大厚:4.0		ヤブツバキ	芯持材	
W20	243	4区 2C-6j	4191 溝 埋土	木錘	最大長:17.0 最大幅:6.3 最大厚:3.1		ヤブツバキ	芯去材	
W21	244	3区 2D-6e	3437 流路 埋土	櫛	最大長:76.1 最大幅:12.1 最大厚:2.6	表面ヤリガンナによる加工痕が残る	サカキ	追柵目材	
W22	244	3区 2D-6e	3003 溝 埋土最下層	アカトリ	最大長:△30.7 最大幅:△10.0 最大厚:3.5		(針葉樹)	縦木取り	
W23	244	4区 2C-6i	第4層	アカトリ	最大長:△21.8 最大幅:△9.3 最大厚:4.3		(針葉樹)	縦木取り	
W24	244	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	布巻具	最大長:△22.8 最大幅:2.6 最大厚:1.9		(針葉樹)	縦木取り	
W25	244	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	舞羽(総かけ)	最大長:△7.9 最大幅:3.1 最大厚:1.1	下端イキもしくは切断	(針葉樹)	板目材	X=56.170 ライン断ち割り出土
W26	244	3区 2D-6e	3003 溝 埋土最下層	紡錘車	最大長:4.6 最大幅:4.8 最大厚:4.5		(針葉樹)	芯持材	
W27	245	4区 2D-7a	第3層	杓子形木器	最大長:22.1 最大幅:7.3 最大厚:1.5		スギ	板目材	
W28	245	4区 2C-8i	第2.2層	杓子形木器	最大長:14.8 最大幅:3.6 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	
W29	245	3区 2D-6e	3002 集石	杓子形木器?	最大長:△9.9 最大幅:4.1 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	
W30	245	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	箸	最大長:△8.3 最大幅:0.7 最大厚:0.5		(針葉樹)	芯去材	
W31	245	4区 2C-6h	第2.2層	箸	最大長:△10.7 最大幅:0.7 最大厚:0.4		(針葉樹)	芯去材	
W32	245	4区 2C-8h	第2.2層	箸	最大長:14.3 最大幅:0.9 最大厚:0.7		(針葉樹)	芯去材	
W33	245	4区 2C-8f	第2層上面	箸	最大長:16.8 最大幅:0.5 最大厚:0.6	上端コゲ	(針葉樹)	芯去材	
W34	245	4区 2C-6i	第4層	琴柱	最大長:4.0 最大幅:1.9 最大厚:0.5		ヒノキ	板目材	
W35	245	4区 2C-6i	第4層	琴柱	最大長:4.7 最大幅:1.9 最大厚:0.8		スギ	板目材	
W36	245	4区 2C-6j	第4層	琴柱	最大長:3.6 最大幅:1.4 最大厚:0.5		スギ	柵目材	
W37	245	4区 2D-6b	第4層	琴柱	最大長:4.5 最大幅:1.6 最大厚:0.4		(針葉樹)	板目材	
W38	246	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	留針	最大長:9.7 最大幅:0.6 最大厚:0.6		(針葉樹)	芯去材	
W39	246	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	留針?	最大長:△11.5 最大幅:1.2 最大厚:1.1		(針葉樹)	芯去材	
W40	246	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	下駄	最大長:23.9 最大幅:11.4 最大厚:2.4	連歯下駄	スギ	板目材	
W41	246	4区 2D-8a	4099 溝 埋土	下駄	最大長:26.0 最大幅:11.2 最大厚:2.6	連歯下駄、使用(足裏)痕が残る	(針葉樹)	板目材	枝分かれ部分を使用
W42	246	4区 2C-6j	第4層	下駄	最大長:26.5 最大幅:11.0 最大厚:4.2	連歯下駄、表面遺存状況悪い	(針葉樹)	柵目材	
W43	246	3区 2D-7c	3006 溝 埋土最下層	下駄	最大長:20.7 最大幅:△9.1 最大厚:3.9	連歯下駄	(針葉樹)	板目材	
W44	247	3区 2D-7b	3006 溝 埋土	椀?	口径:- 器高:△1.9	挽物の椀か(一部炭化)	ケヤキ	横木取り	
W45	247	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	皿	口径:- 器高:△1.9		ケヤキ	横木取り	
W46	247	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	皿	口径:- 器高:△1.0	挽物	ケヤキ	横木取り	
W47	247	3区 2D-7b	3006 溝 埋土最下層	皿	口径:17.8 器高:△1.4	形状はやや歪だが挽物か	ケヤキ	横木取り	
W48	247	3区 2D-7c	第4層	皿	口径:20.0 器高:△1.7	剝物の皿	ケヤキ	横木取り	
W49	247	4区 2C-7h	4008 溝 埋土	漆器椀	口径:※15.6 器高:5.1	底面に線刻記号あり	(広葉樹)	縦木取り	

表 52 木器観察表 (3)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W50	247	4区 2C-7f	第21層	漆器椀	口径: - 器高: △20		(広葉樹)	縦木取り	
W51	247	4区 2C-7h	第1層	漆器椀	口径: - 器高: △21		(広葉樹)	縦木取り	
W52	247	4区 2C-7h	第13層	漆器椀	口径: ※11.7 器高: 42		(広葉樹)	縦木取り	
W53	248	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	不明 容器脚?	最大長: 10.3 最大幅: 8.6 最大厚: 5.9		ケヤキ	縦木取り	高環脚状
W54	248	4区 2C-6i	第44層	容器把手	最大長: 12.1 最大幅: 6.0 最大厚: 4.7		(針葉樹)	縦木取り	
W55	248	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	桶側板?	最大長: △20.3 最大幅: △8.6 最大厚: 1.0		(針葉樹)	縦木取り	
W56	248	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	槽	最大長: 30.7 最大幅: 12.4 最大厚: 2.5		(針葉樹)	縦木取り	
W57	248	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	槽	最大長: 75.7 最大幅: 28.2 最大厚: 7.2		スギ	縦木取り	溝底面付近出土
W58	249	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	円形曲物 蓋	最大長: △15.2 最大幅: △7.7 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W59	249	3区 2D-6e	3003 溝 埋土下層一括	円形曲物 蓋	最大長: △15.0 最大幅: △9.5 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W60	249	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	円形曲物 蓋	最大長: △16.6 最大幅: △6.0 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	
W61	249	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	円形曲物 蓋	最大長: 17.8 最大幅: △9.0 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	
W62	249	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	円形曲物 蓋	最大長: △18.2 最大幅: △7.7 最大厚: 0.9		(針葉樹)	板目材	
W63	249	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	円形曲物 蓋	最大長: △18.7 最大幅: △10.9 最大厚: 0.8		(針葉樹)	板目材	
W64	249	4区 2C-6i	第4層	円形曲物 蓋?	最大長: △16.2 最大幅: △4.8 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W65	249	3区 2D-7c	第4層	円形曲物 蓋	最大長: △17.8 最大幅: △6.3 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W66	249	3区 2D-7d	3006 溝 埋土	円形曲物 蓋	最大長: 18.2 最大幅: △11.8 最大厚: 0.6		(針葉樹)	柁目材	
W67	249	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	円形曲物 蓋?	最大長: 19.5 最大幅: △7.0 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W68	249	4区 2C-8j	4038 溝 埋土	円形曲物 蓋?	最大長: 17.8 最大幅: △8.1 最大厚: 0.6	罫引き線あり	(針葉樹)	板目材	
W69	249	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	円形曲物 蓋	最大長: 19.0 最大幅: △9.8 最大厚: 0.6		(針葉樹)	追柁目材	
W70	249	3区 2D-6b	3164 土坑 埋土	円形曲物 蓋	最大長: 19.1 最大幅: △9.6 最大厚: 0.6		(針葉樹)	追柁目材	
W71	249	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	円形曲物 蓋?	最大長: 17.8 最大幅: △8.7 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W72	249	3区 2D-7c	第3層	円形曲物 蓋	最大長: △8.6 最大幅: 17.7 最大厚: 0.5		(針葉樹)	柁目材	
W73	250	4区 2C-7j	4038 溝 埋土下層	円形曲物 蓋?	最大長: 19.0 最大幅: △18.5 最大厚: 0.8		(針葉樹)	板目材	
W74	250	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	円形曲物 蓋	最大長: 20.2 最大幅: 19.7 最大厚: 2.7		スギ	追柁目材	
W75	250	3区 2D-5d	3167 ビット 埋土	円形曲物 蓋	最大長: △17.6 最大幅: 19.0 最大厚: 0.3		(針葉樹)	追柁目材	
W76	250	3区 2D-7b	3006 溝 埋土最下層	円形曲物 蓋	最大長: △25.8 最大幅: △9.7 最大厚: 1.1	表面に刃物痕	(針葉樹)	板目材	
W77	250	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	円形曲物 蓋?	最大長: △42.9 最大幅: △10.3 最大厚: 0.9		(針葉樹)	板目材	大型で底板となる可能性も
W78	251	3区 2D-6e	3003 溝 埋土最下層	蓋板?	最大長: 10.1 最大幅: △5.8 最大厚: 0.9	内外面黒彩	(針葉樹)	板目材	
W79	251	3区 2D-6e	3003 溝 埋土下層一括	円形曲物 底板	最大長: 16.4 最大幅: 16.4 最大厚: 1.0	側面に目釘孔5箇所	(針葉樹)	追柁目材	
W80	251	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	円形曲物 底板	最大長: △22.0 最大幅: △6.4 最大厚: 1.0	内面に黒彩	(針葉樹)	追柁目材	

表 53 木器観察表 (4)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W81	251	4区 2C-7h	第4層	凹形曲物 底板	最大長:△25.9 最大幅:△17.8 最大厚:1.0		(針葉樹)	追紐目材	
W82	251	4区 2D-7a	4038溝 埋土	凹形曲物 底板	最大長:36.5 最大幅:△16.4 最大厚:1.1		(針葉樹)	板目材	
W83	251	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	凹形曲物 底板	最大長:36.3 最大幅:△15.5 最大厚:1.1		スギ	追紐目材	
W84	252	4区 2C-8j	4038溝 埋土	長方形曲物 底板	最大長:△15.4 最大幅:△5.2 最大厚:0.6		(針葉樹)	追紐目材	
W85	252	3区 2D-7b	3006溝 埋土	凹形曲物 底板?	最大長:△37.8 最大幅:△17.1 最大厚:0.8	内面黒彩	(針葉樹)	追紐目材	
W86	252	4区 2D-7a	4038溝 埋土下層	楕円形曲物? 底板	最大長:△69.2 最大幅:△21.2 最大厚:0.7		(針葉樹)	追紐目材	
W87	252	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	桶底板?	最大長:37.1 最大幅:△18.1 最大厚:1.4	内面刃物痕顕著、黒彩	ヒノキ	追紐目材	
W88	253	3区 2D-7c	3006溝 埋土最下層	蓋板	最大長:12.8 最大幅:△8.3 最大厚:0.7		(針葉樹)	追紐目材	
W89	253	3区 2D-7d	3014溝 埋土	蓋板	最大長:△12.4 最大幅:△4.2 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W90	253	4区 2C-6i	4194溝 埋土	蓋板	最大長:12.6 最大幅:△6.2 最大厚:0.8		(針葉樹)	板目材	
W91	253	3区 2D-5e	3003溝 埋土上層	蓋板	最大長:△12.4 最大幅:△6.3 最大厚:0.8		(針葉樹)	板目材	中央に孔
W92	253	3区 2D-7b	3006溝 埋土最下層	蓋板	最大長:14.6 最大幅:△6.9 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W93	253	4区 2C-7i	4038溝 埋土	蓋板	最大長:15.7 最大幅:16.0 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W94	253	4区 2C-7i	4038溝 埋土	蓋板	最大長:△17.5 最大幅:△7.6 最大厚:0.8		(針葉樹)	板目材	
W95	253	3区 2D-7c	3433溝 埋土	蓋板	最大長:△17.8 最大幅:△8.4 最大厚:0.8	端部炭化	(針葉樹)	追紐目材	
W96	253	3区 2D-6c	3433溝 埋土	蓋板	最大長:△18.7 最大幅:△9.3 最大厚:0.9	中央に孔	(針葉樹)	板目材	
W97	254	4区 2C-8i	第3層	齋串	最大長:△12.1 最大幅:1.7 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W98	254	4区 2C-7i	4038溝 埋土	齋串	最大長:△7.2 最大幅:1.4 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W99	254	4区 2C-7j	4038溝 埋土	齋串	最大長:14.9 最大幅:1.2 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W100	254	4区 2C-6i	第44層	齋串	最大長:△9.4 最大幅:1.9 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W101	254	4区 2C-7j	4038溝 埋土	齋串	最大長:△13.3 最大幅:1.5 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	
W102	254	3区 2D-6e	3003溝 埋土上層	齋串	最大長:△24.0 最大幅:2.3 最大厚:0.3	上端・左右削り	(針葉樹)	板目材	
W103	254	4区 2C-7h	4038溝 埋土	齋串	最大長:△6.6 最大幅:2.3 最大厚:0.4		(針葉樹)	板目材	
W104	254	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	齋串	最大長:△5.3 最大幅:△1.7 最大厚:0.2		(針葉樹)	板目材	
W105	254	4区 2D-7a	第22層	齋串	最大長:△4.3 最大幅:1.8 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W106	254	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	齋串	最大長:△7.3 最大幅:1.8 最大厚:0.4		(針葉樹)	板目材	
W107	254	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	齋串	最大長:△4.9 最大幅:1.0 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W108	254	4区 2D-8a	第3層	齋串	最大長:△12.5 最大幅:1.8 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W109	254	3区 2D-8e	3006溝 埋土下層	齋串	最大長:△9.3 最大幅:2.0 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	馬形集中地点
W110	255	4区 2C-7j	4038溝 埋土	齋串	最大長:△9.1 最大幅:1.7 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	

表 54 木器観察表 (5)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W111	255	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	齋串	最大長: △ 6.2 最大幅: 1.4 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W112	255	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	齋串	最大長: △ 3.1 最大幅: 1.4 最大厚: 0.2		(針葉樹)	板目材	
W113	255	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	齋串	最大長: △ 6.6 最大幅: 1.4 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W114	255	4区 2C-6i	第3層	齋串	最大長: △ 6.1 最大幅: 1.5 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W115	255	3区 2D-7e	3003 溝 3413 杭群	齋串	最大長: 7.6 最大幅: 1.1 最大厚: 0.2		(針葉樹)	板目材	
W116	255	4区 2C-6j	第4層相当?	齋串	最大長: 25.1 最大幅: 2.5 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	4192 溝に該当
W117	255	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	齋串	最大長: △ 10.1 最大幅: 1.4 最大厚: 0.4		スギ	板目材	
W118	255	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	齋串	最大長: △ 12.1 最大幅: 1.4 最大厚: 0.2		(針葉樹)	板目材	
W119	255	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	齋串	最大長: 20.3 最大幅: 2.0 最大厚: 0.3		(針葉樹)	柾目材	
W120	255	4区 2D-8a	第2-2層	齋串?	最大長: 19.8 最大幅: 2.1 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W121	255	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	齋串?	最大長: △ 18.6 最大幅: 1.7 最大厚: 0.5		(針葉樹)	柾目材	
W122	255	4区 2C-6j	第4-2層	齋串	最大長: △ 10.8 最大幅: 2.5 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W123	256	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	齋串	最大長: △ 12.2 最大幅: 1.1 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W124	256	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	齋串	最大長: △ 13.8 最大幅: 1.6 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W125	256	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	齋串	最大長: △ 12.0 最大幅: 1.2 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	
W126	256	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	齋串?	最大長: △ 9.5 最大幅: 1.4 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W127	256	4区 2D-7a	第4層	齋串	最大長: △ 11.2 最大幅: 1.6 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W128	256	4区 2C-7i	第4層	齋串	最大長: △ 13.7 最大幅: △ 1.8 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W129	256	4区 2C-6i	第4層	齋串	最大長: △ 7.2 最大幅: 1.6 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W130	256	4区 2C-7i	第4層	齋串	最大長: △ 6.7 最大幅: 1.6 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W131	256	4区 2C-6i	第4層相当?	齋串	最大長: △ 7.9 最大幅: 1.8 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	4192 溝に該当
W132	256	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	齋串	最大長: △ 8.4 最大幅: 2.1 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W133	256	4区 2C-6i	4193 溝 埋土	齋串?	最大長: △ 9.3 最大幅: 1.7 最大厚: 0.9	前面に刃物痕	(針葉樹)	板目材	
W134	256	3区 2D-7d	3006 溝 埋土下層	齋串	最大長: △ 9.2 最大幅: 1.4 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W135	256	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	齋串	最大長: △ 7.3 最大幅: 1.3 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W136	256	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	齋串?	最大長: △ 8.0 最大幅: 1.7 最大厚: 0.5		スギ	板目材	
W137	256	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	齋串	最大長: △ 7.9 最大幅: 1.8 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	馬形集中地点
W138	256	3区 2D-7b	3006 溝 埋土	齋串	最大長: △ 10.4 最大幅: 1.9 最大厚: 0.2		(針葉樹)	板目材	
W139	257	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	齋串	最大長: △ 18.9 最大幅: 2.2 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W140	257	4区 2D-6a	第4-1層	齋串	最大長: △ 12.8 最大幅: 2.6 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	

表 55 木器観察表 (6)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W141	257	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	斎串	最大長:△29.0 最大幅:3.0 最大厚:1.0		(針葉樹)	板目材	馬形集中地点
W142	257	3区 2D-7d	3006 溝 埋土	斎串?	最大長:29.3 最大幅:1.7 最大厚:0.8		(針葉樹)	板目材	
W143	257	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	斎串状木製品	最大長:17.8 最大幅:1.9 最大厚:1.0		(針葉樹)	板目材	
W144	257	4区 2C-6i	第2層下	斎串または 形代?	最大長:△10.1 最大幅:1.9 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	
W145	257	4区 2C-7i	第3層	斎串	最大長:△15.6 最大幅:1.8 最大厚:0.3		(針葉樹)	板目材	
W146	257	4区 2C-6i	第4層	斎串?	最大長:△23.7 最大幅:1.8 最大厚:0.8		(針葉樹)	板目材	
W147	258	4区 2C-7j	4038 溝 埋土中層	人形	最大長:20.9 最大幅:2.4 最大厚:0.5		スギ	板目材	
W148	258	4区 2C-7j	4038 溝 埋土中層	人形	最大長:△14.0 最大幅:2.0 最大厚:0.4		(針葉樹)	板目材	
W149	258	4区 2C-7j	第3層	人形	最大長:△8.8 最大幅:1.9 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	
W150	258	4区 2C-7j	第4層	人形	最大長:25.5 最大幅:2.9 最大厚:0.6		(針葉樹)	板目材	
W151	258	4区 2D-6b	第4層以下	人形	最大長:18.0 最大幅:3.0 最大厚:0.6		(針葉樹)	板目材	
W152	258	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	人形	最大長:△6.6 最大幅:1.5 最大厚:0.2		(針葉樹)	板目材	
W153	258	3区 2D-7e	3006 溝 埋土下層	人形	最大長:△7.1 最大幅:2.1 最大厚:0.5		(針葉樹)	板目材	
W154	258	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	人形	最大長:△13.4 最大幅:4.6 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W155	258	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	人形	最大長:△10.5 最大幅:2.4 最大厚:0.4	下端部コゲ	(針葉樹)	板目材	
W156	258	3区 2D-8e	3003 溝 埋土最下層	人形	最大長:△33.4 最大幅:△3.4 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	墨痕あり
W157	259	3区 2D-8e	3006 溝 埋土	人形	最大長:△18.2 最大幅:6.0 最大厚:0.7	表面に墨書で頭巾を被った人面(墨痕)、裏面に 墨書なし	スギ	板目材	
W158	259	3区 2D-8e	3006 溝 埋土	人形	最大長:△11.2 最大幅:5.4 最大厚:0.7	表面に墨書で頭巾を被った人面(墨痕)、裏面に 墨書なし	スギ	板目材	
W159	260	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	馬形	最大長:13.9 最大幅:2.4 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W160	260	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	馬形	最大長:15.4 最大幅:4.7 最大厚:0.8	表裏面・側面ともケズリ調整、表面に墨書あり(轡 の表現か)	スギ	板目材	
W161	260	4区 2C-6j	第3層相当層	馬形	最大長:16.3 最大幅:2.6 最大厚:0.4		(針葉樹)	柾目材	
W162	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長:12.3 最大幅:2.9 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W163	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長:△6.9 最大幅:2.4 最大厚:0.6		スギ	板目材	
W164	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長:△6.8 最大幅:3.0 最大厚:0.5		スギ	板目材	
W165	260	4区 2C-6i	第4層	馬形	最大長:△6.7 最大幅:△2.5 最大厚:0.4		(針葉樹)	板目材	
W166	260	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	馬形	最大長:11.9 最大幅:△1.3 最大厚:0.6		(針葉樹)	板目材	
W167	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長:△4.0 最大幅:△1.7 最大厚:0.5	馬形(飾馬)鞍部分	(針葉樹)	板目材	W169 と接合しないが同一個体か
W168	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長:△7.3 最大幅:2.4 最大厚:0.6	馬形(飾馬)鞍部分	(針葉樹)	板目材	
W169	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長:△4.1 最大幅:△1.8 最大厚:0.5	馬形顔部分	(針葉樹)	板目材	W167 と接合しないが同一個体か
W170	260	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	馬形	最大長:△7.7 最大幅:3.2 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	

表 56 木器観察表 (7)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W171	260	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	馬形	最大長: △ 6.8 最大幅: 4.3 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	
W172	260	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	馬形	最大長: △ 6.4 最大幅: △ 1.7 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W173	261	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代	最大長: △ 5.9 最大幅: 2.5 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	馬形?
W174	261	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代	最大長: △ 5.2 最大幅: 2.2 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	馬形?
W175	261	4区 2D-7b	4221 溝 埋土	形代	最大長: △ 8.7 最大幅: 3.0 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	馬形?
W176	261	4区 2D-7b	4221 溝 埋土	形代	最大長: △ 11.7 最大幅: 2.6 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	
W177	261	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	形代	最大長: △ 7.6 最大幅: △ 2.1 最大厚: 0.4		(針葉樹)	追柵目材	
W178	261	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代	最大長: △ 9.1 最大幅: 2.7 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W179	261	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代	最大長: △ 10.5 最大幅: 1.9 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W180	261	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代	最大長: △ 8.3 最大幅: 1.4 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W181	261	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代	最大長: △ 9.3 最大幅: 1.9 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W182	261	4区 2C-7i	4194 溝 埋土	剣形?	最大長: △ 20.2 最大幅: 1.5 最大厚: 0.5	断面形菱形状	(針葉樹)	柵目材	
W183	261	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	刀子形?	最大長: △ 12.0 最大幅: 2.1 最大厚: 0.7		(針葉樹)	柵目材	
W184	261	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	鳥形?	最大長: △ 11.6 最大幅: 2.0 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	
W185	261	4区 2C-7j	第3層	鳥形?	最大長: △ 8.7 最大幅: 2.1 最大厚: 0.6		(針葉樹)	板目材	
W186	262	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	舟形	最大長: 27.5 最大幅: 5.7 最大厚: 4.1		スギ	縦木取り	
W187	262	3区 2D-8d	第2-3層?	形代?	最大長: 30.7 最大幅: 4.1 最大厚: 0.7		(針葉樹)	板目材	人形?
W188	262	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	形代?	最大長: △ 30.4 最大幅: 5.0 最大厚: 1.6		(針葉樹)	縦木取り	舟形?
W189	262	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	形代?	最大長: △ 13.0 最大幅: 2.5 最大厚: 1.3		(針葉樹)	縦木取り	舟形?
W190	263	4区 2C-7j	4191 溝 埋土	火鑽臼	最大長: 52.7 最大幅: 4.7 最大厚: 2.6	火鑽臼 2カ所	(針葉樹)	縦木取り	
W191	263	4区 2C-6i	第4-4層	火鑽臼	最大長: △ 44.0 最大幅: 5.0 最大厚: 2.3	火鑽臼 8カ所	(針葉樹)	縦木取り	
W192	263	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	火鑽臼	最大長: △ 10.3 最大幅: 1.6 最大厚: 1.3		(針葉樹)	縦木取り	
W193	263	4区 2C-6i	第4-4層	火鑽臼	最大長: △ 25.4 最大幅: 2.5 最大厚: 1.5	火鑽臼 10カ所	スギ	柵目材	
W194	263	3区 2D-7e	3003 溝 埋土下層	火鑽臼	最大長: △ 45.0 最大幅: 5.0 最大厚: 1.8	火鑽臼 10カ所のうち、未使用 4カ所	(針葉樹)	縦木取り	
W195	263	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	火鑽臼	最大長: △ 29.7 最大幅: 3.5 最大厚: 1.7	火鑽臼 2カ所のうち、1つは未使用	(針葉樹)	縦木取り	
W196	264	4区 2C-6i	第4-4層	滑車	最大長: 7.8 最大幅: 7.3 最大厚: 5.5		(広葉樹)	縦木取り	
W197	264	3区 2D-6e	3003 溝 埋土下層一括	滑車	最大長: 10.3 最大幅: 11.3 最大厚: 5.6		スギ	板目材	
W198	264	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	つけ木	最大長: 21.1 最大幅: 1.7 最大厚: 0.8	先端コゲ	(針葉樹)	縦木取り	
W199	265	3区 2D-6c	第2-2層	支脚	最大長: 23.3 最大幅: 4.8 最大厚: 2.6	支えの枠木を入れる柄穴あり	スギ	柵目材	
W200	265	3区 2D-6c	第2-2層	支脚	最大長: 23.6 最大幅: 4.8 最大厚: 2.9		(針葉樹)	柵目材	

表 57 木器観察表 (8)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W201	265	3区 2D-7e	第2-2層	支脚	最大長:21.7 最大幅:3.2 最大厚:2.6		(針葉樹)	柱目材	
W202	265	3区 2D-7b	第2-2層	支脚	最大長:16.5 最大幅:3.9 最大厚:2.2		(針葉樹)	板目材	
W203	265	4区 2C-6j	4192 溝 埋土	案	最大長:△41.0 最大幅:10.0 最大厚:1.7		(針葉樹)	板目材	
W204	265	4区 2C-8i	第3層	栓	最大長:15.7 最大幅:4.6 最大厚:2.5		(針葉樹)	板目材	
W205	265	4区 2C-6i	第4-4層	栓	最大長:18.3 最大幅:6.8 最大厚:5.0		スギ	板目材	
W206	265	3区 2D-7c	3433 溝 埋土	栓?	最大長:△23.2 最大幅:3.3 最大厚:2.3		(針葉樹)	柱目材	
W207	265	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	栓	最大長:15.8 最大幅:9.9 最大厚:3.0		(針葉樹)	追柱目材	
W208	265	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	部材	最大長:11.0 最大幅:2.8 最大厚:2.1		(針葉樹)	板目材	
W209	266	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	部材?	最大長:10.0 最大幅:2.5 最大厚:1.1		(針葉樹)	柱目材	
W210	266	4区 2C-7j	4191 溝 埋土	部材	最大長:26.0 最大幅:2.5 最大厚:2.2	円孔2カ所	(針葉樹)	柱目材	
W211	266	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	棒材	最大長:45.8 最大幅:2.9 最大厚:1.8		(針葉樹)	芯持材	
W212	266	4区 2C-6i	第4層	棒材	最大長:45.4 最大幅:1.3 最大厚:1.1		(針葉樹)	芯去材	火鑽材の可能性も
W213	266	3区 2D-7b	3006 溝 埋土	棒材	最大長:32.8 最大幅:2.1 最大厚:0.7		(針葉樹)	芯去材	
W214	266	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	棒材	最大長:25.0 最大幅:1.6 最大厚:0.8	先端にかけてヘラ状に厚みを減じる	(針葉樹)	板目材	
W215	266	4区 2C-6i	4194 溝 埋土	棒材	最大長:23.0 最大幅:1.6 最大厚:1.1		(針葉樹)	芯去材	
W216	266	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	部材	最大長:53.4 最大幅:5.7 最大厚:2.9		(広葉樹)	芯持材	
W217	266	3区 2D-5d	3473 流路 埋土	棒材	最大長:68.4 最大幅:6.1 最大厚:3.5		(針葉樹)	芯去材	
W218	266	4区 2C-6j	4192 溝 埋土	建築部材?	最大長:103.0 最大幅:7.6 最大厚:3.0		(針葉樹)	板目材	
W219	267	3区 2D-6c	第2-2層	板材	最大長:△38.8 最大幅:△7.5 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	樺皮緊縛
W220	267	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	板材	最大長:△34.3 最大幅:△13.9 最大厚:0.8		(針葉樹)	柱目材	
W221	267	3区 2D-6e	3003 溝 埋土下層	板材	最大長:70.2 最大幅:9.6 最大厚:1.7		(針葉樹)	板目材	
W222	267	4区 2C-7j	4191 溝 埋土	板材	最大長:23.5 最大幅:12.7 最大厚:2.9		(針葉樹)	板目材	
W223	267	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	板材	最大長:30.8 最大幅:14.3 最大厚:2.7		(針葉樹)	板目材	
W224	267	3区 2D-6d	3437 流路 埋土	板材	最大長:87.3 最大幅:24.4 最大厚:1.2	表面ヤリガンナによる加工痕顕著	(針葉樹)	板目材	床板?
W225	268	3区 2D-5d	3147 ビット 埋土	柱	最大長:78.0 最大幅:31.4 最大厚:26.0		スギ	芯持材	年輪年代測定試料No.14872-10 ~ 1 2
W226	268	3区 2D-5d	3148 ビット 埋土	柱	最大長:92.3 最大幅:27.0 最大厚:18.5		(針葉樹)	芯去材	
W227	269	3区 2D-6c	3149 ビット 埋土	柱	最大長:80.1 最大幅:24.5 最大厚:25.6		スギ	芯持材	年輪年代測定試料No.14872-4 ~ 6
W228	269	3区 2D-5c	3151 ビット 埋土	柱	最大長:80.3 最大幅:22.7 最大厚:21.7		スギ	芯持材	年輪年代測定試料No.14872-7 ~ 9
W229	269	3区 2D-6d	3187 ビット 埋土	柱	最大長:58.8 最大幅:16.3 最大厚:13.5		スギ	芯持材	年輪年代測定試料No.14872-1 ~ 3
W230	270	4区 2D-6a	4206 ビット 埋土	柱	最大長:△32.6 最大幅:15.1 最大厚:15.0	納穴2カ所	(針葉樹)	芯持材	

表 58 木器観察表 (9)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W231	270	3区 2D-7d	3327 ビット 埋土	柱	最大長: 65.1 最大幅: 16.0 最大厚: 12.2		(針葉樹)	芯去材	
W232	270	4区 2C-7i	第4層	建築部材	最大長: 79.6 最大幅: 45.3 最大厚: 1.7		(針葉樹)	追柵目材	
W233	270	3区 2D-7e	3439 ビット 埋土	礎盤	最大長: 16.4 最大幅: 13.4 最大厚: 4.6		(針葉樹)	追柵目材	転用材か
W234	271	3区 2D-7c	第2-2層	楣または蹴放し	最大長: 127.2 最大幅: 14.0 最大厚: 5.7		スギ	板目材	
W235	271	4区 2C-6i	第4層	建築部材	最大長: △ 37.5 最大幅: 17.5 最大厚: 7.6	蹴放し? を再加工か	(針葉樹)	板目材	
W236	271	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	建築部材	最大長: △ 96.2 最大幅: 10.1 最大厚: 6.8		(針葉樹)	板目材	
W237	271	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	建築材または舟	最大長: 131.3 最大幅: 12.6 最大厚: 4.5	大小の工具 (鑿) 痕跡が認められる	(針葉樹)	板目材	
W238	272	3区 2D-7c	3438 流路 埋土	建築材	最大長: 144.8 最大幅: 11.7 最大厚: 6.2		スギ	板目材	
W239	272	4区 2C-6h	第3層下部	建築部材	最大長: △ 73.0 最大幅: 14.4 最大厚: 4.6		スギ	板目材	
W240	272	4区 2D-7a	4038 溝 埋土下層	建築部材	最大長: 52.9 最大幅: 11.0 最大厚: 3.6		(針葉樹)	板目材	
W241	272	4区 2C-6i	第4層	建築部材	最大長: △ 96.4 最大幅: 19.8 最大厚: 8.1		(針葉樹?)	板目材	
W242	273	4区 2C-7g	第2層	不明 織機?	最大長: 19.8 最大幅: 1.1 最大厚: 0.7	経巻具または布巻具か	(針葉樹)	板目材	
W243	273	4区 2C-8j	第3層	不明 網針?	最大長: △ 8.7 最大幅: 1.0 最大厚: 0.3		(針葉樹?)	板目材	
W244	273	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	不明 留針?	最大長: △ 8.7 最大幅: 0.6 最大厚: 0.4		(針葉樹)	板目材	
W245	273	4区 2C-6i	第4層	不明 網針?	最大長: 12.3 最大幅: 1.2 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	
W246	273	4区 2C-7j	第4層	不明	最大長: △ 3.0 最大幅: 1.1 最大厚: 0.3		(針葉樹?)	板目材	
W247	273	4区 2D-6a	4221 溝 埋土	不明	最大長: 7.9 最大幅: 1.6 最大厚: 0.5		(針葉樹)	板目材	
W248	273	4区 2C-6j	第4層相当?	不明	最大長: 11.2 最大幅: 3.2 最大厚: 0.5		(針葉樹)	柵目材	4192 溝に該当
W249	273	4区 2C-7i	第4層	不明	最大長: △ 8.6 最大幅: 2.9 最大厚: 0.6	切欠きのある板	(針葉樹)	板目材	
W250	273	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	不明	最大長: △ 14.5 最大幅: △ 2.7 最大厚: 0.3		(針葉樹)	板目材	檜扇形製品?
W251	273	4区 2C-6j	4040 ビット 埋土	不明 有頭棒	最大長: 5.4 最大幅: 1.8 最大厚: 1.3		(針葉樹?)	芯持材	
W252	273	4区 2C-6j	第4層	不明	最大長: △ 9.6 最大幅: 1.7 最大厚: 1.7		(針葉樹?)	芯持材	
W253	273	4区 2C-6j	第4層	不明 矢柄 (中柄)?	最大長: 3.4 最大幅: 1.2 最大厚: 1.1		(針葉樹?)	芯持材	
W254	273	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	不明 棒状製品	最大長: △ 27.0 最大幅: 1.6 最大厚: 1.3		(針葉樹)	芯去材	
W255	273	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	不明 棒状製品	最大長: △ 19.2 最大幅: 1.8 最大厚: 1.1		(針葉樹)	芯去材	一端は尖端
W256	273	3区 2D-5e	3003 溝 埋土上層	不明 棒状製品	最大長: △ 43.6 最大幅: 1.5 最大厚: 0.9		(針葉樹)	芯去材	
W257	273	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	不明 棒状製品	最大長: △ 15.5 最大幅: 1.3 最大厚: 0.8		(針葉樹)	芯去材	
W258	273	3区 2D-7c	3014 溝 埋土	不明 棒状製品	最大長: △ 18.0 最大幅: 1.6 最大厚: 1.5		(針葉樹)	芯去材	
W259	273	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	不明 網針状製品	最大長: 24.6 最大幅: 1.7 最大厚: 1.0		(針葉樹)	芯去材	
W260	273	3区 2D-7b	第3層	不明 脚?	最大長: 16.4 最大幅: 3.8 最大厚: 3.8	建築部材 (垂木) の転用か	(広葉樹?)	芯持材	

表 59 木器観察表 (10)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ ()は目視	木取り	備考
W261	274	4区 2C-6i	4192 溝 埋土	不明	最大長:130 最大幅:26 最大厚:21	端部炭化	(針葉樹)	芯去材	
W262	274	4区 2C-6i	第44層	不明	最大長:11.2 最大幅:44 最大厚:3.3	切りこみ状の溝を3条有す	(針葉樹?)	芯去材	
W263	274	3区 2D-6b	第4層	不明 柄	最大長:△11.8 最大幅:3.9 最大厚:3.5		マツ属	芯持材	
W264	274	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	不明 柄状製品	最大長:△23.0 最大幅:3.1 最大厚:1.4		(針葉樹)	板目材	
W265	274	4区 2C-9i	第3層相当層	不明 部材?	最大長:24.4 最大幅:3.3 最大厚:2.1		(針葉樹)	板目材	
W266	274	3区 2D-7c	第3層	不明 建築材?	最大長:37.0 最大幅:4.9 最大厚:1.9		(針葉樹)	板目材	
W267	274	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	不明 木錘?	最大長:10.8 最大幅:7.1 最大厚:6.7		(広葉樹)	芯持材	
W268	274	3区 2D-7d	3006 溝 埋土	不明	最大長:10.2 最大幅:3.0 最大厚:0.4	上下端平面削り、左右両辺削り	(針葉樹)	板目材	
W269	274	3区 2D-6e	3002 集石 第2-2層	不明	最大長:18.0 最大幅:4.0 最大厚:0.6	上端・左右両辺削り	(針葉樹)	追紐目材	桶側板または木筒状木製品
W270	274	4区 2D-6a	4212 ビット 埋土	不明	最大長:10.4 最大幅:13.5 最大厚:6.2		(針葉樹)	縦木取り	
W271	274	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	不明 斎串(人形)	最大長:△7.5 最大幅:△1.2 最大厚:0.5	側面削り調整	(針葉樹)	板目材	
W272	274	3区 2D-7e	3003 溝 埋土上層	不明	最大長:△11.9 最大幅:5.0 最大厚:1.0		(針葉樹)	板目材	
W273	274	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	不明	最大長:△8.7 最大幅:3.0 最大厚:0.7		(針葉樹)	板目材	
W274	274	4区 2C-7j	4038 溝 埋土	不明 形代?	最大長:△16.3 最大幅:4.7 最大厚:1.0		(針葉樹)	板目材	
W275	275	3区 2D-8e	3003 溝 埋土下層	槽?	最大長:△50.6 最大幅:△7.2 最大厚:4.5		(針葉樹)	縦木取り	
W276	275	3区 2D-6b	3005 集石 第2-2層	不明	最大長:△36.0 最大幅:△12.4 最大厚:2.3		(針葉樹)	縦木取り	
W277	275	3区 2D-6e	3003 溝 埋土上層	不明 経(布)巻具?	最大長:△18.9 最大幅:3.2 最大厚:1.7		(針葉樹)	板目材	
W278	275	3区 2D-7e	3003 溝 埋土下層	不明	最大長:△39.1 最大幅:3.2 最大厚:1.1		(針葉樹)	板目材	
W279	275	4区 2C-7j	4191 溝 埋土	把手?	最大長:12.9 最大幅:△10.2 最大厚:5.1		(針葉樹)	縦木取り	
W280	275	4区 2C-8j	第3層	不明 容器?	最大長:20.0 最大幅:4.9 最大厚:0.9	側縁孔1カ所	(針葉樹)	縦木取り	
W281	275	3区 2D-8e	3006 溝 埋土下層	不明	最大長:14.5 最大幅:4.4 最大厚:1.8	自在か	(広葉樹)	追紐目材	
W282	275	4区 2D-8a	4044 土坑 第3層	不明 自在?	最大長:21.2 最大幅:4.2 最大厚:2.4		(針葉樹?)	板目材	
W283	275	4区 2C-7i	第4層	不明 自在?	最大長:30.9 最大幅:5.5 最大厚:2.3		(針葉樹?)	板目材	
W284	276	4区 2C-7h	第3層	不明	最大長:55.6 最大幅:6.0 最大厚:5.8	柄穴状の長方形の孔3カ所、内部列り貫き	(針葉樹)	芯持材	
W285	276	3区 2D-6b	第3層	不明	最大長:△26.1 最大幅:△10.8 最大厚:2.5	一部炭化	(針葉樹)	追紐目材	W286と同一品?(接合せず)
W286	276	3区 2D-6b	第3層	不明 板状製品	最大長:△26.4 最大幅:△16.9 最大厚:2.2	一部炭化	(針葉樹)	追紐目材	W285と同一品?(接合せず)
W287	276	4区 2D-7a	4221 溝 埋土	不明	最大長:△21.1 最大幅:5.6 最大厚:4.0	一端切断か	(針葉樹)	板目材	
W288	277	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	木筒状木製品	最大長:13.8 最大幅:2.1 最大厚:0.5	表裏面平滑、上端・左右削り調整、下端切折か	(針葉樹)	板目材	墨痕なし
W289	277	4区 2D-7a	4038 溝 埋土	木筒状木製品	最大長:21.5 最大幅:3.4 最大厚:0.8	上端・左右削り、下端切折	(針葉樹)	板目材	墨痕なし
W290	277	4区 2C-7i	4038 溝 埋土	木筒状木製品	最大長:△27.8 最大幅:2.1 最大厚:0.4	実測面削り調整により平滑、裏面は未調整 上端圭頭状、左右削り、下端割れ	(針葉樹)	板目材	墨痕なし

表 60 木器観察表 (11)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	特徴 (調整等)	樹種 ※ () は目視	木取り	備考
W291	277	4区 2C-7g	第2層	荷札木筒状木製品	最大長: △ 13.8 最大幅: 2.6 最大厚: 0.7	上端・左辺削り、右辺・下端割れ	(針葉樹)	柱目材	墨痕なし
W292	278	3区 2D-7b	3006 溝埋土最下層	かご	最大長: △ 34.8 最大幅: △ 43.2		マタタビ		
W293	282	4区 2D-6b	4228 ビット埋土中～下層	木筒	最大長: △ 18.7 最大幅: 2.5 最大厚: 0.5	上端・左右両辺削り、下端折れ	スギ	柱目材	019 型式
W294	282	4区 2C-7h	4038 溝埋土	木筒	最大長: △ 5.2 最大幅: 2.3 最大厚: 0.4	上下端折れ、左右両辺削り	(スギ)	柱目材	019 型式
W295	282	4区 2C-7i	4038 溝埋土	木筒	最大長: 8.6 最大幅: 3.3 最大厚: 0.3	四周成形	(針葉樹 (スギまたはヒノキ科))	板目材	065 型式
W296	282	4区 2C-7h	4038 溝埋土	木筒	最大長: △ 26.0 最大幅: 2.5 最大厚: 0.5	上端折れ、下端削り、左右両辺削り	(ヒノキ科)	板目材	051 型式
W297	283	3区 2D-7c	掘立柱建物 9 3450 ビット埋土下層	木筒	最大長: 39.9 最大幅: △ 3.4 最大厚: 0.9	上下端切断、左辺削り、右辺二次の削り	(スギ)	板目材	記録木筒・081 型式
W298	284	3区 2D-8e	3006 溝埋土下層	木筒	最大長: △ 11.5 最大幅: △ 2.3 最大厚: 0.5	上下端折れ、左辺削り、右辺二次の削り	(スギ)	板目材	記録木筒?・081 型式
W299	284	3区 2D-8e	3006 溝埋土下層	木筒	最大長: △ 5.2 最大幅: △ 2.1 最大厚: 0.4	上端二次の切断、下端折れまたは切断、左右両辺削り	(針葉樹)	柱目材	記録木筒?・081 型式
W300	284	3区 2D-8e	3006 溝埋土	木筒	最大長: △ 7.3 最大幅: 1.7 最大厚: 0.4	上端折れ、下端切断、左右両辺削り、W301 と同一材か	(スギ)	柱目材	帳簿木筒・019 型式
W301	284	3区 2D-8e	3006 溝埋土	木筒	最大長: △ 10.6 最大幅: 1.7 最大厚: 0.5	上端折れ、下端切断か、左右両辺削り、W300 と同一材か	(スギ)	柱目材	帳簿木筒・019 型式
W302	285	3区 2D-7e	3003 溝埋土下層	木筒	最大長: △ 15.0 最大幅: 6.0 最大厚: 0.7	上端切断、下端二次の削り、左右両辺削り	(ヒノキ科)	板目材	文書木筒・011 型式
W303	285	3区 2D-8e	3006 溝埋土下層	木筒	最大長: △ 6.7 最大幅: △ 1.3 最大厚: 0.5	上端削り、下端折れ、左右両辺削り	(ヒノキ科)	板目材	文書木筒?・081 型式
W304	285	3区 2D-6e	3003 溝埋土上層	木筒	最大長: △ 13.6 最大幅: 2.3 最大厚: 0.8	上下端折れ、左右両側削り	ヒノキ	板目材	習書木筒・081 型式
W305	286	3区 2D-8e	3006 溝埋土下層	木筒	最大長: △ 8.4 最大幅: 1.4 最大厚: 0.3	上端・左辺削り、下端切断、右辺削りか	(スギ)	板目材	付札木筒?・051 型式、取上げ「3003 流路」は誤りのため修正
W306	286	3区 2D-5e	3003 溝埋土上層	木筒	最大長: △ 8.7 最大幅: △ 0.8 最大厚: 0.6	上端折れ、下端切断、左右両辺削り	(スギ)	板目材	性格不明・081 型式
W307	286	3区 2D-8e	3006 溝埋土	木筒	最大長: △ 7.5 最大幅: △ 1.6 最大厚: 0.4	上端折れ、下端・左辺削り (下端二次の削りか)、右辺削り	(針葉樹)	柱目材	不明・081 型式
W308	286	3区 2D-5e	3003 溝埋土上層	木筒	最大長: △ 12.9 最大幅: △ 1.5 最大厚: 0.5	上下両端折れ、左右両辺削り	(スギ)	柱目材	性格不明・081 型式
W309	286	4区 2D-7a	第2層	木筒	最大長: △ 8.8 最大幅: 1.9 最大厚: 0.5	上端削り、下端折れ、左右両辺削り	(スギ?)	板目材	019 型式
W310	286	4区 2C-8i	第2層	木筒	最大長: △ 6.3 最大幅: △ 1.6 最大厚: 0.2	上端削り、下端折れ、左右両辺削り	(スギ)	柱目材	081 型式
W311	286	4区 2C-7g	第2層	木筒	最大長: △ 5.8 最大幅: △ 1.5 最大厚: 0.5	上端切断、下端折れ、左右両辺削り	(スギ)	板目材	081 型式

樹種のうち、W294～W303・W305～W311は実態顕微鏡による観察

表 61 金属器観察表 (1)

掲載番号	挿図番号	調査区	遺構層位	種別	法量 (cm) (△:残存)	重量 (g)	特徴	備考
M1	22	2区 3D-1g	第1層	銅銭 開元通寶	最大長: 2.4 最大幅: 2.4 最大厚: 0.1	2.3		
M2	26	2区 2D-10g	第2層	銅銭 元豊通寶	最大長: 2.6 最大幅: 2.6 最大厚: 0.1	3.82		
M3	279	4区 2D-7a	4038 溝埋土下層	耳環	最大長: 1.85 最大幅: 1.95 最大厚: 0.4	4.26	金または銀張りだった可能性が高いが、腐食が進行して表面が剥離し、銅地が露出	
M4	279	4区 2D-7a	4038 溝最上層	環状銅製品	最大長: 2.25 最大幅: 2.65 最大厚: 0.4	1.14		柄頭または鏝か
M5	279	3区 2D-6e	3003 溝埋土上層	巡方	最大長: 1.9 最大幅: 2.1 最大厚: 0.5	3.2	表裏金具あり、脚鏝2箇所	大孔・脚鏝式

表 62 金属器観察表 (2)

掲載 番号	挿図 番号	調査区	遺構 層位	種別	法量 (cm) (△: 残存)	重量 (g)	特徴	備考
M6	279	4区 2C-6i	第4層	巡方(長方形)	最大長: 1.5 最大幅: 3.1 最大厚: 0.7	10.43	長方形タイプの巡方で、表面及び側面に黒漆が遺存する	重量は土砂含む
M7	279	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	丸鞘	最大長: 2.5 最大幅: 3.7 最大厚: 0.9	11.99	表金具、脚鉄3箇所	細長孔・脚鉄式
M8	279	3区 2D-8d	3006 溝 埋土	鈍尾	最大長: 4.0 最大幅: 3.0 最大厚: 0.5	8.72	裏金具、外紙が4箇所遺存	田中広明氏分類b類(銅製鈍尾II類、 外紙式)
M9	279	4区 2C-7h	4038 溝 埋土	銅銭 和同開珎	最大長: 2.5 最大幅: 2.45 最大厚: 0.17	2.38		
M10	279	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	銅銭 富壽神寶	最大長: 2.4 最大幅: 2.4 最大厚: 0.2	3.2		
M11	279	4区 2C-8g	第1層	銅銭 開元通寶	最大長: 2.4 最大幅: 2.4 最大厚: 0.15	3.62		唐銭、非・紀地銭(会昌開元、845-)、 裏面に背下月
M12	279	4区 2C-6i	第1層	銅銭 元豊通寶	最大長: 2.45 最大幅: 2.45 最大厚: 0.15	3.78		宋銭、元豊元年(1078年)初鑄
M13	279	4区 2C-7h	第2-2層	銅銭 政和通寶	最大長: 2.45 最大幅: 2.45 最大厚: 0.15	2.87		宋銭、政和元年(1111年)初鑄
M14	279	3区 2D-6c	客土	銅銭 寛永通寶	最大長: 2.3 最大幅: 2.3 最大厚: 0.05	1.55		
M15	279	4区 2C-7i	表土	銅銭 寛永通寶	最大長: 2.2 最大幅: 2.2 最大厚: 0.19	1.94		
M16	279	4区 2D-6a	第4-2層	鉄鏃	最大長: △ 5.85 最大幅: △ 2.1 最大厚: 0.15	5.96	鑿頭式(または方頭斧箭形式)	
M17	280	3区 2D-6c	3162 溝 埋土	流出溝滓	最大長: 3.9 最大幅: 4.9 最大厚: 2.9	85.11	上面に細かな流れ皺が認められる流出溝滓。破面は上手・左右の側部の3面を 数える。2片に割れており、割れ口を見ると、上面表皮直下の気孔が肥大して いる。上面の流れ皺は右側部下手に向かい分岐する。下面は舟底状だが、特に 上手側で不規則な凹凸がある。	分析試料 YOH-1 (写真上: 48.58、下: 36.53g)
M18	280	3区 2D-5c	3162 溝 埋土	流出溝滓	最大長: 3.9 最大幅: 5.1 最大厚: 2.0	52.03	上面に流れ皺が広がる扁平な流出溝滓。左右の側部から上手が破面となる。下 面は平坦だが土砂を噛み込んで凹凸が目立つ。	分析試料 YOH-3
M19	280	3区 2D-6c	3162 溝 埋土	流出溝滓?	最大長: 5.0 最大幅: 5.6 最大厚: 2.5	76.7		
M20	281	4区 2C-6j	第2層以下	流出溝滓	最大長: 4.5 最大幅: 4.9 最大厚: 4.7	155		第4-1層に帰属するものか
M21	281	4区 2C-7h	第3層	流出溝滓	最大長: 3.1 最大幅: 3.2 最大厚: 4.1	44.97		
M22	281	4区 2C-7i	第4層	流出溝滓	最大長: 3.1 最大幅: 3.1 最大厚: 3.2	31.94		
M23	281	4区 2C-6i	第4層	流動滓	最大長: 2.3 最大幅: 2.7 最大厚: 1.2	9.88		
M24	281	4区 2D-7a	第4-2層	鍛冶滓	最大長: 1.9 最大幅: 2.5 最大厚: 2.1	6.36	不整楕円形を呈す軽量の鍛冶滓。上面左手で小さな気泡が目立つ。上手側を中 心に上面から下面にかけて5mm前後の木炭を噛み込むだけでなく、微細な木 炭痕も認められる。	分析試料 YOH-4
M25	281	4区 2D-7a	第4-2層	鍛冶滓	最大長: 2.6 最大幅: 1.7 最大厚: 2.2	5.83		
M26	281	4区 2D-7a	第4-2層	鍛冶滓	最大長: 1.7 最大幅: 2.4 最大厚: 1.2	3.72		
M27	281	4区 2D-7a	第4-2層	鍛冶滓	最大長: 1.7 最大幅: 1.4 最大厚: 1.0	1.36		
M28	281	4区 2D-7a	第4-2層	鍛冶滓	最大長: 1.7 最大幅: 1.5 最大厚: 1.4	2.65		
M29	281	3区 2D-6c	3433 溝 埋土	鍛冶滓	最大長: 3.1 最大幅: 2.4 最大厚: 1.9	12.92		
M30	281	3区 2D-6c	第2-2層	鍛冶滓	最大長: 2.7 最大幅: 2.5 最大厚: 0.9	6.55		
M31	281	3区 2D-8d	3006 溝 埋土	楕形鍛冶滓	最大長: 9.5 最大幅: 7.0 最大厚: 2.3	152	平面不整楕円形を呈す小型の楕形鍛冶滓。右側部が破面となる。側部から下面 は緩やかな皿状をしている。上面は中央部に向かいわずかに窪む。上手側部、 下面を中心に木炭を噛む。下面には中小の気泡が目立つ。	分析試料 YOH-2
M32	281	3区 2D-7c	3006 溝 埋土	楕形鍛冶滓	最大長: 4.9 最大幅: 4.6 最大厚: 2.7	38.67		
M33	281	3区 2D-6c	3120 ビット 柱痕	楕形鍛冶滓	最大長: 3.8 最大幅: 2.4 最大厚: 1.1	8.85		

第Ⅶ章 自然科学分析

第1節 良田平田遺跡の古環境解析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

良田平田遺跡は湖山池の南側に位置し、湖山池南岸部から南北方向に延びる丘陵に挟まれた谷筋に立地する。これまでの発掘調査により、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺構や遺物が認められている。今回の調査では、調査区の土地利用状況及び古植生に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、X線写真撮影観察、土壌薄片観察、植物化石分析（珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、大型植物化石分析）を実施する。

1. 調査地点

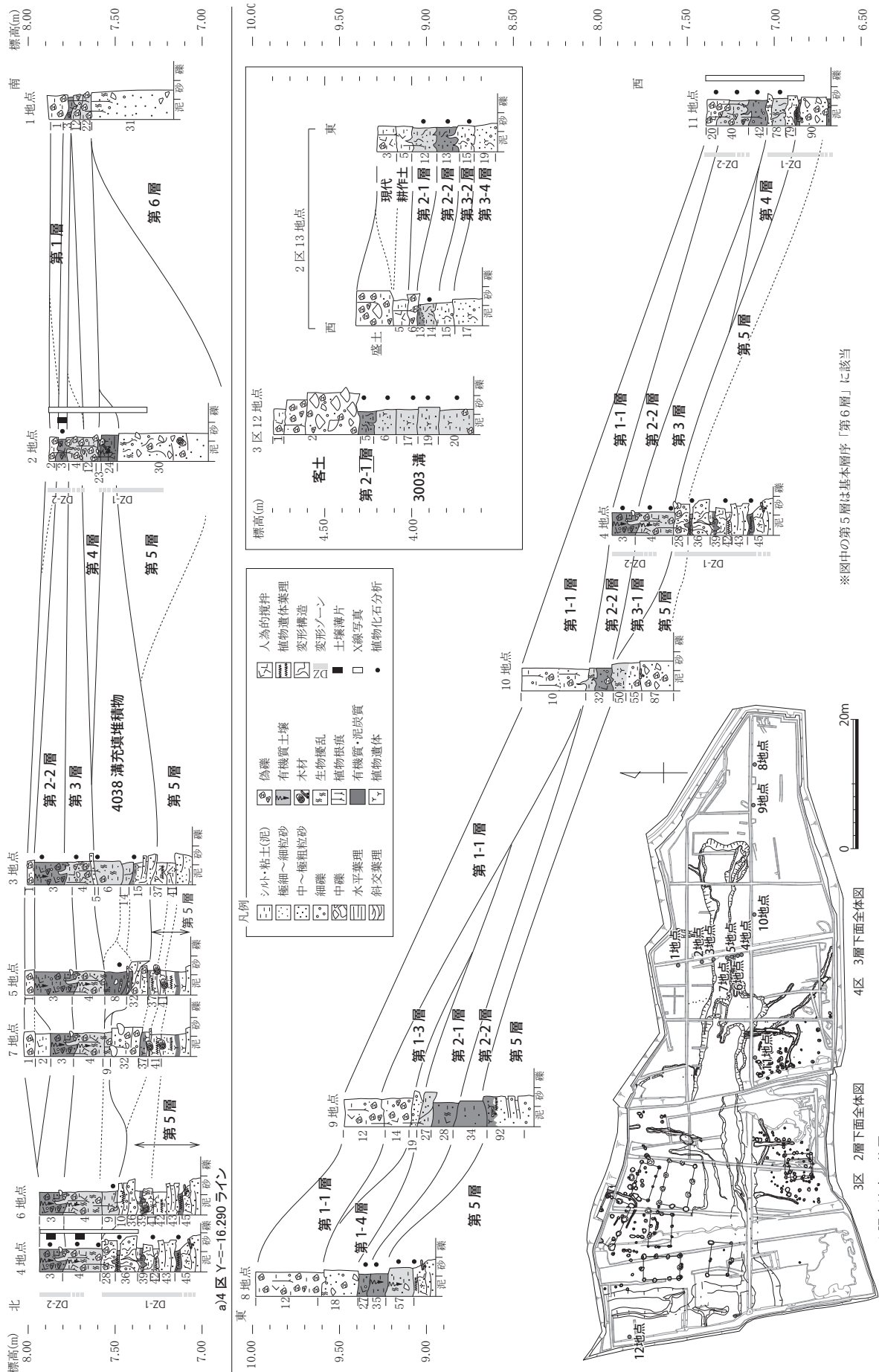
今回の調査区は、佐藤・小野（2013）による地形分類に基づく、2区・3区が湖山池南岸の開析谷の氾濫原、4区が崖錐・扇状地に位置する。そのため、各調査区の堆積層の累重状況は地形発達過程の違いに起因して異なっている。以下に各調査区・調査地点の堆積層の累重状況について、堆積物試料の層相及び調査時の断面図・写真に基づいて述べる（第297図）。なお、各調査地点の堆積層の累重中には地震動に起因する変形構造が認められるが、ここでは初生の構造について記述し、変形構造についてはX線写真観察結果と併せて後述する。また、層名は、調査後の遺物・遺構等の年代観に基づく層序対比によって設定された層名（図中のゴシック体表記）を踏襲し、細分は調査時の層名（柱状図左側の明朝体の層名）を合わせて記載する。

（1）2区13地点〔第19・297図〕

調査地点は2区北壁の古代の畦畔が確認されている地点である。現代の盛土・耕作土直下の第2-1層は、暗灰色を呈する、粗粒砂・細粒砂混じり極細粒砂質泥からなり、著しく擾乱され初生の堆積構造は認められない。本層の形成年代は、出土遺物及び3・4区との層序対比から中世（13～15世紀頃）と推定されている。第2-2層は黒色を呈する中粒砂混じり極細粒砂質泥からなる。土壌生成が進行した堆積物で腐植が集積している。形成年代は、中世（12～13世紀頃）と推定されている。第3-2・3-3層は上方細粒化する暗灰黄～褐灰色の細粒砂～細粒砂質泥で、細礫・炭片が混じる。形成年代は古代と推定されている。第3-3層より下位には、畦畔の芯土となっている上方細粒化する砂礫～砂（河川堆積物）、さらにその下位に有機質砂質泥が堆積している。

（2）3区12地点〔第44・297図〕

調査地点は3区西壁北部の3003溝が確認されている地点である。現在の客土直下の第2-1層は土壌生成が進行している黒色腐植質中粒砂混じり泥からなる。第2-1層に覆われている3003溝の充填堆積物は上方細粒化する中粒砂から砂質泥からなる。分析層準である20～6層は溝内の水流が減衰した後の放棄流路のような堆積環境で形成された堆積物で、各層上部は土壌生成がやや進行している。各層の形成年代は、出土遺物から、第2-1層が中世、室町期、3003溝充填堆積物は古代と推定される。



第 297 図 調査地点の層序及び試料採取位置

(3) 4区〔第297図、写真5～9〕

4区は3区側に開口する枝谷に位置する。調査区の堆積層は大きく第1～6層に区分されている。

第1層：本層は灰黄褐色を呈する粗粒砂・中粒砂混じり泥と、その偽礫・微小ブロック（フラグメント）からなり、炭片や遺物が混じる。偽礫の大きさは様々で、その長軸方向の配向は不規則で、著しく攪拌されている。下位層との層界は明瞭で、凹凸のある層理面をなす。これらの層相から、本層は人為的営力により形成された客土と判断され、形成年代は、出土遺物から近世以降と推定される。

第2層：本層は黒褐～暗灰色を呈する腐植質砂質泥～泥質砂からなり、第2-1層と第2-2層に細分される。第2-1層は谷奥部に残存し、やや腐植に富む砂質泥からなる。第2-2層は谷内全域に分布し、腐植に富む砂質泥～泥質砂からなる。いずれも細礫・細粒砂・粗粒砂、炭片、遺物、泥質砂の偽礫・微小ブロックが混じり、著しく攪拌されており、偽礫状の構造が確認される。また、間隙・孔隙の密度が相対的に高く、土壌生成が進行している状況が窺える。上位層準から連続する根成孔隙も密に分布する。下位層との層界は明瞭で、凹凸のある層界をなし、第2-2層下部には第3層由来の偽礫が散在する。これらの層相から、第2層は人為的に攪拌された堆積物で、耕作土と判断される。形成年代は出土遺物から、第2-1層が15～16世紀（室町期）、第2-2層が13～14世紀（鎌倉期）と推定される。

第3層：本層は黒褐色～暗褐色を呈する有機質に富む泥質砂とその偽礫・微小ブロックからなり、炭片、礫、花崗岩片、砂質泥の偽礫・微小ブロック、遺物片などが混じる。谷線付近では、不明瞭で不連続な葉理状の構造が部分的に確認され、砂の薄層を挟在する。上部はいずれも著しく攪拌ないし擾乱されている。このような層相から、第3層は谷上部からの間欠的な土砂流出期を挟在する、湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。また、上部層準形成期には人為的営力が及んだと推定される。出土遺物から、9～12世紀頃に形成された堆積物と推定される。なお下位の4038溝充填堆積物との層界は漸移的である。

4038溝は、第5層形成後の谷線部分の地表面を降水や湧水によって洗掘した浅く細い谷で、谷の傾斜が緩くなる斜面中下部で枝状に分岐している。この浅谷充填堆積物は、侵食・堆積を繰り返している、上方細粒化するトラフ型斜交葉理構造が発達する極粗粒砂～中粒砂から細粒砂質有機質泥の積層からなる。この充填堆積物中には人為的営力により投棄されたと見られる遺物が出土し、人為的に浚渫されている痕跡も確認される。本溝の形成時期は、7世紀後葉頃と見られ、8世紀後半～9世紀にかけて埋没したことが推定される。

第4層：中礫、土器片、炭片が不規則に混じる、褐色砂質泥及び泥質砂の偽礫からなる。偽礫の大きさは様々で、不規則に分布する。下位層との層界は明瞭で、凹凸のある層理面をなす。人為的営力により形成された堆積物と判断される。下位堆積物との層界は明瞭である。11地点の第4層からは8世紀の遺物が出土している。1地点より東側の谷斜面に分布する第44層から古墳時代中期～飛鳥時代の遺物が出土している。

第5層：4区第4層から基盤堆積物である第6層までの堆積物の総称で、基本層序（第Ⅶ章第1節）の第6層にあたる。谷線に位置する4地点の第5層は、複数の堆積層からなり、最上部の28層は塊状をなすにぶい浅黄色を呈する泥質砂からなる。下位層との層界は明瞭である。また、本層中・上部には場所によって中礫～大礫が混じる。本層は4区2地点第5層の崩積土の再堆積した土石流堆積物と見られる。本層上部は人為的に攪拌されているように見える。その直下の36層～45層はいずれも

上方細粒化する堆積物の積層からなる。36層は泥混じり細粒～中粒砂から有機質砂質泥、39層は灰色を呈する泥質細粒砂から腐植に富む砂質泥、42層は植物遺体葉理を挟在する灰色泥質細粒砂～砂混じり泥、43層は低角度のトラフ型斜交葉理の発達する中粒砂～細粒砂、45層は上方細粒化する細粒砂、砂質泥、植物遺体葉理を挟在する有機質泥からなる。このような層相から、谷線部分では間欠的な土砂流失が起り、流出後には地下水位の高い湿地のような堆積場になっていたことが推定される。また、36層～45層の堆積期間を通じて、湿地の環境が維持されており、地下水位は上昇傾向にあった可能性がある。また、上位にかけて堆積物が粗粒化していることから、谷沿いの山地斜面の物質移動が起りやすい状況、例えば植生空間にギャップが形成されるなど、周辺環境が変化していったことが推定される。なお、これらの層準の形成期には谷奥部では土壤生成が進行しており、立木が確認されていることから、当該期の谷奥部に林分が成立していたことが推定される。また、これらの堆積層形成期には2地点が位置する谷周縁部では、丘陵斜面側より供給されたにぶい浅黄色～灰白色を呈する、泥質中粒砂が崖錐状に堆積している。本層中には中礫・偽礫・丸木の木材が取り込まれている。また、第6層との層界では、斜面下方に向かうすべり面のような構造が確認される。これらのことから、2地点下部の第5層は谷斜面の崩壊により形成された崩積堆積物（崩積土）と判断され、堆積後に多少クリープしている可能性がある。また、本層上部は第4層形成期の人為的に削平されているが、土壤生成作用が及んでいることから堆積後には植生に覆われていたことが推定される。

第6層：谷の基盤をなす山地を構成する花崗岩の風化堆積物ないし崩積土の可能性が高い、にぶい浅黄色を呈する、泥質中粒砂からなる。本層は調査底部に部分的に確認されており、成因については検討の余地がある。

2. 試料

各分析用の試料は、放射性炭素年代測定が4地点の第5層最上部（36層最上部）、第5層下部（45層最上部）の木材遺体、X線写真撮影観察は2・3・11地点の不攪乱柱状試料、土壤薄片作製鑑定は2地点第2層（3層）、4地点第2層（3層）と第3層（4層）、珪藻分析は第6地点第3層（9層）、5地点4038溝充填堆積物（8層）、花粉分析は4地点第2-2層（3層）・第5層（45層）と第6地点第3層（9層）、植物珪酸体分析は2地点・3地点・4地点・5地点・6地点・8地点・11地点・12地点・13地点の第1-1a層～第5層の30層準について実施する。

3. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料表面の汚れをピンセット等により物理的に除去する。超純水で洗浄後、試料を燃焼させ、不純物（水など）を取り除き、精製された二酸化炭素（CO₂）を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正結果は、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正計算は、測定誤差 σ と 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは σ や 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) X線写真撮影観察

調査地点の不攪乱柱状試料について、厚さ 1 cm まで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧 50 kVp、電流 3 mA、照射時間 270 秒の X 線強度条件において X 線写真撮影を実施した。撮影は財団法人元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、X 線写真では、礫や酸化鉄など密度の高い物質が明色(白色)を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。

(3) 土壌薄片作製鑑定

土壌薄片作製試料は、80℃で1日間乾燥した後、樹脂(ペトロボキシ及びシアノボンド)で固化し、片面の研磨を実施する。固化及び研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ 70 μm 程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーガラスを接着する。なお、土壌薄片による層相や構造記載は、久馬・八木久訳監修(1998)の「土壌薄片記載ハンドブック」を参照した。

(4) 珪藻分析

試料を湿重で 5 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4 時間放置)の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上を同定・計数する。化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する。珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985 ~ 1991)、Desikachary (1987)などを参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類する。さらに淡水生種は塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類する。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石 100 個体以上が検出された試料について珪藻化石群集層位分布図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する(図中の●印は、総数が 100 個体以上産出した試料うち 1%以下の種を、○印は総数 100 個体未満の場合の産出を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度を示す。

(5) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス(無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液)処理

による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉（1973）、中村（1980）などを参考にす。結果は同定・計数結果の一覧表及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(6) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料を乾燥・秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）の一覧表と層位分布図として示す。

(7) 大型植物化石分析

堆積物から種実や葉などの大型植物遺体を分離・抽出するために試料100ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を抽出する。多量確認されるイネの類は、主に基部の果実序柄を抽出する。大型植物遺体の同定は現生標本、石川（1994）、中山ほか（2000）などを参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示する。その他の抽出物は一覧表の下部に一括し、量比を定性的に示す。分析後の大型植物遺体は分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し、保管する。

4. 結果

表 63 放射性炭素年代測定結果

地点 層位	種類	処理 方法	測定年代 BP	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD		cal BP	
4地点 36層 最上部	木材 (枝)	AAA	2,170 ± 30	-30.83 ± 0.34	2,070 ± 30 (2,069 ± 26)	σ	cal BC 152 - cal BC 139	cal BP 2,101 - 2,088	0.114	IAAA- 123685
							cal BC 112 - cal BC 45	cal BP 2,061 - 1,994	0.886	
						2σ	cal BC 171 - cal BC 37	cal BP 2,120 - 1,986	0.959	
							cal BC 30 - cal BC 20	cal BP 1,979 - 1,969	0.018	
4地点 45層	木材 (枝)	AAA	2,360 ± 20	-26.35 ± 0.39	2,340 ± 30 (2,341 ± 26)	σ	cal BC 409 - cal BC 386	cal BP 2,358 - 2,335	1.000	IAAA- 123686
							cal BC 510 - cal BC 434	cal BP 2,459 - 2,383	0.178	
						2σ	cal BC 428 - cal BC 371	cal BP 2,377 - 2,320	0.822	

- 1)処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。
- 2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 4)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用し
- 6)暦年の計算には、補正年代に(0)で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7)年代値は、一桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は一桁目を丸めていない。
- 8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である
- 9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定及び暦年較正結果を表 63 に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、4 地点第 5 層上部（36 層最上部）が 2070 ± 30 BP、第 5 層下部（45 層）が 2360 ± 20 BP を示す。この年代値は西本編（2006・2007）によると、各々、弥生時代中期、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭に比定される。このことから、4 区第 5 層の形成年代は縄文時代晩期末～弥生時代中期頃、4 区第 5 層最上部の土石流の発生年代は弥生時代中期～古墳時代までの間の時期と推定される。

(2) X線写真観察

試料の昼光写真及び X 線写真を写真 5～7 に示す。4 区の堆積物の累重中には、層序対比される 2 つの垂直範囲において、古地震痕跡と見られるの堆積物の変形構造が認められた。Matsuda (2000) は、変形構造が連続的に現れる垂直範囲を変形ゾーン (deformation zone) と呼んでいる。下位より変形ゾーン DZ-1・DZ-2 と呼び、X 線写真撮影を実施した 4 区 2 地点・4 地点・11 地点の変形構造について以下に述べる。

4 区 2 地点：本地点は谷の北側斜面に位置する。DZ-1 は、第 5 層（30 層）～第 4 層下部（24 層）から 4038 溝充填堆積物にかけて認められる。崩積土と見られる第 5 層（30 層）中部には、垂直荷重とともに円弧状のせん断応力で生じたと見られる、写真右上から左下方に、下凸の円弧状のせん断面（あるいは変形曲面）が認められる。第 5 層最上部から 4038 溝充填堆積物には、下凸のロード状構造とその上位の羽毛状ないし火焰状の流線パターンが確認される。これら堆積物の変形とともに初生の位置から移動した様々な配向をなす植物遺体片（暗色を呈する部分）が確認される。本来は植物遺体と泥は初生状態では水平葉理をなしていたと考えられる。第 4 層下部（23 層）では暗色に写る泥がちの部分と明色に写る砂がちの領域が混ざり合った水平方向の流線パターンが認められる。本変形ゾーンでは上に向かって水平方向の応力が増す傾向を示し、上端部堆積時時期の地震イベントによって一時に生じた可能性が高い。DZ-2 は、有機質泥質砂、砂質泥、土壌の偽礫からなる人為的営力を受けた堆積物からなる第 3 層～第 1 層にかけて確認される。上端は不明である。第 3 層～第 1 層の変形構造は連続的で、下部で下に凸な荷重構造と、その上位に火焰状・羽毛状の流線パターンが確認される。また、X 線写真で明色を示す砂がちの堆積物下面で円弧状の剪断面が認められる。これらの堆積物は本来は水平に堆積していたと見られるが、地震動により塑性変形したと見られる。

4 区 4 地点：谷央の谷線に位置する。DZ-1 は、第 5 層を構成する 45 層～28 層の垂直範囲で確認される。変形構造は、45 層の上方細粒化する細粒砂～有機質泥層は水平方向の剪断応力により膨らんだような流線と、波打った葉理構造をなす。上部では下に凸な荷重構造が認められる。43 層の低角度のトラフ型斜交層理・葉理をなす中粒砂～細粒砂は、中・上部にデイッシュ・アンド・ピラー構造に似た脱水構造が確認される。砂礫粒子の間隙の大きい部分が幅数 cm で下に凸な弧をなし、不規則な鱗状のパターンを形成しており、この間隙の多い部分を砂礫を浸していた水が抜けたと考えられる。42 層の植物遺体葉理を挟在する灰色泥質細粒砂～砂混じり泥は下凸の荷重により、葉理が不連続となっている。また、下部に下位より引きずり挙げられた砂が見られる。39 層の灰色を呈する泥質細粒砂から腐植に富む砂質泥、36 層の泥混じり細粒～中粒砂から有機質砂質泥層では、写真左側で下凸の強い荷重で屈曲している。また、写真左側の明色を呈する部分では下凸の弧をなすとともに、弧の両端が屈曲して縦方向・斜め方向に延びた袋状の形が集まったパターンをなし、その間に脱水チャンネルと見られる水抜け構造が確認される。一方、やや暗色を呈する部分では火焰状ないし羽毛状の流

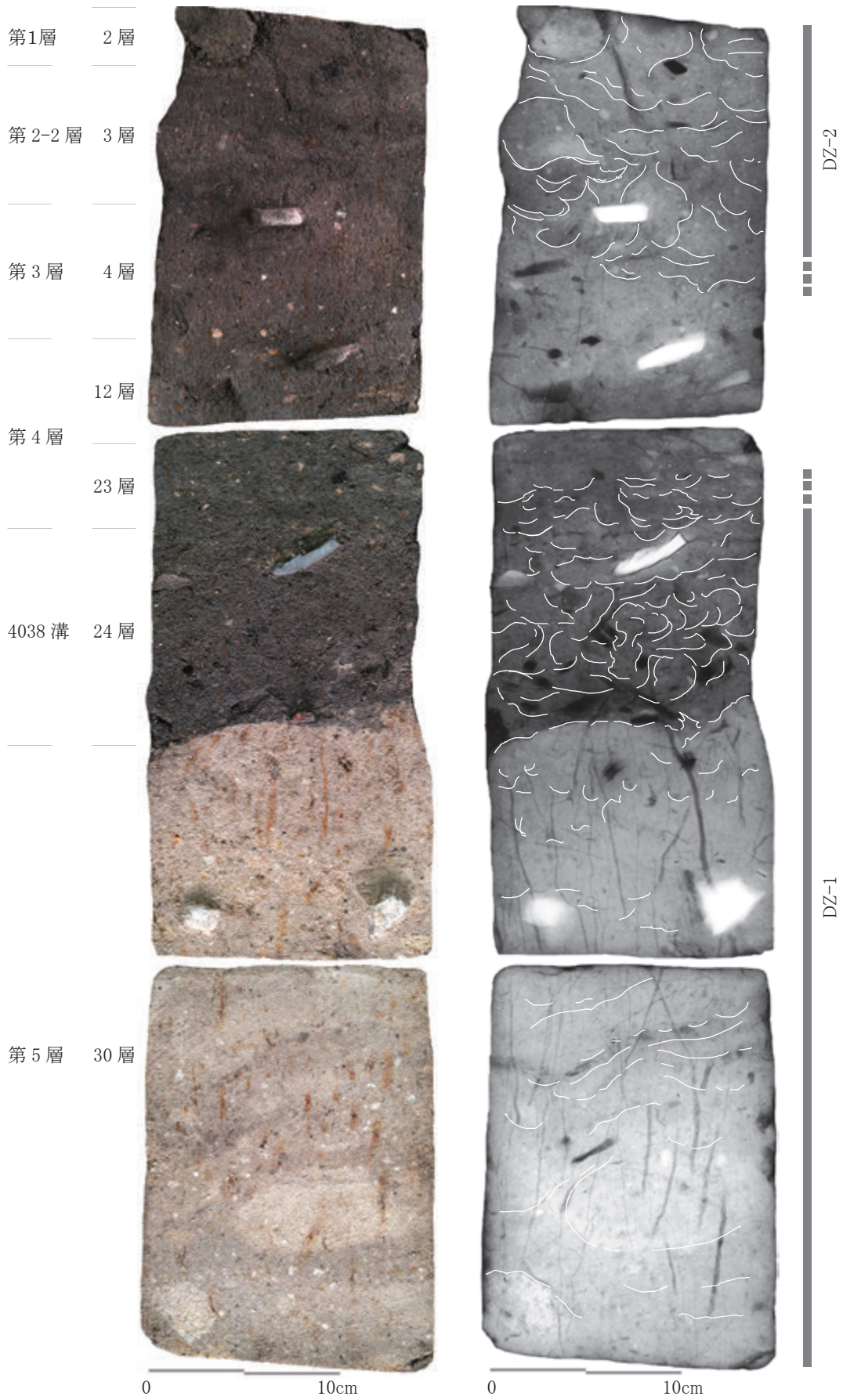


写真5 4区2地点のX線写真

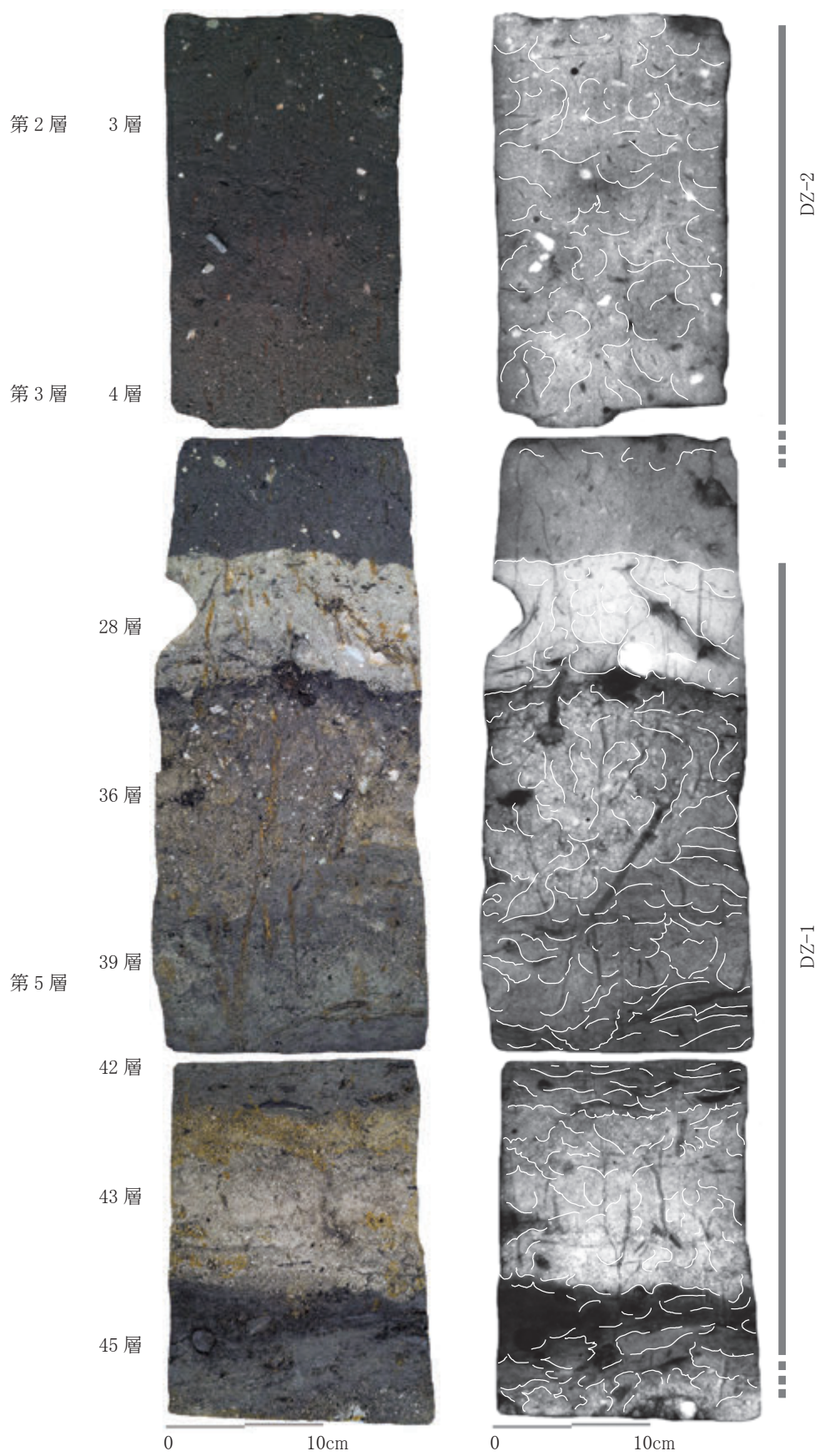


写真6 4区4地点のX線写真

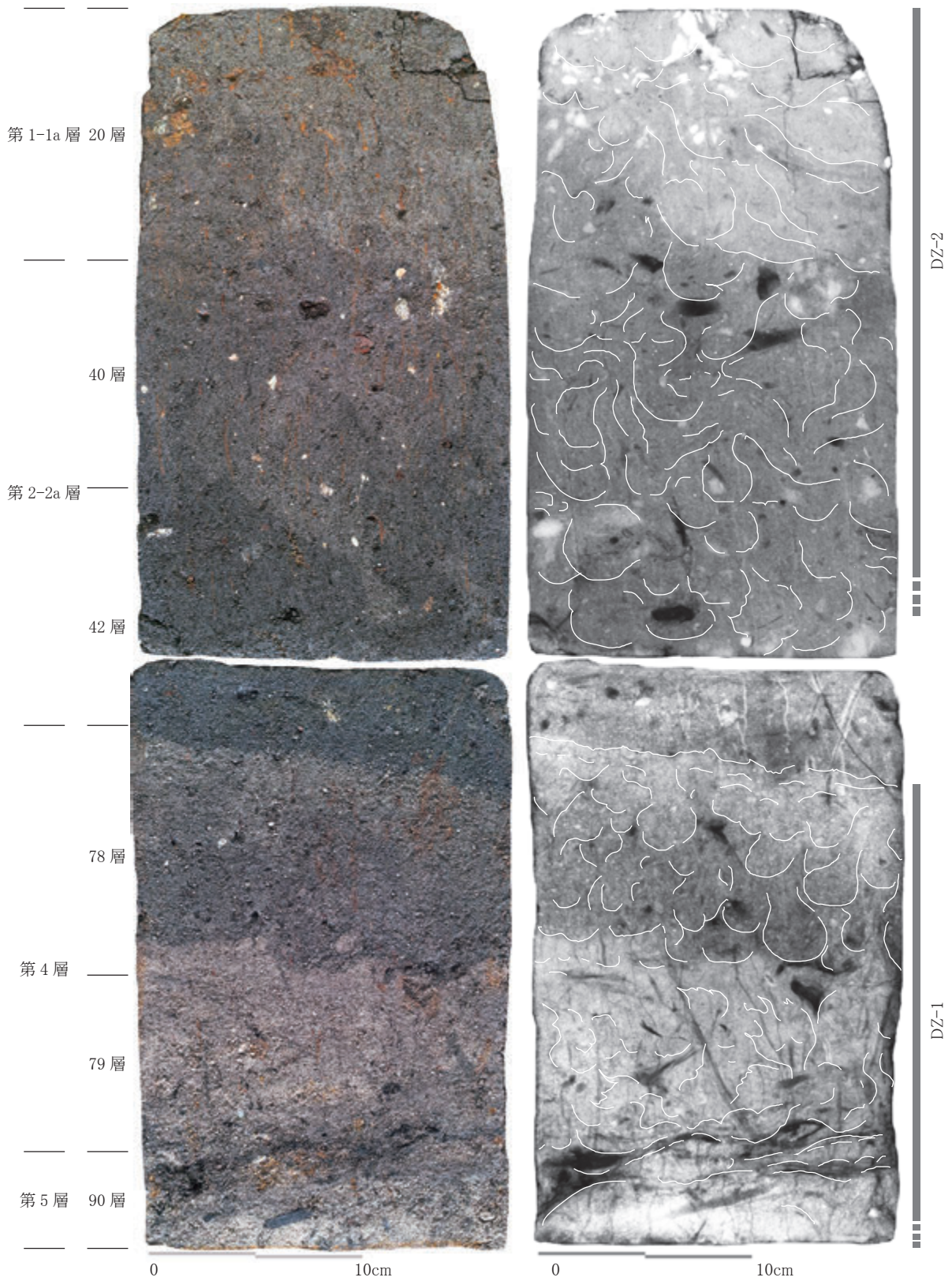


写真7 4区11地点のX線写真

線パターンが確認される。28層も下凸の塑性変形構造をなすが、上端は第3層形成時の人為的擾乱により削平されているように見える。DZ-2は人為的営力が及んでいる第3層（4層）中部～第2層3層）の垂直範囲で確認される。X線写真で暗色に写る泥がちの部分と明色に写る砂がちの領域が混ざり合ったパターンは土壌生成や人為的攪拌によると見られるが、砂がちな領域が泥がちな領域へ下凸な境界をなして接している部分が多く認められる。また第2層と第3層の層界では火焰状の流線パターンが確認され、下位堆積物が上位に引き摺り挙げられている。

4区11地点：谷口付近に位置する。DZ-1は第5層（90層）～第4層（79層・78層）で確認される。第5層（90層）の植物遺体葉理を挟在する砂層は上位から荷重と、水平方向の剪断応力により膨らんだような流線パターンを示す。第4層下部の79層では下部で下凸の荷重構造、上部で羽毛状の流線パターンが確認される。78層では火焰状・羽毛状の流線パターンが確認される。DZ-2は人為的擾乱が及んでいる第2-2層下部（42層）下部～第1-1a層（20層）にかけて確認される。第2-2a層（42層）では下部で下凸の荷重構造、第2-2層上部（40層）から第1-1a層（20層）では連続する火焰状ないし羽毛状の流線パターンが確認され、下位堆積物が上位層準に引き摺り挙げられている。また第1-1a層は写真右側では、荷重構造と見られる、下凸の弧状をなす。

以上の各地点の堆積物では2つの垂直範囲で変形ゾーンが認められた。DZ-1の上端は4038溝充填堆積物であり、地震イベントの発生時期は、7世紀～9世紀頃と推定される。一方、DZ-2の上限は不明であるが、少なくとも第1-1a層が変形していることから、近世以降と推定される。近世以降の地震イベントとしては1943年9月10日の「鳥取地震」があり、それに対比される可能性がある。また、今回のDZ-1・DZ-2は、高住平田遺跡で確認されている古代の地震イベントによるDZ2と、鳥取地震に由来すると見られるDZ3に対比される可能性が強い（パリノ・サーヴェイ、2012）。

（3）土壌薄片写真観察結果

結果を写真8・9に示す。4地点第3層（4層）では、砂粒が密に充填しており、互いに接するようにして堆積している（写真9の1・2）。砂粒間は、腐植を含む泥で充填される。微細構造は、基本的に壁状をなし、細長いチャンネル状の形態を示すものが僅かに分布する。層内には、種実遺体な

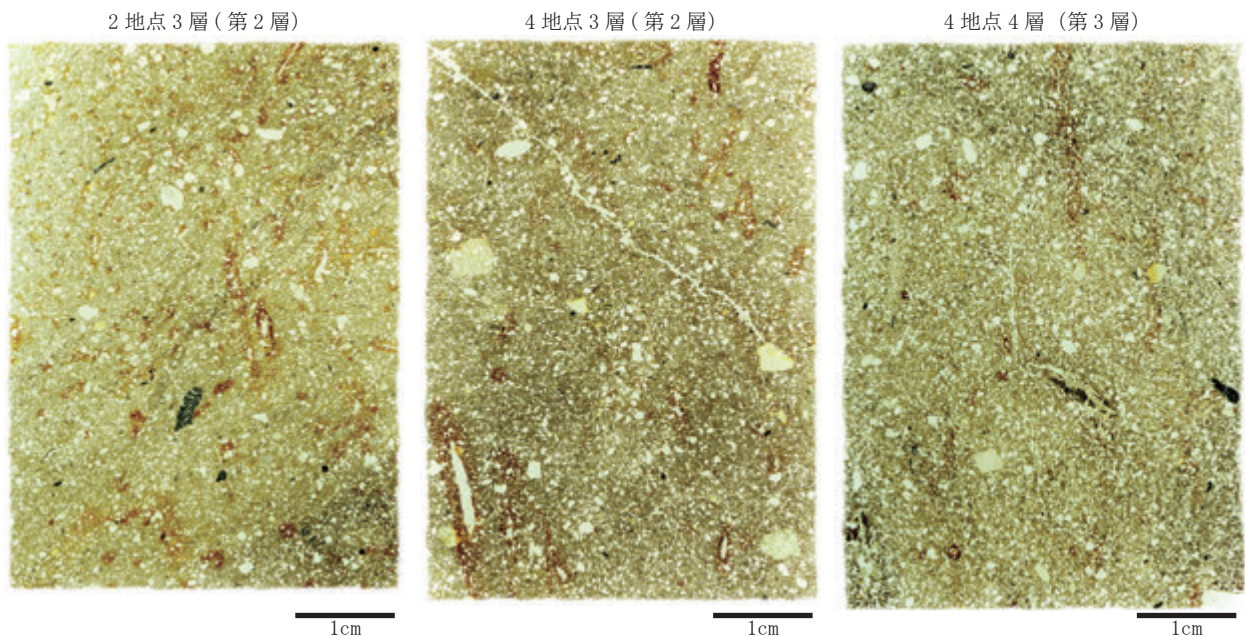


写真8 土壌薄片画像

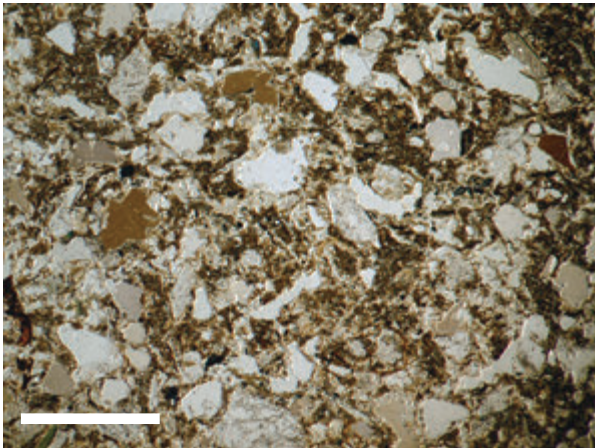


写真1 4地点4層(第3層)(下方ポーラ)

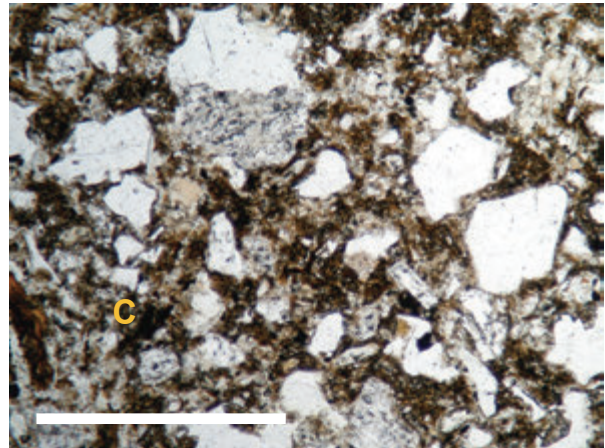


写真2 4地点4層(第3層)(下方ポーラ)

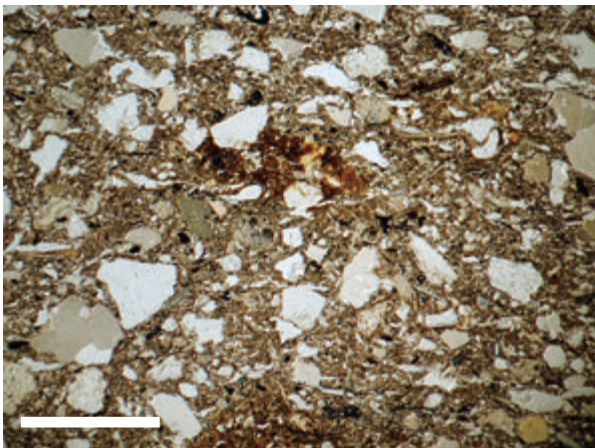


写真3 4地点3層(第2層)(下方ポーラ)

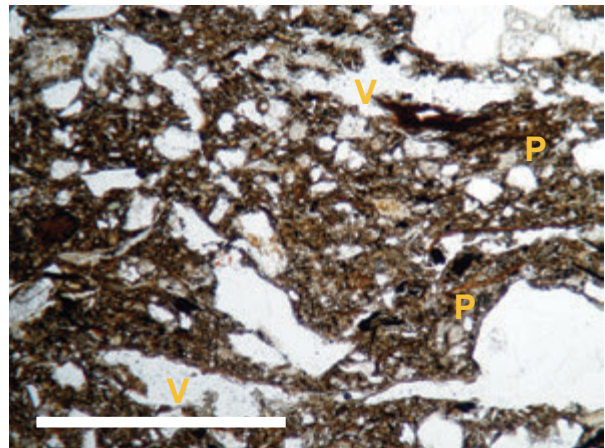


写真4 4地点3層(第2層)(下方ポーラ)

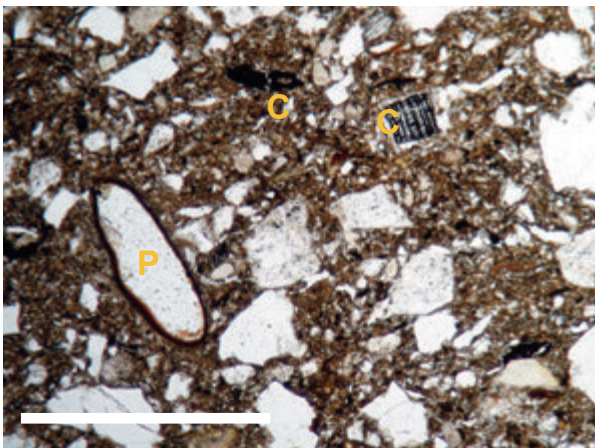


写真5 2地点3層(第2層)(下方ポーラ)

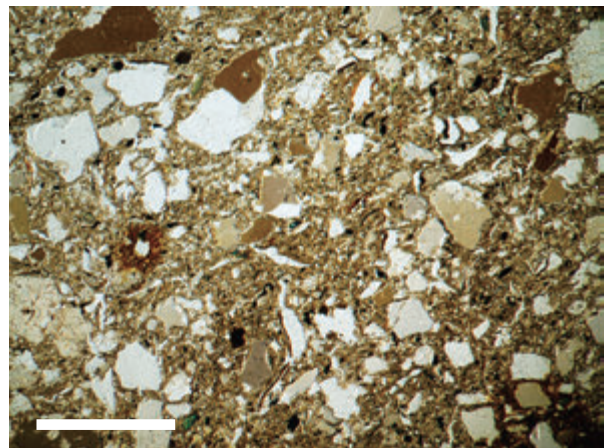


写真6 2地点3層(第2層)(下方ポーラ)

V:孔隙 P:植物遺体 C:炭化材片 スケールは1.0mm

写真9 土壌薄片顕微鏡画像

どの未分解の植物片、炭化材片が含まれる。4地点第2層(3層)は、砂と泥が混在し、4地点第3層(4層)に比べ淘汰が相対的に不良である。微細構造は壁状を示す。砂粒は、個々の粒子が分離して単体で、泥で充填される傾向を示し(写真9の3)、密な充填を示す4地点第3層(4層)と層相が異なる。層内では、部分的に細長い孔隙や植物遺体片が水平方向への配向を示す領域が観察される(写真9の4)。本層では、4地点第3層(4層)と同様に種実遺体などの未分解の植物片、炭化材片が含まれる(写真9の5)。

2地点第2層(3層)は、4地点第2層(3層)と同様に構成層の淘汰が不良である。また、泥と砂

の分布が不均質である。そのため、層内では、泥及び砂がちな領域がまだらに混在するような層相を示す。泥の領域については、曲がりくねった管状の分布を示す部分も多い。層内では、4 地点第 2 層 (3 層) と同様に未分解の植物片、炭化材片が含まれる。

氾濫原上に洪水によって供給される堆積物は、水流による集団移動により運搬されることが通常である。このような場合、砂粒は 4 地点第 3 層で観察されるように密集して累重すると考えられる。4 地点第 2 層では、砂粒が個々に分離して堆積する傾向が把握され、4 地点第 3 層と堆積状況が異なっている。この 4 地点第 2 層で観察された土壌微細構造については、斉藤 (1971)、有村・鬼鞍 (1971) で示された現成の水田耕作土の特徴に類似する。水田耕作土では、湛水しろかきに伴い、粒子間結合力が弱化し、団粒の崩壊と碎屑物粒子の分散が進行する (斉藤、1971)。水田に特徴的な微細構造としては、しろかきにより粗粒子のすみやかな沈降による砂の局部的集積や、4 地点第 2 層でも確認されたような葉理状の構造が観察される。

上記のことをふまえると、4 地点第 2 層については、洪水堆積物を母材として湛水下での人為的な攪拌によって形成された水田耕作土の可能性があると指摘される。2 地点第 2 層については、4 地点第 2 層と同様に構成層の淘汰が不良であるものの、層相が異なる。2 地点第 2 層では、管状をなす泥の領域が特徴的に観察される。形態的特徴からは、このような管状の泥の領域が、土壌動物の活動によって形成された棲管と解釈される。このことから、2 地点第 2 層については、生物擾乱の影響を大きく受けていることが推定され、今回の観察層準において、土壌発達の影響が相対的に大きかった可能性がある。この点は 2 地点が谷斜面に位置することとも同調的である。

なお、4 地点第 2 層・第 3 層、2 地点第 2 層では、土壌構造が発達せず、未分解の植物片が多く含まれることから、地下水位が高く、基本的に湿性の土壌環境下にあったことが推測される。また、炭化材片も多く含まれることから、分析地点周辺では、人間による植物体の燃焼行為も活発に行われていたことも推定される。

(4) 珪藻分析

結果を表 64、第 298 図に示す。古代の遺構充填堆積物である 5 地点 4038 溝 (8 層) 及び 6 地点第 3 層下部 (9 層) について、珪藻分析結果から推定される堆積時の環境について述べる。いずれの層準も、主要な珪藻化石群集が酷似している。

特徴的に認められた流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis* は環境に対する適応能力が高い種であり、さまざまな環境の水域から認められる。また、生育時の生産力が高いだけでなく、殻へのシリカの沈着が厚く、堆積後も特に化石として残りやすい。*Pinnularia rupestris* は貧塩一嫌塩性種、好酸性、流水不定性であり、比較的広範囲に生育し、湿原、湿地、沼沢地などに生育していることが多い。*Pinnularia viridiformis* は好湿地性であり、泥炭性の湿源・沼に特徴的に認められる種である。

止水性種の *Aulacoseira ambigua* は浮遊性で富栄養の池・湖の沿岸等に多いとされる (Hustedt, 1930)。また安藤 (1990) は、湖沼沼沢湿地指標種群としている。これは、湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着性種としても優勢な出現が見られるものの、これら以外で見られることが希であり、湖沼や沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きいためである。止水性種の *Pinnularia acrosphaeria* は湿地や池沼、湖の沿岸部に見られる (Patrick and Reimer, 1966)。ただし、多くの場合、湿地に爆発的に発生することが多い。*Stauroneis phoenicenteron* は止水域に認められる。Cholnoky (1968) は最適 pH を 6.8 としている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。

表 64 珪藻分析結果

分類群	生態性			環境指標種	5地点 8層 4038溝	6地点 9層 第3層
	Salinity	pH	Current			
<i>Nitzschia plana</i> W.Smith	Meh			≒Eury saprobic, D1-E1	1	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	≒U	1	2
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	12	13
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	8	4
<i>Aulacoseira</i> spp.	Ogh-unk	unk	l-ph	≒U	1	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	1
<i>Cymbella cystula</i> (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, T	1	1
<i>Cymbella heteropleura</i> (Eheenbrg) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	not diagnostic	3	2
<i>Cymbella heteropleura</i> var. <i>minor</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	not diagnostic	4	1
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	4	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	2	7
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	not diagnostic	2	2
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	1	3
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	1	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	≒O, U	8	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	1	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	-	1
<i>Gomphonema sphaerophorum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	27	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>capitata</i> Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	2	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	≒O	6	3
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	1	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	2	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	13	1
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	≒O	1	1
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	≒O	3	3
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	≒O	5	4
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	6	1
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	≒O	1	1
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	not diagnostic	1	1
<i>Pinnularia microstaurum</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	8	5
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	2	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	≒O	7	2
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	≒O, P	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	1	-
<i>Pinnularia subrupestris</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	≒O	12	1
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	≒N, O, U	1	-
<i>Pinnularia viridiformis</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	≒N, O, U	11	8
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	4	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	16	29
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	≒O	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	2
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	≒N, O, U	22	26
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>gracilis</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	≒N, O, U	3	2
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind	O	5	3
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	1	8
Marine water					0	0
Marine-Brackish water					0	0
Brackish water					1	0
Fresh-Brackish water					1	2
Fresh water					214	140
Total					216	142
Abundance	A: abundant, C: common, F: few, R: rare, VR: very rare, VVR: very very rare, No: barren				F	R
Preservation	G: good, M: moderate, P: poor, VP: very poor				P	VVP

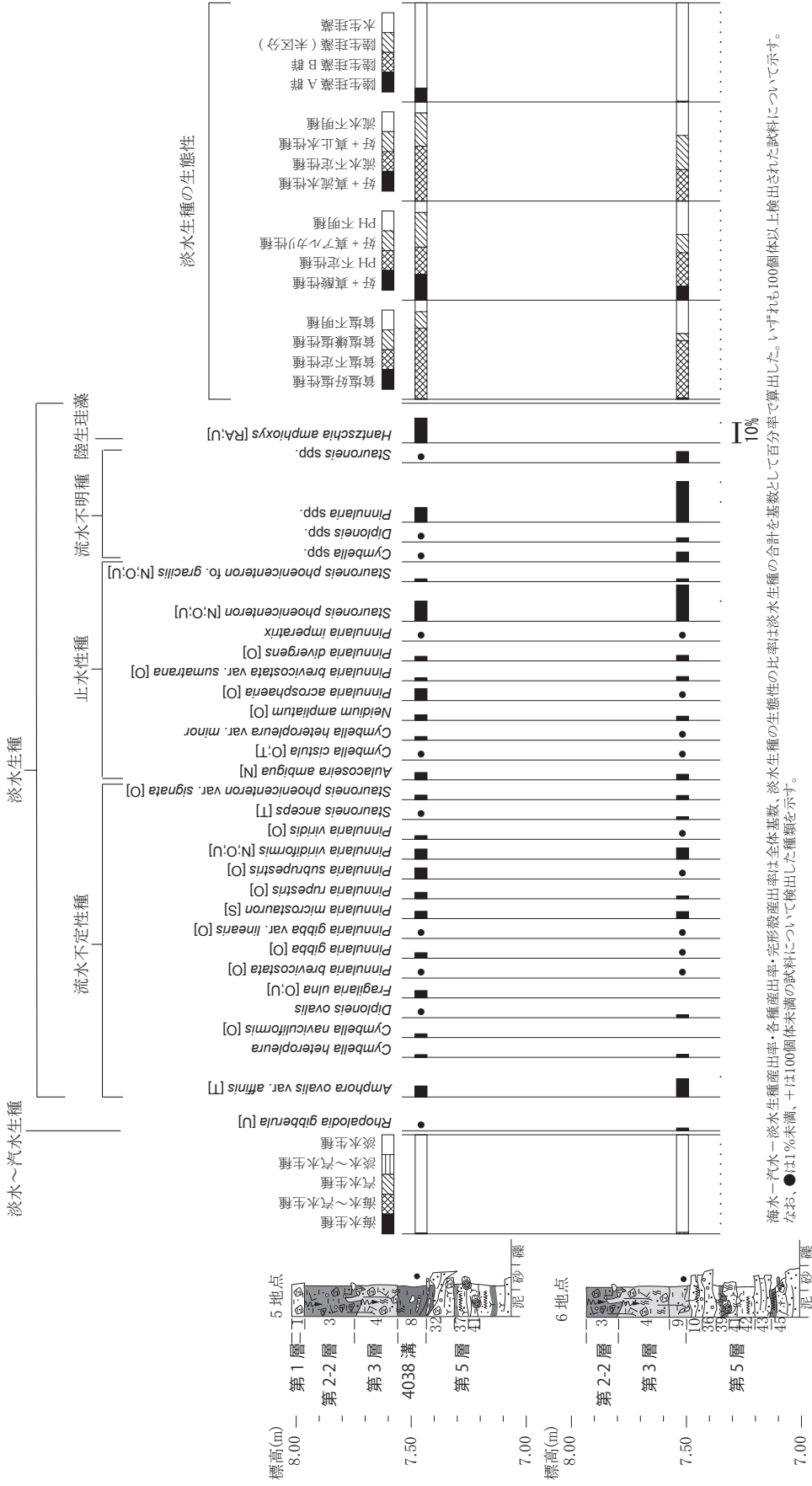
凡例

Salinity・pH・Currentに対する適応性

Salinity: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 Current: 流水に対する適応性
 Euh: 海水生種 al-bi: 真7カ利性種 l-bi: 真止水性種
 Euh-Meh: 海水生種-汽水生種 al-il: 好7カ利性種 l-ph: 好止水性種
 Meh: 汽水生種 ind: pH不定性種 ind: 流水不定性種
 Ogh-Meh: 淡水生種-汽水生種 ac-il: 好酸性種 r-ph: 好流水性種
 Ogh-hil: 貧塩好塩性種 ac-bi: 真酸性種 r-bi: 真流水性種
 Ogh-ind: 貧塩不定性種 unk: pH不明種 unk: 流水不明種
 Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk: 貧塩不明種

環境指標種

A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種 産状
 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種 産出率 A: 多い、C: 普通、F: 少ない、R: 稀、VR: 極稀、VVR: 極々稀
 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉, 1988) 保存状態 G: 良好、M: 普通、P: 不良、VP: 著しく不良、VVP: 極めて不良
 G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
 L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種
 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種 (以上はAsai & Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)



第 298 図 主要珪藻化石群集

表 65 花粉分析結果

陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* はコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）である。特に、本種は離水した場所の中で乾燥に耐えうる（伊藤・堀内、1989;1991）。また、堆積物の分析を行った際に優占（70～80%以上）していれば、空気に曝されて乾いた環境であったことが示唆される。これら分析層準の形成期は、基本的に湿地のような堆積環境下にあったと推定される。

(5) 花粉分析

結果を表 65、第 299 図に示す。4 区第 5 層、第 3 層下部、第 2 層の花化石群集は、調査地点の立地及び堆積環境を踏まえると、谷とその周囲の山地斜面の局所的な植生を強く反映していると推定される。また、第 2 層・第 3 層については生物擾乱や土壌生成作用が進行していることから、花化石群集は複数回の植生再生・更新を反映している群集の可能性が高い。これらの花化石群集の形成過程（タフォノミー）を踏まえ、植生変遷について検討する。

縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭に形成された第 5 層下部の花化石群集は木本花粉が卓越し、その中でスギ属が優占することが特徴である。スギ属の花化石生産量は膨大で、風媒性であるため広域に散布されるため、花化石産出率は実際の植生に対して過大評価される場合がある。今回の場合、4 区が位置する支谷奥部の第 5 層層準において、スギの埋没樹が確認されていることから、その影響を強く反映している可能性が高く、スギ属以外の産出率が低かった木本類や、草本類などは実際の植生量より過小評価されていると見られる。

以上のことを踏まえると、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の第 5 層形成期の谷底低地には、谷奥部の比較的安定した領域にスギ属などの木本類が分布し、谷内の流路沿いなど地下水位が高く、河川攪乱の影響が相対的に強い領域にイネ科やカ

種 類	4区		
	4地点 4層上 第2層	45層 第5層	6地点 9層 第3層
木本花粉			
マキ属	-	3	2
モミ属	8	13	10
ツガ属	8	1	9
トウヒ属	1	-	-
マツ属単維管束亜属	1	-	-
マツ属複維管束亜属	53	4	25
マツ属(不明)	28	10	27
スギ属	37	188	61
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	8	-	3
ヤマモモ属	2	-	1
サワグルミ属	1	1	-
クマシデ属-アサダ属	9	3	4
カバノキ属	2	3	1
ハンノキ属	-	5	2
ブナ属	8	1	3
コナラ属コナラ亜属	6	3	16
コナラ属アカガシ亜属	13	9	19
クリ属	3	3	2
シイ属	2	4	5
ニレ属-ケヤキ属	12	7	8
エノキ属-ムクノキ属	-	-	3
フウ属	-	-	1
カラスザンショウ属	-	1	-
ウルシ属	-	1	-
モチノキ属	1	-	1
カエデ属	-	-	2
ノブドウ属	-	-	1
ウコギ科	1	-	1
ツツジ科	-	-	2
カキノキ属	1	-	-
エゴノキ属	-	-	2
イボタノキ属	1	-	2
トネリコ属	-	-	1
ガマズミ属	-	-	2
草本花粉			
サジオモダカ属	1	-	-
オモダカ属	-	-	1
スプタ属	-	-	2
イネ科	270	2	231
カヤツリグサ科	17	3	17
イボクサ属	-	-	1
ミズアオイ属	5	-	8
ユリ科	-	-	4
クワ科	1	-	-
ギシギシ属	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	5	3	3
タデ属	1	-	1
ソバ属	1	-	-
アカザ科-ヒユ科	-	-	1
ナデシコ科	1	-	-
キンボウグ属	1	-	-
マメ科	3	-	1
ツリフネソウ属	1	-	-
セリ科	-	-	2
ヨモギ属	9	-	6
オナモミ属	-	-	1
キク亜科	1	1	2
不明花粉			
不明花粉	9	6	2
シダ類胞子			
ヒカゲノカズラ属	3	2	1
ゼンマイ属	19	-	35
アカウキクサ属	1	-	-
他のシダ類胞子	261	183	415
合 計			
木本花粉	206	260	216
草本花粉	317	9	282
不明花粉	9	6	2
シダ類胞子	284	185	451
合計(不明を除く)	807	454	949
その他			
クンショウモ属	-	-	1

ヤツリグ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節などの草本類が生育していたものと思われる。一方、谷周縁から山地斜面にかけては針葉樹のスギ属のほかカラスザンショウ属・ウルシ属、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、サワグルミ属などの高～低木となる落葉広葉樹が、より安定した山地領域にはコナラ亜属のほか、常緑広葉樹のアカガシ亜属が分布していたものと思われる。

第3層下部（9～12世紀）の花粉化石群集は、木本花粉においてマツ属（複維管束亜属を含む）が増加すること、草本花粉が増加し、木本花粉とほぼ同率を占めるようになること、木本・草本ともに種類数が増加することが特徴である。木本花粉ではマツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）の増加が顕著である。本種類は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから、現在では海岸植生や二次林の代表的な樹種となっている。マツ属以外の木本花粉の種類構成をみると、ツツジ科、ウコギ科、ノブドウ属など、二次林や林縁の植生を構成する要素が特徴的に産出する。また、草本花粉ではイネ科の増加が顕著であり、オモダカ属、スブタ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ユリ科、イネ科などの水生植物ないしその種を含む種類の数も増加する。以上のことから、9～12世紀は、調査区が位置する谷内から山地斜面の植生は、第5層形成期と大きく異なり、谷斜面ではマツ属などの二次林要素が分布を拡げ、谷底低地ではスギ属などが減少し、草本類主体の植生に変化していたことが推定される。このような植生変化の原因については、第5層累重中の崩積土やその再堆積物の土石流堆積物の形成状況から、山地斜面から谷底低地にかけての植生に対する地表攪乱や河川攪乱の影響と、発掘調査成果から推定される古墳時代から古代にかけての人間活動の活発化に伴う人為的植生攪乱の影響が複合的に関係していると考えられる。

中世（鎌倉時代）の第2-2層になると、花粉化石群集は木本花粉の占める割合がさらに減少し、草本花粉が増加する。木本花粉ではマツ属複維管束亜属がさらに増加するものの、種類構成は単調になり、栽培種のカキノキ属も産出するようになる。草本花粉ではイネ科がさらに増加し、畑作物であるソバ属花粉も産出するようになる。これらのことから、中世の鎌倉期には、植生攪乱の影響が強まり、谷周囲の山地斜面などを中心にマツ林などの二次林領域が拡大し、林分は衰退したことが推定される。また、谷底低地には草本主体の植生が広がっていたと推定される。

（6）植物珪酸体分析

結果を表66、第300図に示す。各地点の結果をみると、栽培種のイネ属の植物珪酸体は、古代以降の堆積物から普遍的に産出することが確認される。年代別にイネ属機動細胞珪酸体の含量密度の地点別に整理すると以下のようなになる。

古代（7世紀～9世紀）の層準では、4区5地点4038溝で400個/g、3区12地点3003溝で300～900個/g、2区13地点第3-1・3-2層で700～800個/gを示す。このように古代の層準のイネ属含量密度は3区・2区側で高い傾向を示す。

9世紀～12世紀頃の層準では、4区第3層の3地点で5500個/g、4地点で900～1700個/g、6地点・8地点で1000個/gを示す。このように9世紀～12世紀頃の層準では1000個/g以上の含量密度を示すが、地点によるバラツキが大きく、谷奥部で含量密度が低く、谷央部で高くなる傾向が窺える。

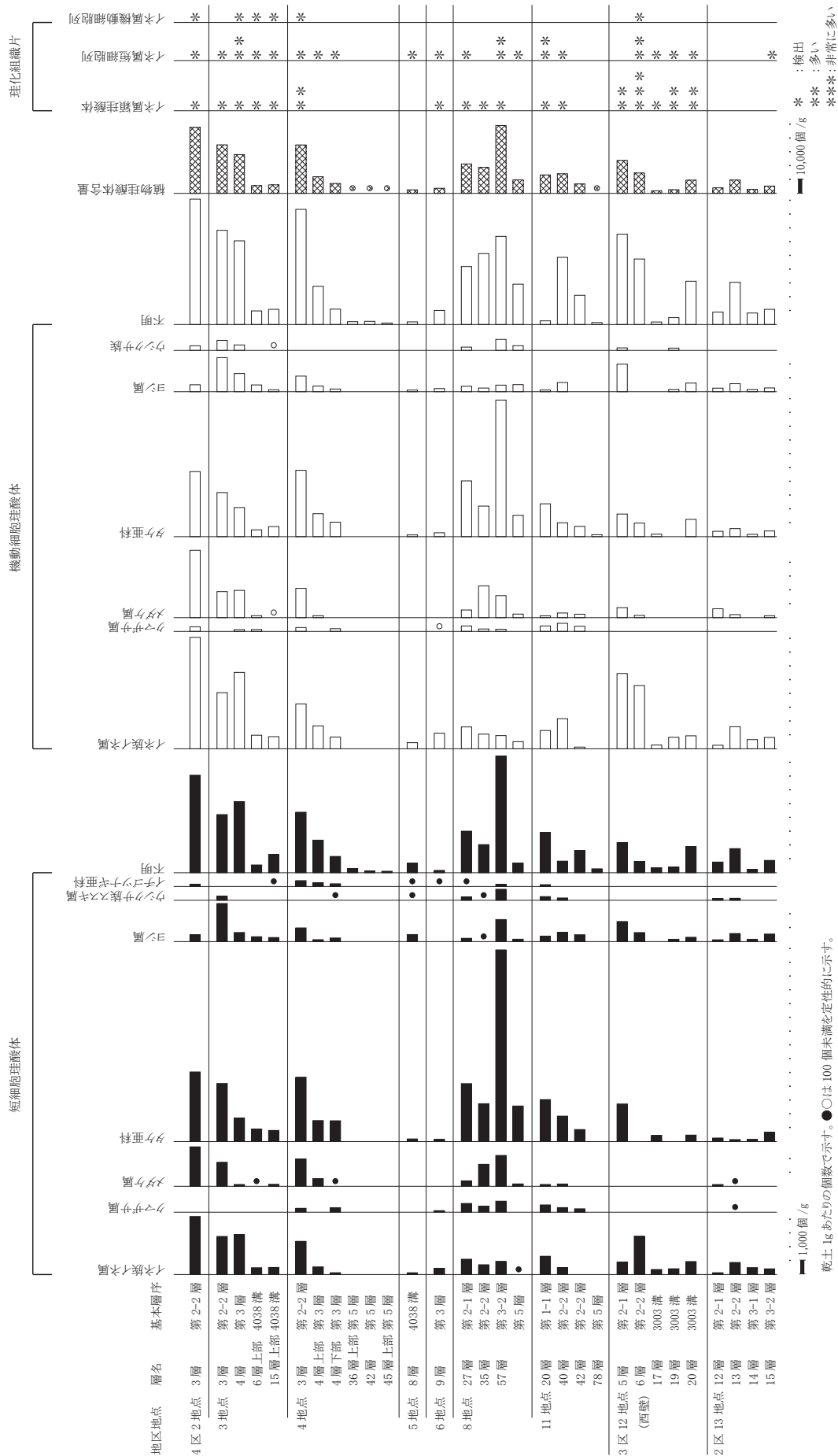
中世鎌倉期（第2-2層）の層準では、4区2地点で4900個/g、3地点で1900個/g、4地点で2100個/g、8地点で2300個/g、3区12地点で4600個/g、2区13地点で1600個/gを示す。このように中世鎌倉期の層準では1600個/g～4900個/gと相対的に含量密度が高くなり、特に3区～4区では2000個/g以上の含量密度を示すようになる。

表 66 植物珪酸体含量

分類群	1段目:地点、2段目:地点、3段目:トレンチ断面層序、4段目:基本層序														
	4区														
	2地点 3層 第2-2層	3地点 3層 4層 6層上 15層上 第2-2層 第3層 4038溝 4038溝				4地点 3層 4層上 4層下 36層上 42層 45層上 第2-2層 第3層 第3層 第5層 第5層 第5層					5地点 8層 4038溝	6地点 9層 第3層	8地点 27層 35層 第2-1層 第2-2層		
イネ科葉部短細胞珪酸体	4,200	2,800	2,900	500	500	2,400	600	100	-	-	-	100	500	1,100	700
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	300	-	300	-	-	-	-	100	600	400
クマザサ属	2,900	1,700	100	<100	100	2,000	600	<100	-	-	-	-	-	400	1,600
メダケ属	5,100	4,200	1,700	900	800	4,700	1,500	1,500	-	-	-	200	200	4,200	2,800
タケ亜科	500	2,800	700	400	300	1,000	100	300	-	-	-	500	-	200	<100
ヨシ属	-	300	-	-	-	-	-	<100	-	-	-	<100	-	200	<100
ウシクサ族ススキ属	200	-	-	-	<100	400	300	200	-	-	-	<100	<100	<100	-
イチゴツナギ亜科	7,100	4,200	5,200	600	1,300	4,400	2,400	1,200	300	100	100	700	200	3,000	2,000
不明															
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8,100	4,100	5,500	1,000	900	3,300	1,700	900	-	-	-	400	1,100	1,600	1,100
イネ族イネ属	300	-	100	100	-	300	-	200	-	-	-	-	<100	400	200
クマザサ属	4,900	1,900	2,000	100	<100	2,100	100	-	-	-	-	-	-	600	2,300
メダケ属	4,700	3,200	2,100	500	700	4,800	1,700	1,100	-	-	-	100	300	4,100	2,200
タケ亜科	500	2,500	1,300	500	100	1,100	400	200	-	-	-	100	200	400	300
ヨシ属	300	700	400	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	200	-
ウシクサ族	9,100	6,800	6,100	1,000	1,100	8,400	2,800	1,100	200	200	100	200	1,000	4,200	5,100
不明															
合計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	19,900	16,000	10,600	2,400	3,200	15,200	5,400	3,700	300	100	100	1,700	1,000	9,900	7,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	28,000	19,200	17,600	3,200	3,000	20,000	6,700	3,400	200	200	100	900	2,700	11,400	11,200
植物珪酸体含量	47,900	35,200	28,200	5,600	6,200	35,200	12,100	7,100	500	300	200	2,600	3,700	21,300	18,900
珪化組織片															
イネ属類珪酸体	*	*	*	*	*	**	-	-	-	-	-	-	*	*	*
イネ属短細胞列	*	*	**	*	*	*	*	*	-	-	-	*	*	*	-
イネ属機動細胞列	*	-	*	*	*	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-

分類群	1段目:地点、2段目:地点、3段目:トレンチ断面層序、4段目:基本層序														
	4区						3区					2区			
	8地点 57層 第3-2層 第5層		11地点 20層 40層 42層 78層 第1-1層 第2-2層 第2-2層 第4-4層				12(地点)西壁 5層 6層 17層 19層 20層 第2-1層 第2-2層 3003溝 3003溝 3003溝					13地点 12層 13層 14層 15層 第2-1層 第2-2層 第3-1層 第3-2層			
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,000	<100	1,300	500	-	-	900	2,800	400	400	900	100	900	500	400
イネ族イネ属	800	-	500	300	200	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-
クマザサ属	2,200	200	100	200	-	-	-	-	-	-	-	100	<100	-	-
メダケ属	13,900	2,600	3,000	1,800	900	-	2,700	-	500	-	500	300	100	200	700
タケ亜科	1,600	200	400	700	500	-	1,500	700	-	200	300	100	600	200	600
ヨシ属	800	-	300	200	-	-	-	-	-	-	-	100	100	-	-
ウシクサ族ススキ属	200	-	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	8,500	700	2,900	800	1,600	300	2,200	800	400	400	1,900	800	1,800	300	900
不明															
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,000	500	1,300	2,200	100	-	5,500	4,600	300	800	900	300	1,600	700	800
イネ族イネ属	200	-	400	600	400	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマザサ属	1,600	300	100	300	200	-	700	200	-	-	-	600	200	-	100
メダケ属	9,900	1,500	2,400	1,000	700	100	1,600	1,000	200	-	1,300	400	600	200	400
タケ亜科	500	500	100	700	-	-	2,000	-	-	200	600	300	600	200	300
ヨシ属	800	300	-	-	-	-	200	-	-	200	-	-	-	-	-
ウシクサ族	6,400	2,900	300	4,900	2,100	100	6,600	4,800	200	500	3,100	900	3,100	800	1,100
不明															
合計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	29,000	3,700	8,800	4,500	3,200	300	7,300	4,300	1,200	1,000	3,600	1,600	3,600	1,100	2,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	20,300	6,100	4,600	9,700	3,600	300	16,600	10,500	600	1,700	6,000	2,500	6,100	1,800	2,800
植物珪酸体含量	49,300	9,800	13,400	14,200	6,800	600	23,900	24,800	1,800	2,700	9,600	4,100	9,700	2,900	5,300
珪化組織片															
イネ属類珪酸体	*	-	*	*	-	-	**	**	*	*	*	-	-	-	-
イネ属短細胞列	**	*	**	*	-	-	-	**	*	*	*	-	-	-	*
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めた値として示す(100単位にする)。<100は100個/g未満を示す。
珪化組織片の産状は-が未検出,*が検出,**が多く検出,***が非常に多く検出を示す。



第 300 図 植物珪酸体含量の層位分布

中世室町期（第 2-1 層）の層準では、4 区 8 地点で 600 個 /g、3 区 12 地点で 5500 個 /g、2 区 13 地点で 300 個 /g を示し、近世以降（第 1-1a 層）の層準では 4 区 11 地点で 1300 個 /g を示す。このように中世室町期の層準では、2 区～4 区のいずれも含量密度が著しく低下し、1000 個 /g 以下となる。近世以降の層準では 4 区で 1300 個 /g を示している。

既往の埋没水田跡の土壌では、イネ属機動細胞珪酸体の含量密度が 5,000 個 /g を示す場合が多く、稲作の指標となっている（杉山、2000）。ただし、水田遺構が確認されていても 3,000 個 /g の場合（古環境研究所、2009）や、イネ属珪酸体がほとんど検出されない事例（パリノ・サーヴェイ、2002）もある。また、同一層準の水田耕作土における植物珪酸体の空間的な産状が地点によって大きく異なる事例もある（辻本ほか、2003；辻本・辻、2002 など）。さらに、外山（2002）はイネ属の含量密度が水田の微地形及びそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することを指摘している。一方、水田耕作土を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出される事例もある（辻ほか、2004）。このように、イネ属由来の植物珪酸体の産状は様々であり、辻（2000）が指摘しているように植物化石群集の形成過程（タフォノミー：堆積物中への取り込まれ方や分解作用など）を踏まえることが大切で、遺跡形成過程の脈絡と対比させて検討する必要がある（辻本ほか、2007）。ここでは、そのような視点から各時期の産状について検討する。

古代：4 区 5 地点の 4038 溝充填堆積物の分析層準は、水の流れが減衰し、弱い流れのある湿地のような堆積環境で形成された上部層準である。イネ属を含む植物珪酸体群集は、溝沿いより流入したものが主体と判断される。したがって、当該期の 4038 溝周囲に栽培植物のイネ属が生育していた可能性があるものの、人為的に投棄された稲わらや籾がらに由来する可能性もある。また、4 区北東部の山地斜面下部で古墳時代の遺構が確認されていること、4038 溝充填堆積物は古墳時代の堆積物を侵食していることから、古い地層から再堆積した植物珪酸体の可能性もある。

一方、3 区 3003 溝充填堆積物と 2 区 3-1 層・3-2 層の分析層準は、周囲から流入した氾濫堆積物などを母材とする土壌生成層準に相当する。したがって、植物珪酸体群集は氾濫堆積時に集水域より運搬堆積した植物珪酸体のほか、土壌生成が進行する時期に蓄積した植物珪酸体が混在していることになる。各層の土壌生成期間は不明であるが、層相を見る限り、長期にわたるとは考えにくく、比較的短期間の可能性がある。そうだとすると、イネ属植物珪酸体含量密度が 800 個 /g 前後程度と少なかったものの、調査地点においてイネ属が生育し、栽培が行われていた可能性は充分考えられる。特に 3 区 3003 流路地点では畦畔遺構が確認されており、同調的な結果と見なせる。

9 世紀～12 世紀：4 区第 3 層は谷斜面中～下部にかけて分布する堆積物で、先述したように間欠的な土砂流出や人為的営力が及ぶ層準を挟在する、湿地の堆積環境で形成されたと推定される。分析層準は擾乱が顕著な層準に相当する。このことから、植物珪酸体群集は流出土砂ともに運搬堆積したものと人為的攪拌や生物擾乱が進行する時期に取り込まれたものに由来すると判断される。栽培種のイネ属の含量密度は、地点によって差異が生じているものの、古代の層準より総じて高い密度を示している。また、密度差異については、上記したように同一水田面であっても水田一筆単位や地形勾配によってイネ属の含量密度に差異が生じる。以上のことを総合的に捉えると、第 3 層形成期には第 3 層分布域において稲作が行われるようになった時期が存在する可能性が高い。また、4 地点の層位的産状及び堆積物の擾乱が上位層準で顕著であることから、第 3 層上部形成期ほどその可能性が高いといえる。

中世鎌倉期（第2-2層形成期）：黒色を呈する腐植質土壌からなる。由来の異なる堆積物の偽礫・微小ブロックが混じるなど、人為的に攪拌された堆積物と推定される。したがって、本層の植物珪酸体群集は調査地点で生育していたイネ科植物に由来するものが多く含まれていると推定される。イネ属の含量密度は第3層に比較して明らかに増加しており、第2-2層形成期には調査区の広い範囲において稲作が行われていたことが推定される。3区・2区の氾濫堆積物を母材とする腐植質土壌層についても同様の状況が想定される。

中世室町期の第2-1層は、4区・3区・2区のいずれの地区でも土壌生成が進行する時期を挟在し、人為的営力が及んだ層相をなす。このことから、第2-1層の植物珪酸体群集も土壌生成が進行する時期に取り込まれた植物珪酸体が含まれていることになる。イネ属含量密度は、3区で高密度を示すが、2区及び4区では低密度であり、各調査区で土地利用状況が異なっていた可能性がある。この点は発掘調査成果を踏まえ、再評価する必要がある。

近世以降：4区第1-1a層は人為的営力により形成された灰色～暗灰色砂質泥～泥質砂の偽礫・微小ブロックからなり、人為的に攪拌されている状況が確認される。したがって、植物珪酸体群集は異地性の堆積物に由来する可能性もあり、栽培種のイネ属の評価についても調査地点での稲作の可能性のほか、整地のために耕作土が利用されている可能性の双方が考えられる。

以上、植物珪酸体群集の産状からみた調査区の土地利用状況について述べたが、栽培種のイネ属以外の種類の産状において、3区・4区では第3層以降の層準では、高燥な開けた場所に生育するメダケ属を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族、大型の抽水植物であるヨシ属などの含量密度も高くなる。このような層位的産状の変化は、調査区周辺の植生の変化を反映していると考えられ、第3層形成期以降の低地にはヨシ属が生育し、山地斜面などにススキやササ類が生育する開けた領域が拡大したことを示していると考えられる。先述の花粉化石群集の結果とも同調的である。

（7）大型植物遺体

結果を表67、第301図に示す。4地点の3層（第2層）・4層（第3層）、5地点の4038溝8層、6地点9層（第3層下部）の大型植物化石群集は、いずれも圧倒的に水湿地生草本主体の組成である。産出種類のうち、栽培種は、各試料からイネの穎が計269個（うち44個が炭化）、5地点8層（4038溝上部）から炭化した胚乳が17個の合計286個が確認される。また栽培種の可能性を含むシソ属（*-イヌコウジュ属*）の果実が各試料で見られ、その合計は133個である。

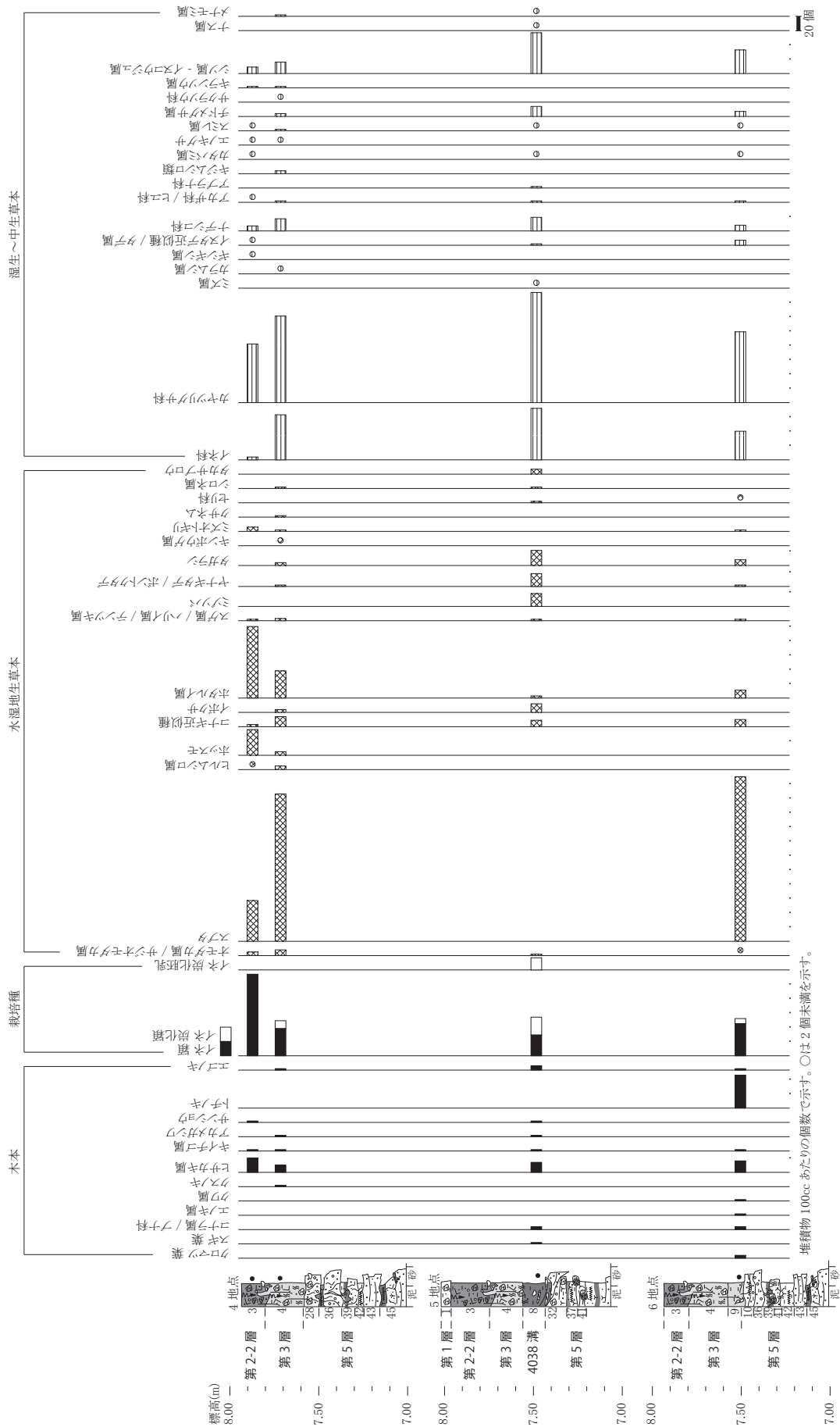
栽培種とその可能性を持つ分類群以外を見ると、草本類ではオモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、スブタ、ヒルムシロ属、ホッスモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、アゼスゲ類、スゲ属、ハリイ属、テンツキ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ミズ属、カラムシ属、ギシギシ属、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ポントクタデ近似種、タガラシ、ミズオトギリ、クサネム、セリ科、キランソウ属、シロネ属、タカサブロウなどの水湿地生植物が大半を占める。また、木本類では河畔や伐採地、崩壊地、林縁などの明るく開けた場所に生育する樹種などが確認される。

以上の4地点の第2-2層（3層）・第3層（4層）、6地点第3層下部（9層）、5地点4038溝（8層）の堆積環境と大型植物化石群集の種類構成から、各層形成期の調査地点は水生植物が繁茂する湿潤な湿地のような堆積場であったことが推定される。

7世紀後葉頃～9世紀の4038溝の分析層準である5地点8層は、層相から流れの緩やかな湿地のような堆積環境で形成されたと推定される。大型植物化石群集は局地性が強いと判断される。大型植

表 67 種実遺体同定結果

分類群	部位	状態	1段目:地点、2段目:地点、3段目:断面層序、4段目:基本層序				備考
			4地点		5地点	6地点	
			3層 第2-2層	4層 第3層	8層 4038層	9層 第3層	
木本							
クロマツ	葉	破片	-	-	-	2	横断面確認
スギ	葉	完形	-	-	1	-	
コナラ属	果実	破片	-	-	-	1	
ブナ科	果実	破片	-	-	-	1	
		炭化	-	-	2	-	
エノキ属	種子	破片	-	-	-	1	
クワ属	核	完形	-	-	-	1	
クスノキ	種子	破片	-	1	-	-	
ヒサカキ属	種子	完形	7	-	2	2	
		破片	3	5	5	6	
キイチゴ属	核	完形	-	-	-	1	
アカメガシワ	種子	破片	1	1	1	-	
サンショウウ	種子	破片	1	-	1	-	
トチノキ	種子	破片	-	-	-	23	
エゴノキ	種子	破片	-	1	3	1	
草本							
オモダカ属	果実	完形	-	3	-	-	状態良好,長さ3.8,幅2.6,厚さ1.9mm
サジオモダカ属	果実	完形	-	3	1	-	
オモダカ科	種子	完形	5	2	1	1	
スブタ	種子	完形	17	112	-	136	
		破片	40	94	-	94	
ヒルムシロ属	果実	完形	-	5	-	-	
		破片	1	-	-	-	
ホッソモ	種子	完形	29	5	-	-	
		破片	7	-	-	-	
ミズアオイ近似種	種子	完形	-	1	-	-	
コナギ近似種	種子	完形	3	13	9	10	
イボクサ	種子	完形	-	3	11	-	
		破片	-	1	1	-	
イネ	穎	完形	-	2	-	1	
	穎(基部)	破片	113	36	29	44	
		炭化	1	11	25	7	
	胚乳	炭化	-	-	1	-	
		炭化	-	-	16	-	
イネ科(小型)	果実	完形	-	2	-	-	
イネ科(丸型)	果実	完形	-	-	-	1	
		破片	-	-	-	3	
イネ科(複数種)	果実	完形	3	35	50	14	
		破片	1	26	22	22	
アゼスダ類	果実	完形	-	-	1	-	
スダ属(3面型)	果実	完形	-	2	-	-	
ハリイ属	果実	完形	-	1	-	-	
		破片	1	-	-	-	
テンツキ属	果実	完形	1	-	1	2	
ホタルイ属	果実	完形	54	27	3	3	
		破片	44	8	-	8	
ホタルイ属(平滑型)	果実	完形	1	1	-	-	
		破片	1	2	-	-	
カヤツリグサ科(2面型)	果実	完形	54	71	98	49	
		破片	5	8	15	11	
カヤツリグサ科(3面小型)	果実	完形	3	3	1	1	
カヤツリグサ科(3面中型)	果実	完形	10	30	40	26	
カヤツリグサ科(小型花被片型)	果実	完形	10	9	-	12	
ミズ属	果実	完形	-	1	-	-	
カラムシ属	果実	完形	-	1	-	-	
ギンギン属	果実	完形	1	-	-	-	
ミノソバ	果実	完形	-	-	9	-	
		破片	-	-	9	-	
ヤナギタデ近似種	果実	完形	-	1	-	-	
ポントクタデ近似種	果実	完形	-	1	2	-	
		破片	-	-	16	2	
イヌタデ近似種	果実	完形	1	-	-	1	
タゲ属(3面平滑型)	果実	完形	-	-	2	3	
		破片	-	-	-	3	
ナデシコ科(複数種)	種子	完形	7	17	19	8	
アカザ科	種子	完形	1	1	-	-	
		破片	-	1	-	-	
ヒユ科	種子	完形	-	-	1	2	
タガタシ	果実	完形	-	-	9	4	
		破片	-	4	12	4	
キンボウゲ属	果実	完形	-	1	-	-	
ミズオトギリ	種子	完形	5	2	-	2	
		破片	1	-	-	-	
アブラナ科	種子	完形	-	-	2	-	
キジムシロ類(隆条斜上型)	核	完形	-	2	-	-	
キジムシロ類(粗面型)	核	破片	-	2	-	-	
クサネム	果実	破片	-	2	-	-	
カタバミ属	種子	完形	-	-	1	1	
		破片	1	-	-	-	
エノキグサ	種子	破片	1	1	-	-	
スマレ属	種子	完形	1	2	-	1	
		破片	-	-	1	-	
チドメグサ属	果実	完形	-	1	9	5	
		破片	-	3	5	2	
セリ科	果実	完形	-	-	2	1	
サクラソウ科	種子	完形	-	1	-	-	
キランソウ属	果実	完形	-	1	-	-	
		破片	2	1	-	-	
シノ属・イヌコウジュ属	果実	完形	4	6	28	8	
		破片	3	10	29	25	
イヌコウジュ近似種	果実	完形	1	-	-	-	
		破片	1	-	-	-	
シロネ属	果実	完形	-	2	2	-	
ナス属	種子	完形	-	-	1	-	
タカサブロウ	果実	完形	-	-	5	-	
		破片	-	-	2	-	
メナモミ属	果実	完形	-	-	1	-	
		破片	-	2	-	-	
不明							
A		完形	2	6	-	4	イネ科種子? 針状長楕円体 ミズオオバコ種子?,表面に毛がある
B		完形	4	-	1	11	
C		完形	22	2	-	-	
その他		完形	-	-	4	-	
合計							
木本種実・葉			12	9	16	39	
草本種実			434	581	494	517	
不明			28	8	6	15	
合計(不明を除く)			446	590	510	556	
その他							径4.5cm程度
木材			-	-	+	+	
炭化材			+	+	+	+	
蕨苔類の茎・葉			-	+	-	+	
菌類の菌核			-	+	+	+	
昆虫類			+	+	+	+	
分析量			100	100	100	100	(cc)
			198	191	178	174	湿重(g)



第301図 大型植物化石群集の層位分布

植物化石群集を見ると、草本主体の組成を示す。各種類の産状を見ると、水生植物のスプタ属、湿生～中生植物のイネ科、カヤツリグサ科、シソ属・イヌコウジュ属、栽培種のイネの穎（炭化したものを含む）の産出が目立つ。このほか、水生植物では、オモダカ属-サジオモダカ属、コナギ近似種、ホタルイ属、スゲ属の仲間、ヤナギタデーボントクタデ、タガラシ、ミズオトギリなどの中型から小型の抽水植物が産出する。これらの多くの種類は水田雑草の種類でもある。また、湿生～中生植物ではカタバミ属などの人里植物も確認される。以上のことから、4038 溝沿いには水湿地生の草本類が生育する湿地のような場所であったが、その周囲にはカタバミ属などが生育する比較的高燥な場所も存在したことが推定される。また、本層からは栽培種のイネの穎及び炭化したイネの胚乳が特徴的に産出した。これらは、何らかの要因で火熱を受けて炭化したものが、人為的に投棄されたものの可能性が強い。当時の栽培種としてイネ属が存在し、利用されていたことは確かである。このほか栽培種を含むシソ属（-イヌコウジュ属）の果実も見られ、栽培種であればシソの利用も考えられる。

一方木本類では、高木となる種類として、針葉樹のスギ、落葉広葉樹のブナ科、低木から亜高木であるヒサカキ属、谷沿いなどに分布する落葉小高木のエゴノキ属などが確認される。このうちエゴノキは河畔林要素の落葉広葉樹であり、谷沿いの丘陵斜面に生育していたと考えられる。河畔林要素の落葉広葉樹であり、谷沿いの丘陵斜面に生育していたと考えられる。また、常緑低木類のヒサカキ属は常緑広葉樹林（照葉樹林）の林床に生育する要素でもあり、当時の谷沿いの植生が暖温帯性の植生であったことが推定される。

9 世紀～12 世紀にかけて形成された第3層の大型植物化石群集は、草本主体の組成を示し、木本類が減少傾向を示す。4038 溝充填後の調査区一帯はそれまで存在した建物跡などがなくなり、土地利用が大きく変化したことが発掘調査から確認されている。木本の種類構成が単調となることは、発掘調査結果とも同調的で、調査区周辺の森林植生が衰退していることを示している可能性がある。また、草本類の組成は4038 溝充填堆積物と同様であるが、ミゾソバ属やヤナギタデーボントクタデ、タガラシ、ミズオトギリなどの中型から小型の抽水植物が多少減少している。本層からも栽培種のイネの穎が産出する。第3層が人為的に攪拌された堆積物であること、植物珪酸体において栽培種のイネ属が産出することを踏まえると、谷内での稲作に伴うものと推定される。

一方木本類では、第3層下部では高木となる種類として、針葉樹のクロマツ、落葉広葉樹のトチノキ、谷沿いの水分条件の良い場所に多い落葉高木のエノキ属、低木から亜高木であるヒサカキ属、谷沿いなどに分布する落葉小高木のエゴノキ属などが確認されるが、上部では高木となる種類が減少している。下部層準で産出するトチノキは河畔林要素の落葉高木で、アク抜きすれば種子内部の子葉が食用可能な有用植物である。今回産出したトチノキの種子はほとんどが破片であったことから、トチノキの種子の利用も想定される。

中世鎌倉期の第2-2層からは、イネの穎が非常に多産する。本層は人為的攪拌の痕跡が確認されることから、当時の栽培されていたものに由来する可能性がある。また、木本由来の植物化石の産出数・種類数がさらに減少する。草本類は依然として湿地性植物が多いが、イネ科などの湿生～中生草本が少なくなる傾向がある。谷沿いにはエゴノキや、ヒサカキ属などが生育していたものの、本時期には最も林相が単調になった可能性があり、その背景として耕作地の拡大等の人間活動が活発になったことが想定される。

5. 調査区の古環境変遷

ここでは、上述してきた各分析結果を複合的に捉え、調査区とその周辺の環境変遷及び土地利用状況について述べる。

・ 4区第5層形成期（縄文時代晩期から弥生時代中期）

放射性炭素年代測定結果から、縄文時代晩期～弥生時代前期から弥生時代中期と推定される。当時の枝谷内は、間欠的な土砂流出がある、静穏期には緩やかな流れのある湿地のような堆積場であったと推定される。静穏な堆積期には植生が成立しており、谷奥部では埋没樹の存在から林分が形成されていたことが窺える。また、谷内では泥炭質堆積物が堆積し続けることから、この期間を通じて、谷内の地下水位が上昇傾向にあったことが示唆される。なお、埋没樹の樹種はスギであり、高原（1998）が指摘している日本海側のスギの分布拡大を考える上で貴重な成果である。

これら第5層の谷充填堆積物中には、その周縁部において山地斜面側より崩積した山地を構成する花崗岩の風化堆積物を挟在する。発掘調査により断面が作成された北側斜面の断面では、崩積土中に丸木が取り込まれており、比較的規模の大きな斜面崩壊が起こった可能性がある。年代的には、縄文時代晩期から弥生時代のある時期と推定される。古代以降の人為的営力（攪拌や切土）によって上部層準が消失しているものの、残存する上部は土壤生成作用が及んでいることから、崩積土形成後に植生が再生している状況が示唆される。また、第5層最上部には、その再堆積物と見られる塊状をなす淘汰不良の土石流堆積物が谷内のほぼ全域に堆積している。年代的には弥生時代中期以降、古墳時代までの間の時期と推定される。このような縄文時代晩期以降の崩積土の形成及びその後の土石流の発生、土砂流出は、枝谷から2区などが位置する本谷にかけての地形や水文条件を変化させただけでなく、土地利用などの人間活動においても変化をもたらした可能性がある。発掘調査では、谷北側の斜面下部において古墳時代の遺構が検出されており、古代以降には崩積土の分布域を中心に遺構が展開することからも示唆される。

崩積土の形成以前の調査区の植生は、谷底低地には谷奥部を中心に針葉樹のスギ属が分布し、部分的にイネ科やカヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節などの草本類が生育する場所も存在した。また、谷沿いの山地斜面などにはカラスザンショウ属・ウルシ属、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、サワグルミ属などの高～低木となる落葉広葉樹が生育し、山地斜面の安定した場所にカシ類などの常緑広葉樹が分布していたものと推定される。このような谷内の植生は土砂崩れとその後の土石流によって、著しく攪乱され消失したと見られる。なお、発掘調査では弥生時代中期頃の石斧が出土しており、弥生時代の植生干渉が崩積との関連性も想定される。この点については、今後の情報の蓄積をもって再評価したい課題である。

・ 第4層形成期～4区4038溝充填堆積物形成期

第5層形成直後の植生のない裸地化した地表面では、降水や湧水などによる集約した水の流れが生じ、谷線部分を洗掘してリル地形を形成したと見られる。4038溝はこのリル地形が側・下刻し、発達したものと推定される。この溝の発達により、その溝岸部から山地斜面にかけての水文条件も変化し、比較的乾燥化が進行したものと推定される。また、4038溝の側壁部分は人為的に攪拌されており、その際、生じた偽礫が充填堆積物中に混じるなど、自然地形を配水などの施設として利用していた可能性がある。

溝充填堆積物の堆積状況を見ると、侵食と堆積を繰り返しながら埋積が進行している状況が確認さ

れる。出土遺物から7世紀頃から9～10世紀にかけて埋没している。当該期の土砂流出は3区・2区が位置する本流の谷底低地の地形条件にも影響を与えたことが推定される。また、溝充填堆積物より下位層準の変形構造から、溝埋積期から第3層形成期までの間の時期に地震イベントが発生していることが推定される。なお、この時期に該当する地震動に伴う変形構造は、東桂見遺跡や高住平田遺跡でも確認されている。

また、2地点では崩積土を人為的に掘削して溝を構築している状況が確認される。溝充填堆積物からは多数の土器片などの遺物が出土し、植物珪酸体分析により栽培種のイネ属珪酸体も産出している。さらに花粉分析結果では、山地斜面から谷底低地の植生が第5層形成期と異なり、二次林や草地など植生攪乱がおよんだ植生を示唆する花粉群が確認されている。このように4038溝の充填期には調査区における人間活動が活発になり、自然環境の改変が進行した時期といえる。

一方、3区では縄文時代晩期から古代までの間の層準において3003流路が形成されている。この流路と4038溝との層位関係については充分検討できていないが、同時期に形成されている可能性があり、そうだとすると湖山池の湖水準の低下が想定される。

・第3層形成期

4区第3層は、枝谷斜面下部を中心にシート状に堆積している地層で、肉眼及び土壌薄片による微小構造の観察結果などから、間欠的な土砂流出のある、地下水位の高い湿地のような環境で形成されたことが推定される。土砂流出後の静穏期の谷内は水湿地生の草本植生に覆われていたことが推定される。ただし、下位の第4層・第5層との層界付近では人為的に攪拌された構造が確認されており、栽培種のイネ属の植物珪酸体や大型植物化石も特徴的に産出するようになる。土壌薄片観察では作製の層準は地震動によって著しく変形しており、明瞭な人為的攪拌構造を確認することができなかったものの、上記のことを踏まえると、枝谷内は放棄されたような状態ではなく、稲作地としての土地利用が行われていた、あるいは耕作が行われた時期を挟在することが推定され、中世期の土地利用の変化が示唆される。

・第2層形成期

鎌倉時代と推定される第2-2層は黒色を呈する腐植質土壌からなり、由来の異なる堆積物の偽礫・微小ブロックが混じる、人為的に攪拌された堆積物からなる。薄片観察では地下水位の高い状況下で形成されたこと、現在の水田耕作土と類似する特徴も確認されている。また、植物珪酸体分析では、栽培種のイネ属植物珪酸体の多産傾向が確認されており、本流側の3区・2区でも同様の産状が確認される。このことから、第2-2層形成期には4区～2区の広い範囲にわたって稲作が行われるようになったことが推定される。花粉化石で産出するミズアオイ属、アカウキクサ属などの水湿地生草本・シダ類は、古くは水田雑草としても一般的であったことから、当時も水田雑草として生育していた可能性がある。また、花粉化石群集ではソバ属の花粉化石も確認されており、周辺でソバ属の栽培やその利用が推定される。一方、本時期には周辺森林植生は古代の時期よりもさらに人為的攪乱の影響を強く受けるようになり、林分が衰退し、マツ二次林が分布を上げた可能性が高い。

ところで、4区第3層～第2層形成期は、層相変化から、地下水位の高い状態が継続していたことが推定される。星見(2009)による湖山池の古地理図では、中世は弥生よりも湖水位が上昇しており(「2.5 m 面」の中世頃の埋積により湖の閉塞化が要因か?)、今回の結果は同調的といえる。また、調査地域の空中写真判読では、良田の集落前面には明瞭な段差があり、その前面の地形面が干拓地で

ないとしたら、その面は湖岸段丘面に相当する可能性があり、そうだとすると中世以降のある段階の湖水位の再低下などによって、湖岸段丘が形成されたことが想定される。このような地形発達史については、現段階で十分な検討ができておらず、今後の調査課題としたい。

室町時代頃にかけて形成された第2-1層は、4区～2区のいずれの地区も人為的に攪拌された堆積物からなる。各調査区における栽培種のイネ属植物珪酸体の産状は、調査区ごとで大きく異なる。3区ではイネ属の含量密度が比較的高く、堆積環境を踏まえると、稲作が行われていた可能性がある。一方が、2区・4区ではイネ属の含量密度が相対的に低く、3区とは異なる土地利用状況や履歴をたどっている可能性がある。この点は発掘調査成果を踏まえ、再評価する必要がある。

引用文献

- 有村玄洋・鬼鞍 豊, 1971, 有明海北部及び西部沿岸地域の埴質水田土壌の二・三の物理的性質と土壌微細形態学的観察. 九州農業試験場報告, 16, 63-183.
- 安 昭炫・辻 誠一郎, 2010, 花粉分析. 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 31 鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡 10 第10次発掘調査報告書, 鳥取県埋蔵文化財センター, 116-120.
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42 (1990), 73～88, aNN. Tohoku Geogr. Assoc.
- Cholnoky, B. J., 1968, Die Okologie der Diatomeen in Binnen-Gewässern. Lehre.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at T.T. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.
- Horst Lange-Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski,A.,Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I～III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 —陸生珪藻の細分—. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 株式会社古環境研究所, 2009, 古環境調査土壌分析. 「鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 27 鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡 10 第9次発掘調査報告書」, 鳥取県埋蔵文化財センター, 149-174.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

第Ⅶ章 自然科学分析

近藤錬三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, 9-44.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1): 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (4): 437p.

久馬一剛・八木久義訳監修, 1989, 土壌薄片記載ハンドブック. 博友社, 176p.

Matsuda, J.-I, 2000, Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan, Sedimentary Geology, 135, 99-116.

中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.

西本豊弘 (編), 2006, 弥生時代の新年代. 新弥生時代のはじまり第1巻. 雄山閣, 143p.

西本豊弘 (編), 2007, 縄文時代から弥生時代へ. 新弥生時代のはじまり第2巻. 雄山閣, 185p.

パリノ・サーヴェイ, 2002, 横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析. 「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第1分冊 (本文編)」, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 133-155.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 2012, 高住平田遺跡の古環境変遷. 高住平田遺跡 I. 一般国道9号 (鳥取西道路) の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI, 鳥取県教育委員会, 149-168.

星見清晴, 2009, 湖山池—その生い立ち. 鳥取地学会誌, 13, 23-36

齋藤万之助, 1971, 水田土壌の凝集性. 土木試験所報告, 56, 1-49.

鳥倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.

杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

高原 光, 1998, スギ林の変遷. 安田 喜憲・三好教夫 (編著), 図説 日本列島植生史, 朝倉書店, 207-223.

外山秀一, 2002, 池島・福万寺遺跡の立地と環境. 「池島・福万寺遺跡2 (福万寺I期地区) 一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編」, (財)大阪府文化財センター, 411-429.

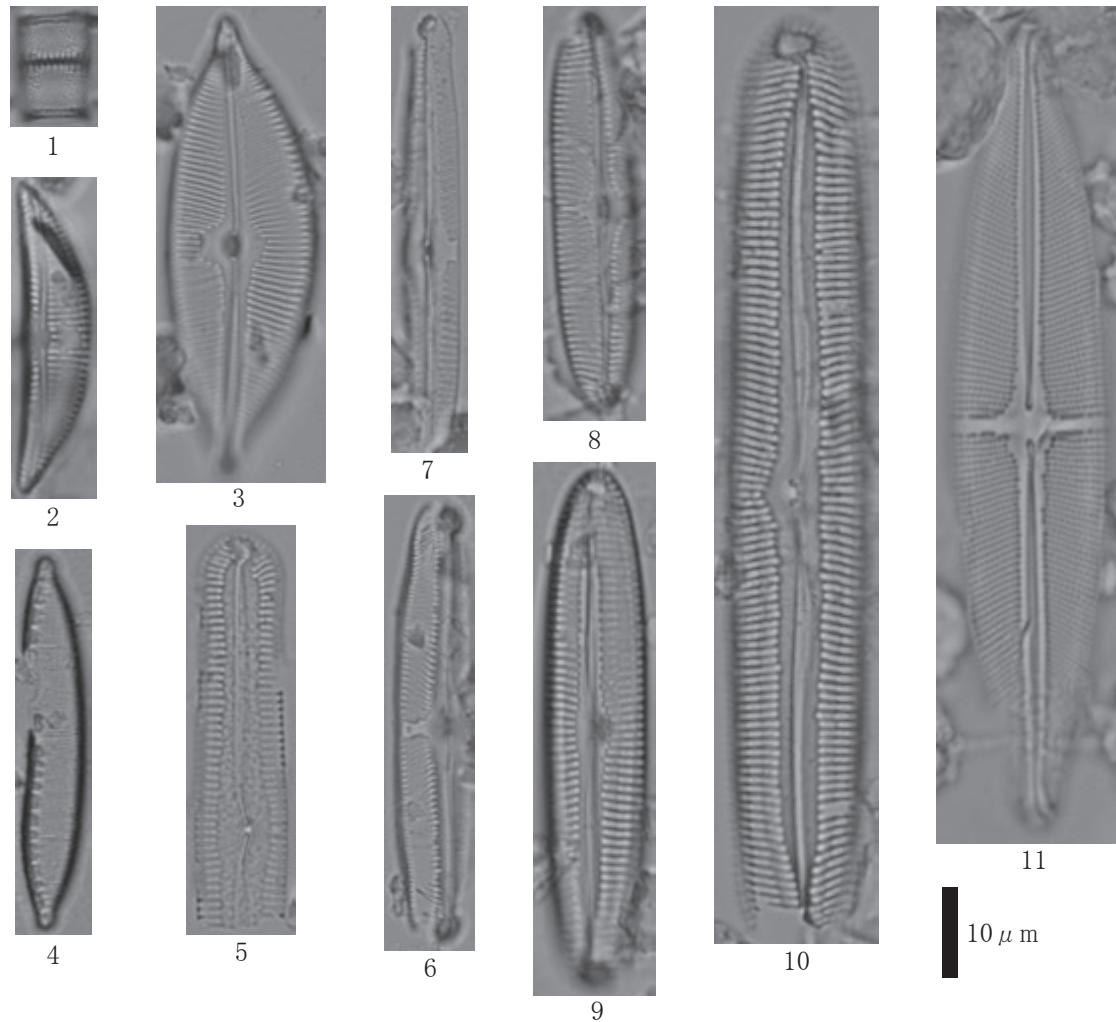
辻誠一郎, 2000, 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 247p.

辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀, 2004, 付章 前田遺跡の自然科学分析. 「前田遺跡 (第20地点) 発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態—」, 芦屋市教育委員会, 1-36.

辻本裕也・辻 康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋 敦・松元美由紀・馬場健司, 2007. 第4節 池島・福万寺遺跡の古環境変遷2. 「池島・福万寺遺跡3 恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書 (池島I期地区) —本文・考察編」, (財)大阪府文化財センター, 397-473.

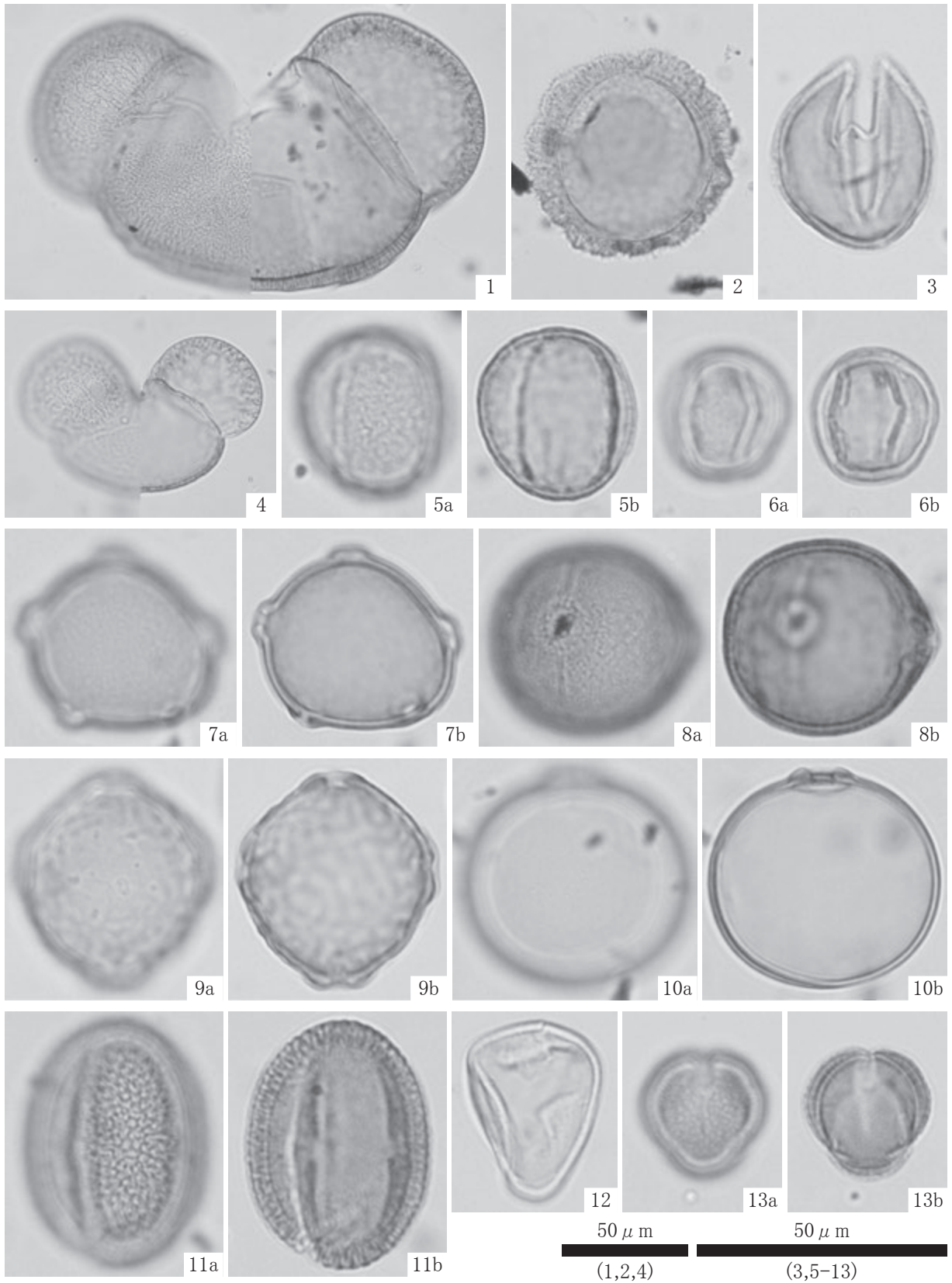
辻本裕也・辻 康男, 2002, 池島・福万寺遺跡の古環境復元. 「池島・福万寺遺跡2 (福万寺I期地区) 一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編」, (財)大阪府文化財センター, 361-410.

辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司, 2003, 自然科学分析の成果. 「勝部遺跡 大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 151-192.



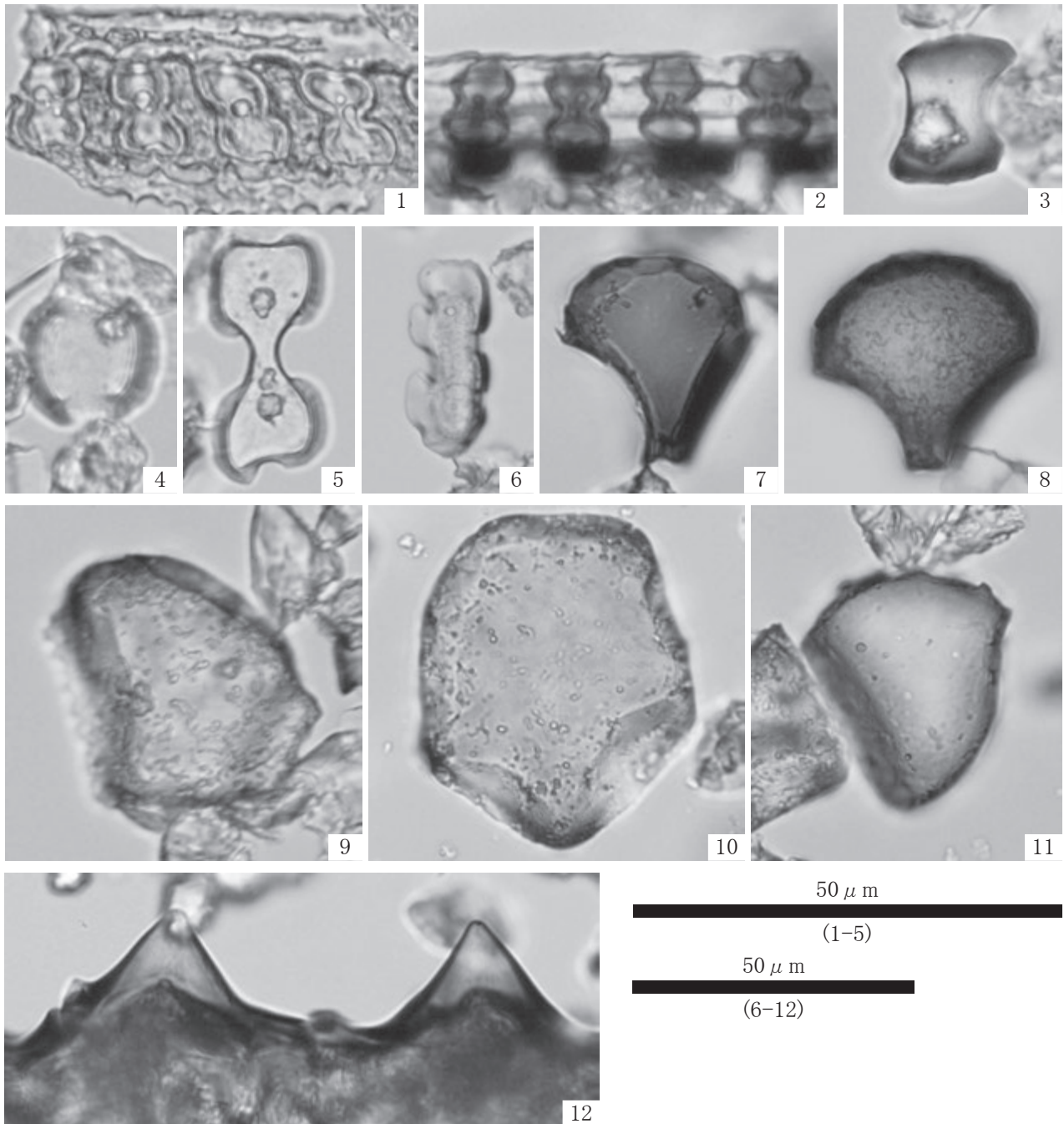
- 1 . *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (5地点;8層)
- 2 . *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (6地点;9層)
- 3 . *Cymbella heteropleura* var. *minor* Cleve (6地点;9層)
- 4 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (5地点;8層)
- 5 . *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith (6地点;9層)
- 6 . *Pinnularia divergens* W.Smith (6地点;9層)
- 7 . *Pinnularia gibba* Ehrenberg (5地点;8層)
- 8 . *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve (5地点;8層)
- 9 . *Pinnularia subrupestris* Krammer (5地点;8層)
- 10 . *Pinnularia viridiformis* Krammer (6地点;9層)
- 11 . *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (5地点;8層)

写真 10 珪藻化石



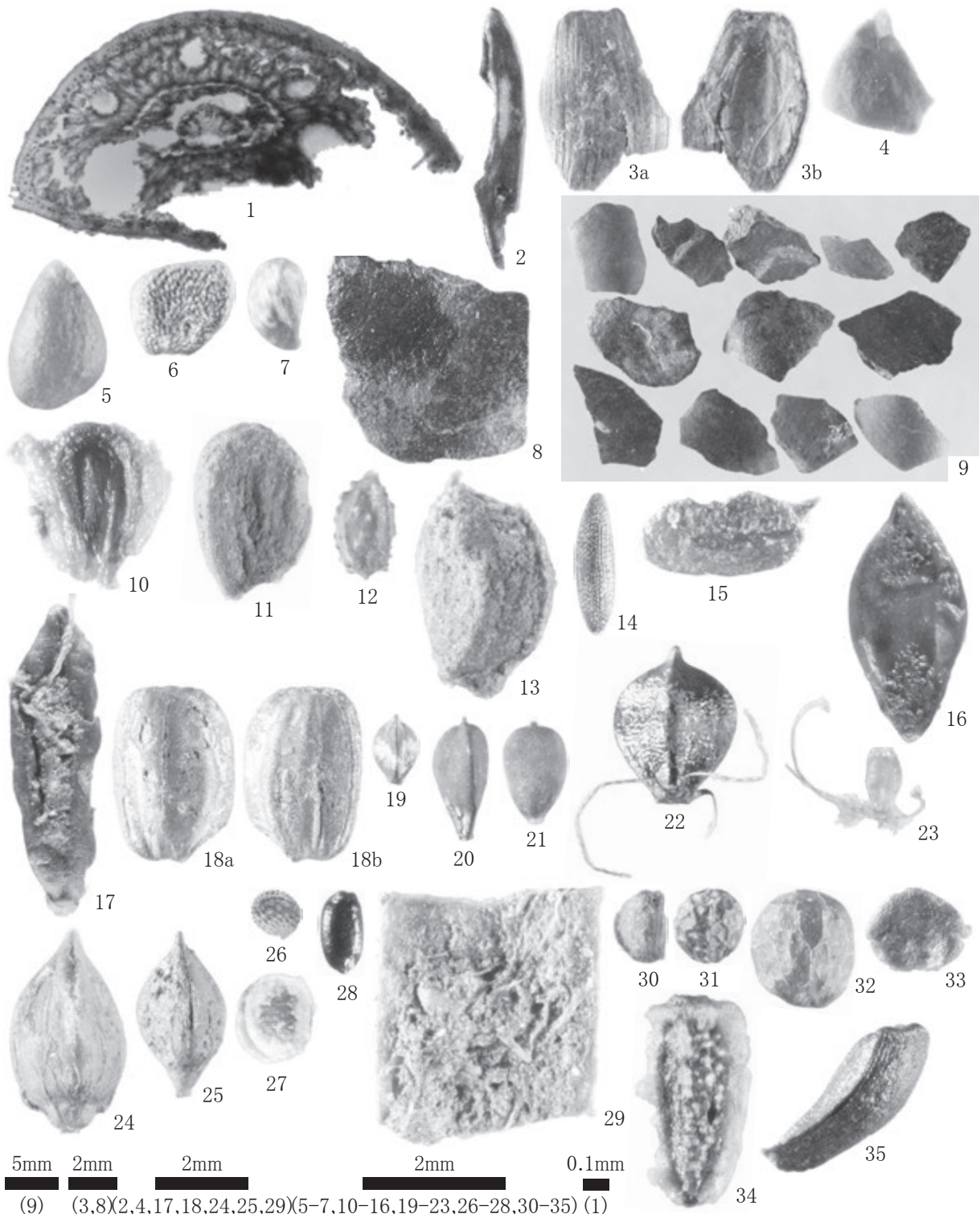
- | | | |
|-----------------------|----------------------|-----------------------|
| 1. モミ属(4地点;3層) | 2. ツガ属(4地点;3層) | 3. スギ属(4地点;3層) |
| 4. マツ属(4地点;3層) | 5. コナラ属コナラ亜属(4地点;3層) | 6. コナラ属アカガシ亜属(4地点;3層) |
| 7. クマシデ属ーアサダ属(4地点;3層) | 8. ブナ属(4地点;3層) | 9. ニレ属ーケヤキ属(4地点;3層) |
| 10. イネ科(4地点;3層) | 11. ソバ属(4地点;3層) | 12. カヤツリグサ科(4地点;3層) |
| 13. ヨモギ属(4地点;3層) | | |

写真 11 花粉化石



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. イネ属短細胞列(3地点;15層上部) | 2. イネ属短細胞列(12地点;6層) |
| 3. メダケ属短細胞珪酸体(3地点;3層) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体(3地点;3層) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(8地点;27層) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(4地点;4層) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(3地点;15層上部) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(8地点;27層) |
| 9. クマザサ属機動細胞珪酸体(8地点;57層) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体(3地点;3層) |
| 11. ウシクサ族機動細胞珪酸体(3地点;3層) | 12. イネ属穎珪酸体(2地点;3層) |

写真 12 植物珪酸体



(9) (3,8)(2,4,17,18,24,25,29)(5-7,10-16,19-23,26-28,30-35) (1)

- | | | |
|-------------------------------|---------------------------------|------------------------------|
| 1 . クロマツ 葉(横断面)(6地点;9層) | 2 . スギ 葉(5地点;8層) | 3 . コナラ属 果実(6地点;9層) |
| 4 . エノキ属 種子(6地点;9層) | 5 . クワ属 核(6地点;9層) | 6 . ヒサカキ属 種子(4地点;3層) |
| 7 . キイチゴ属 核(6地点;9層) | 8 . トチノキ 種子(6地点;9層) | 9 . トチノキ 種子(6地点;9層) |
| 10 . オモダカ属 果実(4地点;4層) | 11 . サジオモダカ属 果実(4地点;4層) | 12 . スブタ 種子(6地点;9層) |
| 13 . ヒルムシロ属 果実(4地点;4層) | 14 . ホッサモ 種子(4地点;3層) | 15 . イボクサ 種子(5地点;8層) |
| 16 . イネ科 果実(5地点;8層) | 17 . イネ 穎(4地点;4層) | 18 . イネ 胚乳(5地点;8層) |
| 19 . カヤツリグサ科(3面小型) 果実(4地点;4層) | 20 . カヤツリグサ科(3面中型) 果実(5地点;8層) | 21 . カヤツリグサ科(2面型) 果実(5地点;8層) |
| 22 . ホタルイ属 果実(4地点;3層) | 23 . カヤツリグサ科(小型花被片型) 果実(4地点;3層) | 24 . ミソバ 果実(5地点;8層) |
| 25 . ポントクタデ近似種 果実(5地点;8層) | 26 . ナデシコ科 種子(5地点;8層) | 27 . タガラシ 果実(5地点;8層) |
| 28 . ミズオトギリ 種子(4地点;3層) | 29 . クサネム 果実(4地点;4層) | 30 . チドメグサ属 果実(5地点;8層) |
| 31 . イヌコウジュ近似種 果実(4地点;3層) | 32 . シソ属-イヌコウジュ属 果実(5地点;8層) | 33 . ナス属 種子(5地点;8層) |
| 34 . タカサブロウ 果実(5地点;8層) | 35 . メナモミ属 果実(5地点;8層) | |

写真 13 大型植物遺体

第2節 良田平田遺跡出土柱材の樹種同定、放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

良田平田遺跡では、古代の建物跡が確認されている。今回の分析調査では、発掘調査により検出された古代の建物跡の柱材についてウイグルマッチングによる年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、掘立柱建物1を構成する柱穴のうち、3147ピット、3149ピット、3151ピットの3基から出土した柱材3点（No.2248、2250、2252）、掘立柱建物10を構成する3187ピットから出土した柱材1点（No.2424）の合計4点である。いずれも芯持丸木あるいは芯持材であり、表面に面取等の加工の痕跡がある。また、いずれの試料にも樹皮の残存は認められない。

試料のうち、No.2424には92本、No.2250には120本の年輪が確認された。No.2252とNo.2248は、現地での年輪観察では年輪が細かくて正確な計測ができないため、輪切りにして表面を研磨した後、実体顕微鏡で年輪を計測した。その結果、No.2252には125本、No.2248には122本の年輪が確認された。年代測定試料は、各試料から3点、合計12点を採取した。No.2248は、外から1-5年、56-60年、115-120年、No.2250は外から1-5年、61-65年、115-120年、No.2252は、外から1-5年、56-60年、121-125年、No.2424は外から1-5年、41-45年、86-90年の各3点合計12点である。樹種同定試料は、各試料の外側や上部の破損部から木片を採取して試料とした。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌など後代の付着物を、メス・ピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理AAA:Acid Alkali Acid）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

暦年較正ならびに数学的モデルにおけるウイグルマッチングの検証については、OxCal v4.2.3 (Bronk Ramsey, 2013) を用いて行う。暦年較正曲線は IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013) を用いる。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果を考慮した結果を表 68 に示す。これまでの研究成果から、過去の 14C 濃度は一定ではなく、常に変化していたと考えられている。このため、14C の濃度から得られた放射年代を実年代に変換するための較正曲線が考案された。現在最新のものは IntCal13 (Reimer et al 2013) である。大気や海水の物質循環の違いにより、北半球大気、南半球大気、海域の3つの較正曲線が用意されているが、今回は北半球用を用いる。

1 試料で暦年較正を行う場合は、得られた結果を較正曲線に投影し、分析試料と較正曲線双方の確率分布を考慮して、濃度（確率）の高い部分を読み取って較正年代を決める（表 2 に OxCal v4.2.3 を用いた結果を載せている）。

一方、較正曲線は、過去の 14C 濃度変動により細かな揺れ（ウイグル）が生じる。このため、年輪が多く含まれる材幹試料について、相対的な年代幅を年輪によって確かめながら分割した複数試料を分析すると、較正曲線の細かな揺れが分析結果に現れる可能性を秘めている。したがって、それぞれの分析結果を年輪から見た相対的な実年代差に合わせ、既知の較正曲線に沿って並べることで、材幹試料からみた較正曲線をつくることができる。これを既知の較正曲線（IntCal13）と比較し、最も

表 68 放射性炭素年代測定及び樹種同定結果

遺構名	取上No.	器種・木取り・樹種	年輪数	試料番号	採取年輪の位置	処理法	$\delta 13C(\text{‰})$	年代値	年代値 (較正用)	code.No.
掘立柱建物1 3147ピット	2248	柱材 芯持丸木 スギ	122本	14872-12	外から115-120	AAA	-24.66±0.20	1,500±20	1,503±18	IAAA-130664
				14872-11	外から56-60	AAA	-23.27±0.26	1,460±20	1,464±18	IAAA-130665
				14872-10	外から1-5	AAA	-24.96±0.25	1,290±20	1,289±17	IAAA-130666
掘立柱建物1 3149ピット	2250	柱材 芯持材 スギ	120本	14872-6	外から115-120	AAA	-25.84±0.28	1,290±20	1,289±19	IAAA-130667
				14872-5	外から61-65	AAA	-24.05±0.26	1,270±20	1,269±18	IAAA-130668
				14872-4	外から1-5	AAA	-24.67±0.22	1,250±20	1,246±18	IAAA-130669
掘立柱建物1 3151ピット	2252	柱材 芯持丸木 スギ	125本	14872-9	外から121-125	AAA	-26.67±0.23	1,330±20	1,334±19	IAAA-130670
				14872-8	外から56-60	AAA	-25.19±0.26	1,290±20	1,287±18	IAAA-130671
				14872-7	外から1-5	AAA	-25.34±0.25	1,230±20	1,231±18	IAAA-130672
掘立柱建物10 3187ピット	2424	柱材 芯持丸木 スギ	92本	14872-3	外から86-90	AAA	-24.01±0.23	1,370±20	1,367±19	IAAA-130673
				14872-2	外から41-45	AAA	-21.13±0.24	1,300±20	1,298±19	IAAA-130674
				14872-1	外から1-5	AAA	-20.96±0.23	1,350±20	1,354±18	IAAA-130675

*AAA処理(酸-アルカリ-酸処理)

*年代値は、同位体補正を行った値

*較正用年代値は1桁目を丸めていない値

表 69 ウィグルマッピングによる解析結果

遺構名	取上No.	器種・木取り ・樹種	試料番号	年輪の位置	較正年代(2σ)	ウィグルマッピング (2σ)		信頼度*
						calAD	698	
掘立柱建物1 3147ピット	2248	柱材 芯持丸木 スギ	最外輪年代		calAD 666 - calAD 698	698	95.5	
			14872-12	外から115-120	calAD 536 - calAD 611	calAD 551 - calAD 583	124.8	
			14872-11	外から56-60	calAD 566 - calAD 641	calAD 611 - calAD 643	75.5	
			14872-10	外から1-5	calAD 670 - calAD 768	calAD 666 - calAD 698	98	
掘立柱建物1 3149ピット	2250	柱材 芯持材 スギ	最外輪年代		calAD 790 - calAD 830	830	33.5	
			14872-6	外から115-120	calAD 669 - calAD 769	calAD 675 - calAD 715	106.8	
			14872-5	外から61-65	calAD 681 - calAD 771	calAD 730 - calAD 770	97	
			14872-4	外から1-5	calAD 683 - calAD 863	calAD 790 - calAD 830	14.6	
掘立柱建物1 3151ピット	2252	柱材 芯持丸木 スギ	最外輪年代		calAD 767 - calAD 815	815	63.7	
			14872-9	外から121-125	calAD 650 - calAD 763	calAD 647 - calAD 695	65.5	
			14872-8	外から56-60	calAD 670 - calAD 769	calAD 712 - calAD 760	79.7	
			14872-7	外から1-5	calAD 693 - calAD 876	calAD 767 - calAD 815	87.7	
掘立柱建物 10 3187ピット	2424	柱材 芯持丸木 スギ	最外輪年代		calAD 741 - calAD 761	761	3.1	
			14872-3	外から86-90	calAD 641 - calAD 676	calAD 656 - calAD 676	67.4	
			14872-2	外から41-45	calAD 665 - calAD 768	calAD 701 - calAD 721	74.6	
			14872-1	外から1-5	calAD 647 - calAD 680	calAD 741 - calAD 761	0.5	

*ウィグルマッピングモデルにおける値の信頼性を示す数値

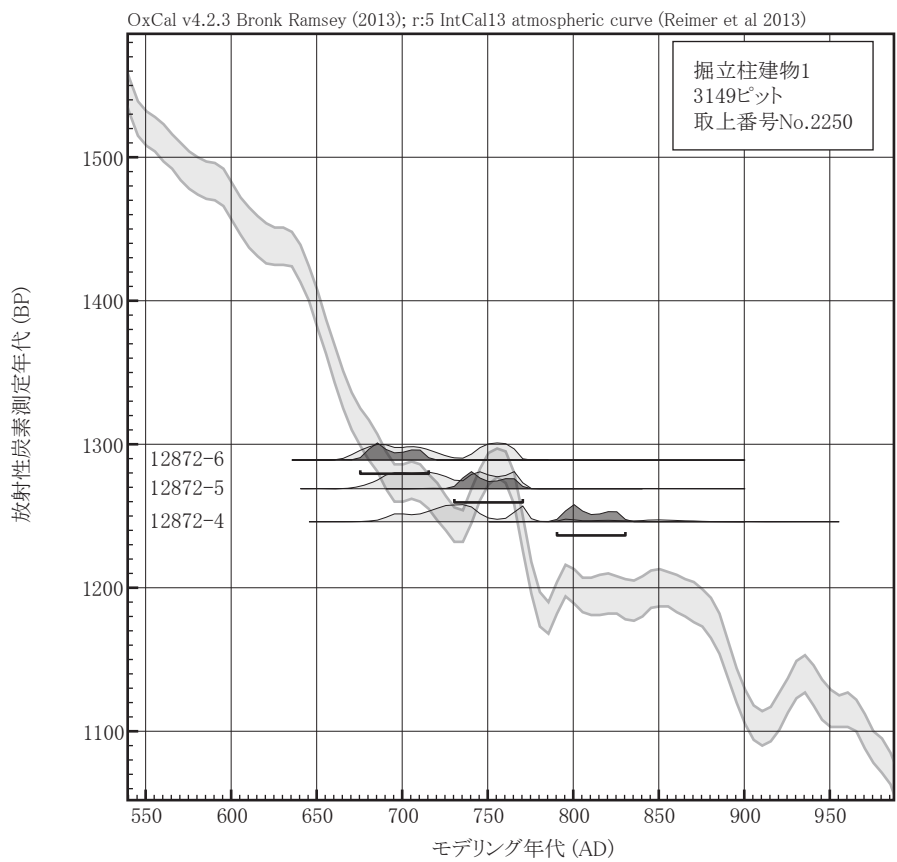
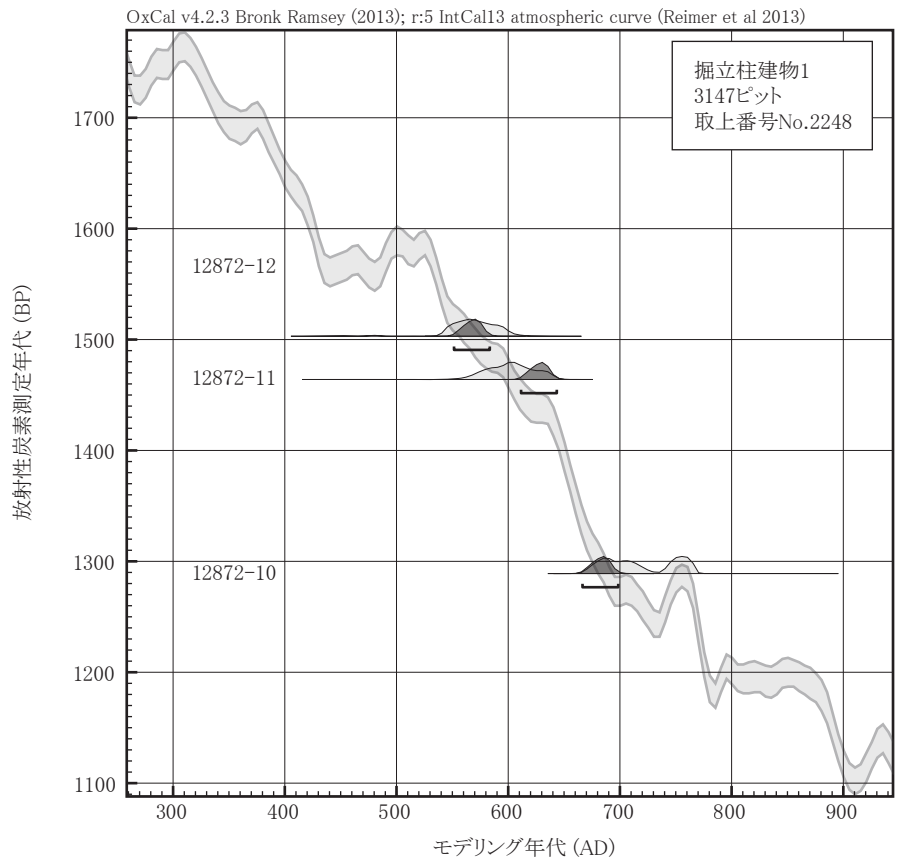
適当と思われるモデリングを行って年代を決める。これがウィグルマッピング法である。ウィグルマッピング法は、互いの較正曲線の揺れを比較できる点、年輪によって実時代差がわかる複数の結果を統計的に扱って、既知の較正曲線と比較できる点で優れている。言い換えれば、通常分析が、較正曲線と分析値について点で一致する場所を探しているのに対し、ウィグルマッピング法では、ある程度の時代幅をもった面として比較するため、測定値の妥当性を判断する材料が多くなり、信頼性が増す。OxCal v4.2.3のマニュアルによれば、ウィグルマッピングによるモデリングで信頼性の高い結果が得られた樹皮付きの試料は、得られた年代値の5年後に伐採されたことを示すとされる。

OxCal v4.2.3を用いてモデリングを行ったウィグルマッピングの結果を表2と図1、2に示す。これによると、残存している最外年輪の時代は、以下のようになる。

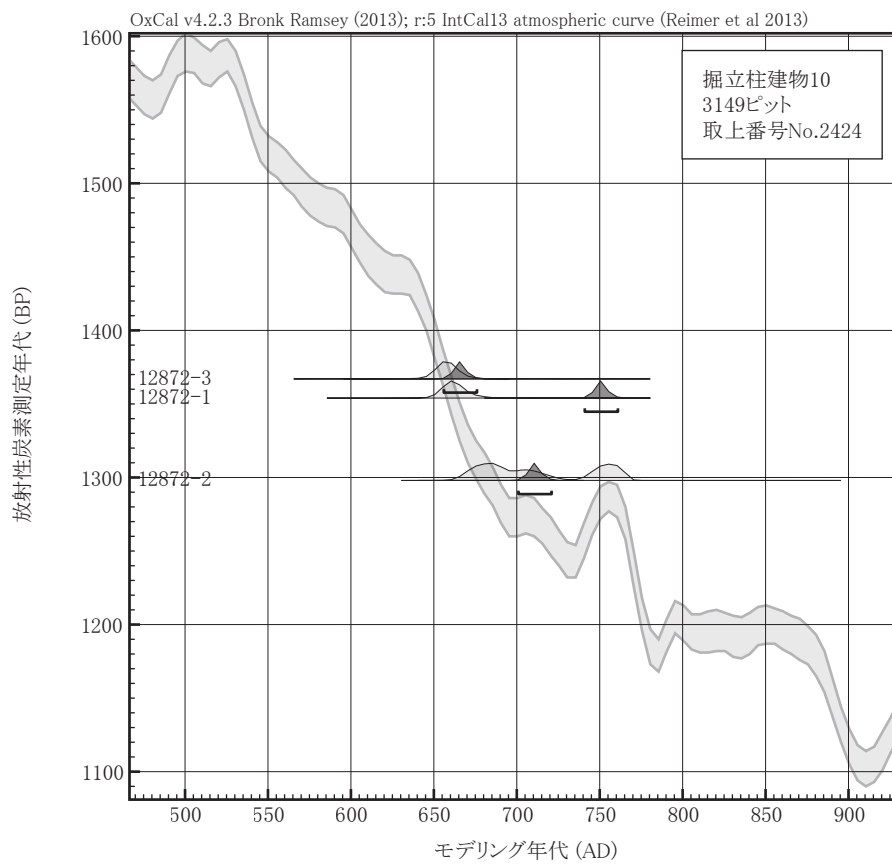
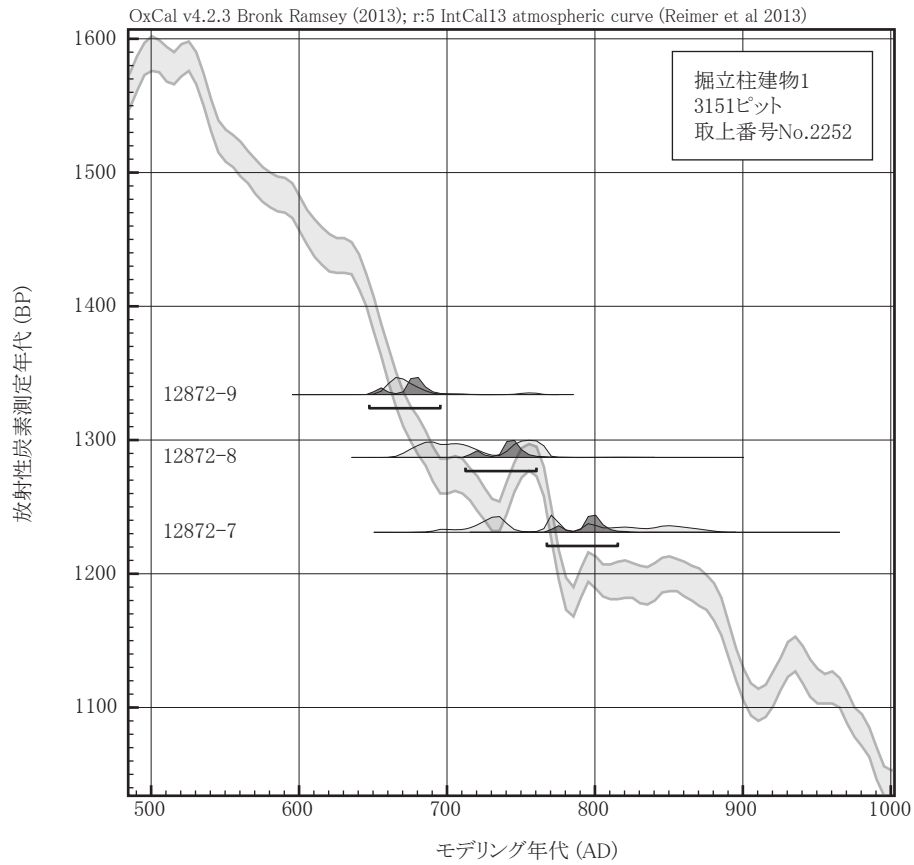
掘立柱建物 1	3147 ピット	取上 No.2248	cal AD 666-698
	3149 ピット	取上 No.2250	cal AD 790-830
	3151 ピット	取上 No.2252	cal AD 767-815
掘立柱建物 10	3187 ピット	取上 No.2424	cal AD 741-761

この結果を踏まえると、掘立柱建物1の3147ピット No.2248の柱材が7世紀中・後葉、3149ピット No.2250と3151ピット No.2252の柱材が8世紀後半～9世紀前半、掘立柱建物10の柱材が8世紀中葉となる。掘立柱建物1の柱材3本のうち、3147ピット 取上 No.22481本の値が他の2本の柱材よりも古い年代を示したが、今回の柱材はいずれも表面に樹皮が残っておらず、面取等の整形も認められるなど、加工により失われた年輪が存在する。そのため、伐採年代と分析により得られた年代値に若干の違いが生じている可能性もある。

また、第302図に示すように、掘立柱建物1の3149ピット取上 No.2250(14872-4)と、掘立柱建物10の3187ピット取上 No.2424(14872-1)は年輪数から見た相対的な時代差と測定値との間に開きがある。このため、掘立柱建物10の3187ピット取上 No.2424と掘立柱建物1の3149ピット No.2250は、他の柱材に比べ、年代値の信頼が落ちる。これは、分析を行ったのが1試料につき3点



第 302 図 ウィグルマッチングによる年代値 (1)



第 303 図 ウィグルマッチングによる年代値 (2)

であるため、1 試料でも外れる試料があると、統計的に信頼度が急に落ちる事が原因であり、より分析の間隔を詰めて行うことにより、統計学的な信頼度が上がり、回避できると考えられる。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表 68 に示す。柱材は、全て針葉樹のスギに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高 (写真 14)。

4. 考察

今回調査を行った掘立柱建物 1 の 3 本と掘立柱建物 10 の 1 本の柱材は、いずれも芯持丸木あるいは芯持材で表面に面取等の整形が認められる。樹種は、いずれもスギに同定された。スギの木材は、木理が通直で割裂性・耐水性が比較的高く、加工は容易な材質を有し、大径木になることから、大型で通直な木材を得やすい。このような材質を考慮して、スギが選択的に利用されていた可能性がある。

各柱材の残存年輪数を見ると、掘立柱建物 1 の 3 本は 120 年～125 年、一方、掘立柱建物 10 の 1 本は 92 年であった。また、柱の直径は掘立柱建物 1 が総じて太く、掘立柱建物 10 でやや細い。いずれの柱材も表面に樹皮が残っておらず、面取等の加工整形が行われているため伐採年代を特定できないものの、生育開始年代 (最外輪年代値から年輪数を引いた年代) を見ると、掘立柱建物 1 の 3147 ピットが cal AD 544-576、3149 ピットが cal AD 670-710、3151 ピットが cal AD 642-690、掘立柱建物 10 の 3187 ピットが cal AD 649-669 と、掘立柱建物 1 の 3147 ピット以外は概ね同時期に成長開始した木材からなり、掘立柱建物 1 の 3147 ピットの木材がこれらより 100 年程度古い時期に成長開始した木材からなることが窺える。

以上の柱材の形状、残存年輪、年代値から、掘立柱建物 1 の柱材のうち、3147 ピットの柱材の素性が異なっている可能性が考えられる。例えば掘立柱建物 1 を構築する際に古い時期に利用されていた柱材を転用しているとするれば、今回のような結果になるものと思われる。今後、発掘調査時の遺物の出土状況や各掘立柱建物の埋没過程などの情報を踏まえた複合的評価が課題として認識される。

引用文献

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., & Weninger, B. 2001, 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43 (2A), 381-389.

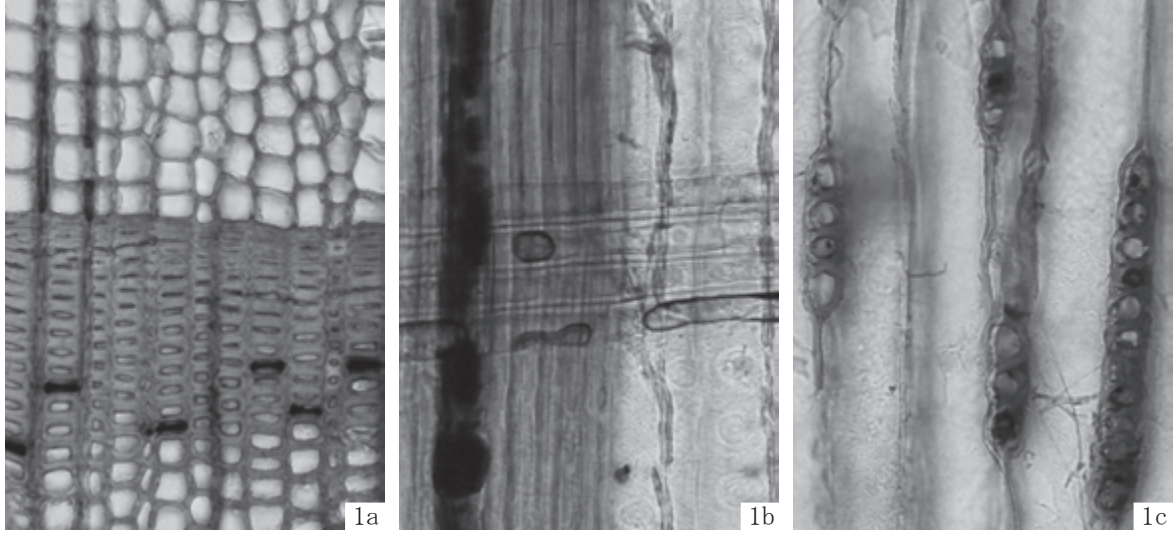
Bronk Ramsey, C., Lee, S., 2013, Recent and planned developments of the program OxCal, *Radiocarbon*, 55, (3-4), 720-730.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., & van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

図版1 木材



1. スギ(掘立柱建物1;3147ピット;取上No.2248)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m: a
100 μ m: b, c

写真 14 木材顕微鏡写真

第3節 良田平田遺跡出土自然木の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

湖山池の南岸部から南北方向に延びる丘陵に挟まれた谷筋に立地する良田平田遺跡で、基本層序の第2層下面から出土した自然木について、樹種同定を行った。なお、一部の試料についてはウィグルマッピング法による放射性炭素年代測定も行われている（第Ⅶ章第4節参照）。

2. 試料と方法

試料は、第2層下面から出土した自然木3点である。試料 No.1 は、ウィグルマッピングによる放射性炭素年代測定の結果、縄文時代晩期中葉の年代を示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、自然木はいずれもスギであった。同定結果を表70に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、写真15に光学顕微鏡写真を示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 写真15 1a-1c (No.1)、2a-2c (No.2)、3a-3c (No.3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に分布する。放射組織は単列で、高さ1～18列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個見られる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

4. 考察

3点の自然木はいずれもスギであった。スギの天然分布は、前述のとおり日本海側に多い(伊東ほか, 2011)。良田平田遺跡からは距離があるが、鳥取市に所在する青谷上寺地遺跡で行われた花粉分析の結果によれば、縄文時代早期末～古代頃までは周辺にスギが多く生育していたと推測されている(渡

表70 良田平田遺跡出土木材の樹種同定

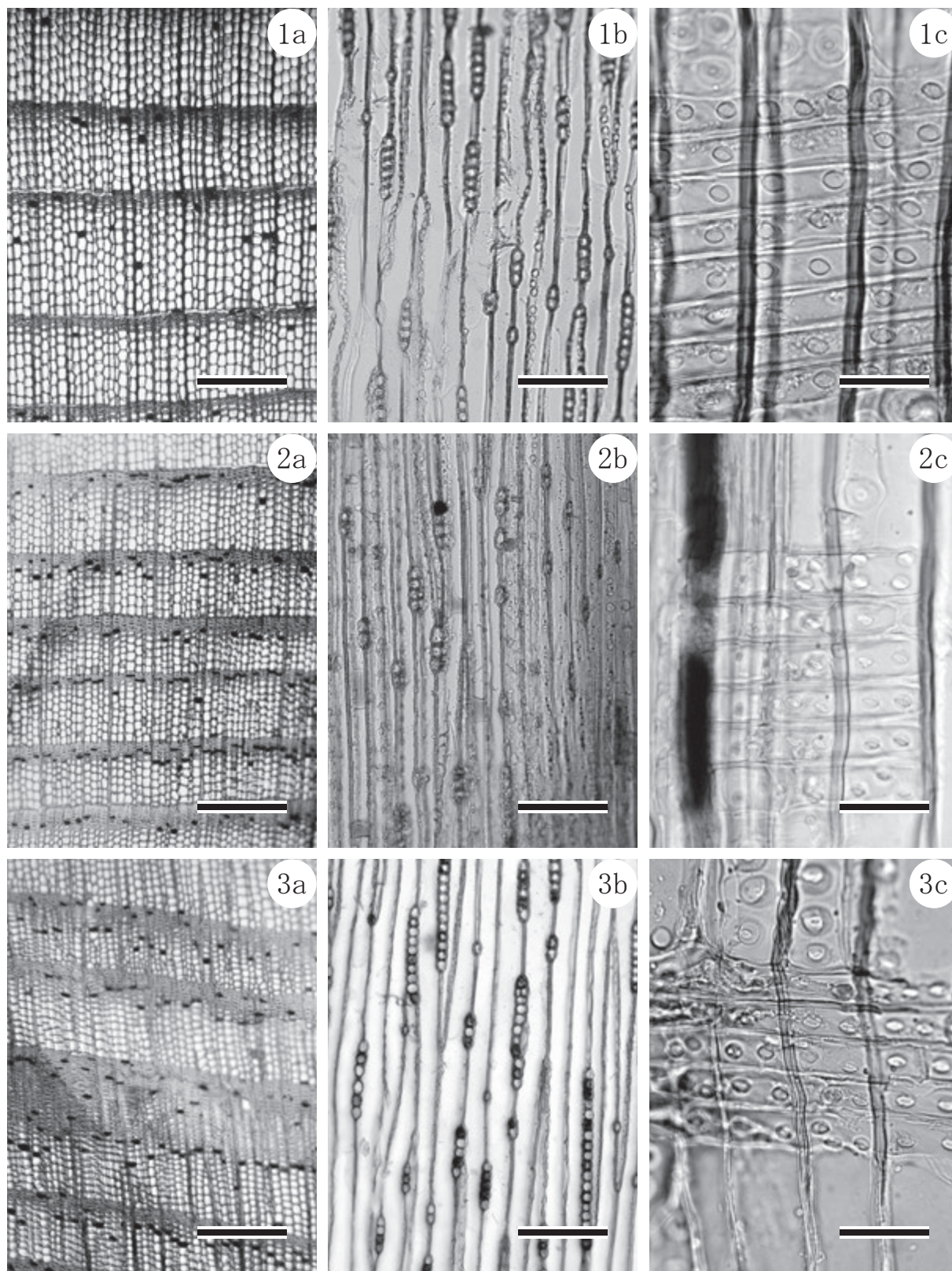
試料 No.	地区名	試料名	出土層位	器種	樹種	木取り	備考	年代測定番号
1	T23-7g-2D-6c	サンプル①	第2層下面	自然木	スギ	芯持丸木	加工痕あり	PLD-22737 ~22739
2	T23-7g-2D-8b	サンプル②		自然木	スギ	芯持丸木		
3	T23-7g-2D-7c	サンプル③		自然木	スギ	芯持丸木		

辺、2006)。今回の良田平田遺跡においても、縄文時代晩期中葉にはスギが生育していた可能性がある。また、試料 No.1 のスギには一部加工痕が認められているが、古代の造成時に地中に遺存していた邪魔な部分を切断等した痕跡の可能性がある。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌. 238p, 青海社.

渡辺正巳（2006）考古学と自然科学—化石から昔の景色が見えてくる—. 鳥取県教育委員会事務局妻木晩田遺跡事務所編「倭人の生きた環境 山陰弥生時代の人と自然環境」：29-34, 鳥取県教育委員会.



1a-1c. スギ(No. 1)、2a-2c. スギ(No. 2)、3a-3c. スギ(No. 3)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)

写真 15 良田平田遺跡出土自然木の光学顕微鏡写真

第4節 良田平田遺跡出土自然木の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・小林克也・竹原弘展・中村賢太郎

1. はじめに

鳥取県鳥取市良田に所在する良田平田遺跡の発掘調査で検出された根株について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定も行われている（第Ⅶ章第3節参照）。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 71 のとおりである。

試料は、3 区北東で検出された根株である（サンプル①）。根株の樹種はスギである。根株には最終形成年輪が認められた。また、加工痕が見られた。

根株の年輪を計数した後、外側から 1～5 年目（PLD-22737）、86～90 年目（PLD-22738）、176～180 年目（PLD-22739）の 3ヶ所から 14C ウィグルマッチング用試料を採取した。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出し、3ヶ所の 14C 年代を用いてウィグルマッチングを行った。

3. 結果

表 72 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代、ウィグルマッチング結果を、第 304 図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、

表 71 ウィグルマッチング測定試料及び処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-22737	地区:3区 種別:根株(加工痕あり) 遺物No. サンプル① 種類:生材(スギ) 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	採取位置:1-5y (最終形成年輪)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-22738		採取位置:86-90y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-22739		採取位置:176-180y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

測定 of 統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1 年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最終形成年輪の年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数を考慮する必要がある。

4. 考察

根株の 3 ヶ所から採取した試料（PLD-22737 ~ 22739）の 14C 年代を用いてウィグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた結果、2 σ 暦年代範囲（確率 95.4%）で 674-634 cal BC（95.4%）であった。この年代は、紀元前 7 世紀で、藤尾（2009）や小林（2009）によれば、概ね縄文時代晩期末 ~ 弥生時代前期初頭に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2A), 381-389.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり 第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54, 雄山閣.

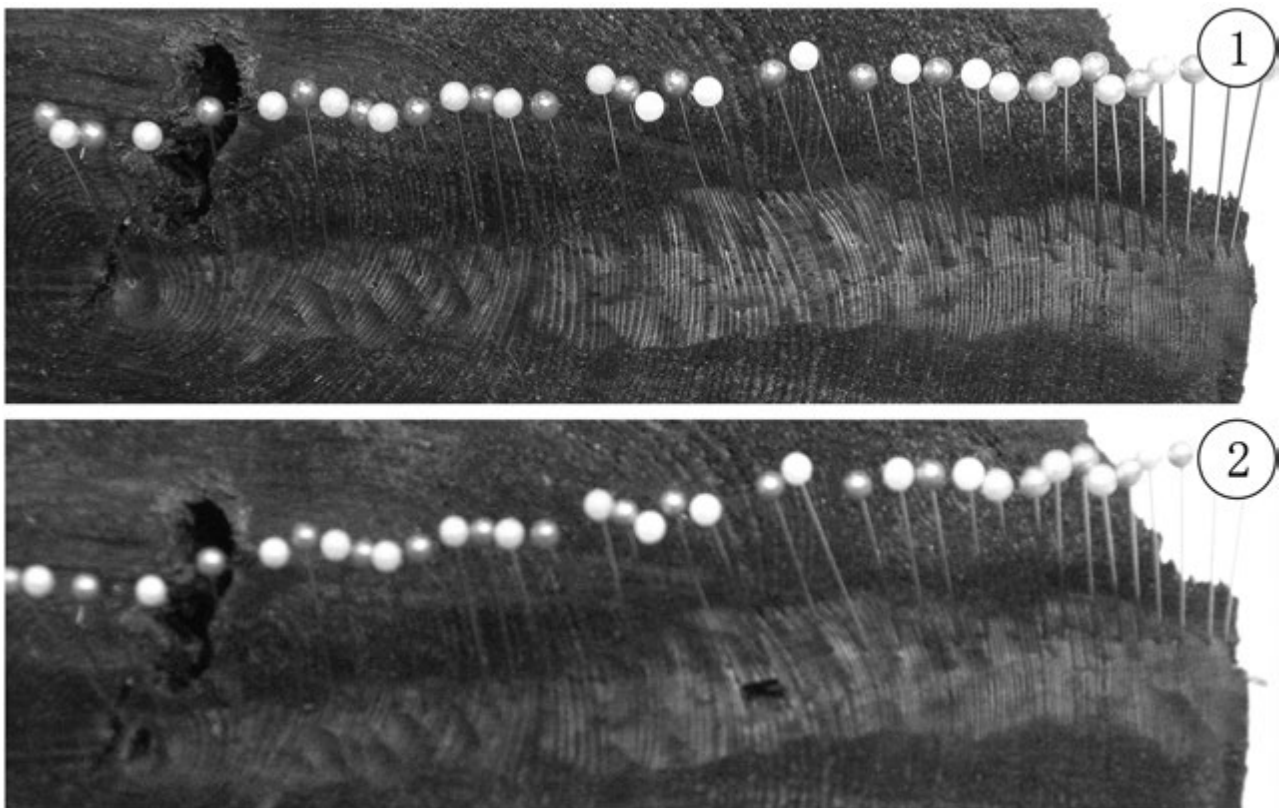
小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり 第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

表 72 放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-22737	-26.51 \pm 0.22	2488 \pm 21	2490 \pm 20	756BC (11.1%) 733BC 690BC (2.5%) 685BC 669BC (3.3%) 662BC 650BC (51.4%) 545BC	766BC (95.4%) 521BC
PLD-22738	-24.33 \pm 0.22	2487 \pm 20	2485 \pm 20	756BC (11.4%) 732BC 691BC (2.7%) 685BC 669BC (3.5%) 661BC 651BC (22.0%) 607BC 601BC (28.6%) 545BC	766BC (95.4%) 521BC
PLD-22739	-25.41 \pm 0.21	2698 \pm 21	2700 \pm 20	893BC (18.0%) 876BC 846BC (50.2%) 813BC	897BC (95.4%) 810BC
最外試料年代				668BC (68.2%) 644BC	674BC (95.4%) 634BC

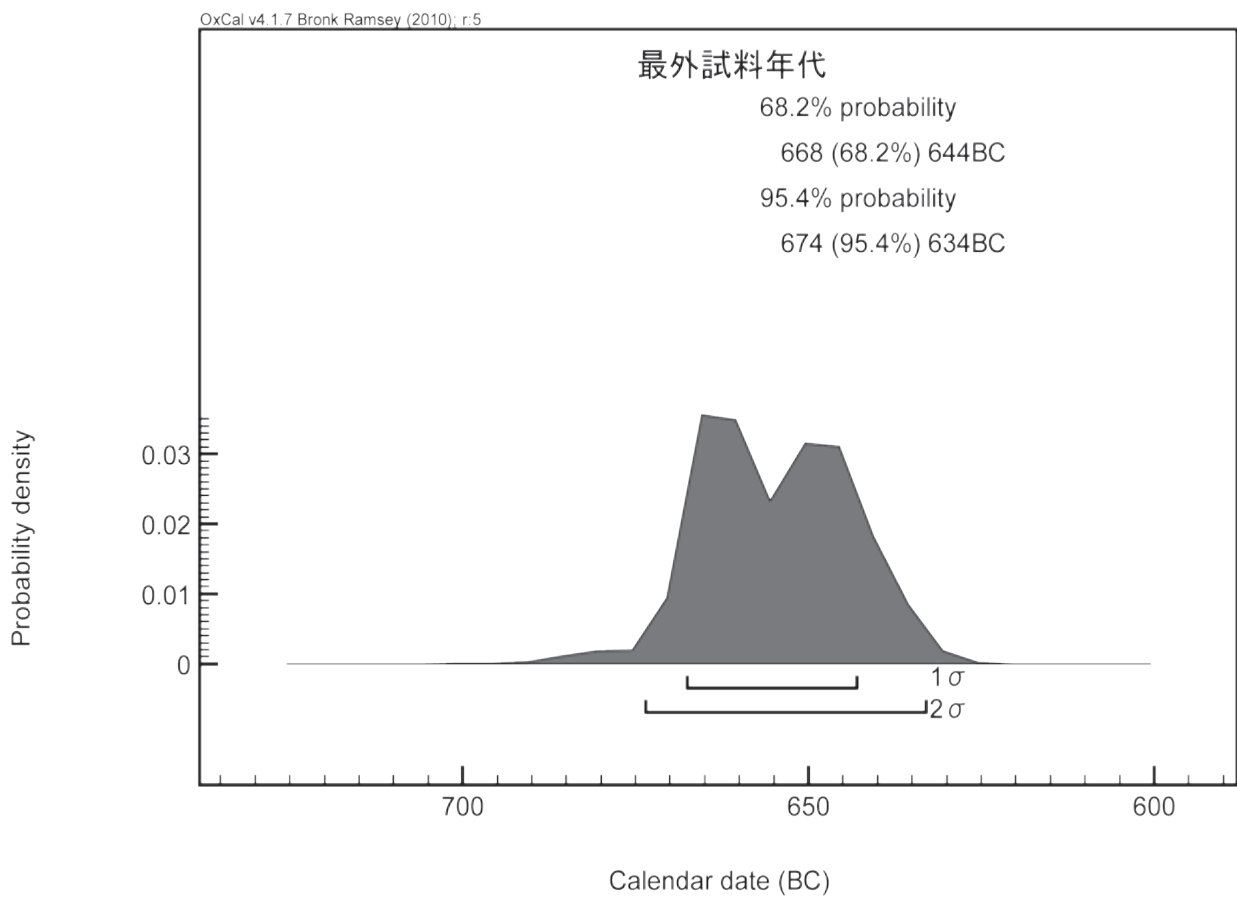
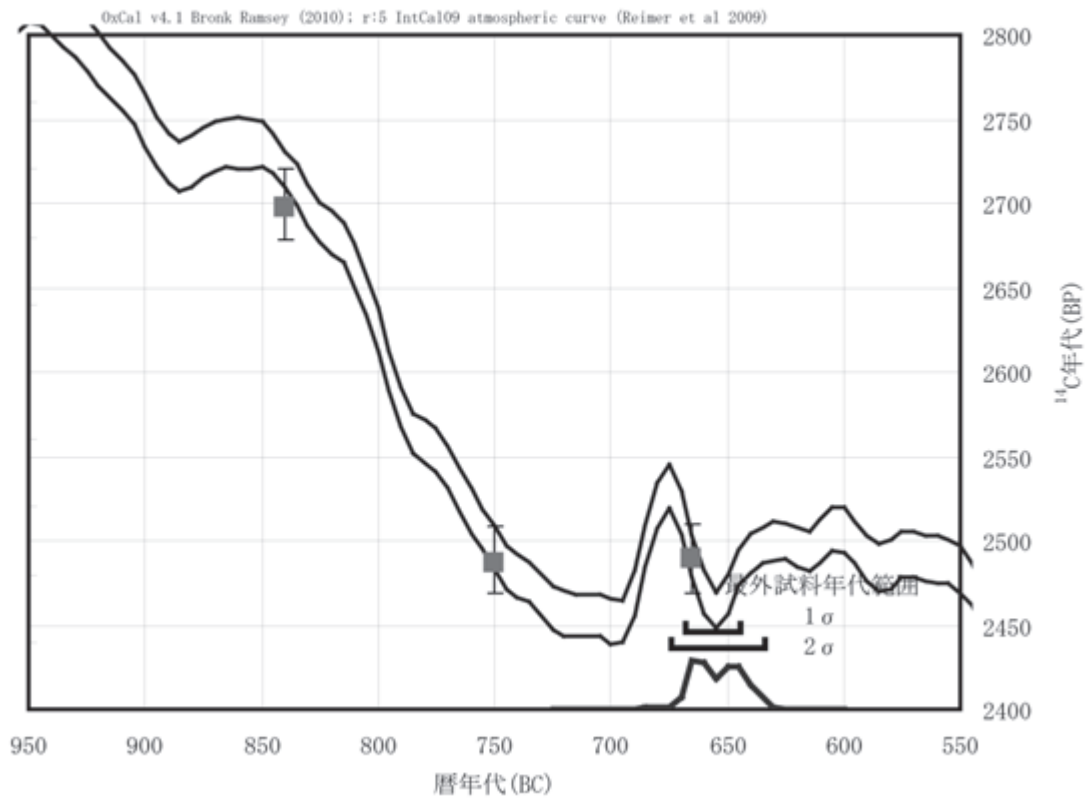


年代測定を行った試料 (No. 1とNo. 2のピンは5年輪間隔)

1. サンプル①年輪計測結果 (スギ; PLD-22737~PLD-22739)

2. サンプル①測定試料の採取位置 (スギ; PLD-22737~PLD-22739)

写真 16 年代測定を行った試料



第 304 図 ウィグルマッチング結果

第5節 良田平田遺跡出土鉄滓の分析調査

日鉄住金テクノロジー（株）

八幡事業所・TACセンター 大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

良田平田遺跡は鳥取県鳥取市良田地内に所在する。弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡や水路などの遺構とともに、木簡や転用硯、漆容器、鉄滓などが出土している。鉄滓の出土量は多くはないが、地域周辺の鉄～鉄器生産の様相を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

表 73 に示す。出土鉄滓 4 点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。

(2) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000 及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で順を追って研磨している。なお金属組織の調査では、3% ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50 または 100 gf で測定した。

(4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化磷（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

YOH-1：流出溝滓

(1) 肉眼観察:製鉄炉の操業中に排出された、製錬滓(流出溝滓)側面端部の小破片である(85.1 g)。滓の地の色調は黒灰色であるが、表面は広い範囲で白色を呈する。また、上面は流動状で、細かい皺状の凹凸が見られる。下面にはごく小形の木炭痕が薄く残る。側面は1面を除く3面が破面で、気孔は少なく緻密である。着磁性はごく弱い。

(2) 顕微鏡組織:写真17①~③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)が素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。また、滓中の微細な明白色部は金属鉄である。3% ナイタルで腐食したところ、③右下の金属粒では垂共析組織($C < 0.77\%$)が確認された。

(3) ビッカース断面硬度:写真17②の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は600Hv、669Hvであった。ウルボスピネルと推定される(注1)。

(4) 化学組成分析:表74に示す。全鉄分(Total Fe) 31.89%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.25%、酸化第1鉄(FeO) 34.48%、酸化第2鉄(Fe_2O_3) 6.92%の割合であった。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 43.83%と高値で、塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)も6.98%と高め傾向を示す。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン(TiO_2)は12.84%と高値である。バナジウム(V)は0.18%、酸化マンガン(MnO) 0.62%、二酸化ジルコニウム(ZrO_2)が0.35%であった。銅(Cu)は<0.01%と低値である。

当鉄滓はチタン(TiO_2)含有率が高く、塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)も高め傾向を示す。この結果から、火山岩起源の高チタン砂鉄を原料とする製錬滓と推定される。

YOH-2: 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察:やや扁平な形状の椀形鍛冶滓である(152.0g)。側面2面は破面。やや着磁性が強く重量感のある滓である。地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。上面は比較的平坦で、ごく小形の木炭痕が薄く点在する。また側面と下面に1箇所ずつ木炭の噛み込みも見られる。下面は浅い椀形で中小の気孔が多数散在する。

(2) 顕微鏡組織:写真17④~⑥に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が素地のガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(3) ビッカース断面硬度:写真17⑥の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は325Hv、429Hvであった。風化の影響か、ウスタイトの文献硬度値450~500Hvと比較すると軟質である。しかし結晶の色調と形態、後述の化学組成等からウスタイトと推測される。

(4) 化学組成分析:表74に示す。全鉄分(Total Fe) 43.35%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.04%、酸化第1鉄(FeO) 36.63%、酸化第2鉄(Fe_2O_3) 21.21%の割合であった。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 30.34%で、このうち塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)は1.88%と低めであった。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン(TiO_2)も0.93%と低値である。バナジウム(V) 0.02%、酸化マンガン(MnO) 0.14%、二酸化ジルコニウム(ZrO_2) 0.01%といずれも低値であった。また銅(Cu)は0.02%であった。

当鉄滓は鉄酸化物(FeO)と炉材粘土の溶融物(SiO_2 主成分)主体の鉄滓である。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO_2 、V、 MnO)は低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YOH-3：流出溝滓

(1) 肉眼観察：製鉄炉の操業中に排出された、製錬滓（流出溝滓）側面端部の小破片である（52.0 g）。滓の地の色調は黒灰色で、表面はやや風化している。上面は流動状で皺状の凹凸が見られる。下面には部分的に灰褐色の被熱粘土が付着している。破面の気孔はごく僅かで、非常に緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真 18 ①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。また滓中のごく微細な明白色粒は金属鉄である。3% ナイタルで腐食したところ、②中央の金属粒では亜共析組織（ $C < 0.77\%$ ）が確認された。

(3) ビッカース断面硬度：写真 18 ③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 713Hv、737Hv であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）としては若干高値傾向にあり、アルミナ（ Al_2O_3 ）など、他の元素を微量固溶している（注 2）可能性が考えられる。

(4) 化学組成分析：表 74 に示す。全鉄分（Total Fe）37.56% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.18%、酸化第 1 鉄（FeO）44.68%、酸化第 2 鉄（ Fe_2O_3 ）3.79% の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）36.69% と高く、塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）も 4.93% である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は 12.01% と高値であった。またバナジウム（V）は 0.22%、酸化マンガン（MnO）0.50%、二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）が 0.29% であった。銅（Cu）は $< 0.01\%$ と低値である。

当鉄滓は流出溝滓（YOS-1）とよく似た鉱物・化学組成であった。

YOH-4：炉内滓

(1) 肉眼観察：ごく小形の鉄滓破片と推測される。滓の地の色調は暗灰色で、表面は若干風化している。また表面細かい木炭痕や気孔などによる凹凸があり、一部木炭の噛み込みも見られる。着磁性は比較的強い。

(2) 顕微鏡組織：写真 18 ④～⑥に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。ウスタイトの晶出はなく、通常砂鉄製錬滓に見られる晶癖である。

(3) ビッカース断面硬度：写真 18 ⑥の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 737HV、867Hv であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）としては若干高値傾向にあり、アルミナ（ Al_2O_3 ）など、他の元素を微量固溶している可能性が考えられる。また、淡灰色柱状結晶の硬度値は 620Hv であった。ファヤライトの文献硬度値 600～700Hv の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(4) 化学組成分析：表 74 に示す。全鉄分（Total Fe）46.26% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.66%、酸化第 1 鉄（FeO）36.77%、酸化第 2 鉄（ Fe_2O_3 ）25.19% の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）17.72% と低めで、塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）も 2.09% と低値であった。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は 8.06% と高めで、バナジウム（V）は 0.33%、酸化マンガン（MnO）0.39%、二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）0.08% であった。銅（Cu）は $< 0.01\%$ と低値である。

当鉄滓は流出溝滓（YOS-1、3）と比較すると、ややチタン（ TiO_2 ）含有率は低めである。

ただし鳥取県下の出土製錬滓とはほぼ同等のチタン含有率を示しており（第 305 図（注 3））、砂鉄製錬滓（炉内滓）の小破片の可能性が高いと考えられる。

4. まとめ

良田平田遺跡から出土した鉄滓4点を分析調査した結果、以下の点が明らかとなった。

4-1. 製鉄関連遺物

3区3162溝から出土した9世紀後半～10世紀初め頃の流出溝滓(YOS-1, 3)は、火山岩起源の高チタン砂鉄を原料とする製錬滓と推定される。2点ともよく似た鉱物・化学組成で、チタン(TiO₂)含有率は12%とやや高めであった。同じ製鉄遺跡から鍛冶原料(製錬鉄塊系遺物)に混じって搬入された可能性がある。

また、4区第4-2層から出土した7世紀末～8世紀前半の鉄滓(YOS-4)は、当初外観から鍛冶滓の可能性が高いと考えられた。しかし、顕微鏡観察の結果、砂鉄製錬滓で最もよく見られるウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)、ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)組成で、ウスタイト(Wustite: FeO)が見られないこと。チタン(TiO₂)含有率も鳥取県下の出土製錬滓とほぼ同等であることから、砂鉄製錬滓と推定される。鍛冶原料(製錬鉄塊系遺物)に固着した製錬滓(炉内滓)の小破片の可能性が高い。

これらの製鉄関連遺物は、周辺地域で砂鉄製錬によって生産された鉄(製錬鉄塊系遺物)が、鍛冶原料として遺跡内で搬入されていたことを示すものといえる。現在までのところ、鳥取県下では古代の製鉄遺跡の調査報告例が極めて限られているため、地域の鉄生産～鉄素材の流通実態の解明に向け調査例の蓄積が望まれる。

4-2. 鍛冶関連遺物

3区3006溝から出土した8～9世紀代の椀形鍛冶滓(YOS-2)は鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄素材を熱間で鍛打して鉄器を製作していたことを示す遺物である。また、鍛錬鍛冶滓としてはチタン含有率がやや高めで(TiO₂: 0.93%)、始発原料は砂鉄と推定される。

注

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真及び識別法』1968

ウスタイトは450～500 Hv、マグネタイトは500～600 Hv、ファヤライトは600～700 Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600 Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ(Al)が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700 Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘルシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(2) 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983 第5章

(3) 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類(Spinel Group)の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式はXY₂O₄と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(略)

(4) 第305図は以下の発掘調査報告書に掲載された砂鉄、鉄滓の化学分析値を元に作成した。

- ①『八橋8・9遺跡』(財)鳥取県教育文化財団 2004
- ②『中道西山東山遺跡』(財)鳥取県教育文化財団 2005
- ③『博労町遺跡』米子市教育文化事業団 2011
- ④『下市築地ノ峯東通第2遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター 2013

表 73 供試材の歴史と調査項目

符号	遺跡名	調査区	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目					備考	
							大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ヒックス断面硬度	X線回折		EPMA
YOH-1	良田平田	3区2D-6c	3162溝	M08	流出溝滓	9c後半 ~10c初	39×49×29	85.1	なし	○	○	○	○	○	
YOH-2			埋土一括	M09											
YOH-3	良田平田	3区2D-8d	3006溝	M12	椀形鍛冶滓	8~9c 9c後半 ~10c初	95×70×23	152.0	なし	○	○	○	○	○	
YOH-4			3区2D-5c	M13											
	4区2D-7a	第4-2層	炉内滓	M28	炉内滓	7c末~8c前	19×25×21	6.36	なし	○	○	○	○	○	

表 74 供試材の化学組成

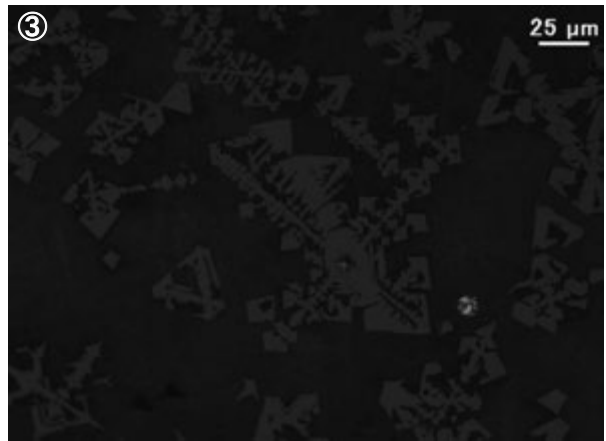
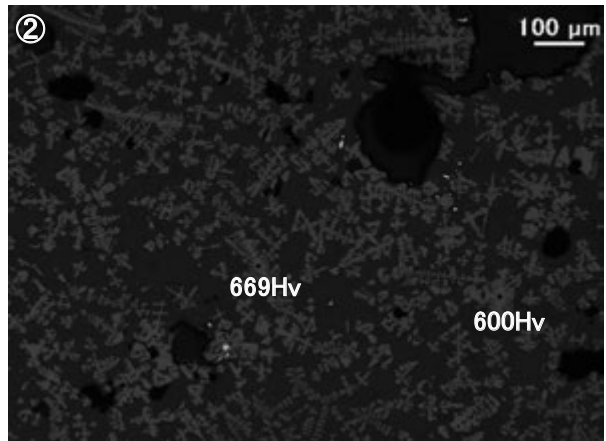
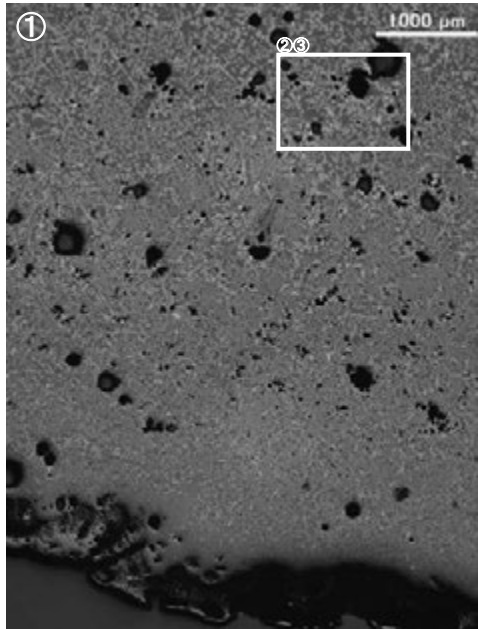
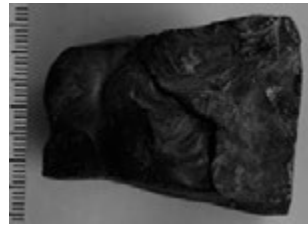
符号	調査区	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化ミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化シリウム (CaO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化チタン (TiO ₂)	酸化バナジウム (V ₂ O ₅)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	ハニウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分 (造滓成分)	造滓成分 (造滓成分)	TiO ₂ Total Fe	注
YOH-1	3区2D-6c	3162溝	埋土一括	9c後半 ~10c初	31.89	0.25	34.48	6.92	26.73	7.52	4.30	2.14	0.46	0.62	12.84	0.07	0.032	0.30	0.08	0.18	<0.01	0.35	43.83	1.374	0.403		
YOH-2	3区2D-8d	3006溝	椀形鍛冶滓	8~9c 9c後半 ~10c初	43.35	0.04	36.63	21.21	19.81	1.01	0.87	0.44	0.27	0.14	0.93	0.02	0.12	0.70	1.14	0.02	0.02	0.01	30.34	0.700	0.021		
YOH-3	3区2D-5c	3162溝	流出溝滓	9c後半 ~10c初	37.56	0.18	44.68	3.79	22.70	6.82	2.75	1.82	0.42	0.50	12.01	0.11	0.024	0.35	0.12	0.22	<0.01	0.29	36.69	0.977	0.320		
YOH-4	4区2D-7a	第4-2層	炉内滓	7c末~8c前	46.26	0.06	36.77	25.19	9.60	6.00	0.81	1.28	<0.01	0.03	8.06	0.21	0.039	0.79	0.33	0.08	<0.01	0.08	17.72	0.383	0.174		

表 75 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	調査区	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)						所見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	珪素成分	TiO ₂	V	MnO		Cu
YOH-1	3区2D-6c	埋土一括	流出溝滓	9c後半 ~10c初	31.89	6.92	6.98	12.84	0.18	0.62	43.83	<0.01	製造滓(原料:火山岩起源の高矽砂鉄)
YOH-2	3区2D-8d	3006溝	椀形鍛冶滓	8~9c 9c後半 ~10c初	43.35	21.21	1.88	0.93	0.02	0.14	30.34	0.02	鍛錬鐵治滓(始発原料:砂鉄)
YOH-3	3区2D-5c	3162溝	流出溝滓	9c後半 ~10c初	37.56	3.79	4.93	12.01	0.22	0.50	36.69	<0.01	製造滓(原料:火山岩起源の高矽砂鉄)
YOH-4	4区2D-7a	第4-2層	炉内滓	7c末~8c前	46.26	25.19	2.09	8.06	0.33	0.39	17.72	<0.01	製造滓(原料:火山岩起源の高矽砂鉄)

U:Uwöspinel(2FeO·TiO₂)、W:Wüstite(FeO)、F:Fayalite(2FeO·SiO₂)、H:Hercynite(FeO·Al₂O₃)

YOH-1 流出溝滓
 ①～③滓部:ウルホスピネル
 (硬度:50gf)、
 微小白色粒:金属鉄
 (③ナイトルetch 亜共析組
 織)



YOH-2
 椀形鍛冶滓
 ④～⑥滓部:ウスタイト・ファヤ
 ライト、硬度:50gf

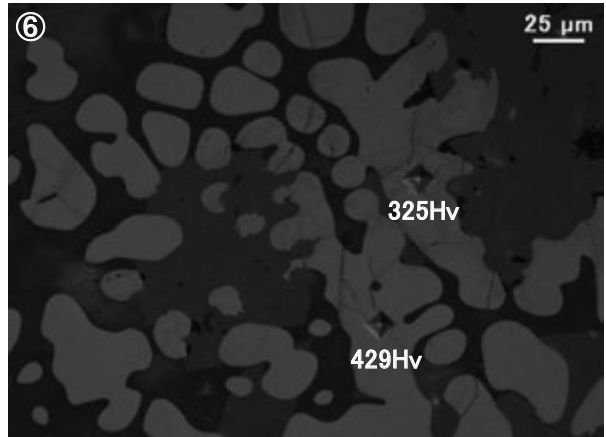
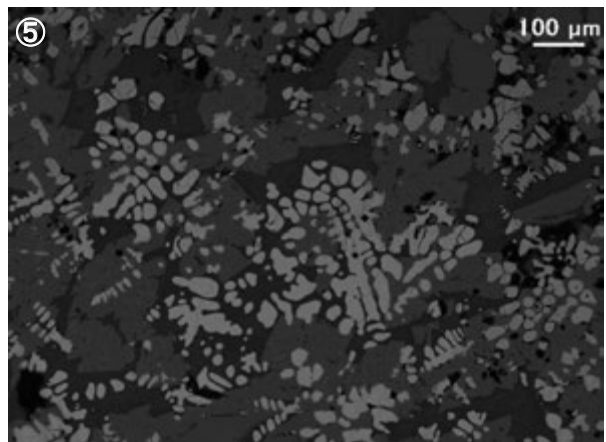
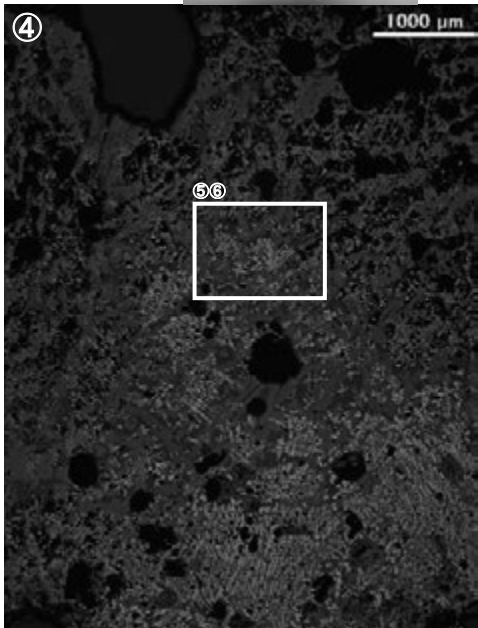
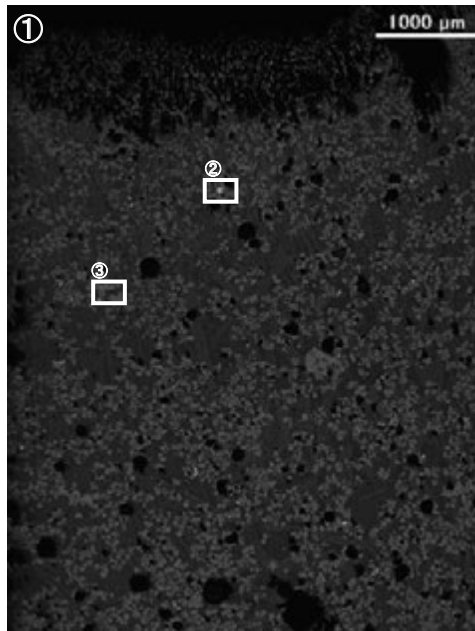


写真 17 流出溝滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

YOH-3 流出溝滓
 ①～③滓部:ウルホスピネル・
 ファヤライト (硬度:50gf)、
 微小明白色粒:金属鉄(②
 ナイタルetch 亜共析組織)



YOH-4 炉内滓
 ④～⑥滓部:ウルホスピネル・
 ファヤライト(硬度:50gf)、

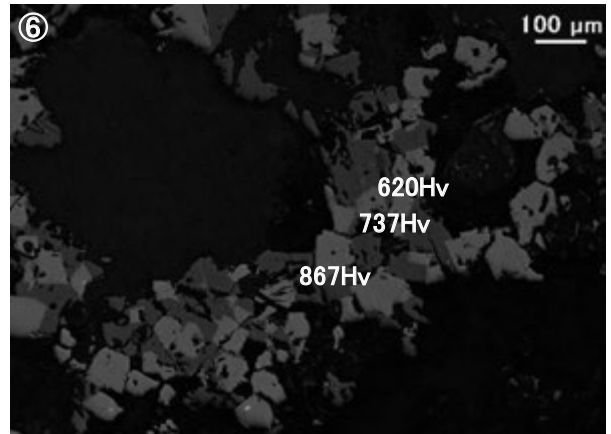
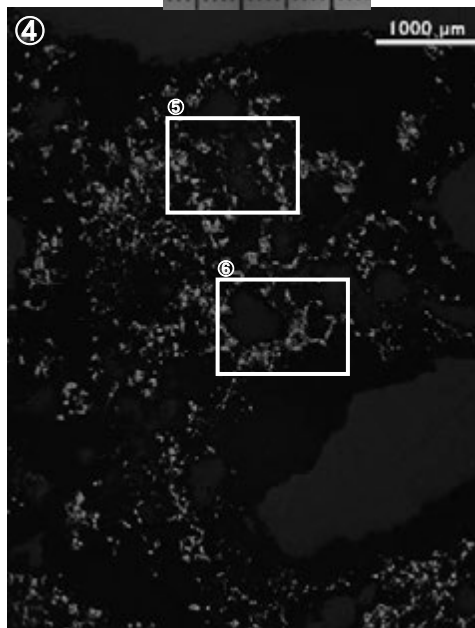
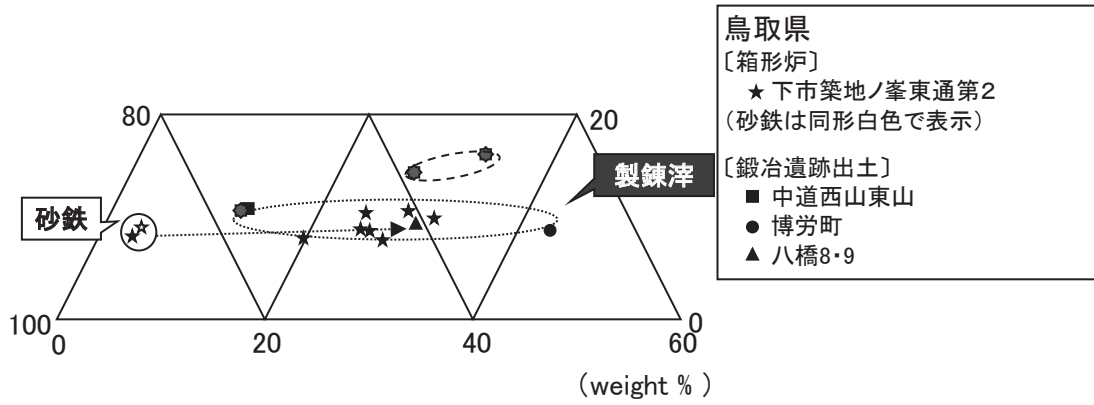
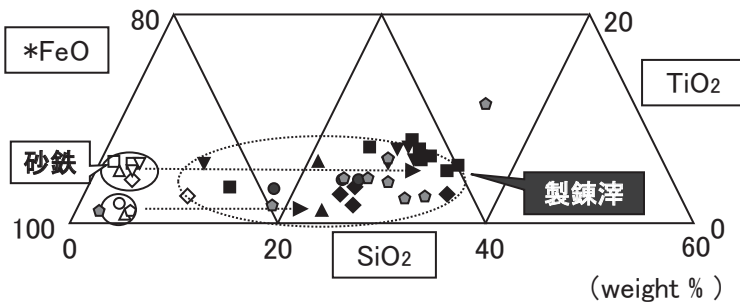
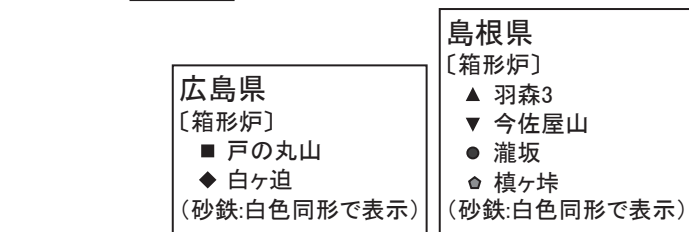
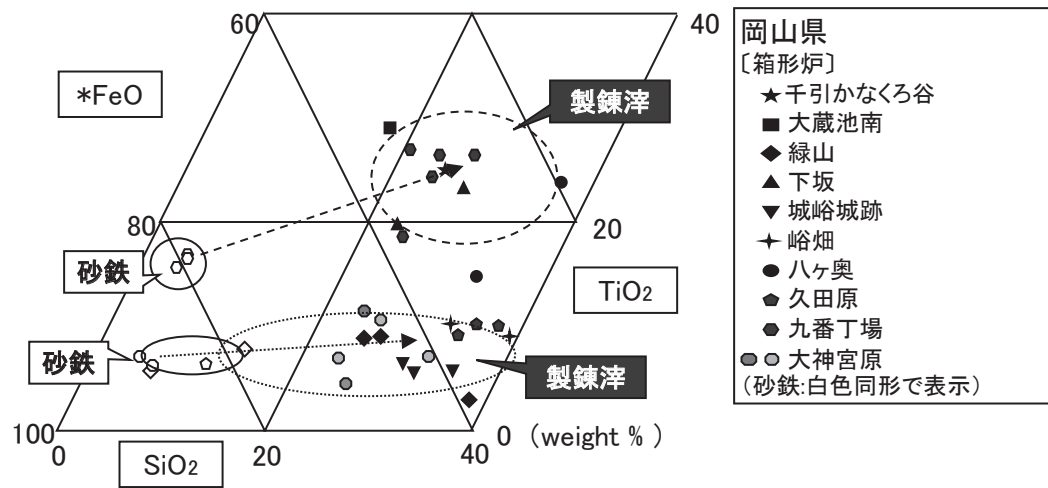


写真 18 流出溝滓・炉内滓の顕微鏡組織



鳥取県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成



〈参考〉中国地方(岡山・広島・島根県)の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成

第 305 図 鳥取県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成

第6節 良田平田遺跡出土編組製品の素材の植物種

小林和貴¹⁾・能城修一²⁾・佐々木由香³⁾・鈴木三男¹⁾

¹⁾ 東北大学植物園・²⁾ 森林総合研究所・³⁾ (株) パレオ・ラボ

1. はじめに

鳥取県鳥取市の良田平田遺跡の溝から出土したかご（編組製品）の素材の植物種を調べた。かごは、平安時代9世紀代の土器が出土した溝の最下層から出土し、この溝の他の地点の下層からは7世紀代の遺物も出土している。

2. 試料と方法

試料は、3006溝の埋土最下層から出土した編組製品1個体（第278図 W292）である。素材同定の試料は、編組技法及び形状を観察しながら、かごから直接タテ材2点（TTR-68、69）、ヨコ材2点（TTR-70、71）の計4点の試料を切り取った（写真19）。

同定方法は、アセトン系列で脱水した後にエポキシ樹脂（Agar Low Viscosity Resin）に包埋し、回転式マイクローム（Microm HM350）を用いて木口、柀目、板目の3面の切片（厚さ20～30 μm）を作製し、パラマウント-Nで封入して永久プレパラートとした。プレパラートは、東北大学植物園に保管されている。

3. 製品の形状及び編組技法の観察結果

製品は、残存高21.0 cm、幅14.2 cmのかごである。底部は方形で、口縁部は残存しておらず、本来の高さは不明である。素材の木取りは、板目状に削いだものである。素材本来の丸みが残る外側と割り裂いた内側は、特に方向性がなくランダムに用いられている。底部の編組技法は、2本1単位の2本飛び網代である。2本1単位の素材は、底部から体部への立ち上がりの際に1本ずつ分かれ、体部の編組技法は、タテ・ヨコ材ともに1本1単位の2本飛び網代となっている。底部の素材の幅は2.5～6.5 mm、体部の素材の幅は、タテ材が4.5～6.5 mm、ヨコ材が3.2～5.8 mmである。厚さは、タテ・ヨコ材共に0.7～0.8 mm程度である。体部のタテ材密度は5 cm中に6本、ヨコ材密度は5 cm中9～10本で、体部のヨコ材の幅が狭い分、ヨコ材の密度が高い。

4. 同定結果

同定の結果、木本植物のマタタビ属1分類群が得られた。タテ材とヨコ材ともにマタタビ属が用いられていた。マタタビ属にはマタタビやサルナシ、ミヤママタタビなどがあるが、材組織からは種の同定はできない。

以下に記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科（試料番号：TTR-68、69、70、71） 写真20・21

中型の丸い道管が単独で均一に散在する散孔材で、道管径は年輪の外側に向かって小さくなる傾向がある。道管の穿孔は多数の横棒のある階段状、放射組織は背が比較的高く、1～3細胞幅で異性である。これらの形質からマタタビ属の材と同定した。

5. 考察

平安時代の編組製品は網代編みで製作された方形の底部をもつかごで、素材はマタタビ属であった。素材はいずれも丸い茎の樹皮を取り去った後、外周の部分で板目に削いでテープ状にしたものである(写真 20)。また、素材の弧の湾曲度から推定した素材の直径は 6.3～8.5mm であり、直径 1 cm に満たない細いマタタビ属の蔓の皮を剥いだ後、板目に削いで素材を作ったといえる。

民俗例では、マタタビ属の中でもサルナシを用いる製品とマタタビを用いる製品は器種や用途が異なり、同じ器種でもマタタビとタケでは機能差があることが明らかとなっている(岡田、2002、2005)。しかし出土資料では、現在のところマタタビ属の種の違いは明確には区別できない。

マタタビ属製のかごは、近現代の民俗資料を見ると日本海側の豪雪地帯に分布する傾向が指摘されており(渡辺、1996)、堀川(2011)の集成によると、弥生時代のかごでも、石川県西念南新保遺跡(鈴木・能城、1992)や戸水 C 遺跡(山本、1989)、鳥取県青谷上寺地遺跡(金原、2005)をはじめとして日本海側の遺跡でマタタビ属が同定される例が多い。平安時代のかごの素材の同定例は全国的に非常に少ないが、青森市石江遺跡群の新田(1)遺跡出土の編組製品でマタタビ属と同定されている(佐々木・能城、2007)。良田平田遺跡の編組製品のかごの素材は、地域性にそぐった選択がなされていたと考えられる。今後、古代の製品の素材同定例を増やしていけば、古代におけるより詳細な地域性の議論が可能になると考えられる。

謝辞

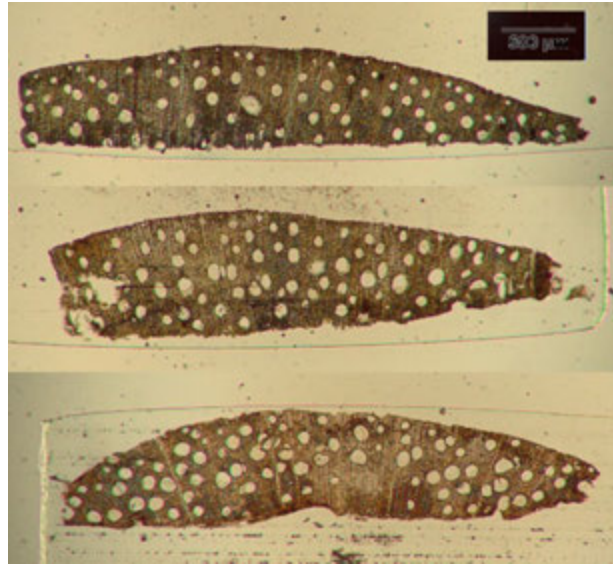
製品の観察と試料採取にあたっては、濱田竜彦氏に多大なご協力をいただいた。記して感謝致します。

引用文献

- 金原正明(2005) 青谷上寺地遺跡出土かごの材質同定. 鳥取県埋蔵文化財センター編「青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 木製容器・かご」: 155-158, 鳥取県埋蔵文化財センター.
- 堀川久美子(2011) 日本における遺跡出土かご類の研究. 植生史研究, 20, 3-26.
- 岡田 賢(2002) 飛騨みやがわ考古民俗館蔵の編組製品の素材について. 人類誌集報 2002, 127-132, 東京都立大学考古学報告 8.
- 岡田 賢(2005) 編組製品の素材差と機能差について—ショウケを例に—. 人類誌集報 2003, 5-12, 東京都立大学考古学報告 9.
- 佐々木由香・能城修一(2007) 新田(1)遺跡から出土した編組製品の素材同定と観察. 青森市教育委員会編「石江遺跡群発掘調査報告書」: 305-308, 青森市教育委員会.
- 鈴木三男・能城修一(1992) 金沢市西念・南新保遺跡出土木製品の樹種. 金沢市教育委員会編「金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ」: 285-290, PL1-4, 金沢市・金沢市教育委員会.
- 渡辺 誠(1996) マタタビ製のカゴ類. 名古屋大学古川総合研究資料館報告, No.12, 83-92.
- 山本直人(1989) 石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類. 北陸の考古学Ⅱ, No.32, 39-60.



写真 19 良田平田遺跡出土かごの同定資料サンプリング位置（上）と底部の拡大写真（下）



上から TTR-71,69,70 の横断面

写真 20 3資料の横断面の低倍率顕微鏡写真



左：木口×30、中：板目×60、右：柁目×120

写真 21 TTR-71 の顕微鏡写真

第7節 鳥取市良田平田遺跡出土木質遺物の樹種

中原 計（鳥取大学地域学部地域環境学科）

1. 樹種同定の方法と結果

①試料

今回樹種同定を行った試料は、鳥取市良田平田遺跡より出土した古代（8～9世紀）の木製品37点である。試料の内容は、農具、食事具、遊戯具、服飾具、容器、祭祀具、雑具、建築部材である。

②方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を徒手により作成し、ガムクロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作成した。作成したプレパラートを光学顕微鏡（Nikon ECLIPSE E200）で観察、同定した。

表 76 各樹種の解剖学的特徴（1）

<p>ゴヨウマツ（マツ属単維管束亜属）（<i>Pinus parviflora</i> Sieb.et Zucc マツ科） 垂直・水平樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや緩やかで、晩材部の幅は比較的狭い。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、放射仮道管の内壁は平滑である。分野壁孔は窓状である。放射組織は単列で1～10細胞高である。水平樹脂道を含んだ紡錘形放射組織が見られる。</p>
<p>スギ（<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ科） 垂直・水平のいずれの樹脂道をも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅が比較的広く、年輪界は明瞭である。樹脂細胞が晩材部に接線状に散在している。放射組織はすべて放射柔細胞からできており、分野壁孔はスギ型で、1分野に2個存在する。放射組織は単列で多くは10細胞高以下である。</p>
<p>ヒノキ（<i>Chamaecyparis obtusa</i> Sieb.et Zucc ヒノキ科） 垂直・水平のいずれの樹脂道をも持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が晩材部に接線状に散在している。放射組織はすべて放射柔細胞からできており、分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列で、1～15細胞高である。</p>
<p>コナラ節（<i>Quercus sect. Prinus</i> ブナ科） 環孔材。孔圏道管は1～3列で、直径は非常に大きい。孔圏外の小道管は薄壁で角張っており、放射状ないし火炎状に分布する。道管は単穿孔で、内腔にはチロースが存在する。軸方向柔細胞は接線状ないし網状となり、内部に結晶が見られる。道管放射柔細胞間壁孔は大型で円形ないし楕円形を呈する。放射組織は同性で、単列放射組織と広放射組織が見られる。</p>
<p>ケヤキ（<i>Zelkova serrata</i> Makino ニレ科） 環孔材。年輪の始めに直径の大きい道管が通常1列に並ぶ。孔圏外では小道管が多数集合して接線状、斜線状、花綫状に連なる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる。道管放射組織間壁孔はやや大型のふるい状となる。放射組織は同性ないし異性Ⅲ型で、1～8列、高さは1mm以内。上下縁辺には大型の結晶細胞が見られる。</p>
<p>ヤブツバキ（<i>Camellia japonica</i> L. ツバキ科） 散孔材。道管は年輪始めでは50μm前後で、年輪外境では30μmと非常に小さい。道管は階段穿孔を有し、繊維は厚壁で、らせん肥厚が見られる。軸方向柔細胞は多く、散在状、短接線状に配列する。放射組織は異性で、幅は1～3、高さは1mm以下である。放射柔細胞にはしばしば大型の結晶が存在する。</p>
<p>サカキ（<i>Cleyera japonica</i> Thunb. ツバキ科） 散孔材。極めて小さい道管がほぼ単独、ときに2～4個複合して平等に分布する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が見られる。軸方向柔細胞は不顕著ないし短接線状。道管放射組織間壁孔はふるい状、対列状となる。放射組織は異性で単列、高さは1mm以下である。放射柔細胞は厚壁で、大型の直立細胞を有する。</p>

表 77 各樹種の解剖学的特徴 (2)

ヤマザクラ (Prunus jamasakura Sieb.ex Koidz バラ科)

散孔材。小径の道管が単独あるいは放射状ないし斜線状に複合し、平等に分布するが、年輪の内境に沿ってやや密度が高い。道管は単穿孔を有し、内壁にらせん肥厚が見られる。放射組織はほぼ同性で、1～5列となり、高さは1mm以下である。放射柔細胞には結晶細胞が存在する。

③結果

樹種同定結果を表 78 に示す。同定できた樹種は針葉樹 3 種、広葉樹 5 種であった。各種類の主な解剖学的特徴を表 76・77 に示す。

2 まとめと考察

良田平田遺跡から出土した木製品の用材については、木錘と容器については広葉樹、それ以外はほぼ針葉樹が利用されていたことが明らかとなった。これらの傾向は、これまで蓄積されてきた用材傾向と一致している (島地・伊東 1988、伊藤・山田 2012)。その中でも、曲物や祭祀具、建築部材など、針葉樹材が選択的に使われるものについては、スギの利用が目立ち、山陰地方の特色が表れているといえる。

地域的特色の点からみると、挽物皿については、樹種選択の変更があった可能性が窺える。刳物容器から挽物容器へと移行しても、用材の傾向はほとんど変化しない。鳥取県内の刳物容器については、鳥取市青谷上寺地遺跡から出土した弥生時代のものがよく知られている。これらにはケヤキも使われているが、多くはヤマグワが利用されている。弥生時代から古代に至る時期の資料が不足しているため、詳細は不明であるが、何かしら人為的な要因で変化した可能性がある。変化の要因としては、畿内との交流が盛んになったことに伴い製品がもたらされたため、または、挽物技術の導入において、新たな用材の知識が取り入れられたからなどが考えられる。あるいは、良田平田遺跡の性格が役所であることから、特殊な経緯でもたらされたものであり、この地域に一般的な状況ではなかったとも考えられる。いずれにせよ、類例の増加を待って検討する必要がある、早急に結論を出すことはできない。

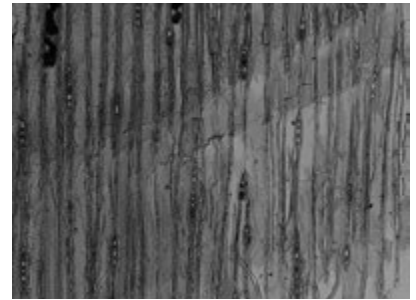
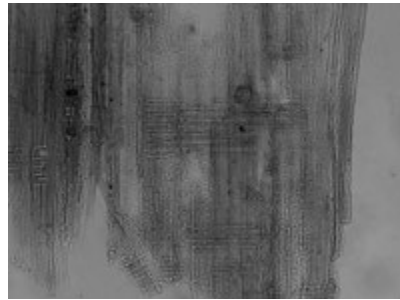
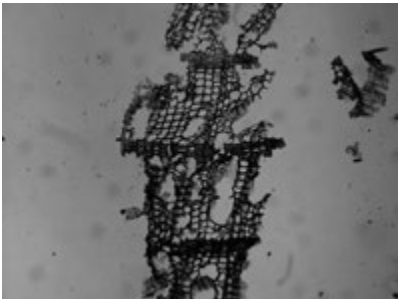
参考文献

伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』第 31 号 京都大学木材研究所
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』第 32 号 京都大学木材研究所
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』第 33 号 京都大学木材研究所
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』第 34 号 京都大学木材研究所
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』第 35 号 京都大学木材研究所
 伊東隆夫・山田昌久 (編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社
 島地謙・伊東隆夫 (編) 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版
 林昭三 1991 『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

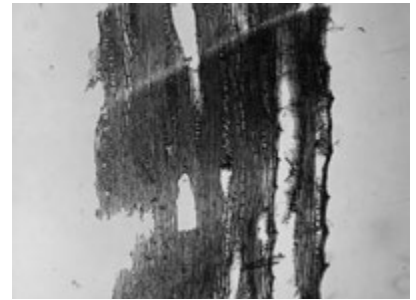
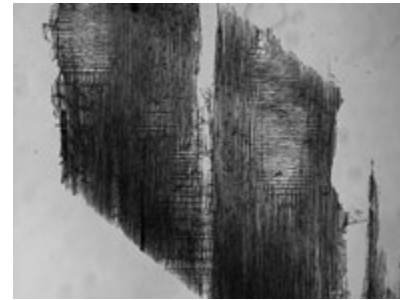
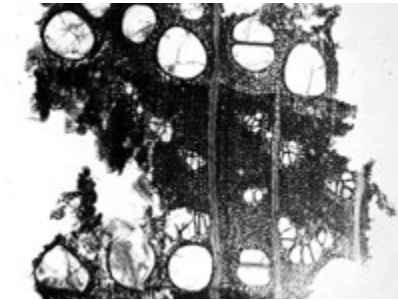
表 78 樹種同定結果

掲載番号	出土地区	遺構	層位・場所	器種	樹種
W3	2区		第3層	杵型田下駄	スギ
W4	2区	2012溝	埋土	木庖丁	ケヤキ
W7	3区	3006溝	木製構造物	田舟	スギ
W12	4区	4109土坑	埋土	木錘	ヤブツバキ
W18	4区	4193溝	埋土	木錘	コナラ節
W19	4区	4221溝	埋土	木錘	ヤブツバキ
W20	4区	4191溝	埋土	木錘	ヤマザクラ
W21	3区		第4層	櫂?	サカキ
W27	4区		第3層	杓文字	スギ
W34	4区		第4層	琴柱	ヒノキ
W35	4区		第4層	琴柱	スギ
W36	4区		第4層	琴柱	スギ
W40	4区	4038溝	埋土	下駄	スギ
W44	3区	3006溝	埋土	挽物皿	ケヤキ
W45	4区	4038溝	埋土	挽物皿	ケヤキ
W46	3区	3014溝	埋土	挽物皿	ケヤキ
W47	3区	3006溝	埋土最下層	挽物皿	ケヤキ
W48	3区		第4層	挽物皿	ケヤキ
W53	3区	3003溝	埋土上層	高杯	ケヤキ
W57	4区	4038溝	埋土	槽	スギ
W74	3区	3003溝	埋土上層	曲物	スギ
W83	3区	3006溝	埋土最下層	曲物	スギ
W87	3区	3003溝	埋土上層	曲物	ヒノキ
W117	3区	3003溝	埋土上層	斎串	スギ
W136	3区	3003溝	埋土上層	斎串	スギ
W147	4区	4038溝	埋土中層	人形	スギ
W163	3区	3006溝	埋土下層	馬形	スギ
W164	3区	3006溝	埋土下層	馬形	スギ
W186	4区	4038溝	埋土	舟形	スギ
W193	4区		第4-4層	火鑽臼	スギ
W197	3区	3003溝	埋土下層	滑車	スギ
W199	3区		第2-2層	机脚	スギ
W205	4区		第4-4層	栓(部材)	スギ
W234	3区		第2-2層	蹴放し	スギ
W238	3区	3438流路	埋土	建築部材	スギ
W239	4区		第3層下部	建築部材	スギ
W263	3区		第4層	栓	マツ属(単維管束亜属)

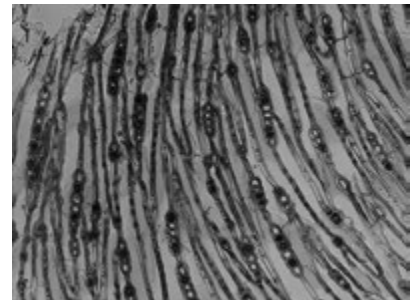
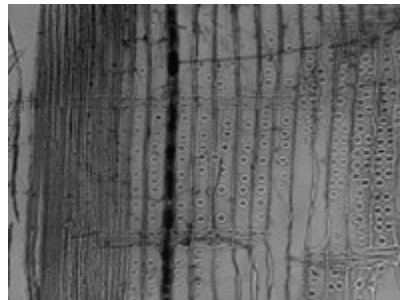
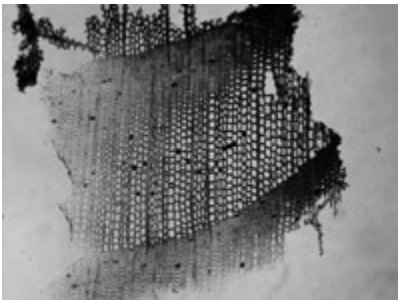
W3



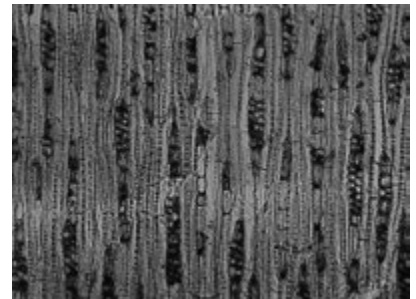
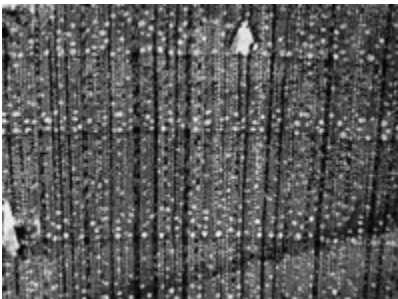
W4



W7



W12



W18

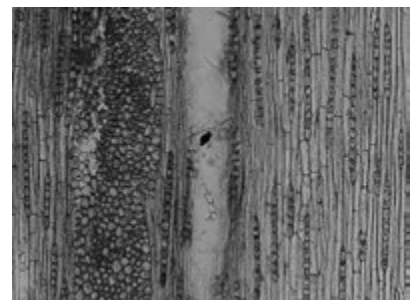
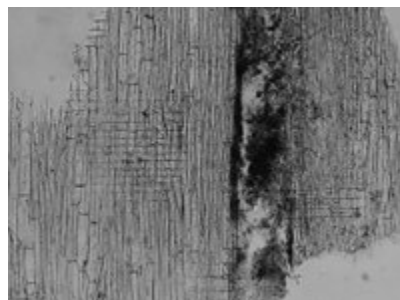
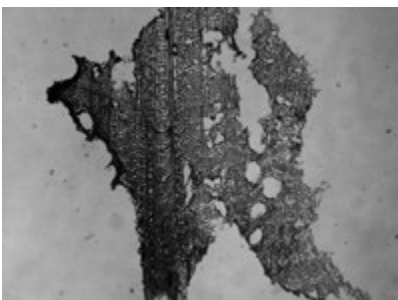
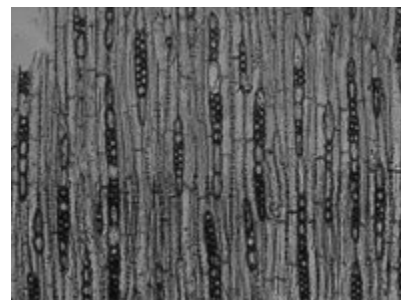
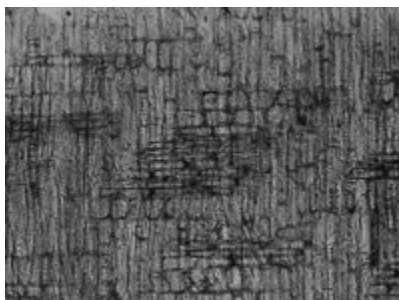
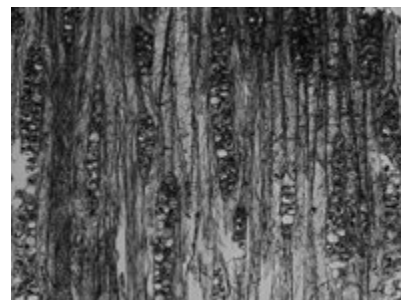
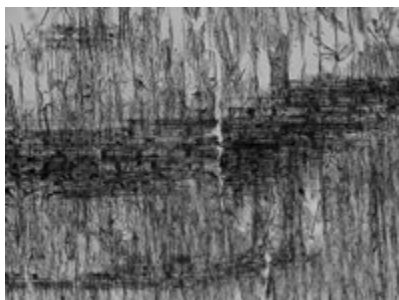
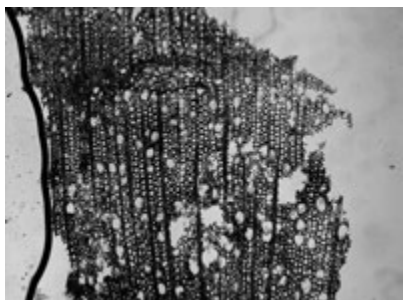


写真 22 顕微鏡写真 (1)

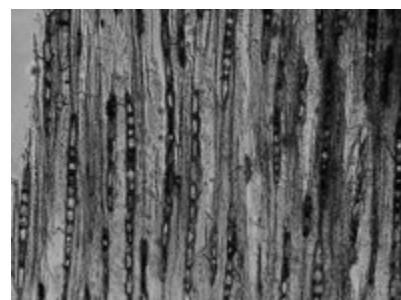
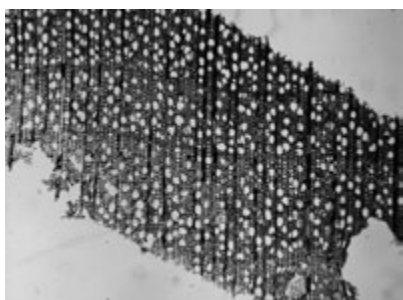
W19



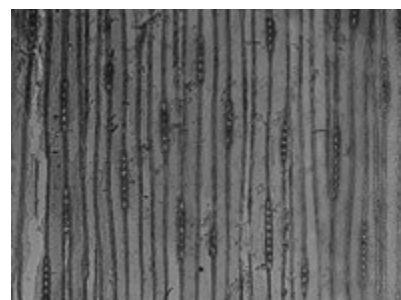
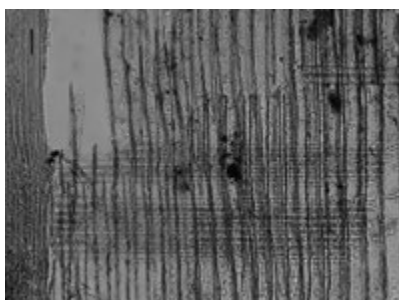
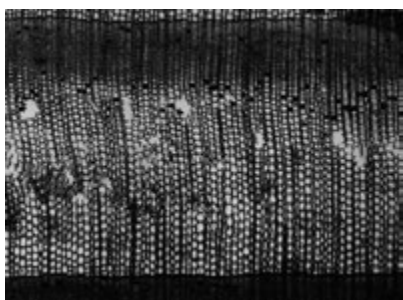
W20



W21



W27



W34

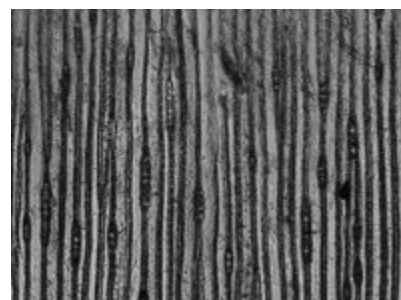
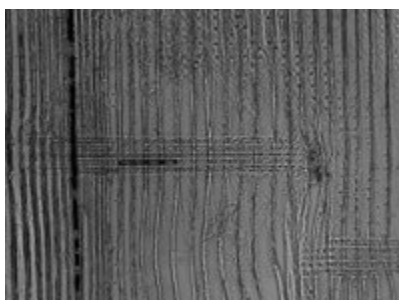
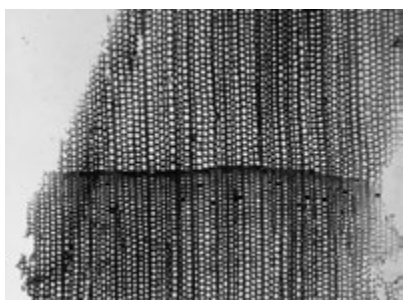
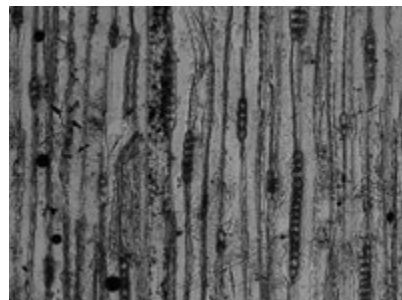
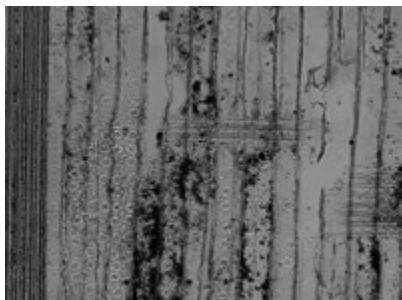
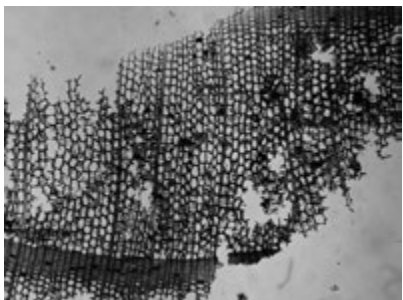
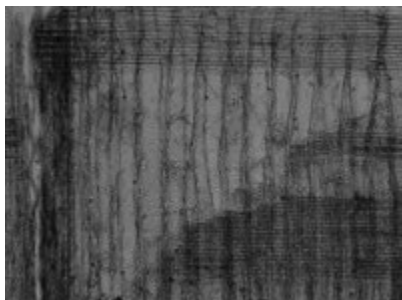


写真 23 顕微鏡写真 (2)

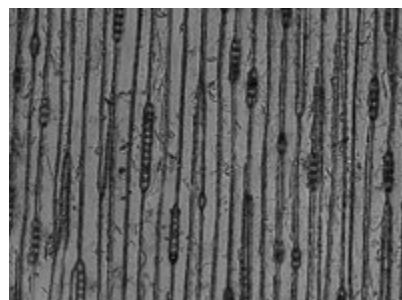
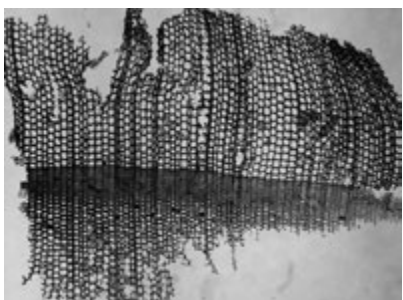
W35



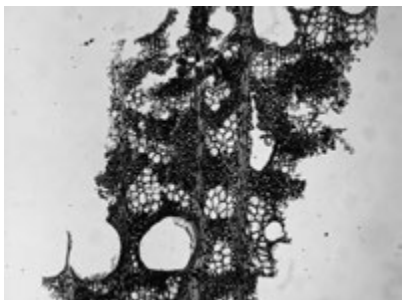
W36



W40



W44



W45

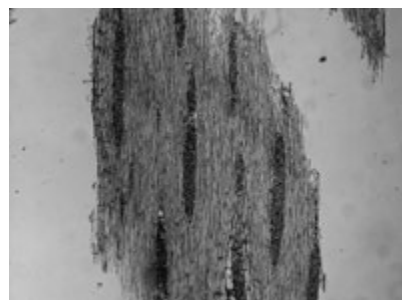
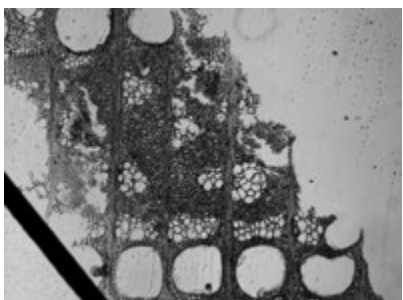
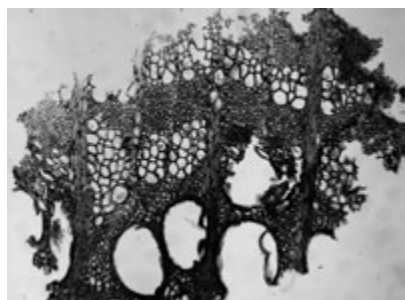
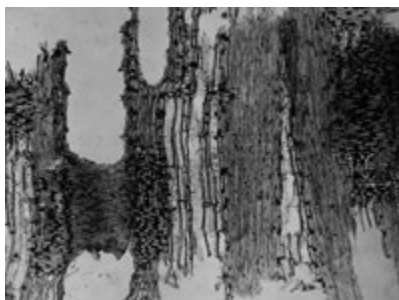
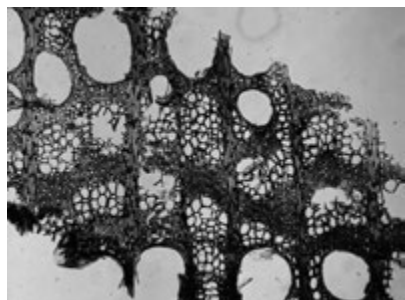


写真 24 顕微鏡写真 (3)

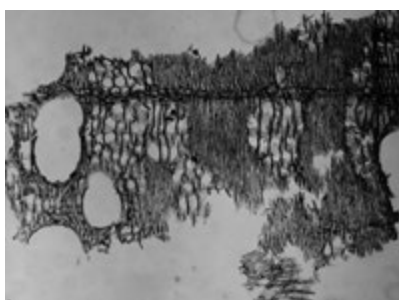
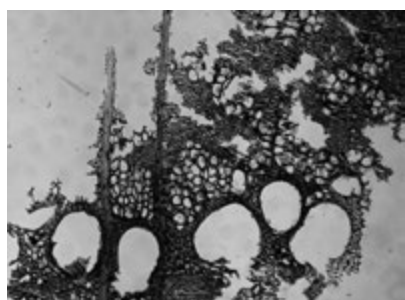
W46



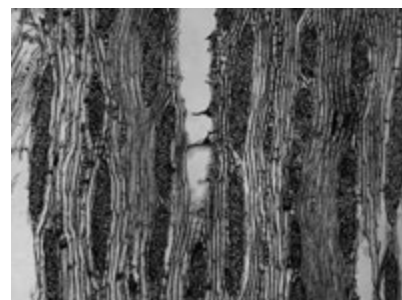
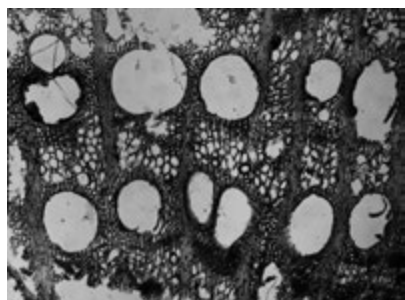
W47



W48



W53



W57

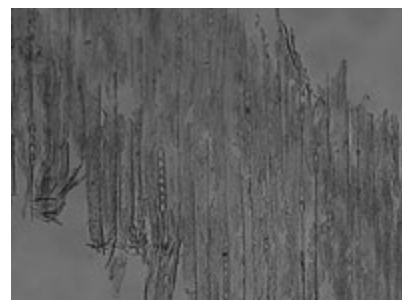
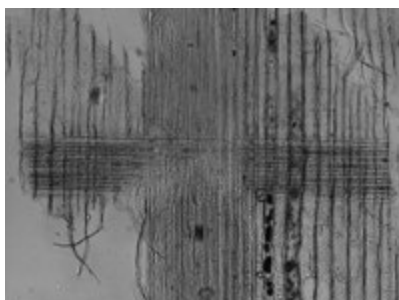
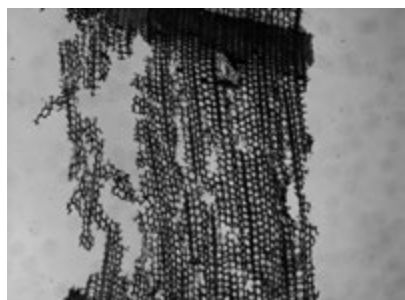
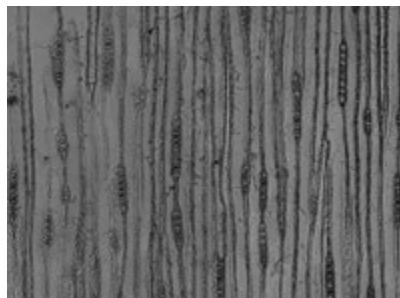
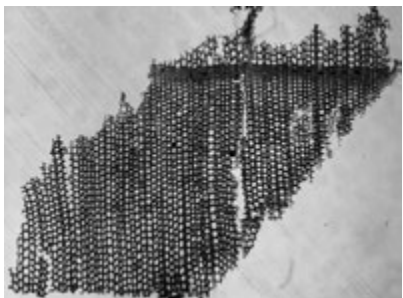
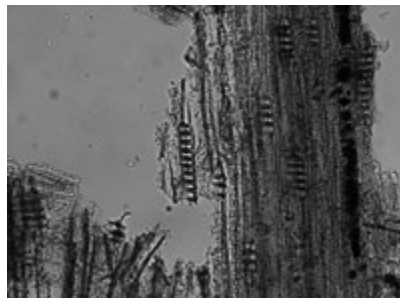
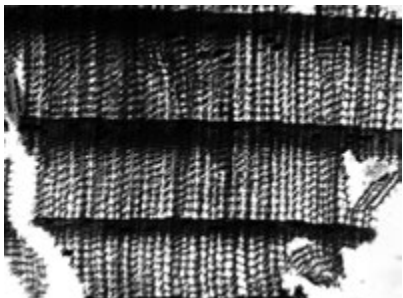


写真 25 顕微鏡写真 (4)

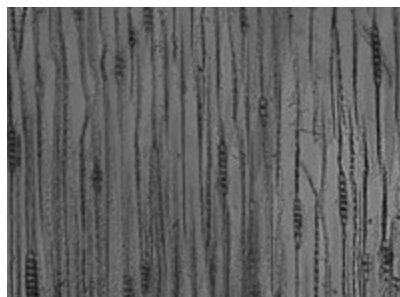
W74



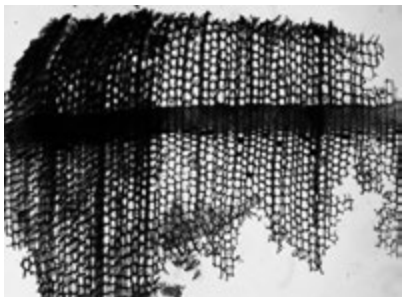
W83



W87



W117



W136

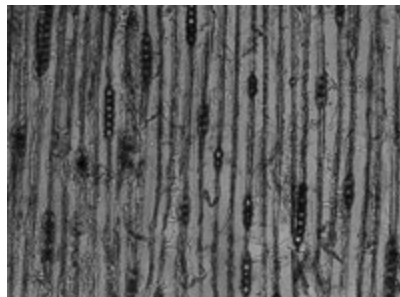
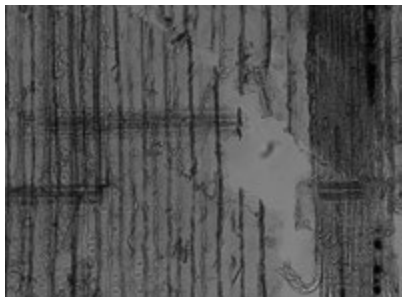
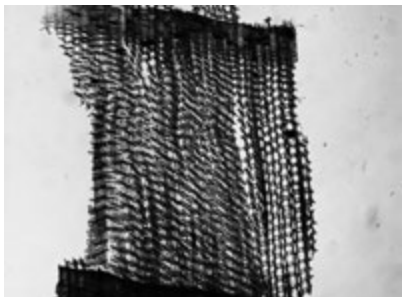
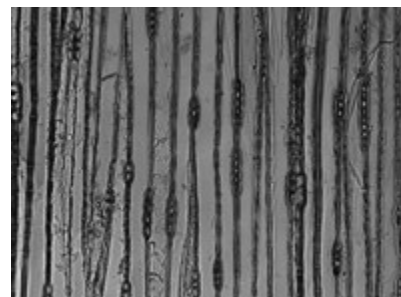
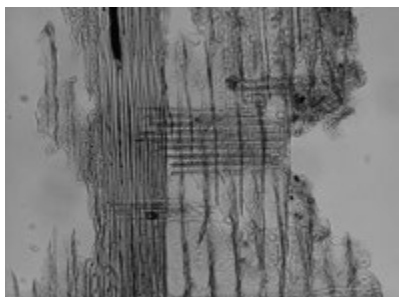
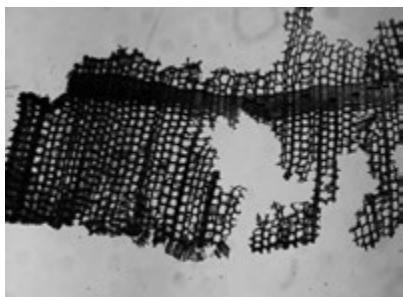
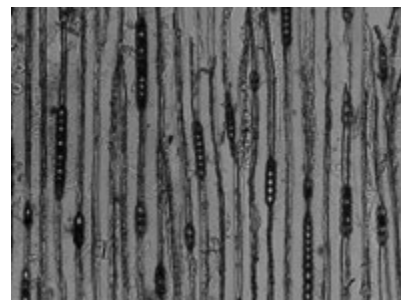
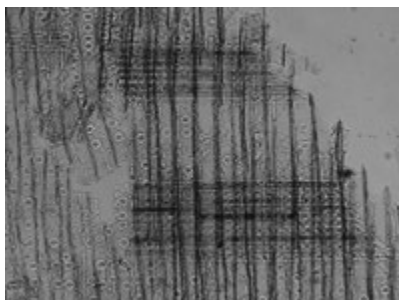
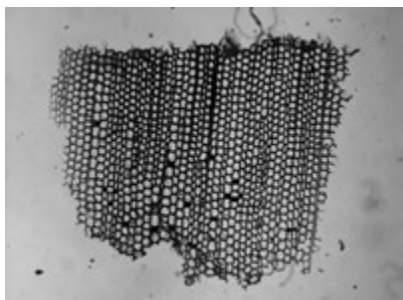


写真 26 顕微鏡写真 (5)

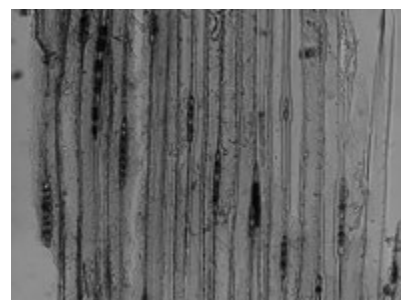
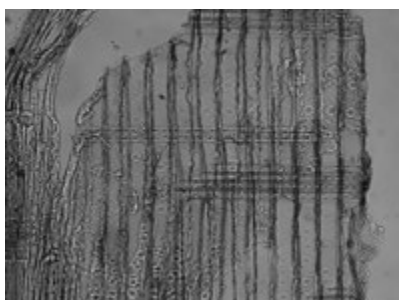
W147



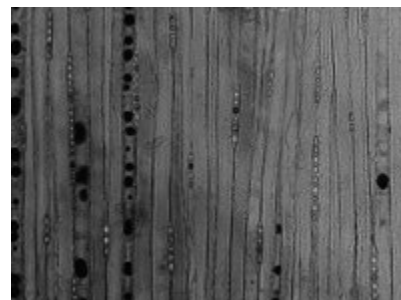
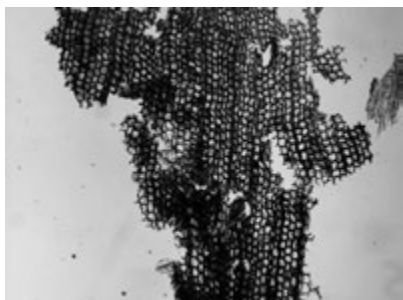
W163



W164



W186



W193

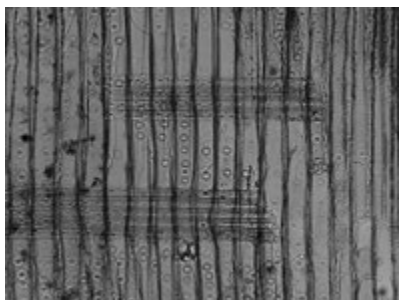
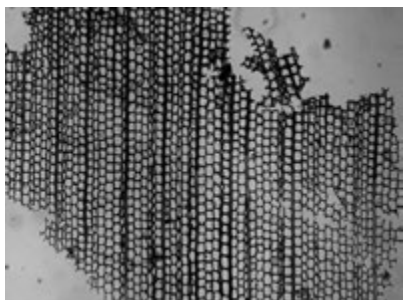
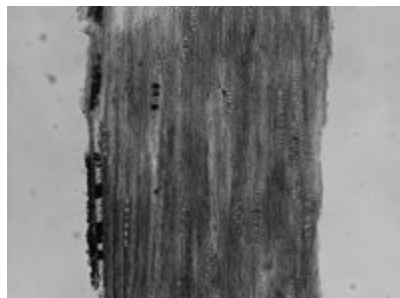
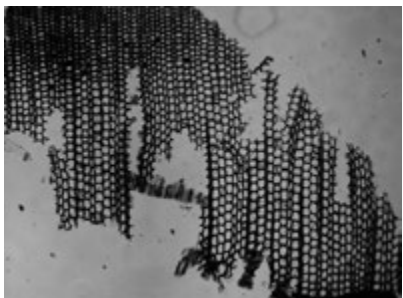
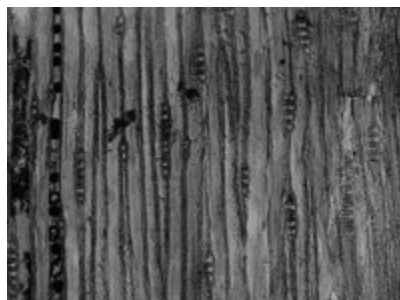
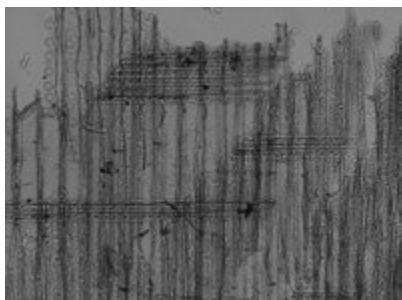
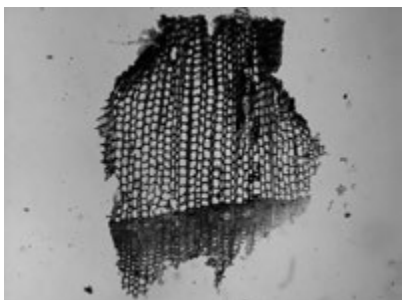


写真 27 顕微鏡写真 (6)

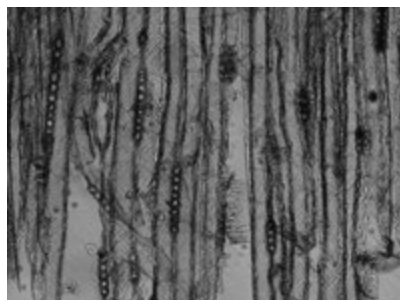
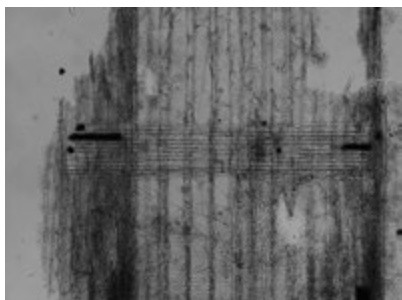
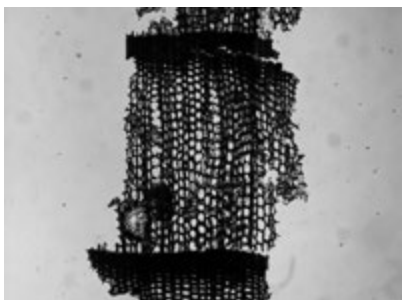
W197



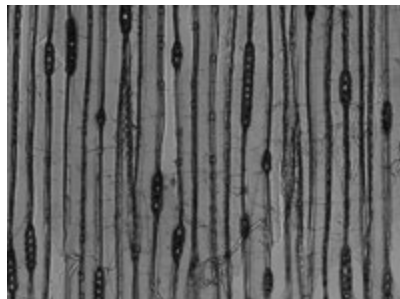
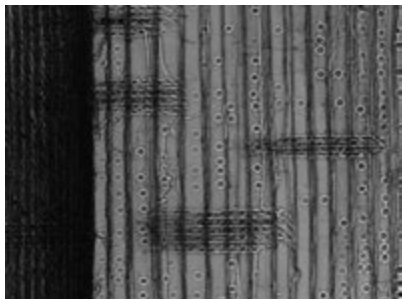
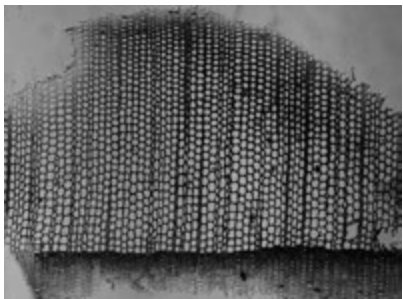
W199



W205



W234



W238

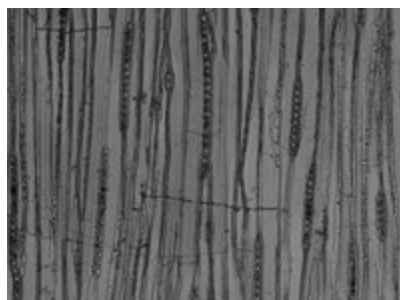
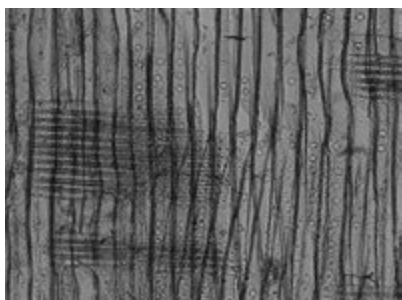
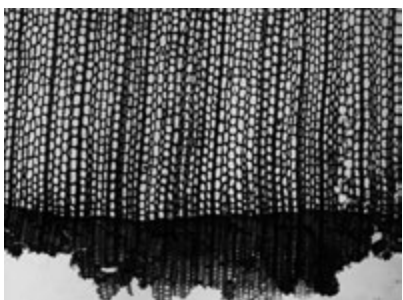
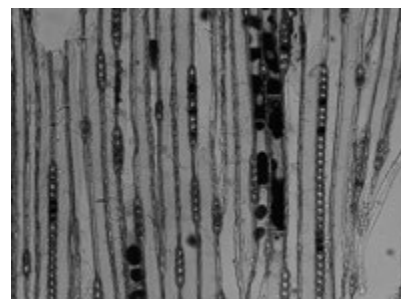
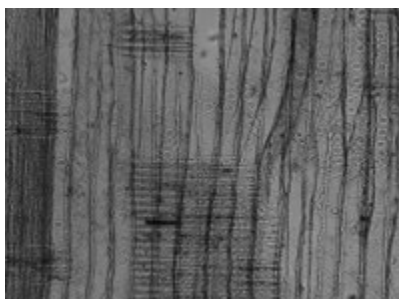
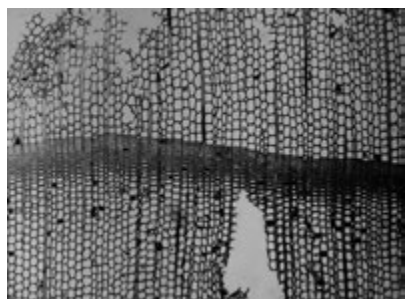


写真 28 顕微鏡写真 (7)

W239



W263

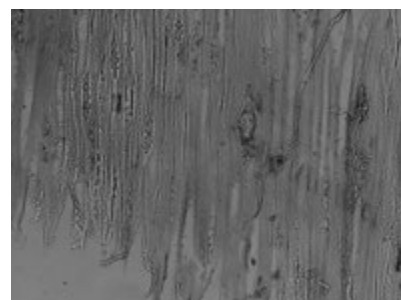
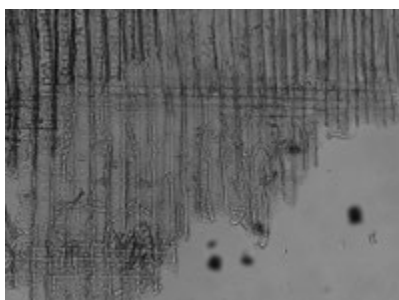
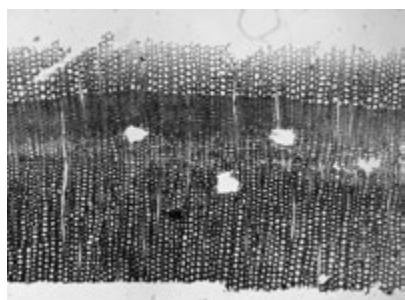


写真 29 顕微鏡写真 (8)

第Ⅷ章 総括

良田平田遺跡では、平成23年度・平成24年度の2ヶ年にわたる発掘調査によって、弥生時代から近世に至る遺構、遺物が確認された。本章では、遺跡全体の変遷を概観するとともに、特筆すべき古代の遺構、遺物を整理しながら遺跡の性格と機能について評価し、調査の総括としたい。

第1節 良田平田遺跡の変遷

弥生時代以前

良田平田遺跡が立地する小開析谷の開発は縄文時代晩期に遡る可能性が高い。3区で古代の掘立柱建物の下から検出されたスギの根株について放射性炭素年代を測定した結果、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭に相当する年代値が得られており（第Ⅶ章第4節参照）、遅くともその頃には3区・4区が位置する枝谷に伐木等の開発行為が及んでいる。当遺跡西側に広がる谷底低地に位置する良田中道遺跡では、自然流路等から縄文時代後・晩期の土器が出土しており、当地域が縄文時代後期以降は活動域であったことが推測される。さらに、丘陵を越えた東側の高住平田遺跡で縄文時代前期中葉の土器が自然河川内から出土しており〔中尾編2013〕、湖山池南岸の遺跡動態からすれば、当地域が人々の活動域として利用された時期はさらに遡る可能性もある。

弥生時代中期には生産活動が当遺跡周辺に及んでいたことが出土遺物や自然科学分析の結果から推測される。特に、3区・4区が位置する枝谷周辺での開発行為は縄文時代晩期以降盛んだったようで、それにより斜面崩壊や土石流の発生が引き起こされた可能性がある（第Ⅶ章第1節参照）。帰属時期は明らかでないが、出土した磨製石器類は伐採斧から小型の加工斧までバリエーションがあり、小型の両刃石斧などは弛緩の形態を呈すが片刃石斧は規整的なつくりをしているので、やや時期幅があるうか。石庖丁とその未成品、木庖丁が出土していることから周辺の谷底低地で水田が営まれていた可能性は高く、近傍に当該時期の集落が展開していたと推測する。

古墳時代

3区・4区で古墳時代前期末及び中期末の井戸（4317井戸、3443土坑）、中期頃と考えられる掘立柱建物17・18が確認されており、集落域として利用されている。3473流路、3437流路では口縁の一部を打ち欠いた甕や小型丸底壺、脚部以下を打ち欠いた高坏など祭祀行為後に投棄されたものが目立ち、これらは中期後半に比定される。また、管玉、勾玉の製品以外に擦切溝をもつ素材剥片が出土しており近傍で玉作が行われていた可能性が高いが、勾玉は形態的な特徴から見て中期末頃の所産と考えられ、中期後半～末が集落の一つの画期であったと推測する。

当遺跡北側には湖山池南岸に面した塞ノ谷遺跡があり、護岸施設や池状遺構とともに木製農工具や容器、水辺の祭祀に供された遺物が出土している。塞ノ谷遺跡の継続時期は弥生時代から古墳時代後期頃までのようだが、その後背地に同時期に営まれた集落であるため関係が深いといえよう。

古代

古代の様相は第2節で詳しく触れる。3区・4区が位置する枝谷に溝で区画された掘立柱建物が継続的に構築され、溝から出土した木簡や墨書土器、銅製腰帯具、木製祭祀具等からすれば遺跡地内に

官衙関連施設が存在したと考えられる。その時期は前白木簡の存在から7世紀末に遡る可能性があり、遺構に伴って急激に出土量が増す7世紀末～8世紀前葉の土器群もそれを示唆する。墨書土器には「馬津」や「船」など水運に係る文字が認められ、施設の性格に係るものとして重要である。また、良田地域が明治4（1871）年に改称する前の旧称「荒田」⁽¹⁾を記したもの（「荒田大内」など）は、当該地名が8世紀後半まで遡ることを示しており、地域史を明らかにする上で大きな成果の一つである。

掘立柱建物や溝などの施設群が構築されるのは10世紀前半段階までで、谷奥部（4区）は9世紀以降耕作地に充てられた。第3層の自然科学分析結果からすれば、3区・4区の位置する枝谷内は一時的に放棄された時期を挟みつつ水田等耕作地として利用されていたようだ（第Ⅶ章第1節参照）。その後、遺物はわずかに11世紀後半～12世紀前半の白磁碗を伴う程度で、土地利用は低調だったと考えられる。

中世以降

中世以降は、2～4区でイネ属植物珪酸体の産状に差異が認められるものの、全体として各時期にわたり水田が営まれたと考えられ、現在に至るまで耕作地として利用されている。ただ、第2-2層で「元應元（1319）年」と記された紀年木簡（17号木簡）の断片が出土しており、木簡の用途は不明ながら、遺跡周辺が鎌倉時代末期まで拠点的な場所として機能していたことを示唆している。それは、当地域に成立したとされる「荒田保」とも深く関係しているものと考えられる。

第2節 古代における良田平田遺跡の性格と機能

（1）古代遺構群の変遷

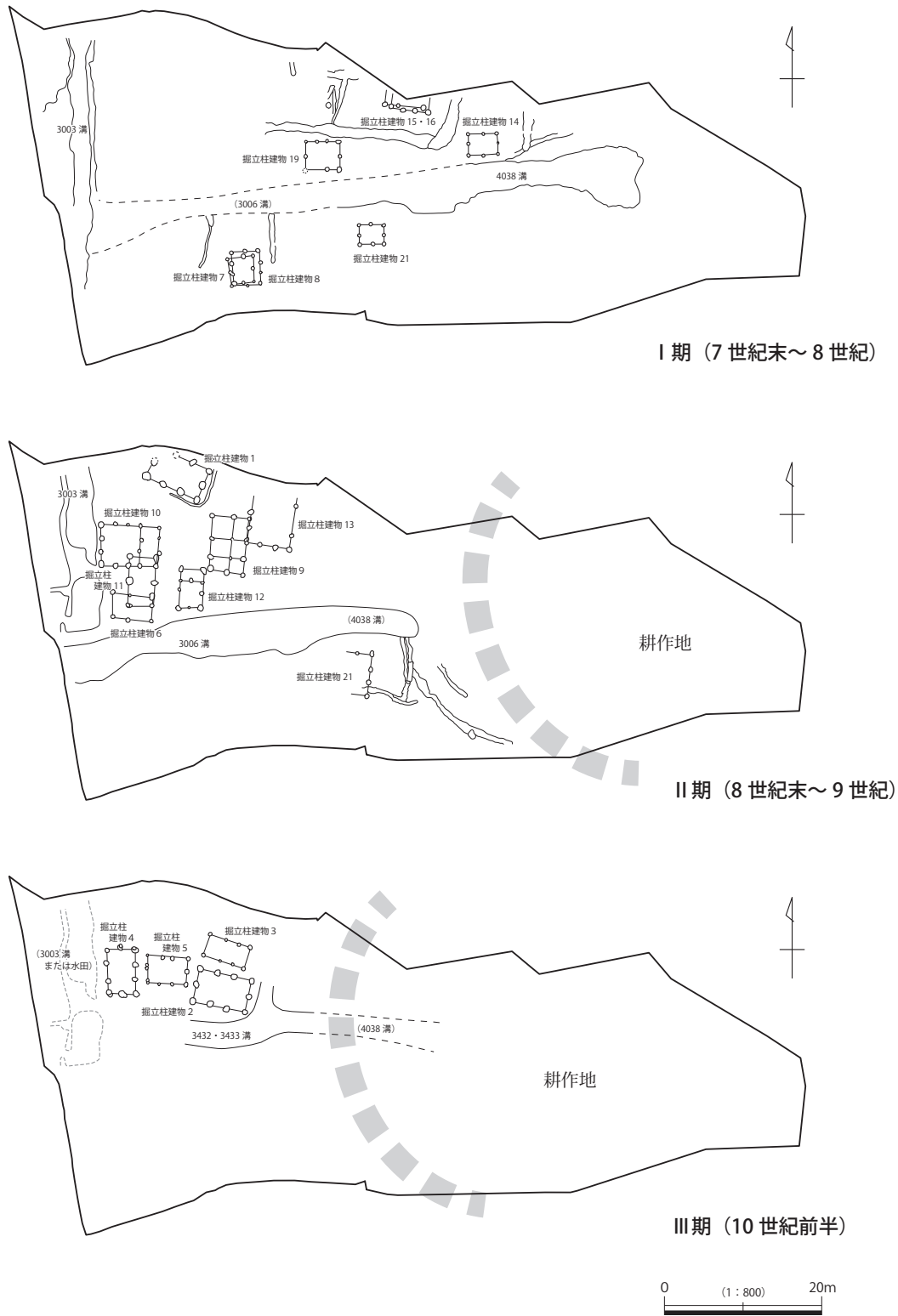
良田平田遺跡では、3区・4区で古代の掘立柱建物や溝、土坑が、2区で水田が検出された。このうち、主要な遺構群が確認されている3区・4区の状況について、その変遷を見ていく（第306図）。

I期（7世紀末～8世紀）

当遺跡において古代の施設群が造成、構築される時期であり、その嚆矢は7世紀末に遡る可能性がある。3区・4区の位置する枝谷（以下、谷）の谷筋を走る溝（4038溝と3006溝で構成される溝）と、その西端で直交し南北に直線的に走る溝（3003溝）が掘削される。4038溝は谷筋を洗掘する細溝を水路として利用したものだが、東側は谷奥まで延びず溜池状に収束させる。後の3438流路（溝）も同様で、概ね直線的に走行していたと推測される。地形的にやや低くなる谷の北側は客土して嵩上げし、溝の南北に2間×2～3間程度の掘立柱建物を構築している。谷の北西部は9世紀以降の建物群の柱穴が密集しており、当時期の様相が不明だが、掘立柱建物7・8、掘立柱建物15・16の関係から見れば検出された建物群は概ね2段階の変遷を経ているものと考えられる。建物群は小規模なものだが、多くが東西方向に主軸をとり、施設全体としては計画的な配置が窺える。

II期（8世紀末～9世紀）

掘立柱建物群は谷部が開けた北西部へ集中する。谷線を走る溝より南側には、当期の可能性のある掘立柱建物21しか認められない。掘立柱建物は1間×2～3間または2～3間×3間（以上）のもので、調査範囲に限って見ても前段階より建物規模が大型化しており、柱穴径もそれに同調する。このうち、掘立柱建物1は北側の丘陵裾に位置し、1棟だけ主軸を丘陵と平行するようにとる。柱径は約30cmを測り（第268～269図）、当期においては規模・構造の面から見ても中心的な建物だった



第 306 図 古代主要遺構群変遷図 (3区・4区)

可能性があるだろう。検出できた建物群は掘立柱建物 9 と 13、掘立柱建物 11 と 12 のように規模や主軸方位が近似するものがあり、やはり 2 段階程度の変遷を経たものと推測する。

建物群が谷の北西部に集中することに加え、この時期の大きな変化として谷奥側が耕作地として利用され始めることが挙げられる。建物群の南側を区画する溝は谷奥側の大部分が埋没している。ただ、掘立柱建物 21 周辺までは溝が中～下層により埋積した後に第 4 層を客土して新たな水路を造成して

おり、水路としての機能を保持していたことがわかる。この溝は9世紀後半頃まで浚渫を繰り返して使用されたようだが、10世紀には役割を終えてほぼ埋没している。一方、建物群の西側を区画していた3003溝は、3006溝から北側だけに存在する浅い窪地状を呈した溝となり、2区へ続く水田との区画以上の機能を有していなかったと考える。

Ⅲ期（10世紀前半）

建物群の位置はほぼ変わらないが、より北西部に集約される傾向にある。掘立柱建物4のみ3003溝に沿って主軸をほぼ南北方向にとるが、他は北西－南東である。掘立柱建物2と掘立柱建物4は柱抜き取り穴、抜き取り後埋め戻し痕跡が認められるのに対し、掘立柱建物3と掘立柱建物5はその痕跡がない。切り合い関係がなく推測の域を出ないが、全体が近接しすぎているため同時並存は考え難く、掘立柱建物2・4よりも掘立柱建物3・5が後出する建物の可能性がある。

前段階まで建物群を区画していた溝にも変化が見られ、3006溝は埋没して浅い窪地状になり、新たに3432・3433溝（・3014溝）が建物群の東～南を区画する水路として掘削される。この溝の上流部は4038溝北側部分と一部重複する箇所まで延びていたと考えられ、その範囲は第4層が削られている（第52図17～19層が該当）。建物群西側の3003溝部分では埋土上層からわずかに10世紀前半の土器が出土しているが、検出状況からすれば前段階のように途中が陸橋状に切れる構造ではなく浅い直線的な溝であったか、既に水田となっていたかのどちらかと推測する。

（2）主要遺物の検討と評価

木簡 古代に帰属する木簡は16点出土した。特筆すべきは7世紀末に遡る可能性をもつ1号木簡（前白木簡）であり、大きく2つの重要な意味をもつ。まず、大宝令施行以前の因幡国において「御前」に上申する書式を用いられる高位の人物が存在したことである。高位の人物とは国宰（後の国司）や中央から派遣された官使などが候補となり、そうした人物が因幡国へ移動、駐在していたことを窺わせる〔山本・高尾・藤井2014、山本2014〕。もう一つは、使者によって内容を口頭伝達された上申文書（木簡）が当遺跡地内で廃棄された、ということである。国内を移動する官人が文書を受け取るなど様々な便益を供される際の拠点的な施設が令前の当遺跡地内に存在したことを示唆しており、この場所が重要視されていたことは明らかである。

その他、因幡国高草郡刑部郷の戸主・戸口を列記した記録木簡（歴名、5号木簡）⁽²⁾ や、米などの数量が記された帳簿木簡（8号・9号木簡）、訟えに関わる文書木簡（10号木簡）が見られ、木簡からすれば施設の機能や性格は特定されたものではなく、様々な事務が行われていたと推測される。

墨書土器 墨書土器は169点出土し、試掘調査で見つかった1点を加えると総計170点となる。出土遺構・層位別の点数、文字別の点数は第Ⅵ章第4節（2）で述べたとおりで、それらを時期別に見ていくと、以下のことが指摘できる（第307図）。

墨書土器の組成と変遷 当遺跡における墨書土器の初現は8世紀前半であり、文字は「門」、「大内」、「下内」が見られる。「大内」は高台付坏底部外面全体を使って大きく書かれるが、「門」「下内」は一文字が1cm角程度と小サイズで線も細いことが特徴である。「下」はこれ以降見られない。

8世紀後半には文字の種類が増える。「門」関係では「門上」「門西」「門東」など「門」に方位を加えた組み合わせが認められるようになる。「上」は東や西と併用されている。さらに、この時期には「家」（イへ）、「大内」に土地名が加わった「荒田大内」が見られる。その他にも「高郡」（高草郡

の略か)、「越」、「石井」、「田子」、「清水」など土地名・人名に関わる多様な文字が記されることが特徴として挙げられよう。また、「津」がこの時期から書かれている点も重要である。文字サイズは2 cm 角程度のものが主体となるが、「荒田大内」や「高郡」などは小サイズで筆跡も細い。

8世紀末～9世紀前半には、「門」関係墨書土器は「門上」と「門東(+○)」、そして新たに加わった「門宅(ヤケ)」という組成になる。「門」に方位・位置関係を付す土器から「西」が欠落すること、「門東」に番号を付すもの(「一」や「家二」)が見られること、他に「東大家」もあることから、基点から見た東側に供膳具の識別が必要な施設が存在したことを示唆している。前段階に続き、「荒田(大内_ヲ)」を記すもの、人名と考えられるもの(「今主」)が認められるほか、「□見庄」のように荘園との関連を窺わせるものがあり注意される。また、「馬」や「馬津」が存在し、いずれも物資の運搬(移送)を想起させる文字である。文字サイズは2 cm 角以上の中サイズのものが主体となるほか、2文字が合成したように近接しすぎたり、ハネの位置が間違っていたり、筆画の一部が省略されるなど、文字の体裁が変容しているものが目立つ。

8世紀末～9世紀前半をピークとし、9世紀後半以降の資料は一気に減少する傾向にある。そうした中でも「門」関係では「門宅」「門」などが引き続き見られる。そして、前段階まで存在した「津」は見られないが、水運に関連する別の文字として9世紀後半には「深縁」⁽³⁾、「船」が存在することは大きな特徴である。

墨書土器から見た遺跡の性格 墨書土器全体の中で通時的に主体となる文字は「門」であるが、「門」の示す意味は何であろうか。これまでに「門」を記した墨書土器は全国で150点以上出土しており⁽⁴⁾、そのうち主要なものを検討した仲山英樹氏によれば、

- A. 墨書土器における「門」は施設の意味を転じて居宅等の建物群、さらには集団である「家」や「宅」を指すものとして「家」「宅」「殿」の文字と同義である。「宅」は史料上の用例では屋や倉を含む一区画の施設であり出挙などに関わる農業経営の拠点を目指すものだが、墨書土器においては「宅」と「家」は同義として用いられた。
- B. 「門」を記す墨書土器は、①郡衙以下の官衙関連施設、②(村落内寺院や大規模集落を含む)有力農民層の居宅、の性格をもつ遺跡での出土例が目立つ。

と指摘されている⁽⁵⁾〔仲山1997〕。また、古代における方位墨書土器について検討した出越茂和氏は、

- C. 一般的に「家」は建物を指す文字であり、「殿」などと共に方位を冠されることが多い。
- D. 「宅」は方位を冠する事例が極めて少なく、区分を要しない施設・建物に使用された。

としている〔出越2006〕。

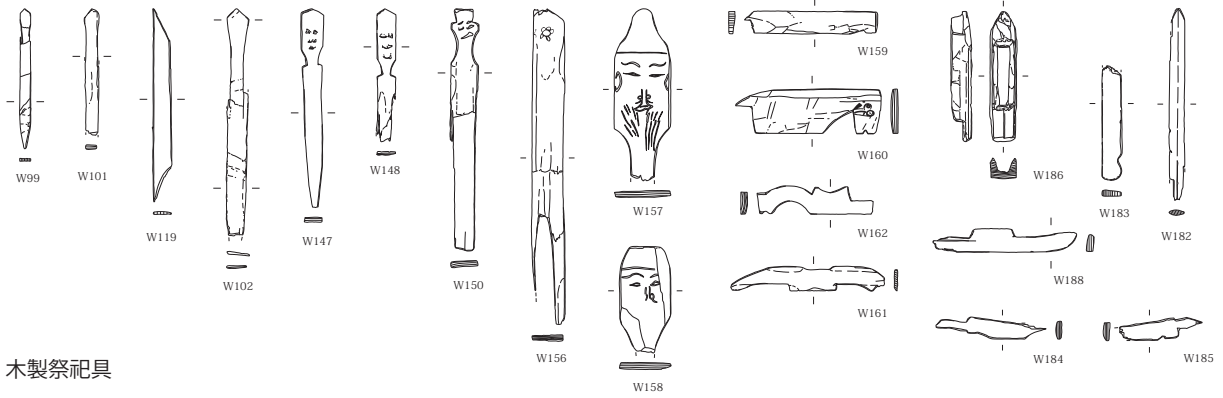
当遺跡の場合は仲山氏が指摘するB①にあたり、他の共伴遺物から見ても矛盾はない。ただ「門」の示す意味についてだが、「門+○」墨書土器が出現する8世紀後半以降「門」に「宅」や「家」を加えるものが継続的に認められるので、当遺跡の場合は「門」と「宅」「家」が同義語として扱われていたとは考え難い。用例的には出越氏の指摘C・Dに合致し、「門」に方位そして「家」が組み合わさること、「宅」は「門」にのみ組み合わさることもそれを示唆する。よって、当遺跡の墨書土器における「門」は、調査地を含む良田地域に置かれた官衙関連施設全体を指す文字と考える。なお、「門上」の「上」は基点から見た際の奥側(上手)を表す可能性と、その文字自体が官衙等を表している可能性〔仲山1997〕の二通りを想定しておきたい。

墨書土器からすれば、初期の8世紀前半は「門」一字で土器の帰属施設を表記し、施設の拡充等に

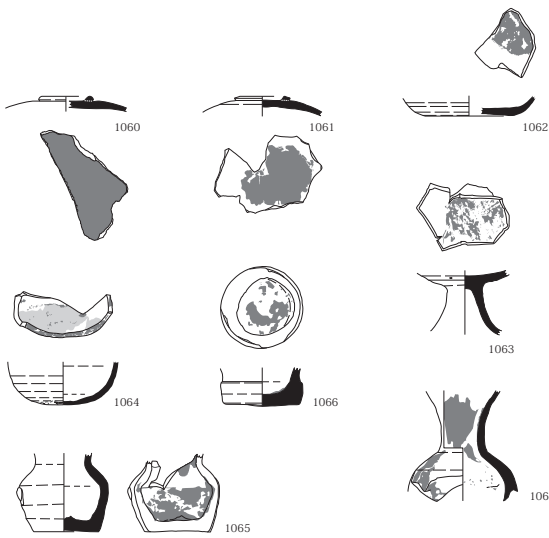


第 308 図 主要遺物構成図 (1)

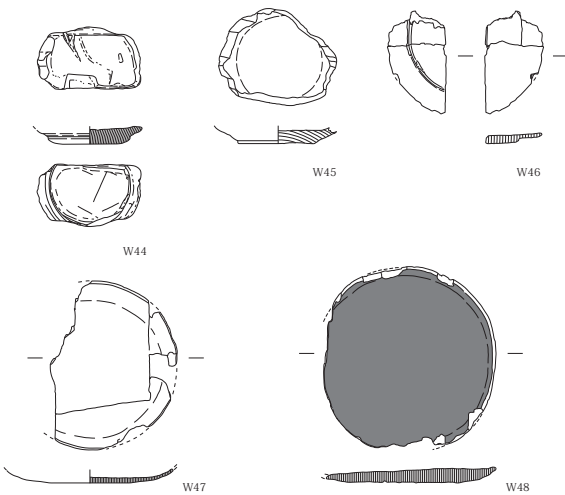
※木簡・銅製帶金具 S=1/4、墨書土器・硯 S=1/8



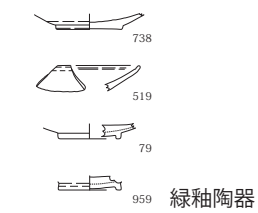
木製祭祀具



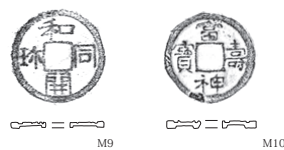
漆容器・パレット



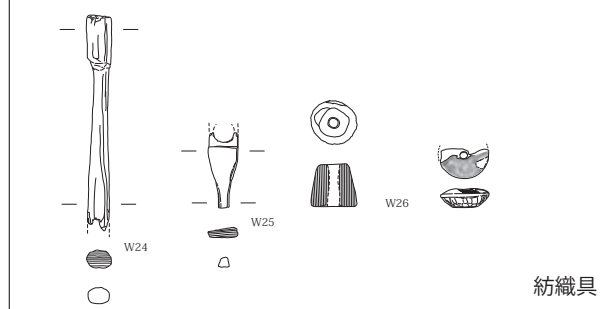
木製挽物皿



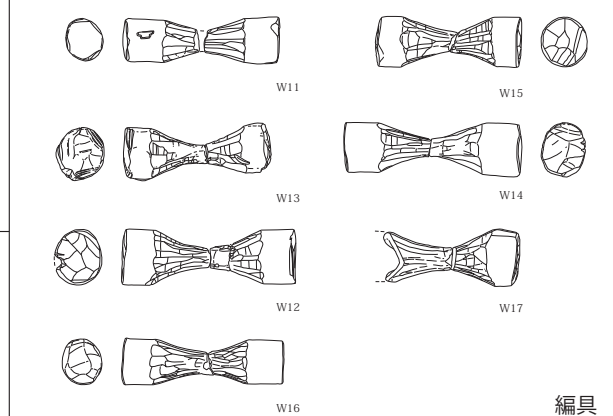
緑釉陶器



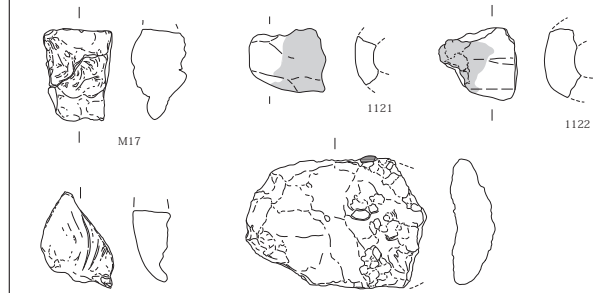
銅銭



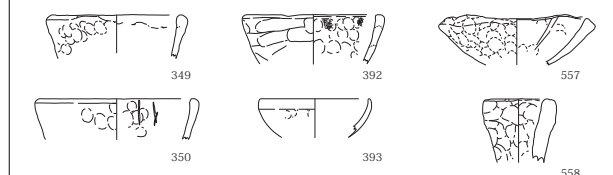
紡織具



編具



鉄関連遺物



焼塩土器

※銅銭 S=1/4、その他は S=1/8

第 309 図 主要遺物構成図 (2)

起因してか8世紀後半以降に土器の使用（管理）場所を方位や「家」「宅」を組み合わせて明示するようになったが、次第に東側（または上手）の呼称のみで識別可能な状態に施設が集約、再編された可能性がある。ただ、「門宅」「門東」は文字の特徴や器種・法量に共通性が認められるので、供飲供食儀礼に用いられた土器とも考えられる。9世紀後半以降は土器に墨書する行為自体が衰退する。

特筆すべきは、8世紀後半以降に見られる「津」「馬」「馬津」「船」である。港を表す「津」、そして「船」に加えて「馬」が含まれるのは、湖山池に面した当遺跡の施設が船で輸送する（された）物資を馬によって運送するための拠点だった可能性を示唆している⁽⁶⁾〔平川 2014〕。

硯 文書事務に係る文房具として硯、そして水差しと考えられる小型の平瓶が出土している。硯のうち円面硯は1点のみで、他はすべて転用硯である。転用硯の土器型式から見て7世紀末以降継続的に文書事務が行われていることは疑いない。出土点数は硯全体で49点と少なく、1点あたりの使用頻度（期間）を考慮する必要もあるが、文字記載を行う業務の頻度は低く見積もらざるを得ない。

銅製腰帶具 腰帶具の型式学的検討を行った田中広明氏の研究によれば、素材・垂孔型式別に出土数量のピークが異なっており、銅製の大孔タイプ（巡方 M5）は8世紀第Ⅱ四半期、細長孔タイプ（巡方 M6、丸軀 M7）は9世紀第Ⅰ四半期を主体とすること、Ⅱ類に分類される鈍尾は基本的に細長孔タイプの巡方、丸軀と共存することが指摘されている〔田中 2003〕。その傾向からすれば、概ね8世紀前半から9世紀前半には当遺跡地内に腰帯を装着する人間が存在したと考えられる。

木製祭祀具 出土した木製祭祀具は、斎串が50点（凶化、掲載できたもの）、人形12点、馬形24点（可能性があるものを含む）、舟形・武器形・鳥形等8点である。形代を出土遺構・層位から時期別に見た場合、8世紀以前は人形5点、馬形5点、舟形1点、武器形2点となり、9世紀以降は馬形の割合が相対的に増加する傾向が窺える。

手工業生産関連遺物ほか 漆容器・パレット（漆工）、紡織具、編み具、鉄関連遺物（鍛錬鍛冶滓、鞆羽口）が出土しており、当遺跡では各種の手工業生産活動が行われていたようである。漆工に係るものとして、作業用に小分けされた貯蔵具やパレット（黒漆、透漆）が見られ、漆刷毛は出土していないが刷毛を使用した痕跡を示すもの（1063）があるため一連の工程が復元でき、その時期は7世紀末から8世紀前半と考えられる。紡織具はわずかで杵や織機を欠き、別地点で使用していたものが調査地内で廃棄された可能性があるだろう。木錘は薦編みに使用されたと考えられる。鉄関連遺物に製錬滓及び炉内滓が見られるが、鍛冶原料とともに搬入されたものであろう。

また、高級食器の挽物皿は8世紀以降、緑釉陶器は9世紀を通して見られ、少量だが奢侈品を保持している。製塩土器はすべて焼塩土器で、焼塩時の二次的な被熱痕跡を残すものも多い⁽⁷⁾。

各種手工業生産関連遺物は付近に工房の存在を窺わせるものの、出土量から推測される生産量は小規模なものである。ただ、生産から消費まで集約的かつ自給的な体制が整えられていたとすれば、それを管理する上位者の存在を示唆している。手工業生産関連遺物以外に少量ながら農耕土木具が出土し、3区西端から2区側にかけて水田が営まれていたことを勘案すれば、農業経営に携わっていた可能性もあるだろう。

（3）総括—古代における良田平田遺跡の性格と機能—

当遺跡には大宝令施行以前から国宰等が国内を移動する際に立ち寄って様々な便益を供される拠点的な施設が存在した可能性が高い。ただ、水路によって区画された範囲に整地して建物群を構築する

見られ、両遺跡は一体的に捉えるべき性格を有している。

10世紀以降は耕作地が拡大し、建物と区画水路による施設造営計画も弛緩し始め転換期を迎えるが、それは律令制の崩壊と同調した動きと理解されよう。当地が平安時代末期に荒田保として成立したとされることを勘案すれば、それ以前に周辺田地が国衙領として掌握されていた可能性がある。

以上、良田平田遺跡の古代遺構群の性格と機能について整理、検討を加えた。当該時期、地域には高草郡の前身として令前に高草評が立評され、8世紀後半に東大寺荘園である高庭庄が点定される。本来であればそれらとの関係も含めて評価すべきであるが、課題として残った。

当遺跡の調査成果に加え、今後さらに資料が蓄積され、地域の歴史を明らかにするための研究が進展することに期待したい。

註

- (1) 17世紀末に完成したとされる『因幡民談記』の「郡郷之部」には、高草郡に「荒田保」が存在したことが記されている。
- (2) 平川南氏は同木簡の性格について、国名から書き出されていること、年齢的に少子にあたる若年層の人物が記されていることに注目し、9世紀後半という時期的背景からすれば、新羅との関係が悪化したことに伴う日本海沿岸防備のための労働徴発に係るものである可能性を指摘している〔平川 2014〕。
- (3) 平川南氏の御教示による。
- (4) 明治大学古代学研究所全国墨書・刻書土器データベース（2010）による。
- (5) 仲山氏は下記文献において宇都宮市飛山城で出土した「門上」墨書土器について、「上」を動詞として捉えれば“進上”の意、名詞と捉えれば「門上」＝官衙へ宛てた目的地と推測している〔仲山 1997〕。当遺跡の場合、「門上」の筆跡や文字の体裁が不統一で土器の進上やその宛先（官衙）等を示すものではないと考える。
- (6) 平川南氏の御教示による。なお、水陸交通の要所における馬による輸送集団（「馬道」集団）のあり方については、〔平川 2012〕に詳しい。
- (7) 神野恵氏は都城出土の製塩土器を検討する中で製塩土器が工房関連遺構や遺物とともに出土することが多い点に注目し、工房群に近接して焼塩を行う焼塩工房が存在した可能性を指摘している〔神野 2012〕。
- (8) 調査地北側に広がる谷は湖山池と、古代山陰道推定ルートへ抜ける里道が通る西側の谷を視野におさめることができ、土師器、須恵器の散布も認められる。

<参考文献>

- 今岡一三・平石 充・松尾充晶編 2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』鳥根県教育委員会
- 神野 恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐって—』
- 神野 恵 2012「都城の製塩土器」『第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官衙・集落 研究報告資料』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 木本雅康 2014「因幡国気多郡の古代官道について」森本倫弘編『青谷上寺地遺跡13』鳥取県埋蔵文化財センター
- 下條信行 1998「Ⅱ 石器の盛衰」研究代表者 下條信行『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 田中正利編 2012『高住平田遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
- 中尾智行編 2013『高住平田遺跡Ⅱ』鳥取県教育委員会
- 田中広明 2003『地方の豪族と古代の官人』KASHIWA 学術ライブラリー 01、柏書房
- 出越茂和 2006「古代における方位墨書土器—北陸を中心に—」吉岡康暢先生古希記念論集刊行会編『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 仲山英樹 1997「出土文字資料にみる「門」と「家」」『研究紀要 第5号』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 平川 南 2012「古代社会と馬—東国国府と栗原郷、「馬道」集団—」鈴木靖民編『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
- 平川 南 2014「出土文字から日本海沿岸地域を読む」鳥根県古代文化センター『よみがえる古代からのメッセージ～木簡が語る古代社会の実像～』鳥根県古代文化センターシンポジウム資料
- 山本 崇・高尾浩司・藤井裕之 2014「鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編『奈良文化財研究所紀要 2014』
- 山本 崇 2014「因幡・伯耆の木簡」鳥根県古代文化センター『よみがえる古代からのメッセージ～木簡が語る古代社会の実像～』鳥根県古代文化センターシンポジウム資料

報告書抄録

ふりがな	よしだひらたいせき							
書名	良田平田遺跡							
副書名	一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XIV							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高尾浩司、後藤信義							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7552							
発行年月日	2014(平成26)年12月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よしだひらたいせき 良田平田遺跡	とっとりけん とっとりし 鳥取県鳥取市 よしだあざいなば 良田字稲場、 あざくちみやのたに 字口宮ノ谷、 あざひらた 字平田	31201	1-419	35°29'36"	134°9'11"	20110421 ～ 20111128 20120423 ～ 20121031	4,790m ² 1,500m ²	国道9号(鳥取西 道路)道路改築工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物、特記事項				
良田平田遺跡	集落 官生	弥生時代	溝	弥生土器、石器(石斧、石庖丁等)、木製品(木庖丁)				
		古墳時代	掘立柱建物跡 土坑(井戸) 自然流路	土師器、須恵器、石器(管玉、勾玉、素材剥片)				
		古代	掘立柱建物跡 溝 土坑 水田遺構	土師器、須恵器、土製品、木製品(容器、祭祀具、建築材等)、石器(砥石)、銅製品(銭貨、帯金具)、鉄関連遺物(製錬滓、鍛冶滓、鞆羽口)等 文字関連資料(木簡16点、墨書土器169点、円面硯、転用硯)				
		中世～近世	水田遺構	陶磁器、木簡3点				
要約	<p>良田平田遺跡は、湖山池南岸の小開析谷に位置する。遺跡が立地する小開析谷の開発は縄文時代晩期に遡る可能性が高く、弥生時代中期には生産活動が遺跡周辺に及んでいたことが出土遺物や自然科学分析の結果から推測される。続く古墳時代には掘立柱建物、井戸が構築されており、集落が営まれる。管玉、勾玉の製品以外にも素材剥片が出土しており、北側丘陵に展開する高住古墳群、良田古墳群との関連も窺われる。古代においては3区・4区が位置する枝谷に溝で区画された掘立柱建物群が構築され、溝から出土した木簡や墨書土器、硯といった文字関係資料、銅製帯金具、斎串・形代などの木製祭祀具からすれば遺跡地内に官衙関連施設が存在したと考えられる。出土した木簡には7世紀末に遡る可能性が高い文書木簡(前白木簡)、国郡郷名及び人物の姓名が記された9世紀代の記録木簡が見られるほか、墨書土器の中に良田の地の旧称「荒田」を記すものが含まれるなど、当地域の歴史を明らかにするうえで重要な知見を得ることができた。中世以降は棚田状の水田が営まれ、現在に至るまで耕作地として利用されている。</p>							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XV

鳥取県鳥取市

良 田 平 田 遺 跡
第1分冊【本文編】

発 行 2014年12月19日
編 集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570 鳥取県鳥取市東町一丁目271番地
電話 (0857) 26-7525
印 刷 勝美印刷株式会社

